大正十二年二月一日發行（每月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

第三十八年 第三號 第四百九十號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タッタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗ふて剝げず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり

猪狩史山著（好評五版）

トルストイを談じガンヂーを説く前に先づ老子に聴け!!

創作 老子の面

四六判總布表紙
四百五十頁函入

定價金貳圓八拾錢
書留送料金十七錢

虚無哲學といひ、無爲之爲といひ、柔弱主義といひ、不爭といひ、抱樸といひ、谷神不死といふ。老子の教ふる所のものは抑も何か。蓋し東洋の天地の生み出したる最も深奥幽玄なる哲學である。

著者老子を愛讀信奉すること多年、今『老子の面』を創作す、所謂抱樸の雅致愛すべく、老子の面目躍動して聲あり、老子の父母妻子、老子をめぐる人々との葛藤、陳、晉、宋、鄭の國々に於ける放浪生活は雲の如く水の如き大哲人と其時代を描寫して興起涯りなき虚無哲學の一大ローマンスである。

文學博士 三宅雪嶺序
法學士 高田雄種著

（訂正三版）

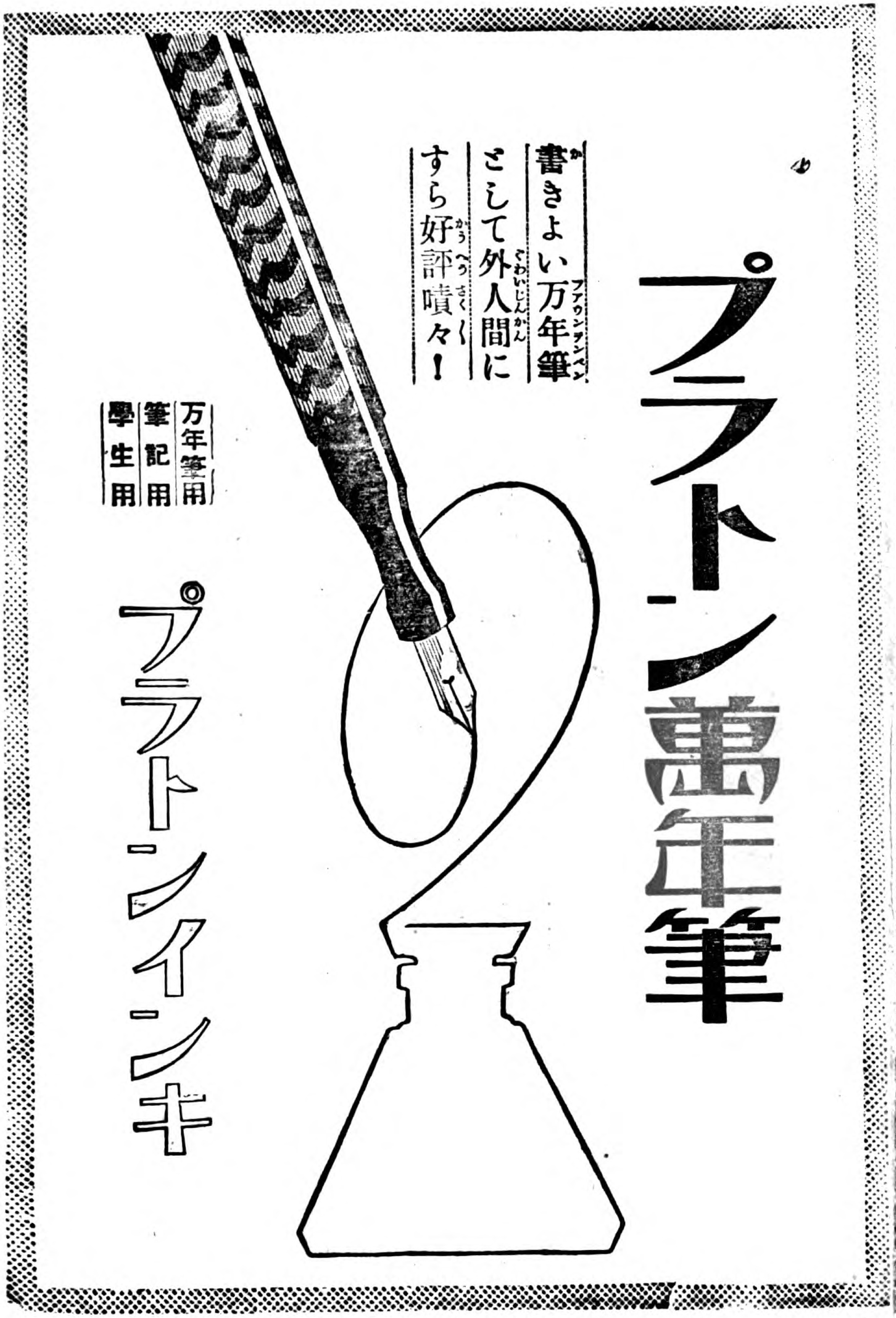
聖雄ガンヂー

定價金貳圓七拾錢
書留送料金十五錢

發兌 東京日本橋數寄屋町 振替東京一三七五番 大阪屋號 電話本局 三七三七番 四二八九番



▼說苑



プラトン萬年筆
書きよい万年筆として外人間にすら好評嘖々！
万年筆用
筆記用
學生用
プラトンインキ



巣鳥　　小川芋錢筆

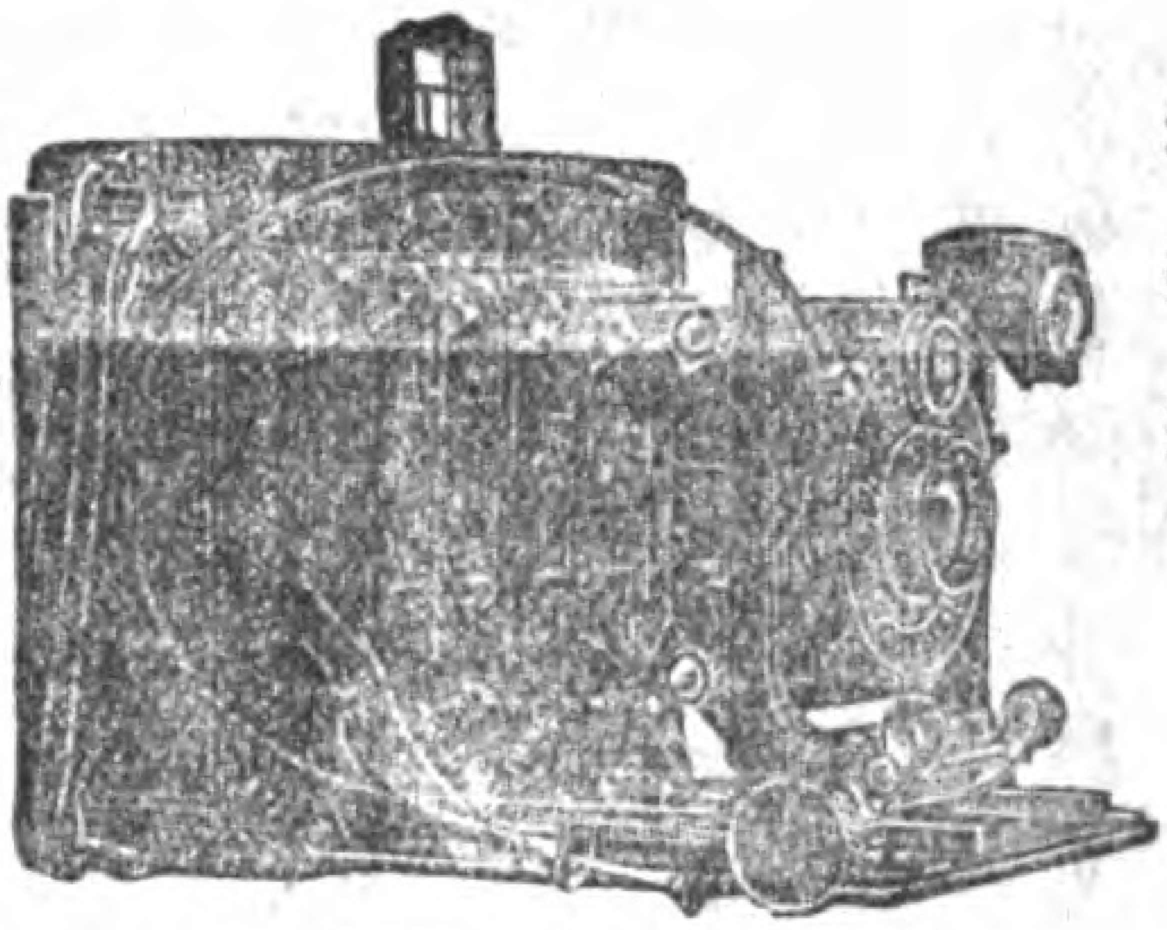
最新型御披露
と
破天荒大特價提供

◇面目を一新す!!

改良せられたる要點

○新型覗きファインダーを別に添加せること
○上部の透視式ファインダーを堀込みて平滑にしたること
○レールを新式堅牢なるものと改めたること

最新型



(乾板フヰルム兼用)

途上スケッチにも焦點を覗き乍らの撮影にも些の遺憾なく頗る實用的價値に富んだ高級寫眞器です

値段は從前通り(目録進呈)

リリー・カメラ

前掲の通り最新型發賣の爲め從來大好評を博せしリリーの特に優良なるものを左の通り奉仕的大特價値段を以致します

手札判

兩面取枠三個付上等革鞄入

	定價	大特價
○ボルタス鏡玉F7.8ピクトシヤター附	九十三圓	六十五圓
○アイデア、アナスチグマット 玉F7.5同	百十三圓	八十圓
○ペロ四類鏡玉F6.3オートシヤター附	百三十圓	九十七圓
○同オプチモシヤター附	百五十八圓	百十圓
○クツク鏡玉F6.8コムパーシヤター附	百六十圓	百十五圓

◇好機逸す可らず

東京日本橋 本町二丁目

小西六本店

支店・大阪長堀橋筋壹丁目

全國到る處の寫眞材料店に在り

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば
斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!
實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は紙煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の事業に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が総立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞贊下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして歸りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奨勵の言葉を述べて下さいました。

榮川堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に榮川堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見少しも紙煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精分を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に淸雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロット味（百日分）	金貳圓	一組
カロット具（永久使用 銀鍍金入）	金五拾錢	
同 象牙サック入	金壹圓五拾錢	

送料（内地十八錢 台、朝、樺四十五錢）
爲替送料（内地卅五錢 台、朝、樺五十五錢）

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地
榮川堂
電話丸の内一九一七 振替東京五二九〇壹

御注文は振替爲替を便とすれども御都合によりては郵便にて御申越次第引換小包にて送品可仕候


サンエス
万年ペン

中央公論

大正十二年

三月一日發行

三月號

第卅八年第三號

第四百十九號

解放運動と政治運動

或る經濟學者は曰ふ、人間が喰う爲に執る所の方法に二つある。一は自ら勞働し又は其の勞働の結果を他と交換することに由て食べ物を得るので、他は他人の勞働の結果を刼取するのである。前者は經濟的手段で後者は即ち政治的手段だと。此說は西洋の一派の社會主義者に唱へられて以來可なり廣く受け容れられ、我國でも前提たる論據を吟味することなしに安價に之を振り廻す輩は頗る多い樣に思ふ。

尤も當節の政治家は概して此の定義を拒む資格のないことは明だ。殊に我國政界の有象無象に至ては誰かよく所謂掠奪に由らずして一家の計を樹つるを誇り得るものがあらう。故に今日のあたり見る所の墮落せる政治現象の批判としては、前記の說明は强ち誇張謬妄の言として斥けることは出來ない。

併し政治の本質は決してそんなものではない。理想的の形狀に於ける政治は我々の生活に於て到底缺くことの出來ぬものだ。當今政界の爲す無きに諦めて之を破壞し去らんと欲するは妨げないが、社會改造の事業に於て積極的の建設を念とするものは、モ少し政治の本質に意を注ぐの必要があると信ずる。

政治のエッセンスは統制である。他律である。斯かる外的統制は如何にして吾人の社會的生活の進展に重大の關係ありといふか。

之を客觀的に見れば、社會生活に於ける個人的精力の節約の爲に外的統制は必要である。過去の經驗に依て蓄積せる人類の智識と沒交涉に吾人の生活を營むことの事實不可能なるは言ふまでもなく、之に由て我々はまた何れ丈無用の勞を省いて將來の發展に專念し得るか分らない。更に之を主觀的に見ん乎、吾人は常に向上の熱情に燃えて居る。向上とは理想的に云へば自己を「爾あるべきヨリよき自己」に合致せしむることだが、現實の自己を標準としていへば「自己に非る他我」に自己を屈伏せしむることに外ならない。されば人に向上の熱情ある限り、我々は一面に於て先天的に外的統制に屈從せんとするの素質を內有するものと云ていゝ。少くとも自ら胸中に描ける「ヨリよき自己」を客觀化することに由て吾人は日常の修養を遂げつゝあるは多くの人々の實驗する所であらう。

以上は風習道徳法律の由て來る所、而して之等のものから更に政治の分化する道程は猶別に詳細なる說明を要するのであるが、今は述べない。要するに本質的に觀て政治の人生に不可缺所以だけは之れ丈で明白であらう。

此點に於て吾人は一時我國に流行した政治否認論には無條件で贊成するを得ざるものである。政治否認論が暗示する「現代政界に對する多數人の不滿」には大に聽くべきものあるを認めつゝ、其極遂に政治其ものまでを無用有害と誤認し、所謂角を矯めんとして牛を殺すに至らんを恐れるからである。最近に至り所謂解放運動の局に當れる諸士が再び政治運動に注目するの傾向を見るは、或意味に於て喜ばしい現象と謂はねばならぬ。

只此際注意すべきは、政治否認論を無條件に贊成し得ざりしと同じく、政治運動に對しても亦無條件に安價の肯定を愼むべきことである。政治運動に還つたのだからとて、現在の政客と同一の地盤の上に同樣の方式を以て輸贏を爭ふは寧ろ解放運動の墮落である。積極的文化運動たるの本筋を踏み過らざらんとせば、政治運動の取扱に於ても常に理想的條件の指令に遵ふ心掛がなくてはならぬ。

然らばその理想的條件とは何ぞや。細い事を書き立てれば際限もないが、主として着眼すべきは政治の本質的原型たる外的統制の文化的意義であらう。人類社會の本當の進歩は、結局に於て各個人の自律的創意に出づる向上に俟つ。於是所謂「自由」が尊重せられねばならぬことになるのだ。が、外的統制が濫用されて不當の壓迫となる如く、「自由」の濫用は亦放縱横恣となつて自他双方の禍を爲すことが珍しくない。玆に「自由」が適當に許され又「統制」が適當に許さるべしとするの理由がある。一見相容れざる如くにして「自由」と「統制」とは其理想的意義に於て渾然として同一目標に合流する。而してこの合流を可能的に導引するものとして政治的活動に對する理想的條件が大切な問題になるのである。

現代の政界に於て此種理想的條件の最要なるものは權力の合理的組織といふことであらう。今日まで發達した立憲制度は所謂國權の發動を合理的ならしむるに於て未だ甚だ遺憾が多い。だからとて之を全然無視し得可べきやは大に問題だが、少くとも大に改善するの餘地あることは疑のない所だらう。最近の現象として傳へらるゝ解放運動家の政治的覺醒は果して如何なる方向を取つて居るのであらうか。吾人は刮目して其の將來の成行を見んと欲するものである。

中央公論



第卅八年第三號
三月號
第四百十九號

現代政治に於ける民族と階級との關係

大山郁夫

一

『戰爭を終熄せしめる戰爭!』—— "The war that ends war!"

エッチ・ジー・ウェルスだつたかの著書の題名から拔け出して來たらしいこの合ひ言葉は、聯合側諸國民間に於て、過ぎ去つた世界大戰を特徵づける記號として、至極重寶がられたやうに見えたものであつた。それは、平和を愛好すると稱する善良なる人々に依つて、絶えず叫びつゞけられたものであつた。それは『永久平和』への熱烈なる憧憬を表白する標語として、常に愛用せられたものであつた。それは、それ故に多大の同情を以て聽かれた言葉であつた。

しかしながら、同時にまたそれは、如何にも早急に、如何にも輕卒に、若しくは今少し露骨にいへば、餘りに無省察に、餘りに無分別に放たれた言葉ではなかつたらうか？　無論、いづれの時代のいづれの國にも、對外戰爭の進行してゐる眞最中には、敵愾心の波の畝つて行くまにまに、平時には聞かれないやうな沒理性的な言葉が、相當に思慮深いと考へられてゐる人々の間にすら叫ばれるやうなことがあるのは、決して珍らしがるべきほどのことではない。世界大戰の繼續中に於て、聯合側の方面に於ても、同盟側の方面に於てと同樣に、諸大學の學者教授たちまでが、街頭の群衆と調子を合はせて、今日から見れば唯一片の愛國心若しくは擬愛國心が產んだ大なる偏見の標本としか思へないやうな樣樣の意見を、平氣で、しかも異常の熱心さで、高唱してゐたやうなことがあつたのは、いまだに我々の記憶に殘つてゐることである。けれども、かれも一時、これも一時で、さういふことの殆んどすべては、今となつてみれば、最早過ぎ去つた夢となつてゐるか、若しくはなりかけてゐるのである。そして、それらのうちで我々がまだ全然忘れ切らないでゐるものでも、大抵はみな、理性だけで生活を整理して行くことが、地上に住む人間の誰れもにとつて、如何に不可能なことであるかを證明してゐる實例位なものとして、我々の記憶の上に幾分大切に保存されて居るやうな種類のものばかりにすぎないのである。

さういふものを、私は玆で一々洗ひ立てしようとしてゐるのではない。殊更ら、さういふものが最早唯過去の事件として眺められるだけのものとなつてゐる場合には、我々がそれに取合つてゐるには、現代に置かれた我々の生活が餘りに忙しすぎる。が、さういふもののうちにも、單に過去の事件としての意味があるばかりでなく、同時に我々が將來に於て早晩遭遇しなければならない諸問題の解決に密接なる關係のあるものが屢ゝあることは、我々が承認しなければならないことである。さういふ種類のものに對しては、我々は單に我々の生活が忙しすぎるといふ理由だけで、冷淡に構

へ込んで居る譯には行かない。我々は必然的に、活きた問題に對する注意を、さういふ種類のものに向ける衝動を感じないで居られないのである。

さういふ種類のものゝ一つとして、私は本文の劈頭に於て、世界大戰の繼續中に於て、少くとも聯合側諸國民間での流行語となつてゐた『戰爭を終熄せしめる戰爭！』といふ文句を回想して、それに私の注意を集中しておいた。そして私は、それは餘りに無省察に、餘りに無分別に放たれた言葉ではなかつたらうか？といふ疑問を附け加へておいた。無論、それは人々が戰爭熱に浮かされてゐた際に思はず發した言葉であつた。從つてそれは、戰爭の終結と共に忘れられたやうに、人々の口の端から消えて行つたものでもあつた。けれどもそれは、それ自身のうちに或る蠱惑的な響きを持つてゐるものであるから、いつ何時油斷してゐる人々を襲うて、再び彼等に取り憑くかも知れないといふ危險性のある言葉である。それ故に我々は、それが一時人々に忘れられてゐるからといつて、それをそのまゝに打棄てておけるものではない。否、我々は寧ろ、それが人々に忘れられてゐる間にこそ、それを取り出して來て冷靜にその本體を凝視し、そして若し我々がその存續が許さるべきものではないといふ理由を發見したならば、今のうちにそれを根こそぎ苅りつくしておくべきものである。そこで私は先づ、それに對して右の疑問を向けた。と、斯ういつたやうな次第である。

二

無論、私の右の疑問は、かのキリスト教の聖典中の有名な文句である『劍を以て興るものは劍を以て滅ぶ』といつたやうな種類の警句から出て來てゐるものではない。かういふ種類の警句は、概ね皆、それを發するものゝその場その場での即興的な、主觀的見解の産物にすぎないのを常とするものであるから、我々はそれを客觀的眞理の表白を目的とする

科學的説明と一樣に取扱ふことが出來るものではないものである。で、縱しまた假りに、さういふ警句が或る科學的説明と合致してゐる場合があるにせよ、少くとも客觀的眞理の探求者としての立場からは、我々は率直に前者を棄てゝ後者に就くのを當然とするのである。我々はどこまでも、警句には警句としての意義以外の意義を認めようとはしないのである。

が、右に示したやうな宗教的立場から全然離れて、もつと科學的な立場から――若しくはもつと常識的な立場からでも――考へて見ても、我々が『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうなもの丶成立の可能性を疑ひ得る根據は、確實に存在して居るのである。もつとも、人類生活上の所謂『原始時代』に於ける異種族間の戰爭の場合に屢ゝ起つたと想定され得る通りに、勝ちほこつた種族が敗北した種族の總員を鏖殺ろしにしたやうなことが、現代の諸國家間の戰爭に於ても再現され得る可能性があるものとすれば、或ひは戰爭に依つて戰爭を終熄せしめ得るやうな機會が全然起り得ない譯ではないとは言へるであらう。がしかし、實際上さういふことが起り得た時代は、少くとも『文明人』――かういふ表現が肯定され得るか否かの問題を離れての、通俗的慣用的意味での――が、その歴史の行程の上に於て遙かの後方に見殘して來たところのものであつて、さういふことが今更ら我々の眼前に再現されようなどゝは、夢想だも出來ないことである。その上、原始的諸種族間の戰爭に於て右に述べたやうなことが起つたにしたところで、さういふ場合でも、その戰爭が終熄せしめ得たものは當該諸種族間の戰爭だけであつて、それは一般に戰爭といふものを終熄せしめたのではなかつたのである。否、さういふ場合に於て一の種族をして他の種族を征服し鏖殺するに至らしめた原因は、更らにその種族の上に働きつゞけて、それをして更らに他の種族と戰爭するやうに導いて行つたのは、いふまでもないことである。かくて、少くとも過去から現在に至るまでの人類の歴史の教へるところでは、戰爭が戰爭を終熄せしめたやうなことが、唯

の一度だつてあつた例めしがないばかりではなく、寧ろ一の戰爭は例外なく他の戰爭の種子を播く役目を務めて來たものである。無論、一の戰爭と他の戰爭との中間には、場合々々に應じて、長き若しくは短き平和の期間が見られたのは普通であつたが、しかしそれは諸交戰國の息繼ぎのための休憩時間と言つたやうなものにすぎなかつたのであつた。かういふ譯で、昔から今まで、戰爭と平和とは、常に相表裏の關係をなして來たものである。

人類が人類として經て來た無限に永き過去の期間に於て、或る時は多くのホルド(原始的放浪群)の間に於て行はれた衝突若しくは融合の裡から部族とか民族とかゞ發生し、或る時は部族間若しくは民族間の征服被征服の關係の裡から國家が形成せられ、或る時は諸國家間の征服被征服の關係の裡から幾多の國家の隆替興亡とか新陳代謝とかの夢幻劇が繰り返された。かういふ變化極まりなき場面を次々と追うて來て、遂に最後に我々の眼前に起つた世界大戰までを見て來た我々の印象の上に最も深く彫りつけられて殘つて居るものは、人類の歷史は戰爭の連續であるといふ、屢々繰返された套語の間違つてはゐないといふ確證だけである。我々は、現代に於ても世界の交通路の片脇に取殘されたまゝ存續して居る各處に於ける野蠻人の諸種族の生活狀態に關する記錄を讀むごとに、いかに群と群との間に於ける間斷なき戰爭が、彼等の生活の大部分を占領してゐるかの事實に驚かされる。そして我々は、先づこの事實から類推しても、一般の人類生活の原始時代に於て、ホルドとホルドとの間に、若しくは部族と部族との間に戰はれて居た戰爭が、いかに普遍的な現象でもあれば、また如何に間斷なき年中行事でもあつたかを考へさせられない譯には行かない。けれども同時に我々は、さういふことが、單に原始社會、若しくは我々の時代の野蠻人の諸種族間に限つての出來事だと決め込んでしまつてはならないのである。換言すれば、我々は、我々の時代の所謂文明諸國民が、さういふ不斷の戰爭狀態を既に疾くに通り越してしまつて、全然別の境地に入り込むやうになつて來てゐるものと早斷してはならないのである。いかにも、我々

の時代の所謂文明諸國民の生活の外部的諸條件が、原始的若しくは野蠻的生活のそれらとは非常に懸け離れたものになつて來てゐることは、明かなる事實である。が、それにも拘らず、少くとも戰爭中心の群團的生活の横行といふ一點に關しては、我々の所謂『文明』生活は、實質上、その主要點に於て、原始的若しくは野蠻的生活の面影をそのまゝに保存して來てゐるのである。無論、我々所謂文明諸國民の仲間に於ては、戰爭の單位としての群團の範圍も擴大してゐれば、戰爭の方法も『進步』してゐるし、また戰爭に用ひられる器具も精巧になり、『科學的』にもなつて來てゐる。しかし、原始的若しくは野蠻的生活に對してのさういふ變化といへども、その根本的事實である戰爭そのものを少しも左右してはゐないのである。若し我々の時代に於て戰爭と戰爭との中間に横はる平和の期間が非常に長くなつたといふことが言ひ得られるならば、同時にそれに對して、戰爭の場面の範圍が極度に擴大してもゐれば、またその慘害の程度が無限に增進してもゐることなども、直ちに擧げ得られるのである。

から考へて來ると、少くとも戰爭と平和との關係を中心として見れば、現代の文明人らの生活の原始的若しくは野蠻的生活と異つて居る點は、寧ろ單に量的のものにすぎないのであつて、それは決して質的のものでないと言ふことが出來るのである。ところが、過去に於ては、前にもいつた通りに、戰爭は戰爭を終熄せしめたものであつたよりは、寧ろ一つの戰爭は他の戰爭を誘發したものだつたのである。だとすると、無限に永き過去の期間を通じて一貫して行はれてゐたこの原則が、現代に到つて急にその適用性を失つて、却て戰爭が戰爭を終熄せしめるといふ新らしき原則に依つて取つて代はられたのだといふやうなことは、我々には眞面目に考へ得られないことである。少くともそれは、論理的には言ひ得られないことである。

否、それは單に論理的に言ひ得られないことである許りではなく、世界大戰終結の時から今日に到るまでの僅々數年

間に起つて來た幾多の國際的事件から歸納してもまた、實證的にも言ひ得られないとである。我々は既に、ヴェルサイユに於ける平和條約締結の瞬間から、再戰の脅威がヨーロッパ全土の上に臨み、そこから延いて全世界の上に及んでゐたのを感じた。のみならず、時としては戰爭が既に脅威といふ程度を通り越して、現實の問題となつた場合をさへ見たのである。最近トルコとギリシアとを中心として起つた近東に於ける葛藤の如きは、即ちその一例であつて、それに次いで暫らくの間世界の視聽を集めたロザンヌ會議は、實に主としてその跡仕末をつけるために開かれたものである。ところが、この會議がまだその不安な進行をつゞけてゐた眞最中に於て、例の數年間の懸案である賠償問題を處理するためのパリーに於ける四國首相會議が決裂して、フランスは直ちにその年來の主張に基づいて、ルール地方に對して軍事的占領を斷行した。といつたやうな飛報が、世界の各部に傳へられた。フランスのこの行動は、如何にヴェルサイユ條約中の條項に立脚して居るものとはいへ、それを現在の國際的狀況の下に實行しては、不測の禍機を促進する可能性を有してゐるものであることは、誰れにも容易に認められることである。少くとも、若しそれがヨーロッパの救濟の事業のためにアメリカを釣り出すといつたやうな効果を擧げ得ない限りは、その直接に今後のヨーロッパの國際關係の上に惡化的影響を及ぼす程度は、測り知られないものがあるのは明白である。

これらの事情を考へたゞけでも、過ぎ去つた世界大戰は、その當時多くの善良なる人々が期待して居た通りに、『戰爭を終熄せしめる戰爭』としてその局を結んだものでは決してなく、寧ろ他の戰爭の種子を蒔くための戰爭としてその行程を始めたものとしてさへも見られなくはないのである。まだその上に、若し我々が、諸交戰國の或るものには終生癒やし難い怨恨感情を與へ、またそれらの如何なるものにも何等の滿足を與へ得なかつたヴェルサイユ條約の其後の成り行きに纏綿する一切の事情を綜合して考察する時には、さういふことの當然であることが、一層明白に我々に感じられる

のである。我々は『永久平和』に對する我々の熱情のために、現在のあるがまゝの事實に故意に眼を塞いではならない。そして、苟しくも我々がさうしない限りは、我々は少くなくとも、右の諸事實だけは容認しなければならないのである。そして、それから來る我々の結論は、戰爭を終熄せしめ得るものは戰爭でなくて、若し戰爭といふものが何時かは人類生活から全然取り除かれ得るものならば、それは戰爭以外の或るものに依つてでなければならない、といふ一事に歸着するのである。

三

世界大戰の進行中に於て、『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふ標語が盛に流行してゐた事實の裏面には、無論多くの現實政治家等の策略も手傳つて居たことが認められる。彼等は戰爭遂行に附帶する重き負擔の下に喘ぎながらも、それぞれに自國の參戰理由を合理的に且つ道德的に粉飾する仕事を怠らなかつた。で、誰れもが知つてゐる通りに、一方に於て『オートクラシーに對するデモクラシーの戰ひ』といふ叫び聲が擧げられたかと思ふと、他方に於ては『商業主義に對する人道主義の戰ひ』といふ標語が掲げられた、といつたやうなこともありがちであつた。時としては、交戰團體の兩側の諸國民が一樣にその前に拜跪する『唯一絕對の神』に向つて、彼等が互に相手の不正不義を訴へ、双方から相手の敗北を祈願して、その『唯一絕對の神』をまごつかせたやうな滑稽さへあつた。しかしながら、交戰團體の兩側に於て行はれたかういふ種類の實際上の宣傳的政策の外に、我々は多くの理想家たちが、人類の社會生活上の根本的改革の希望を、世界大戰の結果の上に繫いでゐた事實のあつたことをも拒むことが出來ないのである。如何にも、大戰後の世界には、樣々の變化が現はれて來たことは事實である。しかも、さういふ變化の中には、世界歷史上の大變化だといひ得ら

れる程度のものも、少なからず現はれて來たこともまた事實である。そこには、領土の移動もあれば、國境の更新もあつた。そこには、新國家の建設もあれば、舊國家の崩壞もあつた。そこには、强大國家の地位から弱小國家のそれに急轉直下して行つた國々もあれば、またそれとは反對に、却てより良き地位に進んで行つた國々もあつた。そこにはまた、驕つて居たものが辱しめられたり、榮えて居たものが衰へたり、囚はれて居たものが放たれたり、踏みつけられて居たものが起き上つたりしたといつたやうな各種多樣の悲劇喜劇が、入り交はり立ち交はつて展開されて來た。中にもロマノフ家や、ハップスブルグ家や、ホーヘンツォルレルン家やの沒落とか、勞農ロシアの崛起とか、新ドイツ共和國の形成とかの如きものは、特別に顯著に色彩づけられた現象として算へられるべきものであつた。かういふものは、何れとして世界歴史上の大變化といふことが出來ないものでないことは事實である。それは、如何なる人々も、否定することが出來ない事實である。しかしながら、かういふ變化のすべてが、多くの理想家たちが描いて居たやうな、戰爭の行はれるのを常態とする世界から戰爭のない永久平和の世界への轉換の一時期を劃するやうな根本的變化を代表するやうな種類の變化であつたか否かといふことは、それは全然別問題だとしなければならないのである。

我々が此問題に對して否定的に答へるのを待つまでもなく、大戰後に生じた國際政治上の多くの新事件は、さういふ理想家たちの懷いて居た希望が、畢竟一片の空想に過ぎないものであつたことを、殆ど無慈悲といひ得られる程度の明確さを以て我々に指し示した。で、それらの理想家たちのうちの不眞面目なる人々は、無論、彼等自身が當時に於てさういふ希望を懷いて居たといふ事實を全然好都合にも忘却しても居ようが、しかし彼等の中の眞面目なる人々は、今となつては、現實暴露の悲哀を痛切に味はつて居るのである。が、それは彼等が甘受しなければならない當然の運命なのであつて、それに關しては、大戰後の事件の進行が責任がある譯ではなく、寧ろ彼等自身の當初からの謬算が責任がある

ものだ、といはなければならないのである。

といふのは、斯ういふ譯である。——元來、人類生活が戰爭の行はれるのを常態とする世界から戰爭のない永久平和の世界へ移轉して行くといふやうな種類の變化は、社會進化の過程に於ける一新段階の出現を意味するものである。即ちそれは、社會進化の過程の上に、一派の社會學者らの所謂『動的變化』——dynamic change——の起ることを前提とするものである。從つてそれは、一方に於ては、社會進化の過程の上に於ける從來の惰性的もしくは習慣的進行の突然停止することを意味すると同時に、他方に於ては、その同じ社會進化の過程の上に全然新たなる進路の開始されることを意味するものである。手短かにいへば、それは社會生活の根本原理の徹底的革新を意味するものである。しかも、かういふ社會生活の根本的原理の徹底的革新は、社會組織の根本原理の徹底的改造に依つて先立たれるべきことをその必須なる前提條件とするものだといふこともまた、誰れもが當然のことゝして認めなければならない筈のことである。

ところが、社會組織の根本原理の徹底的改造が、如何なる種類かの戰爭に依つて將來され得るものであるか否かの問題は、戰爭そのものの社會進化の上に於ける作用の考察に依つて、始めて解決せられるべき問題である。即ち若し、戰爭は今後の社會進化の過程に於て右に述べた意味に於ける『動的變化』を持ち來たす可能性を有するものだといふ見極はめがつく時には、例の『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうな標語にも、始めて實質的內容が伴ふものだと見做すことが出來るものであるが、しかしながら、萬一さういふ見極はめがつかない場合は、さういふ標語は、單に空景氣のいい、しかしながら何等の實質的內容をも持たない、一片の警句に過ぎないものだとしなければならないものである。

けれども、戰爭が果して今後の社會進化の過程の上に、右に述べた意味に於ける動的變化を持ち來たす可能性を有す

るか否かの問題を解決する前には、我々は先づそれが過去の社會進化の過程の上に於てどういふ作用を成し遂げて來たかの事實を究めなければならぬ。社會進化概念の立場から見れば、現在は過去の繼續であり、將來は現在の延長である。この見地からして我々は、戰爭が將來に於てなすであらう作用は、それが過去から現在までに示して來た作用の繼續であり延長でなければあらぬ、といふことが出來るのである。であるから私は、戰爭が過去から現在までに示して來た作用に關する考察を、どれほど手短かにでも、一應次に試みてみるのが、私に取つての當然の順序だと考へるのである。

四

我々は、曾ては戰爭といふものが社會進化の過程の上に於て或る種の動的變化を激成する媒介物となつて働いたことのあるといふことを想定することが出來る。即ち、曾て人類の集團生活が、原始的血族團體の生活樣式から、如何なる形式かに於ての國家的支配の下に於ける生活樣式へ移つて行つた――若しくは移されて行つた――過程の上に於て、戰爭はさういふ轉回期を促進する要素としての働きをしたものだと考へ得られる理由があるのである。

社會進化を說明する多くの學者達の述べるところに從へば、現在の社會科學的知識を以て溯源的に究め得られる限りの人類生活上の原始時代に於て、そこにまだ如何なる原型的形式に於てさへもの『國家』といふものゝ體制が發生してゐなかつたところでは、各個の人類集團生活の單位は、血族意識の根據の上に結合されてゐた共產的生活團體だつたのである。かういふ血族的共產團體は、その內部の總員の協力に依つて、食物の搜索獲得といふやうな經濟的行動や、對敵共同防禦及び共同攻擊といふやうな軍事的行動のために集團生活をして居たものであつた。そしてかういふ團體は、

その生活狀態から、しばしばホルド——horde——の指稱の下に呼び做されてゐるものである。さういふホルドの多くの合同の裡から、次第に部族——tribe——が成立するやうになつたものと考へられるものである。

この點に附隨する樣々の現象に關する考察は、私の本文の主題の闡明のために直接の關係のないことであるから、茲ではそれを一切省略することゝするが、本文の立場から差し當つて必要なことは、さういふ原始的集團生活の單位——若しくは簡單にいへば原始的社會群——の成立の根本原理と、如何なる形式かに於ての國家組織の成立の根本原理との間に於て表はれてゐるところの、一の極めて重要なる根本的相異點に觸れることとである。もつとも、この點に關して私が取つてゐる見解については、私は私がこの數個月來雜誌『我等』で發表した連載論文である『現代の社會的諸傾向と政治學との交涉』の或る部分に於て、それを比較的詳細に示しておいたから、茲では重ねてそれを說明する勞を省くことにする。がしかし、私は純粹に本文の必要を充すだけの範圍內に於て、最も簡短な形式で、その核心となつてゐる要點を茲に摘記しようと思ふが、それはつまり、かういふことに歸着するのである。——すなはち我々は、原始的血族團體の內部に於ては、そこに自然的不平等の現はれの外には、制度化された不平等——殊に制度化された階級的不平等——の現はれを認めることが出來ないのであるが、之に反して、如何なる形式かに於ける國家組織の內部に於ては、そこに自然的不平等の現はれと共に、制度化された不平等——殊に階級的不平等——の現はれが併存して居るのを認めるのである。そしてまた我々は、原始的國家に於ける制度化された階級的不平等の最初の形式は、實に奴隷と自由民との差別的地位に於て、これを見ることが出來るのである。

如何なる形式に於ける國家組織にせよ、苟くも國家組織と名づけ得られるものの最も顯著なる特徴は、其內部に必ず支配階級と被支配階級との二つの集團があるといふ事實そのものである。そしてまた、支配階級が被支配階級に比して

常に遙かに少數の人員から成り立つてゐるといふことも、例外なく、國家組織の標識の一つとして見ることが出來るものである。それは、その政治的意味からいへば、統治階級と被統治階級との差別であり、またその經濟的意味からいへば、搾取階級と被搾取階級との差別である。しかも、この經濟的意味は、常にその政治的意味の根柢をなすものである。それからまた、歴史的見地からいへば、支配階級と被支配階級との差別は、原始國家に於ては自由民と奴隷との關係に於て、中世紀的封建國家に於ては武士の集團と農奴との關係に於て、近代的資本國家に於ては資本階級と無產勞働階級との關係に於て、といふ風に、それぞれに最も極端な對照をなして現はれて來たものである。

さて、人類の集團生活が、當初の制度化された階級的不平等の存在してゐなかつた血族的共產團體の生活樣式から、さういふ階級的不平等の必然的に伴つてゐる國家的支配の下に於ける生活樣式へ移つて行つたといふやうなことは、一體何ういふ動力に依つて促進されたものであらうか？　それは無論、國家契約說のやうなものでは說明が出來ないことである。各人の自由意思の選擇に基く契約に依つて、或る集團內の大部分の人々が自ら進んで奴隷の苦役に就くといつたやうなことは、眞面目に取合つてゐるには餘りに馬鹿々々しい說明である。またそれは、それに關して屢ゝ引合ひに出される分勞說に依つても、少くとも最終的の說明を與へることが出來ないものである。卽ち、或る集團の生活に於て如何に分勞が必要であるにせよ、そこに何等の强制がない場合に、その集團內の多數人が自ら挺身して、異常な苦艱の伴ふ屈辱的な、そして酬ゐられることの少い仕事に從事しなければならない地位に就くといふやうなことがあるといふのもまた、餘りに超理的若しくは沒理的な說明である。かういふことを考へてゐると、結局我々は、さういふことが起るのは、諸集團間の——若しくは諸社會群間の——戰爭及びそれに伴ふ征服被征服の關係から來たものだといふ斷案に到達しなければならないのである。我々は既に、人類生活上の純粹の原始的段階に於ては、群と群との間の衝突は、征

服群が被征服群を鏖殺するといふ樣な結果を伴つたとのあつたものだつたといふとを認めた。けれども其次の段階に於ては最早、征服群が被征服群を奴隷として活かして置いて、其上に手きびしき手足の勞働を强制する方が、結局自群のためにも利益だと考へる樣になつたといふとは、容易に想像し得られるとである。無論さういふ場合が生ずるためには、そこに骨の折れる繼續的勞働を必要とすると同時に、さういふ勞働からの收益も相當にあるといつたやうな種類の產業——たとへば或る程度に發達した牧畜業とか農業とかのやうな——が既に發見せられてゐて、そしてそれに對する人手の入用なことが征服群によつて痛切に感じられてゐたといふことを以て、その必須なる前提條件とすることは、もとよりのことである。かういふ關係から、我々は同時にまた、經濟生活の進化の狀況が、一般の社會進化の過程の上に於ける動的變化と密接なる關係に立つてゐるものであるとをも、認めないわけにはゆかないものである。

最後に、私が上に用ひて來た『社會進化の過程の上に於ける動的變化』といふ言葉の意味について、玆で一言を附け足しておきたい。同じ根本原理の上に繼續的に存在する社會組織の內部に於て起る各種の變化は、それらが如何に人類生活樣式の『改善』の上に重要なる意義を有してゐるにせよ、我々はさういふ變化を動的——dynamic——のものと呼び做さうとはしないのである。我々は寧ろ、さういふ變化を、一定の社會組織の靜的狀態の完成の方向に向つて働く漸進的變化と見るのが適當だと考へる。尤も、かういふ漸進的變化は、唔々裡に、續いて起らうとして居る『動的變化』の準備的過程だと見られる場合があり得ることは事實である。が、それにしても、その漸進的變化、そのものは『動的變化』だといふことは出來ない。我々が『社會進化の過程の上に於ける動的變化』と呼ぶものは、專ら、社會組織の根本原理そのもの丶上に起る變動に關聯してゐるものである。少くとも私自身は、本文に於てそれをさういふ意味に用ひてゐるのである。そして私は、私の主題に對しては餘りに短かすぎる上來の說明に於ても、戰爭といふものが過去の社會進化の

過程の上に於ける動的變化を激成することに於て示して來た作用の輪廓だけを、私自身の立場から描いたつもりである。そこで私の次の仕事は、曾て社會進化の過程の上に於ける動的變化を激成するために重要なる役目を務めて來た戰爭そのものが、今後の社會進化の上に於ける動的變化を惹起する上にも同樣の働きをする力を持つてゐようとは考へ得られない、といふ一點を闡明することである。少くとも私は、戰爭それ自身單獨にはさういふ力を持つてゐないといふことを證明しようとして居るのである。そして、この問題に關する私の考察の中心點を豫め要約すれば、かういふことになるのである。——すなはち、戰爭及びそれに伴つて來た征服被征服の關係は、今日に於て見られるやうな統治被統治の關係を中心とする國家的支配の下に於ける社會生活樣式を誘導する動機となつて來たものであるが、かういふ意味に於ける戰爭そのものが、それ自身が過去に於て誘導して來た今日の國家的支配下の社會生活樣式を將來に於て絕滅する作用を示すやうにならうなどゝいふことは、論理的に期待が出來るものではない。少くとも、別に他の何等かの社會的原因が新たに加へられるのでなければ、戰爭がそれ自身で從來追うて來た進路から急激に一轉して、將來に於てさういふ作用を新たに示すやうにならうなどとは、論理的に期待が出來るものではないのである。萬一、別に他の何等かの社會的原因が新たに加はつたので、戰爭がさういふ作用を新たに示すやうなことになるものとすれば、その場合には我々は、その新たに加はつた社會的原因が何であるかを明かにしなければならないのである。私はそれらの諸要點を、現在の國際政治の上にも尙ほ强い力で働いてゐる民族關係及び階級關係に關聯して考察しようとしてゐるのである。

五

國家組織は、如何なる形式を以て現はれる場合でも、常に統治被統治の關係の上に立つて居るといふ點は、その發生

以來、終始一貫して渝らないものである。それが、國家組織といふものの最も顯著なる特徵であることは、私は前に既に述べて置いた。が、國家組織は、これをその形式といふ點から眺める時には、無論一定の徑路を追うてゞはあるが、樣々の變化の諸段階を經て來たものである。我々は、原始社會に於て部族組織の形成されて居たところに、そこに既に國家組織が少くともその原型的形式に於て萠芽を發して居たのを見ることが出來るのである。さういふ時代からこのかた、歴史の上に現はれて來た國家の形式としては、古代の『都市國家』とか、『世界國家』とか、中世紀に於ける『封建國家』とか、近世紀に於ける『民族國家』とかを算へることが出來る。そして近代の『民族國家』が或る程度に於て資本階級の支配の下に來て居る場合には、さういふものは普通『資本國家』の名を以て呼ばれて居る。無論、『資本國家』といふやうな名稱は、國家の形式に關聯してゐるものではなくて、國家內の權力の中心點の所在に關聯して居るものであるが、我々が玆で新たにそれに注意を向けることは、必ずしも無用のことではあるまい。それに若し、現在の勞農ロシアの如きものを『形成の過程に在る共産主義國家』と呼ぶことが出來るならば、これもまた、同樣の意味に於て玆で序に注意して置く必要があるものである。

で、國家組織の形式の上に或る變化が起るのは、常に戰爭及びそれに伴ふ征服被征服の事實を契機とするものであり、また一定の形式の下に於ける國家組織が存續する限りは、その維持及び存續もまた、常に戰爭及び征服の成果としての權力の行使に依るものである。これは、原始的征服國家以來近代の民族國家に到るまで、始終一貫して渝らなつかた徑路である。けれども、殊に『民族國家』の成立及び存續は近代の或る期間に起つて現代まで繼續して居るものであるから、それは我々にとつては特殊の興味のあるものである。ところが、かういふ近代的民族國家の成立にしても、それが如何に例外なく戰爭及び征服に負うて居るものであるかは、近代史を讀むものゝ嫌やでも應でも見逃がすことの出來

ない事實である。これは、近代のイギリスに關しても、フランスに關しても、イタリーに關しても、ドイツに關しても、その他あらゆる民族國家といふ民族國家に關して、確實にいひ得られることである。同樣に我々は、近代日本の誕生をも、戰爭及び征服と引き離して考へることは出來ないのである。

一般に國家といふものゝ成立が戰爭及び征服に負うて居る通りに、——それからまた近代的民族國家の成立が矢張り戰爭と征服とに負うて居る通りに、——その民族國家の構成要素をなす民族そのものもまた、その成立に關しては、必然的に戰爭と征服とに負うて居るものである。この點はかのウオルタアー・バジオットが、既に一八六四年に發表した著書の『物理と政治』(Bagehot, Walter. *Physics and Politics*) に於て、適切に指摘したことである。彼は、原始時代の人間の群れが沒頭して居た仕事は民族形成——nation-making——の仕事であつて、そしてそれは實に彼等の間に於ける間斷なき戰爭に依つて成就せられたものだといふことを論證した。彼のかうした說明は、大體に於て當を得たものであつた。しかも彼が、自然法學の影響の尙ほ著しく殘つて居た當時のイギリスの政治思想の上に、かういふ新方面を開拓したのは、確に大なる卓見だつたと稱することが出來るものである。たゞ彼は民族概念を種族概念と混同して、一民族は同一種族のものから成り立つて居るやうに說明したのが、その最も大なる誤謬だつたのである。民族の發生は戰爭に負うことは無論であるが、それは異種族間の戰爭に負うものだといはなければ不充分な說明であることを免れないのである。この點に關しては、私はグンプローヴィッツが『種族鬪爭』(Gumplowicz, Ludwig, *Der Rassenkampf*, 1883, 2. Aufl. 1909) に於て、人種多元論 (Polygenismus) の論據から與へて居る說明が、最も啓發的であるやうに考へる。(グンプロヴィッツの『人種多元論』には反對論が隨分多いけれども、私は今日までのところでは、それが最も有理な學說だと信じてゐる。)兎に角、今日に於ては、民族が種族と一致するものでないといふことだけは、政治學上の常識とな

つて居るものだと言つて、間違ひのないことである。

民族が種族と同一でないといふことは疑ひもないことであるが、しからば民族は何であるかの問題は、その解決が甚だ困難なる問題の一つである。現代の政治問題の上に非常に重大なる意義を持つて居るものは何であるかといへば、我々は何よりも殊に民族及び階級を擧げることを躊躇しないのであるが、不思議にも、――或ひはそれは當然であるかも知れないが、――この二つのものは共に、それを正確に定義づけることが、非常に難しいものなのである。しかも、民族の場合に於ては殊にさうであるやうに、私には考へられる。それ故に、それを定義づけようと試みる人々の中には、『それは何々であるか?』といふことに關して箇條を擧げる前に、先づ『それは何々でないか?』に關して箇條を擧げるといつたやうな方式を取るものが少なからずある。が、それと同時に、それは甚だ興味のある問題でもある。けれども、私は本文に於てこの問題を詳論して居る暇がないから、それは他の機會に讓ることゝして、こゝではたゞ純粹に私の論題に關係のある範圍內だけに於て、それに關する要點を飛び飛びに述べることだけに止めて置かうと思ふ。

六

民族は、種族と同じものでない通りに、國家とも同じものではない。これは、近世紀の歷史を動かした强き力の一つとして働いて來たところの所謂『民族國家思想』――nation-state idea――といふものが、本來は、一民族が他民族の國家的支配から離脫して、自ら一國家を構成しようといふ政治的欲求を表白して居るものだといふ事實に依つても直ちに判かることである。また、民族は共同宗教團體でもない。尤も、宗教若しくは宗派が諸民族の離合關係の上に、重大なる影響を及ぼすものであることは、例へば、アイルランド民族とローマ舊教との關係とか、バルカン半島上の諸民

族とローマ教會及びグリーク教會との關係とかの上に於て、その最も適切なる例證を見ることが出來る。(『アルスター地方の住民の大部分は、爾餘のアイルランドの諸地方の民族運動に向つて、反對の態度を取つてゐる。といふのは彼等が異種族に屬してゐるためでもなく、——尤も、同地方の北東部にはスコットランド人系の血が勝つてはゐるが、——また彼等が風俗習慣を異にしてゐるためでもなく、それは實に、爾餘の諸地方民が熱心なる『法王黨』であるに反して、彼等がイギリス國教會の信徒だからである。』『セルビア人及びクロアート人の場合に在つては、宗教の相異が特殊の民族形成にさへ導いた。本來、クロアート人は、セルビア人と共同種族團體に屬してゐた。現今でも、セルボ・クロアートの名稱が殘つてゐる。また、クロアート人の言語は、セルビア語から轉訛したものである。けれども、今日に於て、彼等とセルビア人との再融合を妨げてゐるものは、宗教の相異である。即ちクロアート人は大抵はローマン・カトリック教徒であるに反して、セルビア人は、グリーク・カトリック教會の自治的分派であるセルビア教會の信徒である。』—— Cunow Heinrich, *Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts-und Staatstheorie*, II. Bd., 1921, p. 22.) けれども、それと同時に、同一民族の内部に於ていくつかの異つた宗教若しくは宗派が並び行はれて居るといつたやうなことも、かなり普遍的に見られ得る現象である。

更らにまた、民族は共同言語團體だといふやうなことも、多くの人々に依つて屢々主張されて居ることではあり、且つまたそれは、最も多くの場合に適用され得ることではあるが、しかしながら、それも常にさうと限つたものではないのである。我々は一方に於ては、イギリスとアメリカとの場合や、スカンディナヴィア半嶋上の二民族の場合に於けるやうに、同一の言語を話しながら、違つた民族を構成して居るやうな實例を見る許りではなく、他方に於てはまた、地方地方に依つて或ひはドイツ語を或ひはフランス語を、或ひはイタリア語をといふ風に、少くとも三つの異つた國語を話

しながら、一民族としての生活を平和的に生活して居るスウィス民族の如き實例――尤も、グンプローヴィッツの如きは、スウィスを多民族から成る一國家（ein polynationaler Staat）と見てゐるが――にも出遭うのである。たゞ共同の言語といふものが、最も多くの場合に於て、一民族間に民族的共同意識を普及せしめるといふ様な心理的作用を、極めて敏活に行ふものだといふ事實は、我々が十分に承認しなければならないことである。

最後に、民族は共同文化團體――Kulturgemeinschaft――だといふ定義は、今日に於ては相當に廣く受け容れられて居るものである。けれども、この定義にしても、我々から見れば、決して完全なものだとはいひ得られないやうに考へられるのである。少くとも、この定義を受け容れるためには、我々はそれに關して様々の制限的説明を提出することを必要とするのである。我々が、この定義を受け容れようとする際に先づ第一に遭遇する難關は、共同文化の單位は、民族といふものよりも遙かに狹いものの上に目安を置くことも出來れば、またそれよりも遙かに廣いものの上に目安を置くことも出來るのであつて、必ずしも民族だけを共同文化の單位と見なければならないとするやうな確實な根據がないのである。我々は、或る特殊の地方色に立脚した地方文化若しくは郷土文化を認めることの上に何の支障を感じることもないのであるし、またそれと同時に、ヨーロッパ全土を共境域とするヨーロッパ文化とか、北アメリカ合衆國をその根據とするアメリカ文化とかを認めるといつたやうなことも、全然理由がないものとすることは出來ないのである。それからまた、文化を東洋文化とか西洋文化とかに分けて見るやうなことの上にも、全然事實的根據の缺けて居る譯ではなく、更らにまた、或る見方からいへば、世界文化が現今に於て段々に形成されつゝあるといふことすらも、決して言ひ得られないことではないのである。その上、一定の地理的境域を離れて、その立脚地を或る集團生活の上に置くところの階級文化――ブルジョア文化とか、プロレタリアー文化とかいふやうな――を認めることも、少くとも現代の諸工業

國の社會的環境の下に於ては、相當に有理に主張し得られることである。

かういふところから見れば、民族は無論唯一の共同文化團體だといふことが出來ないのは確かである。しかし、このことを言つてしまつた後にも尙ほ、民族はさういふ共同文化團體の一種ではないかといふ問題が、その後に殘るのである。そして、この問題に對する私の答へは、半ばは『然り』で、半ばは『否』である。しかし、それを決定する前に、我々は先づ民族が共同文化團體の一つだとでもいひ得られるのは、一體どういふところから來るのであるかといふ問題を解決しなければならないのである。それは、約めていへば、『民族文化とは一體何であるか？』の問題に歸着するのである。

民族文化は、一民族間に於ける或る種の共同の思想感情に立脚する所謂民族意識の裡にその基礎を持つものであるといふことは、それが大摑みな言ひ方であるだけに、反對の餘地もまた從つて少ない。けれども、同時にそれは、それ自身單獨では、さういふ共同の思想感情がどういふ原因に依つて釀成せられたものであるかを明かにして居るものではないのである。で、その原因を說明しようと企てる人々の或るものは、さういふ共同の思想感情は、一民族が常に同一の地理的境域の上に生活の根據を占めて居るところから、同一の地理的環境の影響を受けて居る間に、自然とさういふ共同の思想感情を發生せしめるものだといひ、また他の或るものは、さういふ共同の思想感情は、一つの歷史的產物であつて、もすこし詳しくいへば、それは一民族の共同の歷史、共同の傳統、共同の光榮、若しくは共同の屈辱といつたやうなものから醞釀せられたものだといふやうに說明する。前者は、一種の地理的決定說——geographic determinism——ともいふべきものであつて、後者は一種の歷史的決定說——historic determinism——ともいふべきものである。

七

右の兩說中の前者に從へば、一民族間の思想感情の流れはもとより、その全生活の方向までが、すべて皆住居の隣接から來る所謂隣保感情若しくは鄕土的精神に依つて決定せられる許りではなく、その周圍の地理的諸狀況、卽ち例へば氣候の寒暖とか、雰圍氣の乾濕とか、山川の起伏とか、地味の肥瘠とか、港灣の深淺とかいつたやうな、一ト口に地理的環境といふ名稱の下に包括され得る諸條件に依つて決定せられるものだといふのである。かういふ說を主張する人々は、一體に人間といふものは、個人としても集團としても、その全生活の上にその地理的環境の影響を印しないものはないといふのである。彼等に從へば、例へば原始時代に於て山野の近くに住んで居たものは自然と狩獵生活を學び、河海の邊りに住んで居たものは期せずして漁業生活を學んだりして居た間に、さういふ生活樣式が無意識の間に彼等の精神とか氣風とかの上にまで影響を及ぼしたものであつて、そして人間生活の無限に複雜化して來た現代に於ても、地理的環境の影響は矢張り、各處に於て人間の生活を形づくる上に强き影響を及ぼして居るものである。かういふ譯であるから、所謂民族性とか、民族精神とか、民族意識とかいつたやうなものは固より、かういふものから流れて出た民族文化もまた窮極に於ては、みな地理的環境の產物だとしなければならない。——と、大體かういふのである。

いかにも、人間の個人生活や集團生活が、或る程度に於て、その地理的環境の影響を受けるものだといふことは、誰れもが異論を挾むことが出來ない事實である。がしかし、さういふ地理的環境の影響は、それを決して過大に見積つてはならないものである。人類文化の進化に關聯して地理的決定說を主張する人々の中に於ても、殊にバックルの如きは、その名著『イギリス文明史』(Buckle, H. T., *History of Civilization in England*, 3 vols.)に於て、地理的環境が人間の文化の上に及ぼす影響を極端に誇張して述べたものである。が、彼れが擧げた多くの例證には、いくらでも例外が擧げ得られるのを常とするのである。それから、民族の場合に於ては、それ自身が地理的環境の影響で生活を左右せられ

ることもあると同時に、反對にそれ自身で地理的環境の上に能働的に作用することもあるのである。此點に關して無限に多き實例の中からたゞ一つを擧げれば、例へばトライチュケがその『政治學』第一巻(Treitschke, Heinrich von, *Politik*, I. Bd.)の中の或る個所でいつて居るやうに、バルカン半島の諸地方が、古代のローマ帝國の管理の下に在つた間は、灌漑の行き屆いた美しい沃野であつたが、それが後にトルコ人の行政の下に移つてからは、見る影もない瘦土となつてしまつたやうなことがそれだと言へるのである。一トロに私の要點をいつてしまへば、それは、地理的環境が人間の個人生活若しくは集團生活の上に及ぼす影響は、寧ろ間接的のものであつて、決して根本的のものでもなければ、最終的のものでもない。といふことである。しからば、さういふ根本的のものであり、最終的のものであるものは何であるかといへば、それは社會的經濟的原因から來る影響であるといはなければならない。このことは、多くの場合に於て、地理的決定說の主張者等の說明の裡に暗示せられて居ることが多いのである。たゞ彼等は、自己防禦のために、そこに直接に觸れることを恐れる許りである。

後者即ち歷史的決定說が說くやうに、一民族内の共同の思想感情は――從つて民族文化は――究極に於て歷史的產物だといつてしまへば、これも極めて大まかな議論であるだけに、それだけでは別に反對論を提出する餘地も少い譯であるが、しかしその代りにそれは、その所謂『歷史的產物』といふものが、詳はしくいへば何ういふことを意味して居るものであるかを、少しも說明して居るものでないのである。そこで、この傾向を代表する人々の多くは、一民族内の共同の思想感情は、その民族の共同の歷史及び共同の傳統といふ總稱の下に包括し得られる諸條件の抱合の裡から流れて出たものだといふのを常とするのである。けれども、若し私が前に述べたやうに、民族といふものが少くともその起源に於て直接間接に異種族間の戰爭の成果だとすれば、一民族の内には征服群と被征服群とが常に併存して居る筈でなけれ

ばならぬ。詳しくいへば、そこには、優勝種族もしくはその後裔が支配階級としての地位を占めて存續してゐる筈であるし、また、劣敗種族もしくはその後裔が被支配階級としての地位を占めて存續して居る筈でなければならぬ。しかるに、かういふ征服群と被征服群との二つの集團に關して、共同の歴史とか、共同の傳統とかを說くのは、甚だ訝かしいことではないか？――かういふ疑問は、必然的に彼等の所論に對して起つて來なければならない筈のものである。

この點へまでやつて來ると、我々は始めて、民族形成の過程に於て或る種の心理的諸要素が甚だ強く働いてゐるものであるといふことを注意するのが極めて必要であるといふ一點に氣附かざるを得ないのである。一民族内に於ける征服群もしくはその後裔である支配階級は、いふまでもなく、その當初の征服の成果である權力に依つて、被征服群もしくは共後裔である被支配階級を、その隷從的服屬の地位に繋ぐことに努力する。けれども、征服群が被征服群に對して示すものは、常に權力だけに限つたものだといふことは出來ない。まづ第一に、征服群は被征服群を他の優强群の侵略に對して保護するとを怠らない。オッペンハイマーは、その著『國家』(Oppenheimer, Franz, *Der Staat*, 1912) の或る個處に於て、かうした關係を例證するために、熊が羊の群れを狼の襲擊に對して防衛したといふ昔噺を引いて居る。それは、かうした見方の下におくことも出來るのである。しかし、かういふことの外に、征服群はまた、何時もその權力を赤裸々に誇示するよりも、時としては、それを『恩情主義』とか、『和衷協同』とか言つたやうなもののオブラートに包むのが得策であるといふことを心得て居るのを普通とするのである。一言にしていへば、彼等は右手に鞭を持ち左手に林檎を握つて見せるとかいふ舊式の敎育者の態度を取ることを學ぶのを普通とするのである。かういふところから、彼等は事情の許す限り、多くの場合に於ては、威壓政策を採るよりも、寧ろ懷柔政策を行ふやうに導かれるのである。それは恰度、資本主義的社會組織の下に於て、搾取階級であるブルジョアジーが被搾取階級であるプロレタリアートに向つ

て、恩情主義とか協調主義とかを持ち出すのと同じ譯合ひなのである。一民族内の征服群は、もともと、その政治的意味に於ては支配階級であるが、その經濟的意味に於ては搾取階級である。けれども、彼等は彼等が搾取階級であるといふ事實を、出來得る限り隱さうとする衝動に驅られるものである。かういふ原因が他の多くの諸原因と結び附いて働くところに、或ひは征服群が被征服群の間に於ける才幹の優ぐれたものを政治上の樞要の地位に拔擢登庸するといつたやうなことが行はれたり、或ひは征服群と被征服群との間に嫁娶の道が開かれ、その實行が奬勵せられるといふやうなことが生じたり、或ひはまた、その他の樣々の社會的經濟的原因も加はつて來て、征服群と被征服群との間の雜居が益〻頻繁にもなれば、兩者間の取引交渉が益〻密接にもなるといふやうなことすら現はれたりするやうになることもあるのである。かういふことが久しく續いて行はれて居る間に、社會學者らの所謂『社會的同化』——social assimilation——の過程が進行しつゞけるものであるが、この社會的同化の進行する程度に應じて、一民族内の諸構成要素の融合作用が進行し、またそれに應じて民族的共同意識が明確になり、從つて民族文化ともいはゞいひ得られるものがその裡から形づくられて行くのである。

けれども、同時に我々は、近代的民族國家内に於ては、民族的共同意識が明確になつて行く傍らには、それを縱斷するブルジョアジー及びプロレタリアートの階級の對立關係が益々强烈になつて行く傾向のあることを見逃がすことは出來ないのである。かういふ階級的對立關係は、一民族内に於ける征服群と被征服群との對立關係とは、多くの點に於て著るしくその外觀を異にするものがあるに拘らず、その來歷に於ては前者は後者の後繼者であり、またその經濟的搾取被搾取の關係に立脚してゐるといふ點に於ては、兩者はまさに揆を一にしてゐるものである。

八

右に述べた一民族内に於ける社會的同化の作用は、その民族が他の優強民族からの侵略の脅威を受けて居る場合に於て、最も强烈なる働きを見せるものである。それ故に、一民族内の支配階級は、他の優强民族からの脅威を受けて居る場合には、無論自民族内のあらゆる社會的經濟的諸勢力を糾合するために全力を盡くすのであるが、さういふ脅威の恐れるに足るほどのものがない場合でも、なるべくそれを誇大に見せ掛けることに腐心するのである。かういふことは、一民族内に於ける征服被征服の關係の痕跡としての支配階級及び被支配階級の差別のある間は、到底避け得られないことである。かういふ譯であるところから、現代に於ける諸民族内に於ては、支配階級が民族意識に政治的意味を結び附けることに極度に努力する傾向が、甚だ顯著に現はれてゐるのである。或る意味からいへば、民族意識は政治的意味を離れても成立ち得る可能性のあるものであるが、しかしながら現代に於ては、どこへ行つても、民族意識に政治的意味が結び附けられてゐないところはないのである。現代に於ける民族意識が非常に顯著に軍國主義的色彩を帶びてゐるのは、主としてこの理由から來てゐるものである。

私は玆で今一度、民族文化の問題に立ち歸りたい。凡そ一民族内に於ける支配階級は、その民族的存立の繼續が自階級に利益があるものであることを知つてゐるところから、極力民族意識の振興を謀ることを怠らないものである。殊に彼等は、その四周に隣接してゐる他の諸民族に對しては、自民族のすべての構成要素が共同利害關係の上に立つてゐるといふ點を高調するのを常とするものである。同じ原因から彼等は、自民族内に於て見られるあらゆる社會關係を、民族的共同意識の形成のために樣々に利用することを知つて居るのである。たとへば彼等は自民族内に於ける征服群と被征服群との間に漸次に婚姻關係が行はれるやうになつて、そしてその結果として同民族内に血族の混同が次第に增進して行くやうな事實を見れば、早晚必ずこの點を巧妙に粉飾して、その民族全體が共同祖先から繁殖して來た人間の一集

團であるかのやうに取繕ふのである。かういふことは、各民族の起源が一般人に取つては邈として攷ふべからざる太古に屬するものとなつて來て居る場合に於て、最も容易に行はれ得る可能性があるのである。民族が屢〻種族と混同されがちなのは、主としてかういふ原因から來て居るものだといふのは、おそらく間違つた斷案ではなからう。

同樣に彼等は、結局は自階級の存立のために都合のよささうな眞正の、若しくは擬作の歷史的事實を、自民族の共同の歷史として四方に宣傳し、それを一般に流布せしめることに努力するのである。この點に關しては、その民族の他の隣接の諸民族に對する外交及び戰爭の歷史が、最もよくこの目的に適合する材料を無限に豐富に含む寶庫として見做されるのである。それは、民族の英雄、民族の救主、民族の共同の傳統、民族の共同の榮辱といつたやうなものゝ發祥地として、最も恰好なものと見做されて、大切に保存せられるのを普通とするのである。かくて、かゝいふ泉源から流れ出るものと見做される民族的共同思想感情なり、またその上に築き上げられるものと見做される國民文化なりは、その眞相を穿つて見れば、結局はその民族内の支配階級が直接間接に創作し宣傳したものである場合が、甚だ多いのである。

前にもいつた通りに、民族意識は、その本質上、必ずしも政治的意味を帶びるべきものとは限つてゐないのであるが、しかし現代に於ける民族意識は、どこへ行つて見ても、必ず政治的意味と結び附けられてゐて、しかも最も强烈な軍國主義的色彩を帶びてゐることは、掩ふべからざる事實である。それはしかし、上來反復して述べた理由に依つて、決して偶發的現象ではない。それは、最も手短かに言へば、寧ろ一の歷史的必然性の產物ともいふべきものである。で、若し將來に於て、民族意識が醇化される時期があるものとするならば、――換言すれば、若し將來に於て、民族意識からその政治的意味が取り去られて、民族文化が純粹に隣保的感情とか鄕土的精神とかに依つて結び附けられた一定地域上の民衆の全生活から流露するものとなるやうな時期が來るものとするならば、――それは支配被支配の關係の上に立

脚せしめられて居る人間の社會生活の根本原理の上に徹底的變革が起つた後のことでなければならないのである。

右に述べた通り、民族文化は必ずしも一定の地域上の民衆の全生活から必然的に流露して出て來たものではなく、その民族内の支配階級の創作及び宣傳の結果として形づくられた部分も決して少くないといふ事實から來る當然の結果として、一民族内の支配階級が變はつて行くたびごとに、その民族文化の重要なる特徵もまたそれに伴れて變はつて行くといつたやうなことは、歴史上屢〻その實例を見ることである。民族を一つの共同文化團體と見るとき、我々は決してこの點を無視してはならないのである。けれども今の私には、この點を詳述してゐる遑がない。たゞ私は話の序に　私の知つて居る範圍内では、私が上に一度引用したところのハインリッヒ・クノーの近著でもあれば好著でもある『マルクスの歴史・社會・及び國家學說』の中に、それに關して極めて要領を得た論證が載せられてあることを附け加へておきたい。(Cunow, Heinrich, *Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts-und Staatstheorie.* II Bd., I. Kap., 1921 參照。)要するに、民族は一つの共同文化團體だといふ時には、我々はたゞ、それを絶えず形成及び變遷の過程の上におかれてあるそれとしてのみの意味に於て理解することが出來るものである。

九

一民族が一國家をなすべきものだといふことを要求する所謂民族國家思想が、近代史の方向を決定する上に有力に働いた諸要素中の少くとも一つであることは、私は前に既にこれを述べた。しかし、この意味に於ける民族國家思想は、他民族からの國家的支配の下に繫がれてゐるところの所謂被抑壓民族が政治的解放運動を企てるところに於てのみ、極めて力強き作用を示すものである。ところが、かういふ被抑壓民族が一旦その政治的解放に成功して自ら一個獨立の民

族國家を形成し、そして自らその國家内に於ける支配的權力の中心となつた以上は、かういふ民族は忽ち從前の態度を一變して、今度は自民族の手で他民族を抑壓するためにその支配的權力を行使するやうになる傾向に陷るのである。それは、少くとも二つの方向に沿うて作用する。即ち、かういふ民族は、一方に於ては自國内に包含せられてゐる他の弱小諸民族を抑壓することを圖ると同時に、他方に於ては、他の諸國家を構成する諸民族に向つて敵對性を示すのである。もつとも、この敵對性は、單に戰爭の形式を取つて現はれるばかりでなく、平時の外交關係の上に於ては同盟とか協商とかのやうな平和的形式を取つて現はれることすらもある。けれども、戰爭といふものも、同盟とか協商とかいふものも、畢竟各民族の生存表現慾から流れて出たものであるから、それらは同じもの丶異つた現はれだといふことも出來るし、またそれらは相互に表裏の關係をなしてゐるものだともいふことも出來るのである。それ故に、『外交の果てが戰爭だ』とか、『對外交渉の成功不成功は結局その當事者の戰爭能力の多少の上に繋つてゐるものだ』とかなど丶いふやうなことは、一般に廣く言ひ慣らはされてゐる套語となつて來てゐるものである。

また、一國家の支配的權力の中心をなす優強民族が自國内の弱小諸民族に臨むに際しては、必ずしも抑壓を以て終始するものではない。それは屢ば、恩情主義的政策とか、協調主義政策とかをも用ふるものである。殊にそれは、一民族内の支配階級が他の諸階級に向つてするのと同じ様に、常に必ず所謂同化政策――婚姻政策とか教育及び言語の强制的普及政策とかなどいふやうなものを通しての――を用ふるに決まつてゐるものである。それは、次のやうな原因から來てゐるものである。即ちまづ第一には、民族といひ國家といふものは、それを他の民族なり國家なりに對立せしめて見せるときに於て、最も有效にその內部に於ける民族意識とか國家意識とかを强めることが出來るものだからである。それから第二には、民族といふものが戰爭及び征服並びにそれに續く社會的同化作用を通じて次第に抱合融和せられたる

多くの異種族から混成せられるといふ過程の連續として、多くの異民族もまた、同樣の徑路に依つて、永き年月の經過する間には、一民族の形に鍛ひ上げられるといふやうなこともあり得るからである。少くとも、古來の歷史上には、さういふ實例が數限りもなく示されて來たのである。民族概念が一種の流動概念だといはれるのは、かういふところから來てゐるのである。たゞ近代に於ては、各民族の民族意識が非常に明確になるやうに發達して來たから、さういふことがこの上引續いて行はれ得る可能性が殆んど絕無といふ程度にまで減退して來てゐるといふことは、事實として認めなければならないものである。

かういふ譯で、近代史上に於て重要なる役目を務めて來た民族國家思想は、今日に至るまで、どこへ行つても、まだ完全に事實として現はれてゐるのを見ないのである。で、今日に於てその國內の民族關係が比較的單純だといはれる國家でも、その內部には少くとも二三の民族が必らず抱合せられてゐるのを見るのである。今日の大國家が、大抵は皆、それぞれに多少の程度に於て自國內の民族問題に惱まされてゐるのは、そのためである。かういふ意味に於て、世界大戰の收穫の一つとして現はれて出た『新民族國家』だと稱せられてゐるポーランドだとか、チェッコ・スロヴァキアだとか、ユーゴー・スラヴィアだとか言つたやうなものにしても、決して純粹の民族國家だとはいひ得られないのである。たゞ、今日の狀況の下に於ては、一國家內に於て或る一民族が爾餘の諸民族に比して懸け離れて優勝的勢力を有してゐる場合に於てのみ、さういふ國家が『完全』なる『民族國家』の型に比較的に近づいてゐるものだと見做されて居るのである。

私が玆で尙ほ一言附け加へておきたいことは、『民族主義』とか『國民主義』とかいふ言葉に關して一般に受け容れられて居る用語例に關してゞある。一民族が他の民族若しくは諸民族からの國家的支配から解放されようとする要求は、普通『民族主義』——principle of nationality——の名を以て示されて居る。が、これに反して、一國家內に於て優勝的地

位を占めて居る一民族が、一方に於ては、自國内の弱小諸民族に對して抑壓若しくは同化政策を行ひ、他方に於ては、他の諸民族及び諸國家に對して、様々の形式に於ける敵對性を發揮することなどに依つて、その獨立民族國家としての生存表現慾を充たすことに努力して居る場合には、さういふ努力の指導原理は、普通『國民主義』—nationalism—と呼ばれて居るのである。かういふことは、他民族の支配の下にある民族が普通・單純に『民族』—nationality—と呼ばれ、既に一國家を形成して居るとか、若しくは一國家内に於て優勝的支配的勢力の中心をなして居るとかの民族が、『國家を成して居る民族』といふ意味で『國民』—nation—と呼ばれて居ることから來てゐるのである。けれども、この點に於て我々が注意しなければならないことは、通俗的用語例に於ては、nationといふ原語が、本國に於て屢々極めて放漫に用ひられて居る通りに、その譯語である『國民』といふ言葉もまた、我國に於て極めて不注意に用ひられて居るといふ一事である。殊に我國に於ては、一國家内の統治權の客體である總員を集合的に示すところのStaatsvolkといふドイツ語の譯語として、『國民』といふ言葉が用ひられて居る場合が甚だ多いのである。我々が、『民族』とか、『國民』とかといふ言葉を使用する場合には、豫めこれらの諸點を辨別する用意を以てかゝらなければならないのである。

一〇

現代の各國家の對内及び對外政治の上に於て、最も重大なる役目を勤めて居る諸要素は、今のところ民族關係と階級關係とである。これ等の兩者は、現代世界の政治現象の上に於て、時としては相並行し、時としては相交錯して居るので、それがために政治の局面を非常に複雑なものにして居るのである。それらのうち、政治的要素としての階級關係に關しては、私はこれまでに發表した諸論文に於て、既に度々觸れて來たことであるから、本文に於ては私は、私がこれ

までに比較的に充分に取り扱ふ機會を持たなかつた民族關係を主として解說したのである。けれども、私は私の說明を進めて居る間に於て、民族關係の階級關係に交渉のある方面に就いては、成るべくその要點だけをでも擧げることに努力したつもりである。これ以上の詳論は、私は別に獨立の一論文に於て、それを試みるつもりである。しかしながら、私はこれから、本文に最後の結論を與へるために必要な範圍內に於てのみ、現代の資本國家の下に於ける階級と民族との關係の現在及び將來に就いて、今少しく論述をつゞけて行かうとしてゐるのである。

いふまでもなく、現代の各資本國家に於ける支配階級は、概括的にいへば資本階級である。ところが、現代の各資本國家內に於ける支配階級は、從來の各民族內に於ける支配階級と同樣に、民族意識若しくはその高度に發達した形式である國民主義を、依然として自階級の存續のためにも、またその利益のためにも、樣々に利用しつゞけて居るのである。民族意識が、現代の各大國家に於ては、國民主義の形式に於て、主權の概念と結びつけられることに依つて、益々多く政治的意味を附け加へられつゝある傾向のあるのは、全くそのためである。

各資本國家內に於ける資本階級は、政治的意味に於て支配階級であると同時に、經濟的意味に於ては搾取階級である。この點に關してもまた、それは過去に於ける各民族內若しくは各國家內の支配階級とその性質を同じくして居るのである。たゞそれは、この性質に於けるその働きの規模を無限に擴大し、またその表現を非常に變化せしめて居る點に於て、幾分の相異を示しただけのことである。すなはち、現代の各資本國家內に於ける資本階級は、その支配階級としての存續のために、一方に於ては自國內に於ける被支配階級の全體に向つて經濟的搾取を行ふ必要を感じる許りではなく、他方に於ては世界の各部に散布せられて居る他の諸國家及び諸民族に對してもまた、出來るだけその經濟的搾取の手を擴げることに努力して居るものである。かういふ譯であるから、一方に於ては資本主義そのものの發達が、或る意

味に於ける國際的連帶感情を暗々裡に進めることに依つて、少くとも政治的意味に於ける民族意識若しくは國民主義を減退せしめる樣な方向に働きかけて居るにも拘らず、資本階級は今も尚ほ、依然として民族意識若しくは國民主義と絶緣することが出來ない許りではなく、樣々の形式に於て益々それらを高潮せしめようとする傾向をさへ示して居るのである。現代の資本的帝國主義が國民主義の基礎の上に打ち建てられて居るものであることは、誰れもが知つて居る通りである。それは、政治的意味に於ける民族意識の極度の利用である。しかのみならず、搾取階級としての資本階級は、被搾取階級としての被支配階級とは、經濟的には全然相反した利害關係の上に立つて居るのであるが、彼等は出來るだけこの利害關係の相反性を蔽ひ隱すためにも、益々對外的敵對性に立脚する國民主義を强調する必要を感じるのである。國内に於ける社會問題の紛糾を緩和するために自國民の注意を對外問題に向けるやうなことが、現代各資本國家の現實政治家等の慣用手段であることは、これまた一般によく知れ渡つて居ることである。

かういふ譯で、政治的意味に於ける民族意識、及びそれに立脚せしめられて居る國民主義は、今尚ほ依然として、世界政治の上に戰爭の脅威を以て臨んで居るのである。疑ひもなく、民族意識はその政治的意味を離れても成り立ち得るものだといふことは事實である。少くとも、人間生活の上に、地方色とか、隣保感情とか、鄕土的精神とかいふものが、その存續の餘地を有して居る限りは、或る意味に於ける民族意識は、いつまでも人間生活から搔き消すことが出來ないものである。そして、これ等の感情的諸要素は、恐らく人間生活と共に永遠に存立をつづけるものであらうから、從つてそれ等に立脚せしめられる一種の民族意識もまた、永久に人間生活に跟いて行くものであらうと考へられる。かういふ意味に於ける民族意識は、全人類生活に向つて幸福を與へることはあつても、その上に禍亂を醸成せしめるやうな脅威を伴ふものではないのである。けれども、かういふ意味に於ける民族意識は、今日までのところでは、どこへ行

つても、まだ充分に發現せられる機會を持たないでゐる。否、今日までのところでは、どちらを振り向いても、民族意識は、各民族内もしくは各國家内の支配階級に依つて、多分の政治的意味を附け加へられてゐるのである。ところが、民族意識の上に假初めにも政治的意味がつけ加へられて居る間は、それは始終何時となく戰爭を挑發する危險性を必然的に伴つてゐるものであることは、私が前々から反復して述べて來た通りである。殊にそれが、國民主義の形式にまで發達するやうになれば、それは、世界の上に絶大の禍亂の脅威を永久に掲げて居ると同じ譯合ひになるのである。

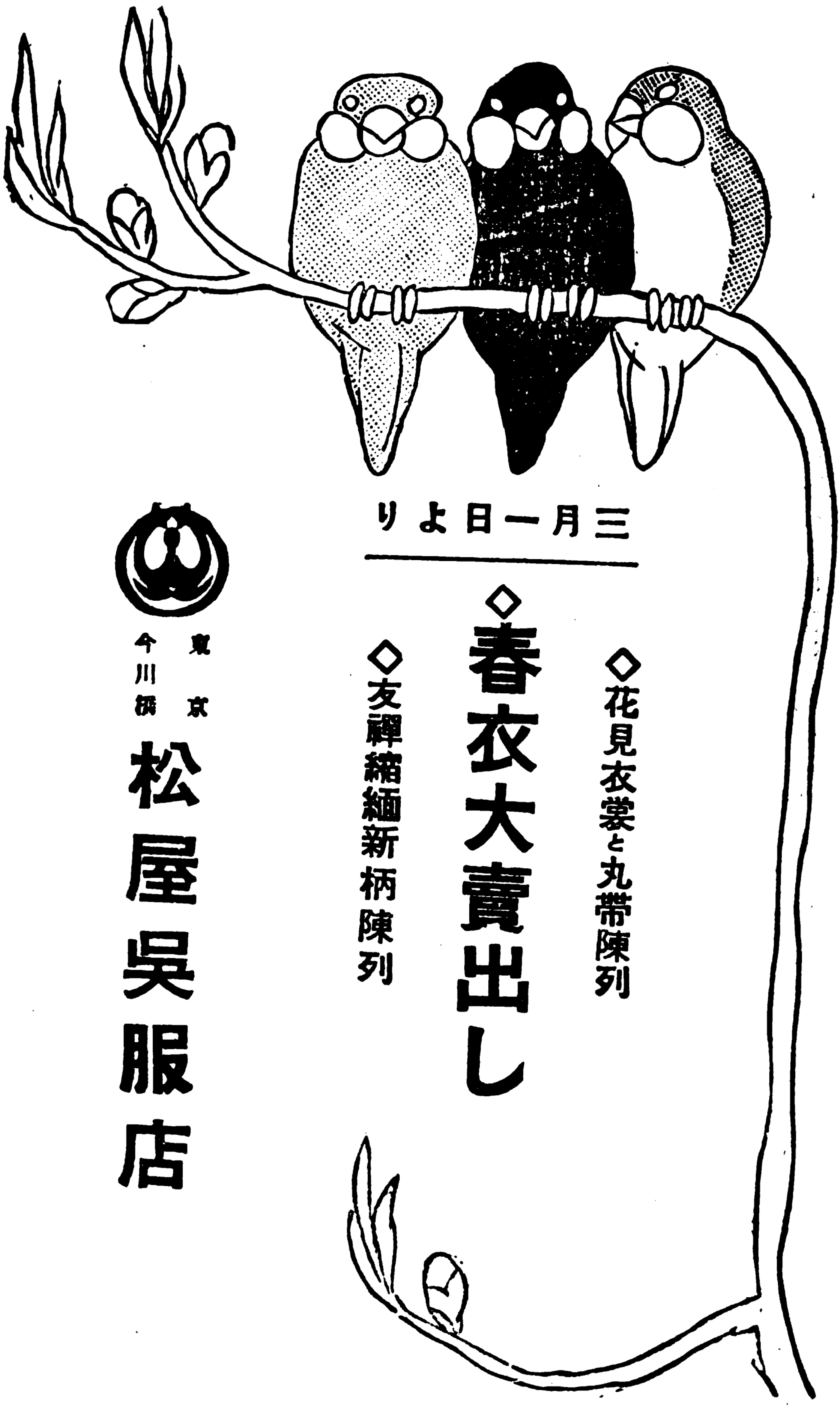
現在の國際政治の舞臺の上に於て、フランスの國民主義が最も惡どき軍國主義色彩を發揮してゐることは、我々が現在眼のあたり、ドイツの賠償問題に對して同國が取りつゝある態度を通して、餘りに露骨に見せつけられてゐるところのものである。世界の平和愛好者らは、今その前に戰慄しつゝある。イギリスの前首相が、その最近發表した論文『民族的自由へ。』（昨年十二月中旬に『東京朝日』に飜譯連載せられたものに據る）に於て、この點に關してフランスの政治家たちを彈劾した痛烈な文字は、我々に取つて無限の興味があるものであつた。それは、その筆者であるロイドジョージの顯著なる政治的經歷のためであるよりは、寧ろ、彼もまた、フランスの右の態度の遠因を醸成したヴェルサイユ條約の作成者らの一人であつたといふ事實のためである。で、彼の右の獅子吼は、同時に彼の悔恨の聲だとも聞かれるのである。たゞ彼の所謂『民族的自由』は、どれほどその政治的意味を脱却したものであらうか！　それが、我々に取つて、一つの疑問である。我々は、彼が眞の世界平和の使徒として叫び得るためには、まだまだその思想の上に一進歩の餘地があるものと思はしめられるのである。

二

人類の社會生活を、戰爭の行はれるのを常態とする現在の世界から、戰爭のない未來の永久平和の世界へ移り入らしめる程も、それ程も根本的な變化——若しくは私が上に示した意味に於ける『動的變化』——の起る日が、我々の時代にでも、若しくは次の時代にでも、兎に角近き若しくは遠き將來に於て、一度は到來するものであらうか？　かういふ問題に對して、一の明確なる答案を與へるやうな冒險を試みるものは、極端なる空想家以外には、恐らく一人もないことであらう。けれども、若しさういふ日が一度は到來しなければならないものだとすると、人類はその前に右の政治的意味に於ける民族意識及びその高度に發達した形式である國民主義を、根本的に世界の外に一掃し盡くす日を持たなければならないのである。永久平和の理想に憧憬する人々は、暫らくその未來のユートピアを描く煩勞を——若しくは慰樂を——やめて、この現實の問題に面接しなければならない筈ではあるまいか？　少くとも彼等は、かういふ問題が片付く日までは『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうな標語は、所謂『愚人のパラダイス』に屬するものであることを、眞面目に考へなければならないのである。無限の過去から現在の瞬間に到るまで、一の戰爭は他の戰爭の種子を播きつゞけて來たが、しかし戰爭が戰爭を決定的に終熄せしめたやうなことは、未だ曾て一度もあつた例しがないことである。さういふのが、戰爭の性質なのである。少くとも、社會進化の過程の上に、今一度の『動的變化』を惹き起すやうな社會的原因が新たに加はつて來ない限りは、さういふことは恐らく何時までも、戰爭の性質として存續するであらう。といふのは、未だ曾て一度もあつた例しもなかつたことが生ずるためには、それを促すに足るだけの特別の原因が新たに加はらなければならないものであるといふ程のことは、社會進化の性質に關する理解からでなくとも、たゞ單なる一片の常識からでも、何人にも容易に認知し得られることだからである。

しからば、さういふ特殊の社會的原因が何であるかといへばそれは、支配階級對被支配階級とか、搾取階級對被搾取

階級とかいつたやうな階級的差別が、國家生活から全然取り去られるといふことである。それが、自然的原因からでも、たゞしは人爲的原因からでも、兎も角國家生活から消え去つて行くといふことである。若しさういふことが起らないで、依然として國家生活の上に右の階級的差別が存續する限りは、支配階級が、その階級的存續の保全のためにも、政治的意味に於ける民族意識及び國民主義を際限もなく利用しつゞけて行くことは、その免れられない運命なのである。それは、社會生活の上に働く一種の『自然法則』の働きの結果だとさへもいへるのである。プロレタリアートのインターナショナリズムが、『國民主義』に對して反抗の態度を示して居るのは、實は右の政治的意味に於ける民族意識及び國民主義に反對して居るのである。そして、それがそのインターナショナリズムの理想の完全なる實現の前に、階級的差別撤廢の要求を置いて居るのは、論理的には正しいものだといはなければならない。たゞ、この要求が貫徹される日があるであらうか否か？　そして、若しそれが貫徹される日があるであらうとすれば、それがどういふ徑路を經て、どういふ形式に於て現はれるものであらうか？　といつたやうな問題は、茲で私が解決することが出來ない問題でもあれば、また解決を企てる必要のない問題でもある。私は茲ではたゞ、資本階級が常に政治的意味に於ける民族意識及び國民主義を强調することを怠らないにも拘らず、それに逆行する傾向のある一種の國際的連帶感情ともいふべきものが、資本主義そのものゝ發達の當然の到着點としてさへも、既に少くともその萠芽を示して居ることをつけ加へて置きさへすれば、それでいゝのである。そして、政治的意味以外の民族意識が必ずしも、この國際的連帶感情と矛盾する必然性を持つて居るものでないといふことは私が既に簡單ながら述べて置いたことである。



三月一日より
◇花見衣裳と丸帯陳列
◇春衣大賣出し
◇友禪縮緬新柄陳列
東京
今川橋
松屋呉服店

床次前內相の『我國の勞働問題』觀を難ず

林　癸未夫

一

前內閣の內相床次竹二郎氏は社會政策時報の一月號に『我國の勞働問題』と題して、二十頁に亘る長文の意見を發表せられた。此一文は我國の勞働問題に利害を有ち休戚を感ずる者に取りては、甚だ重要視されなければならぬものであると私は思ふ。

其理由は、第一に此一文は床次氏自らが執筆されたか、或は口授して他人に筆記させたかは分らぬけれども、何方にしても其內容は悉く氏自身の頭腦から直接に出た意見であると認められるからである。床次氏の如き地位に在る多くの人々に殆ど常習となつてゐるやうに、下僚の能文者に命じて立案起稿せしめしものに、ざつと目を通す位で原稿要求者への義理を濟ます月並の文章とは異つて、此一文の內容はさながらに床次氏の講演を目のあたりに聽くの趣があつて、其一辭一句が必ず氏の眞情から出たに相違ないと想察せしめるに充分なる語調を以て書下されてゐる。言ひかへれば此文章の中には床次氏の政治家としての個性が明に觀取されるのであつて、よく新聞の新年號などに掲載される、誰にも精讀されない、高位大官者の紋切型な感想などゝは選を異にしてゐるのである。此意味に於て此一文は吾等が重要視すべき價値あるものである。

第二には床次氏が政治家として有せられる地位である。同氏は朝に在つては國務大臣であり、野に在つては大政黨の領袖である。しかも將來再び政府に立たれることが確實に期待されるのみならず、或は首相の印綬を帶びて大政燮理の重任に當られる日が來るであらうとも豫想されてゐる人である。私も實は然か信じてゐる者の一人である。果してさうだとするならば、氏の如き實際政治家が、當今我國の勞働問題に對し、如何なる理解と方策とを藏してゐられるかを確認することは、問題の直接當事者たる企業家や勞働者は勿論、世道人心を憂ひて、現實界への着目を一日も怠ることのできない吾等の如き學究者に取り

ても、極めて肝要なことゝせなければならない。若し假に床次氏の見解に缺陷があり、其意見に誤謬があるとするならば、それは氏個人の明不明の問題に止まらないで、實に天下億兆の幸不幸の問題である。氏の政治的地位が然らしめるのである。從て氏の意見に承服すると否とに拘らず、社會民衆の福利を念とする者は、何人も氏の言論を重要視して之に傾聽することを欲しなければならぬのである。

第三には床次氏の經歷である。氏は多年内務行政の衝に當つて居られた爲に、我國の勞働問題の實際的方面に於ては、最も多くのインフオーメーションを收受して居られた筈である。言ひかへれば此方面に於ける豐富なる知識の有所者であると同時に、又實務上の手ごたへに付て充分なる經驗の所有者でもある筈である。從つてかくの如き知識と經驗の所有者たる床次氏其人は、必ずや當今の日本の勞働問題に處すべき、最正最賢なる政策の發案者であらねばならぬと推定することが一應の常識として許されることである。殊に氏の政策が自家の利益を擁護するに便利だと考へる人々に在りては一層此推定を高調したいであらう。併しながら私の信ずる所では、豐富なる知識は必ずしも正確なる知識と一致するものではなく、又充分なる經驗は必ずしも適切なる理解を隨伴するものではない。勿論私は床次氏が現に所有される知識が不正確であり、理解が不適切であると直に斷定するのではないが、唯同氏が内務行政の多年の當事者であつたといふことを理由として、無條件に氏の意見を公正賢明なものだと認定すべき理由にはならないことを言ひたいのである。けれども之は單に私一個の所見であつて、ともかく世俗の一應の常識としては、床次氏の經歷の故を以て、其意見を尊重すべき理由とすることが、あながち不都合とは云へぬのである。それだけに氏の意見の世間的重要性があり、又之に對する批評のゆるかせにすべからざる理由があるのである。

第四には床次氏が有せられる個人的聲望である。氏は現在我國の政治家及政黨首領の中に在りては、最も社會問題に對する造詣が深く、勞働問題に對する理解の勝れた人として、世間の聲望を得て居られる人である。若し氏が眞に此聲望に値する資質を具へて居る人であつて、しかも氏の現に有せられる對勞働問題意見が、最近發表されたやうなものであるとするならば、社會問題に對する造詣や、勞働問題に對する理解に於て、氏以下である所の諸政治家や諸政黨首領の意見が何んな程度のものであるかは、略推量される譯である。そして吾々學究者や、勞働運動者は、此推量を基礎として、今後の言論や實行に對して取るべき態度を決定しなければならぬことになるのである。此

意味から考へても、床次氏の意見は確に重要性を有つものと言はなければならぬ。

右に擧げたやうな諸種の理由によつて、私は床次氏の『我國の勞働問題』なる一文を極めて重要視するものである。重要視するゆゑに私は該文を精讀した。而して私は床次氏の見解や政策の重要なる部分に何うしても同意することのできない點のあることを發見したのである。私の信ずる所では、床次氏の意見を以てしては、我國の勞働問題を正當なる解決の針路に向はしめることは不可能であつて、之を不問に附することは、我國家、社會、民人の將來の福利に寄與する所以でないと認めるのである。若しこれが一學者か一工業家の意見であるならば、一笑に附してしまつても差支ないかも知れぬ。又老朽の大官か小器の政黨員の意見であるならば、格別憂慮するには足りないであらう。併し之が床次氏の眞實確信された意見である以上は、私は決して之を默過することはできない。何となれば前に述べたやうな氏の政治的地位及個人的聲望が、國家社會及民人の將來の福利に係るもの甚だ大なるを思ふからである。茲に於て私は敢て此拙文を公にして、床次氏の反省を求めると同時に、同氏の意見の內容を正當に評價するだけの見識を有たない人々を戒めて置くことの必要を痛感したのである。

二

私は床次氏の意見を論評するに當り、氏が冒頭に總論的に述べて居られる學理的な論議は全部之を不問に附したいと思ふ。例へば「勞力は決して商品ではない」と言ひ、「天下は協調でなければならぬ」と言ふが如きは、既に一個の公案であつて、之を是認するにせよ、非認するにせよ、日本現時の活問題ではない。從て氏が是等の公案の提唱を如何程繰返へされたからと言つて、私は格別之に異議を挾む必要もないのである。唯氏が提唱の中に、商工業上の自由競爭に關する學說と、社會主義者の階級鬪爭に關する學說とを混同して、立論の基礎としてゐられることは甚だ笑止た事であつて、氏の名譽のために惜むべきである。尙此外にも學說や思想問題に觸れた事柄に付ては、氏の讀書力や思索力を疑はしめる點が多々あるけれども、元來氏は學者でもなく、又學識を誇衒するやうな小器の人でもないから深く之を咎めるには及ばぬことゝ思ふ。唯一言氏に勸告して置きたいことは、將來何處までも實際政治家として自己の本分を守り、現實問題を取扱ふのみを以て能事足れりとし、かりそめにも學理や思想問題に觸れる言說を避けるやうに心かけられたいことと之である。

吾等が氏の意見に傾聽しなければならぬ點は、言ふまでもなく當今の日本に於ける現實的な勞働問題である。而して此點に對する氏の記述の大部分は、氏が内相時代に施設されたる實際政策の説明であるが、併し同時に又氏が自ら施設せんとして果さず、之を將來に期待されてゐる政策にも言及して居られる。そこで今氏の記述の中から、氏の實際政策に關する意見の骨子とも認むべき事項を指摘すると次の通りである。

一、事業主は勞働者の福利增進鋭に意すること。

二、勞働者は規律訓練を重んじ、能率の進歩に努めること。

三、事業主勞働者意志疏通の機關として工場委員會の設置を奬勵すること。

四、勞働者の生活向上、雇傭條件の改善は、勞働組合に俟たざるも、他の立法手段により達成することができるのみならず、勞働組合は勞働問題解決の「適藥」でなく、時としては「毒藥」であるから、勞働組合法の制度は其必要を認めないこと。

五、治安警察法第十七條は、階級鬪爭思想を誘發し、社會革命を目的とする勞働爭議を禁壓するために必要な規定であるから之を廢止するわけには行かないこと。

床次氏の意見は要するに右の五項に歸着するのであるが、就中我國の勞働問題の現在及將來に、最も重要な影響のある事柄でもあり、又數年來世論の中心となり、實際運動の標的ともなつてゐたのは、第四の勞働組合と、第五の治警第十七條の兩問題である。床次氏は第三の工場委員會を自己の所謂協調主義實現の唯一方式として頻りに之を推奬して居られるが、工場委員會なるものは本來勞働組合の存在若しくは其職能を無視することによつてのみ存在の意義が認められるものであつて、勞働組合の存在若しくは其職能が認識されてゐる所では、單に勞働組合の補助的機關としてのみ作用するに過ぎないものである。從て床次氏の如く、勞働組合の存在を以て勞働問題の解決上無益なるのみならず、時としては却て有害であるといふ信念を有つてゐられる人が、工場委員會の職能を重要視されることは無理もないことであるけれども、吾等の如く勞働組合の存在及其職能の發揮は、勞働問題解決上必至の情勢であつて、之を認容しないことは、却て怖るべき社會的災禍の原因を造るものであると確信してゐる者に取つては、眞先の問題は何うしても勞働組合であつて、此勞働組合問題に就て床次氏の意見に承服し得た後に於てのみ、初めて工場委員會を問題として取上げることができるのである。然るに私は勞働組合問題に就て床次氏の意見に贊同することは絶對に不可能であるのみならず、能ふべくん

ば床次氏をして翻然其謬見を改めさせたいと希うてゐるのであるから、工場委員會問題は之を除き、專ら勞働組合と治警第十七條の兩問題を焦點として、論議を進めたいと思ふのである。

三

床次氏の勞働組合に關する意見の根柢には、次の二つの論據が据ゑられてゐる。一つは勞働組合法の無用論であり、他は勞働組合の弊害論である。先づ氏が勞働組合法を無用（無用と明言はして居られないが、併し所說の要點を繋ぎ合せると結局無用論に歸着するのである）とせられる理由は、日本の現行法律が決して勞働組合の組織を禁止してゐないのみならず、現に各種の組合が存立してゐるのであるから、此際更めて勞働組合法を設けることは、却て組合の組織及活動に、「案外にえらい窮屈な制限」を感ぜしめることになり、必ずしも組合の發達を助長する所以でないといふことが、其一つの根據となつてゐるのである。此床次氏の考へ方は法律論としては道理のあることである。日本國民は憲法第二十九條に依つて、「法律の範圍内に於て」結社の自由を與へられてゐる。而して現在勞働者に組合組織を許さずといふ法律が制定されてゐない以上は、如何なる形態の組合を組織することも全く勞働者の任意である。此故に嘗て一部の官僚によつて立案されたやうな、府縣又は職業の異同を以て組合組織の區分たらしめやうとするが如き規定を含勞働組合法の制定は、確に日本の勞働組合の現狀を破壞するものであるのみならず、將來に於ける其自然の發達をも阻害するものであつて、床次氏の說の如く、かゝる組合法は組合自身の爲に苦痛なる束縛となるのである。從て單に勞働組合法を設けよといふ要求は、全く事理を辨じない徒輩の叫びであつて、少しも意味を爲さぬ議論であることは、床次氏の考へて居られる通りである。

併しながら一度斯の如き法律論を離れて、靜に我國の產業界の實狀を通觀するならば、我國に於て勞働組合が發達し難い眞の原因が何處に在るかといふことが容易に發見されるのである。床次氏がよもや此眞の原因に氣付かないでゐられやうとは想像されないのであるが、併し一言も之に言及してゐられない所を見ると、或は案外氏の注意を逸してゐるのではなからうかと危ぶまれるのである。

然らば私の所謂眞の原因とは何であるかといふならば、傭主の被傭者に對する壓迫といふことである。詳しく言へば、自家の被傭者にしてかりそめにも勞働組合の組織を計畫したり、或は之に加入したりする者がある時には、容捨なく之を馘首して

其生活の糧を奪ふといふ手段が、完全なる自由を以て、遠慮會釋なく行はれてゐるといふことである。之には極めて少數の例外を擧げることはできるけれども、百中九十九までの工場鑛山に於ては、適確に行はれつゝある事實であつて、しかも事業主が此手段を遂行するに、如何に巧妙周到なる用意を以てしつゝあるかは、寧ろ局外者の想像以上に及んでゐるのである。時としては勞働組合に對し故意に寬大を裝ふ事業主があるけれども、それは何等根柢ある自覺から出て居るのではなくして、寧ろ一種の氣まぐれであるから、若し一朝自家の被傭者が團結して、多少でも反抗的な氣勢を示すやうな事件が起ると、昨日の寬大は急轉して今日の冷酷となり、根本的の組合禁厭策を取るやうになる例が頗る多いのである。

右の如き傭主の水も漏らさぬ嚴酷なる勞働組合員驅逐策が勵行されつゝある今日の我國産業界の現狀に於ては、如何に憲法の保障があるにせよ、如何に組合禁止法が制定されてないにせよ、事實勞働組合の發達すべき餘地はないのである。現在日本の勞働組合員は全國擧つて僅に二三萬の存在を保つに過ぎないけれども、(曾て政府から發表された統計には日本の勞働組合員數を十萬以上に計上したものがあつたけれども、それは全く計算の方法を過つた統計であることが、勞働組合の幹部によつて確認されてゐる)此存在すらが實は寧ろ奇蹟であつて、勞働組合運動の精兵とも看做すべき、眞面目なる熟練職工にして、數箇年繼續して勞働組合の掛金を納めてゐる者の如きは、眞に僅少な例外に止まつてゐるのである。

若し床次氏が多少でも此事實に氣付いてゐられたならば、恐らく「洵に日本は今日自由な天地である。如何なる勞働組合を作らうとも勝手次第である」といふが如き無謀な放言はできなかつたであらうと思ふ。床次氏は眞實衷心から此日本は勞働組合運動のために「何等の束縛もない全く自由な天地」と信じて居られるのであらうか。私は氏の名譽のために、さうは信じたくない。信じたくはないが、事實さうであるとするならば、我國民のためには確に一つの禍である。

今更めて說くまでもなく、苟くも近世の勞働問題に對する通り一遍の知識を有する者は誰でも承知して居るやうに、十九世紀以來各國に制定せられた工場法其他の勞働保護立法は、悉く産業上に於ける個人の「自由」を拘束するがために設けられたものである。佛蘭西革命によつて與へられた政治的の自由と英國産業革命によつて與へられた經濟的の自由とは、單にブルジョア階級の自由を保證し、其活動を援助し、其利益を擁護するに止つて、プロレタリヤ階級は此自由のために何の得る所もなか

つたのみならず、却て此自由のために苦しく困せられたのである。何となれば、此自由主義全盛の影響として、過去の賃金公定其他の勞働保護に關する法規は全廢せられ、賃金も時間も總て傭主と被傭者との間に於ける自由の意志によつて決定せられ、國家は決して兩者の關係に干渉すべきものでないといふ、當時の學問上の通説が實地の上に勵行せられたゝめに、事實に於て經濟的强食弱肉の狀態が公認せられ、一切の勞働契約は法律上の形式に於ては、詐欺も脅迫もない、全く双方の自由意志によつて締結せられても、其實質に於ては、賃金時間悉く傭主の決定する條件のまゝ、唯々諾々として雇傭を請ふより外に勞働者の就業し生活する術はなくなつたのである。何れの國でも工場法の制定される以前に於ける雇傭條件が、殘忍非道と思はれる迄に苛酷であつたのは全く此爲である。玆に於て各國の爲政家は始めて産業上に於ける自由主義の必ずしも金科玉條視すべからざることに氣付いたのみならず、進んで此自由に干渉し、國法の力を以て勞働契約の內容に制肘を加へることの必要を悟るに至つたのである。そして其結果が工場法の制定となつて現はれたのである。勿論何處の國の工業主も當初工場法の制定には必ず反對した。何となればそれは已れの自由を奪ふものであるからである。從て資本家の政治上に於ける勢力の强大な國ほど工場法の制定は困難であり又遲延した。併し如何なる爲政家の努力と、公正なる學者の指導とによつて、結局工場法は制定されなければならなかつた。何となれば國法の力に依るより外に工業主の勞働者に對する横暴、專恣、慘虐、貪婪を制肘すべき方法のないことが、多年の經驗によつて會得されたからである。言ひかへれば勞働保護立法とは、曾て政治上及經濟上無二の福音として、約一世紀(我國に於ては約半世紀)以前、國民渴望の標的であつた所の「自由」を、形式的には工業主勞働者双方に對して制限し、實質的には工業主に制限して勞働者に賦與することの謂に外ならぬのである。此一事は實に勞働問題の「いろは」であつて、これを外にしては、近世の勞働問題を理解する鍵はないと言つて可いのである。

私は床次氏が勞働問題の「いろは」すら御存じないといふやうな無禮な想像を敢てするものではない。併しながら氏が所謂「何等の束縛もない全く自由の天地」と讃美せらるゝ此大日本帝國に於てしかも現在の工業主と勞働者との關係に於て、何人が果して能く此自由を享有しつゝあるか、又何人が果して此自由を享有するを得ざるかを三省せられんことを床次氏に要請することは、學者としての吾々の義務であり又權利でなければならぬのである。

現在の日本に於て、今直に勞働組合法を制定するの必要があるとするならば、其内容は如何なるものでなければならぬかといふことに就ての私の考へは、他日之を詳論するの機會があらうと思ふ。唯併し、今茲に其骨子たるべき事項の一つを擧げるならば、右に述べたやうな、勞働者の組合組織を、事實上全く不可能ならしめてゐる我國現代の工業主の「何等の束縛もない」自由を束縛して、眞に「如何なる勞働組合を作らうとも勝手」なる自由を勞働者に賦與するといふ一事でなくてはならないのである。

四

これ以上勞働組合法の内容如何に就て論議することは、今の場合無用の沙汰である。何となれば床次氏は元來勞働組合法の制定と否とに拘らず、勞働組合其ものゝ存在を嫌惡すべきものであるといふ見地に立つて居られるのであるから、法律論は寧ろ枝葉であつて、勞働組合の國民經濟に及ぼす功罪如何といふ實質論が根柢の問題とならなければならぬからである。

床次氏の說に從ふと、勞働組合の職能は三つある。一つは組合員相互間の共濟であり、一つは團體協約による雇傭條件の改善であり、一つは階級鬪爭である。然るに床次氏の主張に依ると、初めの二つの職能は必ずしも勞働組合自らの運動に俟たずとも、國家の法制によつて其目的を達することのできるものである。氏の言を茲に借りるならば、第一の共濟事業は「勞働者のみに任かせないで、國家若しくは資本家が考へ、寧ろ公共的にやるべきであると考へる。即ち之を勞働組合の働のみに任せないで、國家自ら相當な制度を立てるがよからうと思ふ。……勞働需給の調節は、或程度迄組合にやらすのもよいが、是もまた職業紹介所が發達すれば、勞働組合が立入つて働く餘地は少くなると思ふ。」次に「勞働時間、勞働賃銀の標準を團體で定めると云ふ事は、餘程重大な事柄であるから、或は國家の權力が立入つて働くと云ふ事になるかも知れぬ。……我邦の工場法でも此等に關する規定があると思ふが、かう云ふ事には或程度まで國家の權力が立入つて來ると思ふ。隨て勞働組合の働としては、餘程微弱なものになるであらう。」かういふ床次氏の語調には多少曖昧な點もあつて、充分確信を缺いでゐるやうではあるが、併し次に「單に英米の勞働組合を眞似て、之を日本に採用すると云ふ時期は今日既に過ぎ去つて居る。今日は新しき時期に成つて居ると私は思ふ。決して歐羅巴の後塵のみを拜して進むべきではなからうかと考へる。」と附加へて說いて居られる所を見ると、要するに氏は、勞働者の共濟事業や、雇傭條件改

善に關する歐米勞働組合の運動を以て、我國勞働者の踏襲すべからざる陋習惡癖と看做し、我國の勞働者は須らく國家の立法政策に信頼し、安心立命を遂ぐべきであることを訓戒して居られるものと察せられる。成程我國の政治家が眞に公正にして聰明なる達識遠慮の士を以て滿されてゐるならば、我國の勞働者は何等團體的の運動なくして、能く其福利を完ふすることができるかも知れない。併しながら我國の政治家が此の如き無限の信頼に堪ゆる資格を有しないことは、天下何人も疑はぬ所である。床次氏と雖もよもや之を否定する勇氣はあるまいと思ふ。要するに床次氏の主張は官僚出身の政治家に特有の法律萬能、政府萬能の思想に胚胎する一謬見であると私は考へる。

次に勞働組合の最後の一職能、しかもその「最も大事な一つの働」として床次氏の指摘して居られるのは「所謂階級闘爭の點に存する。結束して以て資本家に打當る。ストライキをやり、サボタージュをやり、以て其目的を達する」こと之である。

何故に床次氏が勞働組合のストライキ、サボタージュ其他の闘爭的作用を嫌惡されるかと言ふに、それが「天地自然の法を無視したものである」からである。「根本の道理は相協調しなければならぬ」ものであるに拘らず、階級闘爭思想は此協調を破壞するものであるからである。然らば氏の所謂協調とは何ぞやといふに、氏の哲理によると、人間も自然物も總てのものが「其特徴、其個性を發揮して居る。此點に於ては唯我獨尊で相闘せざるが如くであるけれども、而も其唯我獨尊が相倚り相扶け合つて、此宇宙を形作つて居る。斯くの如く考へると、天下は協調でなければならぬ。獨立して居つてもそれが相扶けて居る。互に個々の人格は認める。自ら卑下しないと共に他を卑下しない。個々の人格を相尊重し合つて其本然の性を盡くして而も相悖らざる所が、所謂協調である」と。床次氏はかく論じた後に、更に進んで、歐米の社會主義者や勞働運動の鼓吹者は、此協調の哲理を辨へざるが故に、「彼等の思想は根本に於て間違つて居る。天地宇宙の原則を無視したものである。」從て彼等は「宜しく元に返つて最初から出直ほす可きである」が、「我々は今から進んで行くのであるから、日本は宜しく日本的の考へを以て進む」べきであると斷じ、自ら此確信に基いて、「我邦に於ては産業界に所謂協調主義の旗を押し立つべしといふ事を唱へ出」したものであると聲明して居られる。氏の抱負の壯なる、洵に感歎に堪ゆるものである。

右の如き床次氏の協調哲學は、さながらクロポトキンの相互扶助論を彷彿せしめるものがある。併し氏が無政府主義者でないことは、クロポトキンが政友會員でないと同樣に明白な事實

であるから、之は不思議な暗合として觀過してよからうと思ふ。

併しながら床次氏は疑ひもなく政黨員である。而して政黨は政治的鬪爭の機關である以上は、氏自ら熱心奔走せられる政治的鬪爭は、如何にして氏の所謂協調主義に一致し得るのであるか。氏は恐らく答へて言はれるであらう。政治的鬪爭は政見を異にする政黨員の公事であつて、國政の進歩を遂げ、憲政の運用を完ふする爲に必然の現象である。しかも其根本觀念に於て社會民人全般の幸福安寧を期する點に於て皆同一であるから、決して協調の精神に違背するものではないと。洵に然うである。果して然らば床次氏は、何故に同じ理由によつて、産業的鬪爭に從事する勞働組合の活動を認容することができないのであるか。

惟ふに勞働組合が資本家を敵視して之と相戰ふことは、在野の政黨が、反對黨によつて占められる政府を敵視して、之と相戰ふことゝ、根本に於て毫も異る所はないのである。在野黨が政府の豫算案や法律案に修正を加へやうとするのは、勞働組合が工業主に對し、雇傭條件の是正を要求するのと同一であり、又在野黨が政府を崩壞して自ら政權を掌握しやうと企てることは、勞働組合が現存の營利主義の産業組織を改造して、自ら産業の管理に參與しやうと企てるのと同一である。勞働組合が資本家を當面の敵として鬪つても、窮極に於て社會全體の福利を理想としてゐることは、政黨が政府を當面の敵として鬪つても窮極に於て社會全體の福利を理想としてゐるのと、毫末も相違する所はないのである。若し鬪爭を非とするならば兩者とも非である。若し協調を理想とするが可ならば兩者とも可である。唯一つは政治といふ舞臺に於てし、他は産業といふ舞臺に於てするだけの差である。等しく人事の實情であり、共に社會の活勢である點に於ては兩者全く同一であると見て差支ないのである。

政黨にも弊害があるやうに、勞働組合にも弊害がある。これは認容しなければならぬ。政黨に屢々黨利を國益の上に置くやうな行動があるのと同じやうに、勞働組合にも無謀な爭議を敢行して産業の發達を阻害するやうな場合のあることは事實である。床次氏は政黨員であるけれども、現代の政黨政治が如何に多くの弊害を流しつゝあるかに盲目な程の没分曉漢ではないに相違ない。私は勞働組合員ではないけれども、今日の勞働組合運動が如何に多くの弊害を伴つてゐるかに無識な程の世間不見ではないつもりである。併しながら如何に弊害はあるにせよ、政黨なるものゝ存在が、互に權力の濫用を牽制し、政策上の誤謬を是正するに與つて効があるのと同じやうに、如何に弊害が

あるにせよ、勞働組合なるものゝ存在が、資本家の營利を牽制し、企業家の無謀な經營振を矯正するに與つて力あることを認めないわけには行かぬのである。若し議會に反對黨がなかつたならば、在朝黨の政治は必ず墮落して國利民福を損ふに相違ない。若し產業界に勞働組合がないならば、企業家の經營は必ず勞働者の壓迫を通じて、結局社會民人の福利を害することになるのである。

床次氏が立法政策によつて產業上に於ける勞資關係の弊害を救濟することができると考へて居られることは、恰かも專制政治の國に憲法さへ與へるたらば、それで政治上の腐敗が廓清され國民が悅服するであらうと想像するのと同樣の誤解である。今更言ふまでもなく、制度は死物であり、社會は活物である。死物は硬化し、活物は日々に成長する。從て制度の內容が社會の活動に密接に相作つて進化し推移せざる限り、社會の活動の實體は、制度の準繩を擺脫して、自然の行程を進んで行くのである。況んや初めから社會の實體を無視した制度の設けられた場合に於てをやである。例へば米國で幾度企業家のトラストを禁止する法令や判決が公にされても、實質に於て資本合同の大勢を抑壓することができず、又他の諸國で幾度勞働爭議强制仲裁に關する法律が制定されても、結局勞働者のストライキを有効に防止し得た例がないやうなものである。制度の効果には限りがある。所詮勞を制するには勞を以てしなければならぬ。人間の本能と社會活動の實體に卽して、そこに政策の基調を定めなければ、眞の政治は行はれるものでない。法を設くることと必ずしも無用ではない。併しそれは政治の全部ではなくして、唯其一策である。法を設けざることも亦他の一策であることを記憶しなければならぬ。

勞働者が團結して資本家と鬪爭することは、現在の營利主義產業組織の下に在りては、立憲治下に於ける在朝黨對在野黨の鬪爭の如く、人間の本能であり、社會の必然である。之を除去する唯一の方法は、單に營利主義產業組織其ものを全廢することだけである。しかもそれが卽座に斷行されぬ以上は、之を禁壓することは、人間の本能に背反し、社會の必然に抗敵するものであつて、百害有つて一利無い。活眼の政治家の敢てせざる所である。私は床次氏が特に此點に猛省されんことを希うて息まない。

五

治安警察法第十七條の撤廢が、多年朝野の學者や勞働運動者によつて熱心に要望されてゐるに拘らず未だそれが實行される

に至らなかつた理由は、之を撤廢することによつて、階級闘爭思想を激發しやうと企む過激主義者の取締に遺漏を生ずる虞あるがためであることが、床次氏によつて說明された。「我々の頭には國家がある。社會の秩序がある。民人の安寧がある。それで決して輕々に治安警察法は廢することが出來ないのである。」と氏は斷言して居られる。併しながら床次氏の所謂階級闘爭思想なるものは「ストライキといふものはほんの豫備的行動で、目的は資本階級及之に附屬する階級を打潰さなければならぬ」といふが如き思想、簡單に言へば社會革命思想を意味するのであるから、若し此の如き社會革命思想の背景なしに、單に雇傭條件の改善を目的として行はるゝストライキは、床次氏から言へば階級闘爭と認むべきものではなく、從て此種のストライキは社會の秩序を紊り、民人の安寧を害する程の危險を伴はないものであるから、治警第十七條を擬するには及ばぬといふ見解に歸着するのである。

右の如き床次氏の見解は一昨年夏の神戸のストライキに際して、氏が內務大臣として取られた態度と正に符合するものである。氏は自ら「當時私は此ストライキに對し、官憲としては何等立ち入ることはせぬが宜しい。交涉は彼等の自由に任せる」方針を取つたことを言明して居られる。唯「併し此自由交涉の間に於て力を以て當らんとする者があつたならば、暴力は宜しく官憲の力を以て防がなければならぬ」ことを附言して居られる。政府當局としての此態度は、歐米各國に於ける諸政府が、今日勞働爭議の發生に際して取りつゝある態度と全く同一であつて、吾等の是認するに躊躇しない所である。勿論當時直接神戶の爭議取締の任に當つた地方官憲が、能く中央政府の方針に準據して過誤なきを得たか何うかは疑問であるが、暴力に訴へない限りは、官憲が勞働爭議に對して無干涉主義を取るといふ方針だけは確に正當であることを認めなければならぬ。

果してさうであるとするならば、床次氏が治警第十七條の存續を必要とせられる理由は、甚だ條理の通らぬものであると私には考へられる。何となれば本來此規定は決して社會革命思想の宣傳者若しくは其實行を抑壓することを目的として生まれたものではなくして、勞働爭議の發生其者を抑壓することを目的として生まれたものであるからである。恰も英國法が商工業（トレード）を妨害する共謀罪（コンスピラシー）としてストライキを禁止した時代があつたと同じやうに、多數の勞働者が共謀してストライキを行ふことを罪惡視する舊式の法律觀念によつて治警第十七條が制定されたのであつた。此事は同條文を一讀しさへすれば何人にも直ぐ領解されることである。即ち同條は「他人に對して暴行脅迫し若しく

は公然誹毀」することによつて「勞務の條件又は報酬に關し協同の行動を爲すべき團結に加入」せしむることを禁止し、又「他人を誘惑若しくは煽動すること」によつて「同盟罷業を遂行する爲……勞務者をして勞務を停廢」せしむることを禁止し、或は又上記の如き手段を用ゐて「勞務の條件又は報酬に關し相手方の承諾を强ゆること」を禁止してゐる。凡そ是等の規定は總て雇傭條件の變更か勞働爭議の遂行にのみ係るものであつて、社會主義も、階級闘爭も、此規定の與り知る所ではないのである。何處までも產業上に於ける勞資の闘爭、即ち普通の意味で謂ふ所の勞働爭議を禁壓することが此規定の目的の全部となつてゐるのである。本法通過當時に於ける議會の議事錄を繙いで見ると、此重要な第十七條には兩院とも格別の注意を拂はず、政府委員も何等適確な說明を與へてゐないが、併し若し之が團體に關する危險思想を禁壓することを目的としたものであつたならば、片言隻句位は其事に論及されなければならなかつた筈であると思はれるに拘らず、其事のなかつたことを思へば、やはり勞働爭議のみを眼中に措いて立案された條文であつたと推定して、決して誤りはなからうと思はれるのである。

右の如く、此規定は全く勞働爭議に關するものであることを前提として考へると、今日勞働爭議の實行に當つて、暴行は絕對に之を許さずとするはよろしい又脅迫も相手方の生命財產に直接の危害を加へることを豫想せしめる程度ならば之れを禁じてよろしいが、此程度に至らない間接の脅迫、例へばストライキの結果工業主の蒙るべき營業上の損失を豫想せしむるが如きは、爭議當事者たる勞働者に當然の手段として寬恕しなければならぬ。又傭主の處置を言論文章によつて公然誹毀することも彼等に必要の戰術として之を許さなければならぬ。「誘惑」は畢竟「誘引」の力强きものであり、「煽動」は結局「勸告」の熱烈なものである。自己と利害を一にしてゐるに拘らず、未だ能くそれを自覺してゐない同僚に對し、理を說き、情に訴へて、協同の行動に出でんことを誘引勸告するは、人と人との關係に於ける自然の情であり、必至の勢であつて、それ自體決して非難すべき性質のものではないのである。果してさうだとするならば治警第十七條中唯保存の價値ある部分は「暴行」の全部と「脅迫」の一部だけであつて、その他は一切、勞働爭議共者を犯罪視しない限り、全然保存の價値のない規定であるとしなければならぬ。しかも暴行や脅迫の取締は此規定に依らずとも、刑法上の殺人、傷害、放火、溢水、脅迫、毀棄の諸罪によつて充分其目的を達し得られるのであるから、結局治警第十七條の全部が保存の價値を有たぬ規定であると斷定して差支ないのである。

保存の價値はなくとも格別弊害のない規定であれば、之を其儘にして置いても支障はないではないかといふ議論もできるが、併し治警第十七條は過去に於て既に甚しい弊害の原因を爲した規定であるから、是非とも一日も速に之を撤廢しなければならぬ理由があるのである。私の所謂弊害とは、過去に於ける我國の諸政府が、此規定に準據して無闇に勞働者の雇傭條件改善のためにする運動に壓迫を加へ、我國の勞働運動を其正當なる針路に發展せしめることを防害したのみか、延いて之がために、床次氏を初め、政府要路に在つた人々を最も憂慮せしめたる過激思想を浸潤せしめることに與つて力があつたことを謂ふのである。

私の熟知してゐる事實を茲に平明に物語るならば、治警第十七條制定以來、床次氏が原内閣の内相として就任せられる迄に至る約二十年間に於ては、何れの工場鑛山に於ても、勞働者が團結して傭主に對し雇傭條件の變更を要求し、若し容れられずんば進んでストライキを斷行することは、事實上全く禁壓されてゐたのである。若し或工場の勞働者がストライキでも斷行しやうとするやうな情勢が見えると、工場主は僅に所管警察署に一電話を通ずることによつて、容易に此危機から脱出することができたのである。何となれば數名の警官は直に工場に疾驅して、首謀者を檢束する。而して之によつて元來が永續的組織もなく、强固な鬪爭意志もない、臨時的な爭議團たる勞働者は、忽ち氣勢を殺がれ、檢束された首謀者を見棄てゝ工場主に歸順を申出る。而して工場主は首謀者及之に率先雷同した反抗心の强い若干の勞働者に懲戒解雇を加へると同時に、最初から爭議に加らなかつた者及速に恭順の意を表した勞働者に對し、論功行賞的に多少の增給若しくは恩惠的の施設を與へる。かくの如くにして工場は元の平和に復し、獨り虻蜂取らずの馬鹿を見るのは首謀者だけといふ最後の結末に到着する。之が大部分の場合の常例であつたのである。

所がかゝる場合の異例として經驗されたことは、若干の鑛山に於て爆發したる暴動騷ぎである。其原因を考へるのに、元來鑛山勞働者の素質は都會地の工場勞働者よりは概して粗野である。又群集的に居住してゐる關係上結束が比較的容易である。其上に警察力が薄弱で土地が僻遠であるため、叱咤の間に官權を有効に發動せしむることが困難である。是等の原因に基いて鑛山に起つた爭議は、都會地の工場のやうに簡單には片付け難い。そしてやつさもつさの興奮狀態で數日を經過してゐる間には、煽動者が驅せ付ける。切崩が行はれる。裏切者が出る。喧嘩が起るといふやうな騷ぎになつて、結局烏渡したきつかけか

ら、所謂騎虎の勢が破壊的行動にまで彼等を驅るのである。併しながら暴動者も敵壘に突貫する勇士の意氣を以て此破壊を行ふのではない。唯瞬間の無反省な衝動に驅られて、癇癪持ちが床上に茶碗を投付けるやうな神經的の發作として之を行ふのであるから、一通りの破壊を遂げて、やゝ氣拔けの態で後を振返つた時に、既に彼等を遠卷にして、ひし／＼と迫り來る警官や憲兵や、兵士の抵抗すべからざる姿が彼等の眼に映ずる其刹那に、彼等の意氣は忽ち沮喪し、投獄斷罪の怖るべき幻影は、妖魔の如く彼等の心頭を襲ふのである。それから後は紋切型の順序を經て、數日の後に鑛山の平和が恢復せられ、論功行賞的恩惠の施されることに於て、前に述べた工場の場合と全く同一の狀態を繰返すのである。

かくの如き官憲の勞働爭議禁壓方針は、治警第十七條が勞働爭議の禁壓を目的として生まれたものである以上は、決して法の適用を誤つたものとは言へぬのである。苟くも未組織な勞働者を率ゐて勞働爭議を遂行する者が、傭主に對する誹毀や、同僚に對する誘惑煽動（これは前に述べたやうに力强き誘引熱心な勸告と事實上區別されないものである）を其手段として用ゐることは絕對に必要なことであるのに、同條文が此絕對必要な手段を用ゐることを禁じてゐる以上は、畢竟勞働爭議其者を禁じてゐるのと何等相異する所はないのである。此故に歷代の諸政府が、良法にもあれ惡法にもあれ、此條文の趣旨を遵奉してひたすら勞働爭議を禁壓するの方針を取つたことは、政治論としてはともあれ、法律論としては決して非難するわけには行かないのである。

然るに原内閣が成立して、床次氏が内相に就任されて以來、俄然政府の對勞働爭議方針が一變した。如何に變化したかは前に述べた通り、勞働者が暴行脅迫の手段に出でない限り、勞働爭議其者は決して禁壓せずして、自由に之を遂行せしめるといふ方針を取つたことである。政府の此方向轉換は、當時別段公表されたわけではなく、恐らく内訓として地方の警察官廳に示達されたに止つたのであるから、殆ど學者や言論界の注意を惹かなかつたが、併し實際其効果を直に痛感したのは、全國の工場及鑛山の經營者であつた。彼等は以前のやうに一通の電話によつて、容易に自家の勞働爭議を片付けてしまふわけには行かなくなつた。警察官は局外中立の立場に在つて、爭議を傍から監視するに止まり、以前のやうに工場の護衛兵のやうな役を務めたり、暴行脅迫の氣振もないのに、遮二無二首謀者を檢束するやうなことはやらなくなつた。高級の警察官吏や工場監督官等も從來のやうに工業主に同情して勞働爭議を嫌惡するやうな

口吻を洩さなくなつたのみならず、或は進んで、工業主に對し譲歩を諷論するやうな場合すら必ずしも稀でなくなつた。實際かゝる事態は當時少からず工業主を憤慨せしめたものであつたのである。

かくの如き原内閣の對勞働爭議方針の一變は、社會主義の學術的研究の自由を認めた一事と共に、確に原内閣の一功績として稱讃するに足るものであり、又其直接當局者としての床次内相並に彼を圍繞したる吏僚の聰明を證據立てるものであつた。何となれば此の如くにして初めて我國の勞働問題は其正當なる解決の針路に向つたものと言へるからである。若し假に我國の政府が原内閣以前の諸政府が等しく取り來つた方針を墨守して變ることなく、一方に於ては社會主義的思想の研鑽を嚴禁し、他方に於ては平和的勞働爭議の遂行すら禁壓することを繼續してゐたとするならば、それは活火山の噴火口を困塞して、其上に樓閣を築かうとするにも譬ふべき謬想、妄斷、愚舉であつて、それこそ國家の前途を誤り、社會の秩序を紊り、民人の安寧を障害すべき怖るべき結果を誘發したであらうことは疑ひないからである。

此意味に於て床次内相の對勞働爭議方針の一新は確に政治的功績と認めて然るべきものであつた。唯此方針一新と同時に治警第十七條を撤廢することが論理上當然の歸結であり、又さうしなければ政策上の辻褄は何うしても合はなかつたのである。それにも拘らず同氏が其撤廢を主張されなかつたことは、當時吾等の甚だ領解に苦んだ所である。そこで私はかうも想像して見た。床次氏は同條文を傳家の寶刀扱ひにして、實用の企圖はなくても、之を秘藏して置くだけの價値があると考へられたのではあるまいか。若しさうだとするならば、氏はそれが秘藏の寶刀ではなくて拔味の鈍刄であることに氣付かれなかつたものである。何となればそれは人の生命を斷つ程の切味はなくとも無闇に人を傷ける道具であるからである。私は又かうも想像して見た。床次氏及氏の閣僚は同條文の撤廢に異論はなかつたのであるが、唯樞密院や貴族院の頑冥者流が、到底之に贊同する見込がないから、姑く空文として之を存置することが餘儀なき政治的戰略とされたのであるまいかと。若しさうだとするならば我國の實際政治の上からは必ずしも寛假されぬことではない。然るに意外にも床次氏自らの説明を聽くに及んで、右の如き私の想像は二つ共に脱れたことが分つた。何となれば氏は前に述べたやうに、社會革命運動を妨壓するの必要上から、同條文を保存せなければならぬ旨を言明されたからである。

私は敢て言ふ。我國に於て社會革命の實行を目的として、其

一方便としての同盟罷業が企圖されるやうな事態が實際發生することを豫想して、それがために治警第十七條を保存して置かなければならぬと床次氏が考へて居られることは、全く社會的事物の價値に對する一つの錯覺に基く所の謬想でなければならぬと。譬へばそれは自殺の手段に用ゐられるといふ理由で、「猫いらず」の販賣を禁止するやうなものである。自殺を決した者は「猫いらず」があつてもなくても、死を遂げる手段には決して窮しないのである。然るに若し政府が自殺を豫防する方法として「猫いらず」の販賣を禁止したとするならば、それによつて最も有効な殺鼠方法を失はしめることによつて、國民一般は鼠の跳梁に苦しまなければならぬのである。否獨り器物や食物を鼠に荒らされる損害に止まらず、之によつてペスト菌傳播の原因を造るやうなことにならぬとも限らぬのである。それと丁度同じ事で、若し我國に於て過激主義者の社會革命運動が實行される可能性が有るとするならば、其可能性は治警第十七條の保存と撤廢とによつて寸毫も左右されはしないのである。之は常識で誰にでも首肯されることである。若し我國の政治家が社會革命運動の發生を未然に防止しやうと企てるならば、其手段として此條文に依頼するが如きは、甚だ本末を顚倒したものであつて、もつと他の有効適切なる手段に依らなければ到底其目的を達し難いのである。しかのみならず此條文によつて勞働爭議が禁止される結果、却て革命思想の醱積を助長し、床次氏の企圖とは正反對の結果を惹起することにならぬとも限らぬのである。元々ストライキの禁止を目的として造られたる治警第十七條の亡骸（これを亡骸たらしめたのは床次氏の聰明である）を保存して、以て革命運動の防遏に資せやうとするが如きは、腦溢血の豫防に脚氣の藥劑を保存して置くが如きものであつて、殆ど論外の沙汰と言はなければならぬ。私は切に同氏が此點に關する其謬想を一排して、速に治警第十七條の撤廢を實行することに努力せられんことを希望して止まぬのである。

六

床次氏の勞働問題意見に對する私の批評は之で盡きた。併し私は單に床次氏の蒙を啓き、其反省を求むるがために此論文を公にするのではない。私の見る所では、我政府部內に在りては、一部小壯の吏僚を除いては、今尚床次氏と同一の意見を有する者が甚だ多い。又我國の資本家、企業家と言はれる人々の頭腦は、保守的といふよりも寧ろ主我的であつて、產業保護のためには政府の干渉、法規の制定を歡迎するが、對勞働關係に於ては飽くまでも自由放任を熱望して、法規の拘束を受ける

ことを肯ぜない風が盛である。甚だ蟲の好いことではあるが、併し適度を逸した勞働保護は生産費の昂騰を促し、生産費の昂騰は物價の騰貴と貿易の不振を招徠し、延ゐて産業の萎縮と失業者の增加を結果することになるのであるから、企業家の心理が主我的であるからと言つて、彼等の主張を全部排斥することは政治の公正を期する所以でない。併し政府が餘りに企業家の主張に傾聽し過ぎると、産業が如何に振興し、財政が如何に豐富を來しても、其慶に浴する者は國民中の一少部分に過ぎないことになるから、所謂危險思想の醱酵に好箇の素材を供することになるのである。此故に爲政家が勞働問題を處理するに當つては、常に企業家と勞働者の双方に聽き、其に兩面を察して公正に斷ずることが何よりも肝要である。これは甚だ平凡な眞理であるが、併し現今我國の爲政家は勞働問題に關する理解尙極めて疎漫であるのみならず、彼等は企業家に接觸する場合の方が、勞働者に接觸する場合よりも遙に多いことによつて、知らず識らずの間に、勞働者の立場よりも企業家の主張により多く傾聽し、同情し、斟酌するといふ結果に陷り易いのである。例へば工場法を改正するにしても、健康保險法を制定するにしても、企業家の團體には諮問するが、勞働者の團體には諮問しない。これは未だ有力なる勞働組合が存在しないためであるかも知れないが、併し決して公平な政府の態度とは言へないのみならず、之によつて政府の聲明が蔽はれ、公正が傷けられる虞のあることを拒むことはできないのである。唯幸にして我國に於ては經濟學者が大部分勞働者の味方であつて、常に彼等の利益のために辯ずることを怠らないから、政府は之によつて多少啓發される所があらうとは思はれるけれども、併し本來學者は何人のためにも辯ずべきものでなく、眞理のためにのみ辯ずべきものであるから、勞働者のために辯ずるものはやはり勞働者自身でなくてはならない筈である。唯我國の勞働者は未だ自ら辯ずべき形態と機會とを與へられてゐないから、學者が假に彼等に代つて辯ずるのである。私は自ら必ずしも勞働者のために代辯するつもりではないけれども、爲政家の公正を要望し、其政策の妥當を希ふの意念に於ては、何人にも讓らないと自信するものである。此意念が私をして本論を草せしむるに至つた重な動機である。必ずしも床次氏のためではない。又必ずしも勞働者のためではない。國利のためである。民福のためである。

人氣取り政畧を出でざる我國政黨者流の農村振興案

法學博士　堀江歸一

衆議院の年中行事

年々歳々衆議院が開かれて、種々の問題の議に付せられる際、私共現實の政治に對して、局外の地位に居る者をして、最も大なる不快を感ぜしめることは、多くの議員が其何黨に屬し又何派に列するを問はず、露骨なる人氣取りを後生大事に心得、以つて自己の選擧民に阿らうとする一事に外ならない。衆議院閉會の間際に臨んで、議員が盛に地方的利害に關係ある建議案を提出し、何縣の何川を改修せよとか何郡に鐵道を敷設して貰いたいとか、種々樣々の熱を吐き、堂々たる帝國議會をして些々たる村會の姿を帶ぶるに至らしめることも年中行事の一つであつて、又同時に國民を困殺する事柄であるが、斯る建議案は假令ひ議會を通過した所で別に政府の方針を支配する力のあるものでもなければ、又次年度の豫算案に採用されることもあるまい、唯議員殊に平生重大なる問題に就て發言の機會を與へられない議員をして自己の地盤とする選擧區民の歡心を繫ぐ所以たらしめるに止まる次第であつて、別に後日に累を及ぼす程の虞れありと考へられない。然るに之に反して吾人の何としても看過することの出來ないのは、政黨の領袖なり、幹部なりが黨議を纏めて、人心收攬の爲めに、公々然人氣取りを主眼とする法律案を提出して憚らないことであつて、斯る法律案が議會を通過して法律と爲つた曉に其國民經濟を傷け財政を害することの幾何であるか、殆ど之を測り知るを得ない、陣笠議員の御土産建議案の如きは、事の小なるものであつて、私は却つて政黨が黨議として行ふ人氣取り政略に多くの危險、多くの罪惡の含まれることを認めるのである。

地租と農村救濟

現に第四十六議會に於ける經過に徴しても、私は單に如上の感を深うするの外はない。殊に次期の總選擧が一會期後に迫り

來つた關係から來た所であるかも知れないが、今期の議會に於ては、諸政黨盡く人氣取り政策の競爭に忙はしき有樣であつて、其著しく外形に現はれたものは農村の救濟を口實として行はれる各種の論爭であり、又幾多の法律案である。本來我國に於ては衆議院は幾度び改選されて、議員の顔觸れに多少の異動があらうが、又議會の勢力を支配する政黨に如何なる離合集散が行はれようが、依然たる農民黨の巣窟たることを失はない。往年一方に營業稅が選擧權の資格を律する直接國稅の內に加へられ、又其稅額が加重された他の一方に、全國大小の都市が獨立選擧區と爲つたこととの結果、商工業の利害を代表する議員の選出される數も相當の數に上つたようであるが、衆議院の農民議會である大勢には些の微動だも生ずるに至らない、斯くて所屬政黨の如何を問はず、多數の議員は帝國議會の議員でありながら、何村の何右衞門であり、何字の何作であつた昔を忘れず自ら村會の一議員たると同じ心得を持ち、如何にして其地盤とする農民の歡心を結ばうかと云ふことに腐心し、百方畫策して、他あるを知らざるの狀を免かれない。然らば最近兩三年間各地方の農村に疲弊の狀があり、農民の間に挽回の希望の盛なるや、衆議院に於ける諸政黨が其意を體し、第四十六議會に於て農村救濟の計畫を廻らすに至つたことも、亦當然の事と思はれるであらうが、彼等の農村の爲めに企畫する所は果して農村の救濟に適するものであるかどうか、一方に農村救濟の效果を擧げて、他方に何等の弊害を及ぼさゞるを得るものであるかどうかと云ふ問題に爲ると、私は勢、大なる疑を挾まざるを得ない。

地租の減廢と農村救濟

地租は從來農村の利害に關聯して、常に其存廢の可否なり、稅率の高低なりに就て、世論の中心と爲る趣きを免かれない。始め地價に對する百分の三を定率とした地租が明治十年二分五厘に引下げられたのは、民力休養の趣意に基くものであつて、當時から地租を輕減することを以つて、農家の振興に資するに與つて力ありとする思想は、我國民に懷抱されて居つたのである。其以後に於ても地租輕減論は常に議會に於ける好題目の一つと爲り、初期の議會に於て我國政界に勢力を擁した自由黨にしろ、改進黨にしろ、地租輕減、民力休養を以つて一點張りの政綱とした次第であつて、唯其後自由黨が山縣內閣や、伊藤內閣に接近し、積極主義を實現する爲めに、財源を地租增徵に求めたのは、頗る異色であつたと見る可きであるが、其地租增徵にした所で、屢々行はれ、或る時には年限付きの條件が付せられ、又地租增徵に依る增徵に數倍する程度に於て、消費稅に增徵が

行はれたり、地租増徴に伴ふ農家の負擔を相殺する考の下に、外國米に輸入税が賦課されたりした程の次第である。詰り斯く衆議院が地租の増徴を嫌忌して其減率を要望するのは、多數議員各自の根據とする所が地方農村であり、農民の投票に依つて當選した結果であつて、地方的利害の最も明瞭に中央政局に發現したものと見られるであらう。

斯の如く考へたならば、農村疲弊の對策として、地租輕減又は地租廢止の議論の今日の議會に現はれるに至つたことも、固より異とするに足らないが、地租の輕減が果して農村救濟策として、適切のものであるかどうか。地租にして農民の負擔に歸する租税であり、又農産物に於ける代價騰貴の形態に於て、他に轉嫁することの許されない租税である以上は、其減免が農家の經濟を潤ほすに足ることは、當然の數であるが、其之を潤ほすに至るのは、幾何の程度に達するであらうか。普通の道理から云へば、大地主は自作農民よりも地租の減免に依つて、利益を蒙る所多く、自作農民は其所有する土地の小なるだけ、利益する所も少なく、小作農に至つては、地租の減免を機會として小作料の低減の行はれない限り、何等の利益を受けるに至らない、而して地主が地租の減免を機會として、小作料を低減するが如き所業に出でないことの明瞭である以上は、地租の減免は結局小作人に取つては、全く風馬牛相關せざる問題に止まるのである。

農村疲弊の原因

然るに今日農村の疲弊は何を原因として起りつゝあるか、又其困憊は如何なる方面に於て、最も甚だしきを告げて居るゝす可きであるか。是れは最も範圍の廣汎なる問題であつて、一方に私は唯昨年來自分の巡歴した三四の地方に於て蒐集するを得た材料に據つて、判斷を下すに過ぎない次第であるから、固より事の完璧を望むを得ないかも知れないが、私は現下に於ける農村の疲弊を以つて、左の數原因に歸することを至當であると考へる。

第一、米價の下落の急劇であつたこと。

第二、養蠶製絲機織等米作以外に農家に收入を與へて居つた事業の衰微したこと。

第三、米價の下落に相對して、一般物價の下落しないこと。

第四、農業勞働者不足し、彼等の賃銀に著しき上進を告げたこと。

最近一年間我國米價の下落したことは、甚だしき程度に上つた騰落の變の頗る急劇であるは、當に我國の米價に見る所であ

るが、一兩年間に亘る暴騰の後を承けて、昨年來の反動安に接しては、其農家の經濟に打撃を及ぼすことは、當然の勢である。或は近年地方に依つては、農家の間に養蠶業製絲業が兼營され又賃機に依つて、衣食の計を立て、又少なくとも農産物の收穫に依つて得る所得を補助するものもある。一の地方が幾何の程度に於て、一年中の生活費を穀物の收穫と養蠶製絲の代金又は賃機の報酬との孰れに依賴するかは、其地方の狀況に應じて自ら異なる次第であり、隨つて米價は下落しても、絲價が高いとか、織物の市況に活氣を呈して居るとか云ふような場合には、或る地方の經濟は依然として繁昌を維持し得る道理であるが、我國に於ては往年の不景氣以來米價の安きが如くに、絲價も不振であり、織物市場にも亦衰兆の甚だしきものがある。是れは今日我國を襲ひつゝある不景氣が我國の一部に限られずして、全體に亘り、又我國特有のものに非ずして、廣く國際間に亘つて居ることとの結果であつて、斯くて純然たる農村は米價の低落に依り、養蠶、製絲、機織を副業とする地方は絲價の低落に依り、不利なる影響を蒙らざるを得ざるに至つたのである。

或は以前の如く地方農村の人民が自足自給の狀態に於て、生活を營んで居つたとしたならば、彼等の産出する米の内で、市場に賣却される分量は必ずしも大なるものではない、其價格は如何に下落したとした所で、農家の生活上に消費する物資は一切自家の菜園に於て生産され、納屋に於て製造され、之を生産し、製造するに要する勞力亦自家の子弟を以つてし、他から雇入れるにしても低廉なる給料を支拂つて、足れりとしたような時代であれば、農家の經濟が米價の下落に依つて、受ける打撃の如きは、極めて輕微なるものに止まつたのである。然るに今日の農家は斯る自給自足の狀態に於て、經濟を營んで居るものではない。米を多量に産出して、自家用以外のものは之を賣却する、或は收穫米の全部を賣却して、自家用としては、更に品質の劣つた米を買入れる場合もある。而して斯る米の賣却に依つて收め得た代金は如何に處分するかと云へば、被服、飲料、木炭、石油等の生活に於ける必要品を始めとして、日用品を買入れる資金に充てるのであつて、自足自給の生活の如き、餘程の片田舍に行かない限り今や其片影すらも存しないと云つて、差支ないであらう。此事情を念頭に置いて、考を廻らすと、我國近年の物價政策に大なる過誤のあつたことが明瞭と爲るのである。卽ち最近一年間に於ける如く、米價の暴落した場合に、政府が一般物價に對しても亦斷乎たる政策を以つて、其調節を企て、米價の下落と略ぼ同一の步調を保つ程度に於て、一般物價の低落を謀つたならば、當に都會に於ける人民の生活を安易

ならしめるを得たに止まらず、農村の疲弊をして今日の如く甚だしきに至らしめざることを得たであらう。然るに從來政府の爲す所は如何であつたらうか。米價が幾ら下落しても、其赴く所に任せて、顧みない一方に米以外の一般物價が如何に騰貴しても、是れ亦何等の處置に出でない、物價問題の解決に就て、政策らしき政策は一も之を試みたものがなく、米價と一般物價との趨勢を背馳するに任せた無策無經綸が今日に至つて、農村の疲弊を甚だしからしめたものと認められる。而して歐洲戰時數年間を通じて、大小の都會に、製造工業の勃興した際に、盛に職工勞働者として、地方の青年を吸引した勢は甚だしきものであつて、一旦都會に集まり來つた是等青年は不景氣の今日、適當の職業の見出されない境遇に爲つても、容易に以前の田園に歸農することを好まない、斯くて都會の不景氣を極める際、多數の勞働者は失業の狀態に陷り、徒手遊食の民と爲りながら、地方の農村に於ては、依然たる勞働者不足を訴へざるを得ざる次第であつて、彼等の賃銀は自ら上進し、農家をして其負擔に堪へざらしめる。米價騰貴の時代には兎に角其下落を告げる今日に於て、農村疲弊、農家困憊の一原因として、農業勞働者の賃銀上進の舉げられ可きことは、論を俟たないのである。

地租輕減と地租の地方委讓

農村疲弊の原因にして、大凡そ以上の諸點に存するものとしたならば、目下議會にて唱道されつゝある諸種の農村救濟策の如き、農村の振興を期する點に於て、幾何の貢するものありとするを得るであらうか。第一に吾人の眼前に現はれ來つた農村救濟策は地租輕減と地租委讓との二者であつて、前者は憲政會に依つて、後者は政友會に依つて、其れ〳〵主張される、地租の輕減に依つて、民力を休養しようと云ふ說の主張されるのは、敢て今日に始まつた事ではなく、殆ど議會開設以來の年中行事とも見る可き所であるが、其輕減は果して全國の農村に幾何の効果を及ぼすを得るであらうか。地租の賦課されるに比較すれば、其賦課されないと云ふことは、農村の負擔を緩和し、輕減する所以たるを失はないであらうが、農村疲弊の諸原因が既に列擧した如きものである場合に、地租輕減を以て、之に臨むのは、恰も木に接ぐに竹を以つてするの感なきを得ない。我國の農村に於て、今日最も疲弊の甚だしきに陷つて居るものは、小規模の自作農であり、又小作農である。小作農に取つて、地租の輕重の如きは、幾何の關係ありと見られようか。地主が自家の負擔に歸する地租の關らず、輕減されたことに歡喜して、

自ら進んで小作人の爲めに、小作料を輕減し、斯くて地租輕減から生ずる利益を彼等に頒つ態度に出でたならば、地租の輕減は自然小作農を潤ほして、彼等の疲弊を幾分なりとも緩和するを得ると考へられるかも知れないが、今日小作人に對して右に述べる如き寛仁の態度に出る地主は全國に何人を數へ得るであらうか。斯る地主の頗る乏しきことは、近年關東と云はず、關西と云はず、全國到る所に小作爭議の頻出して、已む所を知らざる一事を以つて、之を推すを得るではないか。然らば地租輕減の如き、偶々土地以外に幾多の財力を擁し、又商業的精神の下に、存外時勢の許す限りに於て、小作料を徴收しつゝある地主階級に利益を與へる外に、何等見る可き結果を齎さないものと認められる。自作農は自ら地租を負擔して居るのであるから、其輕減されることは、其れだけ彼等の財嚢を豐かならしめる所以たるを失はないであらうが、自作農の如き本來猫額大の土地を耕作し、農業の外に、之に附隨する雜多の業務に依つて衣食の計を立てゝ居る者である關係上、地租の負擔額の如きも、彼等の收入殊に雜收入を加へたものに比較すれば、些細の金額に過ぎないのであつて、隨つて之を輕減することに依つて、彼等の生活を安易にし、以つて農村の振興に資せしめようとしても其間に大なる効果の奏されることを望み得ないのである。

地租全廢論の價値

玆に於てか一擧に地租を全廢すると云ふ計畫の起るのも、亦偶然でない。地租の輕減が農民の歡心を繋ぐのに効果があるとすれば、其全廢は更に大なる効果を齎す譯であつて、輕減論に執着する憲政會よりも、全廢論を主張する政友會や、革新俱樂部は確に人氣取りに於て上手に出たものと評されるであらう。然しながら私を以つて見れば、今日我國に於て單に地租の輕減に止まらず、其全廢論の生じたのに就ては、事の根本に於て大なる錯誤の存することを認めざるを得ない。即ち我國に於て今日まで全く影を潜めて居つた地租全廢論などが突如として社會の表面に姿を現はすに至つたのは、要するに營業稅全廢論の刺戟を受けた結果に過ぎないのである。最近兩三年來營業稅の全廢は我國商工業者の間に於ける團體運動の一目標に宛てられて居る。事の成否は兎に角として、其運動の旺盛であることは、何人の耳目にも觸れる所であつて、所屬黨派の異同を問はず、苟も商工都市を選擧區とする議員である以上は、必ず營業稅全廢を主張しなければ、議員としての運命を維持する能はざる趣きである。然るに我國在來の租稅制度に於ては、地租と營業稅とは、收益稅の二大綱目として、相對立する地位を占めて居り

前者が農業者の收益を課税目的物とすれば、後者は商工者の收益に負擔を及ぼし、兩税の租税制度に網羅されることに依つて諸種の產業を經營する者は總て其收益に負擔を加へられ、斯くて租税普及の原則に適合するを得るのである。然らば今、其一柱たる營業税に全廢論が起れば、他の一柱たる地租にも全廢論の生ずるのは、當然の道理であつて、營業税全廢運動は確に地租全廢の運動を刺戟したに相違ない。然しながら假に地租の廢止が農村の振興に大なる効果ありとした所で、又、營業税の廢止された後に、獨り地租を存續することが不合理であるとした所で、斯の如く片端しから我國租税制度に於て直接税系統に屬する租税を廢止することは、租税制度の體系を破壞し去る所以であるばかりでなく、制度の基礎を薄弱ならしめるの嫌を免かれない。

更に農村救濟の見地から推して、地租の全廢に幾何の効果の伴ふかを考へなければならぬ。地租の全廢は負擔緩和の點に於て、地租の輕減に勝るものありとしても、地租全廢の半面に於て、地租を地方財源に委讓することの含まれて居る以上は、地方税としての土地課税は從來に比較して、重きを加へざるを得ないであらう。或は政府は地租の地方委讓を機會として、從來國庫から地方政府に付與すると定まつて居つた教育費補助の如きものを削減し、以つて國庫に於ける財源填補の用に充てる手段に出でたならば、地方政府の土地課税に依賴する勢は益々大ならざるを得ないであらう。殊に國庫が國税として地租を全廢したことの行掛りから、更に營業税をも全廢するに至つたならば、斯くて生ずる財源の填補は地方財政に對する補助金の廢止や、行政整理の如きものを以つてして、之を能くするを得ない。斯くて豫て世間に風評される如く、新に一般財產税を賦課することに依つて、其後を善くするが如き政策が行はれるであらうが、果して如何なる結果を生ずるであらうか。財產税は其形態の如何を問はず、隱匿の容易であり、査定の困難である動產に輕くして、正反對の事情に支配される不動產に重いことは、爭ふ可からざる事實に屬し、隨つて不動產の饒多なる地方土地以外に見る可き財產の存しない農村に向つて、財產税の負擔の重きに至ることは、自然の勢と認められざるを得ない。果して然らば農村救濟の目的を達する爲めに、現行の税制を易置することは、却つて農村を苦しめる税法を招致する所以たらざるを得ない、誠に笑止千萬の話であるが、斯る結果の齎されるは、竟畢一國の生產業者として、租税負擔の能力を有する商工業者や、農業者が其れ〴〵團結を設けて、負擔を回避しやうとする錯誤に基くものに外ならないのである。

人氣取り政策は不可なり

私は衆議院に於ける政黨の人氣取りを專門とする政策や、運動には飽き飽きした。其れも何か國民全體の利益に一致する經綸の緘められるような計畫であれば、同じ人氣取りにしても讃稱を惜まざる譯であるが、我國に於ける人氣取り政策は自ら之と型を異にし單に選擧人又は選擧人中の有力者を目標とするものである。而して制限選擧の行はれる、我國に於ては其選擧人なるものは、國民中の一小部分に過ぎない。即ち大正九年度の統計に據れば、營業税の納税人員は個人に於て六十八萬七千八百九十六人であり、法人に於て二萬六千四百二十九人であり地租の納税人員は一千四百十二萬九千五百六十人である。地租の納税人員の多いことは、自ら我國に於て土地所有權が廣く多數の人民に分布せられて居ることを立證する事實とも爲るが、納税額別人員に就て、年額三圓以上の地租納税者を擧げれば、三百八十五萬七百六十四人に止まる。衆議院に籍を有する政黨員の如きは、要するに此數百萬人にも足らざる一部國民に私するように税法の改正を行ひ、斯くて自己の權勢を選擧區內に張らうとするものに外ならない。然も地租や營業税の地方に委讓された曉に、國税として納税の消滅した代りに、地方税としては餘程頭く地方民に負擔を加へる一方に、國税に生じた缺陷を塡める爲めに、新に設けられた財産税なり、其他の租税なりが地方納税者殊に土地所有者に對する重荷と爲るとすれば、地租の廢止若しくは地租の地方委讓に依つて、何處に農村振興の効果を擧げ得るであらうか、疑なきを得ない。政府が中央地方兩方面の財政に充分なる緊縮を施し、地租營業税の委讓より中央財政に生ずる缺陷は行政整理に依る經費の節約を以つて、其財源に充てること、地租營業税を委讓された地方財政に於ても亦現在の附加税以上に、地租營業税の收入に依賴しないことゝ云ふ二個の保障の設けられない限り、財政上から考へても、農村振興上から見ても、空漠たる税制改正論の如きは、遂に何等の効果をも呈するに至らないのである。一場の人氣取りに墮した税法整理や、農村救濟に關する議論の信賴す可からざることは、自ら明瞭と爲るであらう。

眞實の農村救濟

故に今日農業をして其疲弊した狀態から脫せしめようとするには斯る人氣取りの政策や、効果の疑はしい議論は總て之を一排し、疲弊の由つて生ずるに至つた根本の原因に遡つて、施設する所なければならぬ。國家の威力を以つて、物價の高低を支

配することが正しいかどうかと云ふ問題に對しては、私は經濟上の働きの自然に、又正常に動きつゝある場合には、萬般物資の價格の如きは自由競爭、自由移動の法則に任せて、其正常點に就かしめることを可なりとする考を持つ者である。然しながら我國の米價に就ては、之を如何にするかと云ふ實際問題に爲ると、私は以上の法則に對して除外例の存することを認めざるを得ない。即ち第一我國の米には國內に於ける特殊の國民的需要を存し何としても或る數量の米は供給されなければならない一方に、第二實際の供給量が少しでも需要に超過したならば、其過剩額に屬する米を處分することに就て、大なる困難に接せざるを得ない。即ち我國の米價は米其ものゝ內國に於ける數量を增加するに就て、外國に供給を仰ぐことが出來ず、又其過剩を制するに就て、外國に輸出する自由を缺いて居ると云ふ特殊の關係から、極めて些細なる產額の過不足に依り、又米に對する需要の伸縮不自在である爲めに、大なる程度の高低を生ぜざるを得ない。然も其高低は都會の消費者か、農村の生產者かの孰れをして、重大なる利害關係の分岐する所に立たしめ、或る時には都會の消費者に生活難を加へ、又或る時には農村の生產者に生業放棄の已むを得ざる感を懷かせるとしたならば、國家自ら社會生活の秩序を維持する爲めに、米價の安定を謀らなければならぬ道理である。往年制定された米穀法の如きものは、米價に一時的安定を得るに過ぎず、隨つて大に信頼するに足らないが、其れにしても政府が適當の機會を捉へて、之を運用し、以つて其實績を擧げたかと云へば、必ずしもさうでもない。而して更に根本的に米價の安定を謀る施設に至つては、今日まで一の見る可きものあるを知らない、斯の如くして農村が米價下落の爲めに、疲弊するのは、當然の事實と見る可きである。若し夫れ農家の經營する米作以外の事業が不振であつて、農家の經濟に打擊を及ぼし、其結果として農村の疲弊を惹起したとすれば、其挽回策は之を一般商工業に於ける景氣の恢復に求めなければならぬ。然も政府には此點に就て、幾何の計畫かあるであらうか。政府自ら經費を緊縮して、不生產的消費を愼しみ、民間にも其風を及ぼして、斯くて生產資本の供給を潤澤にし以つて金利步合を低廉にし、又信用取引を圓滑ならしめるが如きは、不景氣に對する政策として最も必要なるものであつて、萬人の間に異論なかる可き所であるのに、政府は其一だも實行しない、十四億圓臺の歲計が大正十二年度に於て十三億圓臺と爲るのが果して經費の緊縮であるか、大正十二年度から減債基金に四千二百萬圓の元金償還高の繰入れられたことが果して信用復興の手段であるか、政府は然りと答へるかも知れないが、私

は到底之を信ずるを得ないのであつて、政府の景氣恢復策は空虛に等しいと評するの外なく、其空虛である間は、都會の不景氣である如くに農村も亦不景氣の打擊から脫出するを得ないのである。

斯の如く論じ來れば、今日の農村疲弊は既往數年間に亘つて原高橋兩內閣が經濟的秕政を敢てしたことに負う所の少なからざる所以を見出すに苦しまないであらう。即ち兩內閣が殊更に投機熱を煽揚して、外形上に經濟社會の好景氣を作爲したことは、一般の物價を騰貴せしめた上に、絲價や米價にも亦急劇の騰貴を來さしめ、又地方の農家をして不知不識の間に、株式投機熱に感染するに至らしめた事實の爭ふ可からざるものがある。而して今日の農村疲弊は當時の反動として、生じ來つたものと見る可きであり、好景氣の利益は煙の如く、霧の如くに消失して、反動に伴う損失ばかりが地方農家の頭上に殘つたとも云へる。政友會が今期議會に農村振興に關する議案を提出したのは、近き將來に來る可き總選擧に臨んで、地方民の歡心を繫ぐ策略に出たものであらうが、一方から見れば往年所謂我黨內閣の秕政から出て來た惡結果に對する善後策とも思はれる。唯既往の失策には一言も觸れず、今日農村を救濟することを以つて、自家の一大功名でゝもあるが如くに吹聽する所に現代の職業的政治家の唾棄す可き心術を見出すのである。

米價引上以外の救濟策

或は政府が米價に對して全然放任主義に出でたとしても、一般物價に對しては、特に嚴重なる調節策を講じ、米價の下落した如くに、一般物價を下落させ、兩者の間に適當なる調和を保たしめたならば、農村の疲弊は或る程度まで緩和されたであらう。米價獨り他の諸物價に先んじて下落し、殊に下落の程度の强かつたことは、今日の農村疲弊を生ずるに至つた有力なる原因である以上は、今日に於ても政府にして眞に農村疲弊の影響を緩和する意圖ある以上は、米價其ものを騰貴せしめるか、一般物價を下落せしめるか、二途の一に出でることを以つて、最も當を得た處置とする。此點に於て何等の對策を持たない政府の存在するこそ、農村問題に就て、大なる累であつて、此問題の解決を妨げることは、人氣取り專門の農村救濟策に比較して讓る所あるを知らないのである。

固より農村の救濟には米價の引上げのみを以つて、主たる政策とす可きものではない、又餘りに此一事に重きを置いたならば、他の方面殊に都會住民の利害を蹂躙し去るの虞れを生ずる。玆に於てか如何にして農村が勞働力の不足から受ける困難を緩

和す可きものであるかと云ふ問題を生ずる。勞働力が農村に於て幾ら不足したとした所で、都會に於て何年かに亘る勞働生活を過した者を歸農させる事は實際に不可能であり、左ればと云つて、一部の人士の唱へる如く農村に行はれる娯樂を繁多にし、斯くて青年の足留め策に充てようとすることも、亦望甚だ少ない。徵兵制度や、此制度の下に、農村の青年をして大小都會に於て、軍隊生活を送らしめることは、彼等に歸農の念を失はせる原因と爲つて居るではないか、紡績事業や製絲事業の如き多數の女工を必要とする工業が或る所に起り、農村の兒女を雇傭して都會の工場地に吸引することゝ爲れば、地方青年にして農村に於て農業に從事して居つては、何年を經ても、適當の配偶者を求めることを得ないと稱されるではないか。隨つて或る地方に於ては、先づ農村に女子が減り、斯くて青年をして配偶者選擇の必要上、都會に赴かしめるの趣きすらなしとしない。斯る場合に青年の歸農に依つて、農業勞働者の供給を得ようとするが如きは到底望み難しと考へられる。勞働力を求める代りに、勞働省約の設備を講ずることが今後の農村に重要なる關係を持つ所以であつて、機械道具の完全なるものを利用するとか、種子肥料を改良するとか、技術上の事項も實際問題に上るであらうし、又農業者に向つて、利子の低廉であり期限の長き資金を供給する必要も亦主張されなければならぬ。

我國の農村が遠き將來に於て、如何なる運命に遭遇するかは今日之を論斷する限りでない、唯今日現實の問題として考へれば、農村は我國に於て比較的多數の人口の生を繫ぐ所であり、如何なる神社佛閣も如何なる大都會の商店も農村の住民の懐工合に依つて、前者は賽錢の高を後者は賣上金高を左右される事情であり、農村と都會との間に流れる景氣不景氣の河は常に相通じて居るものである以上は、我國の現在の如き、農村を何時までも不振の儘に置いて、之を顧みない。斯くて農村をして再起の力を失はしめるが如きは、經濟政策として、大なる過誤を演出するものと云はざるを得ない。私が今、人氣取り專門の、而して効果の疑はしい人氣取り農村救濟策を排して、他に正風を運らさんとする所以である。

ヨツフエ來朝と對露政策

法學博士 米田實

一

在東洋の露國外交使節ヨツフエ氏が、我が前外相、東京市長後藤新平子の招待に依つて日本に來遊したことは、時節柄大分世間の評論を惹起し、平素外交問題を雲煙視して居る連中まで至深の興味を感じ、種々の想像を逞うして喜んで居る有樣である、たとへば、後藤子は如何なる考へで彼を招待した乎、外務當局は此招待につき如何なる態度である乎、彼の來朝の結果日露關係に何等かの影響があるであらう乎と言ふやうな諸點が各方面に話題にせられて居ることを拒むを得無い、然らば此等問題の眞相は那邊に在るかと言ふに、人に依つて見解を異にするは止むを得ないが、予の眼に映ずるところでは、別段に深い意味が此招待に含まれて居るとは考へ無いのである、若しソウ考へた人があつたとすれば、是れは或連中を買被つたもの、エラク見過ぎたものであらう、蓋し後藤子は山氣も相當にあり、政治的キヤピタルを造ることも相當に好きな人ではあるが、今日の如く保守分子が樞密院、貴族院に頑張つて「過激派嫌い」を標榜して居る折柄、官僚畑出身の彼が思ひ切つた親露策を抱き、今日直ちに長い關係の老人分子と斷つて、青年民衆間に其地盤を移す決心をして迄も、自由主義者、平和主義者の友たらんとするかは、頗る疑はしい、子の招待にはヨツフエ氏が病中、英領に靜養せんとして拒まれ、困つて居るので、「ソレならば日本にでも來たら」と言ふ例の後藤流の義俠心も加はつて居らうし、それから日露外交面白からず行詰つて居る折柄ヨツフエの來朝は何かの形勢展開に貢獻するかも知れぬと言ふ極めて朧ろ氣な考へもあつたであらう、併し今日の處、具體的に或る計畫を持して居たとは見られぬのである、次ぎに外務省はと言ふに、其態度は最初から明晰で無い、否な或時期には來朝に不贊成でないとの感を與へ或時期には來朝せぬ方が善いとの暗示を與へたとヨツフエ側などで考へては居無いかとさへ思はる、

殊に差當りての處多年形式的外交に養はれ、外交官の慣習、正式外交談判の經路などに通ずるを以て外交官の本務と思ひ、正兵を行ることを知つて奇兵を動かすことを知ら無い我が外務當局に執つては、協議の相手としてヨッフエ氏などは大禁物であらねばならぬ、何となれば出來勞農露國の外交官は、矢張り之も革命の產物であり、帝政時代外交官出身の外相チチエリンさへも、昔しの外交官が到底口にせず、行ひそうにもないことを口にし、行つて憚らないのであるが、就中ヨッフエ氏は此點に於て最も極端に奔つて居る、常に正兵よりも奇兵を用ゆる過激派外交官中でも、彼は奇兵一點張りの男である。或人は彼を「直覺で働く」と評し或人は「材料が不十分なのに結論に飛んで行く」と評し或人は詐略縱横と罵つて居る。その當否は別としても、兎に角平凡な、所謂紳士的な、形式尊重的な、牛歩遲々的な外交に馴れ、又た馴らされて居る我が外交官に執つては、彼は洵に苦手である、就中彼の機略は已に昨秋長春會議に於て我が燕尾服的全權に十分に經驗せられたのである、されば、我が當局が同じく露國と協議するとしても、その相手として彼を歡迎するかは疑はしい、斯く觀測すると、ヨッフエ氏來朝に依つて、日露交涉の機が切迫せる如く思ふのは、大早計であると言はねばならない。

併し乍ら物には勢ひと言ふとがある。後藤子なる一人、外務省なる一省が大體如何なる態度傾向に在るとしても、日露兩國々民が相互の親交回復通商關係復舊を熱望する事情に在ることは、何人も之を否認することが出來ず、又何人も之を奈何ともすることが出來無い事實である。而して此重大なる事實は「勢ひ」を生まで無くては止まないことを忘却してはならない、之は一人、一省の力丈けではドウともし得るものでない、從つて是迄の處で、ヨッフエ氏來朝が何等具體的計畫に關係が無いとしても今後、如何なる發展を見ぬとも限らぬ。換言すれば、今日未ださしたる發展が無いと言ふとは、今後も之が無いと言ふ保障にはならぬ。よしや正式交涉を一片の靜養的旅客と行ふとは無いとしても、何等かの貢獻を將來になさぬとは言はれぬのである。

是に於て乎、予は此ヨッフエ氏來朝に際し、一言を對露關係問題に加へて置き度いと考ふるものである。

二

然らば卽ち予が此際、我政府及國民に對し、決意を促し度いと考ふるのは、何かと言ふに、其速かに從來の愚拙臆病な態度を捨てゝ、勇往邁進して貰い度いことである、具體的に言ふと我政府も人民も、勞農露國政府承認の覺悟を定めて、日露の新交涉に當つて貰い度いこと則ち是れである。

昨秋長春會議が失敗したのは、何故乎、之には種々の原因もあるが、先づ日本が最初チタ極東共和國丈けを相手にし全露勞農政府を除外して協約せんとし、それが全露政府のチタ政府併合計畫で不可能なことを知つて後も、成る可く此全露政府との協定若くは關係の形式を避けんと企て、所謂承認の如きは、全然之を拒否する方針に出でた爲めでは無かつた乎、兎も角も相手方との協議の成立は希望する所だが、相手方を人並に(或は國並に)認むることは出來ぬと言ふ奇異なる立場で、ドウして自己の希望を先方に容れしむることが出來やう 然らば日本が斯くの如き矛盾的、自家撞着的立場を執つたのは何故である乎、之は二箇の事情に出でたものであらう、それは外でも無い、第一過激思想、勞農政體に對する憂懼、第二、歐洲諸國との協調是れである、此内、先づ第一の分から言ふと、現露國の共產的組織は之と政體も社會組織も餘りに遠い日本の如きに執つては、極めて難有からぬものに違ひ無い、然かも之より來る過激主義傳播の如きは其政治的交際の有無や、軍隊の力やなどで阻止し得らるゝものでは無い、現に日本が之迄勞農露國との交遊を有し無かつたことは、毫も過激思想の入來を妨げ得無かつたでは無い乎、世の中が今日の如く國際的となつた以上、一二國家間の外交關係の存否の如きは、その間の思想交通を阻止し得るものでは無いのである、能く言はるゝ如く思想と戰ふの途は思想を以てするの外無いのである、それとも所謂「政府不承認」に依つて過激派政府を倒壞せしめ得るならば、格別であるが、之が不可能なのは、今更ら喋々を待つ迄も無い、之に反し不承認より生ずる日本の亞細亞經濟的發展上の不利若くは損害が多いのを考へると、差引勘定しても、吾人は日本が徒らに不承認を金科玉條視するの愚なるを思はねばならない、殊に一昨年レニン政府の新經濟政策採用以來、共產主義が緩和せられ或程度の私有財產が認められて、其外國制度に對する脅威を減じ、又た露國内外人企業の阻害も減じたではない乎、第二に承認問題に關する歐洲諸强との協調と言ふことは、我が外交官間に說かるゝ議論だが、是れには一理無いでは無いけれど、能く彼我の地位の差、双方間の影響程度を考ふると、我れは必らずしも此點で彼れの政策に附和し、追隨せねばならぬ理由は無いのである、顧みると、我外交家が追隨せんとする歐洲の對露政策は、失敗に失敗を重ね、略ぼ破產に近いて居ると言ふ歷史を持つて居る、即ち英佛以下歐洲諸强はレニンの過激政府成立の初め、所謂經濟的ボイコット若くは經濟的封鎖(ブロケード)を以て之に當り、之に依つて彼等を瓦解若くは屈服せしめんと圖つたが、それは露國々民を苦しめたけれども、同時

に、反映的に聯合諸國にも經濟的惡影響を生ぜずには置か無かつた、則ち之に依つて歐洲經濟界の混亂を加へたのみで、レニン政府存在の脅威策としては、餘りに「遠卷き」であり、「二階から眼藥」の感があつた、ソコデ今度は一層効力がありさうな所謂軍事的干渉策に力を盡すこととなり、北露及び南露に於て英佛遠征軍の活動若くは反過激派援助を見、過激派退治が試みられた、（而して我日本なども、西伯利でコルチヤツク提督等の援助に加つたのであつた）、然かも之も矢張り失敗したのであつた、已に經濟的封鎖と言ふ攻道具も、武力干渉も失敗すると今度は英國首相ロイドヂョルヂ氏が所謂君子豹變の美をなし、今迄とは反對に對露通商開始、若くは對露妥協の策を樹てたが目下の形勢を概括すると、此新政策が佛蘭西、白耳義等の特殊的事情の爲めに支障を生じて、進退維谷つた苦境に落ちて居ると言つて善いのである。

佛蘭西及び白耳義の特殊的事情とは何かと言ふに、佛蘭西は一八九一年、一八九二年、一八九四年の佛露諸同盟協定の時分から盛んに露西亞に資本を投下して居り、その西伯利經營費までも大分貸附けて居た、白耳義は富國と言ふ程でないが、同國法下に成る會社に外國人の資本も入つて來て、之から露國に投下した資本も少く無いのである、此投資貸附金の關係から、佛白兩國は、昨春ゼノア會議の時にも、其債權の承認と、在露外國人財産の還附とを熱求し、之が爲めロイドヂョルヂ氏の代表する英國及フアクタ氏の代表する伊國の對露妥協策に反對し、遂に同會議潰裂の一因となつたのである、當のロイドヂョルヂが熱心な狂奔も佛伊の反省を促すを得なかつたことは、世人の記する所であらう、然るに我日本はと言ふと、僅々二億圓の對露戰時債權があるのみで、彼の佛蘭西の戰爭以前丈けで、然かも已に判明して居る分丈けで、四十餘億圓に上つて居るものとは同日の談では無い、況んや佛白の如き莫大なる在露の自國市民の財産問題無きに於てをや、次ぎに佛國になると、其歐洲平和策獨逸に對する自國安全策の立場から自己の味方たる波蘭を始めとする一の屏障國線を獨露兩國間に造つて居り、且つ此屏障國線の安全の爲めに、動もすれば之を脅威する勞農露國を敵視せねばならぬ地位に立つて居る、然るに斯くの如き事情は我國には無いのである、我國民中佛國の屏障策に同情するものありや否や、そは各個人の自由であるけれども、而も此故を以て我國が歐洲諸國の事情に自ら殉せねばならぬ理由は孰くにかあらう。

勿論、我國は國際聯盟の一員となつて居り、又た世界平和策の大體、對獨講和條約の履行問題等に於て英佛諸國と協調を保つて居るけれども、その協力には自ら程度がある、而して其程度

を支配する最も有力なものは、恐らくは地理的事情であらう、蓋し英佛の如く相近接せる歐洲の邦國間に於ては、多少利害の差があつても、協同行動が必要である、何となれば、歐洲内の隣近國家間の政策不一致は早速相互間に大影響を生ぜねば止まぬからである、我國は之と異り、遙かに東亞の端に位ひし、その露領との關係も事實上西伯利に過ぎ無い、斯くの如くにして猶ほ異れる事情に起因する歐洲諸國の政策に、我れ自ら追隨し共失敗の影響を分たねばならぬと言ふ理由が孰くに在らう、況んや歐洲諸國も常に日本と協調して行動を執つて居る譯では無い、見よ、一九二一年三月英露通商協定一九二一年十二月伊露通商協定の如き、日本とは何等の聯絡も無く行はれて居るでは無い乎。

三

獨り之のみで無い、予が特に我官民の注意を求め度いと思ふのは、我國の實際政治の事情が、一層對露協定の急速成立を可とする點に外ならないのである。

何を以てか之を言ふ、蓋し日本現在の立場はその經濟的政策上から見て、英佛よりも獨逸に近いものがあるからである、見よ、英國は植民地世界に洽く、原料品其他各物資の供給充分では無い乎、佛蘭西も阿弗利加、亞細亞南洋に領土を有せるに加へ、世界大戰の結果、鐵産地アルサスローレンを獲得し、歐洲大陸の富國となつたのでは無い乎、獨り獨逸は戰敗の結果而も一百二十萬方哩の殖民地を失ひたるのみならず、アルサスローレンを始め普領波蘭やら、上シレシアの石炭産地やらザアル炭鑛を失ひ、爲めに原料品其他重要物資を失つたので、近年之が補足策として、露西亞發展を企て、昨年四月ゼノア會議に際し、ラパロ獨露協約を締結し、互ひに賠償義務を始め兩國通商及經濟的協同の障害物たるものを排除して、對露發展策を決したのである、尙ほ此獨露協約は今春に入つて兩國間に批准交換を終了するに至つたのである、而して此協約は獨露兩外務卿間に締結せられ、相互の承認を意味することは勿論である、翻つて我日本を見ると、獨逸の如き戰敗の影響をこそ受けて居無いが、戰敗せる獨逸に比しても、遙かに原料品に乏しい瘠地である、從つて獨逸が露領歐羅巴方面に經濟的資源を求めねばならぬ如く日本が露領亞細亞に原料品其他物資を仰がねばならぬことは、識者誰か之を看取し得ぬものがあらう。

西伯利を見ると、人口こそ一千一百萬に過ぎぬが面積四百八十八萬方哩、西は低くて穀物を産するが東方は高地で、金、鐵石炭等鑛物に富んで居り、又た森林も多い、日本が缺乏して居るものを十分に供給し得るのは此地である、日本人に一日も早く此方面に於ける經濟的發展の機會を與ふるは、今日の急務で

なくて何であらう、然るに沿海洲諸地の如きチタ極東政府時代に英米人に讓與を得られたとの消息は傳へられたのである、然かも斯くの如き一般問題は姑らく措くとして、樺太問題の處分、その油鑛問題の處分、我が漁業家の發展策から見ても、日露兩國間の國交關係を忽諸視してはならない。

　餘裕が無いから、すべてを說くことは出來ぬ、北部樺太買收の可能や漁業權の確保若くは擴張やらは、差當り說かぬとしても、例の樺太油鑛問題の如き丈けでも、吾人はその至急解決を要することを思ふものである、顧みるに今日の世界的現象の一は列國の石油爭奪戰だと見ても善い、それは世の中が石炭時代から石油時代に移る傾向にあるからである、試みに大國の態度を見よ、先づ英國はと言ふと、夙に波斯の油田事業に投資し、印度に於ても該業を進めて居るが、其產額は二千萬樽見當に過ぎ無い、そこで近來羅馬尼國油田の經營策を講じ又た有望視せらるゝメソポタミアの油鑛事業に努力し、其他世界各方面に發展せんと力めて居る、思ふに今日英國の人頭石油消費額は米國のそれに比すると、六分一にしか達して居らぬ位ゐだけれども其產額が少いので、現に一箇年三百三十六萬八千六百噸（價格約六億七千萬圓）を外國から輸入して居りその內六割は米國から輸入せられて居る、斯くの如く外國の供給に依賴せねばならぬと言ふことは（殊に英國目下の海軍は約九割まで石油を燃料とするに至つたのであるから）、ジョン、ブルの到底耐え難しとする所で、爲めにそがメソポタミア、波斯、墨西哥及海外で石油作戰に汲々たることも、容易に首肯せらるゝ所である、又た米國はと言ふと、世界で目下最も多く石油を產し又た多くの石油を消費する國である、一昨一九二一年に於ける同國內石油の產額は四億六千九百六十三萬九千樽（油井所在地に於ける價格約十五億六百六十萬圓）の多きに達し之を前年に比すると二千六百二十三萬樽の增加を示した、併しそれでも米國の石油消費額は五億二千五百四十萬七千樽に上り、國內の產額より多きこと五千五百七十六萬八千樽であつた、是れ米人人頭石油消費額が世界人頭消費額の十六倍に上るからであらう、而して米國は如何にして此差額を塡補したかと言ふに、墨西哥等より一億二千五百萬噸の石油を輸入し、其一部を以て自國の不足を補ひ、他の一部を更らに海外に輸出した譯となるである、此事情は已に米國をして海外石油事業經營に熱心せしむる所以の一であるが更らに米人をして一層同事業に熱心を加へしめつゝあるのは、最近米國政府地質調査機關の研究で、米國の油源は今日の程度で消費せらるゝと、二十年にして枯渇すと宣言せられた爲めである（American Association of Petroleum Geologists 及び

United States Geological Survey の聯合報告)、玆に於て平米國は或は石油問題を以て墨西哥大統領オブレゴン氏承認決定の條件となしたり、或は英國メソポミア委任統治に抗爭を繼續したりして居るのであり、又た米國會社は大に露領亞細亞の利權に注目して居るのである、彼のスタンダード石油會社、テキサス石油會社、メキシコ石油會社(ダホニー氏一派のもの)、太西洋石油會社と相並んでメキシコ石油事業で聲名を馳せて居るシンクレヤ、コンソリデーテツト、コンパニーが先きに一度びチタ極東政府のユーリン氏と約して北樺太の石油事業利權を獲得し昨年十二月チタ政府の全露政府合併後更らに全露政府と右利權につきて米國の露政府承認を條件としてその約定を進めたとの説あるも、吾人はその不自然の徑路なるを指摘することは出來無いのである、而して此石油爭奪戰には佛國も加はつて居る、その顯著な例は一九二〇年メソポタミアに關して英國に對し強硬態度を執り遂に英政府をして同地石油二割五分の對佛供給、若くは會社組織の場合に於ける佛國の二割五分參加權を保證せしめたことであらう。

予は今樺太油鑛に關しては多くを言ひ度くない、併しそが兎も角も有望と信ぜられることと、我日本が他の強國と同じく石油を需要する多くしてその供給少きを想ふときは、日本に決して石油爭奪戰の範圍外に立ち得るものでは無い、從つて樺太に關しても、シンクレーア其他の問題が未だ確定せず、從つて日本に面倒を及ぼす少き時機に於て、露國との間に本問題の解決を圖るは、策の得たものであらう。

殊に問題は石油丈けでは無い、樺太丈けでも無い、我が對亞細亞大陸經濟的活動の弘き重大な要項が玆に關はるを考へると我政府が從來の狹量を捨て〻「承認」を避けざる決心を以て、日露交渉を促進するとは、今日の急務たるを疑ふを得無いのである。

(備考、昨年十一月十七日チタ發の全露、極東政府合併の報道が紐育ツリビユーンに掲載せらる〻と、同紙記者は極東政府がグレヴス將軍(西伯利米軍司令官たりし人)、ウツド將軍(比島總督)、が關係を有する米人シンヂケートにコンセンションを與へて居ることを説き、又た米國々務省でもチタ政府承認の意があつたが、然かも勞農露國政府を承認するかは問題であると説き、全露勞農政府が右コンセンションを承認せぬこととなると、右シンヂケート等が打撃を蒙る可きことを説いた、米人の事業計畫は決して少く無いことを記憶して善い)

四

以上で予が「承認問題」を回避せずして以て日露國交囘復を促進せよとの意見は之を明かにしたと考へる。

併し予とて、無條件に「承認を與へよ」と言ふので無いとは勿論である、要は露國の對日本態度に依ることであらう、唯だ不承認を基礎に置いて而も承認せぬ積りの相手と協定しようと言ふ愚拙の態度は、今後再びす可からずと考ふるものである。(終)

警視廳論

手綱で引ッ張られる國民

高島米峰

『國民の自覺』、實に古い言葉だ。そう叫び出されてから何十年、言葉の方には、已に黴が生えて居るにも拘らず、國民の頭には、まだ謂はゆる自覺の芽生へさへ見つからない。婦人も目覺めた、勞働者も目覺めた、小作人も目覺めた、月給取りも目覺めた、華族でさへ目覺めた、イヤ、それどころではない、藝者も目覺めて檢番と戰ひ、角力取も目覺めて協會と戰ひ、とう〱、坊主までが目覺めて、外務省と戰つたと、數へ來れば、社會の各階級が、悉く目覺めたりげに見えはするが、その目覺め方は、恰も、夜中に、地震か火事かで、熟睡から、出し拔けに叩き起されたと時と同じ目覺め方で、實は見當も方角もつかずに、ぴよこんと起き上り、たゞうろ〱としてゐる周章狼狽さであつて、出るだけの欠伸を出し、伸びるだけの手足を伸ばし、眼を擦つたり、腹を撫でたり、十二分に起床の準備を整へて、然る後に徐ろに起き出た、眞の目覺め方とは、とても比較になる譯のものではない。從つて、自覺自覺と叫びながらも、その爲すところは、一向に自主的でなく、獨立的でなく、常に手綱を取つて引ッ張つて貰ふか、さもなくば、腰へ手をかけて押して貰ふかしないと、一人歩きが危いといふ狀態。勞働爭議にしたところで、一種のブローカーのために、玩弄せられること多く、謂はゆる婦人運動にしたところで、九十パーゼント以上の、男子の助力あるにあらずむば、演說會一つ開くことが出來ず、華族の自覺は、せい〱のところ、芝居をやるか、さもなければ、勞働の體驗とか稱して、年に一度か二度位、紺の手袋を穿めて、公園の草でも取らうといふ體たらく。こんなこと

にまで、ヤレ自覺ソレ自覺と、そんなに度々呼び出されては、いくら呑氣な自覺でも、大概愛想をつかして仕舞はう。

自治制が布かれてから、已に三十有餘年。日本の國民は、どれだけ、自治の實績を擧げて居るか。イヤ、自治團體といふものを見渡して、どこに、自治の精神を、遺憾なく發揮して居る市町村があるか。日本第一と稱し、模範的都市と稱して居る東京市さへ、市民自身が、どれだけ市民自身のために、考慮し、計劃し、實行して居るか。道路と言へば、雨さへ降れば、泥濘脛を沒し、稻を作るに足り、蓮を植うるに足る程の慘狀、水はと言へば、上水は、夏になる度毎に不足を告げ、下水は、夕立のある度毎に街路に氾濫する。電燈は、屢々無斷で消えるが、誰れも、損害を賠償して呉れるものなく、瓦斯の出が惡くて、滿足な飯が出來ないところから、胃腸を惡くしても、何處からも、藥代を支辨してやらうといふものも出て來ない。國民の義務として、强要せられて居る小學教育さへ、一部教授をやらない學校は殆ど無く、自分勝手だと言はれゝばそれまでだが、中等教育を受けさせやうといふには、入學難で、親も子も、露命を縮めなければならない。イヤそれどころではない、强盜だ人殺しだと、もの凄い事件が、毎日のやうに行はれて居るのに、警察署の、犯人逮捕が悠長なので、市民は、生命財産の安定をさへ得られない。數へ來れば、市民が、それ自身のために、どれほど、自治機關を、合理的に運用して居るのか、見當がつかない。否。一體、自治機關を、誰のものだと思つて居るのかさへ、わからないではないか。自分の代表者として、市政に參加せしめる議員の選び方さへ、わからずに居るものが多い結果は、市會を、道德的に全滅させてしまつたではないか、何といふ情けないことだ。

それといふのも、畢竟、封建の餘弊で、依らしむべし知らしむべからずと訓練せられて來た國民の頭が、依然として舊態を改めないで、垣を手として這ひ上つた瓢簞の如く、徹頭徹尾、依頼的他律的で、事毎に「お上」から世話を燒いて貰はなければ、寸步も動き出せないといふ意氣地なさが、因をなして居ると見なければならない。未成年者禁酒法案といふやうな、法律をこしらへて貰はなければ、可愛い自分の子供等に、毒を飲ませないといふことさへ、實行が出來ないといふのも、誠に笑ふに足るべく、法律で取締られるから、餘儀なく飲まずに居るといふのも、大に笑ふべきである。左側通行も「お上」の命令、安全第一も「お上」のお世話、尻を捲くるな、股出すな、無暗にそこらへ唾吐くな、大小便は便所でせいと、一から十まで、痒いところへ手の屆く程にして貰つて、それでも尚且つ、人通

りの少い横町には、江戸時代の名物として數へられて居る、伊勢屋稻荷に犬の糞、その犬の糞なら我慢もするが、堂々たる人間の犬の糞が、横はつて居るのを、發見することが少くないのは、一體どうしたものだ、善いことも『お上』の命令がなければ行はない、惡いことでも『お上』に取締られるまではやめないといふ、絶對他律主義で、善を行ふにも卑怯、惡を抑へるにも勇敢でないのは、即ち、謂はゆる自覺が、眞物でない證據の一つだ。

下さるものなら、夏もお小袖と、貰ふことだけは、能く心得て居るが、自分の力で獲得するといふ、積極的な心持に至つては、全然缺如して居るかに疑はれる、尤も、他の國では、血と交換した憲法も、日本では『お上』から、無條件で國民に與へられ、參政權の如き、先驅者とも稱すべき少數の人々の中には、血を流したものもないではないが、多數の國民は、納税に伴ふ必然の報償として、求めもしないのに、いつともなく與へられ、それさへ、自分のものだか、人のものだか、よくは辨別の出來ないものが大多數であるために、選擧の度毎に、これを賣買したり、贈與したりすることが、公然の秘密として行はれ、今日此頃になつても、まだ、普通選擧が行はれないといふ程度では、國民の政治的自覺など丶言つたところで、てんで問題にならないではないか。又、議員といふ連中の行動云爲は、國家のためといふのでもなく、國民のためといふのでもなく、畢竟次ぎの選擧に、再選せられたいがために、自己の存在を、有權者に知らしめるといふ、宣傳以外に、何があるかと言ひたい位だ。これを實業に見ても、教育に見ても、宗教に見ても、どこに眞の自覺が生きて居るか、どこに自律的精神が動いて居るのか。

活動寫眞を一つ見せるにさへ、檢閲といふ關門を通過させなければ、承知しないし、芝居を演らせるにも、脚本に干渉が天降る。それも、安寧秩序とやらを保たせるといふ、『お上』の思召しの程を、有り難いと思はない譯ではないが、同じ『お上』の御檢閲が、警視廳を通過しても、他の府縣廳を必ず通過すると限らない。無自覺の國民は、警視廳でも、他の府縣廳でも、同じ『お上』と考へて居るので、さうした矛盾に出會ふと、例の他律で、右へヒョロ／＼左へヒョロ／＼、一體、俺は誰なのだと、自分で自分がわからなくなるのは、自業自得と言へばそれまでだが、可なり氣の毒なものである。それも、警視廳のお役人様が、全能の神にてもましますならば兎も角、イヤ、謂はゆる全能の神様さへ、露西亞に於ては、レーニンを筆頭として、數千の人間に、裁判せられたとさへ言ふ時代に、警視廳の

お役人が、繪畫でも、彫刻でも、劇でも、音樂でも、專門家でさへ、輕々しくは、是非の評を下し難い藝術といふ特殊の世界へ、サーベルをガチヤつかせて、泥靴のまゝ踏み込んで來るといふのは、如何にお役目とは申しながら、その大膽さに、驚かざるを得ないと同時に、そうした方面にまで、謂はゆる『お上』の御威光を被るにあらざるよりんば、藝術の觀賞をさへなし得ないといふ程、依頼的な他律的な國民を、愍殺せずには居られないではないか。

湯錢が高い、僕等のやうに、自家用据風呂を有する程の餘裕のないもの、おまけに、貧乏人の子澤山とあつて、可なり多くの家族を抱へて居るものには、湯錢の高いのは、相應に大きな問題だ。諸物價の騰貴につれて、何といふことなしに値上げした湯錢は、昨年、大人五錢となりはなつたが、小人の方で埋め合はされて、結局、子供の多い僕等の家庭では、實際、湯錢は値上げされたことになつて居る。かゝる、市民大多數の頭上に振りかゝつて居る大問題に對し、警視廳なるものが、如何なる所置を取つたかといふに、何等その後の所置について、聞くところが無いばかりでなく、最近、市内一部の湯屋仲間が、再び値上げを宣言して、警視廳令を跌躙しやうとさへして居る。警視廳は、一體どうしやうといふのであるか、廳令違犯として、所罰するといふやうなことで、かゝる問題が、根本的に解決せられる譯のものでもなく、又營業停止を命ずれば、湯屋も困らうが、それより先きに、まづ僕等が困る。湯屋連中に、自制力さへあれば、警視廳といふ『お上』のお世話なんかを受けずとも、湯屋自身自由の意志の發動に任せて、値段を協定するなり、自由競爭でやるなり、どちらにしても、圓融無碍であるべきである。然るに『お上』は取締らなければ何をするかわからぬと心配し、湯屋は、取締られなければ、止度もなく暴利を貪らうとするといふのでは、どうしても『お上』のなされ方を批議する前に、まづ、市民自身、自らの立場に、覺醒一番し來らなければならないといふことになつてしまふ。

自働車が、泥をはねかけて走るといふことは、今や、東京名物の一つとして、數へられるやうになつてしまつた。そのために、一張羅を着飾つた婦人が、サツと浴せられた泥の灌頂、泣いても泣き切れない目に逢はされるものが、どの位あるか知れない。尙も、自働車にでも乘らうといふ程の人間、……と言つても、囚人も乘れば、賣淫婦も乘りはするが、……東京の惡道路を疾驅する時、他人が、どれだけ迷惑するか位は、考へられそうなものではないか、考へて居ながら、何等、さうした他人の迷惑に、同情するといふ意志が、形に顯はれて來ないとい

ふところに、利己的個人主義の病弊が、根ざして居るのである し、又ここに、他律的依頼的な根性が、纏つて居るのでもあ る。そこで、警視廳では、こいつ取締らなければといふので、泥除けを裝置させることにしたのである。これしきのことに、尙『お上』の御手數を煩はすさへあるに、そうした『お上』の命令を受けてやつと取りつけた泥除けなるものが、果して、泥除けの效果を全うして居るかどうかといふに、全然效果を持來さないばかりでなく、中には、車と共に、勇ましく廻轉して居るものさへ、決して少くはない。此くの如きは、泥除けにあらずして泥撒きである。然らずむば、卽ち、罰金除けである。警視廳も、亦、苟も、一度命令を發した以上、それがどの位有效に働いて居るかといふことに、注意しないといふのは、自ら法の尊嚴を冒瀆するものではあるまいか。泥除けが泥除けの用を爲さないで、纔に罰金除けになつて居るといふが如きは、決して、發令の精神ではなかるべき筈だ。折角發令した以上、それが、單に一片の形式にとゞまらず、實際有功なものにしなくてはならないではないか。完全泥除けの懸賞募集など、遠慮なくやつて欲しい。そんな費用がどこにあるか、などゝは言はせない、機密費を可決させるために、府會議員を招待して、一夕の宴を張るにさへ、數千金を惜しまない警視廳が、泥除け懸賞募集の費用位、もとより問題ではあるまい。

今度は相撲の爭議、……といふも一トしきり騷然たるが、年中行事、判で押したやうに、繰り返される、力士對協會の紛爭、今年は、聊か念が入り過ぎはしたが、警視總監の御出馬に依つて、始めてこれが解決したといへば、誠に總監の男が上つた譯だが、それを悪いといふのではない、警視廳は警視廳の權能を以て、そういふ場所へ飛込むのだいふならば、何故に、工場監督の立場から、工場勞働者の爭議に對し、總監自ら出馬して、夕飯でも食ひながら、和解さすべく骨を折らないのか。他の場合は、大抵、下ッ端の警部位を遣はして、高壓的に、弱いものを抑へ捲らうとして居ながら、相撲爭議だけに、あゝした男前を見せたといふのを妙だと思ふ。尤も、會食しながら懇談するといふのは、たゞ相撲爭議の時ばかりでなく、芝居の時間短縮、連中の廢止といふやうなことをきめる時にも、この手段を用いられたのだが、そこは例の他律的依頼的の國民、特にまだ、封建時代の遺物たる、官尊民卑的思想の抜けきれない連中の事とて、總監閣下と席を同じうするの光榮に面喰つて、さッさと話が纏まつたといふのなら、まづ以て天下太平といふの外はない。たゞ、そうした天下太平が、工場勞働者や、民衆運動の場合だけは、除外されるといふのを、奇怪に思ふのである。

しかし、つら〳〵案ずるに、僕等の、最も警視廳に期待し信頼する點は、實に、僕等の生命財産を、安全に保護して貰ふといふにあるのだ。大火事だといふ時に、即時駈けつけて貰ふこと、泥棒が這入つたといふ時に、すぐさま取押へて貰ふこと、殊に強盗殺人などいふ物騒な犯人は、一瞬時も早く逮捕して、僕等をして、枕を高くして眠らせて欲しいのである。』曾て、僕の家へ泥棒の這入つたことがあつた、早速警察署へ電話をかけた、警察署の曰はく『今、當直の一人が巡廻中で、手代りが無いから出かけられない、歸つて來たら行つてやる』だとさ。それでは、お待ち申して居りますと、軒下かなんかに、泥棒が、巡査の來るのを待つて居るといふ譯のものではない位は、警察署ともあらうもの、、知らぬ譯はあるまい、それから凡そ一時間許を經て、一人の巡査が、捕繩をぶら下げて來て呉れたが、僕は癪の虫が込み上げて來て『まさか、僕を縛るつもりで來たのではあるまい』と、怒鳴らざるを得なかつた。笑いごとではない、最近の殺人犯者や強盗で、まだつかまらないのが、幾人もあるではないか。力士や役者と會食するのを、悪いといふのではない、それほど、人民の幸福を念として呉れる餘裕があるならば、まづ何より、人民の生命財産の安定のために、努力して貰ひたいといふのだ。それにつけても、市民は、も少し、自分の生命財産の貴重なものだといふことに目覺め、警視廳を鞭韃策勵して、自己の幸福のために、積極的に、貢献せしめるやうにしなくてはならない。いつまでも、太陽が、吾等の世界を周轉して居るのだと考へ、いつまでも、神が吾等を作つたものだと信じ、いつまでも法は吾等に義務だけを強ひるものだと思つて居て、たゞ『お上』から取締られ、飽くまで消極的に生きさせられて居るのでは、誠に生き甲斐のない生き方と言はなければならない。自主獨立自ら律し自ら治め、餘り多く『お上』に御厄介をかけないでこそ、始めて『自覺せる國民』と言へるのではないか。(大正十一年紀元節の夜)

警視廳の活動範圍を成るべく消極的に

——主として人民の安寧及び幸福保障に制限せよ——

永井柳太郎

警視廳の權限が如何なる程度のものかは官制上でも明白でな

いが、殊に實際上に於て曖昧である。官制に依ると「警視廳ハ內務大臣の指揮監督ヲ受ケ東京府下ノ警察消防及ビ特ニ內務大臣ノ指揮スル衛生事務並ビ工場法施行ニ關スル事務ヲ管理シ、各省ノ主務ニ關スル事務ニ就イテハ各省大臣ノ指揮監督ヲ受ク」となつて居る。之れ丈けでは一見して其權限が左程廣くも思はれぬが、併しよく考へて見ると、此規定は警視總監の權限を說明して居るやうで實は說明して居らぬ。それは「東京府下の警察」といふ文字の內容が極めて漠然として居るからである。現に同じ官制の中に警視廳の事務分掌規定があるが、それを見ると「警視廳ハ警務部、刑事部、保安部、衛生部、消防部」に分れて居るが、其中の保安部の權限が實に漠然として居て、建築警察とか、風俗警察とか、營業警察とか、交通警察とかいふ風に極めて廣大なる範圍に其の警察權を行使し得るやうになつて居る。全體建築警察とか、風俗警察とか、營業警察とかいふ事は何を意味するかと云ふ事が明白でないが、兎に角建築や、風俗や、營業や、交通や、之れ等の廣汎なる人間の活動に對して監督干涉の權利があるといふ風に解せらるゝ。だから現在の官制に依ると警視廳は東京府下に於ける人民の生活の殆んど全般に對して監督且干涉し得るやうに思はるゝが、左樣に解釋する事の是非は別問題として、事實に於て其程度に廣汎なる權力を振ふて居る。

歷史家の云ふ所に依ると英國で初めてロンドンに警察を置いたのはエドワード一世の時代で、其目的は人民の安寧及び幸福を維持するといふ事に在つたと傳へらるゝ。併しそれが時代の經過と共に當初の目的に反するが如き意味に屢々逆用せられたので、今日はロンドンの警察はロンドン市民に屬し、市民の選出したる委員に依つて警察權を行使して居る。佛蘭西で初めてパリに警察を置いたのがルイ十四世であるが、ルイ十四世自身も專ら之れを探偵政治の用に供し、其後ナポレオン一世に至つては大に警察權を濫用して專制政治を行ふた。從つてパリの警察は其後大に權限を縮少されたのであるが、獨り獨逸の警察は非常なる、廣汎なる權限を有つて居て恰も日本の警視廳の如き多方面の監督及び干涉をする。恐らく東京の警視廳其物が獨逸の警察を模倣したものであるかも知れぬ。

だから現在の官制に照らして見ても、警視廳が或は相撲の紛議の仲裁に從事し、或は芝居の連中廢止とか、時間短縮とか云ふやうな命令を出すとか、又は浴場の湯錢問題に干涉するとかいふ事は強ち違法でないが、併し警視廳をして斯くの如き權限を有せしむる事が好いか惡いかといふ事は別の問題である。全體相撲協會の紛議でも、芝居の時間問題でも、又湯屋の湯錢問

題でも、其當業者自身の間に於て解決し得ないといふ事は決して日本の民衆の名譽でない。譬えば相撲の紛議にしても協會と力士と双方から委員を選出し、其委員のみの協議に依るか、或は好角家の間から更に調停者を求めてそれとの協議に依るか、孰れかの方法に依つて自己の問題は自己で解決するといふ自治心がなくてはならぬ筈である。湯屋の湯錢問題にしても湯屋の損益に關する最も正確なる理解を有する者は湯屋自身であるから、其最も密接なる利害關係を有する者の協議に依つて決定し得ない道理はない。芝居の問題に就いても又同樣である。それを自己の問題を自己で解決し得ないで警視廳の仲裁を俟つといふが如きは官尊民卑の思想に依然囚はれたる時代錯誤であつて、民衆自ら民衆の自治の理想を蹂躙するものと云はねばならぬ。たゞ民衆自身が自己の問題を自己で解決する事が出來ぬとすれば警視廳が其監督權に基いて仲裁又は調停の勞を執るといふ事も亦止むを得ないであらう。

併し警視廳が現在の如き廣汎なる權限を有して、只其警察的見地のみから社會の各方面に於ける人間の活動に對して監督及び干渉するといふ事は社會の進歩のために決して喜ぶべき事ではない。假りに警視總監が總理大臣又は總理大臣の如き高級政治家であり、又大學總長の如き高級學識者であるとしても、其人の警察的眼光に依つて社會の各方面に於ける各種の人間の活動を強ひて統一し、時としては其思想にまで干渉するが如きは大なる弊害を伴ふのみならず、決して其の社會の自由なる進歩を促す所以でないが、まして現在の如き警視廳は出來得る限り其權限をエドワード一世時代の警察と同じやうに、其目的を單に人民の安寧及び幸福の保障といふ事に制限し、積極的に監督とか指導するとかいふ事は全然之れを廢止し、一般民衆をして出來得る限り自己の判斷に依り、自己の意志に基きて自治の理想を完成する事に必要なる機會を作るべきである。殊に我國の警察が從來屢々政府の探偵政治の機關に濫用せられ、又屢々時の政府の命を受けて各種の民衆運動を抑壓したるが如きは警察本來の使命を沒却するのみならず、民衆文化の發達に大なる障害であるから、私は現在の官制に照らして警視廳が相撲や、芝居や、湯屋の紛議に干渉する事が不當とは云はぬけれども、現在の官制其物を改正して、もつと時代の要求と社會の進歩に一致し得るものとなさん事を望む。

警視廳を督勵す

法學博士　堀　江　歸　一

一昨年原敬氏が警視廳の鼻先きとも云ふ可き東京驛の一隅で、少年刺客に斃された時に、世人は警視廳の無能を指摘した。殊に當時原氏は總理大臣の要職を帶びて居る一方に、警視總監は原氏随一の乾兒であると云ふ奇妙なる對照を示した點に於て、警察官の無能振りの甚だしきことを世人に感ぜしめた。其後警視總監の地位には何回かの更迭が行はれたようであり、要路の大官に對して、別に不祥の事件も起らないとすれば、此邊に於ける警察力は行屆いて居るのかも知れないが、或は桐ケ谷の幾人殺しとか、千駄ケ谷の幾人斬りとか云ふような殘忍なる出來事は常に頻發し、其犯罪人は容易に縛に就くに至らない。東京市外の何れかに身を潜めて居つて、何時如何なる狂行を演出し、無辜の市民に危害を加へるか測り知る可からさる次第であり、又斯る簡單なる犯罪人をも捕へることが出來ず、事件を警視廳得意の迷宮に彷徨させるやうであつては、自ら警視廳の無能も發揮されて市民生活に取つて、大なる恐怖を與へるものとせざるを得ない。而して右に擧げた幾人殺の下手人として、今日まで時々嫌疑者が拘引されては、證據不充分の故を以つて放免されるが、斯の如きは人權蹂躙の甚だしきものである。

警視廳の職務は多岐多端である。都市の治安を維持し、市民をして其堵に安んぜしめるが如きは、其最も重大なものであるのに、今日の如く兇行到る所に行はれて、其跡を絶たないとすれば警視廳は其本務を閑却したものと評されても、致方ないであらう。然も其警視廳が家長政治式の考を以つて、本務以外に市民生活の諸方面に向つて、愚にも付かぬ干渉を加へることが近頃に至つて、著しく殖つたようであり、或は警視廳の本務の完全に行はれないのも、本務以外に種々の方面に心勞する結果であるまいかと考へれば、市民の一人として警視廳の所業に平なるを得ないのは勿論であつて、警視廳としては家長政治に奔命の勞を費す代りに、其本然の職務に力を盡して貰いたいと希望するのは、必ずしも私一人ではあるまい。

然らば警視廳が本務以外に家長的政治の考を以つて、如何なる事を爲すかと云へば、其一ツは相撲の紛議に對する干渉であり、他の一ツは芝居の興行時間短縮又は連中廢止に關する問題であり、此模樣で進んで行つたならば、更に如何なる方面に亙つ

て、警察權の執行を見るか、殆ど測り知るを得ない。相撲は毎年二回本場所の興行を催ほし、其最盛時に於ては、日々國技館に數萬の觀衆を吸引する程、市民の人氣を集めた次第であるから、一朝或る紛議の爲めに、此市民的娛樂の消失することがあつたならば、何としても市民に寂莫の感を與へるであらう。然しながら過般の紛議の如きものは單なる相撲組合の分裂であつて、相撲其もの〻消失ではない。年寄とか、親方とか、相撲茶屋とか云ふ最も因襲的氣分に滿ちた分子から離れて、太刀光、大の里以下數十名の少壯力士が團結を設け、新に旗幟を飜すことは、確に相撲道に於ける革新の烽火とも見られるであらうし又一方に舊年寄の連中が橫綱大關と大頭以下の連中とを糾合して、脫走組に對抗する意味で、相撲協會を續けて行き、此廣い東京に二ツの組合を相對立させることも、確に興味あることであつたらう。孰れにした所で、市民生活の治安に關係する所でない以上は、警視廳などの出る幕でないことは勿論であつて、賴む相撲協會の愚なることは、多年官權の尊きことを敎へ込まれた無敎育者の團體として已むを得ないとしても、賴まれたから、直に飛出す警視廳の差し出口に至つては、論外の沙汰とするの外はない。

芝居に對する警視廳の干渉も亦餘計の話ではなからうか。故老の談に猿若町に三座の揃つて居つた頃には、山の手邊の觀客は夜明前から駕籠で見物に出掛け、夜中に歸宅することを常としたと云ふ。是れは封建時代に閑散階級の多かつた特産物であると見られるが、一方に文明の進步と共に、閑散階級の生ずるのは、自然の約束であつて、今日旣に大小の都會に於て、其事實を見るではないか。然らば東京の如き大都會に於ては、帝劇、有樂座式の數時間を限度とし、又座席に椅子を用ゆる劇場のある如く、一日十時間内外に亘つて開演する劇場もあり、一方に觀劇を樂しみつ〻、他方に飮酒食事の自由を得ると云ふこととも、市民に多方面の娛樂を供する所以であつて、苟も劇場の方で長時間の興行をする、觀客亦之を好むとしたならば、何も警視廳が兎角の干渉をする理由はないではないか。況や多年行はれ來つた脚本の内には、長時間の演出を必要とするものもあり、又長時間の興行を通じて、觀客をして種々の配合ある狂言に親しましめるものであるとすれば、警視廳の干渉の如きは、無用の沙汰であつて、或は藝術を冒瀆するものとも云へるし、國民の娛樂を單調に失せしめるものとも見られよう。

連中廢止の如きは、警視廳としては、氣の利いた處置であると云ふ考から行つたものであらうが、連中廢止に依つて、最も助かる者は花柳界の關係者であり、之に次いでは連中に擔がれ

る俳優位に止まるのではなからうか。私はこの種の物の見方に就ては、深い知識を持たないから、芝居道なるものゝ運用制度に依つて、幾何の害を受けて居るかを知らないが、多少の害がある、俳優が連中屋なるものゝ喰者に爲るとか、連中の觀客に手拭花簪の類を贈呈する費用が掛かるとか、連中の多い俳優は之を背景として、座主から高い給料を要求するとか云ふような事實があるとしても、私を以て見れば、斯の如きは純然たる私(プライヴェート・アッフェーア)の事柄であつて、何も取立てゝ、公權の干渉を施す可き問題ではない。

其れも警視廳が治安、衞生、交通、其他の方面に於ける職務に就て、何等世間から指彈されるような缺陷を暴露して居らないとすれば、相撲芝居に對する干渉も閑餘の一事業とするを得るであらう。然し肝腎の職務には穴だらけであつて、到る所に市民生活に危險を及ぼして止まない、偶々市民衞生上の見地から、湯錢の値下げを試みても、何等の成効を博しないと云ふに至つては、ドノ點から見ても、警視廳の手際は知れたものである。而して普選運動に對し、勞働運動に對し行はれる取締を見れば、總監の何人であるを問はず、苛烈を極めること、依然として昔日と渝らない。一方に相撲や芝居の世話を燒いたり、市内十五區到る所や、新開の郊外にまで、藝妓屋町を許可したりしたのは、確かに[illegible]に於て一[illegible]へようとする者へであるかも知れないが、私は其の點に於ては、本體に充分の骨を折り、安全に市民をして生活させる都合も出現させることを希望して已まないのである。

警視廳に比べれば、流石に餘計な政治に干與しない東京市役所は遙に賢明である。相撲爭議の如き、市長に仲裁を頼むのが或は順當であつたかも知れないが、市長が取上げないで、總監が拾ひ取り、然も何と解決しても、東京相撲を常陸山時代の全盛時代に引直すことも出來なければ、かの大錦を引退させた損失を償ふを得ないと云ふのは、何たる愚なる事であらうか、往年警視廳は發八風なるものを吹かせて、待合や弄花を取締つたことがあり、又藝者の衣裳を禁じたこともあつた。然も警視總監が更迭して、効果の後に傚へられたものが幾何あるであらうか。警視廳の仕事として、萬代不易とも見る可く、又市民に恩惠を洽くするものは、治安の維持であり、衞生の進步である。是等を外にして、警察官が側道に外れ出すのは大禁物であつて、私は彼等に向つて、嚴に左側通行の必要を切言することを禁じ得ざるものである。

民衆自決の氣運を振興せよ

內ヶ崎　作三郎

從來警視廳といへば何となく、私達と緣の遠い所の樣な感じがしてゐた。この役所はサーベル主義の御本家で、人民を視れば賊と思へといつたやうな風に、官僚そのもの丶權化のやうにも考へられた。しかし、私は昨年、今の堀田內務次官が警視總監になつたので、何處となく親しみを感じた。堀田君は明治二十八年から三十一年まで二高時代の同窓である。あの頭腦が明敏で、溫厚な堀田君でも警視總監に適するのか、時勢は大分變つたものだと思ひながらも、舊友の成功を希望してゐたのであつた。しかるに官海の運者たる堀田君は、間もなく現在の御役に昇進された。私は責めて堀田總監時代に巡査の長劍が廢さるれば此上ないが、もしそれが出來ぬとすれば、交通巡査のさげてゐる短劍制度が採用されはしまいかと心賴みしてあつたが、この事もなく、總監が代つたので、あつけない感じがした。

現任の赤池總監は別に舊知といふ間柄でないが、一昨年の夏、私が一寸京城に滯在した時、總督府警務局長であつた同氏を官邸に訪問し、數時間に亘りて、朝鮮の事情を質問して、多くの材料を與へられたことがある。されば堀田總監ほどの親しみはなくも、滿更あかの他人でもないやうな氣がして、新總監の御腕前を拜見したいと、特別の好奇心と興味とを懷いてゐた次第である。

赤池總監は新任早々劇場の民衆化について、經營者や、劇作家や、俳優等と協議して、連中廢止、時間短縮をやつた。兎に角、新總監の成功である。次に總監は角力協會と力士會との反目を調停した。今夕の新聞によると、まだ〳〵暗流があるやうだが、結局、春場所十日間をやらせる丈の事をした。横綱大錦は之に憤慨して、斷髮したといふやうな、芝居氣ある挿話もあつたが、警視總監の立場としては、これも成功であるに違ひない。

私は東京の一在住者として、赤池總監の勞に謝するものである。劇の改革は社會敎化の大問題で、之に先鞭をつけたのは結構なことである。角力協會の紛擾の一先づ解決したことも市民の或部分が感謝してゐること丶考ふ。

但し警視廳の事業としてなすべきことは他に澤山あると思はれる。

第一は、巡査の品質を改善することである。巡査の數が多くなつたにつけて、幾らかの不良分子の加はることはやむをえぬとして、いくら酒の上だとはいひ、同僚を殺害したといふ事件は隨分極端の例でないか。巡査が酒に醉ふことが不謹愼であり、その上同僚を殺害するといふことは無論甚しい犯罪である。警視廳としては巡査の訓練の方を一層努力しなければならぬではないか。

第二は、近頃殺人犯は可なりに多い。そして犯罪者の捕縛せられないのが多い。それには市民も府民も共に不安の心持ちを懷いてゐる。重罪犯人の檢擧に十分勢力を傾注して貰ひたい。

第三は、言論取締りを餘りに嚴重にせぬがよいと思ふ。如何なる善政も批評を要する。社會主義者などには十分議論を盡さしむるがよい。あまりに過激な議論は却つて聽衆を心服せしむることが出來ぬものである。されば大抵のことは十分に言はせるがよいと思ふ。辯士中止は大禁物である。それよりも政府が積極的に諸種の社會政策を實施して、社會的缺陷を充たすことが急務である。

第四は、活動寫眞や、寄席や、劇場の取締である。猥褻なものを取り締るは勿論であるが、看板から實際まで、血なま臭いものは段々不許可にするがよいと思ふ。米國の活動にもよくピストルが出るが、我が國のは大ダンビラやら短刀が出てくる。か丶る慘酷なる所作や、映寫の民衆に及ぼす影響と暗示は餘程大なるものがある。之を取締らぬと無慘なる犯罪はふゑる一方であらふ。

第五は、政治的集會に木刀などをのんでゐる壯士を會場に入れるを默許して、紛擾を大ならしむることは不注意も甚しい。結局、壯士も袋叩きに遇ふ位が關の山だから、入場を許さないのが、彼等に對しても親切なことである。況んや主催者に對する禮儀として當然爲さねばならぬことである。

外にも警視廳のなすべきことや取り締るべき事が少くないが、私は差しあたり、前記五項を以て警視廳に對する希望條件としたい。

所で、警視總監が湯錢に干渉したり、劇場に容喙したり、角力に水をさしたりするはをせつかいも甚しいといふ批評もあるが、私はこれには必ずしも贊成することが出來ぬ。一體御役人は國民の公僕であるのである。特に警視總監としては、東京市民に關係ある重大問題を考究し、率先して、協議をしたり、調停役をしたりすることは必ずしも惡いことでない。昔ならば大岡越前守のやるやうなことをやつて惡いわけはない。

一體、警視廳には人手が多い。いろ〳〵の意見も絶えず集つてゐるわけである。又いろ〳〵の便宜が備つてゐるから、何かやつて見ようといふ元氣な總監なら、此位のことをやるのは當然だと思ふ。赤池總監としても、久しく朝鮮にゐて、內地の耳目から遠ざかつてゐたのだから、何か目立つやう事をやつてみたいと考ふるは當然である。而してそれ圖星に當つたからといふて、攻擊をする理由にはならない。

唯此場合に眞面目に考ふべきは、何故にかゝる問題を當事者自ら解決せずして、警視廳を煩はさねばならぬかといふ提案が生じて來る。例へば、時間短縮なり、連中廢止といふことが善い事ならば、總監の諮問をまたずして、帝劇なり、松竹なりの幹部が協議して決定されなかつたものであらふか。俳優自ら之を唱道することが出來ぬ性質のものであらふか。つまり、我が國では、民間の諸勢力に統一がない、協力が足らないといふことゝに歸結する。之に反して凡ての役所は、その組織に於て、運用に於て、系統があり、順序がある。別言すれば活動に都合よく、能率を發揮することが出來る。殊に警視廳に職務上、人物上、場所上、設備上、多くの有利の位地にあるから此度の如き提案なり、仲裁なり、干渉なりをやるに都合がよろしい。且つまた官職に對する敬意は多くの人々の心のうちに多少存在してゐるから、用事が纏まり易いのは當然である。

しかし何時までも御役所から差圖をえなければ動かぬといふ民衆では心細いではないか。如何にして社會の輿論を喚起し指導し、その理想を實現するやうな手段を講ずべきか。序にこの事を考究して見たい。

第一、社會の輿論を喚起する最も調法なものは新聞である。ことに發行部數の多い大新聞の編輯局に調査部を設けて、湯屋のことなり、劇場のことなり、改善すべきものあるを研究して、その意見を發表して、湯屋組合なり、劇場當事者なりの反省を促し、その提案を參考として、現行制度に改善を斷行せしむることである。これは大新聞の經營者が少しく注意すれば何でもない事である。

之につけて想起するは、ロンドンのデーリー、テレグラフのことである。この新聞は保守的にして、帝國主義的の新聞であるが、年中行事の一として、毎年一回約一ケ月に渡りて、社會の大問題を提へて、毎日一人つゝ、政治家、宗教家、教育家の可なり纏つた意見を發表することである。私が十數年前に、英國に滯在した時に、離緣問題が八ケ間敷かつたが、この問題が約一月ほど取り扱はれたことを記憶する。國民保健問題や、教育制度改革問題なども取り扱はれたと考ふる。

我が國の新聞は興味中心の讀物として、事件の報導機關として、相應に發達したとはいふ迄もない。しかし社會を敎化しよう、指導しよう、敎育しようとする態度はまだ不十分であると思はれる。新聞は大なる文化事業であるから、編輯局は大なる抱負を以て、警視廳邊より先手を打つことを行つて貰ひたいものである。

第二には宗敎家、ことに一宗一派の管長とが何とかいふ人々の責任である。管長はその宗派の事を掌れば、職責上十分である筈だが、道德的責任はそれ丈では足りない。苟くも一宗一派の管長とか、代表的人物といふからには常に社會的、もしくは市民的重要な問題を注意し、天下は卒先して、輿論を喚起せねばならない。殊に佛敎各派には多くの管長やら當時者があるから、大に奮發してもらひたい。現に何といつても、佛敎の潜勢力はまだ〱侮るべからざるものがある。現に此度の法王廳使節駐派問題に於て、その多數者の希望通り、衆議院に於てその費目を削除せしめたではないか。兎に角えらい力だ。衆議院の豪傑連も、來年の總選擧を扣へてゐるので、何の手應へもなく、グッタリ參つたのは驚き入つた次第である。

但し、私はこの費目の復活を希望する一人である。若し羅馬敎會の信仰が右の極端にありとすれば、私のは左の極端にありといふてよろしい。されば私は宗敎上の理由に於ては羅馬敎會には、いづれかといへば反對の位置にあるものである。しかしこの度の問題は、うちあけていへば、日本民族の海外發展の多少役に立つことなのである、現にカリフォルニア州の基督敎徒總數八十九萬三千三百六十六人（一九一六年調査）の中、羅馬敎信徒は四十九萬四千五百三十九人といふ、過半數を示してゐる。メソヂストは十萬に滿たず。プレスビテリアンは六萬に滿たない。バプテスト、エピスコパル派、コングレゲーショナルは共に四萬以下である。カ州問題は宗敎問題でないが、此處に味のある點がある。

又南米諸國にしても、日本の移民が割り込み得る國々は悉く羅馬敎會派の基督敎國である。その點を顧慮したならば、外務大臣の提案に大なる意味があることがわかる。

さて佛敎徒の團結の力で、衆議院の荒武者共を、巧に操縱した次第だが、借問す、外務省案に代るべき日本民族國の海外發展策について、佛敎團體は何等の成案ありや。

しかし、兎に角、佛敎團體の重なる部分が協同すれば、善惡いづれにせよ、中に重大なる結果を惹起し得ること丈の確信をえたに違ひない。然らば何故にこの潜勢力を社會の改造や革新のために使用しないのであるか。

英國々教會の大監督や監督は隨分大きな英帝國の問題を取り扱ふ。彼等が時々新聞に發表する意見や、オツクスフオードやケンブリツヂ大學の日曜夕の禮拜に於ける說教には中々社會的政治的、國際的に重大なる問題を取り扱つてゐるのである。佛教各派の管長も彼等と競爭してもらひたい。神道や基督教各派の責任者も同樣に奮發してもらひたい。說教も單に所依の經典の講義丈ではもの足らない。この精神を現在の問題に結びつけて說くやうな宗教家が多くならなければならない。現在の宗教家の多數の說教はあまり經文の本文に囚へられてゐる傾向が著しいやうだ。

第三、教育家、ことに、各帝國大學總長や、私立大學の總長が大に呼號してもらひたい。この點に於ては、米國の大學總長の社會的活動にならつてもらひたい。ハーヴアードのエリオツトや、コロンビアのバトラーや、シカゴの故ハーパーやスタンフオードのヂヨルダンや、いづれも輿論の喚起者である。我國の帝國大學總長はあまり大人し過ぎるやうである。たゞ一種の事務官として收まつてゐるやうである。何となく物足らない。私立大學の責任者は各自の學府の經營の爲に奔命に疲れてゐるから、氣の毒である。しかし慶應の福澤先生と早稻田の故大隈總長は共に社會の木鐸を以て任じたので、米國の第一流の大學總長以上の功績を遺したことは大に意を强くするものがある。私は官私大學の總長連の大奮發を希望せざるを得ない。

第四、英國では毎年五月にメー・ミーテングス即ち五月の集會と稱して、各宗派の集會がある。かゝる時には必ず社會的に重大なる決議をなすことゝなつてゐる。我國でも各宗各派の年會とか總會に於ては、宗派內の問題のみならず、社會的、民族的、世界的問題に對する希望を決議して、之を新聞で發表してもらひたい。勞働運動は大分事事をやつてゐるは大に推奬すべき事である。教育會などに於ても遠慮なく、ドシ〳〵やるがよいと思ふ。その他實業家の組合といはず、各種の組合にて、善いと思ふこと、望ましきことを提案し、決議して、之を發表する習慣を作るがよい。

かゝる習慣が出來れば、民衆自らが重大なる問題を解決するやうな氣運が生ずるであらふと思はれる。されば時を要する。さればとて放任はよろしくない。事々物々につけて、かういふ傾向を助成するやう御互に注意しなければならない。そうしないと、何時でも警視廳なり、その他の御役所の御世話になるより外に道はあるまい。

警視廳に果して審判者たる資格ありや

安部磯雄

警視廳が相撲協會の紛擾の仲裁をしたり、或は演劇とか活動寫眞の興行時間短縮の問題に就いて相談に與つたりした事は近頃非常に人々の注意を惹いた。私共も此問題に對して注意を拂つたと云ふよりも、元來斯くの如き事柄に對して警視廳が關係したり携はるといふ事は不都合だと考へて居たので、此度のやうに警視廳が度々いろ／＼な問題に口出しをするのを見るに就いて、一言私の意見を述べて警視廳の注意を促したいと思ふ。

私は警視廳が人民から委任されても居ない、警視廳として不似合な仕事に關係する事を今後止めて貰ひたいと考へる。さう云ふのには相當の理由があるので、私は先づ警視廳が此度のやうな問題に對して審判の資格があるかどうかを問ひたい。勿論初めから審判をするつもりはないであらうが、仲裁者とか助言者とか、兎に角いろ／＼言葉はあるが、或紛擾が起つた場合に、譬へば相撲協會の紛擾を例にとつて見れば、その仲裁者であり、助言者である警視廳の當局で當つたのは警官であるから、結果から見れば、警視廳の態度は裁判官で、それは一種の審判者であると認めて好い。併しながら警視廳に果して審判者の資格があるかと云ふと、一言にして云へばそれは不適當であると云ふより外はない。警視廳がどんなに柔く砕けて相談して見ても、警視總監がいくら粋を利かして藝術上の問題に口を出したとしても、それは一種の親みの感じを與へるやうであるが、事實は決してさうでない。今日の警視廳は事實力の代表者であつて、其背後に大なる警察力を控えて居る。それが濫用されて居るかどうかといふ事は自ら別問題であるが、兎に角其處に警察力といふ一の力がある。今さういふ力が紛擾問題を仲裁したり、取り治めたりするのが弊害があると云ふのである。我國では未だに國民が封建時代の思想から脱し切れないで、一般の思想がデモクラチックになつて來たと云つても、一面に於て官僚主義が行はれ、人民の多數は昔の封建時代の習慣から役人と云へば心では重きを置かなくとも、彼等の耳には或場合には偉く響くのである。流石に今日の時代に於ては大臣の前に出たからとて驚く者もないであらうが、多數の人が怕がるのは警察であつて、昔の大名とか侍階級の代りになつて居るのが今日の警視廳である。それが何千人の警官を控え、疑はしいと思へば罪人

として拘引する權力があり、營業が怪しいと睨めば其中に入つて取調べる權力があるので、人民は警察官に對しては依然として封建時代の考へを捨てる事が出來ない。少くとも觸らぬ神に祟りなしで敬して遠ざけるといふのが人情である。今警視廳が何かの紛擾があつた時にその仲裁に入れば一應問題の解決は出來るであらう。併し其處に非常に危險な分子の含まれて居る事に氣が付かなければならない。

先日の相撲協會と力士との間に紛議が起つた際に、珍らしくも力士の鼻息が荒く、到底容易には治まらぬ問題として、此社會にも一種の勞働爭議が起つたといふ風に考へられたが、一度警視廳が仲に入ると手もなく事件が片着いて了つた。又同じやうな事件として岡山縣の小作爭議があつた。大阪の富豪藤田の田地を耕す小作人と、藤田との間の爭議は世の注目を惹いた。小作人も强硬で、地主も頑强で、共に相下らなかつた。東京からは辯護士も驅けつける。小作人側にも農民會があつて小作人に應援し、爭議は何時果つべしとも見えなかつた。然るに一度國粹會が仲裁に入ると手もなく治つて事件の結末を告げた。之れ等の事實は甚だ不愉快に感じられる所であつて、國粹會の背後には常に力が潜んで居て、いざとなれば力を以て抑壓する位置に在り、前に述べた相撲協會に對する警視廳の態度と同じやうに解せられる。イソツプ物語に狐が狼と一片の肉を爭つて居ると獅子が出て來て喧嘩を裁いてやるといふのがある。此話は人情を穿つた話で、ライオンのやうな强者が出て來て問題を審判すると云へば容易に解決は着くであらうが、其處に甚だ不愉快な或物がある事は爭はれない。警視廳は表面に於て自己の力を仄めかすと云ふ事はあり得ないと考へられるけれども、併し一旦審判者の地位に立つ事になれば、爭議の當事者の心理狀態はどうなるかと云ふに、警視廳が出て來るとなればお互に何とかして折合はなければならぬ、調停を斥ければ他日何かの場合に復讐されるであらう、と云ふ風に彼等の心理は動かさるを得ぬ。警視廳は力を有つ、警視廳の言葉を聽かなければ他日何等かの形に於て自分達が不利な地位に立たなければならぬと云ふ風に考へるので、さう云ふ利害の打算から、今日種々の興行者は警視廳の機嫌を損ずることを恐れて、警視總監の聲は鶴の一聲で無理と思つても我慢をするのが常である。併し斯う云ふ事情があるからと云つて、警視廳に審判の資格があると認める事は出來ない。警視廳が審判者になる事はライオンが審判者になるのと同じであつて、其結果は無理が生ぜざるを得ない。警視廳の本來の任務はさう云ふ事に在るのではなくて、或爭議が起つた際に亂暴を働いて他人に迷惑をかけたり、社會の安寧を

害するといふやうな事が起つた場合にそれを取締るのが仕事であつて、實はそれ丈けで好いのである。警察の事務はいろ〳〵の惡事が行はれた時に取締るのでは遲いので、それを未然に取締るのが任務であると云ふかも知れぬ。それは確かにさうでなければならないが、何も自分が未然に事を防ぐためにライオンのやうに出しやばる必要はない。審判にもいろ〳〵の方法があるから、自分が直接に出ないでも、或人を通して、他の審判を引受けて盡力するやうにさせれば好い。外國に於ても役人が全然干涉をしないとは云はないが、勞働爭議の仲裁は出來得る限り役人を避ける事になつて居る。譬へば資本家側から二人、勞働者側から二人、都合四人で協議して、どちらにもつかぬ、信賴の出來る人を他に一人舉げて、五人で爭議の仲裁をする。斯る場合に絕對に役人を舉げぬとは云はないが、大概はさうする事を避け、役人も亦自分から進んでそれに應ずる事はない。それが當然なのであつて、日本では勞働爭議があるとすぐ役人を審判者にするが、之れは封建時代の役人萬能主義の思想が未だに殘つて居る證據である。今度の議會に小作爭議調停案が出るが、勞働者や農民の間にも反對があつて此案を葬り去らうと運動する者もある。若し斯くの如き案が通過すれば大なる物笑ひで、調停にならぬばかりでなく爭議をして一層甚しからしむるものと云はなければならない。案の骨子は、仲裁する地主側から委員が出て、小作人側からも委員が出て、其議長となつてヤヤステングボートを握る者は地方の裁判官がなると云ふのである。小作爭議にまで裁判所の役人を引き出すといふのは隨分時代錯誤であつて、今日でも此舊式な思想が相當に勢力があるのであるが、斯かる姑息な役人萬能主義では勞働問題の解決は出來ない。

今迄に述べたやうに警視廳が爭議の仲裁に出しやばる事は甚だ好ましくないが、一般の役人も亦爭議の仲裁者になるには遠慮しなければならない强い理由がある。役人と云ふ言葉の中には矢張り其處に封建時代の思想が濃厚に現れて居る。今日でこそ役人に對する一般の人々の思想が大分違つて來て居るが、役人自身の思想に至つてはてんで時代錯誤であつて、其頭腦の組織は近代社會に反するものであり、所謂役人氣質の所有者である。何か爭議が起つた場合に、其爭議の當事者が社會的に同等の地位に居るものとすれば、今日の役人と雖も公平な判決を下す事が出來るであらう。然るに今日の爭議は同等の地位に在る者の間に起らずに、資本家對勞働者、地主對小作人、相撲協會對力士と云ふ風に各其地位階級の異る者の間に起る。さうなると役人の頭はどう働くかと云ふに、勞働者が資本家と喧嘩をす

るのは不都合である、下の者が上の者に刄向ふのは間違つて居るといふ風に勝手に判斷をして了ふのであるが、資本家の方で勞働者を一時に二百人なり三百人なり首切るやうな酷い態度に出ても役人の頭には大して響かない。反對に資本家の工場の窓硝子を勞働者が破壞するやうな事があればそれは明に反逆とされるのであつて、斯くの如き役人の頭では到底問題を公平に解決する事が出來る筈はない。相撲協會と力士との問題は未だ懸案であつて其前途はどうなるか明かでないが、役人流に從つて此問題を見れば、一方は年寄りであり、一方は褌擔ぎから養はれて來た者でそれが年寄りに刄を向けるのは恩知らずであると考へるかも知れぬが、さう云ふ風な先入の思想で今日の種々な爭議を解決しやうとするのは無理な事で、之れに依つて見ても今日の警視廳などは審判者の資格がない事が分る。若し飽く迄も審判者にならうとすれば結局弱い者の恨みを買ふばかりで、爭を紛糾させ、問題を解決する事は出來ない。

其他私は警視廳に對して述べて置きたい種々の意見もあるが、茲では主として以上述べた事に止めて置いて、警視廳の辨明があればして貰ひたいし、又一般の人々の此問題に對して教を乞ひたい。

警察的感覺の社會的性質と其錯覺

長谷川如是閑

ドイツ人に言はせると、國家にはいろいろの性質の國家があつて、法治國家だとか、文化國家だとか、それぞれ時代に應じて進化して行くのださうであるが、警察國家といふ國家もその一つであつて、それは國家目的を警察的見地から決定する國家ださうである。かういふ見方は豫め警察といふことを一種の範疇に嵌め込んで、その行爲を限定してしまつてゐるのであるが、然し國家が所謂警察國家から所謂文化國家へと進化して行くやうに、警察そのものも、所謂警察的の警察から所謂文化的の警察に進化するのであつて、國家といふ制度に絕對的な範疇がないやうに、警察といふ行爲にも、絕對的に定まつて範疇のあるわけではない。日本も維新前には、夏は人間が皆家の內は勿論往來でも、肌脫ぎや裸體で濟ましてゐたものだが、維新後外國人と交際の結果、その風俗を恥と考へて、當時の邏卒が、店先で肌を脫いでる男を叱り飛ばして歩くので、江戸の市民は大

いに面喰つたといふ話がある。これはドイツ學者の所謂文化國家の警察行爲であつて、所謂風俗警察が衛生、危害防止等、普通の警察行爲の動機以外にまで押し進んだわけである。夏肌を脱ぐのは、衛生の點から言つても、危害の點から言つても、別に差支へのあるわけではないが、たゞ『見つともない』といふ文化的動機でそれがいけないことになるのである。（北京や上海では、堂々たる商店の店員が、今でも肌脱ぎで執務してゐる。それは、そこまで文化意識が鋭敏でないからであらう。）

然し國家でも、警察でも、果してそのやうに所謂文化的に行動すべきものであるかどうかについては、根本的に疑問がある。ドイツ學者は、所謂文化國家を、國家の最上最高のものであるとして、一般文明の目的や方向を決定すべきものが國家であるといふ風に考へてゐるが、これは全然意味を成さないことで、實際の國家にそんな大した能力がある筈がないのである。實際の國家は、何時でも貴族か資本家か、個人か、政黨か、その他一部階級が組織してゐる集團であつて、その貴族自身、資本家自身、個人そのもの、政黨そのもの等に文明を決定する能力などのある筈がない以上は、それらのものが組織してゐる國家に、そんな大能力のある理窟がない。で、イギリス流の學者は、國家とは『必要惡』であつて、消防機械のやうなものである。隨つて、險呑で、邪魔で、ついえで、困る道具だが、具へつけておかないわけに行かないものだから仕方がない、といふ風に解釋してゐる。

この兩方の見地は、畢竟、共に概念的なのであつて、實際の國家はそのどつちでもないこともあり、どつちか一方であることもある、而かもそのどちらかでなければならぬと云ふことはない。どうしてそんな概念上の差別が發生したかと言へば、一つは人民の生活が生むところの文明を、支配が生むと考へた誤りであり、（ドイツ流の見地。）他の一つは支配は必然に生活を離れた制壓であると考へた誤りなのである。（イギリス流の見地。）いかにも或る時代の支配が、右の二つの見地のどちらかであることの普通なのは事實だが、その普通の事實は決して人間の絕對的の運命ではない。言ひ換へれば、支配はもつと生活と一致し得る可能性が十分にあつて、現在の事實は、その可能性の方へと進んでゐるのである。（尤もさういふ生活管理を『支配』といふ言葉で言ひ表はすのは適當ではないが、即ちそれは寧ろ『管理』といふ方が適當であるかも知れないが、然しそれは言葉の上の話で、今でも支配意識がだんだん管理意識に變つて行きつゝあることは、法律や社會道德の進化に表はれてゐるのである。）

この意味で警察も、支配的から管理的に變つて行きつゝある。元來警察は歴史的には大概何處の國でも支配的なものではなく、寧ろ自治的のものであつた。少くとも最も人民に直接する警察は自治のもので、日本の五人組の如きも一種の自治警察(?)である。今の巡査制度と似た制度を呼ぶのに『自身番』といふ言葉を使つてゐたのなどは、頗る能く警察の自治的精神を現はしてゐる。封建時代では、人民は時に國家即ち支配者に對して自己を防禦する必要を行つてゐた。殊に都會はさうであつた。經濟行爲、殊に生産所爲、物資の交通等の安定を圖るためには、それの中心をなしてゐた都會が、それを妨げる國家に對して防禦行爲を取る必要が生じた。市民の警察が國家を取締るやうなものである。ヨーロッパのギルドなどはその最も發達したものであつた。日本でもその氣味はあるのであつて、それほど警察といふものは自治的のものなのである。だから凡ての文明國では現に警察は半自治的である。日本なども形式だけは寧ろ自治に多く傾いてゐる。

そこで警察行爲は、市民の同意が一番その圓滿な進行に必要となつて來る。肌脱ぎや立小便を禁ずるのも、さういふ禁令の出來ない前から、日本人でも肌脱ぎは失禮だといふ感じは有つてゐたし、立小便もそこらぢうの板塀などに『小便無用』の貼札をしてあつたりしたので、畢竟市民の同意があつた爲めに、凡ての法律の中で最も反抗が少く行はれてゐる法律となつたのである。

この頃警視廳が廳令を出すのにちき關係者を呼んで、相談をする形式を採る。これは至極善いことで、狡いと云へば狡いが、先づ奬勵すべき手續きだと思ふ。然し日本の警察で、所謂文化的關係を要する仕事は、極めて僅少の部分で、實は影響する範圍が口嚴しい階級なので、問題だけが大きいらしく見えるが、決して重大な部分でも何でもない。要するにその邊のことに氣付かずにゐたところで、大して警察の目的に背いたとも言はれない事柄たるに止まる。差當つて努力すべき方面は寧ろ所謂警察行爲の方にある。

それは寧ろ保安に關する部分で、極めて平凡な意味の警察行爲の方なのである。例へば所謂犯罪警察の如きが、寧ろもつと進歩しなければならない。尤もその方面でも、日本の警察は決して他の文明國のそれに劣つてゐるとは云はれない。大規模の犯罪を未然に防ぐこと、犯罪捜査の實効の擧がることなどは、日本もかなりいゝ方ではあるが、然しその理由としては、警察が進歩してゐると云ふよりは、日本人の生活樣式が利益をしてゐることもある。例へば、日本の家屋が開放的で、組織的犯罪

行爲に不便であるのみならず、警察の視線と侵入を妨げるに不便であることが、大いに關係してゐる。(そのことについては雜誌『我等』の二月號「日本の家屋と秘密結社」に書いたから、こゝには略す。)

然し、犯罪を主眼に置いて警察を考へることは、必ずしも奬勵すべきことではない。『人を見たら泥棒と思へ』といふことは、一般生活に於いて奬勵すべき心理ではないやうに、行政行爲の心理としても、假令それが警察には有利であつても、生活態度として全くいけない。多少の不利は忍んでも、さういふ態度は排斥すべきである。そこへ行くと西洋の警察の方が、生活の常識を失つてゐないところが面白い。日本の警察眼から見ると間拔けたところがいゝのである。最近にもその適切な例がある。ロンドンの警視總監が無名の人から贈られたチョコレートを食つて死にそこなつた。それは實に滑稽な話で、新聞は總監が何處かから物が來る筈になつてゐたので、それかと思つてつい食つたのだと言ひ譯けしてゐたが、實際はどうだか分らない。他の警察官も同時に貰つたが、その人は食はなかつたのである。總監のタイピストの女も、總監から一つ貰つて食つたが、一口食ふと味が變なので止めて、そのことを總監に言つたのだが、それでも總監は、そんなことはないと食つてしまつたといふことである。他の警察官の食はなかつたのは偶然だつたらうが、然しその毒の入れ方がいかにも幼稚でチョコレートを作る時に入れたのではなくして、下のところを剝がして毒を入れて、そのまゝくつつけてあるので、少し注意すれば直ぐ分るのである。未だにその犯人が判らない。その後も方々の大官に宛てて、その菓子が盛に來る、中には『分析に廻せ』といふ札をつけて、その字を警察官が分析係りへ廻す形式を眞似て書いたのなんかある。ヒステリイの女か何かだらうといふ說だつたが、要するにアイルランド人ではなく、惡戲だらうと云はれるほど下手なやり方なのである。警視總監ともあるものが、そんな手に懸るくらゐ、イギリスの警察は、『人を見たら泥棒と思へ』といふ意識から遠ざかつて、『毒を見ても御馳走』と思ふほど素人的心理になつてゐるのである。日本の警察官は定めてそれを笑ふであらうが、さういふことを嘲笑するところに、日本の警察の短所があり、長所があるのである。

日本の警察がイギリスの警察心理と正反對に、普通のチョコレートでも、先づ毒が入つてゐると斷定するほど警察的になつてゐても、事實に於いてさういふ心理は、犯罪警察の目的に實績のあるわけではない。假令稀に實績があつても、それが一般生活に障害を與へる方が多く、保安の上からは寧ろその警察心

理が治安を防害してゐることになる。それは斷えずある例だが、最近にも桐ヶ谷の六人殺しとかで犯人が擧　ないのに焦慮して、全くの無關係者を檢擧して、その人の生活に大損害を與へてゐる。これは警察から見ると、或る重大の危害の禁遏の爲めに、小さい犧牲を拂ふつもりでゐるだらうが、それは大きな間違ひである。一家を慘殺した犯人が、解放されてゐるといふやうなことは一大不安に相違ないので、その犯人を獲ることは社會的に強く要求されてゐるが、然しそれが一般日常生活の安定を破つてゐる程度は、警察權が自由自在に誰れの生活の平和をでも、一寸とした理由で攪亂しうるといふ事實に較ぶれば、お話しにならないのである。凡ての市民は、桐ヶ谷の犯罪者が今晩か明日の晩か自分のところを襲ふだらうといふ不安は、事實そんな強い程度で有つてゐるのではない。そんなことを人中で話しても嗤はれるくらゐである。これに反して警察權が何時(なんどき)限らず、こちらの豫期しない理由で家庭に侵入して來るといふことを考へた日には、これは強盜の侵入どころの騷ぎではない。強盜ならば警察が構つてくれる。警察が間に合はなくとも、隣り近所が賴みになるといふ期待がある。これに反して警察權の侵入に對しては、全く絕望である。桐ヶ谷の嫌疑者も、一旦は虛僞の自白をしたといふことだが、若し周圍の錯誤でこの自白の否認が成立たなかつたなら、彼は殺されなければならない。なぜそんな大危險を彼が冒したかと云へば、警察權に對する彼の無力が、その心理に及ぼして、一時的絕望狀態を來した結果に外ならないと思はれる。かやうな心理は、如何に警察權の侵入が人民の日常生活を不安にするかを思はせるに足りる。だからイギリスのやうに家庭に錠を下して、この錠は警察の爲めには絕對に開かないといふ一種の社會道德が作り上げられるのである。警察權の幼稚な時代には、こんな道德は必要がなかつた。警察權が強力になればなるほど、こんな道德の發生が必要になつて來る。ところが前に云つた通り、日本の家屋には錠がない。從つて日本の家庭は開つ放しである。警察に對する市民の、イギリス流の防禦は全く不可能である。かういふ社會に於ける、警察權の濫用は、自由に市民の日常生活を攪き廻すことが出來る。殺人犯人が獲まらないよりも、その方がよつぽど不安である。

　近代の國家の行政行爲が擴大されると同時に、警察ばかりでなく、一般司法行政の干涉が、時に錯覺に基いて發動して、一般反社會的行爲と同じ結果を生ずるので、それを調節する爲めに、さういふ損害に對して國家が金錢上の賠償をする制度を新設しなければならないといふ意見が有力である。殊に裁判の錯

誤などでその必要があると云ふので、今議會でもこれに關する質問が出たやうであつたが、政府は今のところ反對だと答へたと覺えてゐる。それは反對する筈で、その種の賠償を日本の國家が負擔した日には、警察の錯誤に對して賠償するだけでも政府は破産してしまふであらう。然しそれほど重大な損害を國民に與へてゐることは、政府が何と云はうとも、いづれそれに對して何とか適當に處置を採らなければならない。然し既に與へた損害よりは、金錢に見積ることの出來ない損害、即ち警察的錯覺の爲めに生活が拘束されてゐる損害は、目に見えないでどれだけ國民的生活の自由を壓迫し、その結果日本の社會的平和を妨げてゐるか分らない。

殊に前に云つた日本流の警察心理は、犯罪捜索の科學的根據に對して、心理的の錯誤を與へるものであることは、當局者の深く注意しなければならぬ點である。西洋の探偵小説に、往々幼稚な探偵がさういふ心理から失策を演じてゐることを仕組んであるが、これは文士の作り事としてのみ見ることの出來ない現象であることは、日本の警察が重大事件に於いても、小さな事件に於いても、屢々その失敗を繰返してゐることを見ても分る。感覺の鋭敏は絶對に必要だが、その鋭敏さが感覺の錯誤を招く原因となるのは、要するにその感覺が社會的調節を失つてゐるからである。元來感覺は社會的に働かないと病的に陷るものである。商人の感覺、殊に投機商の感覺、學者の專門的感覺、政治家の感覺、音樂家の感覺、皆それぞれ分業的に鋭敏になつてゐるが、それらの感覺も亦社會的調節を失ふと、病的か、さもなければ犯罪的になつて、社會的生活に役立たずに、却つて害を與へる。物價の變動を感知する敏感などは、これを社會的に利用したら非常に有用なるものであるのに、もともと個人的利益の爲めにその感覺が發達したので、その鋭敏な感覺も遂にそれが社會的生活を攪亂することに氣付かない。氣付いても何等それが爲めに自分の社會的感覺を傷けない。で、投機商は自分の道徳を破らずに社會的生活を攪亂することが出來るのである。

警察の感覺も、社會的性質を失つて、社會のための警察でなく、「警察の爲めの警察」といふやうな意味に墮すると、丁度泥棒の感覺が、泥棒の爲めの泥棒といふ方面に働いて、非常に鋭敏に發達すると同じやうな具合で、警察と泥棒との感覺競爭の遊戲に過ぎないことになる。殊に感覺の反社會的な發達は、青年期の神經衰弱と同じく、妄想の原因となる。自己の病的に發達した感覺に基いて、錯覺的に犯罪現象の存在を認める。このことは殊に所謂高等警察の方面に發生する現象である。政

活的社會的犯罪は、もともと犯罪行爲ではなく、——それが姿行的行爲の形式を採れば別だが——日常の生活行爲がただ國家的視角から觀て犯罪視されるのであるから、この意味の犯罪行爲は、日常行爲と區別するのが甚だ困難である。で、警察眼から普通人の普通行爲をその種の犯罪行爲と錯覺的に見ることが常に起るのである。で、普通行爲と犯罪行爲が區別が付かないので、その嫌疑者の全行爲を監視する必要を感ずるに至る。これが泥棒にさへ付けない尾行者なるものを普通人たるその種の嫌疑者に附けなければならなくなる理由である。これは現代に於いて行はれてゐる國家的錯誤の一つであるが、それは國家的感覺が過度に敏感になつた結果の錯覺に基いてゐることが多いのである。その結果警察行爲が、生活の重大な障害となつてゐる。が、所謂高等警察なるものが、警察上どんな意味を有つてゐるかについては、こゝでは說き及ぼさない。





カルピス
あたゝかい
滋強飲料
顧問 三宅驥一理學博士
販賣所 酒店・食料品店・藥店
製造元 ラクトー株式會社



隅田川保勝論

(趣味眼と文藝史觀に映ずる隅田川の使命)

笹川臨風

一

殺風景な、殺伐な、都人士から見て蒙昧野蠻とも思はれた王朝時代の關東に、不思議にも歌人の吟詠に上つて、優美な印象を後世に遺した二つの重なるものがある。其一つは萬葉詩人に歌はれた眞間の手古奈で、今一つは古今集と伊勢物語の昔男とに傳へられた隅田川である。朔北の野に香つた一輪の名花王昭君は都育ちの美人であつたが、眞間の手古奈は生粋の東國女兒である。「葛飾の眞間の井見れば、たちならし水汲ましけむ手古奈し思ほゆ」と謳はれた如く、葛飾の眞間の井戸水を汲んでゐた美人は、萬葉詩人に其水波姿を讃美されたのであつた。「望月の満てる面わに、花のごと咲ん」とまで稱へられ、葛飾の背兄(せなあ)や哥(あにい)は、「夏蟲の火に入るがごと、水門入に船漕ぐ如く」其周圍に集つて、葛飾はおろか東國第一の美人と都にまで傳はつたのであつた。

美人の手古奈は唯芳名を歌詠に殘したのみであつたが、自然の隅田川は關東の風氣開發とともに重要なるものとなつた。殊に江戸幕府開基となつては、都市河川となつたのであるから、隅田川の地位は巴里のセーヌ河、倫敦のテームス河と同一のものであつた。奈良の佐保川や、京都の鴨川のやうな名のみの河川でなくして、隅田川は名實兼ね備へた都市河川であつたのである。萬葉集に辨基法師が「まつち山夕越ゆきていほ崎の、隅

川原に獨りかもねん」とあるは、此川の歌詠に見えた初のやうであるが、此隅田川原は武藏の隅田川でなくして紀伊の隅田川であることは疑ひもない。古今六帖には辨基の歌ひし隅田川を出羽の背戶の關のすみだ川なりと云ひ、又駿河庵原郡の隅田川と說くものもあるが、此隅田川は紀伊の隅田川で即ち紀の川の一名である。太平記にある隅田黨は此河の附近に散在した豪族で、正慶年間楠木正成が此處を攻めたこと、正平二年楠木正行が隅田城に押寄せたことは、南北朝時代の史籍古文書に見えてゐる。眞土山は其北岸に在りて、紀伊の伊都郡と大和の宇智郡とを堺し、往時大和から紀伊への通路は此山を越えたものである。芋生眞土（イモフマツチ）川が紀の川に合流する處は出崎をなしてゐるので、之を芋生崎、即ち庵崎と稱した。して見ると、眞土山にせよ、庵崎にせよ、いづれも紀の國の名所であり、殊に庵崎は隅田川の枕詞として多く用ひられて來たのである。其後千載集、夫木集に見えたる眞土山若しくは隅田川原は、紀の國のものを指したか、武藏のを指したか、歌人はゐながらにして名所を詠むのであるから、混淆してゐて、それと確かに指すことは難い。しかしよし萬葉に紀の國の隅田川が詠ぜられたにせよ、古今、伊勢以來有名となつたのは武藏の隅田川であるから、世々の歌人が詠じた隅田川は紀の國のものよりも武藏のものが多かつたと思はれる。從つて紀の國の隅田川附近にある名所も轉じて武藏隅田川の名所となつたらしい。眞土山、庵崎の如きは、即ち然りであるが、眞土山はとにかく聖天堂を祀れる武藏隅田河畔の名蹟ではあつても、庵崎に至りては諸說紛々たりとは云へ、實際にそれとそこを定むべきところがない。恐くは隅田川の枕詞となつた庵崎は唯名所だけであつて、實際武藏には存在してゐないのであらう。武藏の隅田川に眞土山が添へられたのはいつ頃からのことであらうか、明確なる史料は無いが、足利季世に既に其處に存在してゐたとは、道興准后の同國雜記に、「當寺の寺號を淺草寺といへり、十一面觀音にて侍り、たぐひなき靈佛にてまし〱けるとなん、參詣の道すがら名所ども多かりけるなかにまつち山といふところに」とありて、「いかでわれたのめもおかぬ東路の待乳の山にけふは來ぬらん」、「時雨れてもつひにもみちぬ待乳山落葉を時と木枯ぞ吹く」の二首を載せてゐる。其頃の眞土山は今日の如き、小さな猫の額のやうなものでなくして、もつと大きな松山らしかつた。江戶名所記に、「むかし此山より金龍を堀り出しける故、この所を金龍山といへりと、聖天の御社あり、大なる松山なり、古へこゝをまつち山と云ひし、これ武藏國の名所なり、山の上にのぼりぬれば、東の方に淺草川牛島新田見ゆ、西の方は大道なり」とあるので、江戶の

初世にあつた眞土山も今よりは猶大なる松山であつたらしい一説には往時花川戸と馬道との間なる追分の邊までつゞける小阜であつたのを、元和年間、日本堤築造の際堀崩して土を採つたとも云ひ、猶一説には古代の眞土山は上野岡と一帶の丘陵であつたとも云はれてゐる。とにかく開け往くとゝもに次第に小さくなつて、今日は型ばかりの高所になつたのであらう。

隅田川は源を秩父郡の深山幽谷の間に發し、小荒川、木賊谷の諸溪流を合せ、荒川となり、入間川と會流し、千住に至りて隅田川と稱し、繁華なる東京の東を洗つて、洋々として海に注ぐのである。遠源よりして、海に至るまでは五十五里と稱せらる。古へは利根川をも會合したから、其濶さはまとこに廣大であつた。中神守節の武藏國隅田川考に「隅田川は武藏國にても最大一の河にて、ことにあがれる世より名にたてたる名所なり、隅田川と稱する所は、河のわたり凡百間にあまれり、川上に至りては、ことにせばき所もあり、古くより角田川隅田川などかき、又あすだ川、須田川、須田の渡り、あるは隅田河原、須田の河原とも見えたり、又或説に、(芝屋隨筆)武藏風土記には、藍田川とかきて、すみだ川なり、すみと云は、そめと云事なり、すみた川はそめた川なり、古言にあなそみは染ると云事なりと、此川のみなかみは荒川にして、同國足立郡より秩父の郡の邊まで、すべて荒河と唱ふ、江戸のほとりにては隅田村を流るゝにより、かゝる名ありといふ、(後世となへよきまゝに、すだ村といふ、よりて須田川ともいへるなるべし)されど隅田川ありてより、村の名もいできしや知るべからず、江戸の内にて宮戸川とも云ひ又淺草川とも云へり、(淺草を流れば、かく云へり、たゞ大川とのみ呼べるもこの川なり)」とある。更科日記には「武藏と相摸との中にゐてあすだ川といふ、在五中將のいさことゝはんと讀みける渡りなり、中將の集にはすみだ川とあり、舟にて渡りぬれば相摸の國になりぬ云々」とありて、隅田川を武藏相摸の境としてゐるのは、作者が猶十三歳の幼女であつたから聞き違へたるか、若しくは記憶違へをしたのであらう。「其頃案内せしものゝ、多摩川を指して、是なん隅田川なりと濫に教へしならん」とあるのは、確に一説として聽くべきである。義經記に松戸の庄市川のことを記して「こゝに坂東に名を得たる大河一つあり、この川の水上は、上野國利根川の庄、藤原といふ所より落て、みなかみ遠し、末に下りては、在五中將の隅田川と名づけたり、海より汐さし上て、水上は雨ふり洪水岸をひたして流れたり、ひとへに海を見るが如し、水にせかれて五日逗留し給ひ、隅田の渡り兩所に陣取つて櫓をかき櫓の杜に馬を繫いで源氏を待かけたり」とあるが、此一事件は

治承四年のことで、吾妻鏡には、「治承四年十月二日、武衛(頼朝)相ニ乘于常胤廣常等之舟檝一濟ニ太井隅田兩河一」と記し、源平盛衰記には、「兵衛佐賴朝は、平家の軍兵東國に下向のよし聞給ひて、武藏と下總との境なる隅田河原に陣を取つゝ國々の兵を召されけり」と叙してゐる。太井川は即ち利根の下流で、隅田川と並行し、其間に幾多の支流が相通じてゐたから、義經記の云ふが如く、之を一流と見做して、水上は上野國利根の庄藤原と書いたのであらう。堯惠法師の北國紀行に、「利根入間の二川落合へる所に、かの古き渡りあり」と見えてゐるが、隅田川と太井川との間は今日と相違せる形狀であつたらしい。とにかく往日の隅田川は廣濶なる河原で、義經記に云ふが如く、雨降りて大水岸を浸す折は海を見るがやうであつたのである。類聚三代格、承和二年の官符には「武藏下總兩國の堺なる住田河は崖岸廣遠にして橋を造るを得ず」とあり、慶長見聞集には「隅田川は武藏と下總の堺を流れぬれば、河半よりこなたには石あり、あなたは皆沼なり」とありて、今日の隅田川とは餘程其趣を異にしてゐる。釋萬里の梅花無盡藏に、「木戸公、罷釣翁と號し、和歌の正脈を得、余洛に在りてその聲譽を聞くこと之を久うす、今や共に武藏の佳境、隅田の上流に寓し、往還虛月なし」とあるが、此木戸罷釣翁は木戸三河守孝範で、其家集に、此隅田川上流の寓居のさまを寫して、「武藏國豐島といふ郡に入江かけたる所に住侍りける、前はよし蘆など茂り、庭の常に佇みける、山遠き所なれば、めづらしく聞をるまゝに、近きあたりに都人の下りて住けり、夜ふけば目覺して、聞給へと申しつかはしたるに、よな〳〵枕をそば立てけれども、きゝ侍らず、人の聲などの遠きをきゝなして申すにやと、かこちおこすと、都人のうた、『曉の舟よそひする蜑の子の、かいよといふをしかときくらん』かへし『軒ちかくしか立ならす宿とひて待ちし夜ごろのかひよともきけ』」とありて、足利季世には隅田のほとりに鹿が出沒してゐたやうに書いてあるが、果して事實であつたらうか。しかし、趣味の廣かつた太田道灌は當時此川を娛樂に供するを忘れずに、禪僧を招いて船數艘を河上に泛べ歌詩鼓吹して樂んでゐた。道興准后も同作のものと水畔に杯酒の興を催し、夕月の面白きを見て、「秋の水隅田川原にさすらひて舟こぞりても月を見るかな」と打興じたのである。當時の隅田川原の風景を見るが如くに述べたものは堯惠法師の北國紀行で、古代隅田川文學中での最も卓越したものである。春の隅田川を叙しては、「二月のはじめ、隅田川のほとり、鳥越の翁、舟よそひして、隅田川に泛びぬ、東岸は下總、西岸は武藏野につゞけり、利根入間の二川落合へる所にかのふるき渡

りあり、東の渚に幽村あり、西の渚に孤村あり、水面悠々として西岸にひとしく、晩霞曲江に流れ、歸帆野草を走るかと覺ゆ筑波蒼空の東にあたり、富士碧落の西に有て絶頂はたへにきえ、褐野に夕日を帶び、朧月空に懸り、扁雲ゆき盡して、四域に山なし」と云ひ、夏日隅田川のほとりにて、遠村の夕立を望んでは、「雲分る日影の末も夏草に入間の里や夕立の空」と詠じ、初秋の朝霧を記しては、「隅田川の朝霧いづこをほとりとも知らず、小舟ゆきちがふかいの音のみ身にしみてあはれに侍る。」と觀じてゐる。

隅田川の名物は都鳥であつた。一たび在五中將業平の詠に入りて以來、隅田川とし云へば都鳥「いざ言問はん」となつたのである。林羅山が「自二從在五詠一歌後、流水飛禽愁二殺人一」と吟じたるが如く、都鳥は隅田川に於ける最も大なる景物であつた。古今集には、此鳥のことを「白き鳥の、嘴と脚赤き」と記し、伊勢物語には「白き鳥の嘴と足と赤き、鴫の大さなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ」と敍してゐるが、都鳥は云ふまでもなく鴎である。隅田川考には、「按に、今も隅田川のほとりに、鴎といふもの二種あり、一は大にして嘴脚などもさのみ赤からず一は形も大鴫のほどにて、嘴と脚とことに赤し、是都鳥なるべし、常に二種うちまじりて、魚など取ておれり、船人に問へばともに鴎なりといへり」と比較的詳しく說明してゐる。太田道灌は隅田川の都鳥について禁裡よりの御沙汰に對して、「年經れどわれまだ知らず都鳥、隅田川原に宿はありとも」と御答へ申してゐる。道灌が都鳥を知らぬわけはないが、其奉答をしないところに深い意味があつたかも知れぬ。武藏野紀行は疑はしい書であるが、其中に、「やう〳〵隅田川にもつきぬ、川づらを見れば、まことに白き鳥の、嘴と脚と赤き鳥の群れゐて、魚を食ふありさま、昔を思ひ出て」とありて、「都鳥隅田川原に舟はあれどたゞその人は名のみあり原」と云ふ狂歌めいたものを載せてゐる。藤原惺窩になると、此都鳥に對して感慨無量の體たらくであつた「淺草の東畔を徘歩すれば隅田川あり、輕舟短棹浩然一望すれば、鳥あり翩々愛すべし、いはゆる嘴と脚と赤きもの、和歌集中に昭々たり、其名を問はずして亦都鳥なるを知る。蓋し名は實の賓なり、故に其の鳴くこと京都の聲の如し、予覺えず鄕思を發す、南巢北嘶、(越鳥は南枝に巢くひ、胡馬北風に嘶くの故事)物皆然り、況んや人をや。昔し白氏(白樂天)江州の湓浦に左遷せられ、舟中に琵琶を彈ずる者の京都聲あるを聽き、淚滿ひて衫に著く、千載の佳話なり、彼に此に江州の湓浦江城の角田、京聲を感ずるも同じ、而して愧づるところは歌行をなす能はず、然りと雖も其鳥語の管絃は皆商婦の

琵琶に及ばざるや、吁。「飛鳴有レ鳥角田川、名曰二京都一聲自然、我亦舟中盗沛客、斷腸認作二琵琶絃一」。斯うなると都鳥も大分念入りになつて、在五中將以上の感懷である。後鳥羽院は「言問はん誰かはこゝに隅田川、名にあふ鳥はありやなしやと」と詠じ給ひ、俊成は「隅田川古里思ふ夕暮に、涙を添ふる都鳥かな」とよみ、爲家は「隅田川言問ひ渡る都鳥、また逝にや還ざかるらん」と吟じてゐる。其他代々の歌集に都鳥を詠じたものは少くない。中には隅田川の杜鵑を歌ひ、千鳥を諷したものもあるが、隅田川の景物はどうしても都鳥であつた。頓阿が「都鳥いく世かこゝに隅田川、往來の人に名のみ問はれて」とあるは、之を一括した斷案と見るべきものであらう。「都鳥は角田川の名物なれば、好色人の家に飼侍る」とあるは、業平の歌詠に入つたからの附會說で、寧ろ滑稽であるが、「好んで蛤を食ふ」とあるに至つては、事實であらうけれど愈々出でゝ愈々奇に奔つてゐる。

もう一つ隅田川に緣故の深いものには梅若塚がある。梅若傳說は足利時代に盛んであつた人買傳說であらうが、既に謡曲隅田川に出てゐるから、其出所は案外に古いのであらう。謡曲の中には人買傳說を取扱つたものは少くない。相坂・島廻・櫻川・婆相天・升戻・身賣・隱岐物狂など、今日では行はれてゐないものも多いが、此等はいづれも人買傳說に依つたものである。木賊・稻舟・歌占・住吉物狂・花月・三井寺・百萬などにも、同じ香が漂つてゐる。隅田川は世阿彌の作とも云はれ、又觀世元雅の作とも云はれてゐるが、永享四年（神武紀元二〇九二年西紀一四三二年）演能したことが見えてゐるから、足利中世以前の作であることは明かである。都北白河なる吉田某なるものはどう云ふ人であらうか、班女に出て來る吉田少將と同一人か否やは固より確かでないが、此物語それ自らが人買傳說から出たものとすると恐らくは事實ではなくして、梅若塚なるものも畢竟謡曲が作り成した古跡であらう。しかし梅若塚のことは足利季世に於て既に物の本に見えてゐる。梅花無盡藏の自註に「都鳥は隅田の故事なり、河邊に柳樹あり、蓋し吉田の子梅若丸の墓所なり、其母は北白河の人」とあるのを見ると、足利季世に既に梅若塚として知られてゐたのである。回國雜記には、「かくて隅田川のほとりに至りて、みな〳〵歌よみ披講などして、古の塚のすがたあはれさ、今の如くおぼへて」とあるが、此塚が誰人の塚であるかは說明してゐない。之を梅若塚と解するのは善いとしても、事實梅若の塚であるかどうかは分らないのである。小梅に業平塚があるやうに、隅田河畔の古塚を謡曲の隅田川に附會して梅若塚の名を命じたのではあるまいか。しかし美少年の哀

話が附會されてから、隅田川には一種の寂寞たる情趣が點ぜられたのである。

鎌倉の初や、南北朝、下つて足利季世までの隅田川には多少の戰史を遺してゐる。しかし此等の時代に在りて此附近はまだ重要な地點でなかつたが爲に、云はゞ戰史中に於ける單なる通過點に過ぎなかつた。宇治川や勢多川やが京都の防禦線であり、姉川や筑後川やが血腥い合戰場であつたのとは違つてゐる。足利季世にやゝ江戸の地が注目されるやうになつた時に、隅田川は關東の一美觀として稱へられたのである。釋村庵云ふ「凡そ關左に遊ぶものは、必ず富士山を見、武藏野を過ぎ、隅田川を渡り、筑波山に登れば、則ち皆四方觀遊の美を誇るなり」と。隅田川は依然として都鳥の隅田川であり、庵崎眞土山の隅田川であり、梅若塚の隅田川であり、歌枕の川であり、平和な美しい流れであつた。徳川家康が入府してよりは、都市の河川として運輸航通の便に資したるのみならず、都市生活者に趣味ある娛樂を供し、慰安を與へるものとなつた。

二

江戸とし云へば隅田川、隅田川と云へば江戸、江戸と隅田川隅田川と江戸とは離るべからざる密接のものとなつた。隅田川の對岸は卽ち葛飾郡で、自然の風趣の饒かなところであつたが、此方の岸は江戸の最も繁華な淺草、兩國であつた。淺草は金龍山淺草寺の靈驗あらたかに、諸人群集の處であり、近くに猿若町の人氣を集めるあり、日本堤は蜒蜒として新吉原に往き來ふ人の數しげく、兩國に水茶屋軒を並べ、見世物小屋にそれ〴〵の奇巧を凝らせば、江戸の民衆は押すな〳〵で此に絡繹として集つた。まことや隅田川は自然と人工とを共兩岸に備へて、滔々として日夜流れつゝあつたのである。或時は筑波の翠黛を水に蘸し、或時は梢乘り込む山谷堀に猪牙舟を送つた。江戸の文藝は卽ち芝居と新吉原との文藝であつた。芝居と新吉原とを共沿岸に控へて、自然美に富んだ隅田川が、江戸文藝に關與の深かつたことは云ふまでもなからう。

江戸の文藝に對して隅田川の寄與するところは實に大なるものであつた。よし猿若町と新吉原とがあつたにしろ、隅田川が無かつたならば江戸の文藝が其興趣を殺がれたことは幾許ばかりであつたらう。隅田川は肉の美に添へるに靈の香を以てしたのである。

隅田川に關する江戸の文藝は民衆的で、市井のものであつた漢文に漢詩に、將た國文に、隅田川情緒を敍べたものがあつたにせよ、それは極めて少數であつた。しかし江戸に起つた歌舞

音曲に隅田川を歌はぬものは殆んどないと云つてよいのである英一蝶の作つた隆達節、端唄の夕暮、小唄の山谷の小舟を初めとして、河東節に船の内、七重八重花の栞あり、清元に梅の春・北州あり、長唄に吾妻八景、賤機帶あり、或は「大悲擁護の宮戸川」と云ひ、或は「隅田の流れ清元の」と云ひ、隅田川情調は到る江戸音曲の中に搖曳してゐる。

狩野派や南畫やは支那の風景を畫いてゐる。よしそれが日本の風景にもせよ、描き出せるものは、即ち支那流の風景畫であつた。圓山派四條派は流石に寫生を主として、京洛及其附近の風景畫を描いたが爲に日本風景の日本畫を作つて居り、京洛の山川は畫圖の裡に收められて能く其特色を發揮してゐる。狩野派南畫の日本風景畫は多くは日本風景の特色を忘れて、之を支那風に取扱つてゐるばかりでなく、都市の如き手近の風景は殆んど之を顧みなかつた。探幽の富士百圖、文晁の五十三次、崋山の四州眞景の類は蓋し稀有の例に屬してゐる。しかし市井の藝術家は日本の風景を日本畫に取扱ふことに專心工夫してゐた都市美は彼等の奚嚢に入り、彼等の畫筆に依りて盛んに描き出されたのであつた。隅田川は彼等に取りて最も好き畫題であつた。隅田川の畫圖を收めて一篇の繪本としたものに、鈴木春信の八千代草三卷と、葛飾北齋の隅田川兩岸一覽とがある。此他に岡澤鷹水が兩岸の風色を描き、澤田東江が題した隅田川兩岸一覽なる二卷の版畫があるが、此は浮世畫派の畫でなく、風景を主としてはゐるものゝ、十分隅田川の特色を發揮したものではなかつた。春信の八千代草には、「實に目出たき御代に隅田川、盡せぬ流れの幾年を祝ひて八千代草と題して云々」と序してあるが、寧ろ隅田川は從で、風俗畫が主である。各圖の上には隅田川に關する歌人の歌詠を題してゐる。或は雪、或は風雨、春の曙、秋の夕、犬曳く伴人のあとには鷹匠行き、馬上に小手かざす主人公は、水邊の蘆荻の間に獵の幸あるや如何にと求めるのであらう。柳の糸低く垂れて、路傍の田では馬追うて鋤く手も忙しげである。雲間には半輪の月照りて、六部と荷擔ぐ男とを載せた渡舟は今岸を離れようとしてゐる。釣竿肩に魚籠下げた男は慌たゞしげに之を呼びとめてゐる。まことに寂寞たる春の夕である。三圍の鳥居のほとりには手弱女が三四人立つてゐる。苫かけた舟は今河を下る。彼方の岸には都鳥が浮んでゐる。如何にも長閑かな隅田川らしい景色である。衣冠の人と法師と伴人と稚兒とを載せた舟は今河を横ぎつてゐる。お誂への都鳥は嬉々として水を泳ぎ廻る。云ふまでもなく業平の俤である。炬燵にあたつて一人の女は假寢してあるが、もう一人の少女は文を讀んでゐる。寢てゐる者は夢に相思の人と相見てゐる

のであらう。又は戀人からの便りに相違ない。上には賴氏の「隅田川すみこし月の都鳥の名にさへ人ぞ戀しき」の一首を題してゐる。大空の彼方には富士の靈峯が聳えてゐる。向河岸には茅屋が參差として見える。水上には筏がゆつたりと流れ行く。緣の端近く一人の美女がうつとりと立膝して景色に眺め入つてゐる何と云ふ美しい光景であらう。山の端に月が落ちようとして、いづれも名殘惜しげである。女も月を見てゐる。杯手にする男も、對座する男も飽かず眺めてゐる。籬の側には菊の花が咲いて水は渚に澱んで音もなさゝうな。此書は明和五年の著作である。

北齋の隅田川兩岸一覽三卷は河口より上流に遡り、正月より歲晚までの江戸年中行事を隅田川の兩岸に收めてゐる所に才氣が橫溢してゐる。高輪の曉烏から吉原の終年まで自然と人事とを巧に配合した風俗繪卷である。新柳橋は夕立篠を束ねて、廣重の大橋あたけの雨は、之を縮圖したかの如き觀がある。雪は橋場に淡くして、眞崎に深い。眞土山の聖天堂から三圍•牛御前を眺めた一幅の向島全景は、卽ち時雨となつて現はれてゐる廣小路の群集•兩國の納涼は江戸の繁華を示した隅田川情調である。隅田川文藝は極めて多々あるが、斯程までに脈絡あり洒氣あり情趣の備かなるものはあるまい。歌麿の吾妻遊（寬政二年板）中隅田川を指いたものには、山谷堀の猪牙舟、駒形堂と今戸の瓦燒、牛御前等があり、勝川春章の繪本握連花（寬政二年板）には、三圍の土手を十數名の禿が群をなして行く圖を載せて、遠景に淺草寺の塔、聖天堂、山谷堀を見せてゐる。此等の繪本を數へ立てると、僕を更ふるも盡きまいが、そのうちで最も善く寫生的に隅田川の風景を描いて、名所圖繪式に詳悉を極めたものに、北尾政美の畫いた、繪本吾嬬鏡がある。このうちには牛島秋葉•三圍•梅若•兩國•中洲等があるが、三圍と梅若とを一見して見よう。三圍には七珍萬寳の「野邊の千草もいやおひの頃は日のあしとりものろ〳〵と牛の御前の御前をすぎ、そこら三圍のわたりにて摺火打の吸付烟草も三遍廻るてふ謗思ひつゞけておかし、向ふに見ゆるは待乳の景色、こなたに見ゆるは釜山海の湊にあらぬ山谷堀の賑ひ瓦竈のかまどの烟は空に高津の天皇の御製をさへ思ひ合せて花の吾妻の繁榮を恐れながらことぶき奉る」と題して、下に三圍、牛御前、遙かあなたに山谷堀•眞土山•今土の畑までも事細かに描いてある。隅田川の中ほどには蘆荻生ひ茂りて、三圍の廻りは一面の田圃である。土手の上には馬曳く男も長閑に見える。自然の風景は備かに、しかもどことなしに都會近郊の俤が現れてゐる。梅若には櫻川杜芳が題して、「水神の杜梅兒の堤より目の及ぶ程ぞ、右の方は紫の

江戸節に云へる間夫の閨房、色かへぬ常盤津が語れる花畑むら中を流るゝ隅田川に、諸白の左りきゝなる、左へしつのみやしろは、天照すおん神と、隣あはせに中もよくシヤン〳〵と地をしめ給ふ眞崎といへる所なりと、ぼうし杭のしれしおもむきを、しれしまゝにかひつくる心こそ」とありて、梅若・水神・眞崎神社を、一瞬の裡に收めてゐる。漫々たる大江の上には帆かけた舟も見え、梅若塚のほとりには子を負うた女の姿も土地柄にふさはしい。隅田川情調は悠然として香つてゐる。

廣重は江戸都市美の讃嘆者で、又其紹介者であつた。江戸都市美の粹を鍾めた隅田川沿岸の風景は彼に取りて最も好きた畫題であつた。或は晴に或は雨に、雪に月に、花に、其勝景を描かぬものはなかつた。眞崎綾瀬から永代佃に至るまで彼の筆に上らないものはない。佐野喜板の東都名所にも、川正板の東都名所にも、喜鶴堂板の江都名所にも、川正板の江都勝景にも、多くの隅田川の風景を收めてゐるが、今戸の夕照・三圍の暮雪・木母寺の秋月・待乳山の晴嵐・金龍山の晩鐘・吾妻橋の歸帆・渡場の落雁を收めた隅田川八景もある。雪中の隅田川三枚續・堤の花の三枚續・隅田川の良月の三枚續等を初めとして、彼の畫集の中には數へ盡されぬほど隅田川を含んでゐる。名所江戸百景百十八枚の中、隅田川沿岸の風景は二十枚ほども算し得るのである。篝火燃ゆる佃の白魚舟・斜に降り濺ぐ大橋あたけの夕立、紅葉の色濃き向島秋葉・杜鵑の一聲二聲曉の空を啼く駒形堂の如きはいづれも隅田川の美しい情調であつた。鈴木江戸土産中にも幾多の傑れた隅田川風景を淡々たる輕妙の筆致中に見出し得るのである。清長春潮歌麿豐國の作品中には艶めかしい美女の背景として、隅田川は江戸趣味の最高潮を現してゐる。大川端の驟雨、兩國の納涼、河畔の茶店、濱町河岸のそゞろ歩きなどは、錦繪國の江戸であつた。

まことや隅田川は江戸の文學であり、江戸の藝術であり、江戸の情調であり、江戸の趣味であつた。秋海生ふる武藏野の中に在りて、繁華火の如き江戸の裡に在りて、限りなき美しき風情を點じてゐたのであつた。都市生活者に對しては趣味の供給者であり、多大の慰安者であつた。江戸民衆に取りて隅田川は大なる恩人であつたのである。

私どもの先人は風流人であつた。雪見と云ひ、月見と云ひてその折々に興を催したのである。「いざさらば雪見にころぶところまで」と詠じて、白皚々の雪に風流心を咬つた。「名月や池をめぐりて夜もすがら」と、寢もせず打興じてゐた。されば江戸時代に於ては、大川に雪見の舟を浮べ、水樓に月見の宴を催して、更に寒しとも思はず、冷えるのを忘れてゐたのである。山

中の雪は冷かに淋しく凄じくあるが、都會の雪は親しみのある温い氣分のものである。江戸民衆に取りて、江戸の雪は特に都會の雪の特色を備へてゐた。隅田川は觀雪の絶好地で、江戸の風流人は此に其風流を盡したのである。高輪に二十六夜待をする江戸の民衆は大川端で月見をすることに忙しくあつた。增補江戸年中行事に「八月十五日、月見諸所賑かなり。月、角田川眞崎」、「十一月、雪、隅田川・三圍り・長命寺・王子・上野向が岡日ぐらし・飛鳥山・目白不動」とある。東都歳時記に云ふ、「八月十五日夜、之を中秋と謂ふ、民間、粉團を作りて月を祭る、蓋し月の形に象るのみ、尊卑皆賞月の宴を設け、歌舞彈絃、夜闌にして眠らず」と。蓋し雪見・月見は古代からの風流なる邦俗であつたが、都市の繁華が絶頂に達した江戸時代の江戸民衆は之を其歡樂の一つとして盛んに樂んだのであつた。而して隅田川は此等の絶好の場所であつたのである。

往さ來るさの大道も、軒並櫛比する市中も、一たび雪花繽紛として舞へば、白玲瓏として天地無塵乾坤一白の境となつてしまふ。廣重は金龍山の雪に仲店の雪中情調を描いたが、又淺草の歳の市に賑ふ人波と御堂の屋根欄干も五重の塔も傘も大地も雪に埋れた光景とを寫して、朱と白と繁華と凄冷とを對照させてゐる。斯る雪景は都市ならでは見得べからざる光景で、馬とぼ〳〵と深山の雪を分け行く旅人と馬子とを描いた木曾街道の大井や、驛路が死の如く靜まり返つた沈々たる行書東海道の鞠子や、保永堂板の蒲原や、近江八景の比良などとは全然異つた趣がある。同じ月にしても大川に寫るものや眞土山の森をくつきりと黑く染めたものは江戸の背景を負うた都市の美觀である。「日は暮れて蒼山遠く、天は寒うして白屋貧なり」とは、之れ遠境の雪にして、「今朝謝家の興、幾處郢歌傳ふ」とは、卽ち都市の風流である。玉川の月は擣衣の砧上拂へどもまた來るべく、洞房を窺ふの月影は方に是れ畫樓繡戸を兼ね、渾べて是れ可憐の者であらう。

吉原三千の粉黛の膩水は流れずとも山谷堀に、猪牙舟の影は常に往來してゐた。又江戸の末造に當りては堀の藝者なるものをも産したのであつた。江戸の季世よりして柳橋は狹斜の巷となつた。從つて隅田川のほとりには酒樓畫閣の高く聳ゆるものが少くなかつた。天下の明月之を十分して揚州其三を得而して柳橋其七を得たりとまで、多恨の人をして咏美せしめたのも、畢竟隅田の大江が然らしめたのである。首尾の松が枝、竹町の渡し百本杭、下つては中洲・永代・佃・鐵砲洲は芝浦までつゞいて、水にそれ〴〵の趣を添へてゐる。

三

月に雪に隅田の眺めは美しくあつたか、取り別け江戸の民衆を吸收したのは、向島の花と大川の納涼とであつた。墨堤十里の花と謳はれた向島の花は、江戸の花のうちで最も遲く植ゑつけられたものである。江戸では東叡山の花が最も古く、又最も名高く、之についでは御殿山・飛鳥山・小金井等があつたが、向島の花見は江戸の中葉より遙に後れて行はれてゐる。土手の左右へ桃櫻柳を植ゑて水邊の風景を豐かならしめたのであるが、いつしか桃は枯れたと見えて、櫻の名所となつた。

花見は江戸民衆の四時行樂中第一のものであつた。されど東叡山の花見は、地が將軍家と緣故の深い寺境であつたから、有頂天になりて騷ぎ興ずるを許されなかつた。飛鳥山は遙に筑波を望んで、開濶なる高臺で野趣があつたから、巫山戯散らすには最も恰好な地であつた。御殿山は海を越えて縹渺たる安房上總を一目に見る好風景の地で、櫻の名所として海岸の地は寧ろ珍らしくあつた。小金井の櫻は淸冷玉を轉ずる玉川上水の流に臨んで、吉野櫻の花も優しく、最も野趣に富んでゐた。しかし交通の割合に不便であつた江戸時代では、土地に依りていづれも相當の距離があつた。小金井はいづ方よりしても遠隔であつたが、南江戸の民衆に取りて飛鳥山は遠く、北江戸の士女に對して御殿山は決して近くはなかつた。向島になると舟檝の便があつた。必ずしも陸によらずとも、河渠の通ずるところは一棹悠々として大川に出で、遡りて水畔の花を賞することが出來た。舟中にて彈絃歌舞、飲食は極めて自由であつた。舟を三圍長命寺あたりに繫いで、堤の上を踊り狂ふも氣隨氣儘であつた。歸路には舟中に醉臥して歸るにも甚だ便利であつた。斯くの如き便利は江戸の花見場所中、他に類例がないと云つてよい。東都歲事記に、墨堤の花を敍して、「抑此地は四時變化ありて景趣一ならず、あるが中に彌生の頃は長堤櫻花ひまなくて、よそ目には一匹の練を引くかとあやまたる、都下の良賤日每にこゝに群遊し、樹下に宴を設け歌舞して歸るを忘るゝは、實に泰平の餘澤にして、是なん江都游賞の第一とぞいふべかりける」とある。

夏日、大川に舟を浮べて凉を納れたことは、既に慶長の頃に始まつてゐる。(昔々物語)其初は平田舟に屋根を造りかけたのであつたが、次第に大船を作ることゝなりて、承應の頃には大分盛んとなつた。しかし明暦三年に江戸の大火があり、翌年には江戸城の建築等がありて舟と云ふ舟は盡く土木工事に使役されたが爲に、大川には凉船の跡を絕つた。けれど江戸の秩序が恢復するとともに、舟遊山も亦復興し、船は漸次巨大なるもの

とたり、九間に臺所一間ある山一丸・十間に同じく臺所一間の熊一丸・十一間臺所一間の十一丸を初め、神田一丸・江戸一丸、西國丸・北國丸・東國丸などの大船が川幅狹しと漕ぎ出でた。「大身衆是に乘つて辨當色々美を盡くし、人數十人なれば棹十本兩の簾に添へてかけ並べ、十二人なれば十二筋なり、是を大身の晴に見るなり、町人の出る所には棹一筋もなし、大身の乘りたる舟は棹ばかりにあらず、家來侍袴着用人らしきものは綟子肩衣着け」(昔々物語)ての豪勢な納凉もあつたのである。「忘れては春の夜や花火のさかりを見んと、淺草河の暮を急ぎしに、九間市丸の大船金線のかざり浪に映つりて見るに、小座敷九つあるに付て名の面白し、云々。また一間には祝彌四郎がかりのかはりまがきのつれ歌、永閑ぶし、道行、鱸の間には伊勢守が斗樽、高砂屋の白味噌・川越瓜の組籠、青鷺は火汁眞鰹はさしみ、取交ぜての騷ぎ、世間も恐れず、天下の町人なればこそ一日五兩の船賃は出せ、これさへ奢と詠め行くに、阿武丸と云ふ船にて釜鉤の蚊帳、乳絲緋緞子、四角の唐房匂ひの玉際かせ、軸簾の內には人も大勢あると見えじ」とあるは、方に元祿の寬濶なる舟遊山の實況であつたらう。江戸砂子拾遺には此等の大船百艘あつたことを記してゐる。しかし後世になると、屋形船は次第に減じ屋根舟が多くなつた。東都歲事記には、船宿のある河岸を擧げて、日本橋東西兩岸・新町河岸・本銀町一丁目・江戸橋堀江町・伊勢町・兩國橋東西・柳橋・米澤町・本所一ッ目・石原・淺草川吾妻橋の東西・鐵砲洲・靈巖島・日比谷町通・小網町・深川・筋違外より神田川通・牛込門外・新橋汐留等の名を列記してゐる。

安永元年、中洲の新地の築立が成就し、同四年に至りて町屋の建築が竣はつた。武江年表に依ると、「其地は新大橋より南の方、酒井家白須家菅沼家御屋敷前通り川岸凡三丁餘。坪數九千六百七十七坪餘、茶屋九十三軒あり、其內四季庵と云ひしは、北東の隅の料理屋にて殊に大廈なりしとぞ、湯屋は三軒あり、其餘の家數知るべからず」とあり、大抵御覽に、其盛況を述べて、「四季庵の生簀魚みちて躍り、すみやの乙女袖を翻してまねく、きん／＼たる衆中は河洲にあがり、ぶき／＼せぬ麥飯は丸屋でしこむ、唐和の卓子臺は四つ足の數に入らず、魚飯の臺所は三まいにおろして料る、藤よしへ這入ば松源で送る、あちらが四こくの讃岐屋なれば、こちらは武藏川越屋、樂庵が坐敷ふさがれば、福壽は門さして賣切なり、今を日の出屋だんだん福富、松は葉かへぬ常磐屋に、夢に見てさへ三茄子や、丹波屋やかみ様いそがしく、常陸や大酒どや／＼來る、その足もとはよろず屋、どんぶり大鉢蓋の物、大盃鮮を見さいなと、松が門のどつさくさ、いく萬年屋家々の榮へははてしもなら茶見

世、(中略)それより五月二十八日、川邊に出茶屋建並で、此川づらを見おろせば、吉野兵庫に川一高尾、夷一川濟並て、淨瑠璃、長うた、こはいろ、おどり、人形づかひ、猿廻し、數萬の挑灯奇雜星の如し、玉屋鍵屋の花火、流星天をも衝ぬく風情也でんがく、しぎやき、かば燒酒、西瓜の立うり、瓜夏桃、あなたこなたへ漕ちがふ、さて又陸には砂場そば、にしき團子に大佛餅、いくよ餅、蛇目鮨、ゆで枝大豆に唐もろこし、錐のたてどもなかりけり、うしろに見ゆる大のぼりは大坂下り早崎京之助、蜜柑といへる人間か鳥かわからぬ上竿奴あり、こなたは鶴一身ぶりこはいろ、小供狂言、硝子細工、其外種々の見物に、諸人の足をぞとゞめける」と云ふほどに、兩國の繁華を奪つて、殊に夏日の雜踏を來した。しかし中洲の盛況は一時の現象で、寬政元年十月より大川筋其他川々の工事ありて、中洲の築立地は取拂はれ、翌年に至り、又漫々たる大江となつて、十四年の榮華は空しく「屋根舟もやかたも今は御用船ちゝつゝんは止みつちつんで行く」の落首を殘した。之よりして後、兩國はまた繁華な納涼地となり、水に陸に民衆の群集するところとなつた。

江戸名物鹿子に出た料理茶屋中、向島にあるものは、牛御前門前の葛西太郎・秋葉社の邊りなる大黑屋孫四郎・同じく麥斗庵眞崎の甲子屋等であつた。安永八年の春眞土山の麓辨天池の跡に三橋亭と云ふ料理茶屋が出來た。武江年表に、「眞土山聖天宮西の麓に辨天の池あり、池中に石投げ婆々と號し、丈四尺餘の老嫗の立像あり、兒童石を投れば、頓に投返すといひ傳へけるが、一年火災に罹り、池も埋れ石像も土中に埋れ、四十年來知る人なし、今年(安永八年)の春、下總國八日市場の百姓平山忠左衞門といふもの、江戸に來り、此所を借りて酒樓を營み、池を堀改め、三條に橋を架して三橋亭と號、又美麗の女に機を織らしめて客に見せけるとぞ」とあるのは即ちそれである。大抵御覽に此家のことを敍して、「下つふさの國奄崎にいたる、時分もよしと葛西太郎、暫こゝにやすらひて、鯉の羹飽まで食らひ、一盃呑んだる機嫌に任せ、髮があつたら四五日は、髮ゆふ世話もあるまゐと、つぶやきながら都鳥、眞赤に成て、箸と足、いざことゝ桃をつき出して河原の方へぞ立出る、藜の杖に笠木計、こゝで晉子が雨乞を思ひ出して遙拜し、此里人を呼かけて名所々々を尋れは、こゝは牛嶋牛の御前、あちらに白鬚、こちらの森岸へそひしは梅若なりと云々、(中略)待乳の山へ至りければ、夕こえくれば、あやはとりきりはたり〳〵と晉する家を立寄てうかゞひ見れば、門高く、高樓かけはし離れ座敷、玄關構の眞正面、三橋亭といふ額を高くかけしはゆえあるさま、(又略)娘と一所に三絃箱、あそこに豐後、こゝにめりやす、容に

花ふり音樂聞ゆ、段々座舗を見物すれば、げに物干でもありそうな所に、庭とは思ひもよらず、左りへゆけば、大きな洞穴、千尋の底に人聲あり、聲をしるべに下りゆけば、漸あかるき所へいづる、こゝは御勝手大取込、お縫の道行みるやうなと、獨語して、見あるけば池の邊にたて出せし、座敷の數々、滿座の客、江戸の豪華を感心して、表の方へ立出れば、最初這入し玄關にあらず、五百機たてゝ織なすをりもの、七夕つめもそこのけといはまほじげの風情なり、仰げば上にあやはとり、これはとる手も手際な手つき、げに手もたゆくぞ見えにける」とありて、江戸の人に機織のさまを目のあたりに見せるところに當時の好奇心をそゝつたことと思はれる。葛西太郎や麥斗庵やの光景は、江戸名所圖繪や江戸土産等に縮圖されてゐるが、泉水を湛へ、亭榭を構へ、閑雅な野趣あるところに江戸の民衆を呼んだのである。文化頃になると、山谷に庖丁自慢の八百善起りて大音寺前の田川屋とともに通人粹客に喜ばれ、其後は小梅に小倉庵あり、柳橋の殷賑とともに、川長・柏屋・梅川・青柳・龜淸・生稻・深川亭・柳光亭等の酒樓が大川端に林立することゝなつた。

淺草並木の山屋の隅田川諸白、兩國の幾世餅なんどは江戸時代の名物があつたが、幕末に至ると、向島に長命寺の櫻餅を出し、其後に言問團子なども出來て、向島にも天晴れの名物を産することゝなつた。獨り名物のみではない、江戸民衆渇仰の中心とも云ふべき助六は、架空の人物ではあつたが、花川戸の助六といふところに劇作家の働きが見える。之を深川の助六としても、之を牛込の助六としても差支はないが、隅田川の沿岸で淺草に近い花川戸の助六としたところに非常な親しみと非常ななつかしみとを江戸の民衆に與へたのである。實在の人物としては藏前の札差が、金力に依りて豪興を衒ふやうになつて、幾多の通人や豪客やらを出してゐる。藏前は云ふまでもなく大川の沿岸である。

江戸の評判美人は其初に於て吉原にあつた。よし市中に幾多の小町娘や娘番附の名代ものがあつたにしろ、遊女は公開的であつたゞけに其名を世間に謳はれたのである。三浦屋の高尾、中萬字屋の玉菊、松葉屋の瀬川の如きは其中で最も喧傳された。春信や春章重政やの美人合若しくは政演の自筆鏡に現はれた遊女は數多くあつたが、後世傳へられるほどのものは殆んどないと云つても善い。水茶屋の流行とともに評判美人は水茶屋女に移りかはつた。淺草楊枝店の柳屋お藤の如き、隨身門前の難波屋お北、兩國の高島お久の如きは、谷中笠森稻荷の鍵屋お仙と相並んでの評判者であつた。吉原・淺草・兩國が江戸の盛り場であつたがためではあるが、此等の美人は、いづれも隅田川沿岸

の花なりしと云ふに於て敢て異存はあるまい。

隅田川と江戸とは極めて密接な、離るべからざる關係があつた。隅田川に依りて江戸は彩られ飾られたのである。隅田川が無かつたならば江戸は極めて落寞であつたらう。江戸の文藝も斯ほどまでに起り得なかつたでもあらうか。是に於て江戸の民衆に取りて、江戸の文化に取りて、江戸の趣味に取りて、隅田川は極めて大切なものであつたと云ふことを、しみ〴〵と思ふのである。

四

山を負ひ水を帶べる、古き京の都は自然美に富める處である。山は朝爽夕佳のさま面白く、水は白石寒流の趣を極めてゐる。そこに文學藝術の盛になつたのは決して偶然でない。源語平語が述作せられ、土佐・光琳・圓山・四條の諸派が起り、乾山・仁清木米の窯業が振つたのは、自然美の力の與かつて多かつたことを否むわけにはゆかぬ。西に富士、東に筑波の秀麗はあつても山に遠く、川も遥かなる武藏野の一隅に新に開拓せられた江戸は自然の景致に乏しくあつた。唯其間に一水遠く秩父の群嶺より流れ出たる隅田の大江が汨々として晝夜を舍てざる萬斛の水を運び行くのは、江戸の爲に他に換ふべからざる自然美であつた。新開地のこととて名所舊跡は殆んど無いと云つて善い。京の都が足一歩門を出づれば、歌枕あり、歴史あり、古代の遺芳あり、過去の香があつたのと、江戸は全然異つてゐた。唯隅田川にのみ歌枕舊跡遺芳は存してゐたのである。江戸の民衆は隅田河畔に遊んで、初めて紅塵の境を脱して、自然の風趣に親み、現代を離れて過ぎ去りし見ぬ世の追懐に耽り得たのである。江戸の民衆は善く隅田川を理解して、之を利用することに極めて鋭敏であつた。

京の都の夕涼みは名高くあつたが、今日此頃においては、それも過去の思ひ出に過ぎない。僅に木屋町や先斗町の床に名のみの夕涼みを殘してゐる現時の狀態は、京自ら其名物を破壞したのである。あの暑い、風の死んで、日中の餘炎が醒め切れない京の都にて、足を浸す四條の夕涼みや、日中の暑を寒冷氷のやうな鴨河原の水に避けるのは、必然の催しである。喘ぎ喘ぐ一日の暑さのうちで勞れ切つた身體を休めるには、夕涼納涼は無くてはならぬ都市の慰安であつた。潑墨したやうに眞つ黑に染めた東山の暗の中にはちらほら燈火が隱見してゐる。清水のあたりでもあらう。舊都の夜、東山を望むときは、いつも源語の夕顏の卷を思うて、其一節を朧げな記憶を辿りて口吟むを常としてゐる。「十七日の月さし出て、河原のほど、御さきの

火もほのかなるに、烏邊野のかたなど見やりたる程など、物むづかしきも何とも覺え給はず、かきみだる心ちし給ひておはしつきぬ、あたりさへ凄きに、板屋の傍に堂建てゝ、行へる尼のすまひいと哀れなり、みあかしの影ほのかに透きて見ゆ、その屋には女獨り泣く聲のみして、とのかたに法師原の二人三人物語りしつゝ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする、寺々の初夜も皆行ひはてゝ、いとしめやかなり、淸水の方ぞ光多く見えて、人のけはひもしげかりける」。此は淋しく凄じく荒凉たるけはひが滿々たる東山で、固より夜の歡樂を趁ふ夕凉みの河原とは大した相違であるが、夜の東山には何となくひつそりとした靜かな蕭條たる氣分があつて、旅愁を誘ふようすがになる。河原にしつくらつた床の雪洞は朧げな光を瀬に落して、舞子のはでな衣裳や金糸の帶などが影を流してゐる。物柔かな京言葉が笹色紅の唇から絶間なく響いて聞える。辻占賣や物賣る聲が其間を縫うて床から床へと訪れる。せゝらぎの音を隔てゝ宮川町の茶屋の軒燈が柳の糸の風に靡くひまから漏れて、何處ともなく三味の音が悠揚として聞えると、ふと宮薗節の掛行燈（お花半七道行縁花房の）文句が胸の裡に浮かんで來る。「曉を閒夫に恨みて寄に待つ、戀のいきぢのかねごとも、つらやあらしに散らされて、お花は不便やかちはだし、裾まとくれて女子氣に離れ難なや半七があとや先なるもつれ髮、むすぼれそめし緣のはし、人目を包む顏と顏、戀路にやつれかはれども、心の誓詞いつまでも河原傳ひをそこはかとなく、新地〳〵の掛行燈、絹屋播磨屋立花屋、わしが故鄕の丹波屋も、今は井筒の淸水より深い二人がみなと染、しんぞ戀中紫の、すへで扇の二つ紋、とんと一から十文字屋かくは逢ひし身の菱屋、ほんに壺屋と思はれて、京屋嫁入の若松屋、海老の腰まで鍵さげて、なか吉田屋の丸かれと願ひ金屋のかひあらば、たとへ東の美濃伊勢路、鄙の宿にも伏見屋と船に積れぬ思ひの數は、富士の白妙比良の雪、妹背の鳥や、さゝやきも人も菊屋とたつ羽音、互に追つ追はるゝも戀のさかひのいばら垣、身は津の國のよしあしも、よみつくされぬ世のうさを、思ひつゞけ立どまり」とある光景は、幾十百年の隔たりはあらうが、今目前に見るやうな趣きである。宮薗節は上方の產物として如何にもふさはしいもので、脚色は夕霧一段を除いて他は盡く心中物である。調子の低い三味線で、沈んで落して歌ふところに、しんみりした、淚を誘ふ情味がある。澁いうちに粋がつた河東とは著しいけじめである。其のけじめは、やがて四條の夕凉みと兩國の納凉との相違である。華やかではあるが、どことなく靜かなのは四條の夕凉みで、派手で豪快なのは兩國の納凉であつた。「さて又凉みの夕景色、上の御手洗拘ふ手

に夏なきとしも思ひ川、水に蛙の聲立てし苫屋のかゞり打煙り、かなたこなたに灯火のやゝ見えそめつゝ程もなく、東石垣西は又ぽんとにつゞく石垣町の軒に爭ふ釣行燈、上は三條橋の下、下は松原こなたまで流れにつゞく水茶屋は曇らぬ空の星月夜、天の河原もかくあらん」と宇治の古淨瑠璃にあるのは、四條夕涼みの大觀で、「此人數舟なればこそ涼みかな」、「一兩の花火間もなき光かな」と其角が詠んだのは兩國納涼の實景であつた大阪は水路縱横麻の如き水郷であるから、水上の納涼は盛んであつたが、夕涼みの點から云ふと、四條の夕涼みに及ばず、兩國の納涼に劣つてゐる。「棚無船に幕はしらかし、辨當提重を入れさせ、曲水ならねども、手まづさえぎる盃の、波に浮べし遊宴も見所有て面白く、又琴・三味線・笛・太鼓・鼓・胡弓とりどりのはやし物にて、船漕ぎ出づる物の音に、水底の魚鱗も躍りあがるかとも思はる、斯る遊興また〳〵あるべしや」(難波鑑)とあるは、大阪に於ける船遊山であるが、四條の夕涼みや兩國納涼やの如き特色は存在してゐない。

中洲には料理茶屋や、藥湯や、出茶屋や諸藝物まねの小屋が櫛比して、民衆歡樂の熱鬧地であつたが、兩國の繁昌は場所がらだけに一層殷賑を極めたのであつた。東都歳事記に「此地は四時繁昌なるが、中にも納涼の頃の賑はしさは餘國にたぐひすべき方はあらじ、東西の岸には葭子圍の茶店櫛の歯の如く比び客を誘ふ手弱女は眞白に粹な富士額、雪の膚、縮緬に透りて涼しさたとふるもいとをかしく、大路には假屋を構へ、綱渡り、輕業、南京操り、猿芝居、其餘山野の珍禽異邦の奇獸に至るまで種々の見世物看板を掲げ、チャルメルの聲喧しく講釋師・楊弓影芝居・落話・髮結床・人相見・占者の床・水菓子・心太など物としてあらずといふことなく、橋上の往來は肩摩踵隨轟々然として雷の如し、やゝ日も暮れ行けば、茶店の擔の燈火數千歩に映じて暗なき國の心地し、樓船の挑灯は波上にきらめきて、金龍影を翻し、絃歌一時に涌いて、行雲動かず、忽ち疾雷のはたゝくに驚きて、首を擧ぐれば烟花空中に煥發し雲の如く霞の如く、月の如く、星の如く、麟の翔るが如く、鳳の舞ふが如く千狀萬態神惑ひ魂奪はる、凡そ此に遊ぶ人貴となく賤となく、一擲千金惜まざるも宜なり、實に宇宙最第一の壯觀とも謂ふべし」と絶大讃詞を捧げてゐるが、盛夏の夕に此處が人の出盛り場所であつたことは云ふまでもない。

江戸の民衆は斯ほどまでに一水の濹江を其歡樂に費してゐたのであつた。江戸の民衆に取りて彼等矜誇の對象であつた隅田川は、煩悶勞苦の洗滌場であり、精神苦肉體苦の忘れ場所であつた。彼等は善く之を知り、善く之を用ひたから、隅田川に對

しては常に感謝の念を捧げ。其自然美を破壊することなく、其名所舊跡を保存することに就いて意を用ひてゐたのである。卽ち彼等に對して慰め手であり、親みのあつた隅田川は、江戸の民衆が善く之に親んで愛護到らざる所なかつたのである。

水は無心にして流れ行く。しかし其自然美や歴史美やは水の靈であり精神である。若し其自然美歴史美を取除いたならば、あとに殘るは水の形骸だけに過ぎぬ。譜にもならず詩にもならずして、水の美しい生命が何で永遠不朽であらうか。其沿岸に一の觀るべきものなく、水上の歡樂なく、淸爽なる曉の眺めもなく、夕日の水に映らふ華やかな影もなく、落花の香を泛べることもなく、夢にも似たる淡月微雲を宿すこともなくして、どこに水の趣があらうか。此趣は卽ち水の生命であり、水の靈であり、水の精神である。之を彩る歴史の美しさは、其生命其靈其精神を活躍させる鼓動である。都市の民衆は水の生命水の靈水の精神に依りて彼等の生活をして餘裕あらしめることを得るのである。

隅田川なる都市河川の使命は、唯に荷足船や石炭船や小蒸汽や肥料船や、塵芥船やらを泛べるが如き實用向のみではない、都市民衆に水上の歡樂を享受せしめて、其生活を善導するのにあるのである。過去の隅田川は明に其使命を果したのであつた江戸の民衆が隅田川に負ふ所は實に多大であつた

廣重の名所江戸百景を一見しよう。永代橋佃島と云ふ圖がある。永代橋の橋杭の下には船の艫が見える。大小の船幾十艘が艤つてゐて、彼方には越前堀あたりの出端が見える。漆黑の空には下弦の月が春の水を照らして、闌干たる星が微かに燦めいてゐる。水の上には白魚取る舟が網を擧げて、篝火の影は眞紅に映えてゐる。大川の水は今海に朝せんとして漫々たる江上は靜かに更け行くのである。三股わかれの淵には富士の靈峰を正面に、其下には蘆荻の生へた洲が水を横ぎつてゐる。赤い門に長塀を繞らしたのは、仙臺侯の米倉であらう。白帆は風を孕んで悠揚として流れてゐる。網打つ舟も荷足船も散在する。駒形堂の曉には雨が斜に濺いで、杜鵑が大空を翅ける、星ある暗の夜の中に枝さし延べた首尾の松のあなたには厩河岸の渡舟が黑い影を載せて行き通ひをしてゐる。そこには自然の美しさもあり、風雅の趣もあり、都會ならでは見得ぬ情調もあり、歴史もあり、ゆかしい背景もある。大江戸の大川を思ふ毎に、うつとりと美しい夢の國に誘はれて行く氣がしてならぬ。古今伊勢の隅田川は餘りに古く、回國雜記、北國紀行の隅田川は、ちとかけ隔り過ぎてゐるが、錦繪繪本の大川、江戸音曲の大川、名所圖繪歲事記の大川は私たちの趣味と共通する大川であつた。江戸

の繁華を洗つて流れる大川は、崇高偉大なる使命を帶びてゐた大川であつたのである。

五

江戸が東京にかはり、物質の文化が舊文化を破壊して已まなかつた中に、十年二十年ほど前までの大川は江戸時代とは多大の相違はあつても、それでも隅田川らしい、親みのある大川であつた。東京中の勝地はと云へば、依然として向島が占有してゐたのである。しかし首尾の松が枯れ、百本杭が無くなり、吾妻橋・厩橋・兩國橋等が次第に鐵橋となつて來るとともに、大川は變化し始めた。それでもまだ向島は花の名所であつた。葛西太郎や麥斗庵やは既に亡んで久しかつたが、中の植半あり、奧の植半あり、枕橋・水神の八百松とともに、そゞろ歩きの遊人が支度をするには野趣の棄て難いものがあつた。私は東京中で最も言問團子の下、長命寺門前から眞土山を望む夜景が好きであつた。對岸の左りの方には淺草寺の五重塔が半天を焦す繁華の炎に幻の如く浮んで見える。眞土山の森はこんもりと黑く、其間から聖天堂の灯がちら〳〵と隱見する。水は油の如く湛々と淀んだ中から艪の音が一の旋律を作りながら聞えて來る。土手には人通りも少い。恍惚として暫しの間は無我の境に入る。木母寺まで散策しての歸るさ、奧の植半に入つて、夕餐をしたゝめる。此の名物と聞えた業平蜆の味噌汁、芋の煮ころばし、烏賊の附け燒、大した旨いものはないが、向島らしい處に趣がある。歸りは舟だよと誂へ置いて陶然となる。植半のしるしのついた赤い提灯を下げながら女中が棧橋まで送つて與れる。吉さん氣をつけて下さいよ、御機嫌よう、又お近いうちに。船頭の吉さん、一本水馴棹を入れる、舟はぎいと水際を離れる。此時月は中天に懸りて、水上は寂寞を極める。舟は靜に吾妻橋まで流れる。

長堤一帶が花の雲となる。水も陸も人である。それでも錦が淵の花の隧道を拔けて綾瀬あたりまで行くと、人もまばらである。道傍には土筆が生へ、五形花が咲き、菫草もちらほら見える。きぬかつぎに慈姑の團子・茹玉子は野趣滿々として嬉しかつた。名月の夜に竹屋の渡を渡つた。乘合は二三人、山の宿も向島も寂しかつた。雲のない大空に漸やく月は江上を隈なく照らしてゐる。白髭あたりまでそゞろ歩きして、夜の更けるを覺えず、蘇東坡が水天の夜遊と同じ感興を起したこともあつた。又雪の日に聖天堂の戸田茂睡の碑前に立ちて、飽かず水上の舟のゆきゝを眺めて、夕暮の風の冷かなるに驚かされたこともあつた。隅田川の眺望は私に取りてもう今では過ぎ去つた日の愉快

なる追憶となつたのである。今の隅田川は其の餘りに慘ましきまでに變り果てたので、私は訪ふことを敢てしない。若し此あたりに徘徊すれば、過去の美しい夢に對する一大脅威である。

山谷が今のやうに變らないうちには、善く時折寺の門や江戸の名殘りとも思はるゝ小路小路をそこはかとなく歩いたことがあつた。土手の道哲に立寄つたり、春慶院に高尾の墓を弔つたり、助六寺を叩いて見たり、蔦屋重三郎の墓を尋ねて見たりした。眞土山の下から竹屋の渡へ出る處に土ひねりの小さな玩具を賣る店があつたので、時々はそこを覗いて見た。今戸の八幡樣から吉野町のあたりを徘徊したこともあつた。今日では其見當さへも覺束ない處があるので、善くも斯う開けたものだとつく〴〵感心せられる。

開けるとは、人工が自然を破壊して行くことである。破壊の語が不穩當とすれば、自然に打勝つと云つても差支ないが、とにかくそれに異存はあるまい。武藏野の一角なる千代田・寶田等の村々が江戸になり、江戸が東京に變り、東京が大東京市にならうとするには、隅から隅まで開拓されて、目覺しい變化が之に伴ふことに對して、更に抗議を申込むものではない。しかし都市の經營者は少くとも其間に都市生活者の爲に生活慰安の方法として趣味ある經營案を工夫しなければならない。人工が自然を破壊するとしても、自然美を保存する調和を心がけねばならぬ。美しい風景や由緒ある名所舊跡やは、成るべく否寧ろ當然に之を保存して行かねばならぬ。自然美は人工を以て作り出し得るものではなく、人工と自然との調和よろしきところに人工美と自然美とは光彩を放ち得るのである。安藝の嚴島に遊ぶものは平家の風流をしみ〴〵と偲ぶであらう。平相國は今のやうな沒分曉なる都市經營者と共選を異にしてゐた。御山を背景とし、瀬戸内海を前にして大鳥居廻廊を拍々の水に浮べたところに經營者の苦心と趣味とは歴然として現はれてゐるではないか。春日の森を切り開いて、朱の樓閣、燈籠の林立を巧に配合したところに諧調の妙が存するのである。便利と云ふ名の下に趣味を打破しやうとするのは人生の脅威者である。京都に於ては京阪電車を五條までにして置いて十分であるのに、便利と云ふ名の下に、三條まで延長した。鴨川べりの床しい美しい趣味は之が爲に全く打破せられて、千鳥も啼かず、月に雪に時雨に全く殺風景となつて、京都の都市美觀は少からず破壊されて了つた。一時は高瀬川の暗渠案までも實行される模樣であつたが、之れなかりしは、せめてもの幸である。京都のやうな自然美の豐富な處でさへ、頻々として便利案が通過されて、都市の美觀が日に減少されつゝあるのである。大阪に於ける蜆川の消滅など

も殘り惜いが、此等はまだ云ふに足らぬ。都市經營者は遠慮會釋もなく、都市の美觀を殺ぐことに鋭意であるほどに低能である。

都市の經營者ばかりでなく、似而非風流人も保存の美名の下に、舊觀を一掃して了ふことが往々少からずある。保存會なるものは得て斯やうなことをやりたがる。京都に往いて鷹ケ峰の光悅寺を訪ふならば、思半に過ぐるであらう。史蹟保存の名は美しいが、其仕事の甚しく徹底して居らぬことに愛想をつかさゞるを得ない。一風當れば顚覆して泥土に委すべきやうな軟弱な掲示札で、誰々の屋敷跡だの、誰々の住宅遺址だのと記して置いたところで、電車がすぐ前を通つてゐる往來では何の感興も惹くものではない。少くとも遺愛の木だとか、庭園の一部でも殘存してゐたならば、昔を偲ぶよすがにもならうが、滄桑の變のあつて、何等の形跡をも留めないところでは、行人が顧みもしまい。鎌倉のやうな歴史的の處に石杭を立てゝ評定所跡とか、誰々屋敷址とかあるのは、あたりの光景に對して今昔の感も起るが、東京の四通八達の處に非常に卓越した人物でもない古人の屋敷址を標榜したところが、それは一種の物數奇に過ぎぬ。それよりは少しでも遺つてゐる江戸の名所舊跡を保存するにつとめた方が遙に賢明でもあり、又有益でもある。

現に江戸の名所舊跡は日に破壞されつゝあるではないか。もう既に消滅に歸したものも少くない。今日に在りてはもはや餘りに遲きに過ぐるとは云へ、亡びんとして行くものを保存すべきは猶多々あるから、後車の戒めとしてはどうであらう。

例令へば名園の如きもそれである。佐竹侯の林泉は札幌麥酒會社の手に歸して、遂には一木一石まで惜氣もなく分賣されて、跡方もなくなつたではないか。近頃は華族の土地解放なるものが流行する。土地解放と聞くと、美談の如くであるが、事實は華族の商法である。骨董入札では足らなくなつて、今度は土地の商賣を初めたのである。まことの土地解放ならば、宜しく民衆にたゞで提供するが至當である。土地會社におだてられて土地を賣つて纒つた資金を得るのが、何で土地の解放であらう。それをさも〳〵れい〳〵しく紙上に發表して提灯を持たうとする新聞記者なるものゝ常識が疑はれるのである。しかし斯くの如きは此に論ずるの要もないが、唯傷ましく思ふのは、斯くして名園が次第に亡び行くことである。敢て華族に土地を私有せよとは云はないが、其庭園の如きは、市になり區になり寄附して公衆の爲に保存を依賴するが至當なりと信ずる。一たび眼中營利以外になき土地會社の手に委すれば、池は埋められ、樹木石は分賣せられて、須臾にして其跡方を失ふことは必定であ

る。

東京は京都に比して林泉の美の乏しい所である。諸寺院に由緒ある林泉を有するは、京都の矜りで、又日本の誇負すべき所である。江戸の開けたるは事近世に屬するが故に閑適幽雅の林泉は寧ろ多からずとするも、諸侯の邸宅が嘗て此地にあつた爲に多少の名園は殘つてゐる。水戸侯の後樂園、松浦侯の蓬萊園の類は猶今日に於ても市中に散在してゐる。よし名園とまでは行かずとも今日の庭師が作つたやうな拙劣でない林泉は舊華族の邸宅に遺存してゐる筈である。此等の林泉は一朝にして成つたものでなく、苔蒸し錆がつくまでには長い星霜を經たのである。純日本式林泉が凋落し、西洋式庭園が跋扈せんとする世の中に此等の林泉が亡び行くのは、日本古文化や日本趣味やから見て甚だ遺憾千萬のことである。此等は當然保存して國民趣味の向上に資せなければならぬ。

國民趣味を度外し、靈の慰安を忘却しつゝある或一部の論者は日本の庭園を破壞して、兒童の運動に便利な芝生を作らんことを奬勵してゐる。無自覺も此に至れば寧ろ滑稽と云はねばならぬ。日本の林泉を研究して僅かの境地に自然を摸した日本の林泉美を知つたならば、斯る議論は到底口端に上らないであらうにと思はれるのである。自然美が次第に破壞されて、我等の生活上、自然美に接する機會の甚だ乏しくなつた今日、せめては小なる自然の林泉に接することは、都市生活者に取りて一大慰安である。東京郊外の自然に接する邸宅ならば、芝生の庭園もよからうなれど、都市生活者に取りて盆大の林泉は非常な慰め手がある。日本人は須らく日本に目覺めざるべからずと信ずる。日本古文化の粹を破壞することのみが決して新文化の建設でもなく、又生活の改善でもない。

史蹟や天然物の保存を主張し實行せんとする人達は先づ手近に名園の保存を主張し、名所舊跡の保存に努力せねばなるまい隅田川沿岸の保勝の如きは最も緊急のつとめである。

隅田川沿岸の保勝を今日に說くが如きは事既に遲い。向島一帶の地が工場地となり、須崎寺島小梅の田圃が住宅地となつた今日、土手が貨物自動車の往還となつてしまつた今日、櫻の樹が殆んど擧げて枯れ果てゝしまつた今日、沿岸の保勝を說いたところが何等のたしにもならぬ。兩國からお臺の渡に至るまでの水路に蘆荻の洲は一ヶ所もない、行々子の啼く聲などは樂にしたくもないのである。糸を垂れたところが一匹の細鱗も釣れず、網を擧げたところで一尾の白魚さへかゝらない。山谷堀は肥料船の群集する所となつて、汚臭云ふべからさるものがあり、眞土山の翠微は木立疎らとなりて、聖天堂も露はになつた。上

は千住より下永代に至るまで一つとして取る處はない。都鳥の名は空しく今戸の鹽煎餅に殘り、櫻餅屋言問團子は端艇部學生の寄宿所となつては、どこに向島の風流が殘らう。白鬚橋は工場通勤の便はあらうが、風情ないこと夥しい。長命寺は家作に忙しく、枕橋の八百松はむさくるしきこと下宿屋に似てゐる。唯僅に三園の前に田圃の名殘りなる蓮池を有することと、入場料を取つてはゐるが、百花園に菊塢の面影が殘つて秋色の掬すべきものとがあるだけである。

變り行くのは世相ではあるが本所深川は全くの工場地となつて、最も俗化してしまつた。龜井戸の歸るさ、秋晴の心地好い陽(ひ)を背(せなか)に受けながら萩寺を廻ると、庭には白露をこぼさぬ萩のうねり／＼て小やかな花は優しく風にそよいでゐる。往時此寺の附近には追剝强盜の出沒が屢々あつたので、世人は此寺を剝寺と渾名したるを、當寺の住職苦々しく思ひ、多く萩を植ゑて萩寺の名を傳へたと云ふ話は、唯一說として聞き置くべきであるが、龍眼寺に萩を植ゑて萩寺と稱されたのは、明和三年頃のことである。繪本江戸土産を見ると一泓の池ありて、其周圍に萩が一面に咲き出でた風情を面白く描いてゐる。私どもの知つてゐる萩寺の萩は本堂の前にあるばかりで、それほどでもないが、萩寺の萩寺たる實はあつた。しかし近時の萩寺は名實ともに空しく、萩を堀り棄てゝ貸屋と化したのである。柳島の妙見は小川に臨んで、どことなく趣があつた。白蛇の出るのは柳島と謳はれて、參詣者も少くなかつた。江戸土産や江戸百景やなどを見ると、野趣滿々たる地で、私どもの見た時よりも風流らしくあつた。しかしモスリン會社の屋の棟が川を隔てゝ並び水は流るゝと云ふよりか、紫紺の惡水を湛へてゐるほどに汚れ切つてゐたが、妙見前の橋本は、どことなく東京離れがしてゐた。座敷も閑雅で、物靜かなところは、まことに好もしくあつた。醉うての歸るさには橋本と書いたぶら提灯を下げて小梅の堤を吾妻橋まで出るのが頗る田舍じみて、逢ふ人さへに稀れであつた。さるに今日の柳島は電車が通ずるやうになつて妙見樣や橋本の前やは大通りとなつて引つ切りなしに人や車馬やが絡繹と通行してゐる。橋本はもう以前の閑雅な橋本ではない。龜井戸藝者の出場所となつて、鴨綠江節や安來節で騷ぎ立てるやうになつては、一言半句も出ない。

江戸近郊八景は廣重の作品中最も傑出したものゝ一である。此畫集中取別けての名作は多摩川の秋月と飛鳥山の暮雪と吾嬬杜の夜雨とである。自然現象を畫中に收めることに手際の好かつた此畫家は此畫集中に於ても月と雪と雨とに於て、いづれも優れた作品を遺してゐる。吾嬬杜は此畫家が餘程好んだと見

えて、江戸土産中にも同じやうなる圖を描いてゐる。但し近郊八景に於ける夜雨は江戸土産に於ては晴である。吾嬬杜は傳說の神社で、弟橘媛を祀る處と云はれ、社前に大なる楠の木のあるを以て知られてゐる。固より壯觀の社殿もなく、こんもりした森の中に一宇の祠を有するに過ぎぬ。龜井戸を離れて平井に近いところで、江戸時代に於ては田舍であつた。小川に沿うた堤から折れて小徑を傳つて行くと、此森に達する。飛鳥山と云ひ、多摩川と云ひ、いづれも都人士に喧傳されたところであるが、吾嬬杜はさほどまでに洽く知られてゐない。廣重が之を其奚囊に收めて、夜雨の配合を此に索めたところに彼の天才の働きが見える。蕭々たる夜雨は此小さな森にふさはしい。瀟湘の夜雨は娥皇女英の遺跡にふり濺いで、斑竹を殘してゐる。弟橘媛を祀れる吾嬬杜は此意味に於ても夜雨がふさはしくあつた。廣重は斯うまで深く考へなかつたであらうが、しかし貞淑なる美姫を鎭座したる、鬱葱たる一叢の杜は、夜雨の好畫題に恰好であつた。斯くして廣重の畫筆に入りたる近郊の名所も、今日では工場地の裏に佗しく、あるか無きかに、存在してゐるのではなからうか。私は吾嬬杜の現狀を見に往かうと思ひながら、今以つて其志を果して居らぬ。しかしあの附近の發達のさまを考へるとき、恐らく私の想像は適中してゐるのではあるまいかと、人知れず杞憂を抱くのである。

白山下の田圃が藝者町に化し、駒込神明町の沮洳地が花柳界となり、根岸に御神燈がつく今日、龜井戸に待合の軒燈が林立し、向島の土手下に三絃の聲が艶めかしく聞えるのに不思議はない。新領土に醜業婦が先登し、新開地に化生のものが巣をくふやうに、東京が發展して行く其先々は到る處に花明柳暗の巷が設けられる。土地繁榮策か、抑も地價釣上げ法か、とにかく斯くして近郊は開け行くのである。藝者と云へば異樣なれど、江戸時代に於ける隱し賣女の岡場所として見れば、そこに何等の差異はない。但し東京の自然美が破壞せられ、名所舊蹟が湮滅するとともに、其地の風俗は日に頽廢されるのである。本郷や三田や早稻田やは學校に依りて盛となつた。土地としては無上の幸福である。工場地となりて、日夜機械の音が喧しく、煤煙あたりを黑く染めつゝある上に、名ばかり藝者の岡場所が蔓延するやうになつては、土地の繁榮、地價の向上はいざ知らず土地としては決して幸福ではなかつた。自然美と名所舊蹟とを破壞せられた隅田川の對岸向島も斯る土地と俗化したのである。

向島には往年より場末の花柳界があつた。呼んで之れを葉櫻藝者と稱した。しかし今日のやうに新舊兩檢番があつて、多數

の妓を蓄へるに至つたのは、畢竟工場地となつたためである。水神の八百松はまだ風流であつた。其後入金が起り、中の植半の跡に太陽閣が興亡したりして、向島の形勢は次第に一變した。しかし今日の向島に散在する料理茶屋なるものは向島藝者の出沒する極めて低級なる、何等風騷のなき、俗悪なるもののみである。向島は自然美を失ひ、名所舊蹟を失はんとしつゝあるのみならず、其地自らが極めて殺風景なる俗悪の地となつたのである。形骸の隅田川のみが空しく其岸を洗つて、濁つた萬斛の水を海へと持ち運んでゐるのである。花見も月見も雪見も總べて過去の夢である。

六

東京市にては山の宿から三圍の前へ鐵橋を架ける計畫があると云ふ噂である。これが爲には三圍神社の前に出を三圍の遺跡として、告朔の餼羊として存する蓮池までも取拂はれることになるさうである。掌大の蓮池の有無は都市經營者の眼中に存在して居るまいが、破壞せられた隅田川の勝景中で、こゝのみが僅に殘喘を保つてゐるものゝ一つである。一體大川に架設せられた鐵橋なるものは盡く無趣味な沒風流な不樣なもののみで、一つとして都市の美觀たるべきものはない。殊に山の宿に接しては吾妻橋があるのであるから、何を苦んで其附近に又不樣の鐵橋を架設する必要があらうか。斯くして又新に一の鐵橋を殖やしたなら、折角荒川改修工事をして水害の難を免れしめた向島一帶に復た〳〵洪水の襲來がないとも限らない。よしや鐵橋架設の要があるにしても、三圍の蓮池を取拂はなくとも、十分に工事は行へるべき筈である。根が趣味だの、保勝だの、都市生活者の慰安だのと云ふ大問題が頭にない手合のすることであるから、破壞を敢てして恬として顧みないのであらう。東京市民の爲には大なる禍と云はねばならぬ。

今日では百花園の維持も困難であらうと思はれる。百花園と三圍の蓮池とが無くなつたならば、隅田川沿岸の勝地は全滅に歸するのである。斯くして都市經營者は猫額大の地を諸處に作り、名けて公園と稱し、之を以て姑息の方法としてゐるが、此小公園なるものは、要するに子守女の遊場所か、勞働者の晝寢をする所に過ぎぬ。坂本公園と云ひ、兩國公園と云ひ、神田公園と云ひ、其名は公園であるが、見すぼらしいことは言語道斷である。しかも斯る小公園さへ新設するには相當の費用を要してゐるではないか。舊地の保勝がそれほどの費用を要せずして、實績の十倍二十倍擧げることを忘れてゐる。

隅田川の保勝は單なる隅田川の保勝のみではない。全國の勝

景は日々破壊されつゝある。鐵道の敷設、水力電氣業の興起を初めとしてあらゆる新文化の事業は破壊せでもよき自然美を打壊してゐるのである。東京のみではない、各地の都市經營者は名所舊跡自然美を破壊することに汲々としてゐる。現に我が東京市にては富士山無用論を唱へ、鷹峰を崩潰して駿河灣を埋め立てれば幾萬頃の田地を得べしなどゝ論じた市長を戴いてゐたこともあつた。維新當初に上野を崩して不忍池を埋め桑を樹うべしと論じた政治家に比して、又更に一層の低能と云はねばならぬ。斯る沒分曉漢は到る處に轉がつてゐて、彼等は都市の經營をしたり、鐵道を敷設したり、水力電氣を興してゐるのである。日本の勝景は日に〳〵削られ行くのである。隅田川の保勝を絶叫するものは、彼等をして一齊に猛省せしめたい其第一箭に過ぎない。

斯く一方には勝地の破壊を敢てしながら、又一方には國立公園などを主張してゐる。しかし國立公園なるものも、實は勝地の破壊に過ぎぬ。高山大澤は高山大澤にて存せしむるが善い。何を苦んで國立公園なる美名の下に人工の設備をする必要があらうか。我邦の勝地は一として國立公園でないものはない。瀬戸内海も國立公園なれば、信越の諸山も國立公園である。日光も松島も天橋立も十和田湖も箱根も鹽原も奈良も京都も國立公園である。何も米國流の名義を冠せずとも、我邦の勝地は國家的公園として國民が齊しく保護すべきである。されば木曾の溪流も保勝せねばならず、嵐峽の幽境も保勝せねばならず、日本到る處の勝地舊蹟は之を保勝せねばならない。隅田川の保勝も當然東京市は之に努力せねばならない。

今日のやうに物價が昂騰し、生活が困難になりては、都市民衆の爲に都市に於て慰安の場所を作らねばならぬ。新しく之を興すべきことが急務であるのに、手近な慰安の場所を破壊するが如きは抑も愚の骨頂でなくして何であらう。人は交通の便を云ふ。江戸時代にありて、鎌倉江の島に遊ぶには兩三日を要さねばならなかつた。京都に遊ぶには往路でさへ十三四日の日子を費したのである。交通の便の容易となつた今日では何も必ずしも東京に勝地を求むるの要があらうかと云ふものさへにある。しかし今日に於ては交通の便は容易になつたが、旅行は困難になつた。即ち山川道路の困難ではなくして、經費難である。民衆が自然美に接して命の洗濯をすることは、非容易でなくなつたのである。都市民衆の爲には、どうしても都市内に於て安價な慰安の方法を講ぜねばならない。

江戸時代には春の初から梅見に、花見に、月見に、夕凉みに紅葉見に、雪見に、民衆の歡樂は數多くあつて、しかもそれが

極めて安價であつた。夕涼みや月見や雪見やらが今日行はれないのみならず、杖をついて遊山する所は非常に減じたのである。梅見の如きは、全く跡を絶つた。近年まで東京には猶梅見の場所が存在してゐたが、今日に於ては殆んど全滅してゐる、龜井戸の臥龍梅、木下川、小村井、小向井、角筈の銀世界はいづれも其跡を亡くした。唯僅に蒲田と百花園とに疎影暗香を留めるのみである。東京人士に殘されてゐるのは花見ばかりであるが、御殿山は亡び、向島も亡び、荒川堤さへ亡びんとしてゐる。東京の民衆は電車で三宅坂辨慶橋の花見をするか、上野の花を一廻り見物するか、僅に飛鳥山で騷ぐぐらゐが勢一杯である。花見にて積日の勞苦を一掃するが如きは、之も事既に過去に屬してゐる。

江戸と東京とは異る。封建時代の都市と、新時代の帝都とは同じくない。江戸趣味を復活せよの、若しくは江戸の遺物を總べて保存せよのなどとは決して云ふのでない。唯帝都の民衆をして少くとも意義ある生活を營ましめたいものだと思ふのである。絶えず生活に脅されて、不安の一生を送るが如きは、人として生れた意義が更に存在せぬのである。營々として勞苦し、何等の慰安なくして一生を畢りては、都市民衆は文化の恩惠に浴することが出來ぬ。機械の運轉する音は耳を聾せんばかりである。大道には電車が軋々として音を立てゝ、拂曉より深更まで絶えざる運轉をしてゐる。其間を自動車がけたゝましい聲をして駈ける、自轉車が行く、オートバイが駛る。朝夕の通勤には鈴なりの電車に割込まねばならず、路行く時は八方に眼を配り、耳を欹てねばならぬ。都人士の神經は否でも應でも銳敏とならざるを得ない。斯くして彼等は神經衰弱に陷るのである。二六時中生活に脅かされてゐる帝都の民衆は又其環境に於て脅かされつゝあるのである。彼等の爲に慰安の道がなくば帝都民衆たるの不幸は此上ない。往々新聞紙上に見える帝都內に起れる慘事の如きは、個々其一面の暴露に外ならぬ。人心が險惡となり人氣が荒くなれるは疑ふべからざる現象で、唯に教育のみに依りて救濟されるべき問題ではない。經濟上には、生活の不安より免れしめなければならぬと同時に、都人士としての趣味生活を工夫して生活の慰安を講じなければならぬ。帝都內若くは其近郊に於ける自然美を保存し、名所舊蹟を保勝せんとするが如きは、即ち其一手段である。

三圍神社の蓮池保存の如きは些々たる事のやうであるが、一事を以て全般を推すべきことで、都市經營者の如何に都市經營に昧きかを見るに足りる。蓮池の保存は隅田川保勝の先驅であつて、都市趣味を計らんとする第一聲である。隅田川沿岸の地

特に向島一帶は恐しく俗化したりとは云へ、猶今日に於ては方法如何に依りて之を恢復し得るものがある。故如何となれば形骸ではあるが隅田の長流が其岸を洗つてゐる。設備其宜しきを得たならば、河にいつでも靈を附與し、精神を復歸させ、活躍せる命を再現させることは易々たるものがある。東京市中に於て斯くの如き形勝の地は他に求めて得べからざるものである

故に先づ向島一帶の地を市民の遊園地となすの案を提出する枕橋より木母寺若くは鐘が淵の間は車馬の乘入、通行を禁じ、成るべく自然の景趣に復歸するやうに手入れをするのである。別に車馬の往還には小梅より一線を劃するが善い。そこには電車を通じて向島へ遊ぶ便を計り、工場通勤の用に資するのである。三圍・牛御前・白鬚・水神・眞崎・木母寺等には相當の保護を與へて、舊觀に復さしめるのである。此地に櫛比する花柳の巷は之を小梅若くは山谷に移轉せしめ、土手には櫻を植付け、向島の爲には住宅制限案を建てゝ、風景の保護を講ずるのである猶對岸眞土山其他の爲にも保勝案を建て、住宅の如きは、或一種の規定を設けるがよい。案の方針としては自然に近い風景を作るを主眼とし日比谷公園の如き人工に非ざるやう工夫すべきである。白鬚橋の如きも、もう少し雅致あるものに架け替へ、附近には蘆荻の洲を作り、行々子をも宿すやうにしたい。山谷堀あたりに都鳥の姿は減じても、小松島の附近には多く浮游させたいものだ。肥料船塵芥船の如きは或一定の時刻を限りて、終日大川を徘徊するやうな不しだらのことを一掃すべきである。兩國の如きも川開一日にて畢るが如きことなく、川開き以後を納涼期とすること江戸時代の如くあらしめたい。濱町河岸には凉棚を設け、水上には納涼船を泛べて、夜々市民の歡樂に供したいものだ。隅田川をして獨り實用と學生の娛樂とのみに占有させずに、市民が水上の歡樂に生活の慰安を享受するに至らせたいものである。

經費の問題は如何。或は他に公園を作るよりも寧ろ經濟で安値ではあるまいか。新しきを建立するのと、古きを修築するのとの差がある。場合に依りては古きを修築するよりも新しきを建立する方が廉なることも多い。しかし新しきものを時代附けるには長き星霜を要する。寧ろ古きを修築するの賢なるに若かない。明治神宮は東京の一名所となつた。しかし此處は莊嚴なる靈域であつて、市民の遊園地ではない。神宮に詣づるものは感謝の念と崇拜の感とに依りて精神修養に資すべきものは多々あるが一日の歡樂をなして、生活の慰安をなすべき處ではない。市民の遊園地はどうしても便利であり、しかも自然の景趣ある處に求めねばならぬ。隅田川を帶びて淺草に近い向島は、帝都に於

ける唯一の遊園地たる資格がある。

東京の關門たる東京驛のほとりには歐風のビルヂングが巍然として並立してゐる。日本人の目よりして之を觀れば、壯觀であらうが、歐米人に取りては、小規模の摸倣であつて、寧ろ貧弱の觀があらう。事務用として耐火用とし此等の建築は必要であるが、一方に日本式建築の保存も又必要である。外國人を饗應するに帝國ホテル東京會館精養軒に於てせずして多く紅葉館に於てするのは、日本式宴會日本式料理などを示さうとする爲めであらう。外國人が奈良に遊び日光を訪ふのは日本の古文化を見んが爲めである。私どもが地方に遊ぶ時、土地の特色を發揮したる鄕土料理鄕土名物鄕土音曲に接する每に非常に喜ばしく感ずるのである。若し怪し氣な洋食を食べさせられたり、東京仕入れの土産を提供されたり、世間普通の流行唄を聞かせられたりするならば索然として興味を失つてしまふ。ハイド、パークやボア、ド、ブローニュやを生平逍遙してゐる者が日比谷公園や上野公園やを見せられたとて、何の感興を惹き起さうぞ。觀光の外人は多く宮城の御溝に對して好奇の眼を瞪つてゐるではないか。ヴエニスはゴンドラを以て知られ、スコツトランドはハイランド風を以て名高い。東京に遊ぶものは其の歐米化したるに少からず失望してゐる。日光に遊ぶ前に、奈良に遊ぶ前に東京に於ても、又日本らしい遊園を一見させてもよからう。テームス河やセーヌ河やは倫敦巴里に美觀を添へてゐるではないか。テームス河は一面に水に臨んだ議事堂の壯觀あるとゝもに、そこにはヰンゾルの古い宮殿が殘つてゐる。セーヌ河の兩岸は到る處に名蹟多く、河に架する二十四橋は巴里市を飾つてゐると云はれてゐるではないか。都市を流るゝ河川にして今日の隅田川の如く殺風景なものは殆んど少からうと思はれる。日本國民は趣味ありと自負してゐる。自然の美に富んでゐることを誇つてゐる。然るに道路の險惡なるは云ふに及ばず、東京市中に一つでも誇るに足るべき觀光の對象たるべきものあるや如何に。黃塵漠々の裡にありとは云へ、北京には支那風の城門や宮殿や園池やらがある。三百年の都であつた東京が新開地と異る所のないのは、東京市民の大なる耻辱ではあるまいか。

建國以來久しからぬ米國民は頻りに歷史美を作らうとして苦心してゐる。獨り自國の歷史では淋しいが爲に、黃金の力に任せて他國の歷史的遺物を吸收するにつとめてゐる。舊國の英國は歷史的遺物遺蹟を保存すること篤く、英國の地は到る所に此種のものが現存してゐる。然るに我が日本に於てはやゝともすると歷史的遺物遺蹟を破壞し、前代文化の跡を輕侮せんとするが如き傾向がある。其の最も甚しいのは東京に於て之を見るべ

きである。江戸の民衆の趣味は三百年の陶冶を經て相應に洗練せられたものである。今の東京は盡く之を破壊して、新趣味の建設なく、依然として混沌の間に低徊してゐる。

東京市の美觀を保ち、外國人の觀光に資せんが爲めには先づ隅田川の手入れより始めるが善からう。田舍人の東京見物には三越にて可なり、帝劇にて可なりであるか、外國人の觀光の爲めには日本らしいところ東京の東京らしいところを見せねばならぬ。彼等の或者は廣重の筆に依り、北齋の畫に依り、春信・淸長・歌麿・豐國の版畫に依りて古江戸なるものを知つてゐる。夜の闇を彩る兩國の納凉をも知つてゐる。眞崎の社頭に雪白きあたりを、渡守の蓑笠面白く漕ぎ行くさまを見てゐる。大橋の雨に慌てて足を空ざまに駛け往く活々した風情を快く眺めてゐる美しい女が大川端の茶店に腰打かけて釣糸を投ずるあてやかさに憧憬れてゐる。ウイスラーは心ゆくまで之を渇仰して、テームス河の夜景を描いてゐるではないか。隅田川、大川、彼等の耳には快く感ぜられてゐた。しかし東京に着いて憧憬れの隅田川に臨んだとき、醜き吾妻橋や永代橋やの影に驚き、工場の烟突から吐き出す煤煙に顔を顰め、汚しき運送船や小蒸汽やに呆然たらざるものは殆んど無からう。江戸の納凉、花見雪見は美しい天國であつた。東京の現代は醜惡の事實である。

東京の市民は日本の東京たるに目覺めねばならぬ。日本の首府たる東京たるに目覺めねばならぬ。如何に東京が歐米化したところが紐育にはなれず、倫敦巴里にはなれないのである。一方に歐米風を參酌して輸入するとともに、日本の東京たることを忘れずして、古文化の跡を尊重し、其歷史其名所舊蹟、其自然美、其趣味を保存して行かねばならぬ。隅田川の保勝の如きは先づ東京市民の前に投げ出されたる好個の問題である。

内には市民生活の慰安の爲に、外には觀光客に滿足を與へんが爲に、東京市の經營者は先づ第一に隅田川の保勝を立案するがよい。隅田川の保勝を立案すれば、三圍蓮池取除說の如きは當然消滅してしまふ。東京市民は東京市の名譽の爲に、都市經營者をして反省せしめねばならぬ。本所區民に至りては特に卒先して隅田川保勝の實を擧げしめねばなるまい。

私はいつでも二重生活論者である。私どもの衣食住が二重生活たるべきと同時に都市の經營の如きも二重生活であるべきものと信じてゐる。即ち一方には歐米風の建設設計をするとともに、他方には純日本式の趣味を尊重し、其歷史其名所舊蹟其自然美を保存して行かねばならぬと思ふ。斯くして市民の趣味は向上し、市民の勞働能率は增進し、市民の自治精神は發達する。隅田川の保勝を說くは閑文字でなくして、都市經營の大問題

である。從來の東京市經營者が之を輕視して遂に現狀に陷らしめたのは、不覺の至りであつた。今の經營者は宜しく覺醒して隅田川の使命を全からしむべきである。江戸文藝を作り、江戸音曲を作り、春信淸長を作り、歌麿豐國を作り、北齋廣重を作り絶えず江戸の民衆に歡樂を與へ、市民の趣味を養成して江戸の一大美觀であつた隅田川は、久しく使命を疎そかにしたのを心外に思つてゐるであらう。

續々近世名匠傳

村松梢風

橋本雅邦

(一)

上野の戰爭の始まる二三日前から、雅邦の妻のとめ子は、幼い子の手を曳いて、埼玉の方の狩野家の知行所へ避難したのであつたが、戰爭も鎭まつたので江戸へ歸つて來ると間も無く少し氣が變になりかけた。

段々聞いて見ると、江戸に留まつてゐたはふが反つて無事だつたのである。市中では流石に官軍もさう大した亂暴は働かなかつたが、一歩御府外へ出ると憚る處が無いので、皇威を笠に着て思ふ樣暴行を逞うした。殊に下級の兵士になると、眼中朝敵と無辜の良民との區別が無かつた。掠奪や凌辱は當然彼等に附與されてゐる權能であるかのやうに行はれた。だから、就中幕府の繪所を司どる狩野家の知行所へ避難したからと云つて決して安全な譯は無かつた。とめ子は、他の人々と同じやうに、其の數日間に限り無い怖ろしい目に幾度びとなく遭遇した、彼女は獵人に追はれる獸のやうに、愛兒を伴れて逃げ廻はらなければならなかつた。

元來氣弱なとめ子は、其の時の怖ろしさに未だに脅えてゐた。

戰慄すべき光景が絶えず眼先にチラ付いてゐた。鐵砲の音、劍の光、人間の悲鳴――

靜かな夜半に、彼女は床の中からガバと撥ね起きたりした。彼女の眼先には猩々緋の毛を冠つた官軍の幻が現はれるのだつた。

「お〻、官軍が來た、怖ろしい、孃や、早く逃げよう」

彼女はさう叫び乍ら、すや〳〵睡つてゐる娘を引き起さうとするのであつた。

雅邦はどうかして妻の心を落ち付かせようと思つて、醫者にも掛けるし、加持祈禱も種々やつて見たのだつたけれども、餘り驗は無かつた。師匠の狩野家でも、其の邸内に住まつてゐる合長屋の人々も、段々それを見聞きするので、みんなが同情を寄せて心配して呉れた。併し、平素はさう違つた容子も無かつた。とめ子はぶら〳〵しながらも、家庭の仕事位はどうにか斯うにかやつてゐた。

雅邦は、妻の病氣の事も氣に懸るけれども、同時に彼は親子の者の生活問題についても頭を悩ませなければならなかつた。金を得る道としては繪を畫いて賣るより外はないのだが、其の繪は決して賣れなかつた。

江戸は東京と改まり、さうして明治の代となつた。皇威は俄かに赫灼として海内に輝やいた。併し、それは我が美術の世界にとつては極度の暗黑時代であつた。動亂後の人心は容易に鎭靜に歸すべき模樣も見えなかつた。有らゆる階級人の興味は國事に向つて夢中されてゐた。さうして一方では、徳川三百年の傳統的文化の名殘が片つ端から破壞されつ〻あると同時に、西洋の新しい文明は潮の押し寄せるやうな勢で輸入された。さうした時代思潮と、彼の傳統的美術とは全く沒交渉であつた。繪畫や工藝品は、紙屑玩具程の價値も有たなくなつた。藏前の或道具屋が、正銘紛れなしといふ應擧の大幅を持ち廻つた。其の價五圓といふのだが、誰一人顧る者も無かつた。

そんな時世だから、繪師で飯が食へぬのは雅邦ばかりではなかつた。誰でもさうだつた。だから、氣轉の利いた人間は大概商賣替へをしてしまつた。

「あんたも何か商賣のはふへでもはひつて見たらどうか」

雅邦も屢人からさう言はれた。が、さりとて替るべき商賣も無かつた。食ふ爲めには何でも遣つて見る了簡になつて見た處で、さて自分に出來さうな仕事は無い。矢張り、食へても食へなくても、繪を畫くより外に仕方は無い。

雅邦は、弘化四年、十三歲で狩野勝川院の門に入塾した。其の年のうちに彼は、父と母とを續いて喪つた。父に、晴園と號

する狩野家の畫工であつた。元淀橋の米屋の悴だつたが、幼少から繪が好きで、木挽町の狩野晴川に事へ、主用の餘暇に畫を學んで終ひに一人前の畫工になつたのであつた。其の後、主家の用人三浦司作の媒酌で、矢張り同家の御家人で松平周防守から扶持を受けてゐた橋本伊貞といふ畫工の養子となつて其の長女と結婚した。そして夫婦の間に出來たのが、幼名千太郎と云つた勝園雅邦(ただくに)であつた。孤兒になつた千太郎は途方に暮れてゐると、長屋中の人々が親切に世話をして呉れ、就中親達の媒酌人であつた三浦からは一方ならぬ恩義を受けた。其の年入塾して、それから以後は一生懸命に畫を勉強した。

雅邦と同じ頃入塾した門生に狩野芳崖があつた。芳崖は其の時分は勝海雅道と號してゐた。二人は七つ違ひで、芳崖のはふが兄であつたが、其の時分から一生斷金の交を結んだ。二人共塾頭の地位に進んで、勝川院門下の双璧と謳はれるやうになつた。芳崖は故郷の長府へ歸つたが、雅邦は二十六歲の時主家で一家を持つた。そして、池田播摩守の家臣高田藤左衞門といふ人の娘のとめ子を妻に娶つて獨立生活に入つたのであつた。

明治元年といふ其の年は、雅邦は三十四歲であつた。初めて畫道に入つてからでは二十幾年を經過してゐる。今では此の繪筆を持てば、天下に恐るゝ者はさう澤山は無かつた。それだのに繪を畫いてゐたのでは米鹽の料さへ得られなかつた。

（二）

雅邦は、全く收入の道が杜絶してしまつた。一と頃は、支那行きの扇面へ墨繪を畫いたのが流行したので、彼も其の繪を畫いてゐた。畫料は百枚畫いて一圓で、百枚畫くのは容易でなかつたが、併し其の仕事のあつた間はともかくも一家の者が命を繼ぐことが出來た。けれどもそれも何時となく廢つてしまつた。さうなるともう何の收入も無くなつた。家財を一つ一つ賣り食ひしても、それとても永く續くわけはなかつた。夫婦も子供も着のみ着の儘で、もうどうする事も出來なかつた。其の中で妻のとめ子は二人目の女の子を産んだ。とめ子の病氣は快くならないばかりか、少しづつ惡い方へ向つて行つた。

或日細君の知合の人が來て此の有樣を見て、ひどく氣の毒がつて、種々談の末に、

「ねえ橋本さん、恁んな事を言つては失禮ですが、何にもなさらずにゐるよりは增しですから、詰まらない内職だがやつて見る氣はありませんか？氣があればお世話しますが」

「何でもやりますとも、食はずには居られないからね」

「さうですか。實は私の懇意な家で、油町の小間物屋ですが、

其處で三味線の駒を內職させてゐるんです。手間賃は莫迦に安くて十二拵らへて十二錢、つまり一つ一錢ですが、慣れると可成り數が出來るさうですから」

「三味線の駒を拵らへるとは情無い」と雅邦は心で思つたけれど、それを斷つては他に仕事の當ても無いので、「是非」と言つて賴むことにした。

それから彼は每日三味線の駒を內職にやり始めた。併し、やつて見るとあれで中々六か敷かつた。十二拵らへるには少くとも五六日はかゝつた。さうして出來上つた品物は我乍ら不手際だつた。それを油町の小間物屋へ持つて行くと、最初の一二度は義理で默つて買つて呉れたが、三度目頃になると番頭が露骨に厭な顏をして、

「どうもかう手際が惡くては困りますなあ。恁んな不恰好な駒ぢや子供だつて買やあしません」と言つた。

「どうも濟みません。此の次にはうまく拵らへて來ます」

雅邦はさう言つて詫びて十二錢貰つて歸つた。厭な氣持はしたが、併し三味線の駒を拵へる事は自分の本職ではないと思ふと、小言を言はれた事がさう腹立たしくはなかつた。

「何故自分はかうまで不運なのだらう？」彼は屢さう考へた。

世間を見渡すと、大抵の人間が皆それぞれ世の中に用のあるやうな顏をして、元氣よく暮してゐる。畫工仲間でも、文人畫の連中などは近頃莫迦に芽をふいて來た。世間でも、文人畫でなければ繪でないやうな事を言つてゐる。就中晴湖、老山、幽谷、和亭などに至つては、實に羨やましい位全盛を極めてゐる。それ程腕もない連中でも皆相應に歡迎されてゐる。「それだのに、己は彼等に比べて決して腕が劣つてゐるとは思はないが、何故ちつとも世間で顧て呉れないのだらう？」其のあとで、彼は一つの考に行き當つた。それは恁うであつた。

「世の中といふものと、繪といふものとは、全然緣の無い事だ。或繪かきの畫いた繪が、世間に受け入れられようと入れられなからうと、其の繪の本來の價値には何の影響も無いではないか。價値のある物は流行らなくても價値があるし、どれ程流行つても價値の無い繪は何處迄も無價値なのだ。其處が藝事の實用品と異る處だ。して見れば、己の繪はたとひ賣れなくても、賣れる奴の誰彼の繪よりも價値のある事は確だ。それだけでいいではないか。どうせ繪筆を持つ職業に生まれて來たからには、商人根性を出したとて始まらない。世間の事などは考へないで、己は只勝れた繪を畫いてさへゐればよい、それが己の本領だ」

さういふ風に考へると雅邦は勇氣が出た。餓え死をするまでも繪を畫かなければならないと思つた。さうして、雪舟雪村に

も劣らない程の繪を描いて後世に殘さなければならないと考へた、彼は内職の傍らでも繪筆を放さなかつた。

彼は、どうして生きて來たのか分らないやうな生き方を續けて來た。さうして三四年の星霜が經過した。

妻の病氣は、到底恢復の見込みが無く見えた。それでも彼女は三人目の子を産んだ。雅邦は、病妻に對する愛情と、憐愍と、又自己呵責の念とで常に苦しめられた。とめ子は三人目の子を産んだ後は病氣が益募つて、狂躁の度が劇しくなつた。裸足で、髮を振り亂して、往來へ飛び出したりするやうになつた。夫は淺間しい妻の姿を見る度びに胸が潰れるやうに痛くなつた。

座敷の中へ檻を造つてとめ子を入れて置くことにした。彼女は檻の中で暴れたり叫んだりした。雅邦は其の物音を聽き乍ら内職をしたり繪筆を執つたりした。

其のうちに或人が世話をして呉れて、築地の海軍兵學校へ奉職することになつた。仕事は製圖係で、月俸八圓を支給される身の上になつた。それは明治四年の八月からの事であつた。

生活が稍樂になつたので、病妻の手當も出來るやうになつたことが雅邦に取つては何より嬉しい事であつた。

(三)

或日雅邦が勤め先で仕事をしてゐる處へ家から使が飛んで來て直ぐ家へ歸つて呉れと言ふのだつた。彼は胸がドキツとした。てつきり妻の事で變事が起きたのだらうと直覺した。で、取る物も取り敢えず飛んで歸つて見ると、我家の門先に官軍の兵隊が二三人張り番をしてゐて、彼が歸つて來たのを見るが否や、「取調べる事があるから屯まで來い」と言つて附近にあつた官軍の屯所へ彼を引つ立てるのだつた。行つて見ると、其處には妻のとめ子が取り亂した姿をして捕へられてゐた。駭いて仔細を訊いて見ると、とめ子が屯所の高張提灯の中へ書き物を投げ込んだといふのだつた。それは將軍へ上つる上書様の物だつたのである。

「此の女は私の妻で御座いますが、發狂して居りますので檻に入れてありますが、檻を破つて出て飛んでもない惡戯をしたものと見えます。併し、全く狂人の事で取り留めはないのですから、何卒放免して頂き度う存じます」

雅邦は種々陳辯したけれど、掛りの伍長は免して呉れなかつた。長屋の一同も心配した。誰かゞこつそり雅邦に向つて「一つ賄賂を使つて見たらどうです」と言ふので、無け無しの財布から二三圓を紙に包んで伍長に渡さうとすると、「怪しからん」と言つて反つて叱られてしまつた。

「ともかくも本營迄出頭せよ」と命令されたので、雅邦は仕方なし羽織袴で手引に案內されて、築地寒さ橋の官軍の本營へ出頭することになつた。

本營の門を這入る時手引は「町人一人」と門番に聲を掛けた。後に隨いて行くと、眞ッ暗な汚ならしい室へ連れ込まれた。「暫く玆で待つて居ろ」と手引は言ひ捨てゝ出て行つてしまつた。もう夜だつた。彼は眞ッ暗な室で越方行末の事などを考へて、自分の不幸を嘆いてゐた。何時迄經つても呼び出しに來なかつた。不圖向うを見ると、何時から來てゐたのか暗がりの中に一人の人物が寢轉んでゐる樣子なので、側へ行つて見るとそれは官軍の士官の服を着てゐる男だつた。

「少々お願ひがあるのですが」

「何だ？」と士官は寢轉んだ儘答へた。

雅邦は自分が玆へ連れて來られた顚末を話して、

「私は目下海軍兵學校へ勤めて居りますが、何分かう待たされては明日の出勤も覺束なうございます。で、其の届を學校の方へ出して戴くやうな事に御周旋は願はれますまいか」と嘆願すると、士官は元氣よく起き上つて、

「宜しい、承知した」と言つて出て行つた。

それから間もなく以前の手引がやつて來て「こつちへ來い」と言ふから隨いて行くと、門の外へ連れ出した。それから一緒に步いてゐると、木挽町へ出て、師匠の家の門前へ掛つた。

「私は此の邸內に居りますのですが、御吟味の筋合は如何樣で御坐いますか？」と訊ねると、

「もう宜しい、以來氣を付けろ」

恁う言ひ捨てゝ手引はさつさと元來た方へ立ち去つてしまつた。雅邦は何が何やら譯が分らないまゝで門を這入つて我家へ戾つた。戾つて見ると、妻も何時の間にか歸されてゐて、檻の中で穩和しく睡つてゐた。

雅邦の一身には、禍が限りなく降り續いて來た。意志の弱い人間であるならばさういふ時自滅するより外はないのである、が、鐵のやうな心を持つてゐる人間は、禍に遭へば遭ふ程强くなつて、惡戰苦鬪の結果、其の鐵の魂は益鍛冶の功を積むのである。

雅邦一家の者が寄寓してゐた木挽町の狩野家の邸は、或年火災に罹つて全燒してしまつたのであつた。其の時雅邦親子の者は、着のみ着の儘で命からがら逃げのびたのだつた。さうして知邊を賴つて暫くは厄介になつてゐたが、子供がある上に氣遣ひの女房まで連れての居候は永くは續けられないので、何處かへ借家をしようと思つて方々探したけれど、氣違ひがあると

いふ事が分ると何處でも躰よく斷られてしまつた。途方に暮れてゐると、或人が世話をして呉れて、土橋内の伊藤といふ九州の小大名の屋敷内の空屋を借りて住ふことになつた。其處の殿樣は大層納が好きだつたので、何くれとなく親切にして呉れるので、雅邦も嬉しかつた。捨てる神あれば助ける神もあるとは全く此の事であつた。雅邦は其處から相變らず兵學校へ通つてゐた。

けれども、彼を惱ませる者は例の狂妻であつた。或日彼が勤め先から歸つて來ると、家の中が大騷ぎだから、又かと駭き乍ら訊いて見ると、彼の留守中に妻は檻を破つて出て、家に火を付けた上、總領娘の袖を捉へて火中へ推しやりながら自分も一緒に死なうとするのだつた。娘は怖がつて悲鳴をあげて助けを呼んだので、邸内の人々が驅け付けて呉れて、危く火を消して母子の者を救つたといふのであつた。雅邦は人々に詫びを言つたり禮を言つたりしたが、狩野の屋敷に居た時とは異つて何れも馴染の薄い人達なので、其の心苦しさは譬へようが無かつた。

「いかに心が狂つたとは言ひ乍ら、現在の我子を燒き殺さうとするとは、何たる情無い奴だらう」雅邦は泪を浮かべて妻の方を見た。しかし妻は、もう上機嫌で、檻の中で流行唄なぞを唄つてゐた。

そんな風で雅邦は勤め先に居る間も一刻も心の休まる時は無かつた。或日土橋附邊に火事があつた。兵學校の二階から見ると丁度伊藤の屋敷の見當になるから、又しても妻が粗匆をしたのかと蒼くなつて驅け付けて見ると、有難い事に其の火事は伊藤ではなくて近邊の屋敷だつたので、雅邦はほツと胸を撫で下したのだつた。

其の伊藤家も間もなく取り拂ひになつてしまつたので、彼は又もや借家を探さなければならなくなつた。が、檻を擔いでの借家住ひでは人が嫌つて、中々貸手が無かつた。すると山城河岸釆女町に住まつてゐる伊藤閑齋といふ人が其の事を聞いて大いに同情して、其の屋敷内の小さな家を貸して呉れることになつた。それで雅邦も漸く落付くことが出來た。其の時分例の狩野家の三浦の世話で、其の親類合の家のおはるといふ娘が、家事を手傳ひに來てゐて呉れることになつた、はるはまだ十六七のうら若い娘だつたが、とめ子や子供の世話をば懇ろに盡すのだつた。病人も不思議にはるに對しては柔順であつた。雅邦が出勤した留守中などは、はるが檻の錠を開いて外へ出してやると、穩和しく座つて話しをしたり、綿入物の手傳ひをしたりなどした。

暗黑のどん底にさまよふてゐた雅邦は、其の時分から少しづ

つ明るみへ出て行くやうな氣持がした。絵も賣れない中にも、偶には頼まれたりするやうになつた。彼は苦しい生活費を割いて絹を買つたり繪の具を買つたりして、北向きの三疊の小部屋で熱心に畫を畫いた。

明治十年の秋には、莫逆の友狩野芳崖が故郷長府から上京して來た。雅邦は四十三歳で、芳崖は五十歳だつた。肺を煩つてゐる舊友は痩せ衰へて、勝川塾當時の芳崖とは別人の觀があつた。が、元氣だけは昔に劣らず旺盛で、書生のやうな意氣込みで抱負を語るのだつた。東西古今の畫家を罵倒して、怪奇な畫論を吐いて得意になる時の芳崖は、肉の落ちた頬に少年のやうな血を漲らせ、鋭い眼をギラ／＼光らせて、さうして逸り構はず剽れるやうな聲を出して哄笑した。雅邦と芳崖は互ひに共鳴し合ふのだつた。今迄はたつた一人で海原に舟を浮かべてゐるやうな心細い氣持であつたのが、舊友の上京によつて急に心強くなつて來た。

二人は、明日の日の生活の事も忘れて、夜を徹して談じるのであつた。

（四）

明治十二年の四月、妻のとめ子は病が重つて到頭死んだ。十年の間自分を苦しめ通した妻が、佛になつて靜かに横たはつてゐるのを見た時、雅邦は感慨無量であつた。

其の時分もはるは雅邦の家にゐた。間も無く雅邦は彼女と結婚した。

慘ましい家庭の煩勞から全く解放された雅邦は、畫の研究にばかり精進することが出來るやうになつた。兵學校へは相變らず勤めてゐたが、圖畫主任を命ぜられて、給料も幾らか昇つた。

彼の畫風は次第に變遷して來た。勝川塾では專ら探幽常信を摸する事を以て唯一の信條としてゐたので、若し門生中に其の繩墨以外に出る者があれば、忽ち師匠の怒に觸れて破門の憂き目に遇ふのだつた。が、豐富な才能を持つてゐる人間が、何時迄も同一の境地に彷徨低迷して居られやうわけは無い。師匠の監督を離れた後の雅邦は、廣茫として際涯の無い畫の世界に奥深く分け入つた。雪舟、雪村に彼は最も深く私淑した。それから更に進んで、宋元を研究し始めた。

彼は西洋畫にも深い興味を有つてゐた。其の頃漸く盛んに輸入され始めた油繪の新しい彩色は、彼をして傳統の世界から外へ踏み出させた。彼は一時盛んに油繪も描いた。兵學校の同僚に平山といふ士官がゐた。平山は明治八年に兵學校最初の外國航海として練習艦筑波に乘つて米國へ行つたが、其の途中太平

洋の眞只中ですさまじい颶風に出遇つた。其の颶風の有様を細密に彼は雅邦に物語つて、紀念のために繪に畫いて貰ひ度いと言つた。雅邦は承知して、颶風の圖を油繪で畫いて與へた。亂雲晦々として天に布漫し、澎湃たる怒濤は船躰を呑み、風雨喧騒、雲を劈き雨を破る所の電光閃々として、其の光景は眞に逼つて畫面に描き盡されてゐるので、平山は大變喜んで秘藏してゐた。平山士官は、後年の商船學校長平山藤次郎であつた。

併し、油繪は勿論一場の餘技に過ぎなかつた。雅邦は何處迄も狩野派の大道を歩いて進んで行つたのである。

明治十五年に、農商務省開催の第一回內國繪畫共進會があつた。雅邦はそれへ「琴棋書畫圖」と「竹に鳩の圖」を出品した。「琴棋書畫圖」を畫く時、彼は漸く工面して絹を買つたが、生憎畫き損じてしまつた。けれども代りの絹は無いので、一度洗つて書き直した。だから少し汚斑が殘つてゐた。がそんな事は構つてゐられないので、構はず畫き上げて出品した。すると其の繪は非常な好評を博して、銀章を得た。「竹鳩圖」のはふは宮內省の御用品となつた雅邦の畫名は其の頃から漸く賣れ始めた。

同く十七年の第二回繪畫共進會には「八仙人の圖」を出品して再び銀章を得た。

併し、雅邦の貧乏は依然たるものであつた。共進會へ出した「琴棋書畫圖」と「竹鳩圖」は二枚で十五圓に賣れたが、其の評判を聞くと直ぐに親類の者がやつて來て「半分貸せ」といふので半金は持つてかれてしまつた。其の殘りは、人を集めて酒を飲んでしまつた。すると、或人から同じ竹に鳩の圖を依賴されたので、金五圓で引き受けた。最初は其の金で疊替へをする豫定であつたが、金がはいると飲んでしまふので、繪が出來ないうちに其の五圓も消えてしまつたが、疊は依然として破れた儘だつた。

彼は非常な酒好きで、而も大酒だつた。病妻は沒して、今では若くて賢い妻が家計の遣り繰りをして呉れるので、それをいい事にして金さへあれば飲んだ。無くても矢張り飲むのだつた。

釆女町から下谷へ移つて住んでゐた。天長節が來て、兵學校へ行くのに禮服が要るのだが、それが冬木町の相模屋といふ質屋へ五圓で預けてあるので、彼は其の時畫き上げたばかりの毘沙門天の繪を妻に持たせて遣つて、禮服を出して其の替りに繪を質に入れた。其の繪は請け出すつもりでゐたのだけれども、到頭算段が出來ずに流してしまつた。質屋のおかみさんは氣の毒がつて、其の時雅邦の細君に帶を一本呉れた。平常學校へ履いて行く袴まで質にはいつてしまつた。

夏になつて、蚊が出て仕方がないけれど、蚊帳を請け出して

來る事が出來ないので、親子諸共蚊に食はれ放題でゐた。細君のはる子はお産をして寢てゐた。が、なんとしてもひどい蚊で遣り切れないので、六日目に起きて、裏へ雅邦が繪を畫いた一疊敷きの敷物を彼女は自身で質屋へ持つて行つて、漸う蚊帳を請け出して來た。

同じ貧乏でも、先妻とめ子が沒した以後の雅邦の貧乏は、芝公園の陋屋で肺を病んで、日給三十錢の職工勤めをしてゐた友人芳崖の悲境に比べると、餘程明るみのある貧乏であつた。

明治十九年に雅邦は永らく勤めた兵學校の教師を辭職した。そして明治二十一年、東京美術學校が創立されると同時に、彼は芳崖と共に教授に任ぜられた。其の年の秋、斷金の友芳崖は、病が重つて遂に此世を去つてしまつた。

(五)

芳崖は死んだけれども、生前彼の事業の一つであつた美術學校は年と共に順調の發達を遂げた。明治二十三年に、フエノロサの門人岡倉天心は幹事から校長と爲つた。さうして芳崖の遺志は着々として實現された。

一と頃天下を風靡してゐた文人畫は、フエノロサや芳崖等の一擊に遇つて以來今は全く畫壇から鳴をひそめてしまつた。そして久しく不遇でゐた狩野四條派の畫家が一時に擡頭して來た。其の中でも、人氣の焦點となつたのが雅邦であつた。

二十二年五月には臨時全國寶物取調局鑑查官となつた。翌二十三年一月第三回内國勸業博覽會審査員となり、同年十月には帝室技藝員となつた。博覽會には「秋景山水」の圖を出品した。

其の年アーネスト・フエノロサは、ボストン美術博物館の東洋美術部編制を囑託され、故郷の米國へ歸つた。彼の歸國に際して、我朝廷では其の功績を賞して勳三等を贈つた。米國に於けるフエノロサの聲望は非常なものであつた。彼は美術講演の爲めに四方に奔走して殆んど寧日なき有樣で、或時は十回繼續の講演を、同時五六の大都市で行つたこともある。大統領に招かれて白堊館で講演した。彼の名聲は全米に鳴り渡つて、其の頃紐育費府邊りの富豪連は、小數の客を招く時でさへも、フエノロサに請ふて食後數十分間の演説をして貰ふことを以て缺くべからざる獻立としてゐた。彼は三十年の日子を費して其の畢生の事業である處の「日支美術年契」の大著述に從事してゐたが、まだそれの完結を見ぬうち、明治四十一年九月、倫敦で客死した。享年五十六歲であつた。彼の遺骨ははる〴〵と日本へ送られ、友人門弟等に依つて三井寺の明法院に埋葬された。

フエノロサが故國の人氣を沸騰させてゐる時、日本へ遣した

彼の弟子の岡倉天心は、橋本雅邦、川端玉章、川崎千虎、其の外雅邦門下の四天王横山大觀、下村觀山、菱田春草、西郷孤月等を初めとして、新進の美術家を股肱に付け、新興美術の旗幟を天に翻へして、畫界に一大革命を起してゐた。其の革命の機運に乘じた雅邦は唯一の大立物であつた。

上野公園にあつた梅川といふ料理屋の女將は、元柳橋でお駒と名乘つて左褄を取つてゐた。其の時分の事、彼女は觀音様を信仰してゐたところから、魚籃觀音の畫を欲しいと思つて、誰に畫いて貰はふかと考へたが、其の頃はまだ餘り賣れてないが雅邦といふ繪かきの名前が妙に氣に入つてゐたので、雅邦に頼み度いと思つて或時家へ遊びに來てゐた男に其の話をすると、

「うん、雅邦なら僕が知つてるから頼んで遣らう」と其の男が答へた。

「それでは、恁んな圖に畫いて貰ひ度いんですから、ちよいとよく見てゐて下さいな」

お駒は恁う言つてどてらを着た儘、片手に炭取をさげて、一寸腰を捻つて、顏だけ眞向きになつて恰好を付けて見せた。

「おゝ宜しい、引き受けた」男は笑ひ乍ら言つた。

間も無く繪は畫けて來た。見ると自分の注文通りの圖に出來てゐるのでお駒は嬉しかつた。そこでお禮はどんな事にしたらいいでせうと言ふと、

「まあ三圓も包んで遣つたらいいだらう」と世話をして呉れた男が言つた。

「三圓は餘り安いやうですね」

「なに、繪なんて物あ相場のあるもんぢやあなし、幾らでもおつ付けれあ濟むんだよ」

お駒はそんなものかと思つて、三圓の包金に菓子折を付けて禮をした。其の後お駒は上野へ來て梅川を經營するやうになつた。一方雅邦は僅かの間にメキ〱と賣り出して、畫界の第一人者となつた。或時雅邦は何かの會を梅川樓で催すことになつた。女將のお駒は其の時もまだ雅邦の顏を知らなかつた。彼女は其の日會のある座敷の床の間へ魚籃觀音の掛物を掛けて置いて、女中に氣を付けさせてゐた。すると軈て客が集まつて來て雅邦もやつて來た。雅邦は何氣なく床の掛物に目をつけたが、不思議さうに考へてゐる。

「是れは極く以前、柳橋の或女からだと云つて頼まれて畫いた繪だが、廻り廻つて恁んな處へ來てゐる」雅邦は側の人に向つてさう言つて話した。

女中は直ぐ其の事を女將の許へ注進した。お駒は内心少し面白く感じたので、程經て座敷へ挨拶に出て、

「實は古い以前に先生に御厄介を掛けました魚籃觀音の持主でございます」と言ふと、雅邦は驚いて、

「さうであつたか、あの三圓の女はお前であつたか」と言つた。

お駒は顔から火がでさうになつた。其の後暫らく彼女は「三圓の女はお前であつたか」と言つて人から揶揄はれた。

明治三十六年の第五回內國勸業博覽會の時、雅邦は「瀟湘八景」の圖を出品した。それは八景を各別に畫いて、連續せる一幅の長卷であつた。非常なる評判を博したにも係はらず、三百圓の其の繪が最後迄賣れなかつた。博覽會が了つた後であつた。梅川の女將のお駒は女中を伴れて橫濱へ買物に行くと、美術院の展覽會があつたので一寸のぞいて見ると、丁度其の日限りで閉會といふのに、雅邦の「瀟湘八景」はまだ賣れてゐなかつた。

「あれだけ評判で、あれだけの先生の繪が橫濱迄持ち込んで賣れないとは、何たるむごたらしい世の中だらう」お駒は一圖に畫の前で考へ込んでしまつた。彼女は一種の義憤を感じて、其の繪を買はふと思つたが、生憎懷ろに百圓だけしか持つてゐなかつた、事務所へ行つて其の譯を話して、後金は東京へ歸つた上で電報爲替で送るからと言ふと、係りの者は二つ返事で承諾した。そこでお駒は百圓の內金を入れて買受の契約をして、到頭晝飯も食はずに東京へ引つ返した。

處が、此の繪は大阪の村山龍平が欲しいと云つて、其の買受け方を岡倉天心に依賴して來てあるのだつた。が、係りの者はそんな事は知らないので、梅川へ賣約をしてしまつたのである。そこで岡倉は早速梅川へ人を遣つて、「實は斯々の譯だから」と言つて、契約の取消しを賴んで來た。が女將は承知しなかつた。

「先方樣にはどんな事情があるか存じませんが、私は兎に角百圓の內金まで打つて自分の物にしたのですから、今更解約などといふ事は絕對に出來ません」と答へた。いろ〳〵言つて見たが何うしても承かない。最後に岡崎雪聲が使者にやつて來た。雪聲ばお駒とは格別懇ろな間柄だつた。

「あんな山水など女が買つたつて仕方がないだらう、あの代りに下村觀山の元祿美人を買ひなさい、もう百圓出せばいいから」

「否え、わたしは瀟湘八景が欲しいのです、女が山水を買つては不可ないといふ筈はないでせう」

「それは無論だが…それではどうです? あと百圓出さなくとも宜い、あの元祿美人を百圓に負けて置くからさうなさい」

「否え不可ません、何と仰しやつても瀟湘八景はお讓り申すわけにはまいりません」

お駒は頑として承かなかつた。瀟湘八景は到頭梅川樓の有に歸した。女が雅邦の繪を買つたといふので新聞にまで出て評

判になつた。女將が大きな繪を背負つてゐるポンチ繪が載つたりした。

梅川ではそれを額に仕立てゝ大廣間へかけた。掛ける時には雅邦が自身でやつて來て、位置の撰定などして呉れた。

梅川の瀟湘八景は當時世間の評判になつて、わざ／＼其の繪を見に來る客で梅川は俄かに繁昌し出した。

其の後梅川は仔細あつて廢業する事になつた。其の時瀟湘八景を五百圓で賣れとか千圓で買はふとか云ふ人が出て來たが、お駒は賣らなかつた。併しさうなると置場所に困つた。それを掛けて置くだけの屋體骨の家へは今度は這入れない。

お駒は其の繪を橋本家へ返納してしまつた。瀟湘八景は、雅邦生涯の作品を通じての逸品である。

（六）

美術學校教授時代が雅邦の全盛期であつた。其の期間に於て彼は不朽の傑作を數多遺した。明治二十六年にはシカゴのコロンブス世界博覧會へ、着色の山水の圖を出品した。二十七年には明治天皇の銀婚式祝賀に際し、東京美術學校から奉献すべき「松上双鶴圖」を描いた。廿八年の第四回內國勸業博覧會の時は、「釋迦」「十六羅漢」の對幅と、「龍虎の圖」の屏風とを出品した。更に廿九年には巴里博覧會へ美術學校から雅邦の水墨山水畫を出陳して金牌を得て、世間を驚かせた。三十年の文部省開催繪畫共進會の爲めには「臨濟の一喝」を畫いた。此の繪は當時世評喧しく、希望者續出したが、彼は誰にも應じなかつた。そして後に茨城縣の細田某といふ人に強請られて、只で呉れてしまつた。

それ程全盛であり乍ら雅邦は相變らず貧乏してゐた。彼は金錢に對して些かも節度といふものが無かつた。老齢に達してからは酒を廢して麥酒を用ゐたが其の以前は盛んに飲み且つ遊んだ。外で遊んだゞけでは足りなくて、幇間などを家へ伴れて來ては酒宴をするといふ風だつた。細君のはる子が双子を生んだ時などは、まだ産婦が床についてゐるのに「目出度い」と言つて三味線まで入れて馬鹿騒ぎをやらかした。そんな風だから、收入は殖えても依然として火の車だつた。遊里へ通ふことなども、人が小言を言ふと猶更激しく通ふのだつた。平常は誠に好人物であるけれども、さういふ事になるとカラ他愛が無かつた。

細君の里では腹を立てゝ娘を引取ると言ひ出した。はる子もつく／＼考へて見ると夫の所業に愛相が盡きて來た。そこで彼女は或時夫に向つて諄々として意見をして、子供の爲めに今後は素行を愼んで貰ひ度いと言つて頼んだが、雅邦は聞き入れな

かつた。はる子は到頭怒つて「それでは妻を離緣して下さい」と言つて迫つた。すると雅邦は素直に承知して「是れを持つて行け」と言つて五十圓の包金を妻に渡した。細君は腹立ちまぎれに直ぐ樣出て行く支度をして門の敷居を跨ぎ掛けたが、其の時不圖彼女の頭に別の考へが浮かんだ。

「此の門を出てしまへばわたしはもう一生涯此の敷居を跨ぐことは出來なくなるのだ。さうしたら子供の顏も見られない—。それから夫はわたしに五十圓の金を呉れたが、それは妻子を顧みない無情な人のする事だらうか——」

彼女は其處から家の中へ引つ返した。さうして夫の前へ例の包金を差し出して謝まつた。雅邦は莞爾々々笑ひ乍ら

「さうか、分つたら佳し〱」と言つた。

明治三十一年の春、東京美術學校に一大騷動が持ち上つた。事端は、校長岡倉天心に對する或一味の者の排斥運動から發したのだつた。元來天才肌であつた岡倉は、頗る卓識を有してゐると同時に一面に於ては放縱不羈の缺點もあつた爲め、遂に小人の爲めに乘ぜられて校長の職を退かなければならないやうな羽目になつた。併し、其の時美術學校の教授は全部岡倉に殉じて總辭職といふことになつたが、軈て裏切りする者も出來てきて、結局、橋本雅邦、川崎千虎以下二十二名の教授助教授が連袂辭職を遂げて事件は結末を告げた。此の騷動は當時社會の大問題となつた。

美術學校を退いた岡倉は雅邦と共力して谷中に日本美術院を創立した。雅邦門下の大觀、觀山、春草、孤月等の諸作家がそれに馳せ參じた。

日本の美術界に、二個の大きな潮流が流れ始めたのは、其の時からであつた。岡倉天心の這度の失脚は、一面から看ると、畫壇に於ける舊勢力の挽回運動の成功とも見ることが出來るのであつた。

其の後の雅邦は野の畫家として活動した。

明治三十六年の春、雅邦は大阪に開かれた第五回內國勸業博覽會の審査員として關西へ行つた。當時京都の畫壇は、後素協會に依つて獨占されてゐるかのやうな觀があつた。同協會の會員には、今尾景年、原在泉、望月玉泉、竹內栖鳳、山本春擧、都路華香等關西では錚々たる畫家を網羅してゐた。以上の人々が、後素協會の名を以て祇園平野屋に雅邦を招待して宴を張つた。すると雅邦は席に就くが否や四邊を見廻して、

「今日は鈴木松年はお出でにならぬか？是非會ひ度いものだが」と言つた。

「鈴木氏は當會の會員でないから見えられません」と一同が答

すると雅邦は失望した樣子で、
「さうですか。それは兎に角殘念でした」と呟やいた。
鈴木松年は鈴木百年の子で、京都に於ける老大家として早くより重きを爲してゐた。が、性質極めて嚴格な上に常住獨立の氣風に富んでゐるので、後素會員の人々とは意見が合はず、平常交際もしない間柄だつた。
其の翌々日雅邦は同所の中村樓で呼び返しの宴を張つた。が、當日は態々使者を立てゝ松年の庵を叩かしめ「今日は御身を特に招待して懇々お話し申し度き事あり云々」と懇ろな書面を遣つた。松年も畫界に名のある雅邦の招待であるから、「萬事を差し置いて列席致しませう」と答へて、時を移さず中村樓へ出向いた。
松年は久し振りで後素會員の人々の顏を見るが否や、
「諸君とは是迄畫の上では屢々交際もしたが、肉體上の交際は今日が始めてどすな」などと皮肉を言つた。
席を定める時雅邦は起つて松年を上座へ勸めた、そして名妓二名を其の左右に侍らせて、自身で盃を持つて松年の前に捧げ乍ら、
「先生とは二十五年振りの會合です、どうか此の盃を快くお受けが願ひ度い」と言つた。
「二十五年振りとは、何の譯やら分りませんが――」松年は不審顏をした。
「お忘れですか？今から二十五年前、貴下が東京へ來られて安田善次郎氏の招待を受けられて柳橋で飲み交した折、安田の取卷きで、長唄などの小世話をやいてゐた河原畫工が居つた事をお忘れではありますまい。あの時の畫工が私です」
松年は「あツ」と驚いて膝を打つた。
「さうです〳〵、あれが貴下でありましたか。いや是れは奇遇でした。では、改めて盃を交換致しませう」
二人は互ひの健康を祝し合つた。そして二十五年の昔を思ひ出さうと言つて、傍若無人の快談に互ひの心膽を吐露し合つたので、他の會員達は煙に卷かれて匆々逃げ出してしまつた。

（七）

雅邦は常に言つた。
「世人は畫の流派といふ事に大層重きを置くやうであるが、別に流派などといふものを守らなくてもよいと思ふ。大きく立派にやれたらそれで結構だ、一體畫の眞相といふものは、形にあるのでなくて、其の神にあるのである。神があつて而して後

に形が動くのである。所謂物我相會し、心筆相一致して、初めて餘情が滿幅に溢れるのである。然るに、只形のみを追つて、無闇に筆墨を驅るといふことは、本を捨て丶末を求むるもので、繪畫の眞髓が發揮される道理は無い」

彼は、門弟を教育するにも、一定の型に嵌めようとは決してしなかつた。各々の個性を素直に育て丶行くやうに心掛けてゐた。川合玉堂は明治二十九年に入門した弟子であつた。入門の時玉堂は、繪畫に於ける用意について師匠に質問した。すると雅邦は答へた。

「ちつとも六ケ敷い事はない。自分の力以上の繪を望むから苦しいのだ。何もさう焦慮るには及ばないから、其の時〱のありの儘の氣持を畫けばよいのだ」

門人が習作を持つて來て批評を乞ふと、

「結構ですな」と單に答へた。それより外は何にも言はなかつた。それでも熱心に幾度も〱訊くと、穩やかな言葉で、其の繪についてでなく、自ら啓發させるやうな暗示に富んだ事を何かしら言つた。そんな風だから、初心の者にも決して手本などは與へなかつた。只勝手に畫くに任せてゐた。

揮毫をしてゐる時には、伜でも門弟でも決して畫室へ這入らせなかつた。それは揮毫してゐる處を見せると、自然に師匠の眞似をしたがるやうになるから見せないのだと言つてゐた。

繪ばかりでなく、何事でも他人の仕事に干渉する事は嫌ひだつた。植木屋が庭の手入れをして「どうで御座いませう？」と訊けば、「いいでせう」と必ず答へた。「仕事は專門家に任せて置けば間違ひが無い筈だ」といふのが彼の信ずる理論だつた。假りに植木屋が手入れしたのが少しは氣に入らない時でも、來年になつて見たらどうかといふ處まで考へて見た。それだから木の育ち方を何時でも研究的に見てゐた。それが繪の上にも非常に參考になつた。併し、專門家を信用し尊敬するだけに、若しそれが信用するに足りない事を發見した場合には用捨はなかつた。

或時、永年出入りをしてゐた植木屋を「あれは不可ない」と言つて斷つてしまつた。何故不可ないのか誰も知らなかつた。そこで植木屋は駭いてやつて來て、

「どういふ處がお氣に入らないのか承はり度い」と云つた。

家内の者がそれを雅邦に尋ねると、雅邦は最初はどうとも言はなかつたが、一番しまひに斯う言つて其の理由を説明した。

「昨日あの男が仕事をしまつて歸るのを、何氣なく障子の際から覗いて見ると、埃を親切に掃き取らずに、足で片付けて行つた。仕事に對して親切といふものの無いことが分る。植木屋

は植木に掛ればば自分の子だと思はなければならない。上手下手は措置き、あゝいふ氣持で仕事をする者は己は嫌ひだ」

植木屋はそれを傳へ聞いて一言も出なかつた。只々謝まつて其の時は勘辨して貰つた。

最後に雅邦は本郷龍岡町へ移つた。晩年の雅邦は、謹嚴で、禮儀正しく、近付き難い位の人であつた。出入の職人や八百屋の御用聞きといつたやうな者にまで丁寧に頭を下げて挨拶をした。門弟の繪を見る時には、必ず座蒲團を外して威儀を正して見た。ある人が其の故を問ふと、

「門人は師に依つて示教され進歩するが、師匠も亦門生の作品に依つて大いに益する所がある。だから決して疎かにすべきでない」と雅邦は答へた。

だから好い加減な弟子は取らなかつた。初入門の者があると先づ同じ圖を二月も三月も習はせる。すると大抵の者は逃げ出してしまふ。そして熱心家だけが篩ひ殘された。それにも係はらず、直弟子の數が百五十名に餘り、準門人は六百人以上に達した。

どれ程酒を飲んで醉つてゐる時でも、畫を談じ始めると理路整然として而も平常に優る熱を帶びて、人の耳を傾けさせるのが雅邦の特色であつた。他人の畫に對する忌憚なき批評をするのも、主にさういふ時であつた。晩年日本酒を廢してビールに代へてからも、夜十時に其の日の筆を擱くと、悴や門人を集めて繪の事を話し乍ら麥酒を飲んだ。併し終日の仕事に疲れてゐる家人は、酒が長引くのを厭がつて、一人去り二人去り、遂には彼の前に誰も居なくなることがあつた。すると雅邦は非常に怒つて、又一同を叩き起こして一時二時迄もお談義を聽かせた。さういふ時には麥酒の數も三本四本と增して行つた。

「人間は勉めるといふことを知らなくては駄目だ。譬へば餘所で御馳走にでもなる時は、たとへ後で咽から出る程滿腹の時でも、其の御馳走を無にするやうなことがあつては不可ない」と恁う言つて彼は若い者を諭へた。

夜遅く宴會から歸つた時でも、矢張りいつものやうに膳を出させて家で一杯やらなければ彼は承知しなかつた。少し位飲み過ぎて體を不快くしても平氣だつた。畫談に走ると體の事を忘れるので、一寸した病氣位は藥を飲まずとも癒つてしまつた。煙草も嚙む程好きだつた。

「繪かきは健康でなければ駄目だ。己などは畫をすると煙草の匂ひがする程喫ふけれど、此の通り達者でゐる」と言つて自慢をした。

「しかし齢が齢ですからお氣を付けなさい」と誰かゞ云ふと、

「莫迦を言へ。氣を付けろと言ふ人間が氣を付けろ。是れから死ぬ人間は構はぬが、是れから先の人間が用心しなくてはいけないんだ」

雅邦と芳崖とはどちらも芝居好きだつた。そして二人とも團十郎に私淑してゐたので、よく揃つて見物に出掛けた。劇を見ても、直ぐ樣それを己れの專門に引き付けて、參考にしたり、弟子に諭へる材料としたりなどするのだつた。

「彥三郎といふ役者があつた。いつも舞臺へ出ての藝は平々凡々でやつてゐるので、長芋と言はれた程だつたが、それが或動機に觸れて、グツト一時にゑらくなつた。今迄舞臺の上で平々凡々にやつて、ちつとも客を喜ばせなかつた處は、即ち口では云へない修業だつたのだ。藝の修業では其處が有難い處なんだ。詰まり云ふと、平素澤山の無駄骨を折つて置く事が肝心だ。それが藝の上では大いに無駄でない。地道を踏んで下らぬ馬鹿なやうな無駄をした上句でなければ、悟入することはでき難いのだ」

また彼は、畫の缺點といふことについて恁んな事を言つた。

「繪かきは只專心腕を磨いて、ちつとでも他人の眞似の出來ぬ自分といふ特色が繪の上に現はれたら、それで一と先づ成功したものと云つて可い。缺點はあつても構はない、それを其處の缺點此處の缺點と心配ばかりして、缺點を隱すことばかりに汲々としてゐると、結局特色までも消してしまふことになる。早い咄が女の顏に譬へて見ても、あの女は口元に愛嬌があるとか、目つきが可愛らしいとか言へば、それで一人前の女として女房に貰ひ手は幾らもあるが、もうちつと色を白くしたい、眉も濃くしたら猶美しくなるだらうと云つて、白粉をコテ〳〵塗り立てたり引き眉をしたりすると、天然の美が失せて氣障な風になつて來る。つまり長所もあれば短所もあるといふ正直な處が良いのだ」

（八）

晩年の雅邦は殊に畫三昧で暮した。畫は即ち彼の生活の全部であつた。朝は四時頃起きて冷水摩擦をして、直ぐに畫室へ這入つて、若い者が起る時分には一と仕事了つてゐた。夜は十時迄筆を執つた。病氣に罹つた後で兎角健康が勝れなかつたので、家人や門人達が心配して郊外散步を勸めると、仕方なく或日散步に出掛けたが、夕方になつて歸つて來て、「どうも一日遊ぶのは骨が折れる」と言つて、その後は再び畫室に籠城して、滅多に外出しなかつた。ブラリと外へ出るのは、床屋へ行くぐらゐの事だつた。床屋は、湯島に住んでゐた時代から龍岡町へ移

つた最後まで、切通しの烏又の側の、田村といふ貧弊な、小つぽけな床屋へばかり行つた。近くにもつと立派な床屋があるのに決して餘所へは行かなかつた。床屋の親方は不愛相な變り者で、別段雅邦を敬ふわけでもなく、

「先生、私に一つ何か畫いて下さい」と或時言ふと、

「宜ろしい、此の頃に畫いて上げよう」

と雅邦は快く承知して、「刈田の富士」の圖を畫いて只で遣つたが、其の繪は殊に傑作だつた。

其の床屋は餘所ではたうから電燈を點けてゐるのに、昔通りの古風なランプを吊るしてゐて、見るから不景氣だつた。

「齢を取ると、頭が禿げたり白髪が殖えたりして厭なものだが、あの家はどういふものか光線の具合で、何時行つても頭が黑く見えるんで、氣持がいい」彼はさう言つて、其の床屋を推賞した。一體負け嫌ひだつた。直ぐ近くの岩崎男爵の家で、祖母の米壽祝ひの時十一俵の餅を搗いたが、贈る所が多いので大福餅位に丸めて贈つたことがある。すると彼は、「己は富は岩崎に及ばないが、己にも亦岩崎より勝つた所がある」と言つて、自身の還暦祝の時は二十俵の餅を搗いた。處が贈る所が少ないので、直徑二尺といふ鏡餅を拵らへて門人と親類中へ配つた。

明治三十七年に、セントルイ萬國博覧會へ「山水圖」の額六面と、「四季の圖」屛風二双を描いて出品した。四季の圖は四度稿を改めて漸く完成したのだつた。

明治四十年には、東京勸業博覧會美術館の天井鏡板に、水墨の雲龍を描いた。雅邦は元來左利きであつたが、繪を畫く時ばかりは右の手を用ゐてゐた。處が晩年は酒の爲めに右手が痙攣し出したので、往々運筆にも左を用ゐたが、此の雲龍の圖は全く左の手で描いた。だから筆法が往々逆描になつてゐた。

それが彼の最後の大作であつた。

明治四十一年一月十三日、雅邦は龍岡町の自邸で歿した。行年七十四歳、深川靈岸町の淨心寺内に葬られた。

追記

狩野芳崖と橋本雅邦とは、どんな意味に於ても併稱される明治年代を通じての二大作家である。文晁全盛の頃から、衰微の極に陷つてゐた狩野家の門から、同時に此の二人の偉人が生み出され、師祖の流派を復興した上にも、新らしき藝術の根柢を後代に植え付けたといふことは、一見奇蹟のやうでもあるが、因果循環の理から推しても或ひは是れが當然かも知れない。すべて優れたるものは、どん底の世界から多く現はれがちなものである。芳崖雅邦等の當初の悲運こそ、後の大成の基礎を爲してゐるのである。降りつゞく五月雨の後に輝やかしい太陽は現

はれる。雅邦の所謂無駄骨を澤山折つて來たことが、何よりの强味であつた。少年名を爲すより不幸はないと古人も言つてゐる。それにつけても近頃のやうに、帝展へ一度か二度繪を出したばかりで、まだ半人足の生若いのが、忽ち大家先生に奉られ、待合で藝者に墨を磨らせて、書畫屋を側に待たせて置き乍ら曲畫きをやつて「オホン」と納まる始末では、餘りあつけが無さ過ぎはしないか。などと憎まれ口は好い加減にして、とにかく芳崖と雅邦の生涯には互ひに絡み合つてゐる深い因緣があるので、傳記を草する場合にも二人を全く別々に切り離して書くことは出來ないのである。だから此の篇を初めて讀まれる讀者は、前號所載の「狩野芳崖傳」をも序でに御一讀願ふと結構である。兩者を對照して見る處に、特別の興味があるであらう。

材料出所は、橋本秀邦、橋本靜水、二先生の直話と、「芳崖と雅邦」「我憶雅邦」「日本美術雅邦翁紀念號」

竹内久一

（一）

浅草田町に通稱「田長」で通つてゐる提灯屋があつた。稍く續いた提灯屋で、當主は竹内善次郎と云つて、丁度十代目になるのだつた。主の善次郎は大變器用な人だつた。一勇齋國芳に就いて浮世繪を學んで、畫名を芳兼と云つた。在久と號し、又後には萬字齋、眠齋、田蝶などと號して、一寸俳諧もやれば三題咄などもやつて、當時の通人仲間とも相應に交際があつた。本業は提灯だが、繪が畫けるところから「びら」もやり始めて、後には反つて其のはふが盛大になつた位だつた。當時ビラ屋には藏前に梅素亭玄魚といふ有名な人物があつて、河竹新七、假名垣魯文等の友達だつたが、田長もそんな連中と交はつてゐた。

田長に兼五郎といふ息子があつた。兼五郎は安政四年七月九日の生れだつた。明治になつた。時世は一變してしまつた。父親は伜には何か別な職業を覺えさせようと思つて、色々考へた末に、彫物師にして見ようと思つた。そこで豫て知合ひの、根付師で主に象牙彫刻をやつてゐる堀内龍仙といふ彫刻師の處へ兼五郎を弟子にやつた。それが明治二年のことで、兼五郎は十三歲だつた。處が、運惡く一年ばかり經つと師匠の龍仙が沒したので、兼五郎は一旦家へ歸つたが、間も無く今度は川本洲樂といふ彫刻師の處へ弟子入りをした。

洲樂は、原月舟の弟子で、最初は山車人形が本職だつた、其の頃は舟樂と云つて、祭禮の時などは向鉢卷で山車の上に乘つ

て歩いたりしたものだが、山車屋を廢して、明治の初めには象牙彫刻に轉じてゐた。木彫りも上手だつたが、旭玉山に啓發されて象牙彫刻を深く研究したので、後には斯道の大家の一人に數へられてゐた。舟樂を洲樂と改め、或ひは洲良久とも云つた。

兼五郎は其處で熱心に彫刻を學んだ。自分でも此の仕事が大好きだつた。師匠は溫しい人でよく可愛がつて面倒を見て呉れた。けれども、師匠のおかみさんといふ人は、反對に恐ろしい肝癪持ちで弟子の扱ひも頗る苛酷だつた。だから弟子に居附く者が無かつた。「師匠は好い人だがあのおかみさんが」と云つてみんな逃げ出してしまつた。兼五郎もおかみさんには苛められた。兼五郎はなりが小さくてそして病身だつたものだから、それには灸が一番驗くと云つて、毎日取つ捕まへられて灸をすえられた。熱いなぞと云はふものなら其の上にひッぱたかれた。泣くことも出來ず、こんな辛い事はなかつた。併し兼五郎は辛抱して師匠の處に居通した。どんな辛い時でも、技藝の修業の事を考へると、飛び出さうといふ了簡を思ひ止どまるのだつた。兼五郎の技はメキ／＼と上達した。

二十二の年に兼五郎は師匠から川洲といふ號を貰つて、獨立することになつた。其の二三年前に父親の善次郎は沒してゐた。其の時分も兼五郎は神經衰弱の氣味で體が思はしくなかつたので、かた／＼で師匠の許から暇を貰つて家へ歸つた。家には拇があつた。

父の善次郎は、氣儘な生涯を送つた代りに、十代續いた家も人手に渡して、死ぬ時には跡へ何物も殘さずに死んで行つた。兼五郎は、母と自分の口とを養はなければならなかつた。けれども、健康が勝れないので、鑿も持たずにブラ／＼してゐた。

森下町に雅樂堂といふ骨董屋があつた。主人は鉢木雅樂と云つて、中々好事家なので、其の社界でも識られてゐる人物だつた。用長とは至つて懇意だつたので、兼五郎も折り／＼遊びに行つた。そして骨董類を見たり話を聞いたりしてゐるうちに、彼も何時となく其の面白味に引き込まれて行つた。雅樂堂の物は、普通の骨董屋とは餘程趣きの異つた處があつて、所謂好事家向きの品が多かつた。で段々兼五郎も其の趣味を解して來た。すると雅樂堂が「兼さんお前さんもさう遊んでばかりゐても仕方が無いから、片手間に道具屋でもやつて見てはどうです」と言ふので、兼五郎も其の氣になつて、同じ森下町で九尺間口ばかりの店屋を借りて母親と一緒に引き移つてケチな道具屋を始めた。何か堀り出し物があると雅樂堂へ持つて行つた。そんな事をしてゐるうちに病氣も癒つたので、本職の彫刻もやり始めた。併し、名前が賣れてゐないので、殆んど注文などを受ける

やうなことはなかつた。

明治十四年に第二回內國勸業博覽會が東京で開かれることになつた。其の前の年に、博覽會へ出品する美術家の參考に供するのが目的で觀古美術會なるものが催されて、全國から有名な古美術品が出陳された。奈良の興福寺からも古佛像が出陳された。兼五郎は、來年の博覽會には自分も何か出したいと思つてゐたので、早速觀古美術會を觀に行つた。其の時彼は、澤山の出品物の中で、興福寺の佛像を觀て一番感心した。否、それは感心といふやうな言葉では彼の氣持は言ひ現はし得ないのだつた。彼はそれに依つて初めて眞の彫刻といふ物を觀たやうな氣持がしたのだつた。自分が平常作つてゐる物は勿論のことだが、當代の名人上手と云はれてゐる人達の作つた物でも、それは單に木や象牙でもつて、どれだけ精巧に物の形が寫せるかといふだけのことに止どまつてゐる。然るに興福寺の佛像はそんなものではなかつた。其の古い彫刻が人に與へる感動は、單に形の上からばかり來てゐるものではなかつた。彼には、何と云つてよいかは分らなかつたが、とにかく其の彫刻には、不思議な人間の魂と云つたやうなものが氣味の惡い程露はにうごめいてゐるかのやうに感じられた。彼は驚嘆してしまつた。

彼はすつかり昂奮して、何か魅き物でもしてゐる人間のやうに、フラ〳〵した足取りで家路についたのだつた。

（二）

灘の酒造家に加納某といふ人があつた。其の頃家業に失敗して上京して、日本橋藥研堀の虎や横丁に住んでゐて煎餅屋を始めた。屋號も虎屋と付けた。處が、看板にするので實物位の木彫の虎を欲しいと云つて、或傳手から其の仕事を竹內川洲に依賴して來た。川洲は初めてそんな大きな仕事を賴まれたので喜んで引き受けたが、それだけの物を彫る材料は容易な木ではない。質を入れて三圓の金をこしらへて、態々田舍のはふへ行つて大きな杉の木を買つて來て、それで五尺位の虎の丸彫りを彫り上げた。木代共で三十圓貰つた。虎屋ではそれを表へ看板に出すと、看板が大變な評判を呼んで店が繁昌した。すると九鬼隆一が其の看板を見て大變賞讃して呉れた。是れが緣で兼五郎は九鬼に識られ、又其の紹介で博物館長の町田久成とも相識るやうになつた。町田は兼五郎の才を認めて、爾來大層引立てゝ呉れた。兼五郎は町田の名の一字を貰つて久一と名を改め、久遠と號した。

町田久成は鹿兒島の人で、當時古美術鑑識にかけては第一人者であつた。久成は第一期の博物館長を勤めた。博物館は、一

番最初は湯島の聖堂を用ゐて創めた。大聖殿の内部へ、尾張の金の鯱鉾だとか、厳島の魯雪の山姥の額だとか云つたやうな大變な物を持つて來て陳列して觀せた。其の後に龍ノ口に移された。龍ノ口時代に、金の鯱鉾の鱗を一枚盗まれて大騒ぎをしたこともある。それから、はる〴〵とオーストリアの博覧會へ鯱鉾を送つて出品したこともあつた。オーストリアでも是れには驚いたが、一體日本といふ國では、此の品物を美術品として出品したのだらうか、それとも或ひは黄金の目方を自慢して出品したのだらうかと云つて、評議をしたさうだ。そんな事があつて後、博物館は現在の地へ移されたのであつた。町田は骨董界随一の權威者であり、京都祇園の二名妓を妾として、除々として幅を利かせてゐた。

久一の彫つた虎屋の看板は、虎の鬚が針金で出來てゐたが、誰れが云ひ出したのか其の虎の鬚を持つてると無盡が當るといふので、しよつちう鬚を盗まれた。其の爲めに度び〳〵鬚だけ新しく付け替へなければならなかつたが、お蔭で店は益繁昌した。併し、後年虎屋は別の事情の爲めに沒落した。其の時名代の看板の虎は、千圓で或外國人が買ひ取つた。

恁んな風で久一は稍識者の間にも認められて來たが、併し格別仕事は無いので極度の貧乏暮しをしてゐた。其の時分は道具屋は廢めて、淺草壽町の宗五郎神社の裏手の小さな家へ這入つて彫刻だけをやつてゐたが、食ふや食はずの日が多くて、近所の内田屋といふ質屋へ五十錢位の質を入れて、米を買つたりした。質屋の使にはいつも母親が行つた。久一はふだんボロ〳〵の着物を着て、片びつこの草履をはいて、一見乞食のやうななりをして歩いてゐた。

其の頃、淺草の雷門再建の議が起つてゐた。有志の者が宣傳したり運動したりして、ともかくも再建の事に決したものと見えて、仲見世の入口に「雷門再建地」と記した大きな標杭が建てられた。すると或日其の運動をしてゐる人が竹内の處へ遣つて來て

「愈々雷門も遠からず再建の事になつた。ついては門の左右に安置する風神雷神の像をお前さんにお賴みしようと思ふから宜ろしく賴む」と言つた。

久一は大喜びで引き受けた。彼は其の後ですつかり有頂天になつてしまつた。

「お母さん私も愈開運の時節が到來した。今度の仕事で評判を取れば、何しろ場所が雷門だから毎日何萬といふ人の眼に觸れる、厭でも應でも賣り出しまさあネ。さうなつたらお母さんにも樂をさせて上げますよ、鰻なさあ毎日食べたつて知れたもん、

だ」

「さうかへ、それは嬉しいねえ、併しお前貺かりやつて人に笑はれないやうな物を拵らへなきやあ不可ないよ」と母親も相恰崩して喜んだ。

「處でお母さん、愈々風神雷神を彫り上げて納めると、開眼の式をやらなきやあならないんですが、これは中々やかましい故實のあるもんでしてネ。第一私の支度が大變だ、羽織袴ぢやあ不可ないんで、衣冠束帶といつて、神主のやうな服裝です、どうも立派だらうな。間際になつて誂へてもあゝいふ物は間に合はぬと困るから、今日にも行つて注文して來ようかしら」

「だがお前、何もさう慌てなくてもいいだらう？お世話人のはふから彫物代でも頂いてからにしてはどうだへ？」

「それあさうだが、どうせ要る物なら先きに拵らへたつて同じ事でさあネ、一方はあの通り確かな話なんだから。前金を貰つた時裝束屋へ拂ふことにすれば差し支えはないでせう」

「それもさうだねえ」

久一は逆上せあがつてしまつて、早速裝束屋へ行つて、直衣と、冠と、中啓とを誂へて來た。彼はそれを着て木像の開眼をする晴れがましい日の事を想像すると、今から既に胸が躍るのだつた。

裝束は思つたより早く出來て來た。久一は知人の處へ行つて事情を話した上借金をして來て、八圓ばかりの其の代金を仕拂つた。が、どうしたものだか雷門の世話人のはふからは其の後何んの音沙汰も無かつた。待ち切れなくなつてこつちから出掛けて行つて催促をすると、「もう暫らく待つてくれ」と云つたやうな挨拶である、もう暫く〱で到頭半歳以上過ぎてしまつた。其の間に例の裝束は内田屋へ持つてつて二回の質草になつてゐた。雷門再建の問題は何時となく立ち消えになつて、仲見世の入口の標杭も取り除かれてしまつた。

夏の事だつた。或晩久一は川遊しの歸途で御廐橋のはふへ歩いて來た。すると橋の上に一人の女が立つてゐたが、あなやと思ふ間に河の中へ身を投げた。久一はびつくりして橋の上まで驅けつけたが、下を見ると女は浮きつ沈みつしてゐる。彼も直ぐ樣裸體になつて女のあとから飛び込んだが、多少水練の心得はあるので、漸っの事で身投げを救ひ上げた。河岸へ引き上げて見るとまだ若い娘だが、澤山水を呑んだので死んだやうになつてゐる。其のうちに人が集まつて巡査がやつて來たりした。漸う正氣付いた娘を警察へ連れて行つて身投げの理由を取り調べると、不品行の揚句に男に捨てられて死なうとしたのだといふ事が分つたので、娘は說諭の上親許を呼び出して引き渡された。

一方久一は人命を救つた廉を賞されて、警察署から金六十錢の御褒美を貰つた。單にそれだけの事で、何んにも小說的に事件は發展しなかつた。

（三）

十四年の博覽會には象牙彫刻を出品して褒狀を貰つた。

其の頃彫刻家の間に競技會が催されてゐた。それは例の旭玉山等が發起で、石川光明、川本洲樂等の彫刻家連に、鑑定家の岸光景、象牙商の登山長藏、金田兼次郎等が加はつて、每月作品を持ち寄つて品評をし合ふ會であつた。竹內久一も其の仲間へはひつてゐたが、彼の優秀な技倆は最早專門家の間では十分に認められてゐた

博覽會の當時、加納鐵哉が奈良から上京して來た。久一は町田の紹介で鐵哉と識合ひになつた。鐵哉は當時奈良に立て籠つて專ら古美術の模造をしてゐた。彼は彫刻の餘技に畫もよくした。久一よりは遙かに齡も上であつた。

鐵哉は岐阜の產で、十歲位の時から禪寺へはひつて坊主になつた。が、生れつき手先きが器用で、經を習ふよりも繪を畫いたり彫刻をしたりする事が好きだつたので、十八歲の時寺を飛び出して、其の後は鑿と筆を持つて諸國を漫遊した。彼は古人の作以外に全く師匠といふものを取らなかつた。維新の後名古屋に暫く足を停めて、主に古人の模造物を作つて賣つたりしてゐた。すると、或娼妓に熱中して身請けをしようと思つたが、それには身の代金數百圓を要するところから、土地では金の調達が出來ず、自身でも傑作だと思ふ模造畫を二三枚携へて東京へやつて來た。東京でそれを高價に賣り付けて、娼妓の身の代金を拵らへるつもりだつた。處が、書畫屋へ持ち込んで見たが何處でも相手にしない。そこで彼は考へた。東京で修業しなければ駄目だと氣が付いた。名古屋の女の事はそれきり忘れてしまつて、其の後は東京に留まつて修養を積むことに努力をした。

當時松井楓川亭といふ文人物專門の一流の骨董屋があつた。鐵哉は楓川亭に愛されて其の引立てを受け、女房も持たせられた。さうかうするうち町田久成に見出されるやうになつて、町田の勸めで古美術硏究の爲めに奈良へ行つてゐるのであつた。

久一は、鐵哉から奈良の話を聞くにつけても、自分もどうかして奈良へ行き度いといふ念願が非常に强くなつた。併し、彼には母がある。彼は無類の親思ひだつた。修業の身では母を伴れて行くわけにはいかない。と云つて、自分が居なければ母を養つて吳れる者はない。

或日彼は淸水晴風の處へ行つて、其の話しをして嘆いた。す

ると俠氣に富んだ晴風は、

「宜ろしい、それでは君のお母さんを私が引取つてお世話しよう。私が自分の親だと思つて世話をしてゐるから、何年でも心置きなく奈良に居て來たらいいだらう」と言つた。

久一は泪を流して喜んだ。

晴風も畸人であつた。其の家は代々神田河岸で廻漕業を營んでゐて、晴風は十一代目の當主であつたが、孤山堂山月の門に入つて俳諧を學び、且つ頗る好事の癖があつて、三十歳前後からは專ら玩具の蒐集を始め、玩具の繪を畫き、斯の道に於ける博識は驚くべきものであつた。そこで一と口に「玩具博士」で通つてゐた。所藏の玩具は三千五百餘個、其の種類は六百餘種に上つた。

明治十五年の十月、久一は宿願成就して、東京を發つて奈良へ行つた。

正倉院の御物は黑川眞頼が擔當してゐた。久一は町田や松浦武四郎の添書を持つて行つた上に、奈良には先輩鐵哉が東京から戾つて行つてゐるので、萬事につけて便宜だつた。彼は正倉院御物をはじめ其の他の社寺の寶物を一々手に取つて研究することが出來た。

奈良の古美術は彼に取つては只々驚異であつた。是れまで夢にも想像の出來なかつた新らしい藝術の境地が、際涯も無き廣さで彼の眼の前に展けて來た。彼は感激し緊張した心持を以て、正倉院御物をはじめ諸寺の寶物を片端から模刻した。さうして研究する程に技倆は日に〳〵進んだ。彫刻といふ物についての觀念其のものが、根本的に變つてしまつた。

十七年の春彼は一度歸京した。そして先輩の誰彼を訪問して、藝の談を交換して見た。併し、先輩達は以前と少しも變らない仕事をしてゐた。其の頃、彫刻でも繪畫でも、西洋の影響によつて寫生の傾向が一般の主潮になつてゐた。其の結果、只々精巧を競ふやうになつてゐた。さういふ周圍であつたから、突然竹内が舞ひ戾つて來て天平式を鼓吹して見た處で、誰も相手にしなかつた。彼は不平で直ぐ樣又奈良へ行つてしまつた。そして、鐵哉の家に同居して、鐵哉の仕事を手傳つてゐた。さうして又一年を暮して、十八年の三月に奈良を引上げて歸京した。鐵哉も前後して東京へ出た。

久一は三年振りで母と一緒に暮すやうになつた。彼の彫刻は時流にあはないので一般からは歡迎されなかつたが、少數の識者の間では其の技を認められてゐた。就中町田久成は竹内を重んじて、博物館の仕事をさせたりして呉れるので以前程には窮しなかつた。間も無く彼は町田などの周旋で妻を迎へた。妻は、

勤王畫家として識られた川邊御楯の娘であつた。

川邊御楯は、花陵と號した。筑後柳川藩士の家に生れ、十二歳にして初めて畫に志して、三善眞琴について學んだ。二十四五歳の頃からは國事に奔走して、勤王の士と交り、畫を顧るの暇が無かつた。王政復古に及び、明治元年上京して皇朝學を大國隆正に學んだ。七年には伊勢神宮の權禰宜に任ぜられた。併し、彼は天性豪放無頓着の豪傑なので、大廟の神官の身であり乍ら平然として古市通ひをした。或晩大醉して夜半古市から戻つて來ると、門の戸が閉つてゐるので割れるばかりに戸を叩いてゐる處を、巡査が來て咎めると反つて巡査に食つて掛つた。すると其處へもう一人巡査が來た。巡査は共力して川邊を制しようとすると、あべこべに川邊の爲めに捻ぢ伏せられて門の柱へくゝし付けられてしまつた。川邊は免職になつた。又々京都へ行つて陶器の下繪を畫いたり、友禪の下繪を畫いたりして糊口をしのいでゐたが、明治十四年に上京して、町田久成の庇護を受けて門戸を張るに至つた。其の門からは、村田丹陵、小堀鞆音などを出した。

明治二十年に勅令を以て東京美術學校の學制が制定された。繪畫部は狩野芳崖と橋本雅邦、彫刻部は加納鐵哉と竹内久一とが撰まれて、其の計劃に參加した。二十一年度から學業を開始することになつた。同年四月、竹内は鐵哉と共に美術學校教授を拜命した。

其の後間も無く加納鐵哉は不平があつて美術學校から飛び出してしまつたが、竹内は踏み留まつた。そして二十四年八月教授に任ぜられた。

加納鐵哉は、丸彫りは不得手であつたが、鐵筆を執つては古今無雙の名人と稱された。彼は藝術家としては餘りに才氣煥發機略縦横に過ぎるの觀があつた。或時彼は男爵岩崎に一本の如意を彫つて贈つた。其の出來榮へは非常に面白かつた。すると岩崎の親類の人がそれを見て「私も同じ物を一本彫つて貰ひ度い」と云つて岩崎を介して依頼した。鐵哉は快諾して、直ぐ樣同じ如意を彫つて岩崎へ渡した。そして、岩崎から彫刻の價格を問ひ合はせて來ると、「金一萬圓申し受け度い」と答へた。岩崎は驚いたけれども仕方がなかつた。自身の懐ろから一萬圓を支出して鐵哉に與へた。

(四)

明治二十三年に東京で第三回内國勸業博覧會が開催されることになつた。久一はそれに何を出品しようかと種々考へたが、其の結果、恰も其の年の憲法發布の大典にちなむで、神武天皇

の像を彫つて出さうと決心した。で、其の事を校長岡倉覺三に相談すると、岡倉も其の案に賛成して、百圓の補助金を支出して呉れた。久一の案としては、像の大いさは實物大以上にして、大體男裝で、弓矢を取り揃へ、右手を以て民を撫し、左手を以て敵を退け給ふ文武の表徴を主眼にした。處が、それ迄は案が立つたが、神武天皇の尊貌を如何に表はすべきかといふ點で、ハタと行き詰まつてしまつた。そこで彼は好古學者を訪ねて訊して見たり、大學や博物館の土偶や埴輪を見て研究したりしたが、一向見當が付かなかつた。

さうして一生懸命考へてゐるうちに、或日彼は不圖、自分が若い時分、車坂の道具屋で見た木目込の人形の顏を思ひ出した。それは五寸位の座像で、鶯茶の衣裝をつけ頭には風折烏帽子を冠つてゐた。其の貌の出來具合が殊に良いので感心して眺めて見ると、何處となく今上天皇の御面差しに似せてあつた。値段を訊くと二兩二分だと云つた。餘程欲しかつたけれども、何分値が高いので手が出せなかつた。其の後は通る度びに覗いて見ると、高いせいか何時迄も賣れずにあつたが、約三年程經つてから、漸う賣れたと見えて其の店から見えなくなつた。

久一は、其の木目込の人形の貌を思ひ出した。

「さうだ、日本は萬世一系の皇統だから、神武天皇の尊貌を表はすには、陛下の御面差しを借り奉るのが最も適當である筈だ」

彼はさう考へ付いたので、急に勇み立つて製作に取り掛つた。彼は全精神を集中して仕事に從事した。

像は完成した。其の身長は八尺あつた。左手に弓矢を扣へ、右手を擧げて民を撫し、足は日本の國を踏み、下の臺は世界を意味してゐた。

博覽會へ出品すると、果して非常な評判を引き起こした。竹内久一の名は俄かに社會に高くなつた。

其の頃久一は根津宮永町に住まつて、數名の弟子を養成して學校へ通はせてゐた。其の家を實成舍と稱した。嘗て佛語中の「久遠實成」の久遠を取つて號としたので、それに因んで實成舍と付けたのだつた。白井雨山は其の高弟であつた。すると、博覽會のあつた翌年のこと、一人の少年が大阪から遣つて來て、弟子にして貰ひ度いと云つた。少年は博覽會の神武天皇像の寫眞を見て感激の餘り、遂に決心して單身上京して來たのだつた。久一は少年の請ひを容れて門弟に加へた。其の少年は、後の美術學校教授沼田一雅であつた。

其の後實成舍は淺草清島町に移された。其の時は内弟子の數が丁度十人になつた。そこで、十人が成業するようといふので成舍を改めて十成舍とした。白井雨山が塾長であつた。師匠

は無頓着で何事も放任主義だつた。個性を重んじ、少しも干渉するといふことをしなかつたので、十人の弟子はそれ〴〵一家をなしたけれども、一人として同じ方向へ向つた者は無かつた。

併し、久一はよく弟子を愛した。自身に窮乏時代の經驗があるので萬事に思ひ遣りが深かつた。沼田一雅が獨立して根岸に家を持つと、師匠は其の日荷車に米五俵に炭十俵を付けさせて其の家へ持つて行つた上、「家には掛物が無くてはいかん」と言つて、僞せ物だが守景の富士の圖の幅を與へた。それは久一が奈良に居た時、或道具屋から僞せ物と知りつゝ繪が氣に入つて買つた物であつた。一雅は今でも其の貴幅を秘藏して、常に床に掛けては師の面影を偲んでゐる。

或年久一は某國公使館の欄間を依頼されて、表に梅に鶯、裏に竹に虎の透し彫りをした。其の仕事が出來ると「今日はお祝ひ」だと言つて、弟子を全部伴れて向島の百花園へ遊びに行つた。歸りに山谷の重箱へ寄つて夕飯を食べた。其所を出る時分になると雨が降り出して來た。すると彼は弟子を一人〳〵俥に乘せて歸したが、自身は一番後から裸足で傘を借りて歸つた。

彼は珍らしい溫情家であつた。彼の師の川本洲樂が沒して、其の寡婦が困窮してゐるのを見て終生面倒を見て遣つた。その寡婦は指物師の男を家に引き入れたりして餘り行跡は善くなかつたが、それでも彼は少しも厭な顔をせずに、困ると言つて來れば必ず金を惠むことにしてゐた。他人にすら左うであるから彼の母を勞はることは一と通りでなかつた。

或る時江ノ島に遊んで、土地の料理屋で知人と飲んだ。久一は其の時出た料理を大變賞めたが、歸りがけに其の殘りを折に詰めさせて東京迄持つて歸らうとした。知人はそれを見て「貴下も今は美術學校の教授だのに、食べ殘りの折を提げて歸るとは不似合だ」と云つて笑ふと、久一は「母に食べさせて遣り度いから」と答へた。料理屋の主人は其の話を聞いて感心して、更に幾何かの珍らしい料理を整へて久一に贈つた。

(五)

初期の美術學校時代には奇人が澤山居つた。後藤定行といふ彫刻の先生は、牛に乘つて登校した。其の頃美術學校の制服となつた闕腋といふ古代の服を着て、撲頭といふ冠のやうな物を冠り、宛ら天神樣のやうななりをして悠々と牛に跨がつて年始廻りなどもした。後藤定行は宮城前の楠公像の馬の原型を作つた人である。楠公像は、人躰を高村光雲が作り、鑄造は岡崎雪聲がやつた。圖案は、岡倉秋水の手になつたのである。

竹内久一は、石の下駄を履いてやつて來て人を驚かせた。

彫刻部の教師は根が職人の育ちをして來た人達だけに、言行奇拔に走つて、教員らしくない人達が多かつた。石川光明などは、火事でもあると印袢纏を着て驅け付けた。學校の往復には居酒屋へ飛び込んでコップ酒を煽つたり、おでん屋の暖簾を潜つておでんの立食ひなどは日常茶飯の事だつた。校長岡倉天心も是れには弱つてしまつた。で、今泉雄作などと相談した結果が、人格向上策の第一歩として、教員の服裝から改めるが宜からうといふことになつて、例の天神式を制定したのだつた。其の後間もなく生徒にもほゞ同樣の制服を着用させた。明治二十三年の憲法發布式の當日、各學校の教員生徒は宮城前に參列して祝賀の意を表した。美術學校では、其の時までに全員の制服を整へて、一同其の服裝で、錦の校旗を押し立てゝ、上野の山から繰り出した。天下の奇觀であつた。

久一は酒が好きだつた。少し醉ふと直ぐに起ち上つて踊りを踊つた。彼は踊りに付いては一家の見解を有つてゐたが、併し其の踊りは全然我流で、よく云へば自己の創意に成つたものばかりであつた。

「踊りといふものは三尺四方の内で踊れなければ駄目だ、先づ恁ういふ具合に」

と言つて立ち上ると、月夜なれば月の事、花が咲いてゐればそれに因んだ即興の唄を唄ひ乍ら足踏み面白く踊り出した。踊りの形はすべて彫刻の上から出てゐるのだつた。それで、月や花の感情が巧みに表はされてゐた。一番得意なのは鰻の天上といふ踊だつた。それは鰻屋の料理人が、鰻を割かうとして捉まへようとするが、鰻はヌラリクラリと逃げ廻つて中々捉まらない。とゞの詰り鰻は料理人の手を放れて昇天してしまふのであるが、其の感じをすべて料理人の身振り手振りで表はすのだつた。觀てゐる人は空中にまつたく鰻がのたくつてゐるかのやうな氣持になるのだつた。

彼は泣上戸で、少し醉ひ過ぎるとよく泣き出した。

狂歌が得意だつた。それから洒落も上手だつた。其の頃幸堂得知等と地口の會をこしらへて、久一は其の幹事をしてゐた。

或る時學校で生徒に玉楠の材料を渡して彫らせたことがある。其の時分は材料は學校から支給することになつてゐた。玉楠といふ木は堅くて非常に彫りにくいものである。新能古拙も其の時の生徒の一人であつたが、餘り彫りにくいので、

「先生、是れは彫れない」と言ふと、竹内教授は言下に、

「ほれりや其の儘置くものか」と言つた。

板谷波山は彫刻部の第二回生であつた。彼は其の頃元祿趣味に心醉してゐたので、一つ元祿の若衆の姿をして歩いて見たい

と思つて、元祿模樣を染めた振袖の着物を拵らへ、繪の具で革色に染めた木綿の袴を履いて、編笠を冠つて或晩外出した。好い氣持で方々歩いて、幸ひ巡査にも捕まらずに下宿屋へ歸つて來た。其の翌日學校へ行くと教室で竹內教授が生徒に向つて、

「己は昨夜大變な奴を見たよ」と言つた。

「どんな奴を御覽になつたんです？」と一同の生徒は興味を持つて教師に訊ねた。

「昨夜己が俥に乘つて淸水堂の下を通ると、向うから元祿の若衆姿をした奴が遣つて來るぢやあないか、どうも驚いたよ、編笠を冠つてゐるから顏は見えなかつたが、着物の紋は大きな蝙蝠が附いてゐた」

波山は可笑しいやら極りが惡いやらだが、どうせ友達あたりから知れる事なので、

「先生、實は私です」と白狀した。

教師は目を圓くして

「君だつたのかい――」

其のあとで竹內教授は「實は、己も以前そんななりをして見た事があるのさ」と言つて、其の時分の話をした。

彼は嘗て自分が發起になつて元祿會といふ會を設立したことがある。當時元祿硏究が盛んになり始めた時代で、好事家松浦武四郎の宅では、柏木貨一郎とか永井十足などといふ連中が集まつて早くから元祿硏究をやつてゐたが、其の仲間のは餘り學術的に走つて面白くなかつたので、彼はもつと趣味的の會をつくらうとして奔走したのだつた。そして集まつた顏振れは畠山怒心齋、篠田仙果、高畠藍泉、假名垣魯文、鉢木雅樂などが主なる者で、最初は新富町の茶屋魚島の二階でやつたが、後には吳服橋の柳屋でやつた。紀文が使つた蠟燭の心切り鋏とか、英一蝶の用ゐた木刀、或ひは近松門左衞門が使用した机――といつたやうな物が持ち寄られた。竹內は元祿の若衆の姿をして、子供を禿に仕立てゝ柳屋へ行つたことがあつた。

其の時分のこと、或日も彼は元祿姿で日傘を差して往來を歩いてゐたが、丁度借金のある家の前を通らねばならぬことになつたので、日傘で顏を隱しながら早足に行き過ぎようとすると、

「竹內さん、竹內さん」と家の內から呼び留められた。

「しまつた」と思つたが仕方が無いので這入り込んで。

「傘で顏を隱して來たのに、よく私だといふ事が知れましたね」と主に言ふと、主は笑つて、

「いま時そんななりをして歩いてゐる人間が、あなたより外にあるもんですか。時に竹內さん、例の方は――」

久一は、非常なる骨董趣味を有してゐた程あつて、雜學にか

けては頗るよく精通してゐた。彼の骨董趣味は、森下町で道具屋をした時代から涵養されたことであるが、山東京傳の骨董集に依つて大いに啓發され、上記の人々だの、淡島椿岳、大槻如電などとの交遊に依つて、其の方面に於ける蘊蓄は益豐富になつた。根付、煙管、煙草入、火消、千社札、錦繪、着物、食物、下駄、團扇、袋物、提物、と云つたやうな具合のあらゆる物についての研究を積んでゐた。殊に根付は本職だけに精通してゐて、根付に關しては彼に及ぶ學者は無かつた。彼の骨董趣味は要するに江戸趣味であつた。當時の好事家がおほかたはさうであつた如く、彼は食物についても多大の趣味を有つてゐて、竹馬會といふ遊食會の仲間に加はつてゐた。或時は竹内等が主催で吉原で、「花街展覧會」を催したことなどもあつた。

晩年の久一は、骨董に關する鑑識は中々高かつた。けれども其の以前にはよく僞物を掴ませられた。「僞物」といふことに關して彼は嘗て書畫骨董雜誌に恁んな話を載せたことがある。

或骨董屋が古代の鐵の鐔を持つてゐた。久一が行くと、「先生、恁んな物が出ました、何んと珍らしいぢやアありませんか」と云つてそれを出して見せた。

久一が手に取つて見ると、一見頗る時代付きの物だつた。外部には瑪瑙質の曲玉が錆び付いてゐた。馬具の口の金具に穴が明いてゐるから、光線の方へ向けて覗いて見ると、穴の奥の明かない處に何か青く光つてゐる物がある。よく〳〵見るのに、どうも其の色合が青瑯玕のやうだ。

「是れが青瑯玕なら大した物だぞ」と久一は考へた。

そこでさり氣なく値をきくと、中々高いことを云ふ。「併し、穴の中の玉が若し青瑯玕だつたらまるで只の様な値だ」と思ふので、少し負けさせて買つて來た。そして家へ歸つてから鐔をこわして穴の中から青い物を取り出して見ると、それは膠緑を丸めて拵らへた玉だつた。

久一は餘り腹が立つので、翌日それを持つて道具屋へ行つて「恁んな物を賣り付けるとは怪しからんぢやないか」と云つて掛け合つたが、道具屋は笑つてゐて取り合はなかつた。そして恁んな事を云つた。

「だから私は青瑯玕だとは言やあしません。只、恁んな物が出たと云つてお目に掛けたばかりです。それを先生が自分勝手に青瑯玕だらうと極めておしまひなすつたのです。第一青瑯玕などといふ物が無闇にあると思ふのが間違ひです。昔の話に、恁んな話がありますよ。或金滿家が、人魚を食ふと不老不死を得るといふ話をきいて、人魚を手に入れ度いものだと思つてゐると、或人が人魚を賣りに來たので大金を出して買ひ込んだが、後で

人魚の腹を割くと中から鉋屑が出て來た、といふのです。恁ういふ事はよくあるやつでさあ」

久一は理の當然に詰まつて默してしまつたが、彼は骨董屋の談しから人魚といふ物に興味をもち出して段々調べて見ると、舊幕時代には人魚を拵らへて賣つて歩く者があつたといふことから、其の人魚作りの一人が、藏前の大萬といふ人でまだ存命してゐるといふことがわかつたので、或日態々大萬に會ひに行つて人魚の製法を教へて貰つた。すべて人魚は干物になつてゐるさうである。それは頭と手とは猿の子の干物で、胴體は魚の干物で、それを分らぬやうに縫ひ合せて作るのであつた。胴體にする魚は鯔にかぎると大萬が言つた。

（六）

有名な「技藝天」は、シカゴの萬國博覽會へ出品する爲めに製作したものであつた。其の天女の像は、身長六尺、極彩色で、天平藤原式に竹內自身の創意を加へた純日本式の大作であつた。濃艶無比の相貌、豐滿な肉體、それは觀る人をして思はず恍惚たらしめた。それは彼が生涯の傑作であると同時に、近世の日本の彫刻史を通じて第一位に置かるべき價値と意義とを有してゐる代表的作品である。

彼は熱心なる日蓮信者であつた。日蓮宗の團體である國柱會の有力者であつた。だから日蓮に關連した製作を生涯に澤山遺した。

筑前博多の海岸に建てられた日蓮上人の像は、原型を竹內が製作した。それは身長三丈三尺、臺石共に五丈の高さがある。其の頭までは原型は木彫りで拵らへた。初めは一尺三寸の原型を作つて、それを漸次引きのばして行つたのである。用材は木曾の山中から檜を取り寄せた。最初の着手からでは滿三年を費して、明治二十七年に完成した。大阪で鑄造をした。玄海灘に對つて、外敵調伏の祈を捧げてゐる日蓮の巨像の存在する限り、名匠竹內久一の生命も其處に傳はり遺されるのである。

其の日蓮上人の首を彫つてゐる時であつた。それは頭部の長さが六尺、顏の奥行が五尺あつた。仕事は學校の製作場でやつてゐた。

或日學生が五六人で製作場へ這入つて行くと、巨大な日蓮の首が彫り掛けの儘轉がつてゐたが、見ると邊りには誰も人はゐなかつた。そこで生徒は日蓮の首の前へ車座にしやがみ込んで、めい／＼秘密の談や遊びの談しなどをやり出した。そして好い氣になつて喋つた後で、誰か一人が日蓮の首の背後の方へ廻つて行つて見ると、其處には竹內教授が鑿を持つた儘居るにも出

られずに立つてゐた。竹內は、身長五尺に滿たぬ小男であつた。

久一は、內弟子などが遊びをしてもちつとも小言を言つたことはなかつた。只、

「上手に遊ばなけりやあ不可ないよ」と言ふだけだつた。

彼の父の田長は、通人だけにする事が徹底してゐた。久一がまだ川本洲樂の許に居た時分のことであつた。年頃になつたので友達に誘はれて吉原通ひの味を覺えた。で自然仕事をなまけ始めた。其の頃、或時家へ歸ると、父の田長は悴に向つて、

「兼、手前は近頃吉原へ行くさうだが、まだ本統の遊び方は知らないだらう。男といふものは交際ひで遊ばなければあならないことが幾らもあるから、心得のために、お父さんが連れてつて敎へて遣るから來い」

と云つて悴を伴れて吉原へ行つて、引手茶屋で面白く騷いだあとで久一だけ遊女屋へ送り付けた。久一は、親父が附いてゐると思ふと變な心持だつたが、兎も角も遊んで翌朝茶屋へ歸ると、田長は朝酒をやつてゐる處で、

「馬鹿野郎、折角吉原へ遣つて來て、一と晩ばかりで歸る阿呆があるものか」

と叱り付けられて、直ぐに遊女屋へ送り歸されてしまつた。

田長さん處の息子さんといはれてチヤホヤして呉れるので、久一も悪い氣持はせず居續けをして、夜になつて茶屋へ歸ると、親父は藝者末社を呼んでドンチャン騷ぎの眞最中だつた。

「なに、もう歸り度い？べらぼうな、遊びの面白いのは是れからなんだ、泊つてけ〳〵」

久一は又遊女屋へ送り付けられてしまつた。

翌日も歸らうとして親父に目玉を食はせられた。其の又翌日も無理往生に居續けをさせられた。さうして幾日も〳〵遊女屋に居續けをしてゐるうちに、久一の眼には、今迄美しくばかり見えてゐたさうした社會の裏面の汚なさやからくりが映つて來た。彼はもう面白いどころか厭で〳〵堪らなくなつた。それでも親父の田長が茶屋に神輿を据え込んでゐて歸して呉れないので、久一は到頭泣き出してしまつた。

「どうだ、ちつたあ遊びの味が分つたか？」

田長は笑ひ乍ら恁う言つて、幾日目かで悴を伴れて廓を出た。

さうした父を持つたお蔭に久一は、遊里へ足を入れても、嘗て一度も溺れるやうなことはなくて濟んだ。

併し、江戶つ兒の性分として、歳を取つてからでもお祭騷ぎが大好きだつた。明治三十六年の學校の美術祭の時、彫刻科の一年生が殘らず埴輪になつた。ボール紙で着物を拵へ、一升樽を脚に履いて圓筒にした。久一先生は竹內宿禰の埴輪になつて、

學生の擔ぐ神輿へ乘つて內裏へ伺候した。內裏の役人をば高村光雲がやつた。さういふ遊びが好きだつた。

或時彼は厨子の圖を付けて呉れと人から賴まれた。すると彼は、紙を三つに折つて、それを開いて中央へ厨子の圖を畫き、左右へ扉の圖を付けた。

明治三十九年四月帝室技藝員に選まれた。

同四十年文部省に美術審査會が設けられ、文部省の美術展覽會が出來ると、彼は審査員になつて、それから第七回迄繼續して審査員を勤めた。

大正二年に彼の知己であつた淸水晴風が歿した時、彼は其の墓を巣鴨の本妙寺へ自費で建てた。碑面には、晴風が嘗て林若樹の爲めに畫いたところの、玩具涅槃の圖を其の儘に彫刻した。

瀨戸內海小ヶ首島の御影自然石を利用して、日蓮涅槃像を造る計劃が信者の間に起つた。それは總身長四十三間の像になるのだつた。此の原型を竹內が引き受け、先づ實物の十分の一の縮圖を作つて、四間餘の原型だけ完成した。

それは大正五年のことであつたが、其の年の九月廿四日に竹內久一は歿してしまつた。行年六十歳であつた。

追　記

竹內久一翁の傳を作る爲めには意外に多くの人々の厄介になつた。筆者に材料を供給して下すつた方々の芳名を擧げると正木直彦先生、大槻如電先生、淡島寒月先生、吉田芳明先生、沼田一雅先生、板谷波山先生、古澤俊介先生、以上の方々の外に、竹內翁の沒せられた當時、海野美盛先生が書畫骨董雜誌へ謹嚴なる文章を以て書かれた正傳は筆者に取つて尠なからず助けとなつた。猶、美術學校助教授田邊孝次先生を煩はして、學校の參考品となつてゐる「技藝天」を觀させて戴いた事も、謝辭と共に玆に特記しなければならない。猶他にもお訪ねしたい方々があつたが、餘日が乏しくて遂に其の意を果さなかつた。誠に遺憾である。不完全でも、無いよりは增しだと思つて書いたのである。

偖、近世名匠傳も續々篇に及んだから、玆らが筆者としては引つ込み時である。が、數へて見ると未だ僅かに六人の大家を物したに過ぎない。最初の計劃では、幕末から明治年代に於ける美術の各方面の大家の中から、少く共十五人位の名人上手を物色して、其の列傳を作るつもりであつた。然るに未だ半ばにも達しないのだから、此の儘筆を擱くのも些か殘念な氣持がする。稿を續け度い意志はあるのだが、筆者も多少疲れ氣味ではあり、且つ私事を申すは恐縮だが、三月匆々から二三ヶ月間の豫定で支那に遊ぶ筈になつてゐる。支那土產は何になるか未定

であるが、旁々で、當分名臣傳のほふは手が付きさうもない、若し、暫く英氣を養つた上で、改めて稿を續けることともなつたならば、其の節は又々御愛讀を願はなければならないのである。稿々篇の[illegible]に因んで、筆者の[illegible]に多忙の時間を割いて援助の勞を賜はつた先輩諸氏に對しては、謹んで感謝の意を表する次第である。

雪の八甲田山

大町桂月

一　二十年前の慘死

青森市よりの馬車を、横内村にて馬に乘り換へて、分け登らむとする八甲田山の頂は、雪既に白かりき。

古來陸奧にて名山として世に知られたるは、岩木山と恐山と也。八甲田山は明治三十五年に雪中行軍の慘事ありてより、其名始めて世に知られたり。されど唯恐しき山として知らるゝのみ、山上に御溫泉ありて優遊するに足ることは、未だ知られざる也。偃松帶の上に御花畑ありて、高山の特相を具し、天上の神苑の趣を呈することも、未だ知られざる也。十和田湖附近最高の山にして、地勢上十和田湖と共に併せ觀ざるべからざる勝地なることも、未だ知られざる也。

十和田湖に一種の主（ぬし）といふべき人あり。小笠原松次郎氏といふ。八甲田山にも主あり。白戸友雄氏といふ。十和田湖の主は我を十和田湖に導かむとし、八甲田山の主は我を八甲田山に導かむとす。喜んで應じけるが、北海道探勝の前約ありければ、北海道よりの歸路にと約せり。然るに北海道の探勝思ひの外に長引き、御花畑の時節も過ぎ、紅葉の時節も過ぎて、今茲に雪の八甲田山を攀ぢむとする也。

秋田の一友人も加はりて、馬を連ねたるは、都合四人也。外に鹿内辰五郎氏徒歩して一行を導く。夏にても、二十年前の雪中の慘事を偲ばざるを得ず。況んや峯上に雪あるをや。況んや

中腹に遭難紀念の銅像見ゆるをや。況んや鹿內氏は當時捜索隊に加はりたる兵士にして、その目撃したる慘狀を語り出すをや。

第五聯隊にては、雪中青森より八甲田山を越えて、三本木平原に出づるを得るや否やを判せむとして、先づ田代溫泉に一泊行軍を行ひける也。山口少佐以下二百十人、明治三十五年一月二十三日午前六時五十五分を以て屯營を發し、八甲田山下の幸畑と田茂木野とにて、導者を雇はむとせしに、土民は天候の險悪なるを豫知して、誰も應ずるものなし。止むを得ず、導者なくして山に登りけるが、風雪大に至り、田代に達する能はずして、雪中に露營せざるを得ざるに至れり。翌日も風雪止まざれば、行軍を中止して引返しけるも、積雪胸を沒して、殆んど進む能はず。晝なほ暗くして、方向を辨ずる能はず。又も露宿したるが、食ふに物なく、凍傷と飢餓とに倒るゝもの多く、終に一人も山を出づる能はざりき。第五聯隊にては、捜索隊を出したるが、進行困難にして、田代溫泉に達するを得ず、漸く二十七日に至りて、後藤伍長の死體となりて雪中に立てるを發見し、蘇生せしめて始めて狀況を詳にし、大擧して捜索に從事し、山口少佐以下十六人の生存者を救ひ出して、病院に收容せり。爾後數月に亘りて、百九十三人の屍骸を搜し出したる也。

平時に在つて、二百人も一時に雪中に斃るゝといふ事は、古今內外未曾有の異變也。上は宸襟を惱まして、慰問の勅使を遣はし給ひ、下は國民一般に驚き悲み、金品を寄附して同情を寄するもの多く、なほ廣く海外諸國にも知れ渡りて、日本の軍人は雪に堪へざるかとまで嘲せらるゝに至れり。

雪の量の非常に多くして、連日に亘りて霽れざりしことが、直接の原因にして、實に人力の如何ともすべからざる天災也。されど、導者無かりしことも、亦一大原因たらずんばあらず。導者なくとも、一隊の中に山下の民あらば、まだしも、一隊の兵士はみな岩手宮城兩縣の人也。山下の民は第五聯隊に入營せずして、第三十　聯隊に入營しける也。鹿內氏も其一人也。

第五聯隊は青森にありて、第三十一聯隊は弘前にあり。鹿內氏は第三十一聯隊の喇叭卒なりき。第三十一聯隊にても、第五聯隊とほゞ時を同じうして、岩木山に行軍したるが、二人の導者を得て、首尾よく目的を達したり。歸り來りて、第五聯隊の慘事を聞けり。第三十一聯隊にても捜索隊を出さむとして、志願者を募りければ、鹿內氏は進んで之に加はれり。鹿內氏を始め、其捜索隊には八甲田山の地理を熟知するもの多し。されど如何せむ、積雪餘りに深くして、一望唯白皚々たるのみ。捜索隊の人々は竹竿を雪中につき立てゝ、屍體を物色せり。その困難は、雪中の行軍にも讓らず。一の屍體を發見したる者は二日間

の休養を得るといふことに勵まされて、風雪と鬪ふこと、十六日間に及べり。屍體の中には、苦しみたる顔付を爲せるものもあれば、さまで苦しまざる顔付を爲せるものもあり。前者は早く諦めて動かざりしものにて、後者は斃るゝまでも動きたるものなりと、鹿内氏云へり。なるほど、早く諦めて動かざる者は、死ぬるまでに、苦しまざるを得ざりしなるべく、斃るゝまでも動きたるものは、苦しき顔付を爲す餘裕なかりしなるべし。さるにても、其動きたりしと動かざりしとは、如何にして知りたるぞと問へば、草鞋の裏に附着せる雪塊の大小硬軟を見て知れりと云へり。

行軍の一隊二百十人、屍體となりて、雪中に埋れたるは百九十三人、病院に收容せられたるは十七人也。山口少佐の父、病院に其子を見舞ひたるが、喜ぶかと思ひの外、この度の慘事を生じたるは、汝の責任なり。部下を殺し盡して、汝獨り活くるとは何事ぞ。切腹せよと怒つて立去れり。少佐を始め、六人は死して、十一人だけ命を全うしたるが、其中八人は不具者となれり。惜しや、後藤伍長も其一人也。當時後藤伍長は神成大尉に隨ひて眞先に下りたるが、大尉は此方角に行けと、指さし教へて、伍長をして急を傳へしむ。伍長發足して間もなく、大尉は指さしたるまゝにて、死體となれり。伍長は一旦死したるも、蘇生して、使命を全うせり。八甲田山中の記念像は後藤伍長の銅像にて、萬古風雪の威力を語る。

當時行軍隊に對して同情を寄する一方に、その意氣地なきを非難する聲も高かりき。陸奥あたりには、一種の迷信殘り居りて、千年を經たる猿の所謂『もんじゆ』の爲せるわざなりといひふらすものも多かりき。師團長立見將軍大に憤慨し、東北男兒斷じて意氣地なき者にあらざる實を示さゞるべからずとて、更に志願者を募り、難所として有名なる來滿峠（ライマン）の雪を衝かしむ。實彈を用意させて、若し『もんじゆ』出でなば、擊退せよとさへ命ぜり。志願者非常に多かりしかば、身體檢査の結果、定員だけを採用せり。鹿内氏も其一人也。小坂、毛馬内、大湯を經て、無事に來滿峠を越えて、岩手縣の平地に出でけるに、八甲田山の雪に斃れたる兵士の父や母や兄妹や、涙を以て迎へ、涙を以て送れり。行軍隊も亦涙を以て岩手縣を去り、一人の死者なきのみならず、病者もなく、勇氣凜々として、歸り來れり。立見將軍嬉し涙を以て出迎へ、自ら金を投じて、兵士每に酒二合、牛肉一斤を頒てり。八甲田山の失敗の非難は、忽ちこの來滿峠の成功に由りて打消されたり。東北男兒果して意氣地なきものに非ざりき。就中鹿内氏の如きは、前後三回數十日に亘りて、大風雪と戰ひたる勇者也。殊に八甲田山下に生長して、八甲田山

中足跡を印せざる隈もなし。この勇者に導かるゝを以て、余は安心して、八甲田山の雪を衝く也。

二　雪の霰彈

雲谷(モヤ)とて、山中の平地に、五六の人家あり。その一つの家に入り、爐に火を焚いて午食す。青森より横内へ一里、横内より雲谷へ一里、雲谷より酸ケ湯まで四里半也。緩き傾斜面を上る。山柳は淡黄に、柏や楢は濃黄に、尾花は白くして、秋の俤を留むるが、怪しき雲より洩るゝ八甲田の諸峯は、冬の雪を帯びたり。顧みて青森平原を見、青森灣を見る。前に聳えし前嶽、いつしか左手になりて、田茂谷地獄の西側面をゆくに、秋の世界盡きて、冬の世界となりぬ。樹木に葉なく、路に雪あり。その雪なほ淺くして、馬蹄の跡黒く殘りけるが、進むに從つて、雪深くなり、馬蹄地に達せず、夕暮の冷氣身に浸みて、馬の吐く息白く、我が吐く息も白し。ふと蟲の鳴く音かと、耳を欹つれば、降りくる雪の熊笹に當りて音する也。その雪小降りなれども、二三町の外は見えず。終に馬の息も我が息も全く見えざるやうになりて、全く夜に入る。七つ八つばかり橋に溪流を横斷しけるが、近く右に溪聲を聞くやうになりて、提燈に迎へらる。これ鹿内氏先づ行きて、持ち來れる也。酸ケ湯より數町の手前なりき。

酸ケ湯は鹿湯を訛りたるにや。八甲田最高峯の大嶽の中腹の深間にある一軒屋なるが、壯大にして、數百人を容るゝに足れり。それにつれて、浴場も廣く、湯槽四つ、數條の湯瀧もあり。湯槽によりて熱湯、四分六分、冷湯などの別あり。熱湯は純粹の硫黄泉、四分六分は水と硫黄泉とが四分六分に混ぜるもの、冷湯は全く冷たきに非ずして唯水の分量の多きもの也。冬は番人が居るだけにて、十一月に入りては客を迎へざるが、今年に限り、宿を閉ぢずして、我一行を迎へたり。帳場掛りの人は去りたるも、白戸氏の養母の郡場刀自は、余を迎へむとて殘れり。刀自の實子には、寛とて理學博士あり。徹とて新聞記者あり。白戸氏は中繼養子として、刀自の長女に配せる也。七十歳にもや、刀自の髮は白きが、顏に皺なし。膝長くして高く、仰月の口能く語る。三十年來、温泉宿の指圖する傍、單身にて山深く分け入り、絶壁を攀ぢ、溪谷に下り、時に熊の糞を見るも、少しも恐れず、あまねく高山植物の花を探り、名を知らざるものは大學に送りて聞き合せ、八甲田山中の高山植物、一として刀自に知られざるはなく、其數一千に餘れり。刀自はその標本を東京の植物園にも送り、諸所の學校にも送り、今や北は札幌、南は廣島の間に散布せり。なほ餘命のある間に、悉く日本中に散

布せむとするなりといふ。天花をふらす天女の賓物は是れにやとばかり、その採集せる天花に對して、山上の雪に醉ひぬ。

雲の上の花を手折りて世に分つ君には神の血の通ふらむ

起き出でし時、雪ふれるに、失望せしが、霽れたり。うれしやと思ふ間に、霰となりぬ。霙となりぬ。雨となりぬ。又も失望せざるを得ず。八甲田最高の大嶽を攀ぢむとする也。雨でも閉口也。雪では困る也。數日霽れずんば愈困る也。斯る際、酒は奇効を奏す。よしや霽れて、山に登るとも、二三合の酒ならば、息の切れることなし。女房を質に置きてもといふ朝酒を口にしては、雪の中にても、心自ら春也。厠(カハヤ)に行きても、惡臭なし。こゝの厠は川屋にて、人間の身體より出づる不潔物は、溪水が直に持ち去る也。戸外を見れば、空はさまで晴からず、雨も強からず。家の周圍には、水淺く溜れり。雪解の水かと問へば、溫泉の末を引きて、淺き池を造り、空より降る雪も、屋上より墮つる積雪も、解かして、流して、家の周圍に雪の積まぬやうにするなりといふ。思ひもかけぬ工夫もあるものかなと合點す。

これなら登れると、午前十時頃になりて、鹿内氏來り告ぐるに、喜んで行裝を整へ、山下よりの五人の外に、人夫一人加はりて出づ。空は晴れざれど、雨は止みたり。積雪は一尺ばかりにて、人の踏みたる跡を歩めば、足の難儀もなし。凡そ半里の間は、硫黃山より硫黃を掘り出したる時の木の軌道、なほ殘り居りて、傾斜も緩也。顧みて、雪の岩木山を見る。富士形なるが、頂は雲に鎖されたり。左は目ざす大嶽の側面なるが、頂は見えず。前に石倉の二峯を見る。其左峯は硫黃採掘以來、別に硫黃嶽の稱もあり。右は大嶽と石倉嶽との腰部の平らかに延びたる末に、駒ケ嶽、櫛ケ峯などの諸嶺長く天に横はる。その諸嶺も後になりて、石倉嶽今や溪谷を隔てゝ、右手に立つ。嗚呼美なる哉。大嶽の側面より石倉の二峯へかけて、一面の雪にて、偉大なる自然の銀屏風我を擁す。その屏風に、自然の妙畫を見る。雪は山を埋めたれど、西風強きを以て、八甲田特有の椴松(トドマツ)と熊笹とを掩ふ能はず。その青き椴松と同じく青き熊笹とが、如何にも面白く配置せられたり。而して落葉樹は悉く皆樹氷を帶びたり。幹も白く、枝も白し。幹と枝との全體が白きに非ず。西風に面する部分のみ白し。西風の送る水蒸氣、樹に附着しては凍り、凍りたるものに附着しては又凍り、附着に附着を重ねて、長さ一二寸より五六寸に達す。平地には見られざる光景にて、如何なる樹の花とても、これほどまでには美ならざる也。

廣かりし溪谷狹くなりて、終に石倉嶽の大嶽に接する處に達すれば、硫黃を採掘せし跡ありて、木の軌道、茲に盡く。大嶽

の方より淸水ちよろ〳〵流る。その淸水の積雪に沒したる處より左に『梯子登り』を登る。その名にても知らるゝ如く、路始めて險也。手を用ゐずには登られず。雪も亦深し。五六尺もやあらむ。杖を衝立つるに、腕を沒しても地に達せず。慣れたりとは云へ、先登する鹿内氏の勞苦、さこそと思はる。余は人後にありて、手の跡に手を用ゐ、足の跡に足を用ゐるを以て、手足の勞は、さまでにもなけれど、雪を衝いて、一步一步身を天上に持ちあぐるは容易に非ず。微雪さへ降りて、寒さ骨に徹す。午食せむとて、『梯子登り』の中程に休息す。犬の毛皮を敷きて、腰を雪におろす。酒を飲みたるが、多く飲みては登れず。少しばかりの冷酒にては、身は暖まらず。鹿内氏と人夫とが骨折りて、火を焚かむとするに、燃ゆるかとすれば消え、又燃ゆるかとすれば、又消えて、暖を得る能はず。戻るまでに火を熾にせよと、人夫を殘し、擬傚に少しばかり勇氣を囘復して、『梯子登り』を登り果つれば、うれしや積雪凍りて、巖の上を步くに異ならず。されど、苦しや、西風強く横より我を吹いて、身は飛ばされむとす。風ばかりならで、天上の惡魔我を射擊するかとばかり、凍れる雪の霰彈我を擊ちて、面を向くべくもあらず。雪の底は一帶の偃松ならむ、夏は登れぬといふ傾斜面を辛うじて登りて、路稍平らかになりぬ。右に鏡池あり。山椒魚棲むと云へど、二三步の外は見え分かざれば、それと知るに由なし。西風に向はざるを得ざるやうになりて、横向きても步かれず。首を垂るゝのみにても步かれず。折り〳〵覺悟して、面に霰彈を受く。面の痛さは、我慢するにしても、眼鏡砕けて、我眼を傷けむかと、長くは西に向はれず。空よりの雪は止みて、凍れる雪片の横に飛べるが、天地晦濛たるまでに濃密也。同行の人々も、近き鹿内氏の外は見えず。小さき石祠の一堆の雪となりて、東面のみ石祠らしく見ゆる處に至り、相集まりて伏し拜む。頂上は數十間に過ぎずといふに、力を得て登る。烈風左より吹きて、身は右に飛ばむとす。右の方には噴火口あり。吹きおとさるゝなと警告せられて、恐る〳〵、左を心がけて進む。こゝが頂上なりと云はれて、始めて步を停む。東に太平洋、西に日本海、北に青森灣と津輕海峽との見渡さるゝ天下の名山も、今や雪に遮られて、天地混沌たり。頂上の廣さだにもわからず。樹ならば樹氷といふべきを、巖には巖氷といふべくや、突起せる巖の西面に、巖氷長く突出して、長さ三尺にも及べるを、珍らしと興じあひて、歸路に就く。

雪つぶてそびらに受けて手を呵して我れ八甲田の頂に立つ

午食せし處に戻れば、うれしや、焚火熾になりて、我を迎ふ。面も、手も、足も、暖かになりぬ。暖き酒に、腹の中までも暖

かになりぬ。『梯子登り』は、登るよりも、下る方が勞多かりしが、軌道に來れば、下るに幾んど勞なし。大嶽の側面より石倉の二峯へかけて、自然の描ける大屛風、身體の勞せざるにつれて、ますく美なるを覺ゆ。軌道の幾んど盡きむとする處、左に轉じて賽の河原に出でむとすれば、先登せる鹿内氏、一匹の兎を手にし高くさしあげて一行に示す。問ふまでもなく、『わな』にかゝり居りたる也。『わな』は輪繩の約なるべし。昔の繩を今は銅線に換へたり。路を横斷して、高さ一尺ばかりに稍大なる銅線を張り渡し、それに稍小なる銅線を輪にして、並べ掛く。恰も數字の0の如し。その輪に兎入りて動けば、輪は忽ち兎の頭に6字となりて、兎を絞殺する也。憐れや、兎は銅線の『わな』にかゝる。人間は金銀の『わな』にかゝる也。

三、炭燒小屋の一夜

まれ人の足をとゞめて八甲田に降るも悦れしき今日の雨かな

と白戸氏の喜べる雨の一日を、老いたる天女の物語に暮らして、明くれば十一月十二日也。雨は止みたれど、雪ふりしきる。この儘、山を下るならば、雪も物ならねど、余は八甲田越をなして、蔦溫泉に行かむとする也。蔦溫泉も山中の一軒屋也。一里上りて、三里下る。途中に人家なし。路は積雪に埋もれたり。今降りつゝある雪が、如何ばかりの大雪となるかも知れず。行けるかと問へば、行けると鹿内氏斷言するに、さらばとて、天女と袂を分つ。鹿内氏だけ木の『カンジキ』をつけて、先登す。小笠原氏之に次ぐ。その次は秋田の友人、その次は余、最後に白戸氏ひかへ、鹿内氏と首尾相應じて一行を導く。

積雪は二尺ばかりにて、一昨日より多けれど、人の足跡を蹈むことゝて、さばかりは勞せず。强き西風雪を吹き送れど、背に受くるを以て、風もつらからず。賽の河原とて、緩き傾斜面に、石を積み重ねたる處を下りて、地獄沼に出づ。一二町四方、一面に黑くして、處々より湯氣立ちのぼる。その流れ出づる小川に足を入れしに、冷たからねど、熱くもなかりき。時々上下すれど、路は急ならず。雪もさまで密ならざれば、眼界は二三町の外に達す。石倉の巖壁、面に當るかと思へば、横になり、終に後になりて、路の平なる處を、右にゆく。上りはこれにて果てたり。こゝは八甲田群峯と駒ヶ嶽連峯との間の高原的峠にて、津輕と南部との界也。風强し。處々に椵松あれど、人より高くは延びず。谷地多し。谷地とは、濕地なるが、泥深からず、草生ひて、じくくせる處也。谷地の峠は、世に非類稀れ也。

雪の山、ともかくも一里は上りたり。あとに三里あれど下る

一方なりと、安心して下る。峠に遮られて、風は强くは當らず。雪も小降となりぬ。唯積雪深くして、三四尺に達す。椴松の林開けたる處、五つ六つ小沼ありといへど、雪に埋れて見えず。さすがの鹿内氏も、一寸路を失へり。喇叭を吹くまで、待つて居られよとて、獨り行く。十分ばかりにて、喇叭鳴る。一同足跡を踏みて、鹿内氏と合す。鹿内氏は當年の喇叭卒の餘波を留めて、喇叭を持ち來れり。大嶽に登るにも、喇叭を離さゞりしが、こゝに始めて前後唯一回喇叭が役立ちける也。

椴松の林の中を行く。右に下れは、猿倉溫泉に達すべしといふ岐路に步を停めて、午食す。火を焚きたるが、十分に暖を得るに至らずして火消ゆ。幾度も焚かむとすれど、燃え付かずして止む。猿倉はと問へば、もと溫泉宿ありたれど、洪水に流されて、今は無しといふ。峠より一里近く下りたり。雪に捗らぬ山路も、思の外に早く、凡そ其半に達したりと喜びしが、玆に一つ困りたる事生じたり。そは秋田の友人の兩脚、づぼん下と足袋とに隙間ありて、そこに一線細く霜燒を生じたる也。午食の時に、それと知りて、巾にて卷きたるが、痛さは癒えざらむ。步すること遲々として、鼈ほども捗らず。十六七貫を下らざるべき大男なれば、如何に勇者の鹿内氏とても、背に負ふことは出來ず。紐なり、綱なり、繩なりでもあらば、前より引かむと思へど、それも無し。醫すべき藥もなし。本人自ら勇氣を鼓して、痩我慢を張るより外には、何とも方法なし。先登の小笠原、鹿内二氏は、まさか、あれだけの霜燒に、斯くまで弱らむとは思はざらむ。數町過ぎては、振りかへりて、待ち合はすこと、幾度なるを知らず。余友人の前になりて、小笠原鹿内二氏に接し、友人の霜燒に弱れることを告げ、二氏の步調を遲からしむ。斯るほどに日は暮れたるが、雪は止みたり。左に數町行けば、谷地溫泉ありと、小笠原氏の云ふに、猿倉と同じく溫泉宿なきにやと問へば、宿はあれど、今頃は鎖して、人あらずといふ。一夜の宿を求むべくもあらず。蔦溫泉へ直行すれば、一里餘なれども、路に川ありて橋なし。雪の夜の徒渉は危險なり。一里半も迂回せざるべからずといふ。やれ〳〵四里の路が五里半になりたり。蔦溫泉に行きつかずとも、一里も下れば、炭燒小屋あり。そこまで行けば、何とかなるべしといふに、さらば君等二人は先づ行きて、炭燒の人夫に賴み、繩を持ち來らしめ給へ。その繩にて弱れる友人を引かむと云へば、諾して先づ行く。

殘れる三人は路を知らず。されど、二人の先蹤ありと、早合點したりき。危かりし哉。足跡は林の中にこそあれ、林の開けたる處には無し。雪は降らねど、强風地上の雪を捲いて、足跡を埋めたる也。初めは其れと知らず。友人を待たせ置き、白戸氏

と手分けして、左右を搜しまはりし末に、漸く其れと知りたり。凡そこのあたりと見當をつけて、林に入れば、うれしや足跡あり。林續けばよしと思ふに又も林開く。斯ること數回に及べり。夜更くるにつれて、腹は減り、寒さは加はる。早く歩きて暖を得ては、友人を待つ。林はみな山毛欅にて、高く天を衝けるが、風に煽られて空に動く。惡魔の叫び狂ふかと思はれしが、いつしか月出でたり。四面玲瓏、身は唯仙界に在る心地す。今となりては、風は天樂也。山毛欅の動くは天人の踊る也。その山毛欅の葉既に落ちて、月光を遮らざるも嬉しかりき。

氣にかゝるは、友人の餘りに遲きこと也。をり／＼其樣子を伺ふに、唯霜燒に勇氣を失へるだけにて、他に故障なし。ちと元氣を出して、早く歩かずやと、わざと憎まれ口を叩いて見たれど、唯にや／＼笑ふのみ也。林の開けたる處、いくつもありたれど、いづれもみな一二町の內外に過ぎざりしが、終に果てしも見えぬ大廣場に出づ。餘りに廣くして見當つかず。林の中に引返して、白戸氏と友人との來るを待つ。久しうして來らず。思ひ切つて數町進みて又待つ。風強く、地上の雪飛散して月も曇る。寒さ堪へ難ければ、そろ／＼進み行きしに、思はずも前よりは少し右へよりたる方より、おうい／＼と呼ぶ聲す。飛散する雪に、人は見えず。歩を右に轉じ、近づきて、始めて三人の壯漢の來れるを知る。東京の人が三人死にかゝつて居ると聞いて、急いで來れりといふ。先發の二氏が人夫を急がせむとて、わざと誇張したりと見ゆ。一つの握飯を余に呉れて、あとの二人はと問ふ。すぐあとから來るといふ程もなく、白戸氏來り、友人も來る。二氏にも握飯一つづゝ呉れたり。こゝに一先づ安心す。我等の炭燒小屋へは半里もありて、小屋も狹し。近き事務所へ案內せむとて、右へ行く。繩を持ち來りたるかと問へば、持つて來ずといふ。この人が弱つて居るとて、友人を指せば、一人の壯漢友人の手を引く。

大廣場盡きて林に入り、傾斜面を下る。近しと聞きたれど、三十分もかゝりて、事務所に達したるは、恰も午後十時也。人夫先づ入り、我等は離れて待つ。入れと云はれて入る。主人夫婦喜んで迎ふ。名乘りあひて見れば、主人は田畑勇といふ人也。唯今人夫來りて、死にかゝつて居りし東京の人を伴れて來れりと告ぐるに、先生が八甲田を越さることは、新聞にて知り居りたれば、或は先生にもやと思ひ浮べしが、果して先生なりき。このいぶせき小屋に、先生の來らるゝは、願うて得られざることにて、光榮此上もなしなどゝ、辯舌爽やか也。中央に爐ありて、一と間しか無き家の一隅、布團の中に幼女臥して、其側に布團を卷きたり。川臥の夢穩なりしなるべしと氣の毒也。爐火

熾になりて、身體も暖まり、衣服の濕りも乾きて、蘇生の思をす。主人も飲める口にて對酌す。鮭の腹ら子、蟹、姫鱒の糟漬など、飲める口に適する肴出づ。とゝろ汁も出づ。自在鍵の鍋には、味噌汁たぎりて、芳香鼻を衝く。玉菜あるを見て、乞ひて、生のまゝにて酢をかけて食へば、主人も試みて、これは旨し、始めて玉菜を生にて食ふことを知れりといふ。一時間ばかりにして、小笠原、鹿内の二氏も來る。小笠原氏とは同村にて、識り合へる仲とて、主人益喜ぶ。如何なれば、三人の人夫と共にせざりしぞと問へば、腹減りたるに、ありあはせの飯は握飯として持ち行きたれば、洗はずに米を炊ぎて、半熟なるを顧るの遑もなく、腹を充して來れるなりといふ。斯く云ふ二氏も又飯を食ひて、十二時を過ぐる頃、一同寢に就く。今宵の炭燒小屋、我等に取りては、極樂淨土也。

明くれば、何の苦もなく、午前中に蔦溫泉に着き、極樂淨土なほ連續す。嗚呼、八甲田山中の雪の夜、死にかゝるほどにはなかりしかど、もしも炭燒小屋なかりせば、或は死にかゝるかも知れざりし也。少くとも夜明くるまでは蔦溫泉に達する能はざりし也。事は唯一人の弱れる者に基づく。秋田の友人、姓名なきに非ず。弱れる者との名を公にするに忍びざるを以て、わざと隱し、唯事實を記して、後の登山者を戒むる也。

行軍隊の慘死に暗く思はれし八甲田山も、この度の雪越えに明るくなれりとて、八甲田山の主は喜ぶ。十和田湖の主、ついでに雪の十和田湖を賞し給はずやと誘ひたれど、暇なしとて、鹿内氏と共に、路を三本木に取りて去れり。余は十和田湖へと思ふ心を抑へて、秋田の友人の霜燒の癒ゆるを待つ也。（終）

文豪生面記

井上唖々

尾崎紅葉

紅葉山人に初めて對面せるは、小波先生が元園町の舊居、樂天居に催されたる紫吟社句會の際なり、羅蘇山人に誘はれ、永井荷風と共に赴く、坐に泉鏡花、小林蹴月、谷活東、齋木菊雨、星野麥人、大田南岳、黒田湖山、生田葵山、柴田流星、藤井紫明の諸氏綺羅星の如く居列び、當時一學徒に過ぎざりし予は心自ら臆せざらんとするも得ず、末席に扣へて、高説を拜聽せり。僥倖にして句相撲に優賞を得て、新參忽ち面目を施す、乃ち乞ふて小波先生の門下となり、其の主宰せる木曜會の一員となれり。紅葉山人は廣額巨眼にして無髯の偉丈夫、鼠瀬御納戸無地の羽織に、白足袋を穿ち、小波先生は着流しに兵子帶の扮裝、點者として文臺を前にして端座す。紅葉山人諧謔口を衝いて出で、時流を嘲罵して痛烈骨を刺すものあり、小波先生風貌貴公子の如く、言說流暢にして些の凝滯なし。泉鏡花は浴衣に從屋橋の烟草入を提げ、宛然として職人の如し。再び紫吟社句會樂天居に開かれし時も列席の榮を得、紅葉山人の謦咳に接し、句を短冊に乞ふ、偶々長田秋濤闖入し來つて句會の靜穩を攪亂す、山人一喝して之を退却せしむ。後に富士見町萬源樓に小波先生獨逸行の別宴を張る。會する者紅葉山人を始めとし、小栗風葉、泉鏡花、徳田秋聲等の門下生、小波先生を主賓として、その門下木曜會員數名なり、校書酒間を斡旋し、宴漸く闌なるに當り、予殊に紙を展べ硯を磨し、山人の揮毫を懇望す、山人快諾して直に筆を執り、「廿世紀なり萬國に御慶申す也、大日本紅葉」と揮灑して予に與ふ、文字雄渾にして精妙、滿座羨望して已まず。予秘藏すること多年なりしが、後に懇請否み難くして他に之を讓る、今にして思へば痛恨に堪へず。山人逸興湧き、需に應じて筆を染むること唯々諾々、風葉醉ふて戯畫を畫くや、山人輙ち之に題す「春の水その源や一滴」この珍品何人の手に落ちしや、記憶せざるを恨む。山人酒半ばにして忽ち横臥す。予怪みて其故を問ふ、門下答へて曰く、これ先生が特癖にして、我等呼んで寢釋迦と稱ふ、蓋し山人の作睡は門人の爲めに計つて仁なるに在り、山人儼然として刮目せば、門生自ら恐縮し妓と戯るゝ能はざるを知るが故也と。嚴にして慈なる山人の人格を覺る可し。予が山人と親炙せるはこれを最後と爲す。

齋藤緑雨

其文章を通じて窃に其人物を想見し、必ずや容貌魁偉、言々風霜を挾んで近く可からずと。接見するに及んで、大に想像の誤まれるを知りしは、實に齋藤緑雨其人也。別號を正直正太夫

と稱ふ、風采必ずしも別號と吻合せず、痩軀恰も蟷螂の如く、言語溫柔にして、かの文に見るが如く諷刺骨を抉るの辛辣遂に覘ふ可からず、閑談歡語殆んど別人の感あり。同座の主人予を彼に紹介し、附言して、俳句に志すこと深しと云ふ、彼乃ち話頭を一轉し、俳諧を談じ、次で紅葉山人の句を非難す、予敢て山人の爲めに辯ずるに非ざるも、一矢を酬ひて「あられ酒」に載せたる彼の俳句を指摘し、拙劣山人の下に在りと斷ず、彼苦笑して止む。後に親しくその僑居を訪ひ、親しく文事を語るを約し、終に果さず。

小田原より短簡あり、「先日ハウマイ都合ニ參ラズ御氣ノ毒サマニ存候、イヅレ又上京ノ節御シラセ申上グベク候」とあり。葉書の文字右頭下り片假名を用ふ。猶會談の中に、新聞記者の茶代廢止を絶叫するは、滑稽至極の沙汰にて、絶叫せずとも、旣に自ら廢止を實行し、實行せざるを得ざるに非ずや、百尺竿頭一歩を進めて何ぞ宿賃廢止を絶叫せざると、一流の皮肉を弄して微笑す。後に至つて左の片信あり。

私ガモト居タ社ノコトデスカラ新聞記者ヲタヾ泊メレバイ、ト言ツタヤウナコトヲ風刺的ニオヤリニナラヌヤウニ願ヒマス、ソンナ氣ヅカヒハナイト思ヒマスガ念ノタメオ斷リ申シテオキマス、トカク都ハ物騒デスカラ

（明治卅四年三月）廿一日夜

途中　齋藤

井上君

もと居た社とは朝報社を指す也、以て綠雨の一面小心翼々たるの性情を察す可し。

廣津柳浪

永井荷風小說に志し、草稿二三を携へ廣津柳浪を矢來の僑居に訪ふ。予も伴ふて臻る、當時荷風は東京外國語學校に支那語を學び、予は第一高等學校文科に籍を置けり。先生容易に予等をその書齋に引見す、時に先生繡眼兒を飼ひ、自ら籠を洗ふて忙を極む、幼童命に應じて茶を勸む、幼童は今の小說家和郎君也。荷風慇懃に其志を叙べて門下の列に入らんことを乞ふ。先生その凹める眼を瞬つて曰く、聞く、子は縉紳の嫡子に非ずや、宜しく學業を修めて專心なる可し、小說などを書くは、魔道にて、以ての外也、飜然非を悛めよと、論戒懇切なり、荷風頻に乞ふて止まず、漸くにして之を許す。荷風の文章會話に巧みなるは蓋し柳浪に私淑せる結果なり。後に荷風屢々先生を訪ふて常に在らず、玄關番に一漢子あり、風貌粗朴にして、眞岡木綿の紋

付に、紙撚を紐に代用し、白木綿の兵子帯をぐる／＼と卷けり、荷風の訪ふ毎に出でゝ陳ずるに頗る窘窮の色あり、蓋し先生内室を失ひ、孤枕蕭條に堪へず、頻に脂粉を狹斜に獵する也、而して紫よりも紅を好む。頻々たる債鬼の擊退の任亦繋つて此一漢子の双肩に在り、一漢子を誰とか爲す、中村春雨君其人也。徳田秋聲荷風の徒勞に同情して曰く、噫先生にして此病あり、惜む可き哉と。當時硯友社の同人等吉熊、求友亭に豪遊を極む、而も紅團粉陣の根據地を希にせず、後年偶々待合久川に至り、女將に就いて消息の一端を知り、更に桃林に至つて、小室の楣間に額あり、「白魚に口紅さすや小傾城」の句を題して、桃浪と署名せるを見る。

山田美妙

書肆の店頭に悄然として待つ蒼顏の人あり、古きインバネスを纏ひ、後減せる下駄を穿ち、風采甚だ揚らず。焉んぞ知らん、これ言文一致の開祖にして、文名騷壇を壓したる當年の才人山田美妙氏たらんとは。予事に依つて富士前町の寓居に訪ふ、朽屋蕭然として、病床に坐する美妙氏は、喉頭に病を得て顏色憔悴せり、稻舟女史と艷名を謳はれてより名聲頓に衰へ、自ら韜晦して雜著に糊口の資を得て足らず、家に老母あり、妻あり、三兒あり、内室貞實にして裁縫を以て家計を助く、窮狀最も憐む可し。氏曰く、天若し予に假すに一兩年の歲月を以てせば、予は快心の作を完うして最後を飾らん、此事或は望む可くして、或は望む可からず、噫と。哀言切々として予をして暗涙を催さしむ。氏渴に堪へず而も附近に求め難きが故に、予に書を寄せ、氷菓製造の器械購入を囑し、又佛蘭西産の葡萄酒を以てす。嵯峨樣の文字墨浸んで力なし、予故ありて其囑を果す能はず。旬日にして訃報あり、秋風淅瀝として、草木凋落の夕、その知友十數名と共に柩を染井墓地に埋む。

羅馬への使者

高須芳次郎

（一）

徳川家康の晩年の行狀を記した『駿府記』を見ると、慶長十六年九月二十日の條に家康が『南蠻世界圖』を見て、彼れの財政顧問後藤庄三郎らと歐米の形勢について話したことが出て居る。日本で世界地圖が來たのは、恐らく其の頃の事であつたらう。狩野永徳の筆だと傳へらるゝ世界地圖の屛風一雙（越前福井、淨得寺藏）は極大まかな地理的名稱の下に半ば想像から出たらしい諸國が雅攻多い筆觸で描き出されて居るが、それには當時の海國日本の發展思想を象徴して居る。

其の時分の日本人は勇敢で海を愛したものが多かつた。倭寇や八幡船以來、海國人の雄邁な氣象を外に發揮した趣が事實の上に見えた。海外の新文化を吸入するために、大きな商利を掴むために、生命がけの危險を冒して、万里の怒濤を蹴破る鋭い意氣は日本人が有した特徴の一つであつた。かうした時代に歐洲では、イスパニヤ、ポルトガルなどが旺んに海上に飛躍して、探檢に植民事業に努力して居た。殊にポルトガルは早く東洋經略に手を伸ばして、ゴア、モルツカ、マラツカなどを略取し、支那を脅かして媽港（マカオ）を奪ひ、西力東漸の先頭に起つ勢を示した。それと共にキリスト教が自然に東洋の國々に傳へられる機會を生んだ。

最初に日本へ來て、デウス（天主即ち神）パライゾ（天國）のことなどを力ある言葉で南國の人々に傳へたのは、フランシスコ・サギエルである。サギエルは、ゼスイツト僧團の主唱者イグナチウス・ロヨラの高弟で慈愛と謙遜とを以て、病めるものや貧しき人たちや獄舍のうちに悩むものらに道を說いて、聖者の一人として、羅馬の中に知られて居た。彼れの素志は海外に於ける異教の國にカトリツク教の精神を傳へることにあつた。曾て熱誠なルーテルによつて勃興した新教とは異つて、神秘と冥想の色彩の濃い羅馬舊教の福音を萬人の胸の底に吹き入れようと

するのが、サギエルの強い念願であつた。

それで彼れは平生尊信して居る羅馬法王の命令ならば、どんな瘴癘の地でも、献身の誠を捧げて、快く適往して、熱烈にデウスの福音を傳へたいと固く決心して居た。そして彼れが待ち設けた機會は直ぐに來た。法王は固く信頼して居た彼れを羅馬の地から手離すのを内々好まなかつたけれども、サギエルが切に海外布教を熱望してやまぬので、到頭、サギエルに向つて、印度布教の旨を命じた。

サギエルが印度へ行くために、勇んでリスボンを出たのは西紀一五四二年(天文十一年)の春である。翌年三月、ゴアに着いて、其處で熱心に布教した後、テルナート、モレ、アンボヤナ島などの傳道に力めた。そして一五四七年、マラツカに滯留するうちに、不圖日本の薩摩武士彌次郎――半次郎、安次郎、勘次郎など色々に傳へられて居る――に逢つた。彌次郎は以前、日本に居た頃、兎角素行が修らなかつた。そして一旦前非を悔ゐて、佛門に入り、名を了西と改めたが、矢張、煩悩のうちに何の慰めも光明も得ない重苦しい日を送つて居た。或時彼れは其の胸中の苦みをポルトガル人に話すと「印度へ行きなさい。其處には君を救ふ一人の聖者が居る」と云つた。彌次郎はそれ以來、印度に憧憬れて居た。折柄彼れは不圖血氣に逸つて人を殺したので、役人に追跡されて、ポルトガル船中へ身を隠し、それから直ぐマラツカに赴いたのである。彼れは心から深く舊惡を悔ゐて烈しい煩悶のうちに日を送つて居たが不圖、サギエルに逢つて、カトリツクの教義を聞くと同時に翻然として信仰の心を起し、ゴアの神學校に入つて、洗禮を受けた。彌次郎はそこで八ケ月間ラテン語や教理を研究して、デウスの恩寵に浴する身となつてポール・ヤジローと稱した。其の樣子を見て、サギエルは日本人の性格や能力が、優にカトリツク教の道を體得するであらうと推量した。それに彌次郎らも頻りに日本傳道の事をサギエルに勸めてやまなかつたので、愈よ意を決して、サギエルは彌次郎及び十餘人の宣教師を伴うて、西紀一五四九年(天文十八年)五月、ゴアを出航して、薩州鹿兒島に向つた。サギエルが最初日本の土を踏んだのは、同年八月十五日のことである。

サギエルは鹿兒島に於て、藩主島津貴久に歡迎されて、領内に布教することを許された。それで彼れは『公教原理』と云つて、彌次郎が、キリスト教の大意を和譯したのを路上で朗讀して人々に聞かせたところが、早くもそれに共鳴するものが出來て、百餘名の受洗者を得た。爾後彼れは平戸や山口などの地方に道を傳へて、山口では五千餘人の信者を得た。また彼れは豐後の

大友宗麟に招かれて優遇を受けたが、布教上、印度へ引返へさねばならぬ必要のために、宣教師トルレス及びフエルナンデスらを後に殘して、日本を去つた。

サギエルが先づ日本の地にキリスト教の種を蒔いた後へ、ガスパル・ギレラやルイス・フロイスやフランシスコ・カブラルやオルガンチノ・ソルヂなどが日本へ來て、デヴスの福音を唱へるに及んで、其の信徒は一時に激增した。京都附近だけでも、約二萬人に上つた。それは宣教師の人格が優れて居て、熱心に道を說いた上に醫學、天文學などの知識を有して、自然當時の知識階級を動かす力を具へて居たからである。また織田信長が宗教政策や南蠻の新文化を吸收しようとする上から、キリスト教を保護したことが弘通の上に有力な影響を與へたのである

殊に九州地方では、キリスト教が最も旺んであつた。大友宗麟、松浦隆信、大村純忠、有馬義純らは何れも切支丹大名のうちでの篤信者であつた。隆信は手紙を印度總督の許へ送つて、宣教師の派遣を懇請した。宗麟は其の領內に高札を立てゝ、キリスト教宣傳の自由を公許した上、教會堂建立に要した地所を寄附した。純忠は一族重臣らと共に洗禮を受けて、福田、長崎の二港を開いて外船が來泊するのを好遇した。それらの結果、キリスト教は自然に宣傳の便宜を得た。其の間に佛教徒の反抗などがあつたが、それにも打克つて、九州宣教の中心地となつて居た豐後府內には、ルイス・アルメイダの手によつて、二個の救濟院が建てられた。其の上大村、有馬らの領內では、寺院二十箇所に上り、信者は五萬人に達した。かうした趨勢の下に大友宗麟は、大村純忠、有馬義純と提携して、宣教師アレサンドロ・ヴリニヤニの勸めを容れて、進んで法王に敬意を捧げるために、遠い羅馬へ特に少年使節を送ることになつたのである。

宗麟らが大人を選任しないで、櫻色の頰が美しく輝く可憐の少年たちを使節としたところに新しい着意があつた。そして其の使節の選に入つたのは伊藤、千々岩、原、中浦らの四人である。

（二）

少年使節は何れも優れた素質や容貌を以て居た。伊藤は日向飫肥（をび）侯の一族で、其の教名をマンショと云つた。當時十三四歲で正使の重位を與へられた。千々岩は大村純忠の近親で、教名をミゲルと云つたが、副使原マルチノ、中浦ジユリアノと共に一行中に加つた。其の時分、大友宗麟は、ドン・フランシスコと云ふ教名を持つて居て、其の印章を羅馬字で刻んだほどで、頻りに異國情調や海外文化に憧憬れて居た。それで彼れは少年使節を羅馬へ派遣する前に早くポルトガルとの交易を開いた

り、眞先にキリスト教に歸依したりして、窃かに其の家士植田玄佐を羅馬へ赴かせた。

玄佐は美濃出身の人物で、豐後地方に漂泊するうちに、宗麟に認められて、其の家士となつたのである。玄佐がどんな風格を持つて居たかは明かでないが、豪快な氣象を抱いて萬里の長風に嘯かうとした傑士であつたらしく思はれる。彼れは日本を出發する時、其の幼子を船中に伴つて居た。そして萬難を排して、主命を全うするであらうことを固く自分の胸に盟つて居た。けれども彼れは途中、熱帶圏裡で酷暑に苦み、大洋の怒濤に揉まれて、ひどく健康を害したので、ポルトガルに船が着くと間もなく、重い病の床に就て、到底起つことが出來なかつた。彼れは「殘念々々」と連呼しながら、南蠻の人々に見守られて最期の呼吸を引き取つた。かうして宗麟が最初心をこめて羅馬へ派遣した使節は、未だ羅馬へ入らぬうちに倒れたのである。

それで宗麟は第二回目に羅馬への使節を派するに當つて、心身共に健かな少年たちを選んだのであらう。それらの人々ならば、熱帶圏裡の暑さや怒濤との戰ひに打克ち得るであらうと思つた。それに少年使節らの意氣や熱情も亦熾烈であつた。彼等は途中の不便や航海の苦難を殆んど眼中に置かないで、未だ見ぬ龍宮へでも行くやうな心持で居たらしい。勿論、一行には、アレサンドロ・ヴリニヤニが附き添うて居て、萬事世話することになつて居たが、それでも當時にあつての羅馬行は、大きな冒險にひとしかつた。平安朝の昔に阿部仲麿が美少年時代に心細く渡支したのよりも一層困難な旅であつた。それは空前であると同時にまた絶後とも云ふべき珍しい出來事にちがいなかつた。

其の時分、海外渡航の困難は流石に平安朝時代のやうにひどくなかつたが、それでも相應の危險や不便が始終伴つて居た。支那に赴くさへも、随分難澁しなければならない場合が少くなかつたから、支那よりも遙かに迢遠な羅馬へ赴くことは、先づ生命がけの旅行と見なければならなかつたであらう。それに少年の一團は何れも十三歳から十五歳までのもので、人生の行路の上にも經驗が乏しかつた。冷靜に考へると、たとひヴリニヤニが附いて居たとしても、彼等の羅馬行はいくらか無謀に近かつた。毎日危險と直面して居なければならぬやうな旅であつた。また海外の事情が、今日のやうに判明して居ないので、新たに暗黒の世界を辿るのと同様だと云つて宜かつた。そして彼等の前に羅馬へ使者として赴いた植田玄佐が羅馬へ着かない前にポルトガルで病歿したのは畢竟、航海の途中で身心疲勞のために斃れた悲しい實例を示して居た。

さうした危險、不安、恐怖等があるに關らず、少年の一團は寧ろ歡喜の色を浮べて羅馬への航海を決行したのは、宣教師の懇ろな案内や未だ見ぬ南蠻の世界に對する厚い好奇心も手傳つて居たらうが一つはデウスの全智、全能、全善をおぼろ氣ながら信じて、パライソに對する深い思慕を抱くと同時に西歐に於ける教權を支配して居た羅馬法王グレゴリイ十三世の高風を欽仰して居た爲めでもあつたらう。さうした希望や信仰は、當時の伴天連(神父即ち宣教師)によつて、彼等少年の柔い鋭敏な頭へ強く印象されて居たのであらうと思はれる。かうして少年使節は、ヴリニヤ等と共に天正十年(西紀一五八二)一月二十八日長崎から羅馬へ向ふことになつた。

其の日、長崎の埠頭は少年使節らの羅馬行の有樣を見ようとして、人々が四方から集つた。やがて使節らが、鋭い碧眼や赤い顎髯の目立つヴリニヤに從うて、靜かに歩みを搬んでくると、觀衆は自然にどよめいた。中にも、伊藤マンシヨが、匂ひこぼれるやうな黑髮を茶筌に結んで、紫元結の色爽かに優麗な容貌にふさはしい服裝をして居たのは衆目を惹く中心となつた。マンシヨは金糸で勢よく走る駒をいくつも縫ひ取つた陣羽織を豐かに着て、唐草模樣をちらした袴を穿き、黃金作りの太刀を腰に横へて居た。それは名匠の筆で描かれた美少年が其の儘、畫中から拔け出たやうに見えた。他の三少年も、マンシヨに次ぐ丈の氣品と美しさとを見せて居た。

「どれも見事な少年たちではないか。これから遠い南蠻の國へ出かけるさうだが、天晴見あげた氣象だ。」

群集はかう云つて、感嘆の聲を揚げた。また少年使節を見送る一族の人たちは、目前に晴れやかに裝ふた使節の風姿に心を惹かされると共に盡きない惜別の心を抱いて、一同が無事歸朝するやうに、そつとデウスに祈つて居た。やがて船長が出船の時迫つたことを少年らに告げると、彼等は前途に明るい光りを期待するやうに嬉色を浮べたが、愈よ船が徐ろに岸を離れる頃にはぢつと彼等の姿を見つめて佇立む一族のものを見て、仄かに一味の暗愁を顏に浮べた。

かうして羅馬への使者を載せた船は快く青い海の上をすべるやうにして進み出した。伊藤マンシヨらは、長崎の埠頭が見えなくなる迄立ちつくして居たが、其のうち、雲烟の間に長崎の姿が消えるやうに沒してしまうと、云ひ合せたやうにヴリニヤニの周圍に集つて、カトリツクの教義を聞いた。ヴリニヤニは曾て黑奴を伴れて、織田信長に逢ひ、安土にセミナリヨを建てることを許されたことがあつた。セミナリヨはカトリツク主義の學校として、歐洲の學藝をも合せて傳へ、信長が學校參觀に

來た時は伊藤義信の子、ジエロームが洋琴を彈奏して信長を喜ばせた。ヴリニヤニは、かうして布教の上に少からぬ功績があつた。それほどの人物であるから、彼れの感化は自然、少年使節の上に及んで、篤信の心を深めた。

船は途中、事なく黄海を過ぎて、二月十五日、媽港に着いた。一行は此處で上陸して印度へ行く船を待つ間、教會でラテン語を學習した。少年らは前途の旅を樂し氣に豫想しながら、快くラテン語を覺え込んだ。そして普通學に於ける新知識をも修めた。かうして居るうちに約九ケ月の日子は夢のやうに過ぎて、歳の暮近くになつて、印度へ向ふ船が漸く來た。一行はそれに乘船して、天正十一年(西紀一五八三)二月、コチンに着いた。其處でまた便船を待つため、半歳を過してから、海上の人となつて、ポルトガル領となつて居たゴア(印度)に着いた。其の時、ヴリニヤニは印度布教部長に任命されたので、一行と共に羅馬へゆく豫定を變更して、コチンへ引返すことになつた。日本を出てから、約一年餘も一緒に旅のうちに暮して來た少年らは、どんなにヴリニヤニと別れることを悲んだか知れなかつた。ヴリニヤニにも亦可憐な少年らと別れるのを物淋しく思つて幾度か躊躇した。けれども羅馬法王の命令に背くことが出來ないので、後事をヌネズと云ふ宣教師に托して、ゴアを出發することになつた。

「私は今御身らと別れるのが實につらい。何となく、愛兒と手を分つと同じやうな離愁に沈んで居るのだ。けれども御身たちが羅馬へ着く日も遠くあるまいから元氣に健康に日を送りなさい。デウスの祝福が厚く御身らの上にあらんことを祈ります。」

ヴリニヤニはかうして少年使節らに別れを告げた。伊藤マンショらは殘り惜しさうにぢつとヴリニヤニの顏を見上げた。

「神父樣、私らは一緒にコチンへ參りたう御座います。けれども今は重い使命を荷つて居りますから、殘念ながら、お別れして羅馬へ行きます。左樣なら。」

とマンショは稍力のない聲で挨拶した。かうして彼等は東西に袂を分つた。其の折、マンショの美しい顏に物淋しい色が仄かに漂うた。傍らに居たヌネズも此の光景に深く心を打たれた。

(三)

ゴアでは、ポルトガル領の印度總督が少年使節の來ることを聞いて「海外に未だ一度も旅したとのない少年たちが、健氣にも萬里の波濤を凌いで羅馬へ旅するのは空前の壯擧だ。私は衷心彼等を歡迎して、及ぶ丈の力添へをしたい。」と云つた。そ

して使節のために旺んな歡迎會を開いて、純金の頸環と三千弗の黄金とを一行に贈與した。また印度總督は特に少年使節が安全に愉快に航海し得るよう、際立つた巨船を選んで、船の內外を花のやうに美裝した。

一行は總督の好意を感謝して、巨船に身を托して、ゴアを出發した。それは天正十二年(西紀一五八四)二月二十日のことであつた。彼等は朝晚、波濤に面して、海風に吹かれたので、雪白の顏が眞黑になつた。けれども健かに日を送つて、只管デウスの恩寵を禮讃した。やがて五月五日には、喜望峰を過ぎて、途中、セント・ヘレナ島に立寄り、自由なのびのびした生活を二週間近く送つて、長い旅の疲勞を休めた。此處で新しい元氣を恢復してから尙ほ航海を續けて、八月十日、ポルトガルの首府リスボンに着いた時、一行は南歐のブラツセルや小巴里と云はれて居るリスボンの明麗な風色を見て頓に氣分の爽かさを感じたのである。

リスボンでは、少年使節に對する歡迎が今まで類がなかつたほどに旺んであつた。それはポルトガルが他國に率先して東洋經略を始め、支那媽港を中心として、日本との通商を開始する先驅となつた關係にもよつた。それで少年使節が着く前から頻りに貴族たちが歡迎の準備をして、一行の美裝した船が靜かに港內へ錨を下すと、禮服を着た貴族が海岸に群つて、少年使節に歡呼の聲を浴びせかけた。中にも、ブラカンサ公は馬車で一行を迎へて、自宅へ案內した。一行は何となく、美しい夢心地になつて、眼前に展開されてゆく南蠻の町々を珍し氣に馬車の中から見廻した。そして丸で異つた色彩の世界へ來たことを感じた。

馬車が、ブラカンサ公の壯大な邸に着くと、公爵夫人が其の令息や執事、侍女などと共に少年使節を玄關に出迎へた。其の時、伊藤マンショらは、令息が微笑して居る姿を見て、あつと驚きの叫びを揚げると同時に融けてゆくやうな甘い喜びの色を顏に浮べて、涼しい眼を睜つた。それは令息が日本服を小器用に纏うてすつかり日本少年になり切つて居たからであつた。意外なところで、同胞とひとしい服裝をして居る高貴なポルトガルの一少年を見たことは、彼等に一番愉快であつたにちがいなかつた。

其の後、一行はゼスイツトの寺院に泊つて疲れを休め、市內の名所を見物した。其のすべてか彼等には一つの大きな Wonder であつた。そして濃藍に輝く海の色、波の上からくる涼しい風は彼等を快活にした。やがて彼等が、リスボンを後にしてブラカンサ公らに別れを告げ、イスパニヤの首府マドリツドに

向ふべき日が來た。それは秋風が靜かに葡萄の葉を吹く頃であつた。

一行が新鋭の元氣に滿ちて、マドリッドに着くと、そこでは、ポルトガルの首府よりも一層旺んな歡待が使節に加へられた。國王フイリップ二世は彼れの優雅な好みによつて作つた離宮へ使節を國賓同樣に迎へた。それはマドリッドの西北二十七哩の地にあつて、エスコリヤルと云ふところであつた。其處で伊藤マンショらは數日間、盛大な饗應を受けて、王公のやうな生活をした。それからマドリッドのゼスイット僧院へ歸つてくると國王が親しく彼等を訪ふた。當時のイスパニヤは廣大な領土を所有して、富强の點では全歐の最高位に近い地位を占めて居たので、それら少年使節に對する優待は大きな光榮にちがいなかつた。其の上、アルカラ大學では、帝王の禮で使節を招待して、當時の學藝については、すべてを彼等のために公開した。伊藤マンショらは、かうして丸で凱旋將軍のやうに扱はれるので、殆ど鄕愁を忘れることが出來た。そして次ぎから次ぎへ開けゆく新しい世界へ其の魂を惹き付けられた。

彼等が十分、マドリッドを見物すると、十一月二十六日、そこを去つて、日本を出てから一日も忘れなかつた最初の目的地、イタリーの羅馬へ向つて出發した。其の日、船が一行を載せて、アリカンテの港を出る時、空模樣が穩靜であつた。寒い風が相當に吹いて居た。船長は左程それを氣に留めないで、船を出したが、途中、風が烈しく荒れ出して、雨さへ強く降つて來た。船は怒濤に弄ばれて今にも沈沒しさうに思はれた。それで一旦元へ船を引返した。そして風が收つてから、また出航すると、以前と同樣、雲行が惡くなつて海が狂ひ始めたので、船長は舌打ちしながら再び元へ歸つた。かうして天候はいつ迄も不順で少年使節の羅馬行を妨害するやうに思はれた。其の後機を見て、素早く航行を始めると、三度目の大風が烈しく船を惱ましたので、止むなく、マジョルカ島の蔭に避難した。かうして幾度か海の旅を遮られて、伊藤マンショらは多少元氣を沮喪したが、やがて天正十三年(西紀一五八五)三月、漸くリボルノ港へ着くことが出來た。

「愛するイタリーへ到頭來たのだ。」

と一行は喜びの頂點に達したやうに騷いだ。それは彼等が日本を出てから恰度四年目で、伊藤マンショの鼻下には、いつの間にか濃い髯が貯へられて、丸で大人のやうに見えた。それほど、彼等の樣子や風貌などが四年前と異つてしまつて居た。だが彼等は左樣したことを考へる遑がなかつた。唯無性に嬉しくなつた。

「諸君、これほどの愉快は又とあるまい。私らが長い間、パライソ・テレアル（地上の樂園）のやうに深く憧憬れて居た羅馬が、不日見られるのだ。マルコ・ポロが昔、Zipanguとして南蠻へ日本を紹介してくれた因縁の深いイタリーは私らに極めてなつかしい。そして美麗なヴアチカン宮殿でかねて尊信して居る法王に逢へるのだ。美しい空と美しい町とが自由に見られるのだ。見給へ、靜かな藍碧の海は柔かに微笑して私らの安着を祝福して居るやうではないか。南蠻の春の風は少女の讃歌のやうに生の幸福を私らの耳に快く囁いて居るではないか。」

と伊藤マンショは歡喜に興奮して、中浦ジユリアノらに聲をかけた。ジユリアノは朗かな聲で。

「君の云ふ通り實に愉快だ。一同祝盃をあげようではないか。」

と云つた。誰れもがそれに共鳴した。

（四）

イタリーでは、日本の少年使節が四年の日子を費して愈よ羅馬へ來ると云ふ記事が新聞紙を賑はして居た。Zipanguの少年はどんな風采で、如何なる服装をして居るだらう。「黄金の國」や「寶石の國」として、マルコ・ポロによつて「東洋見聞錄」中に紹介された興味深い國からの使者は、社交界でどんなに振舞ふだらう。左樣した噂が、イタリーの諸都で繰返へされて居た。そして諸處で歡迎の用意が略ぼ整ひつゝあつた。

左樣した希望に滿ちた光景の中に一行は先づリボルノ港へ上陸して、領主トスカナ大公に迎へられた。大公は國賓として、一行を優遇して、滯在費用を悉く負擔した。一行は南歐麗明の地で艶麗な春に逢つて、羅馬への道を辿つた。途中、舊都ピサを過ぎて、有名な斜塔を眺め、フロレンスを通過して、古美術の粹を味ひ、三月二十二日の夜半、始めて目的地として居た羅馬の土を踏んだ。

「羅馬だ、羅馬だ。私らが夢寐にも忘れ得なかつた聖地だ。榮光に輝く春に此處へ着いたのは無限の歡喜だ。」

とマンショらは感激したやうに云つた。彼等の眼の前には巨大な門や立派な樓屋が建ち列んで、美女の眸のやうに優しく瞬いて居る春の夜の燈火は、マンショらの双眼には、黄金の花が開いたやうにも見えた。

彼等は直ぐに法王の許へ導かれて、グレゴリー十三世から内謁見を許された。十三世は當時の賢君で世界に廣く行はれた太陽暦制を定めた人である。彼れはマンショらに對して深い同情

を傳達した。そして二十三日、改めて公式の謁見を許すべき旨を傳へた。やがて其の日の朝になると、新聞紙は一行が羅馬に入つて、愈よ法王に謁するであらうことを記した。其の事は羅馬全體の人々の興味を誘發して、寄ると觸ると、其の話で持ち切ると云ふ具合であつた。「彼等はどんな風をして入城するだらう。」と何れも好奇の眼を睜つて待ち構へて居た。中には、朝早くからデル・ポポロ門の邊へ集つて、使節の一行を見逃すまいとして居た男女もあつた。

一行は羅馬に入つたのであるが、正式の順序を踏んで、一旦市外に出て、改めて都城に入ることにした。そしてマンショらは爽快な樂音を奏する軍樂隊を先頭に立てゝ、肥馬に跨つた騎兵や銀と輝く長槍をいかめしく携へた槍兵や目眩いばかりに盛裝したスウイス兵らに前後を衞られて、前進した。カルヂナルの家人を始め、各國の大使、公使館員、羅馬の貴紳らも一行中に加はつて、正しい列を作つて居た。左樣した中で、マンショは晴れやかな顏をして、逞しいアラビヤ馬に悠然と跨り、二人の大司教に守られて道を行き、副使は各二人の司教に伴はれて其の後に續いた。最終の列にはゼスイツト僧團の宣教師、隨員などが華美な法服を纏うて靜かに歩を搬んだ。

「何と立派な行列ではないか。チパングの大使も、中々思つたよりは宜い。丸で人形のやうな可愛らしい使節だ。あの大司教の間に挾まれて、アラビヤ馬にゆつたり乘つて居るのが正使らしいね。容貌が一番優れて居る。」

などと見物は噂した。中には帽子や手巾を振つて、歡迎の意を示したものもあつた。どの町にも、一行を見やうとする人々が黑山のやうに群つて、身動きが出來ないほどであつた。行列はそれらの間を縫ふやうにして、やがて法王廳に着いた。

其の日、マンショの服裝は殊に華麗であつた。彼れは金糸で花鳥の刺繡を施してある衣を着け、頭に白い鳥の羽を飾つた帽子を被り、羽織、袴に威儀を正して、絹足袋に雪駄を穿き、黄金作りの太刀を佩用して居た。副使らも最上の服裝をして日本純粹の風俗の美しさを羅馬で發揮して居た。それは金碧燦爛として居たヴアチガン宮殿の内部との調和を保つかのやうに見えた。

やがて法王は靜かにマンショらの前に現はれて、歐洲諸國の使節を迎接するのと同じ儀式の下に一行に謁見を許した。法王の左右には全朝の人々が威儀を整へて居流れ、自ら粛然として襟を正さしめる趣が見えた。マンショらは微笑を湛えて居るグレゴリー十三世の自然に備はる威光に打たれて、覺えず地に跪いて、恭しく拜禮した儘、暫く頭を上げ得なかつた。

法王はひどく感動したやうに眼に淸い淚を浮べて、侍臣にマンショらを扶け起させた。法王は歐洲に羅馬舊敎が弘通されて居ることについては別に新しい感動を起さないが、極東日出の國に舊敎が傳へられ、カトリックの精神が强く民衆や大名、武士らを動かし得たと云ふ報告に接して、深い感興に打たれて居た。そこへ美しい人形のやうな日本の少年使節が四年の日子を費し、萬里の波濤を凌ぎ、寒暑の苦みと戰つて、かうしてはるばる羅馬へ來たのを見ると、更に感動を新しくしたのである。

最初、ゼスイツト僧團の宣敎師が、マンショらに代つて日本に於ける宣敎の沿革、發達のことなどを述べ、それから朗かな聲で大友、有馬、大村らの奉書を讀み終ると、法王は溢るゝばかりの喜色を湛えて、侍臣に挨拶の言葉を傳へさせた。

「東方日出の國から來た若い使者たちに對して私は滿腔の歡喜を以て接する機會を得たことを深くデウスに感謝する。御身たちの堅信、篤實、熱誠は私が心から敬意を表するところである。」

との旨がマンショらに向つて述べられた。マンショらは、ひどく感激した。かうして莊嚴な謁見式が濟むと、大僧正シキスタスは一行を食堂へ案內してあらゆる善美をつくした饗應をした。爾後、法王廳はマンショらを優待して始終滿足を與へるやうに意を用ゐた。

（五）

一行は何よりも先づサン・ピーター寺に參詣した。そこは西紀三二六年、コンスタンチン帝が殉敎者のために建てた大伽藍で羅馬舊敎の大本山であつた。マンショらは世界最大の禮拜堂で靜かな祈りを捧げて深い法悅に打たれた。彼等はまた羅馬の一名物と云はるゝコロシウム(大戲場)を見て好奇の眼を輝かしつゝ、大理石造から成る內部の美を嘆賞した。またそこで猛獸と劍士とが烈しく格鬪する壯快な光景を想像して一種の感興を惹き起した。

法王は一行に對して特に彼れが外出する時に騎馬で隨從することを許し金繍を施した天鵝絨の服を一行に贈つた。そして法王はある時侍臣に向つて「極東の島帝國から私に敬意を表するために使節が來たのは、キリスト敎の勝利を明白に示すものだ。私はこれほど愉快を感じたことがない。今直ぐ死んでも何等思ひ殘すこともないのである。」と述懷した。ところが此の言葉が讖を爲したやうに、法王は間もなく、四月十日に崩じた。マンショらは其の悲報に接すると、意外の感に打たれると同時にまた深い哀愁を感じた。彼等は黯然として悲みの中に法王の葬儀

に列した。そして新法王が選擧される日を待つて居た。

其の時分一行の中に不圖、マラリヤ熱に罹つたものがあつた。それは中浦ジユリアノである。ジエリアノはマンショらと共に氣候の激變や丸で生活樣式が變化した爲めに健康を害ねて居たのであるが、先づジユリアノが病床に就いたのである。幸ひ法王の侍醫が心をこめて治療に手をつくしたので、十日間ばかりで全治した。彼等は日本から携へて來た米をいつも備へて居たが、羅馬では大抵パンを用ゐて居た。けれども中原のためには一時米で粥を作つて病床の彼れを慰めた。

當時の新聞は「日本少年使節の生活」と云つたやうな記事中に「彼等はポルトガル語を自由に使用する。イスパニヤ語、イタリー語も割合によく話すことが出來る。彼等は決して葡萄酒を常用しない。大抵湯ばかり飲んで居る。食事には少量の肉を採取するが、主として鳥肉が好きで牛豚の肉は餘り好まない樣子だ。そして彼等は丸で輕業師のやうに細い二本の棒を巧みに指に挿んで食物を口に入れる。」と記述した。少年使節が木箸を用ゐたことは羅馬の人々に不思議に感ぜられたのである。

かうした生活をして居るうちに、新法王シキスタス五世が選擧された。其の即位式の日になると、マンショらは前法王の形見として殘つた天鵞絨の服を纏うて參列した。シキスタス五世は四人を金拍車の騎士に叙した。其の叙任式の時には、各國の僧正、大使が席上に陪侍した。そしてフランス、ヹニスの大使が、マンショらに拍車を着けてくれた。それと共に彼等は法王から節刀を授けられて、一生カトリックのために力をつくすべき宣誓をした。

羅馬では、少年使節の評判が極めて宜かつた。一行は法王から政治會議（コンシストリー）を傍聽することを許された。それは一國の君主でなければ得られない特權であつた。次ぎに五月十日に至つて、市會は元老會を開いて、少年使節に公民權を附與する決議をすると同時に、パリツシヤン（貴族）の資格をも與へることにした。其の儀式はカピトル堂内で行はれた。當時の決議錄や證書は今日も尙ほ羅馬市役所の中に保存されてある。

かうして羅馬で光榮の三ケ月を送つた一行は六月三日、愈よ法王に告別して、なつかしい記憶の多い地を去ることになつた。其の日、多數の市民や軍隊が彼等を守つて城外まで送つて來た。一行はそれから、イモラ、ボロニヤを經て、フエルララに入り、そこで歡迎されて、ヹニスに向つた。

ヹニスへは早くから羅馬駐剳の公使が少年使節の事を報知して居た。それに法王からヹニス市長に使節歡迎の意を慫慂されて居たので、使節がヹニスに入る前から色々の準備に着手した。

やがて一行が六月二十六日、ゴンドラが清流に浮んで居る水の都に着くと、多數の出迎人が彼等を待つて居た。

一行は二十八日、市長と會見して以來、毎日盛宴の席に招かれた。ヹニス市は記念のために知名の畫家ジヤコモ・チントレツトに命じて、一行の肖像を描かせた。マンショの肖像は文祿三年(西紀一五九四)畫家が世を去る前に完成して、其の家に藏して居たと傳へられて居る。

(六)

七月六日、一行は涼しい水の都を後にして、ビチエンツアを經て、マントバに入つた。そこでマントバ公の世子とマンショらは心からの親交を續けて、共に湖上に船を浮べて遊んだ。世子はマンショから日本の風色の優れたことや各種の風俗、生活などを聞いて頻りに心を動かした。そしてマンショが所持して居た『日本歴史』を懇望して讓り受けた。其の返禮に世子は彼れの肖像と手紙とをマンショに贈つた。また世子は、日本の國情を視察するため、使節を送らうとしたが、それは事情があつて中止した。畢竟、イスパニヤ政府の壓迫によるのである。

一行はやがてマントバの世子に告別して、ミラノに向ひ、ゼノア、バルセロナなどを歴遊して、終に元來たリスボンに着いた。其處から乘船して、途中度々風波の危險を冒してから漸く天正五年(西紀一五八七)五月、ゴアに入つて、久振に東洋情調を味つた。此處まで來ると、一行の歸心は頻りに動いて前程を急いだが、中々便船がなかつた。一行は止むを得ず、ゴアで一年の日子を空しく送つた。

彼等は日夜、便船を待ちこがれて居たが、愈よ天正十六年(西紀一五八八)四月、母國に向つて出航することになつた。其の際、久しく別れて居たヷリニヤニが印度總督からの使節となつて日本へ赴くのと一緒になつた。彼等の間には温かい會話が交換された。船中は賑かで、少しも倦怠を感じさせないほどであつた。船は媽港に立寄つて、更に長崎へ向つたが、故國の山影が彼等の眼に入ると躍り上らんばかりに喜んだ。かうして彼等は日本を後にしてから八年目に歸朝したのである。長崎を出る時の美少年は何れも立派な逞しい青年となつてしまつて居た。殊に彼等は日本の狀態が出發當時とは丸で異つて居たのに非常に驚いた。信長の死、光秀の死、それから豐臣秀吉の飛躍を始め、南蠻寺の廢止、キリスト教に對する禁令發布など、マンショらに取つては、何れも意外のことのみであつた。

時勢の激變は、マンショらが、羅馬法王やイスパニヤ國王から、キリスト教宣傳についての特權や補助金を得べき約束を得

たことを水泡に歸せしめた。けれども彼等は何れもカトリックのために懸命につくした。そして長崎に於て、信徒を教導した。唯彼等の晩年はどうして居たか、史上には不明となつて居る。けれども中浦ジュリアノが禁令を破つて殉難したこと丈は明かである。羅馬に入つた最初の日本人のロマンスはこれで幕を閉ぢた。

(七)

羅馬へ赴いた少年使節が歸朝してから、二十餘年の後彼等の壯圖に次いで、支倉六右エ門がまたイスパニヤ及び羅馬への使者となつて海外へ赴いた。それは伊達政宗の發意によつたので、慶長十八年九月十五日、狄濱に近い月の浦から歐式新造船によつて、太平洋横斷の途に就いたのである。

伊達政宗は當時の諸侯中、圖南の雄志を抱いて居た傑物であつた。彼れは新イスパニヤのメキシコ總督が日本の金銀島を發見するために派遣した使節セバスチアン・ビスカイノと江戸で逢つたことがあつた。それはビスカイノが、フランシスカン派の宣教師ルイス・ソテロの淺草に建てたサン・フランシスコ寺に參詣しての歸途、不圖政宗の行列に出逢つた折、政宗が長銃の一齊射撃を見たいと懇請したので、ビスカイノはそれに應じて、二回の發射を行つた。ところが、政宗の從者が乘つて居た馬は異樣の物音に驚いて奔逸した。馬上の人は見事に地上に振り落された。それを見て、政宗は手を拍つて喜んだ。かうしたとから、政宗はビスカイノを知つた。

ビスカイノは當時德川家康や秀忠らに謁して日本とメキシコとの通商準備のために東海岸を測量すべき許可を得た。勿論、實際の目的は日本海に金銀島があると云ふ傳聞を信じて、それを探險するためであつた。それにはソテロらをも伴つて、陸路、宇都宮から白河、若松、米澤などを經て仙臺に入つた。ビスカイノの『金銀島探檢報告』によると、政宗と會見したとが詳細に記されて居る。それには政宗が家康秀忠らに次ぐべき有力者であることを述べ、次ぎに「大使(ビスカイノ)が室に入ると、王(政宗)は起立して頭と手とを以て日本風の禮を施した。大使はイスパニヤ風の答禮をした。王は大使に向つて着座を勸め、帽子を被る自由を許した後、秘書官に旨を傳へて、貴下は我國へ來られた最初のイスパニヤの使者であるのを喜ばしく思ふ。且つ私はイスパニヤ王及び新イスパニヤの總督と親しく交るとを衷心から望んで居ると云つた。大使はそれに答へて、イスパニヤ王の名によつて親交を約した。それからフランシスコ派の宣教師に對する王の好意を感謝して、伴天連ルイス・ソテロを招

いて、王がキリスト教を聞けることを賞讃した。そしてイスパニヤ王は多くの領土を持つて居るから、日本との通商上に於ける利益などは左程心にかけて居ないが、全國悉くキリスト教に歸依するに至るよう、切に希望するので、宣教師を日本に派し、キリスト教を弘通することが日本とイスパニヤとの國交を深くする所以でそれが一番功果がある由を述べた。」と記して居る。

其の後、政宗は彼等にイスパニヤ風の料理を饗したり、芝居を見せたり、松島を巡覽せしめたりして、頻りに優待した。かうして、ビスカイノ、ソテロらは政宗に接近し、政宗はまた彼等の人物を知つたのである。そしてビスカイノらは仙臺を出發して、そこから航海を續けて、北へと進んだ。其の際、外船を碇泊すべき良港を續々見出して、それを政宗の許に報知した。

ビスカイノは歸途、再び仙臺に立寄つたが、政宗は其の頃駿州に向つて出發した後であつたから、其の重臣と逢つた。重臣は其の時、政宗が歐式新船を建造して、イスパニヤ國王及び新イスパニヤ總督に贈物を進呈し、且つデウスの福音を説くべき宣教師の派遣を求めんとする意向あることを明かに告げた。けれどもビスカイノは「何分重大な事だから、直ぐに御答へいたしかねる。何れ江戸で王に逢つてから決答しませう。」と答へた。

ところが其の後、ビスカイノは江戸へ出て家康、秀忠に逢ひ、新イスパニヤ總督への答書や贈物を受取つて、一日、浦賀を出發した。それは慶長十七年(西紀一六一二)八月のことである。彼れは日本を離れると、豫定の通り、金銀島の探檢を始めた。けれども左様した片影すら見出せなかつた。それに度々暴風雨に苦められて、船がひどく破損したので、十月頃、日本へ再來して、政府の助力を求めた。其の時分、家康は和蘭人の密告によつて、ビスカイノが、メキシコとの通商に盡力しようとはせずに、只管金銀島探檢に熱中して居たのを知つたのみならず、和蘭人が、ビスカイノの海岸測量を日本侵略のためだと讒言したのを信用して、もうビスカイノを相手にしなかつた。

それでビスカイノは、イスパニヤ、ポルトガルの商人から一時金を借りて、船を買ひ入れようとしたが、相談が纏らなかつた。それには流石の彼れも途方に暮れた。ところが不圖、政宗が重臣によつて傳へた新船建造のことを思ひ出したので、それに對して力を添へても宜いと云ふ旨を仙臺へ申し送つた。それは直ぐに反響があつた。政宗は喜んで、ビスカイノの申入れを迎へて、直ぐに幕府へ海外渡航及び新船建造の許可を求めた。幕府では早速、それを許したのである。

(八)

政宗の新船建造については、幕府から役人や船大工を仙臺に派したが、それは形式だけに留つて居た。實際、其の事に當つたのは、ビスカイノ、ソテロらであつた。船は月の浦で建造に着手して、爾後頻りに其の工程を進めて、漸く出來上つたのを見ると、政宗は限りない愉悦を感じた。船は歐式で長さ十八間、廣さ五間三尺、高さ十四間一尺で、二本の檣があつた。主檣の長さは十六間三尺に達した。政宗は此の新船に支倉六右エ門、ソテロら以下百八十人の遣外員を乗せ、慶長十八年、航行の途に上らせたのである。此の事に就て『伊達治家記錄』及びシピオネ・アマチの「日本奥州國王伊達政宗歷史及使節紀行」を見ると、政宗の使臣派遣は、幕府の快い諒解の下に行はれたことがわかる。

支倉は事なく、イスパニヤに入つて、國王に謁し、そこで受洗して、敎名をフイリツプ・フランシスと呼んでから、羅馬へ入つた。羅馬では、第一回目の日本少年使節を歡迎した程度に略ぼひとしい優待を支倉に示した。其の謁見の光景も亦同樣であつた。極東日本からの使者は羅馬市民の噂に上つて、新聞紙を賑はした。支倉は一個の人氣者となつた。

當時、法王の優待振を支倉に示した中に、特に興味あることは、法王が自分の油繪肖像を政宗に贈ると同時に其の描き方が如何に迫眞であるかを證據立てるため、高名の畫家に命じて、直ぐに支倉の肖像を描かせて贈つたことである。支倉は喜んでそれを受け、使命を全うして、欣然として、羅馬を後にした。彼れが歸途、再びイスパニヤに立寄り、元出た月の浦に歸着したのは、元和六年八月のことである。それは彼れが日本を出發してから八年目で、前の少年使節が歸朝したのと略ぼ同じ期間を費した。支倉の末路は不遇に終つたらしいが、彼れが羅馬やイスパニヤに於て示した日本武士らしい行動は彼れを永遠に輝く人とした。それらの事を思ふと、日本と羅馬との史的因緣は淺からぬ心持ちがするのである。

（附記）支倉やソテロの事を詳しく書くと可なりに興味が深いのであるが、與へられた紙敷の都合で單に輪廓だけを描くに留めて置いた。他日改めて記述する折があらう。讀者諸氏の諒恕を請ふ次第である。

徹夜するもののみが知る 眞夜中と黎明の感じ

大都市の夏の朝

徳田秋聲

以前風葉君なぞと自炊生活をしてゐた時分には、よく夜の明けるのも知らないで、話に耽つたり何かしたものです。紅葉先生が九時か十時頃にトン／＼と書齋の二階をおりて來て、崖下の我々の陋屋へやつて來て、飲食ひなどしながら氣焔をあげたことも度々で、殊に運座がはじまれば、大抵夜があけてしまふのです。それから朝湯に入つて寢るのです。私はその後もよく下宿で三島君なぞと話しこんで、夜のあけるのを待つたことがありますが、何の意味もなしに夜明けまで話しとほすのが、私にはたまらなく好かつたのです。そして朝になると外を出歩くのです。その頃は冬の夜など殊によかつたと思ひます。深々と更けてくるにつれて、談辯が神來的に灼熱して來たやうです。その頃は文壇も今のやうに盛んではなかつたので、殊に私などは書くために徹夜をすることなどは先づありませんでした。今では冬はちよつと恐れますが、罷り間違へば家人が寢しづまつた一時頃から原稿紙に向ふことも、さう稀ではありません。やつと少し書きこんで來たと思ふと、電車の音が聞えたりして、吃驚することがあります。それが書きにかゝるまでの、ぼんやりした時間が多いからです。雜誌など手に取りはじめると、氣がついて投りだすかと思ふと、いつの間にか又取あげて讀んでゐたりして、二時三時になることもあります。それから漸く書きはじめるので。しかしさう云ふ無理のできるのは、頭腦の興奮してゐる時に限るので、夜があけて床に入つても容易に眠ることができなくて、その癖非常に困憊してゐるので、書きつゞけることは困難です。仕事をしないでも、十二時頃をすぎると、夜明までどうしても眠られなくて、様々の幻覺に苦しむのは辛いものです。そして其の翌日と翌晩は疲勞の恢復に費されなけれ

ばなりません。何といつても夏の徹夜は樂でもあり、情趣も多いのです。夜が更けてくるにつれて、世間は全く靜寂に歸してしまひますが、しかしこの大都市が全く眠つてしまふと云ふやうなことは先づないやうです。どこかで何かの音がしてゐます。飯田町驛の汽笛や汽車の音、砲兵工廠の夜業の響き、それから何處かで戸をたゝいてゐたり、醉漢の喧嘩が後ろの通りでいつまでも續いてゐたり、葉末におく露の音が、澄み切つた耳に何かをさゝやいたり、……そしてそんな時に、一枚開けてある板戸の間から庭へおり立つてみると、どこかでもう鷄の聲が聞えて、狹い庭に立つてゐても、大東京の町なかと云ふ感じはすつかりなくなつて、廣い武藏野のなかに立つてゐるんだと云ふ氣がします。それから又仕事に取りかゝる。勿論徹夜は作の完成する最後のときに限られるので、疲れた頭腦と腕を驅使して、書きとばさうとする。と空が少しづゝ白みはじめて、機嫌のいゝ雀の啼聲が潮のわくやうに聞えてくる。しばし死滅の界にあつた周圍の世間が、どこからとなく目をさましかけて來る。と思ふと、まだ手元が眞暗なのに、電燈が意地わるくぱつと行つてしまふ。この電燈の消えるほど興ざめるものはありません。殊にも障ります。それは朝に限つたことでもないので、冬の日など時雨らんだやうな空がもうすつかり薄暗くなつてゐるのに、のろまな電燈が容易にやつてこない。時とすると一日暗い日があつたりします。仕方なく外へ出て朝の空氣を吸ひながら、花壇などゞ見てあるく。すると蝶がもう草花のあひだにひら〱してゐて、蜂が飛んだり蟻がぞろ〱と出歩きはじめたりしてゐる。電車の音も聞えて、大都市の雜音が物凄い不思議な、しかし愉快なオーケストラを演じはじめようとしてゐる。そして太陽が隣の下宿の三階から、その光を放射しはじめる頃には、私の子供が一人一人眠い目をこすりながら、寢床から出てくる。總てのものが一夜の安眠からさめて、各の營みを初めるために、動いたり私語いたりしてゐる夏の朝ほど愉快なものはありません。

眞夜中カーヴを軋る電車の音

小川未明

夜、十二時過になつて、遠く、電車がカーヴを曲る軋り音を聞くと、私は、昔、新聞社につとめてゐた時分のことを思ひ出す。

どんなに、あの音が、なつかしかつたか。

「まだ、電車がありますね」

私は、かう言つて、毎夜、社に泊る外交記者のNに向つて言つた。Nは、社を自分の宿としてゐて、別に歸る處がなかつたのだ。

「さゝき、青が行きましたから、もうぢきに電車がなくなりますよ。あとは、私が、引受けますから、あなたは、お歸りなさいまし」と、頭髮の長い、顔色の青い、痩せたNは、言つてくれた。

私は、須田町まで、電車があつてくれゝば助かると思つた。それからも大分歩るかなければならなかつたが、京橋から、牛込の端まで歩るいたのでは、いつも夜の二時半頃になるからであつた。どんなに遲くなつても、俥代は、社から出なかつた。

華やかな様子をした若い女が、輕やかに、踊りながら柳の木の下を歩るいてゐたのも、宵のことであつて、いまは、すでに過去であつた。甘まい、やるせないやうな、そして、なんとなく艶めかしい闇が、窓の外に垂れ込めてゐる。露店の燈火も、いつしか消えてしまつて、無韻のひゞきを傳へてゐた、人々の歩るいた下駄の音も全く靜まつてしまつた。

悔恨の情が、波のやうに打寄せて、胸を壓迫するのを覺えた。この春の夜を、この青春を、かうして過してしまふのに、何となく堪えられないやうな氣持が、熱く私を襲つた。

「さういへば、今年は、まだ花も見ない」

私の眼の前には琥珀色の仄明るい世界があつた。其處には、香ぐはしい一切の花が咲いて、若い美しい一切の女性の笑聲があふれてゐた。

「ほんたうに、毎晩、こんな建物の内で、千金の時刻を過して、自由に、二度とは來ない生の享樂を知らずにしまふのだ」

かう考へた時、私は、ほんたうに腹立しかつた。そして、暴れ狂ひたかつた。しかし、次の瞬間には、それは深い憂愁に變じて行つたのであつた。

「Oさん、いま赤が行きましたよ」

Nは、言つて、黒い前髮のかゝつた青い顔をこちらに向けて、ハヽヽと笑つた。

「何、また歩くのさ。N君は、花を見ましたか？」と、言つて、私は、聞いた。

あまい、やるせない、そして、何となく艶めかしい、春の夜であつた。流石に、都會の中央のこのあたりもしんとしてしまつた。

「昨日、上野の公園を通りましたが、滿開でした」

からNが答へた時、ちやうど其時、遠くで汽車の汽笛の音がきこえた。月のない星數の少ない、生暖かな夜であつた。

「暖かになりましたね」

Nは、思ひ出したやうに、言つた。

私は、それを聞きながら、心の中で、ぢき夏になるだらう。そして、烈々とした日光が敷石の上を燒くやうに照らすだらう。その時分になつても、自分は、この社につとめてゐるだらうかといふやうなことを考へて、默つてゐた、

「Oさん、もう、歩るいて歸つても、今迄のやうに、寒くはないから、餘程、樂でせう」と、Nは、言つた。

「大分、暖かになつたでせう。それでこの頃は、宿の人が朝早く起きて、雨戸を繰るので眼が醒めて、眠不足で困るのです。僕は、なんだか、神經衰弱にかゝつたやうですよ」と、私は、答へた。

Nは、ハヽヽと、青い顏に、暗い空洞を堀つたやうに、口を開けて笑つた。電燈が、うす暗くなつたので、急に、あたりが滅入つて、何處にあつても一樣に感じられるであらう、深夜の寂寞が肌に迫るのが分つた。

「もう締切つても、いゝでせうね」と私は、Nに話しかけた。

「さうですね。もう、事件もありませんでせう」と、Nは、其處にあつた、雜誌を開きながら言つた。

ちやうど、この時、編輯室の電話が、けたゝましく鳴つた。

私は、どうも電話が、よく聞き取れないので、日頃から、そのことが苦痛の一つであつた、

「N君、すみませんが……また、一ツ聞いて下さい」と、私は、賴んだ。心に、自身が新聞記者としては、何一つ其の資格がないことを思ひながら。Nは、ずぐに立つて行つた。

「エ？殺したんですね、女は、二十三、男は、三十、去年の秋頃から、この程、女が冷淡な素振りを見せ……男も、生命危篤……傷は、……二丁目十八番地……」

私は、また、思はぬ事件が起つたなと、一心に、其の方へ耳を傾けてゐた。

「Oさん、殺人事件ですよ。姦通した女を、情夫が、今夜忍れ込んで殺したのです。簡短に書いて入れて置きませう」

Nは、かう言つて、すぐに、原稿紙に向つて、筆を走らした。

都會は、黒い屍となつて、横はつてゐた。私は街の中を歩るいてゐた。一瞬間前のことを思ひ出せば、すでに、其れは歸らない過去であつたけれど、いまはちやうど眞の夜中であつた。そして、夜が明けるにはまだ間があつた。

私は、毎夜の睡眠不足と神經過敏で足つきがふら〳〵してゐ

たっ二して、誰れ一人通らない、街の眞中を歩るいてゐた。私は、自分の足音が、兩側の建物に響くのを感じた。それ程、私は、建物から受ける一種の壓迫を感じた。ところ〴〵黑い、落込んだ溝のやうな路次があつた。その路次を見た時、私の若い、胸の血は譯もなく躍つた。心臟はどき〴〵とした。

「いま、女が殺されて倒れてゐる」

私の眼には、奇怪な光景が映つた。私は、息詰るやうに恐怖を覺えた。夜が、地の上を掩ひ、雨戸が堅く閉されてゐるので、それを見ることができない。そして秘密に、罪惡や、姦淫や殺傷が行はれてゐる。

あしたの朝になれば、他にも、どんな怖ろしい事實が發露しないものでもない。それが、いまかうして、何の音一つきこえて來ない、この眠靜つた街のどこかで行はれてゐるのだ。

私は、自分の足音が、あまり耳に、はつきりとつくのに驚かされた。そして、足音に、追蹤されるやうな恐怖心から、私は、ます〳〵足速やに歩いた。

甘まい、やるせないやうな空の色は、だん〳〵曉近くなるにつれて、冷たみと凄みとを帶びて來た。

私は、ある橋の袂に立つて、水に映る仁丹の廣告燈の血を流すやうに、赤い文字が流れに映るのを覗いた時、誰か背後から殘酷な刄で、いまにも自分を突刺すやうな氣がした。少なくとも、さういふやうな事があるに、ふさはしい夜のやうな氣がした。

なぜ、淫賣婦は出てゐないのだ。なんでも俺は、彼女の言ふことをきくのに！

なぜ、泥棒は姿を見せないのだ！俺は、決して怖れはしない。この命も惜しいとは、今は考へてゐない。手を握つて語り明かさうに！

私は、全く、人間が戀しくなつた。誰か顏を見たいと思つても、見ることができない。どこを見ても、黑い街の死骸が、長々として横はつてゐるばかりだ。

明日の朝までは、自分は、二たび、人生の笑ひ聲や、活々とした叫び聲を聞くことができないのだと思つた。柳の木の下を長い袂を飜がへして、歩るいてゐた女は、もう過去となつた。そして、いまごろは、どこかで眠つてゐるだらう。

Nも、あの新聞社の一室で、いまごろは眠つてゐるにちがひない。そして、今夜、嫉妬から女を殺したといふ事件も、今は、すでに過去になつてしまつた。

現在は、たゞ、魘されるやうな、重苦しい夜が、前後を鎖してゐるばかりだ。夜は、どこまでもつゞいてゐる。空間は、其の面を幾十回となく車輪で轢られることによつて、闇の底に、

ほの白く光つてゐる電車の軌路を私は、見た。其處にも、滅入るやうな休息があつた。

私は、自分獨りが起きてゐるやうな氣がして、ます／＼睡眠不足から、病的になつて行く、自身のいら／＼する神經が、痛ましいやうに、氣遣はれてならなかつた。

私は、街の中を走つた。

私は、いつまでも、夜の明けないことを願つた。私が、宿に歸つて、ぐつすり眠るまでは、決して夜の明けないことを願つた。

雨戸を繰られると、私は、いつも脅かされたやうに、眼を醒まして、もう決して、二たび眠付くことができなかつたからだ。

十數年が、過去になつてしまつた。

私は、どこにゐても、またどういふことをしてゐても、夜、すべての雜音が、地の底に沈んでしまつた後、遠く、すゝり泣くやうな、電車のカーヴを曲る軋り音をきくと、私の青春の時代を思ひ出す。そして、甘まい、やるせない、息詰るやうな春の晩を思ひ出す。眞夜中の眠靜つた町――物の蔭には、若い女が嫉妬のために殺された、いろ／＼の罪惡と事件とが、密かに行はれる――を思ひ出す。そして、私は、自分の足音が、黑く、死骸のやうに横はつた、街に反響をするのに驚いた。

Nは、死んだと聞く。……

私は、また、あの頃のやうに、幻想に胸の血を躍らすやうなことはなくなつた。――二三、二八――

眞夜中から黎明まで

豊島與志雄

時の區劃から云へば、正子が一日と次の日との境界であるけれども、徹夜する者にとつては、この境界は全く感じられない。彼にとつては、午前二時頃までは前夜の連續である。遠い汽笛の音、空氣の亂れ、何かしら動いてるもののどよめき、一日の生活の餘喘、……それらのものが大氣中に漂つてゐる。試みに戸外へ出てみよ。星の光はまだ人に親しみの色を帶びてをり、街路の空氣には人の息が交つてゐて、歸り後れてる飄々乎たる人影が犬と共に散在してゐる。

そして午前二時頃から、深い沈默と睡眠とが萬象の上に重くのしかゝつてくる。凡て夜を徹する人々が――遊戲に心奪はれてる者や仕事に縛られてる者などを除いて――何となく起きてるのを堪へ難く感じだすのは、この時である。四五の友人相集

つて談笑してゐるうちにも、ふと言葉が途切れ心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのは、この時である。地上のあらゆるものが鳴をひそめ息を凝らして、石のやうに冷く固く沈黙してしまひ、空氣が重々しく淀んでき、星の光が空の奥深く潜んでゆく。そしてこの死のやうな靜寂のうちに、天と地とに跨る大きな影が垂れ罩めて、月のある夜は月の光を、月のない夜は夜の闇を、嵐の夜はその雨風を、超自然的な帷のうちに抱きすくめる。その帷の襞や裾の奥から、無數の神秘な眼がぢつと覗き出す、凡て物影に潜んでゐるもの、人の眼につかないもの、形も色も音もない幽鬼の氣、この世のものでないものが、空に地に浮動し彷徨する。而もそれはたゞ魂に感ぜらるゝだけで、其處から來る魂の慴えも手傳つて、官能の對稱たる沈黙と靜寂とは、層々とつみ重つた深みを倍加する。地上の生ある物皆は、人も獣も草も木も、さういふ深みの底に沈み溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。それはまさしく、寂滅の時、逢魔の時、呪咀の時、丑時參りの時刻である。露や霜も降りるを止める、時間も歩みを止める、死と神秘との時間である。たゞ時計の針の止らないのが不思議である。

そして、冬ならば四時頃、夏ならば三時頃、突然或る物音が響く。身顫ひに似た木の葉の戰ぎ、ぼーと尻切れの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、または何物とも知れぬ擾音、これらの一つがふいに何處からともなく起つてくる。それが相圖である。沈黙と魔眠との底に凝り固つてゐた萬象が、一齊にぞつと總毛立つてくる。星の光がぎら／＼とした凄みを帶びる、月の面がまざ／＼と磨ぎ澄される、或は濃く淀んだ闇がむく／＼と動き出す。空氣が恐ろしい勢で徐々に流れ出す、或は風の方向が一息に變る。そして地上のあらゆるものが慄へながら肩を聳やかす。無生のものが生の息吹に觸れて恐れ戰くに似てゐる。斯く天地萬象が總毛立つと共に、蠱惑的な鬼氣は物の深みに姿を潜めてしまう。それはたゞ物凄い時刻、まだ形を具へない恐怖と歡喜との渾沌たる時刻である。復活の戰きの時である。

その戰慄が暫く續くうちに、ふつと、全く何故ともなく、凡てが消え去る空虚の時が來る。眼覺めながら息をひそめた時刻である。萬象がむく／＼と起き上りかけてまたとろりとやる時刻である。もはや其處には生も死も何物もない。月や星の光もぼやけ、闇の黒さも艶を失ひ、大地の上を押し渡る微風も息をつき、あらゆる物音が消え失せる。萬象の律動がぴたり合つたその隙間である。徹夜の者が最もひどい打撃を感ずるのは、この時刻に於てゞある。もはや口を利くことも、仕事を續けることも、起きてることまでが、堪へ難い努力となる。天地がほつ

と眼覚めの息を吐きつくして、何故ともない躊躇のうちに再び息を吸ひ込みかねてゐる、全く空虚な合間である。

そして俄に、輝かしい而もまだ仄かな交響楽が、何處ともなく起つてくる。空には星の囁き、地上には遠く應へ合ふ反響、そして一際高く、鶏の聲、車の響、汽笛の音、それらの底に籠つてる人聲。一時のとろりとした假睡からはつと眼覚めて起き上る、萬象の寢間着の衣擦れの音である。仄暗い夢と輝かしい幻とが入れ代る氣配である。新たに立上つてくるその幻は、物の隅々まで訪れて、凡ての閉ぢてる眼を見開かせる。爽かな空氣が空に地に流れる。草木の葉末には露や霜が繁く結ばれる。夜を徹してる者は、ぢつと坐についてをれなくなつて、故もなく立上つて歩き出す。そして試みに窓を開けば、東の空には薄らと紫の色が流れてゐて、それが見る／＼うちに紅色を帶びてくると共に、遠く聞えてゐた仄かな擾音が、いつしか騒然たる反響に高まつてきて、人の足音、小鳥の歌、星の最後の閃めき、そして地上の萬物が、仄白い明るみのうちに形を浮出して、その上を、觸れなばさら／＼と音を立てさうな爽かな空氣が、夜の闇と夢とを運んで流れてゆく。立並んだ人家はまだ默々と眠つてゐるけれど、その中に在るものは、もはや夜の夢ではなくて、新たな一日の幻影である。空には清い日の光が放射し、地上には輝かしい生活が初められてゐる。

郊外の夜と夜明け

室生犀星

この頃はめつたに夜更しをしない――二十四五のころはさうでもなかつたが、全くこの頃では夜更しをすると次の日とも一つ次の日とに疲れが殘つてゐて、仕事もできないときがある。――郊外に住んでゐると早寢のくせがついて、十一時ころに寢てしまふ。それに郊外は九時から十時に、午前一時か二時ころのやうな深閑たる夜更けのやうな時間が、いつの間にか忍び込んでくる――時間といふものにも妙な若さと老ひぼれとがあるものらしく、その九時から十時の間に、どちらへも片寄らたいまんなかほどに、夜更けの感じがしてくる――が、十一時になると、ずつと若々しい氣がする。そしても一遍夜といふものに出會つた新しさを感じる――九時から十時の間にはふくらうが鳴いて十一時には青鷺が鳴くほどわかわかしい。

郊外から十時ころに、町へ出ると、町はまだ夜の入口だのに、もう郊外は夜中だ。――そして明るいのにびつくりするくらい

だ。

夜明け——に、そんなに早く起きたことはないが、きつと一度目をさます、——どんな人間だつて夜明けには一度目をさまさなければならないやうに出來てゐるのではないか。——實際夜明けにはよく寢込んでゐても、ゆめうつつの間にも目をさましてゐるらしい。何んだかそんな風なきまりが人間にかんじられない間にきまつて、一度は目をさまして、さますことによつて誰かに挨拶をしてゐるやうな氣がするではないか。莫迦な、と、さう言ふならそれでもいいが、氣をつけてゐると、明りがさすころに、どこの家にでも誰かが、目をさまして、默つてまた瞼を閉ぢるやうなことが、知らない人人の間に起つてゐはすまいか。——それと一しよに、雨戸のそとにひそひそ話しごえがきこえて、蒼白い明りがだんだん冴えて行つて、それが光つてくるやうな時分に、そのひそひそしてゐる話しごゑがふつと灯を消すやうに消えてしまつて、しんかんとして最一度聞かうとしたつて、きこえはしないのだ——その話しごゑは一體なんだなどと言ふのは止めろ。實際はわたしにもわからないばかりか、そんな話し聲なんててんで聞えてこないかも知れないくらい、うすぼんやりした考へなんだ。だが、やはり誰かが話してゐることはそんなにうそでもない話らしいのだ。……こゝまでくると、理づめではわたしにもよくわからない。何が何だか、

このあひだ亡くなつた子供のゐた時分に、それでもわたしはよく夜明けに起きもしたし、目もさました。子供といふものはすこしでも此世のあかりを慕ふてゐるもので、一日のうちでも朝は何より早いものだ。おそく起きると損でもするやうに——この世の一日の朝に遲れまいとするやうに、そして何かから勇ましいことに參加するやうな氣もする。それが決つて夜明けぎわで、まだ雨戸のすき間のあかりさへはつきりしない時分だから驚く——そんな時刻に、わたしはよく雨戸のそとがわにも大きな翼を背負つてゐるものが、ばだばた羽ばたきをやつてゐるやうに思はれる……そのため赤兒は寢てゐられなくて、ついあんなに早く目をさましてしまふのだらう。さうでなければああも目が早くさめるわけがないのだ。——こんなことを書くと今どきの詩人といふ用なしの囈言だなんて言はれるかも知れないが、——實際そんな泰西名詩式のわたしの朝ごとの感じは、子供がゐなくなつてからばつたり起らなくなつてしまつた。それなら一たいあの翼を背負つたものは何處へ行つてしまつたのだらうと、寢ざめさみしい朝ごとに考へるのだ。大方、あれも亡くなつた子供と一しよに、どこか、れいの夜明けがたのあかり

のやうに消えて行つてしまつたのだらう――あるひは夜明けに目をさまさなければならないものが人間にあるとすると、そんなえたいの分らないものども不思議なしわざかも知れない――全く！

秋から冬にかけての朝

田山花袋

私は徹夜は滅多にしたことはないから、眞夜中の感じといふことは餘り味つたことはないが、一時、新聞を書くので、朝の三時四時頃から起きて机に向つたことはある。しかしこれもさう長くは續かなかつた。一年ほどで止した。

朝は頭がはつきりしてゐて氣持が好かつた。それに、殘月が庭樹にさして、その光が霜のやうにガラス窓に映つたさまは何とも言はれなかつた。秋から冬にかけては、殊に忘れられない印象を私に殘した。

梟の歌と太陽の現はれるまで

白鳥省吾

一

犬は靜かに堅い大道に横はる
黑い毛並に置く露
深夜の大氣が澄みきつて
空は淵の靑さに無數の星を鏤ばめてゐる。

人間の疲勞の澱む
微かな大地の響を犬は聽く、
犬の上に欅の大木の若葉が
海底の藻草のやうにそよぐ。

堅い大道には人一人通らず
犬のために安らかな床、

夜の自然の神は
星と語る深夜の犬の眠。

その頃、私は窮乏のどん底に居た。そしてただただ詩と戀に浮身を寠してゐた。職業に對してひどい幻滅を感じた私は、何かの職に就かうといふ希望を殆んど持たなくなり、日に二度の飯さへ食ひかね乍ら、しかも奇蹟に近いほどの靜かな法悦の氣持で詩を作つてゐた。そして、生涯の最初の喜びである對象の彼女を訪ねることが毎日の日課のやうなものであり、いつも夜の二時頃に一里ほども道程のある私の宿に徒歩で歸るのであつた。

其處に街は寂然と黑く眠り、ただ兩側に軒燈がつゞいてゐるだけである。電車の通らなくなつた都會は啞のやうに靜かである。殊に屋敷町などに於ては犬は吼えることを忘れ、安らかに大道を蓐として眠つてゐる。星と語る犬の眠こそ神に近いものと思はせる。

都會は物音の收まることが遲く、深夜と雖も何かの音が感ぜられる。そして明け方に物音の湧き起ることも早い。其處に音の無い時といふものはほんの僅かしかあるなしであらう。しかし流石は午前二時前後に於て眞の靜寂に觸れることが出來る。「草木も眠る丑滿時」といひ、「逢魔が時」といふ氣分は都會に於ても感ずることが出來る。また御通夜などに最も眠い眼を瞠りうとうとと讀經をきいてゐる時、柩の中の死人さへ無意味に近い退屈な讀經の聲に擽ぐつたく微笑してゐるやうに思はれるのである。人間の生死が眞夜中から黎明にかけて多く行はれ、それが潮の滿干に關係あるといふことなども思浮べられる。實に大地そのものも深夜に於て不思議なる脈搏を止めないであらう。否人間界の音響の靜まりゆくにつれて、いかにこの大地といふものが發生の力に燃えてゐるかゞ、強く感ぜられる。そして大地を包んでゐる空氣の存在がはつきり微妙に觸れてくる。ことに早春などに於て、屋外の深夜の大氣こそ私の身魂をこの上なく喜ばせるものである。

深夜の大氣は
神秘の子供、炎の音樂
やはらかく快く地に觸れ
地を撫でて熟睡ましめる。

ああ其の眠は昏々として
壯大極なる發生に燃えるものだ、
澄みきつた湧流が大地を流れて
共に共に歡喜を歌ふ。

空なますます美しく目覺め
昏々たる地の上に垂れる
不思議な金屬の光澤を帶びて暗く透明に……

早春の大地は無數の肉と魂の韻律そのもので
豐かに流れ往き來る大氣としみじみと抱き合ふ。
何物をも求めず
ただ在るが儘に濃き愛をもて
輕やかに無限の地に大氣は踊る。

更にまた、夜の主人は梟である。月である。ボオドレールも『古代の偶像のごとき奇異なる姿と、鋭く燃ゆる眼で默思する』梟を歌つてゐる。雜司ケ谷墓地に近く住んでゐる私は月の夜ふけによく梟の啼くのを聞くのである。私は墓地のさまをよく知り過ぎてゐる。月光にそちこちに輝く物言ひたげの墓碑を……

しかし梟も決して凄さはない。よく聽くと愛嬌のある含み聲である。梟はまた孤獨とは限らない。よく聽くとそれは二羽である場合が多い。次第に聲の相近寄る可愛らしき彼等を想像して、夜ふけの床に私は微笑むことすらある。

月の夜ふけに梟が啼く
聽き入れば啼き交はす二つの梟
彼等が何處で啼いてるかよくわかる
墓地のなかの櫟の繁みの梢……。

啼き交はす彼等の愛着の親しさ
彼等は次第に息づむやうに啼く
月のやうに明るく寂しい戀。

月の光まだらの墓地には
死刑囚も貴婦人も學者も眠り
人生はまるでコブランの織物のやうだ
天上に啼きかはす梟の戀の下。

眞夜中は休息の時であり、或る力の活動の時である。受胎の

時である。數限りない生殖が、數限りない美しい場面に、鳥や獸や魚や昆蟲によつて行はれる、かれらは快活に炎のやうに喘ぎ脹らつ肉を互にからんで相逢ふ歌を歌ふ。相逢ふ夜の男女の完全な喜び！外にはしつとりと露が上り、星が瞬いてゐる。人間や一切の生物に限らない。私はいつか眞夜中の空氣に琥珀色に冷えてゐる大輪の向日葵に、燃える白日の下に於てよりも、今こそ彼が誰も知らぬ秘密の裡に、土壤からは光る滋味を、空からは白銀の香氣を吸つて、いつしか種子が豊かに熟してゆくことを感じた。

二

日露戰爭の頃、國民は出征軍人を送るに忙がしかつた。熱狂する愛國心のなかに少年の私は燃える心を躍らせた。或る夜、三時に起きて三里むかふの停車場へ向つて友と二人で山路を急いだことがあつた。いふまでもなく停車場を通過するといふ出征する見知らぬ兵士達を萬歳で送るためであつた。有明の月が空に懸つてゐて、叢に鈴蟲がリーン、リーンと啼いてゐた。戰爭といふ感激に胸が一杯であつた。けれどもこの天地の靜かさは、人の世に戰爭のあることを不思議に思はせた。また戰爭に伴ふあらゆる悲哀をはつきりと限りなく思ひ浮ばせた。夜はしだいに黎明のけはひに移つてゆく。それは靜かなほのぼのとした神の姿である。

遠い日の少年の心よ、盲目の夜は個人をも國家をも永く支配する力はない。黎明は避けがたく正しい韻律で近づいてくる。

いかにその闇が濃く深いやうに見えても、明け方ちかくなれば、爽やかな匂ひ、音がそことなく湧き起つてくる。人々はなだ熟睡から覺めやうとしないが、黒い大地の果に「見えざる太陽」は曉を既に準備してゐる。

曉ぢかくしんしんと靜かさの極[illegible]死して
日輪のめざめを想ふ、
おもむろに脈うち生るる
黄金の日輪の昇るを……。」

鐘鳴る
ほの暗き薔薇色の靄ほのぼのと大地を流る、
おちこちに雞きこゆ
そは闇に燃ゆる幾すぢの鋭き火、

眠る街のそことなき汽罐のひびき、犬のこゑ、
微妙なる水のせせらぎ、花の開く音、草木の吐息、
その果に遙かにも日輪を吹く透明の大氣の光。

靜やかに大地は轉じ
見えざる日輪を吹く風燃ゆ、
おゝ人間の魂の褥は何
あかつき露の暗き薫りに
昏々とねむれる彼等、
四肢あらはに薄暗く輝きて
日輪と大地の呼吸と合はせて歌ふ。

曉の室内の靜坐に於て殊にその見えざる日輪を感ずることが出來る。雞、鐘、鳥等の序曲につれて、太陽の光は先づ空を紅くし、微かに姿を現はし、遙かに大地に第一線を投げて、『お早やう』の挨拶をするのである。そして季節〳〵の花や鳥がその在る處で喜び答へる。人間と自然と交錯する生活の姿が展開される。

私はこの最初の光を實に度々の夜行列車の翌朝に於て見たのである。海岸に於て、平野に於て、高原に於て。——人々は汗ばみ穢れた頬を射られながら、一樣に太陽を眩しく眺める。其時、太陽は若々しい黄金の素裸の生物である。空氣はあくまで澄明で新鮮で、何等、煙と塵とに濁らされてゐない。太陽は全く朗らかに鳴り渡り、脈搏ちながら昇るのである。

私がそれを見るばかりでなく、海に於て朽葉色に見える漁船の漁夫も、高原に於て馬を連れて草を刈る草刈女もそれの光に染められながら、太陽を見て、心に禮拜する。

最近の印象では昨年の夏に、大阪から歸京する途次、靜岡のほとりで見た朝日である。そして武藏野からばかり富士山を見てゐた私は、裾野の長い美しい富士の山容に接して喜びを二重にしたのであつた。

はつきりと富士の山容が
その完全な輪廓を半天に表はして
なだらかな裾野は長く長く
優艶なる美と溫かい力で吾等の世界と連なる。
華やかに日が射し始める
富士はそれに答へ
色彩は變幻する。

これを要するに眞夜中と黎明とは『自然』の時である。人間は生れ、仕事をし、眠り、そして死ぬであらう。しかし『自然』のしてゐる仕事は休みもなく眠もなく絶えず壯大な力に充ち輝いてゐる。おゝ純で健康で無限で美しい『自然』よ。人間の一日の仕事が終り、また新しい日の活動の序曲が奏される前に、人々の運命的な生と死とが、かの遠い潮の滿干と呼應して多く行はれるといふことも蓋し偶然なことではない。眞夜中よ、黎明よ、それは『自然』の時であるからである。より人間的であるよりも神と惡魔の時であるからである。しかし寂しいものでも呪はしいものでもなく、人間のセンチメンタルを絶した飽までも華やかで豐かな時である。

派出所詰の巡査として

吉田金重

「霜枯れ時の××公園裏は靜かであつた。それが夜になると、人ツ子一人通らない。たゞ公園下の鐵道線路に沿つた、鬱蒼たる森林の中に棲む、幾匹もの宿なし犬が、そこらあたりを折り重なるやうにして、餌をあさり求めて、徘徊するぐらゐなものであつた。

このほか強いて、この靜寂を破るものを求むるなれば、〇〇寺の背後の、雜木林の墻根に沿つて突つ立つてゐる、白いペンキ塗りの紅い警戒燈の點いた建物の前に、時たま洋刀の足にもつれつく響きが、ものうさうな靴を引きづる音につれて聞えて來るぐらいのものであつた。そして、それをさも樂しさうに、腹のくちくなつた宿なし犬の子がからかひに來るのであつた。しかもそこに突つ立つてゐる妙な恰好をした人間が、恰も自分らと運命を同じくしてゐる同胞かなぞのやうに……。

俺は實にこの派出所詰めの巡査として、これらの靜寂さ、ものうさを現に痛切に味つてゐる人間であつた。だが俺はこの靜寂さものうさのうちにも、腦髓の底に喰ひ入る疲勞と、眠氣をおつ拂ふことが出來ないのであつた。教習所生活をやつとすましたばかりの俺、巡査としてのほんとうの生活に入つたばかりの俺、不馴れな仕事に對する疲勞は、それが書間ならざる夜中、ひしひしと肉體に喰ひ入り、遂には腦髓の底まで襲撃するのであつた。………巡査部長や、警部補なぞの監督が、だしぬけに巡回して來ると言ふことを意識してゐながら、この强敵をおつ拂ふことが出來ないのであつた。月俸百分の三、（罰俸）…告、（これが度重なると成績に關係する）こんなことをしよつち

う念頭に置きながら、つい失敗してしまふのであつた。俺はかうした時に、宿なし犬でもやつて來て、眠氣をさましてくれゝばいゝがと思ふが、見馴れない新米巡査の俺には、滅多によりつかうとはしない。この時深夜の冷氣は、靴の底までしみて來る。外套の襟を深く立て、思ひ切り首をすくめてもまだ出てゐる、帽子の下の耳朶はいつの間にか神經を失つてゐる。それでも疲勞の眠氣は、身體のすべてを取りまいてしまふのであつた。

　俺はこれらのすべてに打ちかたうとして、頻りにあがき廻るのであつた。いな人間的なあらゆるもの、本能を壓へつけやうとして、もがき廻るのであつた。俺は足に力を入れ、そしてしこ踏みをしながら、そこらあたりをぐる〳〵歩き廻るのであつた。それがしまひには譯もなく、なかば夢のうちに繰り返してゐるのであつた。まるで夢遊病者のやうにあつちにふら〳〵、こつちにふら〳〵、時としては途徹もない方まで歩み、立ち木に打つ突かつて、びつくりして眼をさますことすらあるのであつた。」

　これは私が曾て熱風と言ふ小さい雜誌に發表した、「洋刀の響」と言ふ短篇小説の一節である。同時にこれは、曾て巡査であつた、私の經驗の一節と言ふことが、言ひ得られるのである。それだけ何等の誇張もなければ、出鱈目なぞは無論ない筈だ。

だが私の巡査としての、夜間の生活がこれで盡きてゐないことだけは、斷つて置かねばならない。

　「洋刀の響」の背景は、言ふまでもなく上野公園で、しかも鶯谷を上つた突き當りの、淋しい交番なのだ。たしかに東園の公番と言つた——とにかく巡査としての私に取つてはそこは皮切りの場所であり、また興味あり、最後まで深い印象を殘したところである。それが試みに嘘だと思つたら、あの交番の前に生えてゐる、櫻の樹を一々しらべて見たら分ることだ。夜中頃、眠氣さましに洋刀を引き拔いて、掌が痺れるまで切りつけると言ふよりむしろ、片つ端しから毆りつけたものだ。だが新米巡査當時はさすがに、あの寛永寺と博物館の間に狹まつたあたりや、彰義隊の墓のあたりを夜中頃に警邏するのは薄氣味が惡かつた。なぜならそこでは好く、人間が縄に繋がれたやうになつて、長くぶら下つてゐるところを見かけたからだ。無論そんな場所を通る時は、眠りながら歩いてゐない限りは、洋刀の音をガチヤ〳〵と、八釜しく響かせながら、自分の神經を胡麻化したものだ。

　だが、上野公園の黎明は一層だつた。少くとも一夜を疲勞と倦怠と、不睡眠と、寂寥の間に明かした私らに取つて、これはまたなんと言ふ清々しい氣持だつたらう！紺青色の空からギラ

く〳〵する星の燦めきが次第に薄くなり、そしてそれが一つ消え二つ消えするうちに、あの淺草の十二階あたりの空が仄白く、次第に紅みを帶び、黄金色に染まる頃は實に踊りたいぐらゐである。いや私は、あの櫻の樹の間を駈けぬけて、公園端の欄に身體をもたせながら、嬉しさうに東明の空を見つめるのであつた。なんと言ふロマンチックな氣持だらう！あゝ、私は書きたい、だが與へられた紙數はこれで盡きた！

東北の原野を夜汽車で過ぎる時など

葛西善藏

徹夜執筆の經驗はほとんど無いと云つてゝ方なので、特に纒つた感じも浮んで來ない。偶に試みてもいつも失敗に終る。永年の習慣だらうと思ふが、夜の更けるに隨つて頭腦の方も落付いて來さうな譯だが、ヘンに神經が冴えて來るばかしで、一種壓迫されるやうな感じで、渾然とした落付いた氣分になれない。電燈の光りに晒された原稿紙に向つても、ヘンに神經性の眩惑感に襲はれるやうな氣持で、どうにも筆が執れない。そんな譯で平生はほとんど眞夜中や黎明の感じをしみ〴〵味ふやうな場合はないが、歸郷の途中などで、さうした時刻に東北地方の原野を夜汽車で過ぎる場合など、どうかすると何とも云へない重苦しい憂欝な感じに囚へられることがある。自然と云ふ怪物の暗い莫大もないものゝ太息が感じらる氣がされて、ヘンな元始的な絶望感に襲はれる。平生は夜中に眼をさまして山の寺のガランとした部屋に孤獨な自分を考へ出しても、格別の感じも起らない。

夜の恐怖・暗黑の鬼氣

長田秀雄

濃いく出した珈琲を立てつゞけに二三杯飲んで、机に向ふと、やがて十二時が打ちます。

家の者は皆、寢靜まつて、臺所の天井で鼠の騷ぐ音が、鋭どくきこえてきます。

雜誌の〆切が間近く迫つてくると、きまつて、かう云ふ現象が、私の家では起るのです。

筆はなかなか進みません。取りあへず、敷島を一本つけて、口にくわへたまゝ、私は默々としてゐます。

十二時を過ぎると、内外の空氣は、如何なる季節にもかゝわらず異常に澄んできます。

何處かで何か物音が起こると、感受性の強くなつた空氣は、痛いやうに鋭どくその物音をひゞかせます――默々として、燈下に喫烟してゐる私は、創作の熱を失つて、取りとめもない空想に墮ちて行くのです。

晝間の複雜な刺激から逃れた神經は、内部に向つて輝きはじめます。私はよくさう云つた時に、小供の時分の眞夜中の感じを、まざまざと思出します。

小供の時分には眞夜中は底の知れない恐怖でありました。兩親の傍に寢せられてゐて、ふと、眞夜中に眼がさめる、と行燈の光が――當時、私の家では寢間には行燈を使つてゐました――朦朧たる陰影を含んで、呆やり、そこに寢てゐる兩親の顏を照らしてゐます。私の父は醫者を業としてゐたので、比較的、廣い家に住んでゐました。書生や女中も一時はかなり大勢居ましたから、人の寢息が、家中に、一種の單調な節奏を作つて響きわたります。その節奏をきいてゐる内に私は次第に陰暗なる不安を感じてくるのです。

小供の單純な頭に浮ぶ妖怪が、何處かにひそんでゐるやうな氣がしだします。異常な緊張が、やがて、私の心を鋭どくします。室の一隅に、暗が濃くかたまつて行くのが、一種の惡寒と一緒に、身體で感じられてきます。泣くにも泣けない恐ろしさのために、胸の動氣が高くなつてきます。

次第に濃くなつた一隅の暗は、鬼氣を含んで大きくなつて行きます。そして、何時の間にかそれが、人間の姿のやうに見えて來ます。私は呼吸もつまるやうな氣持で、たゞ、凝乎と、それを見つめてゐるより他には仕方がないのです。

もし、聲を出して、この恐ろしい苦しい沈默を破つたが最後、すぐ、妖怪が身を躍らして私に飛びかゝつてきさうに思へるのです。全身に油のやうな汗がじつとりと出て來ます――一秒、二秒……私は凝りかたまつた沈默に耐えられなくなつて來て、

「お母さん！」と、叫びながら、母の懷にもぐりこみます。

「恐い――お母さん。恐い」と云つて、泣くのは、その頃の私の毎夜の癖でした。母親は何か恐い夢でも見たのだらうと思つて、眠さうな聲で、

「また、始めた、何も恐い事はありません。さあ、お寢みなさい。」とかう云つて、抱いてくれました。沈默が破れると、心が廣く自由になつて、また、私は寢むるのです。

さう云つた小供の時分の記臆を、まざまざと思出してゐる内に、心が段々澄んで來ることがあります。そして異常に緊張してくると、筆が早く進むやうになります。

今でも私は夜の恐怖を人一倍烈しく感じます。まさか妖怪の事は考へませんが、深夜、たゞ一人で眼をさましてゐると、何者かゞ、戸の外か、或は障子の後から凝乎と私の姿を覗がつてゐるやうな氣がして、云ふべからざる鬼氣をひしと感じる事があります。さう云ふ心の狀態は、よく、執筆中にやつてきます。眞夜中になると、きまつて、電燈が明るくなります。しかも煌々たる電燈の光の内に、何かしら陰々滅々たる影のやうな物が、揺曳してゐるのが、ハツキリと感ぜられるのです。卽ち、その影のやうな物が、すべての物音にも光にもまつはつて、濃い、夜の情調を造りだしてゐるやうな氣がするのです。

神經衰弱が烈しくなると、不眠の夜がつゞきます。さう云ふ時には、誰か私の姿を物陰から覗つてゐると云ふ妄想が、異常に烈しくなつてきます。はては、耳に響く夜の物音に、平生考へもしないやうな連絡がついて、確かに人の氣配らしく感じられ、どうしても寢てゐる事が出來なくなります。私は勇氣をふるつて起上ります。そして、一順、家の中を見廻つて來ないと寢られないのです。

黎明の感じは、爽快なものだと、よく人からきゝますが、私には、どうしても、さうは思へません。

重くるしい陰鬱な感じです。夜が深くなるにつれて澄んできた空氣が、朦朧と鉛色に曇つて重くなります。鋭どい星の光が褪めてくる色合も、決して愉快な物ではありません。もし、月があつたら、なほさら、陰鬱です。朱のやうな曇つた光で、低く落ちて行く工合は、初夜の頃の水々さとは、うつてかはつて物凄い氣がします。

もつともその時刻には、大概頭脳が疲れ切つてゐるから、特に私だけが、さう感じるのかも知れません。宵張りの朝寢坊で、夜の引明けに起きた事など、決してない男ですから、夜通し起きてゐて仕事でもしてゐる時以外に黎明の氣持を味はつた事がありません。

夜半と黎明

長田幹彥

もうそれは今からは、十四年も前のことである。私はその時分、懐かしい旅役者の群と別れて、石狩から十勝へ、十勝から

北見の方へと當てもない放浪の旅を續けてゐた。やつとのことで網走の町へ落着いたのはもう四月の初旬のことで、內地ならばそろそろ櫻の花が咲きそめやうといふのに、そこいらの地方はまだ冬のさなかで、大地は一面の積雪と、荒寥とした風の音に掩はれてゐる。私は生涯のうちに二度と再び經驗することの出來ないやうな孤獨の感じに身を浸しながら、十日ばかりの日數をその町の海岸にある小さな旅館で暮らしたのであつた。

晝間のうちはそれでも何うやら紛れて過ごしてゐたが、夜が來ると、私は犇々と身にしむ峻冽な寒氣とゝもに、耐へ難い寂寥と旅愁を感じて、殆んど息も出來ないやうな切なさに責められることが屢々であつた。仕方がなしに私は、惡甘い壜詰めの酒を取寄せて、自分で燗をしてはちびりちびり飲みながら、もう泣き度いやうな、切迫塞つた心持ちで、何うにもならない自分の行末のことを思ひ續けたりした。

さういふ晩にはたとへ臥床に就いても、何うしても眠りを呼ぶことが出來なかつた。夜が更けるに從つて、眼は益々冴へてくる。さうなると寒氣はひとしほ酷しく身に應へて、もう何うしても寢てゐられなくなつてくる。それもその筈で、貧しい宿屋のことゝて、下敷もたつた一枚の夜具で、うへには綿のごつごつした縣布團を二枚かけて與れる限りなので、いくら携帶して來た毛布や、外套や、着てゐる着物までかけてみても、何うしても體は温まつて來ないのであつた。

私は夜半になると、寧ろ起きてゐる方が温かなので、そのまゝ臥床から藻繰り出てずつと曉方まで暖爐の傍で居眠りをしながら起き徹してしまふことが多かつた。若くて、健康だつた私は、幾晩となくさういふことをやりつゞけても、不思議な程體には障らなかつた。ひとつにはそれも旅に出て、氣が張り詰めてゐた故でもあらうが、今から思ふと、僅かな刺戟に逢つても鐵火のやうに燃え上ることの出來たその時代の自分の心持ちが實に羨ましくて耐らないのである。

或晩のこと、珍らしく宵の口から臥床へ入つた私も、うとうとしてゐる間に又ふつと眼が覺めてしまつた。その晩は吹雪が晴れて、いつになく風の聲も聞えず、不氣味な程靜かな晩であつた。そのかはり寒氣は一層酷くして、臥床の中にゐても鼻の頭と耳の穴がきりきり痛くなつてくるのであつた。私は寢る時に暖爐にうんと焚き込んで置いたので、その餘燼が殘つてゐるだらうと思つて、ひよいと頭を擡げると、その時、いつもの雪明りにしては、明る過ぎる明るさが初めて私の眼に映つた。よく瞳を据ゑてみると、すぐ向ふの窓からは落ち方の月が細い縞のやうになつて庇間から射し込んで、それが紙張りの天井へ

朧ろげた反映を投げてゐるのであつた。

私はもう二十日あまりも吹雪と曇天ばかりみて暮らしてゐるので、月の光をみると、耐らなく懷かしくなつて來た。で、寒さに慄へながら寢てゐるよりも、いつそ又毎ものやうに起きて、ひと晩暖爐の傍で夜徹しをしてやれといふ氣になつて、私はそれなりもそもそ起き上つて、毛布と外套を羽織つたまゝ暖爐の前へいつてどつかと坐つた。幸ひまだ餘燼は紅く殘つてゐるので、私は一本二錢づゝ拂つて別に買ひ置きにして置いたイタヤの大薪を二三本暖爐の中へ投り込んで、それへあたりながら、體を縮めて茫然空想に耽つてゐた。起きてゐるからと云つて、別にすることもないので、坐りながら何うかして少しでも眠ることを考へるより他はなかつた。

時計をみると、もう午前の二時である。耳に痛いやうな沈默は家中に漲つて、暖爐の中で薪の燃え落ちる音がことりことりと鳴るのまでが異樣な反響を天井へひゞかせてゆく。

空氣が凍てゝ、石のやうに凝つてしまつたやうな靜けさであつた。

窓の硝子戸から見ると、すぐ下は廣い砂濱で、その彼方は際涯もないオホツク海である。その海には東風（やませ）に壓されて流れ寄つて來た流氷が眞白な層をなして、沖から沖へ、暗い水平線の彼方までも茫漠と海面を掩つてゐる。西へ落ちかゝつた月はその流氷の群を、幻のやうな白さにほの白く照らして、處々にみえてゐる凹處や缺隙は不思議な綠色に染められてゐる。私は今迄見馴れた景色ながら、その晩は月光があるだけに、すばらしい驚異の眼をもつて、その氷海の夜景を下瞰しずにはゐられなかつた。

何が神秘だといつて、恐らく月夜の氷海ほど神秘なものはあるまい。海はまるで死んでゐるやうに靜まり返つて、眼路の限りには何ひとつとして動いてゐるものもなければ、聲をたてようとしてゐるものもない。不可思議な靜寂は無限から無限に續いて、蒼白い月光は斜にその底を照らしてゐる。

私はいくら思ふまいと思 ても、極地圈内の月夜を想ひ起さずにはゐられなかつた。ペンギン鳥の棲息する未知の國の姿はいつかしら私の眼の前に彷彿して來た。あらゆる光の現はれの中で最も美しいといはれてゐるあの極光の燃える國の夜は、私の眼の前にあつた。幾月も幾月もつゞくといふ長い夜の恐ろしい沈默、この地球上で「永遠」を求めるならば、恐らくはその夜の靜けさと、ほの白い氷原の寂寥より他には何もないであらう。私はその寂寥をオホツク海に漂ふ流氷の群の中に朧ろげながら想見することが出來たのであつた。

月は漸次と西へ沒して、間もなく限りもないその光は氷海の

面から倏忽として消え去つてしまつた。今まで眞白に輝いてゐた流氷の群は俄かに暗く、どんよりと翳つて來て、それと同時に大空には北斗星が謎のやうな姿をしながら物凄いまでにぎらぎら光つて來た。星の光が冴えてくるに從つて、夜の闇は益々濃く、冷たく天地を掩つて、氷の海だけがやがて空しい廣がりのまゝ唯ほの白くその底に横はつてみえるばかりであつた。

私はその凄愴な夜景を眺めてゐるうちに、その頃頻りに私を脅かしてゐた宇宙絶滅の日の恐ろしい光景がまざまざと思ひ浮べられて來た。何となしに青春時代の暗い思想につきまとはれてゐた私は、死滅せる地球そのまゝの氷海をみることに依つて、一層深刻な恐怖に襲はれずにはゐられなかつた。

總ての生物が營んだ生の事實も、人類が建設した文明も、思想も藝術も、いつかは一度この堅氷の底に葬られて、忘却よりも猶ほ恐ろしい絶無に歸してしまふ日が當然來るのである。すべては聲なき夜の眠りにつゝまれて、何等の記錄も、痕跡も殘すことなく、この地球は一箇の死滅せる原素の殘骸となつて、猶且つ永遠の旅人として、無限の虚空から虚空を何處から何處へともなく運行して行くのである。暗黑と沈默より外には何もない時空を絶した廣がりへ、彼は唯徒らに當てもなく彷徨してゆくのである。

私はそれを思つたゞけでも息のつまる樣な恐しさに戰かずにはゐられなかつた。兩手兩足を拘攣らせて、聲の限り慟哭しても猶ほ耐へ難い樣な淋しい不安が私の全心を引包んでしまつた。

私は脅えながらいきなり立ち上つて慄へる指先で洋燈を點してみたが、それでも私の理性は私に平靜を與へなかつた。私は氣狂ひのやうに呻きながら間内をぐるぐる歩き廻つたが、ふとみると、夕方飲み殘した罎詰の酒が隅の方の机のうへに載せてあるのを發見したので、私はもう夢中でその罎を口に當てゝ、ごくりごくりとひと息に飲み干してしまつた。氷を飲むやうな鋭い痛さが私の舌から食道へ傳つていつた。

酒を飲んでしまふと、私はそれなり頭から夜具を引被ぶつて、ストーヴの側へ突俯してしまつた。胸を嚙み裂くやうな悲しさは幾度か私の喉を押塞いでいつた。

それから幾時間かの後に、私はふつと顏を上げてみると、流氷に閉ざゝれた海の面にはもうそろそろ黎明が催して來てゐた。瑠璃色に澄んだ薄明は眞白な氷の海をほんのりと明るく染めて、北斗星の光も今は詩のやうな美しさに輝いてゐる。宇宙が奏する死と幻影の交響樂のやうにみえてゐた四邊の風物も、漸次と曉の歡びに溶け込んでくるやうに思はれて、私の心も知らず識らずの間にいくらか輕くなつて來た。

濃い瑠璃色の空はいつかしら眞珠のやうな美しい輝きを帶びてくる。星屑はひとつひとつ影うすれて、空と水平線の境が刻々に明瞭になつてくる。流氷の面も乳白色に眼覺めて、次第次第に明け放れてゆく東の空に、間もなく一圓の紅蓮のやうな光がぽつと水平線の一部を劈いて輝き出した時には、私はもうじつとしてゐられなくなつて、思はず俄破と夜具を彈ね退け、硝子窓のところへ走り出ていつて、肺腑を衝いて迸り出てくる歡喜の聲を放ちながら心の底からの敬虔の念をもつて東方の空を拜跪しずにはゐられなかつた。私は太陽の威力と恩惠の偉大さにひれふし、渇仰すると同時に、自分の心にも尊い黎明が生れて來たやうな赫灼たる光明をその時程強く感じたことはないのであつた。

私は此頃になつてその時分のことが、何とも云へない懐かさを以つて毎夜のやうに思ひ出されてならないのである。

一番鷄の聲

芥川龍之介

僕はこの問題に答ふる資格乏しきものなり。その理由の一つは餘り徹夜をしたことなき故なり。その理由の二つは詩人らしき感受性に乏しき故なり。

されども強いて感ずるところを云はんか、深夜と云ふ感じのするのは十時と十二時との間なり。この間は電燈の光も落着き、鐵瓶のたぎりも澄み、何か森とした氣になること多し。讀書や執筆は勿論、話に一番油が乘るのもやはりこの間にあるやうなり。

十二時より後は殆ど夜と云ふ感じさへせず。されどもとより晝にてはなし。まづ晝を男性、夜を女性とすれば、中性の時間と云ふ感じなり。この間は心も平板になり、焦燥とか興奮とかは催せども、前のやうに冴えたる氣もちにはならず。丑滿の頃には屋の棟さへ、三寸下るなどと云ひ慣したれど、僕には下つた屋の棟さへ、上り兼ねないと思はるるなり。

夜明けは常に平凡なり。云はば一番手輕なる現實暴露としか感ぜられず。

以上大體を述べたれど、十二時過ぎの感じには唯一つ例外あり。それは或三月の夜、約束の原稿を書き居りしが、どうも一箇所思ふやうに書けず。動きのとれぬ氣もちに任せし最中、突然一番鷄の聲を耳にせしことなり。この時はまことに德山の棒に打たれし如き心地したり。但し幸ひに買ひ被る勿れ。書けぬところは鷄を聞いても、やはりとうとう書けざりしと記憶す。

◇紳士學生其他何人にも必用の現代哲學の鳥瞰圖とも云ふべき書

渡部政盛著
最新哲學辭典

●菊判最上製美本全壹冊
背皮箱入紙數六百餘頁
正價金五圓八拾錢
送料廿七錢
滿鮮六拾錢

最新刊

（本書の六大特色）

（一）現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事（二）文章平易記述繁簡宜しきを得一讀直ちに其の要點を捕捉し得る事（三）内容は哲學概論・東洋西洋哲學史・倫理學・東洋西洋倫理學史・倫理學・美學・宗教・社會哲學・經濟哲學は勿論・生物學・心理學・哲學藝術上の最近思潮等特に現代哲學の記述に萬遺憾なからん事を期す（四）所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも亘り其の重要なる記述は總てこれを收めた事（五）紳士學生受驗者の便をはかり重要なる史上の問題は詳述した事（六）文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事等要するに本書は弊館が現代文化人に瞬刻も缺く可らざるものを最低安價で提供し推獎する所以である。

小林一郎新著
七部集連句評釋

（好評激甚）

四六判最上美本
全一冊約九百頁
正價金
參圓九拾錢
送料十八錢

大阪朝日批評「芭蕉翁の一生」「奥の細道評釋」等を公にした小林氏が俳諧研究の初學者が最も難解とする七部集中の連句の意義とその作意等を一々平易通俗に講述した著である。卷頭には芭蕉と七部集との關係並にその門下との交渉などについて親切な紹介が附てある。初學者には有益のものである。

◇◇發兌◇◇
東京市神田區表神保町七
振替貯金口座東京八七武番
大同館書店

時論

法學博士 吉野作造

内閣樞府衝突問題

○

去年の暮から本年の始めにかけて政界の大問題といへば第一に内閣樞府の衝突といふのがある。我々と丸で別の世界を作つて居る所謂政治社會では大變な大問題の樣だが、國民一般は之に對して頓と興味を惹かないのだから面白い。事實またこの問題がどう解決されたつて國民の利害休戚には何のかゝはりもないのだ。夫れかあらぬか國民一般は始めから此問題の爭點を十分理解して居ないやうだ、否理解しやうとさへ努めない者が多いやうである。

問題は極めて簡單だ。所謂日支郵便條約なるものにつき、樞密院は政府の措置を適當に非ずと爲し一種彈劾的の上奏を爲した。樞密院が政府を否とする點は二つある。一つは四つの取極を締結した手續が間違つて居る（内容に就ては異議がない）といふ事、モ一つは滿洲に於ける郵便局問題の終局的解決を他日に殘したのが惡いと云ふ事是である。此點に關しては豫め政府の辨明をも徴したが十分納得することが出來なかつたといふので、遂に其所見を上奏するに至つたのである。さて表面上の成行に就ては固より何等議すべき異常の事項はない。世間には上奏といふ大げさな行動に出でたのが穩當でないと云ふ論もあるが、政府監督機關としての樞府の與へられた權限を有効に利用するの途は、官制上上奏の外にはないのだから仕方がない。輕々しく之を利用すべからずと云ふはいゝ。之を利用せる事それ自身を責むるのは間違つて居る。

單に當面の時務に對する意見として觀るに、樞府の見解は實に頗る下らぬものゝ樣に僕は思ふ。前記二論點の中在滿洲郵便局問題に付ては華盛頓會議以來のいきさつを聽かば何人もあれ以外に取極め樣のない事が分る筈だ。之を既得權の擁護に努めざる退嬰外交だなどゝ云ふは、憲政會あたりの嗤ふべき軍國義的外交論に無用の聲援をする樣なもので、國家の重きを以任ずる元勳の言論とも思へない。若し夫れ單に既に取極めた四

條約の手續が穩當でないといふに至ては、あれ程政界の波瀾を捲き起してまで爭ふ程の大問題だらうか。一つの議論として、樞府の所見にも一應の理窟のあることは僕も認める。併し外交上の懸引としてはまた其間已むを得なかつた事情の存するは是亦何人も諒とすべき所である。事柄の實質が國利民福の要求にそぐはないと云ふのなら格別、單に微細の手續が行屆かないと云ふ丈けなら樞府の措置にもつと反省を促すべきものがある樣に思ふ。況んや外交上の掛引としては何人が局に當るもあれ以上に出づる能はざるべきに於てをや。

○

樞府の行動がどうの政府の態度がどうのといふ詮索は如何でもいゝ。之が如何に解決されても、外交上日本と支那との間に取極められた既定の狀態には變りはない。只その既定の狀態は實質的に我々に利か不利か、之が寧ろ大事の問題なのだ。然るに我國今日の政界に在ては、この寧ろ根本的な實質問題が全然等閑に附せられて、どうなつても構はない形式の問題が頻りに論爭されて居るのだから堪らない。女中が急病で番頭が藥を買ひに驅け出した。その時彼は慌てゝ主人の下駄を穿いたとする。歸つて妻君は番頭を叱つた。斯くて番頭が此際誤つて主人の下駄をはいたのが恕すべきか否かで主人夫婦が大論爭をする。買つて來た藥が丁度求むる所のものであるかどうかは顧みられない。況んや病人に對する投藥をや。日本の國民は丁度斯くして放擲さるゝ憐れな女中の樣なものだ。彼はたゞ一刻も早く利く藥を與へられて苦痛を去つて貰へばいゝ。併し主人夫婦に取つては今や番頭の過失に對する面目問題が最大の重要案件で、女中の病氣の事などにかゝはつて居る遑がない。大義名分だの憲法違反だのと鹿爪らしい議論をする元勳功臣を、多數の國民が今は政界の遊戯者と見做す所以は玆に在る。この所謂遊戯氣分は樞密院ばかりでない、貴族院にも中々多いのに驚く。誰れ彼れと名指す迄もなく、讀者は憂國慨世を賣物にする上院の所謂硬骨議員が、そこゝに屈指に遑あらざるを認められやう。僕は思ふ。彼等が本當に憂國慨世の誠意を有するのなら、ことに今日の樣な非常の時世に方つて、モ少し內容のある見解を立てる筈だ。モ少し國利民福に直接の影響ある實質的爭點に侃々諤々の論鋒を向くべき筈だ。而して斯うした種類の議論は少しも聞くことを得ない。彼等が肱を張り目を瞋らし机を叩いて論ずる所は、曰く大義名分だ。曰く憲法違反だ。空疎蠟を嚙むが如き形式論一點張りだ。そこで僕は常に思ふ彼等の聲を張り机を叩くは、畢竟下院に於て酒を被り卑猥な彌次を連發する連中と其心理狀態を異にするものではないと。同じく是れ眞實を缺く遊戯氣分

の發露である。只上下兩院の自然の空氣が、其發露の様式を異ならしむるに過ぎぬ。何れにしても、國民の多數は下院の低級な彌次に愛想をつかしてゐると同じく、今や上院に於ける愛國憂世の常連にも眉をひそめて居ることは疑を容れぬ。

形式論で爭ふの愚は分つたとして、一體今度の問題は實質論としてはどうかと訊かるゝ讀者も多からうが、此點は今僕の問題とする所ではない、横道に外れるから之が詳論を避くるが、只參考の爲め一言すれば至極結構だと歡迎して可なりと思ふのである。

○

事柄の實質に不都合が無いとすれば、今度の様な問題は實は口角泡を飛ばして論ずるが程のものではないのである。故に我々は之を首尾よく解決を告げた既定の問題として、今更面倒な事を云ふ積りはない。夫れが獨り所謂政治家といふ連中の間には大問題となるのみならず、引いては、內閣の命運にもかゝりさうだといふのだから可笑い。何んで斯んなことが大問題になるのか。其は前にも述べた如く、兎角遊戯氣分で形式論に浮身をやつすといふ政客の性癖にも因るが、も一つ見逃すことの出來ないのは、樞密院の彈劾的態度に直に政治的効果を附せんとする我國在來の政治的慣行に責任があると思ふ。この點は從來世間であまり論じない様だが、實は可なり大きな問題なのだ。

單純な法律論からすれば、樞密院は諮詢機關として上奏の權限を有する。而して其の意見は單に君主の御參考に供するに止まり、直接に政治上の効果を齎すべきものではない。この點に於て之は議院の不信任決議とは全く其性質を異にするものである。尤も議會の不信任決議だつて、法律上は直に政府引責辭職の原因となるのではない。けれども實際上は內閣更迭といふ効果をもち來すことになつて居る。樞密院の彈劾は全然之と異るべきもので、若し之が政治上に現實の効果を有つ様では、それこそ最高諮問機關を政爭の渦中に誘ふものにして、弊害之より大なるはない。我國先輩政客の間には、議院の不信任決議の政治的効果をば、例の大權干犯論で排斥しながら、陰然樞密院の行動に重大なる効果を許し來つたのは、甚だ了解に苦む所である。併し之といふも其の來歷を考へて見れば無理もない。即ち憲法制定當初からの最高政客の頭は、議院は出來る丈け之を邪魔もの視し、政界の樞機は自己の一派に握らねばならぬといふので固まつて居たのだ。勿論初めは善意で此考を押し進めたのであることは認める。善意だらうが惡意だらうが、其の結果はどうなるかといへば、內閣の運命も結局は彼等少數者の手に握らるゝことになる。斯くして永く元老會議なる變態的制度が跋

屈した。やがて之も思ふ様にならぬとなると樞密院が之に代つて、少くとも内閣監督の任に當る事となる。議院などは内閣よりもずつと下のもの、自分達は上の階級と自然頭がきまつて居るから、議院の不信任はどうでもよい。己れ達が承知せずしては内閣も晏如たるを得ないのだぞと考ふるに至るも無理はないのである。斯くして樞府自身が自家の行動に重大なる政治的効果の附くのを自ら怯まさる様になり、又因襲の久しき一般政客も亦無意識的に之を當然の事理とする様になつたのである。

然れどもよく考へて見れば、斯は超然的專制主義時代の遺物に過ぎぬのだ。立憲制の本義から云へば、何事も終局の判斷は民意によるべしとする。尤も今日の民衆は立憲制本來の主旨に合する底の訓練を與へられて居るか、又與へられたる問題に對して適當なる判斷を爲し得る程度に輿論構成の組み立てが許されて居るかは、大に疑問とせねばならぬ。併し之を缺くを以て彼等を無視して可なりといふは、學校にやらずして子供を馬鹿と罵るが如きものだ。彼等の意見を尊重することが實は即ち彼等の教育によるのだといふことを知らねばならぬ。之等の點は猶ほ別に詳論を要するが、要するに立憲制本來の主旨は、民衆を訓練しつゝ彼等の偏倚せざる判斷に最終の決定を爲さしむるに在る。故に茲に若し決定的に政治的効果をもち來すべき勢力ありとせば、そは民衆の良心の判斷の外に存す可らざる道理である。此のもの以外に内閣の進退に影響すべき何等中間の勢力を認むるは、單にそれ丈けで立憲制の要求に悖るものである。

内閣は内閣の見る所に從て事を處する。樞府は樞府の見る所に從て其權限を使行する。そは双方の勝手だ。其間に意見の相違があつたつて一向差支はない。强て其間に妥協を求むるのは、却て弊害の根だ。意見の相違があらば之を明白に發表して貰ふ方が國家の利益になる。そして其意見の相異る所を比較考量して最終的に是非の判斷をするのは國民だ。此點が明になつた上で内閣の進退すべき方向がきまり、かくて又形式上大權の發動となる順序だ。斯く云ふ順序で進行するものなら事も堂々たり無用の論辯に時と能とを徒費する掛念もなくなる。然るに事實夫れが其の通り往かぬのは必竟前に述べた舊時代の謬想に取り憑かれて居るが爲ではあるまいか。

○

若し夫れ樞府の行動に對して、内閣乘取りの野心に燃へて居る者が暗中飛躍の陰謀を逞うして居ることや、今の内閣を倒しては困るとする政友會の對抗運動にあくそくして居ることや、加藤内閣の出現で超然内閣の再生を見たに味を占めて、政黨に關係のない己れ達にも必しも廟閣に立ち得ぬ事もあるまいと、

覺束ない野望に促されて蠢動する上院議員もあるといふことや、頻りに吾人の耳朶を打つ之等紛々擾々に就ては、事々しく之を筆にするに堪へぬ。所謂政界の消息としては斯んな事が寧ろ重大の問題であらう。併し問題の利害得失の實質的意義に主たる觀點をおく吾人に取つては、こんな事はどうでもいゝ。從て昨今の新聞に二號活字で現れる樞府内閣の折衝の如きも、國家の利益がどうならうが双方の面目が如何かして立ちさへすればいゝと云ふ類のもので、謂はゞ博奕打の親方の喧嘩の仲直りの様なものだと僕は觀て居る。若し夫れ之を引き合にして更に内閣を困らさうと云ふ議院の有象無象に至ては沙汰の限りである。樞府の上奏が事柄の輕重の上から適當か否かは問題であらう。上奏されたからとて狼狽する内閣にも餘りに自信がなさ過ぐるが、之が政界の重大事だと騷ぐ世間の氣も知れない。我々國民としては政府と樞府との確信の相違として冷靜に其の孰れに味方すべきを研究すればいゝ。上奏その事並に其の内容に就ては全然我々の觸れべき問題でもなく又觸れる必要もない。

之を要するに、僕が此問題の經過の上に、つく〴〵感じたことは、世間一般の頭が十分に立憲的に出來上つて居ない事である。立憲の本義に徹底した頭で之に對すれば、此問題の如きは謂はゞ一家の私事の如きもので、表面の政治問題として、全然之を無視し端的に事柄の實質的利害を論ずればいゝのだ。所謂院の態度に何等かの政治的効果ある筈のものと考ふるは、之れ取も直さず專制時代の謬見を先入主とするが爲に外ならぬ。今日の政治家はも少し目が覺めぬと益々時勢に取り殘さるゝだらう。變轉の時代に於ける政治家の落伍といふことは何處の國にもあることだが、それにしても日本の今日はあまりに非道いと思ふ。（大正十二年二月上旬）

兵卒保健問題

○

無名の一青年將校よりの通信に基き、この一小篇を草して當局並に世上の攻究を要求する。事はなはだ重大だと考へたので、報道に過當の誇張あつてはならぬと十分の注意は加へた積りである。

以下青年將校の手紙の拔萃と心得て貰ひたい。

○

職を軍隊に奉じて初めて新兵教育の任を與へられた時、予の胸中に深く決心したことは、予の不才を以てして勞苦多き兵役義務に酬ゆる丈けの積極的利益を兵卒に與ふるは望み難いけれ

ども、せめては受持兵卒中より役務に原因して或は不具となり或は難治の重病に罹るが如きものを出すまいと云ふ事であつた。然るにこの兩三年の經驗は、不幸にして這の決心が豫期通りに、酬ひられないと云ふ事實となつて現れた。是れ予の怠慢の爲めか。將たまた無能の爲か。夫れもあらう。併し乍ら予はどう考へても其の一半の責任は現今の制度に在ることを疑ふわけには往かない。

外部に現はれた最も顯著な目じるしは胸膜炎の流行である。我々は之を軍隊病と呼んで居るが、近年殊に其の增加が著しい。先達某々の聯隊では僅々二三ケ月の間に幾百といふ患者を出した。而して古い將校などは之を見て能く『昔の兵は强かつた、今の兵は弱くて困る』とこぼす。昔の兵は本當に夫れ程强かつたかどうか自分には分らない。併しあんな無茶な勞働やあんな亂暴な粗衣粗食やに堪へ得べき道理のないのは、時の古今に拘はるまいと思ふ。よしんば兵の體力が昨今大に衰へたとしても、昔は强かつたと嘆息する丈では仕樣がない。弱いなら弱いなりに相當の方法を講ずべきではないか。然るに今日の制度は又其の局に當つて居る者の運用の手心は、殆んど此等の點を反省して居ない。胸膜炎の蔓延の裏面には斯う云ふ情實の伏在することを予は固く信じて居る。

今から十年ばかり前に、陸軍幼年學校に胸膜炎患者が頻出して無數の退學者を出したことがある。當時の學校當局者は丁度今日の軍隊當局者と同じ樣に其の責を生徒の衞生上の怠慢に歸して讓らなかつたが、事實の前には永く頑迷なる態度を續くるを得ず、やつと近頃になり其の非を悟りしものか、極端なスパルタ式をやめ、教育及內務の施設の上に漸次愛護主義を注入するやうになつた。其の結果に觀るべきものあるは言ふまでもない。軍隊に於ても這の經驗に鑑み今や大に各般の改革に着手すべき時期に達してゐると予は思ふ。

我々が仲間同志で斯んな事を論ずると、必ず利いた風の同僚は經費がないと云ふ。經費がないなら軍備を大に縮少してもいゝ。今は量よりも質を問題とする時代だ。軍備縮少に關する政治上の議論は我々の與り知らざる所だけれども、百人の半病人をかゝえ込んで居るよりも十人の無病息災な者を用意するの優れるは、誰が聞いたつて當り前の話だ。かういふ立場から我々青年將校の大多數は概してみな熱心な縮少論者であることを序ながら斷言して置く。

○

兵卒保健の急務と云ふ着眼點から改正して貰ひたい問題は澤山ある。其中重なる二三を擧げてみよう。

第一は教練演習を規則的に行ふことである。今日突如として軍隊に入る者の其の意外なるに驚く第一の點は、日々の實動時間の不平均を極め日課の徹底的に不定なことであらう。晝夜兼行で勞作に服するかと思へば、殆んど無爲にして終日を暮すこともある。一方に連日雜役に酷使せられ通しのものあるかと思へば、他方には毎日々々の演習に疲れ切つて居る者がある。日々の所謂教育の如きも、豫め時間を一定するでなく、一に擔任者の自由に委せてある。爲めに青年將校の客氣にまかせて過度の勞作を强要するは珍らしくない。中にも弊害の最も多しと思はるゝは、間稽古と通稱するもので、朝食夕食の前後の休憩時間に劍術體操を課することである。新參の下士などが兵卒の體力などに頓着なく、一に自己の興味に驅られて長時間の勞力を强いるのである。兵卒中自然之に堪へざる色を示すと、罰として或は長距離の早駈を命じ、甚しきは毆打するなどの亂暴を働くものすらある。斯うなると之は單に胸膜炎を心配するだけの問題ではなくなつて來るのである。

戸山學校歸りの連中のうちには、生かじりの運動生理學を振りまわし、如何に激しき勞働をしても其方法だに誤らずんば決して害はないなどゝ辨ずる者もある。併し其の所謂方法宜しきを得るといふことは、今日の新兵教育の指導者には斷じて求め難い、殊に間稽古の如きは、下士又は上等兵位が之に當るのだといふことを忘れてはならない。

予は間稽古の如きは嚴重に之を禁じたいと思ふ。日々の教育及び演習に就ても、開始並に終了の時刻を成るべく一定し、又科目の配合にも教育學者や心理學者の所説を參酌して相當の注意を加へたいと思ふ。

軍隊は何と云つても戰爭の準備だから、時に過度の勞作を要求して非常に備うるの訓練をするは必要である。併しそは一週一回とか二回とかに限定して然るべく、少くとも斯種訓練のため假令一人でも生命を犧牲にする樣な者あつてはならぬではないか。今日の軍隊は餘りに兵卒の生命を輕視し過ぎて居る。

○

次に今日行はれてゐる秋季演習のやり方も頗る亂暴であると思ふ。戰爭の演練であるから艱苦缺乏に堪へる樣訓練すべきは言を待たないが、八貫に近い武裝をして連日九里十里の遠きに走らせ、夜は露天の下に殆んど睡りを成さしめず。時としては休息の遑さへ奪つて甚に續いて行軍せしむるなどは、何で之を屢々するの必要があらう。斯かる無茶を而かも數日數夜續けられては、之で健康を害はないのが不思議だと云ひたい位である。斯かる無茶をやる事の不良なる効果は壯年活氣の青年には即時

には表はれぬかも知れぬが、他日年取つてから必ず表はれる時があるといふ說もあるが、果して然らばこは國民保健の一般的問題として實に由々しき大事ではあるまいか。

先輩の軍人に我々の常に遺憾に思ふことは、克己訓練の道德的價値を過信してゐることである。克己訓練も度を過ぐれば、肉體的には勿論、精神的にも却て反對の不良な結果を呈することは、我々の常に深く經驗する所である。

自分の考では、行軍力の養成としては五六里位多くとも七八里位に止め、而かもモ少し輕便な行軍を時々實施するので十分だと思ふ。戰爭と云ふ非常時には、自ら氣分も違ふから平素修練した以上の力を發揮するは疑ない。戰爭時に期待すべき丈の極限を平素から稽古させ様とするは、無理であるばかりでなく又必要もない。秋季演習のやり方は、何とか速に改正するの必要があると思ふ。況んや現在の樣なやり方では其外種々の弊害を殘すに於てをや。

○

夫れでも演習に在つては、事柄の性質上多少過劇な又多少不規則な勞役は已むを得ないとしやう。其以外の教育に至ては出來得る限り規則正しき合理的計劃の下に指導すべきは當然であらう。今日普通に見るが如き何等腹案なき行き當りばつたりの教育では、啻に何の役にも立たぬばかりでなく、却て兵卒を無用に疲勞せしむるに止ると思ふ。人或はいふ。軍隊に於ける教育の講堂は野外を常とする。室内に於てするは一に天候の如何に依て定まるのだから、豫め一定の秩序ある計劃は立てにくいと。之に對して予は敢て斷言する。教育の局に當る者に一片の誠意だにあらば、そは決して困難な事ではないと。

この點に論及する前に一言したきは、工卒制度の廢止と勤務雜役兵の整理とのことである。此の二者が如何に今日の軍隊教育を規則的ならしむるに妨げとなつて居るかは問はずして明であらう。軍隊教育の關係を別としても、二者存置の理由なきは極めて明白であるのに、因襲の久しき、當局者は未だに之を改廢せんとしない。予の觀る所を以てすれば、之を適當に改廢整理せず、軍隊の教育は更に在營期を半ヶ年以上短縮しても、今日よりもつと良き成績を舉げ得ると信ずる。在營二年といふも、之等の惡制のため、眞に教育らしい教育を受くるのは入營後先づ半年に止まる。第二年度に至ては、日々の演習に出る者は數名乃至數十名に過ぎず、而かも演習の交代が適當に行はれぬから、教育者が如何に努力しても、其の全般に及す效果は知れたものである。

○

更に進んで予は軍隊教育の規則的になるを妨げ兵卒保健問題の正當なる解決を邪魔する最も大なる原因として、現今の檢閲競技制度を擧げなければならぬ。之が廢止又は少くも其の根本的改正は、何を措いても手をつけねばならぬ先決の急務である。何となれば、之を存する以上、試驗勉强的な强制訓練の行はれるは免れ難く、上司の者はまた自己の名譽の爲に部下の體力などを顧慮する遑がないからである。西伯利より歸還したばかりの某聯隊が、目前に迫れる第二期檢閲の成績を競はんとし、復員其他の關係より久しく演習を中止して居た埋め合せとして急遽猛烈を極めた演習を强要した爲め、夥しき胸膜炎患者を出したといふ例もある。聞く所に依れば、當初誰しも斯かるやり方の兵卒の健康に及ぼすべき弊害に付ては氣づいて居たとやら。而かも之を適度に制限し得なかつたのは、檢閲制度の爲に外ならない。のみならず、檢閲の成績の爲には斯種の犧牲は已むを得ないと云ふ風に、今なほ多くの聯隊將校は考へて居るのだから堪らない。

各隊に於ける競技の練習に至ては、更に其弊害の大なるものがある。未だ曉に達せざるに射的場に驅り出され行く兵卒の一團がある。日既にくれて猶ほ營内に銃劍術の掛け聲の喧しきを聞くこともある。疲れ切つた兵卒に迫つて更に數番の緊張した試合を求むるの狀は、鬪犬鬪鷄を見る時の慘酷さを思はせる。其上之等の競技に於ては、團體の成績を分擔する各個人の技能が分明である所から、名譽心の昂奮と責任感の壓迫との爲め、一層兵卒の身心を苦める。射撃の下手な兵卒などは心配で食事もろく／＼通らぬといふのが通例だ。名譽射撃前に於ける兵卒に如何に顏色憔衰のもの多きかを見ば蓋し思半ばに過ぐるものがあらう。

斯る重大な犧牲の上に立つ檢閲競技制度は、そんなら軍隊教育の上にどんな實質的効益があるのかといふに、驚くべし、それは啻に何等の利益もないばかりでなく、却て大きな弊害をさへもたらして居るのである。畢竟此の制度は、儀式的教練と遊戲的武技との尊ばれた舊時の遺物に過ぎず、今日に在ては軍隊教育の眞正な進歩發達を阻害する以外最早何の役にも立たないものである。一個人の能力檢定に於ても、試驗は必しも唯一の適當な方法ではないとされる今日、多數人の團體につき、本來判別の困難な訓練の程度をば、極めて短き時間内に見定めやうと云ふのだから、本當の成績を擧げ得ないのは當然だ。强て何とか成績を檢定せねばならぬとすると、其の標準は必ずや形式的なものに固定する。今日の軍隊教育が如何に甚しく形式的になつて居るかを反省せば、檢閲制度の寧ろ軍隊教育の最大障碍物

たる所以は明白に分るだらう。

檢閲制度は更にまた檢閲科目が限定せられてゐると云ふ點に於て其弊害を擴大する。同じ試驗でも科目全部を檢みられるのならまだいゝ、軍隊の檢閲は科目が大體豫想せられるから、平素から夫れのみが重んぜらるゝ傾向を促がすのである。單に之ればかりではない。同じく檢閲の對象となる科目に在つても、其の成績の判別し易いものと否らざるものとの間に、平素の力の入れ樣が違ふと云ふ事實もある。さういふ所から、今日の軍隊の教育は、極めて形式的で又極めて外面的だ。夫の精神的陶冶の如きは殆んど顧みられない實狀に陥つたのである。

そもそも軍隊教育が國民精神の涵養を高調したことは年久しいものだ。今日精神教育に屬する重要な一科として訓話といふものがある。豫定表の上には麗々しく載つて居るが、實際は之に充てた時間の殆んど全部は劍術射撃に侵蝕されて居る、檢閲場に於ける一二の型にはまつた月並の問答を通過する丈の事には、之で一向支障がないからである。檢閲に關係薄き爲めに顧みられざるものに其外陣中勤務の教育といふがある。戰爭に直接影響ある極めて重大なるものであるのに、最近の秋季演習に暴露せられた斯方面の不良なる成績を、當局は何と觀らるゝだらう。檢閲の成績に明らさまに現はれないものは、紙上の訓示が八釜しく反覆せらるゝにも拘らず、更に進歩して居ないのは之等の事實に極めて明白である。

尤も人に依ては低級な兵卒の志氣を鼓舞せしむるに競技も必要だといふが、苟くも將校を長とする團體に對し、競技に依て教育の成績を爭はせるは亂暴だと思ふ。近頃は年若い將校の間には大分此點に自覺し始めた者もある樣である。が數年前までは、夏季三ケ月は射撃教育に沒頭し、名譽射撃が濟むとすぐ銃劍術に專念し、二者の交代に專ら歳月を捧げて居る有樣であつた。斯く目前の成績を舉げんと只管苦心するの結果は、如何に眞面目な者でも、自ら軍隊の眞正な向上發展を疎略する樣にならざるを得ない。加之部下の努力を不當に强要して無用の仕事に多分の時を割かしむる結果として、將校自らも研鑽の餘裕に乏しきを免れず、且つ所謂絶對神聖な上官の講評に迎合せねばならぬ結果、識らずしらず退嬰主義に陥つて仕舞ふ。斯くして自己の創意に依る研究と進歩とは地を掃ふ。軍隊教育をして百年一日の如く停滯せしめるに至つた所以は主として玆にあると思ふ。

○

終りに軍隊の内務生活の根本的改正につき一言して此の小論文を結ばうと思ふ。

入營の當初何人も第一に感ずる苦痛は、軍隊生活の極度の非衛生的な事であらう。克己訓練の道德的價値の過信より之が改善を躊躇するの愚は、固より指摘するまでもないが、若し之が主ら經費問題に原因するのなら、予は軍備を縮少しても改善に着手するの最大急務たるを叫びたい。

軍隊生活の非衛生的な事に關連して第一に要求したいのは、兵舍の擴張といふことである。昨今の新築に係るものはまだしもであるが、三十年代に建てられたものと來てはとてもお話にならない。三十人あまりに對して僅に三十疊足らずの一室が配當されて居るを常とし、而かも之は三十人の兵卒の寢室であると同時に自習室であり、又時に食堂にも兼用せねばならねのである。兵器被服の手入もこゝでやる。時には學科室となり、雨天の際には教練場となることも珍らしくない。各兵卒に支給された武器被服は勿論、下駄箱、机、腰掛、寢臺、悉くこの一室內に陳列される。三十人の者が皆並んで机に倚れば身動きも出來ぬ。而して電燈はこの一室に十六燭光がやつと三つ位だから、夜間讀書などの出來るのは燈下の數名に過ぎない。寢臺も自ら極めて狹く、而かも非常に彼是密接して居るから、流行性感冒にでも罹つた者があると、嫌でも應でも全部に傳染せずには居ない。我々が夜間兵室を巡視すると、冬でも臭氣がむッとして氣持の惡いこと夥しい。斯の如きは如何に經費節約の世の中だとて抑も人間を容れて置くべき場所といへるだらうか。

予輩の考へでは、一室の定員を精々今の半數位に止め、外に自習室や食堂を設備すべきである。之を最低の極限とする。猶ほ出來得べくんば、中隊每に讀書室、娛樂室を設けて貰ひたい。遊戲にふけり軍事以外の書を讀むことを禁ずるのが得策だなどと考ふる者あるは、我々の太だ遺憾とする所である。兎に角今の儘では、軍隊生活の不規則なこと、勤務雜役の繁多なことの爲め、さらでも困憊せる兵卒をば、此上どれ丈け傷うてゆくか分らない。

諸君試みに一度兵室を覗き見よ。皆々かうと云ふのではないが、ずつとヒドイのになると、或者は食事をして居るかと思へば其の側には油だらけ泥だらけの武器被服の手入をやつてゐる者が居る。煙草を吹かして雜談に耽つてゐる一團があるかと思へば、毛布を疊んだり箒を取つて塵埃を掃き立てゝゐる者もある。と云ふ始末である。斯かる非衛生的の現象を一に兵卒それ自身の無教育の責のみに歸してはいけないではないか。

食器は杓子を以て綺麗な湯を汲み取り之で洗へといふことに規則は定つて居る。實際は食器をその儘湯槽の中に漬込んで洗ふ。後から來る者は、他の洗ひからしの汚い湯で洗ふか、夫れ

が嫌なら洗濯場の水にたよるより仕方がない。そは洗ふ道具が極めて少數なのに、時間の制限がある爲に、順序正しく自己の番の來るを待つて居れぬからである。凡そ軍隊ほど馬鹿に忙しくて其の割に能率のあがらない處はない。猶ほこの問題については次の樣な事も考へねばならぬ。水道の設備のある處はイザ知らず、否らざる處に在ては、井戸から水を汲むは多く古參兵の炊時當番である所から、初年兵などは、之等の者の機嫌を損するを恐れて、水の使用を格別愼むことになる。汚い水で食器を洗ふに我慢するのは、風呂の極めて汚いのと共に、主なる原因の一つはこゝにも在るのである。

要するに、兵營の設備は何處から何處まで非衛生的に行屆いたものだ。而して差當つての緊急問題は兵舍の狹隘を極むることだ。現在の兵舍は其兵員に對して半分だけのものしかない。兵舍を完備する丈の經費がないと云ふなら、兵員を半減して貰ひたい。兵員の減縮と共に兵舍も夫れ丈け減らせると考へらるゝなら大間違である。軍備縮少論者に向つて此邊の事情をよく念頭におかれんことを希望して置く。

○

國民皆兵と云ひながら實際兵役に服する者は全壯丁の半にも足らない。而して之に服せざる者は何等の負擔をも課せられないのに、兵役に服する者をのみ二重三重の負擔に苦めるのは何と云つても不公平の譏を免れない。せめては兵役に服した結果何等か他日の役に立つ樣な教養を與へて送り還すべきのに、夫れが丸でない。甚しきは外傷内疾、殊に肋膜炎の如き難症を御みやげに歸らされるのでは堪つたものでない。

之に關連して更に大に我々の遺憾とするは、軍務に堪へなくなつた此種の病人を現役免除とか兵役免除とかの名目の下に遠慮會釋なく除隊を命ずることである。軍務に服することの結果として疾を得た者に對しては、國家は當然治療の責任を負ふべきではないか。貧困なる家庭の子弟が疾を以て歸還を命ぜられ醫藥の資は勿論糊口の料にさへ窮すると云ふは、我々の屢々耳にする所である。之等の者に關し、現今の制度乃至實際の取扱振りは、餘りに非人道的な嫌はないだらうか。

軍隊に於ける病兵の取扱がまた一の重大問題だ。入營中病氣に罹つた者の誰しも經驗する所であるが、軍隊ほど病人を惨酷に取扱ふ處はなからう。診斷手形の煩瑣なるが爲に受診の機を失することや、軍醫の手不足、看護卒の不親切は云はずもがな、下らぬ威嚴主義に囚はれて地方專門醫の受診又は自宅療養を許さぬ事や、論ずべきことは頗る多い。要するに軍隊に於ては、治るべき病氣までが治らずに了ると云ふ事も珍らしからぬ

現象となつて居る。

孰れにしても、今日の軍隊が兵卒の保健に就て極端に不注意なるは蔽ひ難い。我々は現に兵卒と起臥を共にして時に之に思ひ到り、そゞろに戰慄を禁じ得ないことがある。當局者は願はくは、言を曖昧にして一時を糊塗することなく、徒らに空疎なる形式的整備に鋭意するを熄めて、軍隊そのものゝ爲にも將た人道の爲にも大切なこの保健問題につき、十分愼重なる攻究を遂げられんことを。是れ予の一軍人として又一國民として切に希望する所である。



婦人公論「女性」への抗
（中央公論愛讀者諸

妹より兄への願ひ

兄上樣！とかう呼んでもよい位親愛なる中央公論愛讀者諸君よ。中央公論の姉妹雜誌として、中央公論が多年我堅實なる智識階級を抱擁して誌界に覇を稱してゐると同じやうに、諸君の親愛なる子女並に姉妹の大多數を讀者にして、我婦人の進步向上のために微力を效して來た婦人公論から特に折入つてのお願ひ、御相談を聞いて下さい。

それは他でもない、今日の日本婦人は正當な發達を爲してゐるとお思ひになりますか、それとも生意氣になつたとでもお思ひになりますか。諸君の愛嬢や諸君の姉妹は申すに及ばず、諸君のベター・ハーフたるべき同胞姉妹に對して、如何の感情と希望をお有ちになりますか。吾々、婦人の啓發に盡瘁して來た者にとつて、今日の男性の方が今日の女性に對して有せらるる感慨ほど聽きたいと思ふものはありません。又今日の婦人は、正當たる自分の途を歩んでゐるつもりですけれど、鹿を追ふ獵夫山を見ずの譬の通り、或はあらぬ途に踏み迷つてゐないとも限りません。前へ前へと馬車馬のやうに走つた結果は他を顧みるの餘裕が無かつたかも知れません。多年の壓迫から振ひ立つた武者ぶるひが動もすれば男性に對する非禮を敢てしたかも知れません。――それならば許して下さい。決して吾々は徒らに男性に反抗し敵對しようとするものではありません。女性を無視した男性の文化が不具であるのを知る吾々は、男性を無視した女性文化の創造せられる理由の無いのを知つてゐます。どうしても今後の文化は誠實な男女の協力に依らなければならないものであるのを知つてゐます。わけても何千年來今日の文化を建設して來た男性の力に對しては私かに敬意を表してゐます。

殊に昨年と一昨年の二回婦人公論の夏季臨時增刊『誇か恥か』號によつて聊か日本女性の爲めに氣を吐いた我婦人は、今や姑らく鳴りを鎭めて沈默修養すべき時代に入りました。さうして心を虛うして自分の越し方を振返り、またその行手を望んでゐます。今に於いて彼等女性の最も良き伴侶であるべき男性の批評、忠

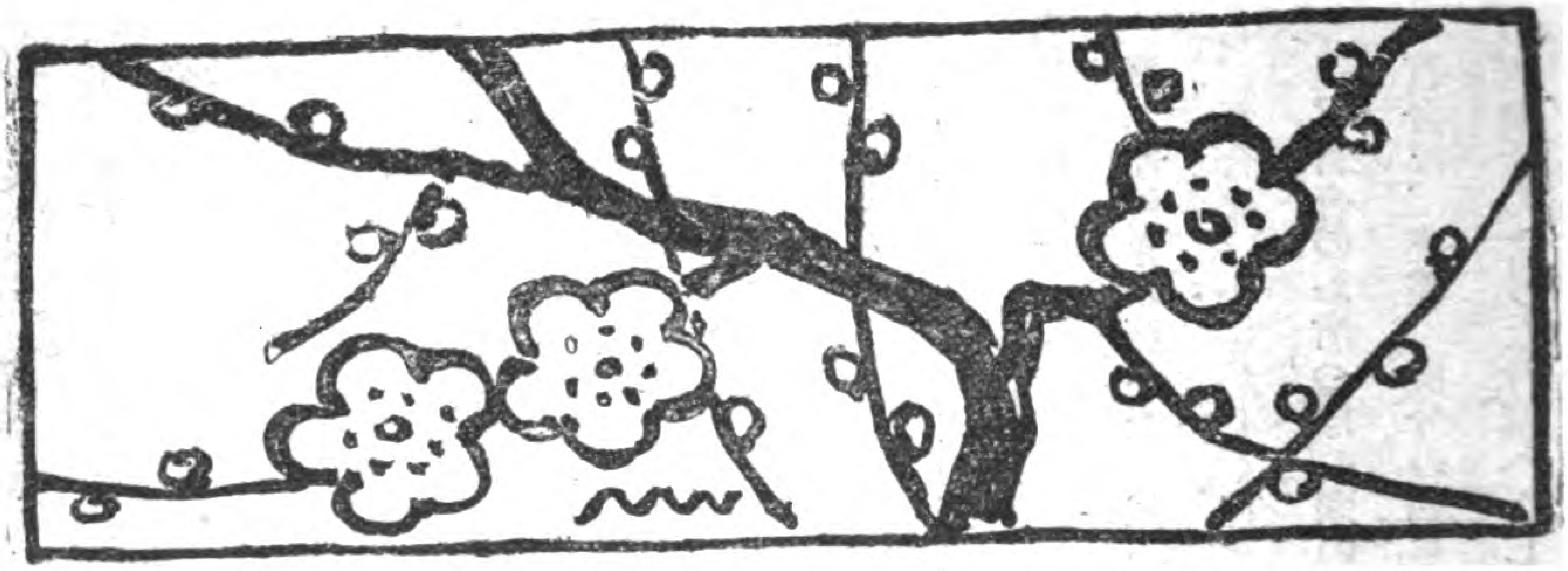
辯」號（夏季臨時增刊）原稿募集

君の投書を歡迎す（

言は、たとひいかなる非難、罵詈、惡口、雜言と雖も、之を聽いて自ら反省の資に供するだけの謙虚な心持とを有つてゐます。少くともそれが諸君の女性に對する親切な愛情から出發するものでありさへすれば、此際忌憚の無い批判を垂れて、吾々婦人を導いて頂きたいと思ふのであります。

親愛なる中央公論愛讀者諸君に御相談申上げたいと思ふのは此點であります。今日世の中に紛糾せる戀愛結婚の錯綜事件は必ず諸君の眉を顰めしむるものがありませう。其他日常諸君の身邊にも之と似た事件の頻出するものが無いでせうか。此等一般兩性問題の解決は、單に女性の問題でもなく又男性の問題でもありません。此等の問題に關して深憂を抱かるゝ諸君子よ！さうして又江湖に隱れたる婦人問題、兩性問題の研究者よ！諸君は諸君の平素の蘊蓄を傾けて、之を婦人公論夏季臨時增刊（七月十日發行）に發表し、婦人を導き、併せて吾々兩性の上に繋るこの重大問題の解決に資せんとはし給はぬか。論文は固より可なり小說、戲曲、情話、報告、詩歌、感想、諷刺、形式は何でもよろしい。要は現代の日本婦人を目安にして、之を敎へ導くものであつて欲しいのであります。然らば婦人公論は之を男性からの『女性への抗辯』と題して普く我國婦人の熟讀に供へませう。恐らくそれは日本婦人を啓發誘導するといふ上にも、又兩性問題解決の上にも又併せて男女の融和發展の上にも必ず有益な結果を齎すであらうを信じます。〆切は五月十五日、長短は隨意、中央公論社內婦人公論編輯部宛に送稿して下さい。但し『婦人公論臨時號原稿』と併書して下さい。掲載した原稿に對しては一枚（四百字詰原稿紙）二圓以上八圓以下を呈します。尚委しくは婦人公論三月號の折込豫告中の「投稿規定」を御一覽下さい。

男から女への忠言



追憶の父

藤村千代

如何した拍子にか、百合は眼が醒めた、

先刻から、耳の底の方で、女の泣聲が聽へて居るようであつた。夢を見て居るのかも知れない、と思つて見たが、今は、眼をぱつちり開いて居た。女の泣聲は唐紙の向ふから聽へて居た。今にも絶え入りそうな、それで居て、長い尾を引いては續く嗚咽であつた。

それまで、ぼんやりして居た百合の、或、おせつかいなセンチメンタリズムが、むくむくと頭を擡げて來た。百合は、こまつしやくれた心配顔をして、がばと、蒲團の上へ起直つた。そして、じつと耳を澄した。

――百合の頭の中に、何日か讀んだ事のある、假名書きの小説本の或シーンが、こびり附いて居た。

美しい男と女とが、抱き合つて泣いて居た。誰か、意地の悪い人間が居て、そのために、二人は別れなければならなかつた。それが悲しくて泣いて居た。

「泣いちやあ可厭よ。あの不可ない人が死んで了つたら、又、逢ひに來ますわ。」

と、女がハンカチを出して、指に捲き乍ら、言つた。

「浪さん！」

男はそう呼んだ。——悲しい女の名は、浪さんと言ふのに決つて居たから——「僕は男だから泣きません。僕は……

……」——

百合は、大きな眼をぱち〱させて、一寸、身悚ひする眞似をした。

「その時、百合はほんとうに眼が醒めた。泣いて居るのは、母であつた。百合は、ぎよつとした。今にも、猛獸のような父の罵詈と亂打が、降つて來るかと、胸を躍らせて居た。

が、一途に、濕つぽい母の泣聲だけが、洩れて來た。父は？百合は、きちんと蒲團の上に坐つて、身幅の狹い筒つぽの衿を掻き合せた。

母の啜り泣きと、父の狂亂とは、この暗い家の中での、慘しい連れ彈きであつた。百合は、じつとして、何かを待ちうけて居た。

微かな呻きが聽へた。父が、あんなに細い聲で、話す事があるのか知ら、母は、いぢめられて居るのではないのか知ら、百合は、小さかしく首をかしげた。

又、百合のお河つぱの頭の中で、小說本の男と女とが、江戶辯の會話を遣り始めた。

百合は、突然、自分の知らない父と母との世界を見たい、と言ふ念に驅られた。で、枕の上に兩手を支へて、八幡樣の唐獅子のような身構へをして、唐紙へぴつたりと耳を附けた。と、枕の中の蕎麥殼が、ザザ、ザ……と蟋蟀の呻るよ

うな音を立てた。(餘り、手に力を入れ過ぎたのだ。)百合は、はつとした。頭の上に振り上げた父の拳と、恐ろしい眼玉とを想像して、危く聲を擧げるところであつた。

が、父と母は、細い聲で、何か呼いて居た。

「どうぞ、堪へてつかあさんせ。」

と、母の聲が、何か詫びて居た。

「何をや?腹の子は汝(おれ)に遣るけえ、一緒に連れて往ね。」

「ああた。まあ、そんとな事を言はんと、どうぞ、堪へてお呉れんされ。」

そんな問答をして居る父と母との姿を、見たかつた。その瞬間、背骨が凍りつくような快い痺れと變な渇望とが、百合の全身を走つた。百合は、唐紙の把手に手を掛けた。――唯つた、一寸か五分で好い!――が、その時、後の暗い佛壇の邊で、何か聽へない音が、がん!と打おろされたやうな氣がした。百合はやにはに、寢床の中へ戻つた。頭から、すつぽりと蒲團を被つて、呼吸を殺して居た。今の音は、ほんとうに響いたのか、何の音か、と耳を澄して居た。鼠の子が騷いで居るのだ。と、父と母とが思つて呉れれば好い、百合は、蒲團の中で祈つて居た。恥しさで、顏が眞赤になるようであつた。溜息が、胸に一杯になつて、死にそうであつた。

百合は、それが辛かつた。で、又頭の中の會話の續きを遣り始めた。それで、恥しいのをごまかしたがつて居た。

何時の間にか百合は、自分で作つた會話の中に這入り込んで、微笑して居た。そして、その笑窪の消えない儘の顏で、眠つて居た。

○

朝も晝も、洗濯婆のお弓が臺所へ來て、御飯を喰べさせて呉れた。幼い百合は、昨夜の夢とも幻ともつかない、父と母との姿を、ちつとも思ひ出さなかつた。夕飯が出來るまで、裏の畑へ出て、譯の解らぬ唄を唱つてゐた。

百合の父は、百合を一歩も外へは出さないように、躾けて居た。外には、品性の卑しい「平民の子」が、餘り澤山居る、と言ふのが、彼の言ひ草であつた。外へちつとも出さないと言ふ事だけで、彼の言ふ「家庭教育」が殆んど、遺憾なく出來る、と信じて居た。彼は、その考へにふさはしいように家の造作を遣つて居た。不幸にして、その家は一寸監獄に似通つて居た。三方は高い黑板塀が繞らしてあつた。ほんの東側だけが、廣い畑に續いて居た。そして、その畑は、隣りの田と境するために、端は、高い石垣が積み上げてあつた。彼は、その構造を至極滿足に思つて居た。近所のどの家からも、一軒ぽつんと離れて居て、全で、お城のようになつて居たから。

百合は、何處の家に、どんな子供が居るのか、ちつとも知らなかつた。誰とも遊ばないで、始終、ひとりに慣れて居た。

今も、高い石垣のとつ端の處に腰を掛けて、兩足をぶらん〳〵させて、遊んで居た。穿いて居た塗り下駄の踵で、かはりばんこに石垣を叩いては、拍子をとつて唱つて居た。

「お菊の幽靈が、ササ、化けて出た、……」

唱ひ乍ら、菜種の畑をずつと越して、向ふ畔の街道を見て居た。

廣い盥を頭に載せた、幾人もの肴賣りの女が、續いて町から歸つて來た。影人形が踊つて居るような足附きをして、忙しげに走つて來る後から、犬が、ふざけて居るような驅け足で追つかけて居た。杜の蔭に建つて居る避病院の白壁は、夕陽をうけて光つて居た。烏が二羽、その赤い屋根で、此方へ向いて、さよならをして居た。その下で、燒ぼつ

杭に繋がれた牛が、うづくまつて寝て居た。

朝に晩に見續けた、この同じ視野を、百合は、飽かずに見守つて居た。それだけが、百合の遊び相手であり、話し相手であつたから——

雨の後の、氣忙しいきれ雲が、杜の彼方から避病院の屋根の方へ、どん〳〵と飛んで行つた。烏が煙がるかも知れない、と百合は心配して居た。(藁屋の隅から昇つて行く煙が、天の方で溜つたら、雲になる。百合は、母にそう聽かされて居た。)

「煙は、酢つぱいような匂がする?」

そう言つて、百合は、烏の方を見た。烏は容色の好くない紺屋の娘のようであつた。眞黒い嘴を、瓦の上へなすり附けては、とぼけた面をして居た。軈て、唯つた一聲、長く鳴いて、飛び立つて了つた。今度は、桐の木のてつぺんに止つて此方を見て居た。

百合は、又、ひよいと、大きな聲で唱ひ初めた。其處は、母屋から、ずつと離れて居た。「喧しい!吠えるな!」と、父に叱られる心配はなかつた。

彼女は、自分の聲を素的に好い、とひとりで決めて居た。誰も褒めた者はなかつたが、それは、誰にも聽かせた事がなかつたからだ、と思つて居た。哀れつぽい聲で頻りに唱つて居た。唱ひ乍ら、少し、頭をかしげて、自分で聽き惚れて居た。眼をつぶつたり、上眼をしたり、頭を振つたり、様々な表情をし乍ら、心をこめて唱つて居た。百合は、まだ、そんな唄を、誰にも教はつた事はなかつた。何時の間にか知ら、覺えて居た。

——父が居ない時、若い母は、娘のような聲で、鼻唄を唱つて居た。

じやぶ〳〵と、盥の中で、しやぼんの泡が音を立てて拍子をとつて居た。母は、唯つた三つか四つの唄を、飽かず繰返して居た。百合は、その時盥の横つちよにしやがんで居た。母の唄に連れて、顏をくしや〳〵にしたり、首を振つたりして居た。母は、それが可笑しかつた。小さい聽手が、側に居て呉れる事は、せめてもの心遣りであつた。內氣な心がだん〳〵と張つて來るような氣がして、知らぬ間に洗濯が濟んで居たりした。

母は、餘り若かつたから、このこまつしやくれた纎娘の心理を敎育する、と言ふ心掛けに乏しかつた。十年も前に流行つた唄を、おどけたのや、淫猥なのやを、好んで唱つて居た。百合は、それを、三遍位聽くと、直ぐ、覺えて了つた。

百合の唄の「種」は、もう一つあつた。それは、門附けをして歩く、旅藝人の「おかれ節」であつた。「おかれ節」は、浮かれ節で、この地方で言ふ浪花節の事であつた。

はしやいだ三味線の音が、街道の遠い方から聞えて來た。その後から、殆んど三十位の騷々しい下駄の音がついて來た。鼻つ垂らしの子僧、赤子の首をがつくりさせた子守、白い埃を冠つた丸髷をぶら〳〵させて居る百姓の女房、白米の附いた針を、髷に刺した儘で飛び出して來た娘、それらの群が、ぞろ〳〵と隨いて來たのであつた。

彼等は、村の端から端まででも、同じ「荒木又右エ門」を聽いて歩いて居た。違つた家の軒に立つ毎に、新らしい好奇心が湧いて來た。出來る事なら、峠を越えて向ふまで、行きたい、と思つて居た。

百合は、格子の細い棧の間へ、鼻の頭を押しつけて、見て居た。何處まで、隨いて歩いてゐても、誰にも叱られない皆を、羨ましい、と思つて居た。つい、後の座敷では、百合の父が頑張つて居た。百合は格子につかまつて、彼の「家庭敎育」の中でもがいて居た。外へ、出る事は、どうしてもあきらめなければならなかつた。

顔中へは白粉を塗たくつても、首が黒くなつて居る女と、角刈の頭に鉢巻きをした男とが、前の古道具屋の店先に立つて、ちやんちやら〱踊り始めた。見る間に、ぐるりへ人垣が出來てしまつた。百合の背伸びも利かない處に、藝人の肩から上が見えて居た。

―はツ！はツ！はーい！はいよう！」と、挑發的な甲高い聲で、女が合の手を打ち、男は顔中眞赤にして、

―あらえー、參るのうお、、、おでムある！」と、呻つて居た。

百合は、見て居る間に、だん〱鼻の頭が痛くなつて來た。それでも見て居たかつた。彼女は、赤い長襦袢を着た女から、深いショックを受けた。丁度、派手好きな都會の娘が、女優を見た時のように――そして、彼等の身の上を羨んだ。

直きに、前の家から、百合のつかまつて居る格子の方へ、藝人達が來やうとした。あとから隨いて來かけた村の人達が、變な、眼くばせをし合つて居た。そして、誰かが、小さい聲で言つた。「その家は駄目でよ。」と、又、皆の聲が同じ事を言つた。そして、藝人達は、行つて了つた。皆も、ぞろ〱とついて行つて了つた。三味線の音がだん〱遠ざかつて行つた。百合は、自分だけが、殘されたのを感じた。が、その悲しみは、直ぐ消えた。百合は、もう見えなくなつた皆の後姿に、赤んべえをしたかつた。三味線はちつとも聽へなくなつた。百合は、殘り惜しさうに、舌なめずりをした。鼻の頭が、赤くなつて居た。彼女は、小さい聲で、この浮かれ節を眞似て居た。

母の流行唄と、おかれ節とが、百合の知つて居る唄の全部であつた。彼女は、たつたそれだけを、矢鱈にくつつけたり、引張つたりして、唱つて居た。話し相手のない處では、唄だけが、百合の小さい、うず〱して居る思想を吐露して居た。卑俗な歌詞に、自分ひとりで、勝手な意味を附して、得意がつて居た。

「わたしや、貴方にほうれんそう、早く嫁菜にしてお呉れ、」
「五でもない、六でない、お方に惚れられて、七八置いてもネー、苦労するウ」
そう言つた唄を、眞面目な顔で唱つて居た。彼女ひとりの胸の中の悲しみを、それに托した積りで居た。
時々、百合のぶら下つた足の側を、蜥蜴が尾を振つて横切つて居た。石垣の間から、頭をちよこんと出して、邊りを窺つて居た。胡麻粒ほどの眼玉が、夕陽の最後の光りをはね返して居た。
百合は、石垣の上に腹這ひになつた。そして、この、小ずるいお友達が、エナメルのやうに光つて居る頭を出すのを、待ち構へて居た。兩手でぴしやんと音を立てて、思ひ切り、脅しつけて遣る積りで居た。もう、唄も止めて居た。が、生憎、いつまで待つても出て來なかつた。
邊りが、急に、暗くなつて居た。菜種の花と、その若い爽が、静かな音を立てて、冷い風を送つて來た。
百合は、耳朶がかじかんで、寒くなつて來たので、立つて家の方へ歸らうと思つた。その時、灰色に暮れた峠の道を提灯を點火した俥が一つ、ゆつくりと上つて行つた。
百合は、その灯で思ひ出した。母の里の春祭に、同じような提灯を點火した俥に乘つて、祖母の家へ行つた事を。
「ばあ様は、今でも、辛子漬を喰ふちやあ、涙を出しよいでるかのう？」
百合は、笑つた。が、その笑は、直ぐ消えた。或、考へが、百合の頭に閃いたのであつた。
もう、烏も、唄も、蜥蜴も、提灯も百合の頭から消えた。母が、里へ歸つて了つたかも知れない、と言ふ惧れで、一杯になつて居た。百合は、半分泣き出して、一散に、母屋の方へ驅けて行つた。
驅け乍ら、顔を上げて、臺所の腰高障子を見た。洋燈の影で、大きな頭がうつゝて居て、頻りに、うつ向いたり、横

向きになつたりして居た。百合は、喜んで、大きな聲を立てた。

「あつ！お出でた！お出でた！」

が、その影法師は、馬鹿に大いようであつた。(母は何時でも、ちんまりとした束髮を結つて居たのだから。)けれども、ひよつと、手拭でも冠つたのだらうか知ら、百合は、疑はしそうに頭を振つた。それに、母なら、直ぐに障子を明けて、

「まあ、百合さん！今まで、何處い行つといでだ？」

と、屹度、聽く筈であつた。それは、母の一つの癖で、つい、鼻つ先きで、悪戯をして居ても、裏から這入つて來れば、決まつて、そう聽くのであつた。

だのに、この影法師は、何とも言はなかつた。

百合は、障子を明けて見た。それは、洗濯婆のお弓であつたので騙まされたような氣がした。お弓が來て居た事を、忘れて居たのが腹が立つた。

「早う、お戻りんされえ、直き飯でムいすけえ、」

お弓は、鈍い聲で言つた。

百合は、その時、歴然と思ひ出した。母が今朝から居なかつた事を。どうして、もつと早く氣附かなかつたのか、と口惜しかつた。もつと、明るい中なら、屹度、母を呼戻しに行けたのに。

「お弓さあ、おかゝ様は、お往にたんじやのう？」

「いいや、おつつけ、お戻りんされやすでよ。」

「そいじやあ、何處へお行きたんじやろうかのう？」

「お父つ樣のお使ひにお行きんされたんじやけえ、」

この時、父の居間から、煙管を金火鉢の緣に叩きつける音が、聽へて來た。二人は、急に沈默つて了つた。

百合は、その煙管の音を知つて居た。それで、父の心を讀む事を知つて居た。何時の間にそんな事を憶へたのか、恐らく、あの男が自分の父だ、と知つた瞬間からであつたらう。

父は、朝から晩まで、自分の居間の同じ場所に坐つて居た。同じ坐蒲團を敷いて、同じ火鉢の前へ。

「女子供には、甘い顏は見せられん。」

そう、彼は口癖のように言つて居た。誰も、彼の笑顏を見た者はなかつた。彼は、何事かを、命令する時以外には、口を利かなかつた。唯、朝から晩まで、長い銀の煙管で、煙草を喫んで居た。

その煙管を叩きつける音は、井戸端までも、時とすると畑の方までも聽へて來た。（家中が、陰氣に沈み返つて居たから。）

母と百合とは、一日中、その音を氣に病み、それに耳を澄して居た。そして、お互に、お互の間だけに解るような、情けない顏を見せた。

ゆつくりと、一つ一つ、聽へて來る時には、彼は、何かしら、上機嫌なのであつた。それは、靜かな、おとなしい音であつた。

然し、彼は、殆んど一日中、何者か何事かに對して、腹を立て通しであつた。で、氣短かに、煙管を叩きつけて居た。小刻みな、高い調子の音が續け樣にした。

母は、洗濯の手を止めて、父の居間の高い窓をちらと見た。百合は又、母のその眼をちらと見た。そして、再び、お互に情けない顔を見合せた。

が、百合は、一度も、父を無情な男だ、と思つた事はなかつた。と言ふのは、彼を、優しい心のある普通の人間と思つた事がなかつたから。

若し、この父が、突然に笑顔をして、

「百合！菓子を遣らうか。」と、言つたとしたら、百合は、吃驚して、泣き出したかも知れない。それは、どんなに氣味の悪い事であつたらうか。

笑はない、口を利かない、一日中、煙管を叩きつけて居る。それが、百合の考へて居る父であつた。そう言ふ風でなくて、他家の父親のように、時々は箒を持つて、庭の隅を掃き廻つたり、口笛を吹いて、子供に小便をさせたり、如何かすると、「鍋の芋が焦げつくぞう！」と言つて女房を呼んだりするような男は、百合は、全く變な氣がした。皆、だらしのない薄野呂に見えた。

それ程、百合は、自分の小さい心の底で、ひそかに彼女の父を理解して居た、又恐らく、愛しても居た。神のように畏敬してさへ居た。だから唯つた一度でも、父を批判した事はなかつた。

今、煙管の音と一緒に、咳拂ひが聽へた。父は、癇癪を起した時に、何時でもそうした。百合は、お弓と母の事を話し合つたのが悪かつたのか、と氣が咎めた。眼の前に、叩きつけられて、へこんだ青銅の火鉢が、ちらと浮んだ。そして、父の青筋の出た額とが。

百合は、聲を細めて言つた。

「お弓さあ、お前は、飯が濟んだら、お往にるのか？」

お弓は、眉を寄せて、聽へない、と言つた。百合は、再び唇を尖らせて同じ事を言つた。父は、餘計な事を饒舌ると毎時叱つたから、父に聽かれない用心を、しなければならないのであつた。お弓は又、聽へない、と言つて頭を振つた。そして、薄あばたの浮いた顏をくづして、呑氣さうに笑つた。

百合は、相手の間伸びのした顏を見て居る間に、腹が立つて來た。で、思ひきり、强い舌打をした。「ちえつ！」と。そして、輕蔑し切つた事を現すために、尚更、唇を尖した。

唯つた七つの小娘が、舌打をした。その時、父の冷笑がその儘、百合の面にのり移つて居るようであつた。

お弓は、とつて五十八で、少し呆けて居たから、百合の舌打を聽かなかつた。彼女は、呑氣な事しか考へない事にして居た。

三度目に百合は言つた。

「お前が、お往にる時に、向ふ土手の茶屋まで、連れてつてお呉れんか？」

小さい疳癪の虫が、百合の臍の下で焦れて居た。

お弓は、やつと解つた、と言つて又笑つた。

「よる夜中、お歩きんされたら、又大眼玉じやろう。」と、孫をからかふような口調で言つた。おだやかな、彼女の眼が、百合の臍の下まで浸み込んで來た。

「そいなら、お前ひとりで、行つとくれるか？」

「行くなあ行きやすが、行つて如何するちゆうこともない、」

「うちのおかゝ様が、俥い乘つてお住にたか如何か、問ふて見とくれえ。」
お弓は、俥むように百合を見た。百合の母が、里へ歸つたのか如何かは、土手の茶屋まで行つて確める必要がなかつた。彼女が今朝、泣き乍ら、此家から追はれたのをお弓は見て居たのであつた。
同じ事が、最早や、三度繰返された。その度に、お弓は飯炊きに呼ばれた。そして、薄暗い押へつけるようた空氣の中で、默々と働いた。其處で、「おいとほしいお内樣」と「おつそろしい旦樣」との間の、だんまりの悲劇を見た。
平安を好む老いた田舍者は、しんから、その空氣を惧れて居た。彼女は、手傳に行きたくなかつた。が、呼びに來られると、如何しても「可厭」と言ふ事が出來なかつた。不可解な威壓が、その家と「おつそろしい旦樣」の聽へない聲の內に含まれて居た。
彼女は、この「旦樣」の煙管の音をとうから知つて居た。その音を聽くと、殘り少い命が、吸ひとられて行くような、思ひがした。如何かして、その音から逃れたい！と、今朝からも考へ詰めて居たのであつた。
その爲めにも、「もう一遍、お內樣がお戻んされるように」しなければならない、と思つて居た。その上に、今は、百合からも賴まれて居た。母親にとり殘された子供の姿が、お弓の萎びた神經を打つた。
もう、茶碗を拭く事も忘れて居た。眼が、淚と眼脂とで、ぼんやりして百合のおかつぱ頭が、二つにも三つにも重なつて、見えた。そうして居る內に、お弓の老いぼれた胸に、淚ぐましい哀感が湧いて來た。
「百合さま。おかゝ様は、今夜晚うなつてから、お戻りんされやすでよ。おとなしう、寢といでんされえ。朝、お起きんされた時にやあ、はあ、戾つてお出でんされるが……」
お弓は、夜の後片附けが濟んだのちに、「おうち様」を迎へに行かう、と同く決心した。そのためには、峠を越えてか

らの二里の街道も、淋しくはない、どの百姓家からも灯が、ちんからちんから、ともつて居るから、彼女は、心の中で獨り言を言つた。

○

とつぷりと、日は暮れて了つた。

百合は、縁側に出て、丸太の柱に、兩手をまいて、背伸びをし乍ら、軒から、向ふの峠を見て居た。月も星もないのに、何處かに、微光が漂つて居た。それでも、もう、峠と森と空とは、鈍い一色に塗り消されそうになつて居た。百合は、その、見えない木炭畫の街道を見ようとした。

彼女は、灯を點火した俥が、坂を下りて來るのを、母が歸つて來るのを待つて居るのであつた。

木炭畫は、だん／＼深い暗色に塗られて行く。時々、竹籔がざわ／＼と鳴つて居た。足の爪先から冷い夜の氣が忍び寄つて來た。仰向いて居る百合の首が、直きに痛くなつて來た。百合は、幾度も寢床へ這入つて行つたり、又出て見たりした。

その度に障子を、兩手で持上げるようにして、明けたてをしなければならなかつた。(父は、未だ、寢て居なかつたから。)

百合は、そうして、根氣よく、提灯の灯が見えるのを待つて居た。夜がだん／＼と更けて行くにつれて、子供の世界にない悲しみが、百合の胸に積まれて行つた。

百合は、最後に、一番長く、暗い森を見て居たが、軈て、諦らめて寢床へ這入つた。

「明日の晩になつたら、お戻りるじやろう。」強いて、そう思つて居た。母の姿が、大きくなつたり、小さくなつたりし

て、百合の頭の中に浮んだ。何時の間にか、百合は、子供らしい深い眠りにおちて行つた。

夜中に、眼が醒めた。何時頃なのか、百合は、小便がしたくなつたのであつた。未だ、眼は半分、眠つて居た。床の中から起き出すと、ぶるつと一つ慄へた。そして、毎時の癖の、啞鈴を構へるような手附をして、ちよこ〳〵と、暗い廊下を驅けて行つた。厠に這入つて居る間に、はつきり、眼が醒めた。

その時が、一番恐ろしい時であつた。足許から、深い壺の中から、背後から、兩側から、世界中のお化けが、這ひ寄つて來るのであつた。百合は、それらのおばけを、自分でつくつて居た。三つ眼小僧、大入道、靑い鬼、赤い鬼、兩手をぶら下げた幽靈、長い舌を卷いて居る大蛇、狐のばけたの、それらを、母の物語りと、繪草紙と、新聞のきれつ端と、それから、百合ひとりの頭の中からと、ありつたけ、引き出して居た。そして、ひとりで慄へて居た。冷いおばけの手が、今にも、まくつて居る尻を撫で廻しそうな氣がしたり、廊下の曲り角で、待ち伏せて居るような氣がしたりした。「幽靈樣!お狐樣!おばけ樣!赤鬼樣!」百合は、夢中になつて、彼等に呼び掛け、その許しを乞ふて居た。體中が凍りつくやうであつた。太陽が耀いて居る間中に犯した、無數の罪が、數へ上げられた。百合は、それを涙を流して後悔した。明日から、虫を殺したり、嘘を吐いたり、つまみ喰ひをしたり、決してしない事を、心から、それらのお化けに誓つて居た。

百合は、眼をつぶつて、闇の中を見まい、とした。すると、つい、眼瞼の上を、冷いお化けの手が撫でて居るような氣がして、尙更恐ろしかつたので又、眼を明けた。廊下の片側は、雨戶と壁とに沿つて居たから、百合は、開いた眼を、其方だけに向けて、寢床へ走らうとした。

と、藪から、畑から、暗い空間から、聽へないお化けの聲が、「此方を見い!此方を見い!」と、凄い聲で呼び掛けて

來た。見えない手が、百合の首を、聲のする方へ、捩ぢ向けるようであつた。其處で、無數の手が摑み掛らうとして居た。

太陽のある間は、其處ら一面、樂しい牧歌が漲つて居たのに今、その同じ場所に、恐ろしいお化けの棲家を見なければならなかつた。毎夜、小便に立つ毎に、この同じ恐怖が、小さい體を縮め上げた。が、彼女は、唯つた一度も、母を呼ばなかつた。その聲を父が聽きつけたら………唯つた一度も、寢小便をしなかつた。朝になつて、父に見出されたら………。百合は、半殺しの目に逢ふのを、よく、知つて居た。父の折檻の凡てを百合は、恐ろしげに見返つた。お化けの姿は、百合の體が、ほんの一足、寢室の敷居に蹈み込んだだけで、一度に消えてなくなつた。同時に、心を締めつけて居た恐怖も消えて行くのであつた。それは、ほんの一瞬間、我慢すれば好かつた。

お化けの方が、父よりも恐ろしくない、百合はしんからそう思つて居た。

百合は、息をはづませて、廊下から驅け込んだ。敷居の際まで、お化けが、おつかけて來た。百合は、力をこめて、ぴしやつと、障子を締めた。障子は、お化けを追立てる爲めに酷い音を立てたが、三寸程、跳ね返つて、又開いた。百合は、狼狽ててそれを締め直した。そして、一つぶるつと慄へた。

最早や、何處にも、お化けの姿は見えなかつた。その時、誰かの聲が、低く、然し歴然と、百合の名を呼んだ。百合の寢床の邊りに、母の白い顔が浮いて居た。母は、歸つて來たのだ！　矢つ張り、お弓が、迎へに行つて呉れたのであらうか。

「おかゝ様、お戻りたのか？」

母は手を振つて、叱つと言つた。(父が、次の間に寝て居た。)沈默つて、百合の手をとつて、側に寄せた。

母の手は冷たかつた。肩も、膝も、しつとりと、濕つて居た。母は又、先の時のように、夜道を歩いて歸つて來れたのだらうか。百合は、母に話したい事が、胸一杯になつて居た。自分が、どんなに母を戀しがつたかを、幾度、峠を見に出たかを。母は泣いて居た。時々、何か言はうとしたが、涙が邪魔をするようであつた。唯、微かな嗚咽をし續け乍ら、百合のおかつぱの頭を搔き上げて居た。

百合は切なかつた。仰向いて、母の顔を見たい、と思つて、顔を上げたとたんに、湯のような母の涙が、ばら〳〵と落ちかかつた。百合は、大人のような忍び泣きを始めた。それは、何と言ふ、甘い涙であつたらう。彼女は、その涙の中で、悲しい母子の邂逅の場を物語りに作つて居た。

泣き乍ら、大好きな江戸歸の會話を頭の中で續けて居た。不思議な事には、憎まれ役に嵌るべき父の姿は、物語りの遠くの方で、小さくなつて居た。恐らく、ひそかに、父を愛して居たであらう百合は、彼女ひとりの物語りの中に於ても、その父を、煙管の音と共に、そつと、見えない處へ隱して了ふのであつた。

百合は、母の濕つた膝の上で、物語りを抱いて寢て居た。

○

陰慘な、同じような日が、幾日も續いた。若い母は、初めての子を生んだ。

雨が降つて居た。赤ん坊は、猫が飢じがつて居るような聲で、泣いて居た。父は、庭の秋海棠が雨に打たれて居るのを、見て居乍ら、

「男の兒か!」

とも、聽かなかつた。そう言ふ無關心を、彼は非常に好んで居た。又、そう言ふ風なのが、如何にも彼らしかつた。

三日目に、彼は初めて、赤ん坊を見た。

偶然に、彼はその座敷を通り掛つたのであつた。その日は、好い日和であつたから、彼は、「カナリヤに水を浴びせて遣らう。」と、思つて、椽側でそれを初めた。三羽許り、濟ませた頃に、雲が出て、太陽が暗くなつて來た。小鳥は、翼や尾の端から、水滴を垂らし乍ら、しよんぼりと、止り木にとまつて居たが、直き、首を翼の中に突込んで、眼をつぶつた。

「寒いのだな。」

父は、暗い空を見上げた。そして、仕事を止めて、自分の居間へ、引返すところであつた。丁度、赤ん坊が、四疊半で、沐浴をして居たので、彼は、ちらと、その奇妙な肉塊を見た。

「彼方で遣れ!」

彼は、顏をしやくつて、妻の產室を指した。そして、自分の居間へ這入つた。

妻は、良人の聲を聽いて、自分が寢て居るのが、氣が咎めた。自分は病氣ではない、起ようと思へば、起きられる。そう思つてひとりで責めて居た。

「お弓さあ、起きた處が、關りはあるまあがのう。」

彼女は、憚るような低い聲で側に居たお弓に話し掛けた。そう言ふ事に依つて少しでも氣を安めたかつた。肥立ちは好かつたので、村のしきたり通りに、七日の名附け日から、彼女は起きて働いた。以前のように、良人の叱咤と罵詈の中でいうろうろして居た。そう言ふ生活が、何を齎らすものか、彼女は考へた事がなかつた。考へれば、悲し

くなる許りであつたから。只、この恐ろしい生活に、自分を縛り付けて居る鎖が、前よりも、もう一本増した事を、歴然と知つた。前には、繼娘の百合が可愛いくて、去り兼ねて居た。今は、もう一人、自分の體から出た赤ん坊が居た。その赤ん坊は、この家と良人とのものであつた。彼女は、只、乳を遣るために、必要だ、と言ふ丈けであつた。彼女は、柱にしがみ附いても、この家に居るだらう、と言ふ事を感じて悲しい氣がした。

若し、誰か居て、彼女の事を、幾度鞭打たれても、尾を振つて來る犬のようだ、と言つたとしたら、彼女は吃驚して相手の顔を見たであらう。而も、一言も返さずに、その儘を承認したであらう。

野良犬でも、宿無し猫でも、彼女は宜かつた。打たれ乍ら、其處に居たかつた。從女は、耳を澄して、鞭が自分の肩に、背に打下される音を聽いた。皮膚が見る間に腫れて行くのを、我れと我が體に見た。そして、泣いた。

それは、一種の快い習慣を生んだ。誰も知らない享樂をもつて、彼女は、その鞭を受けた。それでも兩方の手に、繼娘と赤ん坊とを、抱いて居た。

日はどん／＼と經つて行つた。百合は、赤ん坊をおぶつて呉れるようになつた。極く、偶には、良人も外へ出る事があつた。何處へ、何をしに行くのか、何時歸つて來るのか、解らなかつたけれども、彼女は、一度もそれを聽かなかつた。沈默つて、良人の下駄を揃へて、眼を伏せた儘で、

「お早う、お歸りませえ、」

と、呟くような聲で言つた。

格子戸の隙から、彼のいかつい肩が、ちらちらと見え隠れして居たが、軈て、見えなくなつた。彼女は、その時、心持唇を動かして笑つた。（彼女は、自分が笑つたと言ふ事を知らなかつた。若し、知つて居たなら、假令、ひそかに、良

人が留守になつた事を、喜んだにもせよ、笑ふ事を愼しんだであらうに。）

百合は、母の蔭で、その袂を握つて、ちよこんと立つて居た。彼女も、父が出て行つて了ふのを待つて居たのであつた。二人は、同じように、顏を見合せた。泣いて居るのか、笑つて居るか解らないような顏を。

急に、二人は、潑溂とした姿を、とり戾して、きやつきやつと、聲を擧げてふざけた。赤ん坊を、坐蒲團の上へのつけて、座敷中を引摺り廻した。赤ん坊が、眼を廻して泣く。そして引くり返る。二人は手を打つて、馬鹿のようになつて笑つた。ありつたけの聲を張り上げて、お馴染の唄を唱つた。

可哀そうに、若い母は、唯つた十七であつた。未だ、娘の夢を、半分見殘して居た。赤ん坊は、百合におぶさつて、裏へ出て居た。若い母は、鏡臺を、幾日も投げ出れた儘で、白い埃を冠つて居た鏡臺を、明るい窓際へ持つて出た。そして、自分の、未だ艶々とした紅い頰を寫して見た。彼女は、急にもう一度化粧をして見たい、と言ふ氣が起つた。で、大急ぎで、ひきだしを開けて、鼻の頭に、粉白粉をはたいた。その、兎の足の滑らかな觸感が、彼女の秘められた追憶の扉を叩いた。——祭の夜は、人形芝居の小屋の蔭で、色の白い若い衆が、彼女を待つて居た。毎夜、口笛を吹き乍ら、家の前で、誰かが、彼女を呼んで居た。——が、それらはもうとうに消えて了つた夢であつた。彼女は、狼狽て、鼻の頭をこすつたが、未だ白い粉が、浮いて居た。彼女は、赤くなる程、こすつては、誰かに見られはしないかと、邊りを見廻した。

○

終業の鐘が鳴つた。子供達は海老茶の袍を、ばつたん〳〵させ乍ら、教室を出て、一列に列んだ、

百合はそれらの子供の前に君臨するように、不動の姿勢をとり、級長の威嚴をこめた聲を張り上げて、號令をかけ

た。

「氣を附け！　右へ習へ！」

彼女はその號令を掛けて居る間に、一種の自己催眠にかゝつて居た。自分の地位を極端に誇張して考へて居た。少くともその瞬間には自分が、唯つた八つの女の子だ、と思つた事がなかつた。幼稚な軍國精神と虛榮心と傲慢とが、體中に漲つて居た。

百合は、校門を出ると小さい足を跳ね上げて、馬のように歩いた。歩き乍ら、眞面目になつて考へて居た。何處か、遠い世界の涯の野蠻國を征服する事を、其處の女王になる事を。そして、知らない國の不思議な物語りを、ひとりで考へ耽つて居た。

百合は、それらの空想で、胸が息苦しい程一杯になつて、沈默つてゐる事が出來ないようであつた。この、素晴らしい物語りを、誰かに話して聽かせたかつた。

聽き手は、澤山あつた。學校の歸りには、同級、若しくは一級上位の女の子達が、ぞろ〳〵と隨いて來た。百合を眞中に挾んで、右と左に四五人宛、押し列んで歩いて居た。そのために、ほんの一間半位しかない、田舍の町幅が、丁度、一杯になつて了ふ程に。

百合は、一寸、氣取つて話し出した。その話しは、大抵決まつて居た。勇敢な女王が、凡ての國々を征服して行くと言ふ、お伽噺か、そうでなければ、哀れな母と娘との少女小說であつた。(百合は、どの話しでも、女主人公に自分を擬して居た。)百合は、話し乍ら、頭の中でだん〳〵と、その續きを引伸して行つた。それは、飴細工のように、いくらでも、伸びて行つた。

が、彼女の聽き手等は、非常に騷々しかつた。「それは、誰に聽いたのか、」「何の本で讀んだのか、」とうるさく詮索した。百合は何時も、「東京の伯父さんから貰つた本の中で」と、答へて居た。百合が勝手にでつち上げたのだ、と答へようものなら、誰も聽きたがらないだらう、と言ふ事が解つて居たから。

彼女等は、話しの合間々々で、鄙びた感動詞を盛んに投げて居た。

「まあ、哀れな話しぢやのう！」と。

時々、百合は、態とくど〱と、敍景や說明にこだはつて皆を焦れつたがらせる事を心得て居た。皆は叫んだ。

「そいから、如何なつたんか。早うお話しい！」

百合は、間で話しを止めて、皆の顏を見た。皆、少し、口を明いて、眉を寄せ、頭をかしげて、百合の方を向いて居た。百合は、得意の絶頂に居た。調子づいて、だん〱大きな聲で、話して居た。

一番端に居るものは、もつとよく聽くために、始終、眞ん中の方へせり寄つて來ようとしたので、何時の間にか、二列になつて居たりした。誰も、足の方を氣に掛けるものはなかつたから、矢鱈に、馬の糞を踏みつけたり、後の者が、前の者の下駄につまづいて、危く、轉びそうになつたりした。重い荷車を附けた馬が後から遣つて來ても、誰も道を讓らうとはしなかつたから、馬子は腹を立てて、怒鳴つた。

「危いどう！退きやあがらんかい！」

然し、誰も、その聲を、風が吹く程にも、氣にしなかつた。

軈て、百合の眼に自分の家の黑板塀が見えた。

有頂天の夢は、もう、すつかり消えて了つた。彼女は立留つて、しつかりした、命令するような聲で言つた。

「さよなら！」
誰も、直ぐに返事をするものはなかつた。暫くして、皆、殘り惜しそうに言つた。
「又、明日も同心せとくれえのう、」
「わつちも同心せとくれえのう、」
「そん先きを、お聽かせえのう、」
百合は、それらを、半分聽き流して、ばたばたと走つて行かなければならなかつた。一足、家の敷居に踏み入れると同時に、殆んど本能的な感覺で、父が、家に居るか、如何かを覷つた。得意と自負とが、一遍にけし飛んで行つた。父は居た。百合は悲くなつた。何とも言へない、變に心が締めつけられるようであつた。
父は、何時何十分に學校が退ける、と言ふ事を知つて居た。彼の居間の柱には、煤けた八角時計が掛つて居た。彼はその時まで、針を白眼んで居た。
百合は、友達と話し合つて、うね〳〵と歸つて來た事をしんから後悔した。
もう、唯つた三分、家へ早く歸る事が出來たならば、何にも惜しくない、と、思ひ詰めた。(然し、翌日になると、それをすつかり忘れて、又、皆と連立つて、ぞろ〳〵と歸るのであつた。自分の作つたお伽噺しで、友達をひきつける、と言ふ事の得意さを、忘れる事が出來なかつた。)
「百合！」
家中に響き渡るような、父の怒號が、百合の耳許で、鳴つた。百合は、頭の中一杯で、あらゆる言ひ拔けと、嘘言とを、非常な素早さで、案出しやうとした。(それは、最も合理的で、又、心理的でなければならなかつた。然し、彼女

は、餘り狼狽てて居たために、毎時、最もぶまな遣り方をした。）

が、父は、どんな嘘言でも、殆んど即座に見破つた。彼は、顔中を眞赤にして怒鳴つた。

「馬鹿者奴！　貴樣らに乘せられると、思ひやがるかつ！」

その聲と一緒に固い拳が、百合の頬と肩とに降つて來た。

百合は、もう何も彼も解らなくなつて居た。拳の音が、何處か遠くで、鳴つて居るようであつた。泣聲も出ないのに、涙だけが、眞赤になつた頬を流れた。

母は、臺所の扉を半分、開けたり締めたりして、立つて居た。彼女は、如何して好いのか、解らないのであつた。足が慄へて居た。拳の一つ一つが、丁度、自分の頭上に打下されるような氣がした。彼女は、百合の體を、かばつて遣りたい、と思つてもがいて居た。

が、如何して、猛獸の口から小猫を離す事が出來やう。彼女は、袂で顔を被ふて、泣き乍ら、裏口へ走つて行くより外はなかつた。

百合は、父の亂打のもとに、殆んど、死んで居た。それは、何と言ふ恐ろしい事であつたか。百合はなぐられ乍ら、もう少し、このまゝで居たなら、殺されて了ふだらう、と言ふ事を感じて居た。彼女は、この恐るべき亂打から逃げ出すために、益々巧妙な嘘言を案出した。百合の、物語りを作り出す力が、その嘘を、如何にも眞實らしく見せる事に、手助けをして居た。

極く偶に、それは成功した。百合は躍り上つた。父を甘く欺き了せた、と言ふ事が、嬉しいのではなかつた。當然、降り掛るべき災厄から、宛も、奇蹟のように逃れ出た事が、どんなに〳〵嬉しかつたか。彼女は、その喜びを、如何し

でも胸の中へしまつて置けなかつた。

或日、母に、それを打明けた。そして喜びのためにどき〳〵する兩足を踏みしめて、母の顏を見上げた。彼女は、母にも喜んで貰ひたかつたのであつた。

が、母の朴訥な顏は、悲しげに曇つて、小さい呟くような聲が、言つた。

「そんとな事あ、誰にも話すもんじやあ無いでよ。」と。

百合は、長じて、殆んど三十五歳になるまでも、母のこの時の悲しい顏を忘れ得ないのであつた。母の魂は、啜り泣いて居た。

○

百合は、ぐつすりと眠つて居たが、急に、頭が割れるような打擊を受けた。誰かが、鼠の尾程の彼女のお下げを、ぐいと摑んで持ち上げたので、毛根が、一本一本逆立ちをして、眼も耳も口までも、吊り上げられるような氣がした。

「大方、直きに頭の皮が剝がれて了ふだらう。」

百合が、寢呆けた心の底で、そう感じた時、恐ろしい一つの考へが、電のように閃いた。父が、酒に醉つ拂つて、自分を起して居るのだ！

百合は、もう、起きて坐つて居た。彼女は眠り乍ら坐つて、先づ、洋燈を見た。(それは、油が斷れて居ると見えて、やけに心が突き出て、眞黑い油煙が、どん〳〵上つて居た。)それから、歷然と、凡てのものを見た。父を、父の前のお膳を、フラスコに似た徳利が二本と、盃と、肴の皿とが載つて居る黑塗のお膳を。次に母を、袷の肩が寒そうに、しよんぼりとした母を。

「酒を買ふて來い！　三合で好えのどい！　一升も買ふて來やあがつたら、聽かんどう！」

百合は、袖無しに手を通し乍ら、父の言ふのを聽いて居た。彼は、一時に、一升も買ひ溜めて置きやあしないか、と疑つて居た。彼は三合位宛、三度も四度も、買ひに行かせたり、態と、夜半に、使に出したりする事に依つて、自分の權力の行はれる程度を試さうとして居るかのようであつた。この試驗をするためには、彼は、どんな犧牲をでも厭はないように見えた。彼の眼の前には、いぢけた子供と、馬鹿な女とが居た。彼は、この喰ひたりない犧牲に向つて、挑みかゝつて行つた。

（彼は、思ひ遣りと言ふ事を、ちつともした事がなかつた。彼はそれを鼻の先で、笑つて居た。思ひ遣りとか愛撫とか言ふ事は、只、教育を毒する事にのみ役立つ。女子供には、決して、甘い顏は見せられん。彼は常に、そう言ひ、又そう信じて居た。）

百合は、一升德利の口へ紐きれを附けて、それをぶら下げて出た。母は、門先まで附いて來て、門を外し乍ら小さい聲で、何か言つたが、風が來て、その言葉を渫つて行つたので、百合には、よく聽えなかつた。只、母の蒼い頰に掛つて居る涙が、月の光で見えただけであつた。

兩側の家は、皆、洋燈を消して寢て居た。遠くの方で、時々犬の吠えるのが聽へるだけで、何處も、しんと冷え返つて居た。その、しんとした中を自分の草履の音が、ぺつた、ぺつた、と隨いて來るのが、何となく薄氣味惡くて百合は、幾度も脅かされたように後を振返つた。直ぐ後からは長い、自分の影法師が隨いて來た。蒼白い路の上には、低いのや高い屋根が、へし潰されたような影を、落して居た。ところ〳〵淋れた畑の空地があつて、遠い方から、不氣味な風が吹いて來た。赤い涎掛けをした石地藏が、頭から、蒼白い月の光を浴びて居るのや、狸が化けて出る、と言ふ、眞暗な

藪などが、百合の恐怖心を掻き廻した。藪の奥ではかさ〳〵と、草を分けて獸が這ひ出るような音がして居た。

百合は死んだ氣で歩いて居た。一氣に驅けて了ひたい、とあせつたが、足は、ちつとも前へ進まないようであつた。ぺたつぺたつと、何時までも同じ處を、歩いて居るようであつたり、如何かすると、だんだん後すさりをして行くのではあるまいか、と思はれたりした。うちの裏に居たお化けが、此處まで來て、直ぐ百合の背中を追つかけて居るような氣がしたりした。

酒屋の表は、化物屋敷のように靜かで、重い雨戸が下りて居た。軒にぶら下つてゐる赤い提灯は、一つ眼小僧の眼玉のようで、氣味が惡かつた。

かじかんで、死んだようになつて居る手に德利の紐が、喰込んで居た。百合は片つ方の手に、それを持換へて、雨戸を叩いた。

「酒をお呉れんされ、三浦屋のおつさん！　酒をお呉れんされ、」

自分の涙聲と、戸を叩く音とが、藪を拔けて向ふの山の方へ消えて行つた。店の人達が、よく寢て居るのが悲しかつた。

軈て、微かな返事がした。誰かゞ、とん〳〵と階段を下りて來る音がした。マッチを磨る音がして、パッと明るい灯が、洋燈にともつた。百合は、それを、雨戸の隙から見て、急に、生返つたような氣がした。親切な酒屋の老爺を拜みたいような氣がした。

鈍い音がして、くゞり戸が開いて、月の光で、老爺の顏が半分見えた。

が、その顏は、如何にも不機嫌な佛頂面をして居た。全で、何か、酷く腹を立てて居ると言ふ風な顏であつた。（百合

は、「夜中にお起しして、ほんとうにお氣の毒で、」と言ふ程の世辭を知らなかつた。）

彼は實際、少し機嫌が悪かつた。彼は正直な働き者であつたから、朝早くから夜晩くまで、腰を伸す暇もない程、働いて居た。短い夜の間は、海老のように丸まつて、深い眠りを貪つて居た。彼にとつては、この休息ほど有難いものはなかつた。假令、村長様の御來駕であらうとも、起きようとはしなかつたであらう。

初め、彼は、戸を叩く音を聽いた。

「お百合さまかの！」

傍らの妻は、よく寢て居て返事をしなかつた。彼はマッチをさぐつて、降りて行つた。（百合と、その父との噂は、村中に聽へて居た。誰もその父の事を、半狂人と言つて居た。）可哀そうな娘のために、彼は短い夜を割いたのであつた。だから、彼は力めて、愛想の好い顏をする筈であつた。

然し、彼は、非常に疲れて居て、睡むかつた。起きなければならないのが、何となく、氣に入らなかつたのであつた。

彼は戸の外に立つて居る娘を見た。その頬は、寒さのために、ところまだらに、紫色になり又赫くなつて居た。足袋も穿いて居なかつた。彼は、その時、再び親切な彼れになつて居た。

「寒いのに、早う、お這入りんされ、」

と、優しい聲で言つた。そして、最一度、百合を、頭から足の先まで見下した。

酒を計り乍ら、彼は言つた。

「あんたのお父つ様は、酷い事をおせんされるのう。夜中に、酒を呑むのを、朝まで堪へたちうて、それ位の事が、何

事じやろうか。」

彼は、それを、全で叱るような口調で言ふのであつた。百合は驚いて、彼の顔を見た。彼は、自分が夜中に、よく寝て居た彼を起したのを怒つて居るのであらうか、それとも、父を非難して居るのであらうか。百合は、父のために、何か言はなければならぬ、と思つた。が、何と言つたものであらう。百合はその言葉を探し乍ら老爺の顔を見詰めて居た。

老爺は、ちつとも怒つては居なかつた。

「儂が、此處で立つとるけえ、早うお往にんされ。あんたが、あの角をお廻りんされるまで立つとるけえ、ちつとも、うたてえ事ああありやあせん！」

彼は、勞はるように、そう言つた。

老爺は、月の光の中で、眞黒い棒杙のように、動かずに立つて何時までも見送つて呉れた。

百合は歸る途中で、ふと、彼の叱るような言葉を思ひ出した。何だか、それが、氣になつて仕方がなかつた。百合は一寸、頭を振つた。彼は他家の人で、何にも知らないのだ。自分だけは、よく父を知つて居る。百合は強いてそう思つて、安心しやうとした。

歸りはもう、何にも恐ろしくなかつたから、ゆつくりと、歩いて居た。歩く度に、徳利の底で、酒が、ぴつちやん〱と鳴つた。

父は、未だ呑んで居たが、如何した事か、聲をあげて泣いて居た。

「百合！　貴様は、如何考へる？　俺の事を、如何思ふとる？」

泣き乍ら、彼は、責め立てるやうな調子で言ふのであつた。彼は、そう言ふのであつた。誰も、彼もが、彼を馬鹿にする。「貴様でも、」と、彼は、母の方を向いた。

「貴様でも、へい〳〵吐かすのは、只、俺にどやされるのが、恐ろしいけえ、そう遣つとるんじやろう。心の中じやあ、どいがに、俺を馬鹿にしよるか。」

彼は、握り拳を拵へて、脅しつけるやうに、それを振り廻した。

百合は、父のその顔を見た。何かしら、全で別の人のようであつた。父らしい、大切なものを、取り落したような顔には、如何にも情けない、焦々した様子が出て居た。

百合は、父のそう言ふ顔を見るのは、初めてであつたから、尚更悲しかつた。

「お父つ様！　そんとな事あ、ありあせんけえ、お父つ様！」

百合は、そう言つて、父を慰めて遣りたかつた。が、そんな事を言ふのは、恥しかつた。それに、父のあの恐ろしい狂暴な本性が、何時、眼を覚ますか解らなかつた。

「何をつ！」

屹度、彼は、そう怒鳴り立てるだらう。

「ちよびの癖に、出過ぎた事を吐かすな！」

で、百合は、只、悲しそうな眼をして、父を見守つて居た。

突然、父は、顔を此方へ向けた。

「汝あ、何で、いんま先から、人の面ばつかし見とるのじや！　歌を唱へ、歌を、大けな聲を出さんか！」

百合は、急に、狼狽てて助けを求めるように、母を見た。然し、母も同じような眼で、百合を見た。

父は、再び狂暴になつて來たのであつた。何が一番、彼女等を困らせる事が出來るか、じろ／＼と見廻して居るところであつた。その瞬間に、百合も、母も、すつかり自分を失くして了つて居た。

鞭を振り上げた親方が、眼の前に立つて居た。百合と母とは、猿より外の者ではなかつた。輕業でも、馬鹿囃子でも、可厭と言ふ事は出來ないのを、感じて居た。

百合は、學校で敎はつた軍歌を、悲しい聲で唱ひ初めた。父は、盃をお膳の緣にのせて、赤い眼で、百合を見詰めて居たが、時々、焦れつたそうに叫んだ。

「もつと、大けな聲を出さんか。」

百合は、その度びに聲を張り上げた。その聲は全で、芝居の千松が、雀の唄を唱つて居るようであつた。父は、直き、飽きて來た。そして、今度は、「體操を遣れ！」と、言ひ出した。百合は立つて、自分で號令を掛け、出來るだけ足を上げて、「足踏み」や「前へ進め」を遣つた。足と手が、直ぐに下つて來た。父は、その度びに怒鳴つた。

「もつと、足を上げんかつ！」

それは、全で、仇にものを言つて居るようであつた。その上 彼の體操と言ふのは、西南戰爭の巡羅が遣つたような體操なのであつた。百合は、學校で敎はつたのと、父の言ふ通りなのとを、ちやんぽんに遣らなければならなかつたのだ。

この變な體操や、强いられた唱歌の最中を、若し、隣家の子供や學校の遊び友達などに、唯つた一度でも見附からうものなら、百合は、その場で死んで了ふ事の方を、望んだであらう。彼女は、その事で皆からどんなに馬鹿にせられる

か、解らないのであつた。友達の間で、傲慢に振舞はれない、と言ふのは、百合には、死んだのも同じ事であつたから。

然し、今は夜中で、誰も見て居る者はなかつた。相手は、酔つ拂ひと、自分をすつかりなくして了つた女とだけであつた。百合は只、氣狂ひの鞭から、逃れさへすれば好かつたから、その爲めには、逆立ちでもして見せ度い、と思つて居た。

斯うして、朝まで、様々な藝當を遣つた。(朝になると、父は、酔ひ潰れて寢て了ふのが常であつた。)遣り乍ら、時々、窓の明り障子を見た。長い夜が、一時も早く白んで來るように祈つて居た。

○

夕陽が、白壁一杯に射して居た。壁に沿ふた吊棚には、カナリヤの塒が、幾つも幾つも列んで居た。塒の中は、強い陽をうけて、全で、夜のような眞暗な陰をなして居た。

金網の中で、止り木から止り木へ飛び交ふ小鳥の翼の音や、餌を啄む音が、せはしない騒音を立てて居た。時々、金網にしがみついた、淡紅い趾や一杯に擴げた黄色い翼が、パツと強い陽の中に現はれては、幻燈のように、陰の中へ消えて行つた。幻燈の中からは長閑な囀りが、絶えず、聴へて居た。

母は、引きつつた顔をして、一つ一つの差込蓋を開けて居た。その顔附は、小鳥そのものから湧いて來る、悠長な雰圍氣とはちつとも關係がないようであつた。彼女は、粟粒を入れた白い猪口と、竹の水筒とを、入れて居た。絶えず、差込蓋を開けるとたんに、手の隙から、するつと逃げはしないか、と言ふ恐怖におそはれて居たのであつた。

母は、毎日、朝と晩とに同じ事を繰返して居乍ら、未だ、その恐怖に慣れず、その技に達して居なかつた。塒の前に

來る毎に、新らしい惧れが、背中を走つて、手は絕えず慄へて居た。

百合は、母の跣が、棕梠緒の庭下駄の上に喰ひ込むようになつて、力んで居るのを見て、自分も亦、母と同じ惧れを感じて居た。

二人にとつては、それらの黄色い生物は、魔法遣ひのように、氣味惡いものであつた。魔法遣ひが、愛らしいカナリヤの姿を藉りて現はれて居るのだ、としか思はれなかつた。唯の一度も、「綺麗な、可愛い小鳥だ。」と思つた事がなかつた。

實際、小鳥と彼女等との間には、額に青筋を立てた父が、頑張つて居たのであつた。父の青筋を想像する事なしに、カナリヤを見る事は、出來ないのであつた。

百合は、一つ宛つ、母の手に餌を渡して居た。母は、もうすつかり、それを遣つて了ふところであつた。未だ唯つた一つ、殘つて居たが、其處で母は、前よりも、もつと手を慄はせ、もつと引吊つた顏になつた。

その塒には、美しい捲毛の一番ひが飼つてあつた。羽毛は、染めたような深い黄色をして居、尾は非常に長く、すらりとして、格好の好い、撰粒のカナリヤであつた。父は、それを酷く自慢して居た。彼は、借家を一軒賣つた金で、それを買つたのであつた。彼は、そのカナリヤを出品しては町の共進會で幾度褒狀をもらつたか知れなかつた。

彼は、その一番ひから、好い雛をとつて、親鳥よりも、もつと好いものに育てあげ、玄人共をあつと言はせようと、私かにもくろんで居た。

母も、百合も、その事を彼から聽かされた事はなかつたけれども、よくそれを知つて居た。

その塒は、吊棚の一番端に置いてあつた。其處は、一番、日當りが好く、風通しが好かつたから。が、不幸な事には

其處は、一番逃げ易い場所であつた。

實際、母は、其處に來る毎に、一種の惧れにおそはれない事はなかつた。

「若し、逃げるものなら此處が、一番逃げ易いのに……」と。

そして、其處から、限りなく續いた曠野と青空とを見上げた。そして、彼女は、この忌々しいカナリヤを雀の子を取扱ふような大膽さで取扱ひたい、とあせり乍ら、尙更、慄へて居た。

突然、百合は、母の魂切るような叫聲を聽いた。同時に、母の手許から、黃色い一つの線が、輪を描いて、空に舞ひ上つたのを見た。逃げたのだ！ 百合は、一つ跳び上つて、母と同じ涙聲を上げた。猪口は手から落ちて、水を撒き乍ら、音を立てて轉がつた。母は、棒杙のように、突立つて居た。

その時、最早や、父は知つて居た。叫聲がその居間から起つた。

「端の捲毛を逃かしやあがつたのう！ 外道奴！ 貴樣の命あ、ないどう！」

彼は、もう、椽側に出て居た。

「めすかをすか？」

「めすでムいす。」

「めすう！」

彼は、柱に掴まつて、空を見た。次に、立つて居る母を見た。その眼！ その眼は、一寸位、外に飛び出して居るようであつた。

何か、棒切れが、母の足許に飛んで來た。母は、譯の解らぬ事をわめき乍ら、畑の方へ走り出た。

百合は、その間に、泣き乍ら物置へ驅けて行つた。其處には、そんな時の用意のために、大きな網と、とりもちの附いた長い竿があつた。百合は、網を肩に掛け、竿を引摺つて、母の後を追つた。

母は、石垣の突端の所に立つて居たが、百合を見ると、強いて、落付かうとするやうな聲で、吃り乍ら言つた。

「百合さん！　お前、此處い立つといでえ、おかゝ様は、おとりを連れて來るけえ。」

「居つたのかあ」

「居る。此處に居る。ほら、あの棗の木の一番上をお見い！」

實際、カナリヤは、葉のない、棗の梢に止つて居た。その高い處から、人を小馬鹿にしたように、チ、チ、チ、……と鳴いて居た。脫け出て來た塒の外の廣さに、吃驚したように、或は、これから先の身の振方を考へるように、頻りに、首を動かして居た。

百合は、じつと見て居る内に、そのカナリヤの、小さいけし粒のような眼が、見えるような氣がした。

「俺は、何處へでも、あの藪や墓場を越えて、ずつと向ふの山の方へでも、逃げやうと思へば、今直ぐにでも、逃げられる。」

そう、その眼が、自慢らしく言つて居るようであつた。

實際、小鳥は、今にも飛んで行きそうな身構へを、度々した。百合は、小鳥に向つて、しんから祈るやうな眼をした。（どうぞ、母の來るまで、じつとして居て呉れ、と。）百合の眼は、知らぬ間に、涙で曇つて、小鳥の影が、ぼんやりして來た。百合は、狼狽てゝ眼を拭いては、じつと、枝の間を見詰めて居た。

と、急に、小鳥が翼を擴げたように見えたと思ふとたんにもう、その枝には、居なくなつて居た。百合は、聲を上げ

て、母を呼ばうとした。その時、小鳥は、又、何處からか、低く舞ひ下つた。而も、百合のほんの足許に。

其處には、大根が、まばらに生へ殘つて居た。小鳥は、その青い葉の蔭から、ちよこんと、小さい頭を見せて居るのであつた。百合は、その瞬間ほど、この小鳥を、愛らしい、と思つた事はなかつた。それは、こんなに足許に來て居た。母が、おとりを持つて來さへすれば、直ぐ捕まるだらう。そう言ふ豫想が、百合を有頂天にさせた。彼女は、跳び上りたいのを、じつと堪へて居た。

その中に、この幸福は、そんなに長い間、恐らく、母が戻つて來るまでも保たれないだらう、と言ふ考へで、胸が一杯になつて來た。百合は、惧れに滿ちた眼で、小鳥の頭と、母の來る方とを、かはるがはる見た。

直き、母は來た。

可哀そうに、母は、栗の梢許りを見て居た。百合は、心の中で、地團太を踏んで、「其方じやあない！そつちじやあない！此處、此處。」と叫び度かつたが、聲を出す事が出來なかつた。

然し、母は、直ぐ氣が附いたようであつた。庭下駄を脱いで拔き足で近附いて來て、おとりの鳥籠を、そうつと傍に置いた。

二羽のカナリヤが、籠の竹の目を通して、眼を見合せた時には、お互に、相手を認めたようであつた。そして、何か話し合ふように、チヨツ、チヨツ、と鳴き交した。

母は、そつと粟粒を撒いて遣つた。若し、カナリヤが、それを啄んだら、その隙に、網を伏せる積りで居た。が、氣紛れな二羽の小鳥は、もう、全で、知らん顏をし合つて居た。（勿論、餌なんか欲しくもない、と言つた風で）私は、未だ、一度もこんな仲間を見た事がない。と言つたように、そつぽを向いて居た。そしてあの百合の恐れて居

た、先刻と同じやうな、眼で、高い空を見上げたやうであつた。

母も、同じ事を感じて居た。その捕れのために、彼女はそれより長く辛抱して居られなかつた。彼は酷く狼狽て、百合の手から、網をとるが早いか、ぱつと伏せて了つた。

麻糸の目の中で、黄色い翼が、二三度、ばたばたと藻掻いた。捕れたのだ！母の顔は、輝き、血が漲つて、膨れ出すように見えた。

が、それは、ほんの一瞬間、さう見えただけであつた。網が小さ過ぎたのだ！その縁が、おとりの鳥籠の端に、酷い音を立ててぶつかつたのを、そして、其處に廣い隙間が明いて居たのを、二人は知らなかつた。それ程、二人は逆上せて居た。

カナリヤは、直ぐ、其處から飛び立つた。今度は、遠く遠く向ふの山を目がけて、一つの點となり、軈て、すつかり見えなくなつて了つた。ほんとうにそれは、カナリヤの姿をした魔法遣ひであつた。長く、連れ添つて居た仲間を、置去りにし、百合と母とを、恐ろしい不幸の淵に捨てたまゝで何處か解らぬ方へ飛んで行つて了つたではないか。

陽は、何時の間にか沈んで居た。急に、穴の中にめり込んだような暗さが、二人の廻りを包んだ。

母と娘とは、やつとの事で、其處に立つて居た。小鳥は、空で何處か解らぬ方へ、飛んで行つて了つたのに、これから、何をする事があらう。

母はその時、赤ん坊が臺所の扉に縋つて泣いて居たのをぼんやり思ひ出した。又夕飯の支度をするのが、大變遅れた事をも思ひ出して居た。が、それらは、彼女には、ちつとも關係のない事のようにも思はれた。側らに、百合が居るのも忘れて、とぼ〳〵と、母屋の方へ歩き出した。

百合は、薄く靄の掛つた向ふの山を見乍ら、あんなに澤山の樹の中で、小鳥をめつけるのは、どんなに難しい事だらうと言ふ事を考へて居た。畑の眞中に、母の下駄が脱ぎ捨てた儘になつて居るきりで、母は何時の間にか、見えなくなつて居た。母は何處へ行つたのだらう。百合は下駄を拾ふのを忘れて、臺所の方へ驅けて行つた。

驅け乍ら、百合は、父が氣狂ひのようになつて、母を罵つて居るのを聽いた。

「何い？捕れん？捕れんのに、何せに戻つて來やあがつた？」

母は、父の飛び出た眼を見ないやうに、大きな梅の木の蔭に身を隱して、その蔭から、呟くように言つて居た。

「勝坊が（赤ん坊）泣いと………」

「勝坊がつ？畜生！」

突然、父の軀が、椽側に這ひつくばつたように見えた。彼は、妻を打ちすへて遣りたい欲望に驅られて、高い椽側から、降りやうとしたのであつた。

母は、その氣勢を感じて、未だ、彼が降りても來ないのに、肩をくねらして身を交した。泣聲で、

「そいから、はあ、夕飯が遲うなるけえ、炊かうと思ふて………」

そう言ひ捨てて、裸足の儘で裏道の方へ驅け出した、

「未だ、貴樣は飯を喰ふ氣で居りやあがるか！一遍、飯を喰はんにや、死ぬるちゆうんか！死ね、死ね。餓鬼も一緒に死ね、外道奴！夜が明けても構はん、山中を探して來い。」

母は、良人の聲が逐ひ掛けて來るような氣がした。何處でも、彼の聲の聽へない處へ、逃げ出したい、とでも思ふように、氣狂ひのやうになつて走つて居た。彼女は、もう、小鳥を捕らうと言ふ氣も失くなつて、何も彼も、投げ出した

縋で來たのであつた。

百合は、網と竿と鳥籠とを兩手に持つて、驅け乍ら、母を呼んだ。百合は、息切れがして苦しかつた。何も彼も、其處に投げ出して、へたばつて了ひたかつた。走る度びに、大きな鳥籠の角が、股にあたつたり、足が、それに搦んで、幾度も倒れそうになつたりした。百合は、もう、母の處まで逐ひついてゆく元氣がなかつた。

その時、丁度、母が振り返つて、百合を見た。そして、後戻りをして來た。母は、自分が何も彼も投出して來たのを初めて氣附いた。

「百合さん、お堪ええのう、堪へてお呉れえのう。」

百合は、もう、母を恨んでは居なかつた。母の痛ましい顔を見ると、母の難儀を救ふために、役立ちたいと言ふ思ひに驅られた。好い考へが、ふいと頭に浮んだ。

「おかゝ樣、あの、山ん中い行つてお見んか？カナアリ（彼女は、カナリヤの事をそう言つて居た。）は、暗うなつつら、」

百合は、息切れがして、急には、後が續けられなかつた。「暗うなつつら、眼が、とりめになつて了ふげな。そうすりやあ、何處も眞暗で、目が見えんようになるけえ、いつそう、逃げられんでよ。」

百合は、この事を、ずつと前に、誰かから聽いて居た。鳥は、陽が薄れて來るに隨れて視力がなくなる。朝まで、じつと同じ處で動かずに居ると言ふ事を。

母は裸足で居るけれども、あの杜の小路は、もう落葉が散り敷いて、柔かになつて居るだらうし、又、葉のない樹々の間は、暮方の薄明りでも、すつかり、山の肌まで見えるに違ひないだらう。だから、大して探し廻らなくても、小鳥はめつかる。そして、餘り暗くならない中に、二人は家へ歸つて來る事が出來る。百合は、分別臭い顔をして、母に、

そう話して聴かせた。百合は、その時、若い母と、お友達か何かのような氣で居た

母は、氣のない顔をして居た。只、如何したら好いのか、自分でも解らないで居たから、娘の言ふ通りにして見やう、と思つただけであつた。

二人は歩き出した。

百合は、その路々、母には話す事の出來ない一つの考への間を、往來して居た。若し、カナリヤがめつからない時には、母は、又、先の時のように、里へ歸つて了ふのではあるまいか。自分と、勝坊とを置いて、二度と歸つて來ないのではあるまいか。

この考へは、百合を脅した。彼女は、直ぐ前を歩いて居る母を、度々、全で監視するような眼で見上げた。そして、一人で心の中で言つた。「そんな事はない。母は、この通り自分を連れて、カナリヤを探しに行くところなのだもの、」と。が、百合は、何だか不安であつた。

實際、その時、母は、「もし、鳥が居なかつたら……」と言ふ事を考へて居た。次に、良人の家へ殘して行く、百合と勝坊の事を考へて居た。彼女は、百合ほど子供ではなかつたから、あの廣いの杜中で、小さい、而も唯つた一羽しか居ないカナリヤが、めつからうとは信じて居なかつた。

小川のせせらぎの音が、靜かに暮れて居る畑の方を逼ふて來た。

おとりのカナリヤは、籠の中で揺られて居た。揺られる度びに、盲が杖を探し廻るような、不安な音を立てて居た。

纔て、杜の狹い入口に差し掛つた。母は此處でもう一遍、相談するように、百合を振返つて見た。

百合は、固い表情をして居た。もう、耳を傾けて、杜の中の雜音から、カナリヤの鳴聲を聴き分けようとして居た。

彼女には、他の事は何にも考へられなかつた。山路に散り敷いた落葉が、じつくり濡れて居て、不氣味な事や、細い露が、肩に降つて來る事などを氣にする餘裕がないようであつた。

時々、遠い梢で音がした。丁度、カナリヤがその塒の中で、止り木から止り木へ飛び移つてをるのと同じ音が。百合は、その度びに、あの逃げたカナリヤが、つい其處に居るような氣がして、音のする方へ少し、體を前屈みにさせて眼に力を入れて見て居た。

同じ音が、高い處でも低い處でも、方々でして居た。やつと、その音のありかを突き止めた時には、何か全で違つた小鳥が、騒いで居るのを見た。どれも、呆けた變な羽の色をして居た。恐らく鳥か小雀であつたらう。

百合は、今まで、世の中にはそんな馬鹿げた小鳥が、居るものだ、と言ふ事をちつとも氣にして居なかつた。何て下らない小鳥が、澤山居たものだらう。其等は皆、カナリヤと同じ音を立てて、百合の邪魔をして居た。

母は、二人が、如何にも馬鹿げた事をして居るのに、氣附いて居た。杜は、只、歩いて居るだけで、夜が明けて了ふだらう。何本、こんな大きな樹が、立列んで居るのか、知る事も出來ないのに、それを一本、一本、見上げて行かうと言ふのか、一番、馬鹿げて居るのは、あの氣紛れなカナリヤが、大根の葉の陰から飛び立つた時、如何して、この杜に逃げたと決つて居るだらう。否や、一寸位、此處へ止つたかも知れない。それで、又、遠い遠い方へ飛び去つて了はないものだ、と決つて居るだらうか。

不幸な事には、母が、斯う言ふ事を考へ附いた時、丁度、二人は、もう一つの杜へ這入る岐路に出たところであつた。其處からは、街道へ續いて居る路が、白くうねつて居た。

母は、急に立留つて言つた。

「百合さん！お前は、勝坊の守りをせとくれえ。」

勝坊？勝坊は家に居るのではないか。百合は、ふと、不安になつて母の顔を見上げた。母は、百合の眼を避けるために、遠い空を探ぐるやうな眼付をして又言つた。

「あのカナアリは、この山あ越えて、ずうつと、ばあ樣方い、飛ふで行つたかも知れんのう。」

百合は、それで、母の言ひ度いと思つて居る事を、皆察したけれども、それを、口に出して、聽いて見るのは恐ろしい事であつた。如何かして、母の考へを別の方へ向けたい、と考へて居た。

然し、母は、娘の思つて居る事を氣附かなかつた。自分の決心を動かすまいとするやうに、はつきりとした口調で言つた。

「明日の朝んなつたら、ばあ樣方の背戸口へひよつくり飛ふで來るかも知れんでよ。おかゝ樣は今夜、ばあ樣方い泊つて、皆で、手でをせて貰はふいの。皆で、手分けをすりや、なんぼう、廣い山ちうても、晝前にやあ探されるけえのう。」

百合は、何時の間にか、綱を捨てて、兩手で母の袂を握つて居た。彼女は、母の顔を見上げた。母は、何かしら、百合には解らないような嬉しい事でもあるように、顔が輝いて居るように思はれた。

百合は、急に、母の袂を離した。突然、

「おかゝ樣は、ばあ樣方い、お往にるんじやろう？」

と、全で、母を詰問するような口調で言つた。母には、もう一つ、他の家があるのだ。（百合と勝坊とには、父の居るあの家より外にはない。それだのに、）そして、母は今、その家に歸りたがつて居る。もう、歸る事に決めて居る。

百合は、そう考へて居る中に、今までの優しかつた母が、全で他處の人のように思はれ出した。もう、ちつとでも母の事で悲しんだり泣いたりしたくはなかつた。何かしら、悲壯な思ひが、百合の小さい胸に一杯になつた。若い母は、この小さい繼娘のませた心を、私かに恐れて居た。彼女は、誰にも話されない苦痛を胸に抱いて居た。それを、打明けるのには、百合は餘り子供であつた。それで居て、ひがんだ廻し根性を持つて居た。

母は、このひねくれた子供を說き伏せるために、無駄な努力を續けて、頻りに、樣々な言譯をして居た。

然し、百合はもう、母の言葉を聽いては居なかつた。涙の一杯溜つた眼で、遠い山の方を見て居た。母は、何處へでも自分の好きな處へ行つて了ふと好いんだ！

自轉車を押して、坂を下りて來た男が、二人の方を見て通り過ぎた。

二人は、一寸の間、お互に違つた方を見て、沈默つて居た。

軈て、母は、餘り遲くなると不可ないから、早く歸れ。と言つた。勝坊が泣いて居るだらう。と言つた。

百合は、それでも沈默つて居た。その時、母に對する微かな憎惡が、何處からか芽を出して、百合に、母の好きな處へ行かせようと言ふ決心をさせた。勝坊が泣いて居るだらうから、自分は家へ歸らう。そう、決心すると、もう、悲しくも何ともなかつた。

百合は、この上、母から、慰めの言葉を聽きたくなかつた、それで居て、もう少し母の側に居たなら、泣き出して了ひそうであつたので、烏籠を路端に置くが早いか、一散に、坂をめがけて走つて行つた。泣くのなら、母が見て居ない處でわつと聲を上げて、泣きたかつた。

母は、もう、向ふの方へ坂を下りて行つたか知ら。母は、二度と歸つては來ないのだ。百合は、走り乍ら突然、母の

顔をもう一度見たい、と言ふ思ひに驅られた。何故、自分も、母の後を追つかけて行かなかつただらう。もう、後悔しても、遅いだらうか。

百合は、振返つて見た。

母は未だ、坂の上を（坂路は、一遍、杜の蔭に隠れて、又、その突つ端を廻つて居た。その廻りになつた處は、高い崖になつて居て、白い路が、遠くからも歴然と見えて居た。母は、丁度、其處にさし掛つて居た。）歩いて居た。非常に、急いで歩いて居た。一寸でも立留つたり、百合の方を振返つて見やうとしたりしては居ないようであつた。

百合は、母の白い帶の端が、搖れて居るのを見た。今なら、母を呼び返す事が出來る。恐らく、母は歸つて呉れるだらう。

百合は、大きな聲で母を呼ばうとした。が、百合は呼ばなかつた。彼女の心の底に潜んで居た憎悪が、それをさせなかつた。母には、もつと違つた家がある。母は今、その家へ歸つて居るところなのだ。

涙の干上つた百合の頬を、冷い山風が、漂つて行くように吹いた。百合は、もう、小鳥の事も、父の事も忘れて居た。誰も彼もが、何處か遠くの方へ行つて了つて、自分だけが、眞暗い處へ置去りにされたようであつた。

○

翌日、母の里から、状箱を持つた使が、父の許へ寄越された。百合は、それを知らなかつた。状箱の中には、逃げたカナリヤの賠償金と、短い手紙が入れてあつた。

母は、その時限り、永久に去つて了つたのであつた。

カナリヤと妻とが、一緒に居なくなつても、父は、前と同じように、眉一つ動かさないで、端坐して居た。二人の子供を殘された鰥男と、誰が思ひ得やう。

實際、彼はそう言ふ事で、くよ〳〵して居るように、人から思はれるのを、しんから嫌つて居た。眼の前三尺位の處を、這ひ廻つて居た蝿を二匹、一ときに叩き潰した位にしか、思つて居ない、と言ふ風で居た。

彼は　妻の里からの狀箱を開くと同時に、洗濯婆あのお弓を呼びに遣つた。そして、その日から、家事萬端をお弓にさせる事に決めた。

彼から見ると、お弓は、妻よりも〻つと酷い野呂間で、おまけに、耳が遠かつた。彼は、日に幾度、お弓の曲つた腰に、煙管を叩きつけて遣りたい、と思つたか解らなかつた。が、彼は、そうする事が出來なかつた。（彼女は、妻ではなかつた。）思ひ切り侮蔑したような強い舌打ちをしただけで、我慢をしなければならなかつた。

妻が居なくなつたために、生じた彼の苦痛と言ふのは、只それだけであつた。

斯う言ふ時、彼は、極端にいら〳〵して今にも火が出そうな眼をして、周圍を見廻した。白い齒が、下唇を噛んで居た。彼はその時、唐紙の蔭から、おびえた眼で此方を見て居る百合を探し出した。彼女の眼は、何時でも泣き出すように用意して居るようであつた。彼はその眼を見ると、じつとしては居られなかつた。雨のように降つて來る折檻の音と、百合の悲鳴とが作奏となつて、幼い弟の吠えるような泣聲と混り合ひ、一種言ひ知れない物凄い雜音が、家中に鳴り響いた。父の狂暴な力は、はけ口を見出して、はあ〳〵と喘いで居た。そうした後に、彼はやつと安易な自分の心を、取り戻す事が出來たのであつた。彼は、さうし乍ら自分で、自分の發作の過ぎてゆくのを感じた。娘どもの泣聲の中に、それは、沈んで行つた。

斯うした中でも、百合は、母が歸つて來るだらうと、何處か、心の底で信じて居た。夕方になると、勝坊をおぶつて、裏の石垣の處に行つて、峠を見て居た。

峠を下りて來る人は、皆、母のように見えた。花崗岩が、陽をうけて白く光つて居る、その崖の一番上で、それらの人は、よく腰を下して休んだ。その人が、峠を下り切つて了つたら、ほんとうに母か如何か解る。百合はそう思ひ乍ら、黑い人影を見て居た。皆、呑氣そうに、今上つて來た坂の向ふ側を見て居た。母なら、あんな事はしない。恐らく、ちつとも休んだりはしないで、一番先きに自分を見て呉れるだらう……。

百合は悲しくなつた。峠を下りて來るに隨れて、それらの人は全で違つた姿になつて居た。何か面白そうに笑ひ乍ら歩いて居た。

勝坊は、直きに飽きて、もつと違つた處へ行きたがつた。百合の短い毛を引張つては、むづかり始めた。

百合は、斯うして、毎日峠を見て居た。今日は見えるだらう、今日は見えるだらう、と思つて居た。十日位經つた。

母はもう、歸つては來ないのだ。百合は、はつきりとその事を、信じ始めるようになつた。百合は、その時、ほんとうに母を憎んだ。この憎惡は様々な形となつて、百合の心に、廣い場所を〆めて來た。勝坊の泣聲を聽く度びに燃え上つた。

百合は、決心した。二度とこの石垣の端に立つまい、と。

幸、勝坊は未だ口が利けなかつた。「おかか様!」と呼ぶ事を知らなかつた。この日から、この暗い家の中では、母と言ふ言葉は、永久に、消えて失くなつた。母と呼ばなくなつてから、反對に彼女に對する憎惡が、百合の心の中に、根

深く培れて行つた。凡ての憎しみを二十餘年と言ふ歲月の流れが、洗ひ去つて了ふべき今日でさへも、百合は母の姿を見る。それは、最早や、百合のお河童を撫でて異れた優しい彼女でもなく、カナリヤを逃がした時のおど〳〵した彼女でもない。何處か、他處の男のために、水白粉を溶き、白髮を染めるのに餘念のない、一人の女の淺ましい殘骸を見る。

そして、百合は、その老女の白い横鬢を、手を擧げて打續けて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

母が、居なくなつて後、百合は、自分が父の痱癇の對象にせられて居る、と言ふ悲しい事實を知つた。

彼女は、彼の眼の屆かない處へ、逃げる事許りを考へるようになつた。可愛いい、勝坊も一緒に、彼の手から隱さなければならなかつた。（彼女は、何時の間にか、勝坊の母になつて居た。）で、父が腕を振り上げた時、百合は泣聲を上げて、勝坊をおぶひ乍ら、裏口から脫けて出た。丁度、昔、母がしたのと同じように。

百合は、竹の木戶を押して、一寸立留つた。小さい路は、畑を挾んで、右と左とに分れて居た。一つは峠の方へ、一つは小川の方へ。

百合は、無意識に峠の方を見た。彼女は、その方へ走つて行きたかつた。が、決してそうはしなかつた。反對の方へ、どん〳〵と驅けて行つた。

小川は、少し宛幅が廣くなつて、高いはでの木が植つて居る邊りで、急に左に折れて居た。其處は、一寸した水溜りになつて居て、流れがちつとも動かないで居た。眞似事に拵へたような河原までが出來て居て、上には幅の狹い土橋がかかつて居た。

百合は、何時でも此處まで來ると、ゆつくりと河原に下りて行つた。勝坊は、背中にしがみついて居た。彼は、何時も姉が來て、休む場所を知つて居た。此處まで來ると、彼は足をばたばたさせて嬉しそうにした。百合は、勝坊を背中から下して、膝の上に乘せた。勝坊の足は冷めたくなつて居た。百合はその足を袂で隱すようにして、抱き〆めた。と、しんから、勝坊が可哀そうに思はれて來た。

又、新らしい涙が、湯のように流れた。彼女は、悲しいから泣いて居るのだ、と思つて居たが、彼女は、その悲しみを、頭の中で、ひとりで作つて居たのであつた。ほんとうの悲しさは、百合が走つて來た路々で、少し宛、消えて居た。

この誰も知らない甘い涙が、百合の心を慰めて呉れた。勝坊は、小さい姉の濡れた顔を、不思議そうに見て居た。この不思議な涙は、幼い子供の心にも浸み込んで行くようであつた。勝坊は、何だか悲しそうに見えた。姉の悲しみを、知つて居るようであつた。彼は、姉の袖無しの紐をいぢり乍ら、むづからないで、大人しく抱かれて居た。

白い雲と青い空と、はでの木の痩せた幹とがうつつて居た。それから、岸に生へて居る小さい赤い花を付けた草や、野菊の枯れかけた枝までも。

靜かな風が吹くと、水彩畫の空や草が、細かい波を刻んで搖れた。

水は綺麗に澄んで居てその水彩畫を浮べた儘で、尙、底まで見せて居た。美しい色の丸い小石が、態々敷きでもしたように、一面に沈んで居た。その上を、小さいめだかが五六尾、丁度、おつかけくらをするように尾から尾にくつ附いて泳いで居た。

時々、水上の方から、藁切れや、それから、紅い緒が斷れて了つた小さい下駄の片つ方が、表を向いたり、裏返つた

りして浮いて來た。
そうして見詰めて居る内に、百合は、ふいに、水面と底とが別々に見えて來た。底が、ずつとずつと深い處にあるように見えた。それは、底の知れない、深い深い淵であつたかのように思はれて來た。
突然、この儘、勝坊を抱いて、この深い水の中に沈んで了つたら、と言ふ考へが起つた。彼女は、二度と浮み上る事の出來ない濁流を想像して居た。百合は、その時、誰も知らない物語りの世界に、勝坊を抱いた儘で這入つて居た。うつとりと水面を見て居乍ら、もう、小川を見て居るのではなくて、ずん〳〵と暗い世界の方へ引込まれて行つた。
「勝坊！」
百合は弟を呼んだ。
「姉樣と一緒に死なうのう。」
そう。聲に出して言つた時、百合は、自分のその聲に驚いた。もう、自分は今、ほんとうに死ぬところなのだ。そして、仕返しをして遣るのだ。誰に？父にではない。(自分が死んだとて、父が何を感じよう。彼は、ちつとも感情を持つては居ない。)母に、二人を置去りにして往つて了つた母に、仕返しをして遣らなければならない。勝坊も抱いて死ぬのだ。明日の朝、いや、明日にならない前に、二人の屍が、ぽつかんぽつかん浮いて來る。誰かが、畑から戻つて來かけた久助爺さんでもがめつける。家へ驅け付ける。村中が可哀そうな子供の投身を、色々な噂を交ぜて話し合つて居る。
聽て、母が、恐らく今頃は、あの山の向ふで、お祭の見物をでもして居るだらうその母が、この噂を聽く。母はどんなに泣くだらう。勝坊も死んで了ふんだもの、母は、氣狂ひになつて了ふだらう。
「堪えとくれえ。おかゝ樣が惡かつたけえ、堪えとくれえ。」

二人の墓の前で、彼女はそう叫んで泣くだらう、――

百合は、母の甲高い涙聲を、今、耳の側で聽いたやうな氣がした。

彼女は、決心をするために、弟を抱き締めて、もう一遍呟いた。

「姉樣と一緒に、勝坊も死んで了ふのでよ。勝坊！」

そして、悲しい物語りの續きを考へて居た。――

姉と小さい弟とは、今、深い淵に立つて、眞暗な水面を見詰めて居る。（弟は、小さいけれども、全で大人のやうに口が利けるのだ。）二人は、最後の時を、話し合つて居る。

「坊や、もう、母ちやんなんか居なくたつて好いのよ、二人は、直き死んで了ふんだもの。死んで逝るのよ。さうすれば、いくら母ちやんだつて、…………」

「可哀だよ。僕、死にたくないよ。歸らうよ。歸らうよう。母ちやんの居る方へ行きたいよう。」

「好い子だから、そんな馬鹿な事を言ふもんぢやあないわ。死んで了つたら、もう、誰も二人を打つたり叩いたりする者はなくなるし……」

「可哀だあ、可哀だあ。」

「じやあ、姉ちやんだけで死んぢまつても好いの？それでも、坊やは、ひとりでお家に歸りたいの？」

「ううん、姉ちやんも一緒でなくちやあ駄目だあ、歸りたいよう。」

「坊やは、意氣地がないのねえ。」

「だつて姉ちやん！死んぢまつたら、あのお墓ん中い……」

お墓？百合は、はつとして眼を上げた。藪の向ふに墓地があつて、その墓地の小さいのや大きいのやの墓石が、一どきにくるつと、此方へ向いたようであつた。(勝坊は、とうに膝の上で寝て居た。)何處かの新墓に、白張提灯が幾本も立ててあつて、風もないのにゆら〳〵と揺れ出したようであつた。

死んだら、あの墓の下に埋められる。百合はぞつとした。自分はもう、何にもする事が出來なくなるのだ。お正月が來て、皆は羽子を突くだらう。學校では、式があつてお菓子を呉れるだらう。然し、自分はもう、何にも知らない。何も彼も、自分には關係がなくなるのだ。それ許りではない。自分の死んで了つたあとには、隣りの三毛猫でも、學校の前のあの汚い泥棒犬でも、皆、生きて居るのだ。何處でも、彼等の好きな處を走り廻り、好きなものを喰べる事が出來る。直ぐ眼の前の竹籔でも、今とちつとも違はないで、風の吹くまゝに音を立てて居るだらう。それだのに、自分だけは死んで居るのだ。——

百合は、初めて死をはつきり見た。彼女は、自分の考へにおびえ上つた。足の爪先きが冷くなつて居た。百合は急に、お弓の顔を思ひ出した。その時ほど、彼女の眼脂の溜つたしなびた眼を、懐しく思つた事はなかつた。

もう、暖い夕飯が出來て、お弓が、畑の端に出て、二人を呼んで居るであらう。百合は急いで立上つた。自分の家から、灯がちらちらともつて居るのを見た。彼女は、勝坊をおぶつて、墓場の方を見ないように、一生懸命に走つて行つた。

○

外は冷い雨になつて居た。百合は教室から出て、石段の處で、立つて空を見た。直きに晴れて來そうでもなかつたの

で、暫く、如何しようか、と迷つて居た。

ぬかるみは、粘土をこね返したようになつて、雨が落ちる度びに、ぺちや〳〵と泥土をはね上げて居た。泥路は見ただけでも冷めたそうであつた。子供達は誰も裸足で、この泥路を踏み出さうとするものはなく、草履のものは、草履のまゝで、ぺちや〳〵遣つて居た。それを却つて面白がつて、ふざけて歸つて行つた。頭から、風呂敷を冠つて、驅け出して行く者もあつた。

下駄箱の處で、子供達の母や姉らしい人達が、待つて居た。皆、手に雨傘と高下駄とを持つて居た。百合は其處で、何時も晴雨の時に見る光景に出逢つた。が、それらの雨傘も下駄も、彼女にはちつとも關係がなかつた。

百合は草履を藁切れに通して手に提げ褄を端折つて、裸足になりぬかるみの中へ、二三歩踏み込んだ。その時、父の顏がちらと眼の前をかすめて過ぎた。

——彼は、常に言つて居た。人間の體は出來るだけ苦しめて置かなければならない。と、百合は、この言葉が、どんな時にあてはまるのか、父流に解釋する事を知つて居た。草履が、泥土と汚水とで明日の朝はもう役に立たなくなつて了ふ事よりも、足を、少し許り苦める、と言ふ事の方を撰ぶべきであつた。そうした爲めに、足が腐つて了ふと言ふ事は決してない。百合は、父がそう言ふであらうと言ふ事まで、知つて居たそれに、路は凍つて居る、と言ふ程ではない。只、少し許り冷めたい雨で、ぬかるんで居る、と言ふだけなのだ。——

百合は歩き出した。

然し、何と言ふ冷い雨であらう。足の裏から、骨に滲み込んで來るようであつた。彼女は、悲しい眼付をして幾度も雨を見あげた。

一人の女の子が、百合を追ひ過して行つた。それは、何時も、百合のお伽話しをせがむ連中の一人であつた。今日に限つて、全で知らん顔をして行つて了つた。彼女は、油の香がぷんとする新しい雨傘をさし、足袋を穿き、爪革の附いた高下駄を引摺つて歩いて居た。

來る人も來る人も、百合の赤くなつた足を見て行くようであつた。態と、そうして行くようであつた。誰も、

「やれ、冷やからうに、」

と言つた。そう言はたい者は、少し馬鹿にしたような眼付で、見て通つた。

百合は、こんなにして、憐れまれるのが情けなかつた。誰にも見られたくなかつたから出來るだけ人通りの少い、間道を撰つて歩いて居た。

其の中に、ちつとも冷めたく感じないようになり、足の裏が、ぽつぽと燃えて居るようになつた。冷い土を踏んで居る、と言ふ事が、全で解らなくなつて了つた。

そこで百合は、他の事を考へ初めた。

これから、十日餘りも續くと言ふ春休みの事を考へた。彼女はちつとも嬉しくはなかつた。先生がそう言つた時に、百合は吃驚した。友達は皆、手を叩いて喜んで居た。そして櫻の花が咲いたら、自轉車競爭を見に行くのだ、と話し合つて居た。何處で、櫻の花が咲くと言ふのだらう。それが、何で、面白い事があらう。百合は、一日中、暗の家の中に居なければならないのだ。

百合は、學校へ出るようになつてから、初めて、自分の家の外を見た。其所でも空氣があり、もつと違つた世界がある事を知つた。それは、どんなに面白い、不思議な世界であつたらう。百合は飽かずに眺めた。學校へ出ると言ふ事は、

その世界を見るための、唯つた一つの口實であつたのだ。
それが、明日から休みになると言ふのだ。百合は、ちつとも外へは出られなくなるだらう。彼女は、うつとうしい氣になつた。
だが、先生は、明日は父を連れて來い。と言つた。今日、自分丈けを呼んで、そう言つたのだ。百合は、明日、郡役所の偉いお役人から、御褒美を貰ふのだらう、と。
然し、それが、如何したと言ふのだらう。何て詰らない事だらう。父にその事を話したら、彼が、唯つた一言でも褒める、と言ふのか。父は、何時ものように、あの恐ろしい眼で一寸、自分の顏を見るだけだらう。
百合は、その時、突然、母を思ひ出した。母はもう、居ないのだ。母が居たら……、百合は狼狽てて、その考へを追ひ遣つた。
雨は、何時の間にか上つて居た。勝坊が、家の格子に摑まつて、往來を見て居るのが見えた。彼は姉が歸つて來るのを何時でも、斯うして待つて居た。

翌朝。
百合は生れて初めて、父と一緒に往來を歩いたのであつた。彼は、長い袴を穿いて表へ出てから、長い間立つて居た。百合は、不思議な氣がして、父の後姿を見て居た。突然、父は家の方へ向いて怒鳴つた。
「百合！　何を愚圖々々しよるかつ！」
百合は、それで初めて、父が自分を待つて居るのだ、と言ふ事を知つた。父は學校へ行くのであらうか、何と言ふ不

思議な事であらう。

百合は、そう思ひ乍ら、父の後から隨いて行つた。父は、時々立留つた。

「もつと早う歩け！俺のへりい隨いて來い。」と幾度も云つた。百合は、その度びに走らなければならなかつた。餘り、父の側にくつ附き過ぎて、父の下駄に、可厭つて言ふ程、足をぶつつけたりした。

が、百合は、今、足の事も友達の事も、側を通る馬車の事も考へては居なかつた。只、不思議な父を見て居た。その事で、頭が一杯になつて居た。

町角で、急に父は立留つた。向ふから、彼と同じ位な年格好の男が、氣忙しく歩いて來た。父は、廣い肩を張つて、通りの眞中に、立ちはだかつて居た。その男が、眞直ぐに歩いて來るのを、態と、邪魔でもするように、そして、いきなり、大きな聲で話し掛けた。

「やあ、今日は何處へお行んされる？」

そう聽き乍ら、彼は、相手の言葉を待つては居なかつた。大急ぎで、自分ひとりが言つた。自分は今、學校へ行く處だ。今日は娘が（父はその時、側に立つて居た百合の肩を引張るやうにした。百合は、呆れて父を見た。彼は未だ酔つ拂つて居るのか知ら？）郡役所から御褒美を貰ふので、是非出なければならない。自分は、今日大變忙しいのだ。だが、お上のお言ひつけだから仕方がない。

と、彼は、総の方を、如何にも迷惑だと言ふ風に言つた。百合は、相手の男が、この嘘を知つたに違ひない、と思つた。父のために、顔が赤くなるようであつた。百合は、向ふへ向いて、立つて居た。

相手の男は、百合の名譽を祝つて呉れた。「何ちゆうても、お樂しみでムいすてえのう。」

と言つて、笑ひ乍ら立去つた。

父は、それから十歩許り來た處で、獨り言を言つた。

「あの男は、ちつと呆けとる、」

その時、父が唇をゆるめて、少し笑つたように見えた。いや、彼は、笑つたのではないかも知れない。彼は、もう、次の瞬間には前と同じように氣難しい顏をして、眞直ぐに前を見て歩いて居た。

學校までの殆んど半里位の路の間に、百合は何度立留らなければならなかつたであらう、父は、殆んど一町毎に、誰か知り人に出逢つたから。そして、最初の男と同じような問答を繰返して居た。百合は父が、家の外でこんなに澤山の知り人を持つて居るのと、彼の愛想の好いのとに吃驚して居た。彼は、度々、百合を振返つては、

「もちつと、此方い寄つて步け！」

と言つた。

二人は、一時間位掛つて、やつと學校まで來た。父は、式が始まるまで、何處かに行つて居た。

鐘が鳴つて、式が始まつた。褒狀が讀み上げられ、聽て、百合の名が呼ばれた。彼女が、郡役所のお役人の前へ呼び出される時が來た。彼女は今、褒美を貰ふのだ。

昨日までは、百合の心に、何の波も起さなかつたこの事が、今朝は、どんなに耀かしいものに見えたであらう。講堂中には、ぎつしりと人の頭が詰つて居た。それらの頭が、皆自分の名譽を見るからなのか。否や、そんな事が、何であらう。只、今は、あの父が、あんなにまで、自慢に思つて居るではないか……。

百合は、自分の名が、讀み上げられて居るのを聽いた。然し、父は？父は何處に居るんだらう。何をして居るんだら

う、今、自分はお役人の前へ出る處だのに。——

百合は、三四歩前へ進んだ。足が、木の葉のように慄へた。彼女は、お役人の手から、何か重い箱を渡された。百合は、そろ〳〵と後戻りをし初めた。——だが、今、父は何處で何をして居るのだらう、

その時、突然、講堂の一番後ろの隅から、窓ガラスが音を立てて鳴る程な、聲が起つた。「百合！その箱を此方い持つて來い。おとつ様が持つとつて遣る！」

百合は、大方で箱をとり落すところであつた。一寸の間、眼の前が眞暗になつたようであつた。父が、自分に言つて居る聲であつた。而も、酷く醉つて居る聲であつた。——父は、何處で酒を呑んで來たのであらう。——醉つ拂ひの大聲は、靜肅な式場にふさはしくない騷音を、捲き起すのに充分であつた。何千と言ふ眼が、一どきにその方へ向けられた。それらの眼は、直ぐ、箱を捧げた儘で泣き出しそうになつて居る百合の上に戻つて來た。

皆は、其處に、傍若無人な醉漢を見た。そして、彼が、百合の父であるのを見た。然し、誰も一言も言ひ出すものはなかつた。それ程、皆は驚かされて居た。

斯うした騷擾は父の望んで居たところであつた。彼は、この名譽ある子供が、自分の娘である、と言ふ事を、この騷擾の中で凡ての人間に知らせたかつたのだ。彼は、この冒險をなし遂げる爲めに、何處かで、酒を呑んで來た。——

彼は、一人殘らずの人間から、自分を認めて貰はふとするように、群衆の眼を浴び乍ら、ぐん〳〵と眞中に歩いて來た。其處で、もう一度、

「その箱を此方い持つて來い！」

と、怒鳴つて居た。

百合は、漸く自分に返つて居た。彼女は先生の方を見た。醉つ拂つて居る父を許して呉れるように、又、その箱を、父の方へ持つて行つたものか如何かを、聽くように。

が、父は、もう彼女の前に來て居た。そして、ためらつて居る百合の手から、箱をひつたくつて、悠々と講堂を出て行つた。

俄かに、割れるような喧騒が起つて來た。皆、口々に、醉漢を罵つて居るようであつた。百合は、自分も一緒に、非難せられて居るのを感じて非常に恥しかつた。

が、彼女は、父の心を、初めて見たような氣がした。彼女は、父を少しでも非難したくなかつた。彼は、彼女を愛して居たのだ。彼はあの箱を提げて、方々を見せ歩いて居るだらう。

その夜更け、殆んど明け方になつて、父は歸つて來た。箱は壞れて、中にはもう何にも這入つては居なかつた。彼は、ぐでぐでに醉つて居た。羽織の袖は、木の股に態々引掛けでもしたように、酷く裂けて居た。彼は、玄關に這ひつくばつて、譯の辨らぬ唄を唱つて居た。

朝。百合は、其處に突伏して寢て居る彼を見出した。その時、百合が父を見た眼は、全で違つて居た。

○

修業式の日、父があんなに迄、喜んだ、と言ふ事は、百合には、不思議で堪らない事であつた。

父はもう、その時から、如何かして居たのかも知れなかつた。彼は、それから直きに、病を得て、床に就くようになつたから。

何時の頃からか、彼は、長い間、床の中から起きて來ないようになつて居た。如何かすると一日中、出て來ない事もあつた。軈て、ちつとも床を離れないようになつた。

お弓と百合とは、やつとその頃になつて氣が附いた。彼は、病氣なのかも知れない。と、(彼でも、病氣になる事があらうとは、二人には想像せられない事であつたから。)

彼は、自分の體の苦痛を、誰にも訴へなかつたから、病氣にしても、何處が悪いのか、誰も知つて居るものはなかつた。

それで居て、誰も、

「何處か、お鹽梅が悪うムいすのかあ?」

と、聽き得る者はなかつた。お弓も百合も、彼から命令せられた事はあつた。唯の一度でも、彼に何かを尋ねた事があつたらうか。

百合は、次の間に居た。父の病室は、しんとして居た。(煙管の音も、もうとうから聽へなくなつて居た。父の聲さへも、百合は何日、聽かなかつたらう。)父はよく寢て居た。百合は、父が寢て居る間に、彼の顏をしつかり見たいと思つた。

で、彼女はそつと唐紙を開けた。そして彼の枕許の方へ忍び足で進んで行つた。父が、若しひよつと起きて居たのであつたら、……百合はそれを惧れて居た。彼は今、病氣で寢て居る。そう思ふのは、只自分だけが、思つて居るのかも知れない。父は、病氣ではなくて、以前のように、何時突發するのか解らない、狂暴な心を抱いて居るのかも知れない。百合は、そう言ふ父が、眼を醒ますのを恐れた。で、何か、枕許にある大事な物を盜みに這入りでもしたように、

抜き足で近附いて來た。——

然し、父は、昔とは全で違つて居た。顏は蒼いと言ふよりも、變に黄色くなつて居た。鬚は生へて居るのではなくて、黄色な皮膚の上へ、針金を突つ立てたようになつて居た。額や、耳の後には、幾日となく溜つた垢が、かさぶたのようになつて居た。眼は、酷く落ち込んで居た。その落ち込んだ中に、眼球の大きさだけ、ぴよこん、と飛び出て居た。その上に、たるんだ眼瞼が、何時でもひん剝かれるように、只、のつかつて居た。

百合は、父の閉ぢた眼を見て居た。突然、父は眼を見開いた。百合は、思はず、一足後へ退いた。が、父は、じつと百合を見詰めて居乍ら、何處を見て居るのか解らないような眼をして居た。何と言ふ大きな、そして艶のない眼をして居るのだらう。

百合の心には、恐怖の代りに、何とも言はれない哀憐の情が湧いて來た。

「百合、」

父は、弱い聲で言つた。

「ちつと、せなを擦つて呉れえ。」

百合は、父の聲の調子を感じた。その聲はもう、命令して居るのではなかつた。殆んど、哀願して居るような弱さが含まれて居た。以前、煙管を叩きつけて居た頃のあの父の姿が、何處に見られよう。

百合は、父の骨許りになつた背中を擦り乍ら、涙ぐんで居た。父は、背中が痛むのか知ら、それとも何處か外の處だらうか。今なら父に聽いても好いだらう。父は、何處が惡いか、話して呉れるだらう。父は、言つて呉れるだらうか。

百合はその時、父に醫者を勸めよう、と思ひ付いた。醫者を呼びさへすれば、父に聽く事も何にも要らない。醫者は、

何處が惡いか、直ぐ知らせて吳れるだらう。今まで、如何して父にこの事を話さなかつたらう。

百合は、やつとの思ひで、父に話しかけた。彼は、直ぐには返事をしなかつた。何だか考へて居るようであつた。

父は、酷く氣が弱くなつて居たから幼い者の眞情に、心に打たれて居た。

だが、彼は、村の若い醫者を、ちつとも信じる氣にはなれなかつた。

その醫者の親爺は、何處からか流れて來た旅の乞食繪師であつた。そう言ふ理由で、彼は、その醫者を輕蔑して居た。家の前を俥に乘つて、醫者は往つたり來たりした。彼は、その度に、この成上り者を白眼んで居た。彼には、若い醫者が、全で空を向いて嘯いて居るように見えた。（この村の中に、彼よりも偉い者が居ると言ふ事を、彼は、考へる事が出來なかつた。）

こんな藪醫者の藥で、自分の病氣が治る、と言ふのは、如何にも滑稽な事であつた。（彼は、自分の病氣でさへも、普通の人間のよりも違つた偉いもののように考へて居た。）それに、彼は、そんなにまでして治りたがる、と言ふのを嫌がつて居た。何時、死が來ても驚かない、と言ふ風を裝ひ度がつて居た。それが好い氣持ちなのであつた。

然し、今、百合の言葉を拒む事が出來なかつた。彼は、醫者を呼んで來い、と言つた。——彼奴が、俺の病氣を治すなんて言ふ事があつて堪るものか。その代り、俺を殺す事も出來やあしないのだ。何方にしても、俺は、彼奴の拵へた藥なんか、只、枕許へ飾つて置いて、眼で見るだけなのだ。——彼は、未だ心の中では空威張を遣つて、自分を慰めて居た。

醫者が呼ばれて、父の病室から出て來た時、百合は、全で、大人がするような心配顏をして、父の容態を聽いた。若い醫者の言ふには、父の體中には、小さな〳〵虫がうじ〳〵して居て、その虫か、父の體の血液を殆んど吸つて了つた

から、外からなくなつて了つた血を補はなければ、父はよくならないだらう。と言ふのであつた。

彼は、よく磨いた靴を穿き乍ら、その話しをして、玄關を出て行つた。俥の上から、何にも可笑しくもないのに、笑つて挨拶をして居た。百合は、醫者の笑顏を見て、妙な氣がした。父の體は、血が失くなつたのだ。

ふと、或事が、百合の頭に浮んだ。彼女はずつと前に、それを、新聞の切端で讀んだような氣がした。「伊豆の孝女」と言ふ話しであつた。

孝女の母は、もう到底も助からない、と思はれて居た時、孝女が、自分の太股の肉を斷つて、母の體に與へたのであつた。死ぬ筈であつた母の命は助かつて、彼女はだん〳〵達者になつた。――と、言ふのであつた。

百合は、その母親の病氣が、何であつたか知らなかつた。父は？父はそれと同じ病氣ではないだらう。だが、血を外から補へば治る、と言ふのだ。その血を、自分は何處か體を斷つて、父の爲めに絞らう。

百合は、悲壯な決心をした。伊豆の孝女にも劣らぬ自分の孝行な振舞ひをひとりで思ひ浮べて、ひとりで感激して居た。

彼女は、斯う言ふ暗示を與へて呉れた醫者に感謝した。この計畫を誰にも話したくなかつた。百合は、もう、大變に幸福であつた。父は治つたのも同じであつたから。

翌日、醫者が來た時、百合は、頰をほてらせて、彼にこの事を打明けた。

が、彼はちつとも感動しなかつた。昨日、俥の上で笑つたのと同じように笑ひ乍ら、百合の顏を見て居た。百合は、彼が自分を子供だと思つて、馬鹿にして居るのを悟つた。彼は、それは、仲々出來ない事だ。そんな馬鹿げた事を考へるものではない。と言ふのであつた。

百合はそれを聽いて、失望した。彼に欺されたようで忌々しかつた。百合も又、彼を馬鹿にして遣りたい、と言ふ念に驅られた。――彼は、その手術が恐ろしいのだ。彼は未熟で、それが出來ないのだ。全で、知つても居ないのだ。そうだ、彼は、何にも知つては居ないのだ。父の體の中に、小さい虫が居るなんて、そんな馬鹿な事が。いや、父は、もつと、違つた病氣なのだ。誰も知らないような病氣になつて居るのだ。父は、何處か、誰も知らない處が痛くて、苦しんで居るのだ。――

百合は、父が、次第々々に衰へて行くのが、眼に見えるようであつた。父は死ぬだらう。死ぬのだ。それから、あの葬場！百合は、慄へ上つた。一時も、じつとしては居られなかつた。知らない間に、父の體がずん〳〵蝕まれてゆくような氣がした。

百合は、その時、初めてお弓を振返つて見た。如何したら好いか、と泣き乍ら相談した。お弓は、落付いて居た。「お醫者様が、お見離しんされた病氣は、妙見様でなけらにや、到底も治らん。」と、眞面目な顔で言つた。そして、「儂がそう言ふた時に、直ぐ信心をお初めんされたら、はあ、今頃は治つて起きられるようになつといでんされるが……」と、言つた。

實際、お弓は、度々その事で、百合と言ひ爭つたのであつた。百合は毎時、學校で教はつた「迷信」と言ふ言葉で、この老婆を押へ付けて了つたのであつた。

が、今は、お弓の言つた事が、皆、ほんとうであつたような氣がした。そして、もう取返しはつかないだらう、と心配して居た。全で、お弓が妙見様ででもあるかのように、頻りに彼女に詫びて居た。

その日から、百合は、日參をする事を、固く決心したのであつた。

雨が降つたり、風が吹いたりした。そうでなくても、妙見様の境内は、古い杉の枝がおつ冠さつて、眞暗であつた。村端れから、大分離れて居て、めつたにお詣りをするものはなかつた、

二つ向ひ合つて金歯を剝いて居る唐獅子、苔の生へた高い石段、吃驚するような音を出す振鈴、百合は日參して居る中に、それらのものに、すつかり馴染になつて居た。

百合は、鈴の下にしやがんで、初めは只「父の病氣が治るように、」と言つて拜んで居た。そのうちにそれだけでは、何だか餘り早く濟んで了ふような氣がしたから、「なん妙法蓮げん經」とお唱へを言ひ添へて拜んで居た。そう、お唱へをしながら、指を折つては、十遍になる迄數へて見たりした。そうすると、大分、念を入れて拜んだようで、安心であつた。

歸り路には、百合は大變足が輕かつた。父の病氣は、もう大變快くなつて居るだらう。と思つて急いで、父の病床に這入つて見たが、父は、前の日よりも、その日の朝よりも、少し惡くなつたようであつた。そして、だん／＼と衰へて行くようであつた。

百合は悲しかつた。お唱へが十遍では、少な過ぎるのだ、と氣が附いた。そこで、二十遍にした。三十遍にした。五十遍に、軈て百遍に。

百遍唱へる間に、線香の鼻をくすぐるような匂が、狹い拜殿に立ちこめて居た。百合は、數を間違へない爲めに、兩方の掌の指を擴げて、馬鹿のような顏をして、一心に遣つて居た。——百遍、それは、何と長い、退屈な數であつたらう。百合は、せめて八十位で止めて了ひたかつた。

が、暗い格子の中で、眼には見えないが、氣味の惡い「妙見樣」の幽靈が、此方を見て居るようであつた。

百合は、自分の不信心に氣が咎めた。その爲めに、神の怒りを買つて、父が治らないのだ、と思つて、悲しかつた。

百合は、その内に、妙見樣だけを頼つて居るのでは、何となく、不安で心許ない氣がして來た。彼女は、お大師樣へもお詣りしやうと決心した。

それは、妙見樣よりもずつと小さいお堂に祭つてあつた。こんな、小つぽけなお堂でも、御利益があるものか如何か心配であつたが、お弓は、お堂は小さくても大きくても同じ事だ、と敎へて呉れた。

此處でも百合は、だん〳〵とお唱への數を增して行つた。一體、幾つ數へるのが一番好いのか知ら、百遍よりも、もつと澤山が好いのか知ら、色々な事を考へて數へて居る内に、百合は、幾つまで數へたのか、解らなくなつて了ふ事が度々あつた。そんな時、好い加減に遣つて置くと、若し數が足りないのではなかつたか、と、夜寢てからも、それが氣に掛つた。だから、間で解らなくなつたら、いつそ初めから又遣り直すのが、一番安心だ、と思ふようになつた。

お唱へが餘り多過ぎる、と言ふ事はあるまい、多ければ多い程、御利益がある。百合は、そう思つて居た。

その中に、父はだん〳〵衰へて行くように見えた。もう、何を呉れとも、背中を擦つて呉れとも、言はなかつた。何にも言ふのが億劫らしかつた。時々、眼を開けたり、乾いた脣を動かしたりするのが、やつとのようであつた。

百合は、幾度、妙見樣とお大師樣とを疑つたか知れなかつた。が、そのあとでは、自分で自分の不信心を叱つた。そして、日參を缺かさないようにすれば、父は眼に見えない位宛でも快くなるだらう、と信じやうとした。

ふと、百合は思ひ出した。近頃、ちつとも自分の家のお墓參りをしなくなつた事を。急に、百合はお詣りがしたくなつた。どうして、あんなに長い間、放かして置いたのか、と氣が咎めた。お墓をあんなに氣味惡く思つて居たのは、大

變不可ない事であつたように思はれた。

其處には、唯つた一つ、花崗岩の墓が立つて居た。竹の花筒の中で、何かの草花がすつかり腐つて、その腐つた葉と莖がぺつとりとへばり附いて、青い水苔の浮いた水は、變な臭が、ぷんとして居た。蛆のような白い虫が泳いで居た邊りには氣味が悪い程、よく生長したしだが、青々と茂つて居た。

百合は、墓の前にしやがんだが、彼女は、誰を葬つたものか、知らなかつたし、誰にも聽いた事がなかつたから何と言つて拜んだものだらうと、迷つて居た。百合は刻んだ字を讀まうとしたが、それも長い雨風にさらされて、ぼんやりして居た。矢鱈に難しい字が列べて書いてあつた。

仕方がないので、自分で讀める字だけを拾ひ讀みした。それを續けて讀んで見た。妙に突掛つて、酷く言ひ難かつた。その中にだんだん、語居が好いように思はれて來た。指を折り乍ら、その變なお唱へを數へて居た。

が、其處は、死んだ人を埋めた處であつた。百合は、拜んで居る最中に、石が動き出したような氣がした。石の下から、骨許りになつた手が出て、自分の着物の裾を、墓の中へ引摺り込みそうな氣がした。彼女は、幾度、拜むのを止めて、驅け出さうとしたか、解らなかつた。こんなに、墓を恐れたり、氣味惡がつたりしては、とても、御利益はあるまい、と悲しい氣がした。百合は、自分の臆病な心を勵ましては拜んで居た。

百合は、ずつと以前から學校を休んで居た。父の看病と、神佛への日參との爲めに、彼女は、自分の一番大きな樂しみを犧牲にしたのであつた。

お詣りの行き歸り、百合は、畑の小路や、山の木陰から、友達が、鞄を腰にぶら下げて、走つて來るのを見た。彼女等は廣い往還を大勢の仲間と、鬼ごつこや隠れん坊をしてふざけ歩いて居た。喜ばしい叫喚が、畑を越えて、百合の耳

をつんざくように響いて來た。百合は、その度に、禁ぜられた樂しみから逃れやうとして、耳に手を遣らうとした。が、眼が、その方を見て居た。それらの子供の跳ね廻る二本の足や、その足にからまつて、アミーバのように自由に動く赤い袴を、百合は、貪るやうに見た。何日から自分は遊ばなかつたらう。百合は、悲しい心持ちで、ずつと昔の事のように思はれる、あのお伽噺を聽かせる事の得意や、級長の威力を振り廻した自負やを思ひ浮べた。もう、そんな事は二度と彼女の上に返つて來ない、ように思はれた。

その時、突然、百合は父が自分を呼んで居るのではないか、と言ふ氣がした。彼女は、大急ぎで、殆んど走るようにして、それらの友達に出會さないような路を、家の方へ驅けて行つた。

○

或日、百合が、すつかり暗くなつてから、家の閾を跨がうとすると、お弓があはたゞしく驅けて來て、非常に蒼い、ひきつつた顏をして言つた。

「旦様が、冷ようなつといでんされる。」

百合は、突立つて居た。それはほんとうだらうか。今、歸つて來た墓場から、何か、自分の後から隨いて來たのだ。――そして、父の代りに、父の寢室へ這入つたのだ。――

突然、お弓が泣き出した。百合はその泣聲を聽くと同時に、大聲を擧げて自分も泣き出した。父が死んだ、と言ふのは、如何言ふ事なのか、百合は、はつきりと解らなかつた。

勝坊が、一番大きな聲で泣いて居た。彼は何で皆が泣いて居るのか、知らないで皆の眞似をして泣いて居た。

百合は泣き乍ら、知らず〳〵父を呼んで居た。それは、何とも言へない慰めになつた。父の生きて居る間中、面と向

つて呼び掛けた事のない呼聲が、變に、のどにひつからまつて響くのを、百合は自分の耳に聽いた。父も、何處かで、聽いて居るようであつた。父の魂は、未だ餘り遠くへは行つて居ないで、低い、天井の邊りを、ぐる／＼廻つて居るような氣がした。

彼は、蒲團を着た儘で寢て居た。未だ、炬燵のやぐらも置いた儘になつて居た。

百合はふと、父が死んだと言ふのは、全つきり嘘言のような氣がした。自分達は、父が死ぬだらう死ぬだらうと思つて居たから、今、そんな夢を見て居るのだ。ほんとうは、父は死なないで、こんなに炬燵の側で寢て居る。恐らく自分は、明日になつたら又この父のために、お詣りをするだらう……。

死んだ父が、蒲團の中に横つて居る、と言ふ事は恐ろしかつた。それは、もう父ではない。直きに葬場に這入つて骨になるのだから……然し、矢つ張り父であらうか。百合はその時、未だ餘り遠くへ行かないで、低い天井の邊りにさ迷つて居る父の魂が、此方を見て居るのを感じた。そして、その魂は、自分の娘が、自分を恐れて、嫌つて居るのを知つて居た。つい、其處に居るのに、唯つた一遍も父の死顏を見に來ない、と言ふので百合を恨んで居るのを感じた。

百合は、恐ろしかつた。が、じつとして居て、死んだ父の顏を見に行かないのは尙更恐ろしかつた。彼女は立ち上つて、全で、何かに、頭の毛を一本一本引摺つて行かれでもするように、父の頭の方へ、少し宛寄つて行つた。が、足がこはばつて、一歩も前へ動かないようであつた。

夕方、父が死んだあの時から、立ちこめた空氣が、どす黒い色をしてその室に一杯になつて居た。百合はその空氣を感じて、眼をつぶつた。彼女の手は、動かないで棒切れのように固くなつて居た。その手を、全で他人の手のように言ふ事を聽かないその手を、無理に前へ押し遣つて、指先で一寸、父の額にあてた。それは、霜を置いた石のような冷さ

であつた。百合はその時、やつと眼を明いた。存外、恐ろしくも氣味惡くもなかつたのが嬉しいようであつた。自分はちつとも、死人を恐ろしがつたり、氣味惡がつたりしては居ない。顔だけではなく、未だ、死人の體をでも、蒲團をめくつてでも見る事が出來る。自分の父だもの、死んで居ても、ちつとも恐ろしくはない。百合は、半分は自分の心に、半分は天井の邊に居る父の魂にそう言つた。そして、そつと炬燵のふとんをめくつた。(何時の間にか、お弓は臺所へ、勝坊は遊び事の方へ立つて、其處には、誰も居なくなつて居た。)

火のない炬燵はあなぐらのように、冷たかつた。その中に、洋燈の光が低く垂れ下つて、射し込んで居た。

百合は、恐ろしいものの中へわざと首を突込むような變な氣になつて、炬燵の中を見た。死人の着物はまくれて、前がすつかり裸になつて居た。人間の皮膚が、膝頭を此方に向けて剝き出しに見えて居た。皮膚は、ところ／＼裂けて、血がにぢんで居た。全で、砂で態々摺り剝きでもしたように。百合の心に猫の死んだのを見て居るような好奇心だけが殘つて居た。

臺所から、誰かの足音がした。百合は、狼狽てて蒲團を下した。

突然、死んだ父が、大きな眼を見開いたようであつた。ずつと以前に「ちつとせなを擦つて呉れえ」と言つた時と同じあの眼を。百合はぎよつとして、その眼を見た。

が、父は、前の儘で靜かに死んで居た。

○

「これのお父つ樣は、お死にんされたげなのう、まあ、おいとほしい事でムいすのう。」

百合は、少し泣聲を細めて、臺所の話聲を聽かうとした。誰か、近所の人達が二三人集つて、お互に、悔みを述べて

居るようであつた。彼等は、小さい百合と勝坊とが、ほんとうに可哀そうだと言つて居た。そのあとで、「じやが、旦様がお死にた方が、けつく好えでよう。子供衆もはあ、叱り手がないようになつて好えし、儂らあも、隣り合ふとつても氣が樂じやけえのう。」

皆は、一緒に低い笑聲を立てた。

百合は、もう泣く事を止めて居た。彼女等の笑つて居る顏が、眼に見えるようであつた。皆は「お死にた方が、けつく好え、」と言つて居た。未だ、遠くへ行かない父の魂は、あれを聽いたであらうか。百合は、後を向いて見た。父の死骸を入れた白木の棺は、動き出しはしなかつた。が、父はあれを聽いたであらう。

百合は、父の爲めに、死んでも誰からも悲しまれない父の爲めに、何か言つて遣りたかつた。彼等が、自分達の不用意な失言を、酷く後悔しないでは居られないような事を。が、百合は何と言つて好いのか解らなかつた。

父の棺は、「お死にた方が、けつく好え、」と言つた人々の手で、かつぎ上げられた。坊さんが來た。皆、笑ひ乍ら、面白い話しをして居た。そうして、夕方まで誰かを待つて居た。

皆は、誰を待つて居るのであらうか。百合は、皆が低い聲で話し合つて居るのを聽いた。「お内樣」と言ふ言葉が幾度も繰返された。

母！百合は吃驚して躍り上つた。その瞬間に、ずつと昔、同じこの家の中に母と呼ぶ者が居た、と言ふ事を思ひ出した。その母に對する凡ての感情が、生々しい色を帶びて、百合の胸に蘇つて來た。

百合は、父の棺を何處か、遠い誰にも見えない處へ隱して了ひたかつた。それで、母にし返しをして遣りたいと思つ

た。が、近所の人々が居て、自分の思ふようにならないのが殘念であつた。百合は、せめて自分だけは、母に逢ふまい、と決心して、勝坊を負ぶつて、誰にも氣附かれないように、暗い納屋の中へ這入つて行つた。彼女の小さい胸は、騒々しいひつ掻き廻すような思ひで、一杯になつて居た。

勝坊は、暗い處を可厭がつて、太きな聲を立てた。百合は仕方なく、納屋から出て、その邊りを往つたり來たりした。その内に、彼女は知らず知らず、一歩宛、あの石垣の突端の方へ近附いて行つた。そして、幾度となく、もう、すつかり暮れてはつきり見えない遠い峠の方を見上げて居た。百合は、全で、醉つ拂つて居るようで、自分が今、何をして居るのか、何を待つて居るのか、考へて見やうとはしなかつた。——

と、誰かゞ、母屋の方から提灯をつけて、百合達を探しに來た。百合は、夢から醒めたように、その男の黒い影を見た。彼女は、どんなに、母が歸つて來たか如何かをその男に聽きたかつたらう。

その時、もう、家の前には、葬式の支度が出來て居た。然し、母の姿は何處にも見えなかつた。そうだ！あの母が如何して歸つて來ると言ふ事があらう。彼女は、極樂のような面白い處で、毎日、お芝居のような事をして暮して居るのだらう。

突然、前にも増した烈しい憎惡が、枯草に火がついたように、めら／＼と百合の心を燃やした

百合は、悲憤の涙に暮れ乍ら弟の手を引いて、棺の後から隨いて行つた。そのあとを、ほんの二三人の人が隨いて來た。雨がしよぼ／＼降つて居た。

會葬には、誰も來なかつたが、葬式の行列は、村中の者が見たがつて居た。（父の死は、話の種のない村中に、もうすつかり知れ渡つて居た。）藁葺の軒端にも立つて居た。葬儀場の入口にも、白い傘をさして立つて居た。誰の顏も變な好奇心で輝いて居た。憎まれ者のなれの果てを見たがつて居た。

百合は、それらの人の中から、樣々た話し聲を聽いた。

「あれが、葬式かあ、」

「さべしい葬式じやのう、」

「お件が、いつそう無いじやあ、」

私かな笑聲が起つて居た。子供達は、只石を投げないと言ふ丈けであつた。百合は、彼等の不謹愼を感じた。死人に對する嘲笑を感じた。

あの酒屋の老爺が、店先の赤提灯の下に立つて居た。その眼でさへも言つて居た。

「とう〳〵、お死にたのかあ、けつく、その方が好え。」と。

百合は、彼等の眼を見度くなかつた。早く、墓場へ行つて了ひたかつた。足許を見詰めて歩き乍ら、村中の者を相手に、腹を立てて居た。

路々、彼女は、お大師樣のお堂と、妙見樣の赤い鳥居を見た。今はもう、二つとも神でも佛でもなかつた。百合は、そこに、花崗岩の石塊と赤く塗つた丸太ん棒とを見た。彼女は、昨日まで、それを拜んで居た。それで、父はもう、死んで居た。それはあたりまへであつた。彼女は只、石塊と丸太ん棒とを拜んで居ただけなのであつた。

彼女の心から、凡ての神秘が、けし飛んで行つた。墓の下に埋めた父の屍からだけ、かすかな圓光が、立ち昇つて居た。

その夜。

百合は、勝坊を抱いて、廣い家の中で寢て居た。もう、父は煙のように消えて了つたのであつた。百合はもう、泣い

ては居なかつた。唯つた一人の父の死と、その葬式の事を考へて居た。

父は死ぬ時に、誰かを呼ばなかつたらうか。彼が、自分の眼の前に、死を見た時、彼は、誰かに自分を語りたい、と思はなかつたらうか。

彼は乾いた唇を動かしたであらう。咽喉が引吊つて聲が出なかつたであらう。そして、どんなに、最後の水を、百合の手から呑みたがつたであらう。

誰もが、その死を悲しむ代りに、「お死にた方が、けつく好え」と言つたような中で、彼は死んだのだ。皆が、何かお祭の山車をでも見るように、わい〳〵騷ぎ乍ら、その葬式を見送つた。それも、出來損ひの山車を見て、冷かしでもするように。そして、皆、その葬式の行列が、唯つた三四人續いたきりで、誰も後から隨いて來ない。と言ふので笑つて居た。坊主までが笑つて居た。百合は、父が死んで了つて、今は、怒鳴る事も煙管を振り上げる事も出來ないようになつて、皆から、村中の者から笑はれて居るのを見た。同時に、自分も小さい勝坊までも笑はれて居るのを見た。

百合はふと、父を埋めたあの墓場を思ひ出した。父は、自分の名を刻んだ石の墓を立てる事が出來なかつたのだ。その墓は只、土を少し小高く盛り上げてその上に、大きな饅頭石を一つ置いたきりなのだ。百合は、その父の墓を、急に思ひ出した。

あの墓は、未だ誰も見ないだらう。いや、お弓が見た。隣のばあさんが見た。彼女等は明日の朝を俟たないで、村中に、あの墓の事を觸れ歩くだらう。そして…………

百合は、體中が熱くなつて來た。

……そして、皆が、手を叩いてあのまんじゆう石を笑ふだらう。

百合は、今から起きて行つて、あの石をとつて了ひたい、と思つて居た。だが、その代りに、何を立てやう。何にも立てるものはないのだ。百合は、だん／＼悲しくなつて、心の中で啜り泣いて居た。そして、あの墓の下に居る父に向つて、しんから言つたのであつた。

「どうぞ、もう少し待つて下さい。」と、

百合は、哀れな父の爲めに、復讐して遣る事を、固く心に誓つた。そして、暗い天井の隅を、じつと見詰めて居た。

父は死んだ。けれども自分は未だ生きて居る。恐らく十八才にならない前に、偉い偉い女王になるだらう。自分は、饅頭石の下で笑はれて居る父のために、その父の代りに、何かしなければならない。父の不當なおひめを償はなければならない。

が、自分が偉い者になつて如何しやう？　もう、父の葬式は濟んで了つたのだ。

百合は、思ひ出した。何日か、學校で見た、或維新の元勳のために行はれた、葬式の寫眞を見たのを。それは、何と言ふ長い長い行列であつたらうか。何百本と言ふ美しい吹き流しが、風にゆらめいて居た。(あの通りなあれと同じの葬式が、どうして父の爲めに出來ない事があらう。)が、父は？避病院で死んだものの爲めにでも、その死を悲しんで、鳥が泣いて居た。父は、只、屍を墓の下まで運ばれたと言ふ丈けであつた。――自分は、偉くならなければならない。

百合は、悲壯な決心をした。と、空想が、輪のようにつながつて擴つて行つた。彼女はその時、眼の前に、父の石碑を、黒い饅頭石の代りに、青い空に抜き出て居る石柱を見た。周圍には、鐵柵がめぐらされてあつた。苔生した碑の表には、父の名が麗々しく刻んであつた。誰か大勢の人達が、恐らく、昔父の死を嘲つた村人共が立つて、その名を仰ぎ見て居た。彼等は、哀れにも、石碑の側面に書いてある頌徳文が讀めないのであつた。が、それには、何と書いたも

のだらう。兎に角、漢文で、父の業蹟を稱へなければならない。
百合は、もう、頭の中でその文章を拵へて居た。何にも書いて好い事が見當がつかなんだ。斷々に誇大な文句が頭に浮んだ。だが、彼は、生涯、何をしただらう。
百合は、父の生涯から、煙管の音より外、何にも聽いては居なかつたのを氣附いた。——でも、兎に角、父は偉い人間であつたのだ。只、誰も、自分でさへも父の偉さが解らなかつたのだ。馬鹿な村人達は、勿論、父を見誤つて居たのだ。その事を、忘れないで、石碑に書かなければならない。
百合は、夢見るやうな眼を見張つた。斯うして、百合は、父を全で違つた父にして了つて居た。長ずるに隨つて、彼を、神の祭壇にまつり上げて行くのであつた。
死んだ者は、只、その者が死んで了つたと言ふ理由の爲めに、尊とい者になつて行く。
貧乏のどん底の中に、裸の儘で投げ出された孤兒の上に、好い日が來やう筈がなかつた。それも親切な近所の人の手で、勝坊は水車小屋へ貰はれ、百合は、豆腐屋へ預けられる事になつた。
その時から二十幾年。百合は今、豆腐屋の後繼息子と一緒になつて、眞黑になつて働いて居る。誰かが、彼女に、彼女の子供の頃の、父の墓や葬式に對する愛すべき虛榮心を思ひ出させるやうな話しをして聽かせたら、彼女は人の事のやうに笑ふだらう。おはぐろの褪めかゝつた齒を出して、一杯に口を開き乍ら、面白さうに笑ふだらう。
その通り、彼女の父の墓が、昔の饅頭石の儘になつて居るのを、今の彼女は、全く、身分相應な事だと、靜かな心で諦めて居る。

が、老いて行く彼女の心の中には、死んで了つた父の影が、日増しに色濃くなつて行く。そして、次第に廣い場所を〆めて行く。彼女は、その影に美しい着物を着せる事に餘念がない。軈て、彼女が又、葬場へ近づいて行く時には、その影はほんとうの神になつて了ふか解らない。

彼女は、長じるに從つて、父に就いての様々な噂話しや、人から人へ語り繼がれて居る內に、全で違つた話しになつて了つた作り話しなどを聽かされた。

誰も、彼を偉い人間だつたと言ふ者はなかつた。それ處か、質のよくない無頼漢だ、と言ふ者が多かつた。彼は若い時に放蕩のありつたけをし盡して、家財を耗つて了つてからは、隨分際どい手段で、金を得て居たようであつた。賭博(ばくち)も打つたし、殆んど詐僞に近い事も遣つたし、少し許り男前が好いのを利用したりさへもした。それでも、彼は、昔風な解釋で、無職の「旦那様」の威容をくずさずに居度いように見受けられた。

が、それらは皆、人々が想像しただけで、誰も、彼が、何處で、如何して金を得て來るものか、突きとめたものはなかつた。彼は、誰からも尻尾を握られないやうに、世渡りをして居る、と言ふ事を、一つの自慢にさへして居た。實際、彼が、偉かつたとすれば、其處が偉かつたのだらう。

人々は、疑はしそうに、頭を振つてそれらの話しをして居た。

が、彼はもう、天國に行つて居る。人々の様々な噂話しは、百合の偶像に、ちつとも泥を塗る事は出來ない。

彼は只、ずつと昔に死んで了つたと言ふだけの理由で、百合にとつては、無上に尊いものになつて居る。それは唯、肉につながる者のみが知つて居る愛である。

——完——

一九二三、一、五、巣鴨の寓居にて、

馬守眞

室生犀星

一

春淺い日、——。

朝からの粉雪はをりをり漏れる日影にきらめいて、大門近い鈔庫街の家々の屋根の上を帆のやうに白く、あるひは四角や菱形や三角にそめあげてゐた。——大門入口の、一軒の筆墨を鬻ぐ店さきに、同じい雪の粉をはらひながら一人の見窄らしい客が立つてゐた。茶がつた腰拵へに紺の日本の脚絆を着けてゐたが、埃を含んだ紺地の色褪めてゐるところから、何となく物に疲れた容子さへ見えた。

客は先刻から墨の匂ひや輕さなど掌にのせて試みてゐたが、ふと主人にかう言つて尋ねた。

「瑜糜があるか、——あればそれを求めたいのだが。」

「漢の代の、あの瑜糜のことでございませうな。」

筆墨店の主人は上目をつかつて、異國の汚ない風俗をしてゐる客を訝しげに眺め、念を押して見た。

「さうです。――。」

主人は立ちあがると、簾をかけた戸をあけて奧へ行つたが、間もなく金繡のある小さい紫檀の箱を持つて來て、默つて客の前に置いた。が、客が箱を開けさうもしないので主人は中から琺瑯を取出した。そして客の手のひらに移した。

「どうぞ――數すくなくなつてしまひましてな――これくらゐになれば、もう立派な玉でございます。」

客は琺瑯を手にとると、永い間指にさわりながらゐた。そしてこの價高い上墨の高い匂ひをかいだ。

主人は暫らくしてから、先刻から訝かしさうに見成つてゐた眼で、もう一度、客に言葉をかけた。

「どうして此琺瑯のことをごぞんぢでございませう？　日本の方には珍らしい――最も二年前にやはりお國の方が入らしつて琺瑯を買つて行かれましたが、お言葉づきがあなたのやうによう慣れて居られませんでした。」

客は眼を澄して微笑んだが、その、も一人の客のことを聞き咎めた。

「どんな方だ――その二年前に買つて行つたといふ人は？」

「ただ通りすがりらしく、やはり暫らくこちらに滯留してゐらしつたやうでございました。――いやお名前をうかがつて置けばよかつたのですが、こんな事につい氣がつかないでゐたものでございますから。」

客は默つて考へ込んで、すぐわきにある籠の鳥を何氣なく眺めてゐた。白い嘴の長い鳥は頭をしきりに客の方へさしつけながら、何か物言ひさうにしてゐた。

「その後その人を見かけませんか――。」

「それきりでしたよ、――最も邸へはときたま入らつしやるやうでございますが……」

主人は長閑に微笑つて、「誰かにお馴染みがあるやうにも見えました。」

そのとき主人はきふに頭を幾度も下げながら誰かに挨拶をしてゐるらしかつた。――客が振りかへつた眼に、鶯色の柔ちかいすらりとした着ながしに、結び立ての兵庫髷と、そして怜悧さうな、すこし睡氣を含んだ睫毛の長い瞳に出合した。――わけてもその睫毛に粉黛がちらついてゐるのが、奥の襖をきちりと美しく奥床しくして見せた。

客はすぐ妓生であることを感づいたが、淸げな容子があまりさつぱりし過ぎてどうとも分りかねてゐた。――ふと氣がつくと一疋の白い蝶が、その楚々たる裳にまつはりついてゐた。

「雪窓によくこそおいでくださいました。どうぞ。」

主人は空いてゐる床几を侑めると、それにも答へないで、れいの、白い小鳥の籠のそばへ行つた。

「まあ、あんなに頭をさし出して――よく覺えてゐますこと。」

彼女はさういふと、籠の目から二本の指をさし入れて、白い小鳥のあたまを撫いて遣つたが、小鳥はぢつと樂さうにうなじを伸べながら動かなかつた。――客は先刻小鳥が頭を擦りつけてゐたことを思ひ出して、心で微笑んだ。

「いつも然うしていただくんで、もうどなたが入らしつても頭をさし伸べるんです。先刻もこちらの方にな……。」

主人は客に微笑つて見せた。――客は默つてうなづいたが、そのとき振りかへつた婦の眼はさつきの怜悧が和やかに融けこんで、柔しい色としなとをもつてゐた。が、その眼はまた小鳥にそそがれた。

「けふは寒いから店の間へ入れておやりになつたらよございますわ。こんなに震えてゐますもの。」

主人は立つて籠のそばへ行くと、すぐ店の間へかけた。そして

「お氣に召したら何時でもおもちになつてもよございますよ。その方がこれの爲めにも仕合せでせうし……。」

「いゝえ。」

婦はあたまを振つて、「此處で見るのが樂しみなんですもの。」

さう言つて詩箋と墨との箱へ手を觸れた。が、客の前にある瑜欒(ゆに)の箱を見ると、主人の顏を物問ひたげに眺めた。――主人は又長閑げに微笑(わら)つて見せた。

「此方が、お覓めになつたのでございます。御入用なれば取り出して參つてもよございますから。」

「いえ、べつに今はいらないんでございますけれど。」

婦はさういふと、すぐわきの客の視線をかんじたので、また眼を合した。――婦はちよいと輕く挨拶をした。客はこの婦が瑜欒の名を知つてゐるのと、主人までがそれを呑み込んでゐるのを物珍らしく感じた。さういふ物珍らしい氣もちは婦にもあつたらしい――なぜかと云へば姿汚れた男が立つて瑜欒を求めてゐたからである。

「おかけなさいまし。」

婦は客が自分が來てから立つたのと思つたのか、床几を押しやつた。

「こちらで結構です。」

客の膝の上には、毛なみに艶のある白い狆が何時の間にか圓くなつてゐたが、それでも主人である婦に向つて、何か惡いことをしてゐるやうにきよとんとして、時たま、この異國の男のよごれた衣服に泌みる匂をかいでゐた。

「足がよごれてゐるぢやありませんか――お召しものが汚れますからどうか下に置いてやつてくださいまし。」

婦はわざと狆を打つまねをすると、狆はすぐ客の膝から飛び下り、そして婦の裳にぢやれついた。

「大さう年をとつてゐる狆のやうに見えますが。」

客は婦に抱き上げられた老いて朽んだ貝の底のやうな顏の狆をかへり見た。――婦はそのあたまを撫でながら……

「もう六七年も飼つてゐるものでございますから、すつかりおばあさんになつてしまひまして――。」

客はそのとき不圖さういふ婦の皮膚に、淸げな小皺を雪あかりで目に入れた。何となく悲しげでよけいにその美しかつたころを思はせる褪色の、微妙な餘炎をさし覗いたやうな氣がした。

「では失禮いたします。」

婦のかげが店から消えると、客はほつそりした姿をちらつく粉雪の間に見送つた。かれの心は妙に物悲しくちぢれてゐた。――鳥籠にならぶ織手にうなぢを伸べる小鳥が、客の方へ向いて靜乎としてゐた。

「あの婦はこの廓のなかのものですか？さうしてやはり妓生ですか、ちよいと見分けがつかないやうな氣がするんですが……。」

主人は客のなめらかな言葉をふしぎさうに聞いて、いまさらのやうに顏をじろじろ眺めながら言つた。

「さやうでございます。母の腹の中からまるで琴のやうに生れて出た婦人でございませうね。」

「琴のやうにとは？。」

主人はあたりの箱を片づけてしまつて、長い烟管に口をつけた。

「それは伶悧な女のたとへなんでございますよ。あの方なぞはまるで別の婦人ですからね。」

「どんな譯でさう言ふのか？　わたしには分らないが――。」

主人は考へて何か言ひ出さうとしてゐたが、彼女に對する恭謹の情を盛る言葉でも尋ねてゐるやうに、目を窄にして頭を振つてゐた。

客は苛立つていきなりぶしつけに言つた。

「何といふ名前だ。」

主人は妙にほこらしく、又妙にさびしさうに言つた。

「馬守眞といふ方です――。」

主人は喉をくびりと遣つた。「字は湘蘭、小字は元兒、王穉登のお友達でございます。この板橋あたりであのくらゐ恬雅な方は一人もございません。――よくわたしにもわからないんですが、蘭は趙子固に倣ひ、そして竹は管中姫を法としてゐるんださうでございます。」

しかしその返辭は、客にはよく分らなかつたらしかつた。かれは眼をしばたたいて考へるやうにしたが、

「では畫をかく女だな、妓生にしては珍らしい女だ。」

さう言つたが、あるじは客のぞんざいな言葉を半ば咎めるやうに、半ば憐れむやうに答へた。

「さやうで――くるわ中の先生にございます。あの方の畫を模倣ねて今どういふ妓生でも蘭をえがかないものはありません。或は琴をひいたりして一人として風流を學ばないものがゐないのです――。」

主人はさらに言葉を繼いで「けれども月嬌さんは客には中々出ないんださうでございます。わけても氣に入らない騷客のむれにはな。」

客はただ默つて肯いたが、間もなく舖を出た。――が、日かげはいつの間にか消えて、粉雪が靜かに軒端の立春大吉の紅唐紙の上にさらさら音させてゐた。

客は通りへ出ると、ふいに佇つて考へてゐて、何度もためらつて、やつと思ひ決めたやうに再び筆墨店の前へ立つ

た。そしてすこし睨らんで
「あの女は何といふ樓にゐるのか、それを知りたいんです――。」
主人の顔はさらに長閑げな微笑をたたへるばかりだつた。そして烟管を口から放して煙の輪を吹いて
「冠家といふのです。さうおたづねになればわかるんです。――冠家姉妹總芳菲　十八年來花信迷　今日秦淮恐相値　訪他紅涙一沾衣――それほど美人が揃つてゐるのでございます。」
客は禮を言つて店を出て、大門とは反對な通りへ行つた。そしてとある横町へはいると牛旗の紅くひらめいてゐる酒肆へぶらりと這入つて行つた。そこには夕方を待ち侘びる紅巷通ひの客が、みな卓をかこんで忍冬酒の香にまみれてゐた。

二

壁にそふて胡笛を吹く、鼻のひしやげた男が座つてゐた。酒甕の上に腰を下ろしながら先刻から騒客に弄ばれてゐたが、かれが胡笛を唇にしてからは誰一人唄ふものがなかつた。かれらはみな悲しげな胡笛のこころを心としてゐるやうに靜まりきつて、時をり酒杯を舐める音ばかりがした。
客は燈影の下で、鳶色をした婦の姿をあたかも胡笛の音色が思ひ出させてくれるやうに、うつとりと目にゑがきながら獻酬をかさねてゐた。誰一人饒舌るものもゐない――かれらはその皺深い飴色の皮膚をした顔ばかりだつたが、咳一つしないで胡笛のあるじをねぎらふてゐるやうだつた。
「馬守眞。」
客はさう唇の上で小さく呼んでみて、こころ靜かに微笑をうかべた。青色の流れ迅い腰つきのすらりと伸べられた道

路を、かれは最一遍目のなかに思ひうかべ、そして粉雪をちらつかせた睫毛の長い目を考へあてた。あの眼はつややかではない――しかし柔しげな怜悧さ、味のある表情が消えやうとしなかつた。

胡笛を吹く人はもう投錢を集めてゐたが、客もいくらかを與へやうとしたけれど、どういふものか客の錢に手をふれなかつた。――客はこの不自由な足なへの手のひらに、わざわざ錢をのせてやつた。

「わしの錢でもかはりはない――。」

足なへはその錢をしらべ、この異國の男をじろじろ見戍りながら、軒の外へかがみ込んで蝙蝠のやうに出て行つた。

客はあとを見送りながら淋しさうに己れが今言つた「わしの錢でもかはりがない――」の、その言葉を思ひ出した。

さらに一時間の後、挑灯の下を、客は冠家をめあてに微醺を吐きながら歩いてゐた。冠家は佳麗な妓生が多かつた。しかも洲蘭はそこに佇んでゐたのである。

客は階段を見上げながら往つたり來たりしたが、廊下を往來する妓生のなかに彼女らしい姿を見なかつた。ただ一瞬ごとに紫檀の椅子の上の妓生が、いつの間にか表入口から姿を消して行つた。賣れ殘りの一人が、ぼんやり表をながめてゐるばかりだつた。――客は何氣なく階段下へ近づいたときに、チヤラン湯の匂ひが春夜のうそさむさの中に潜んでは、外氣にふくれて艶めかしい匂ひを放つてゐるのを嗅いだ。

階段下の假母は、すぐ客の袖をひいた。客は默つてその袖を振り切らうとしなかつた。

「白門といふ美しい婦が居ります。そのほか茵嫩や李大娘もまだあいて居ますからお上りなさいまし。」

さういふ假母へは、馴染みがあると答へ、その白門は見たくないと言つた。

「ではお馴染みさまを伺いまし。」

客は微笑んでその名前を言はうとしたが、口へまで出かかつて、すぐ言葉で言へなかつた。かれは咄嗟の間にかうこたへた。

「青い衣をつけた女がゐるだらう――そのひとと鈔庫街の筆屋でけふおひるに逢つたのだ。」

かれがさういふと、假母はすぐ膝を叩いて大きなこゑで言つた。

「あ、月嬌？　せいのすらりとした方でせうね。聲の美しい――。」

「さうだ。」

「それは馬守眞さまのことでせう。――しかしおあひにく今夜は出ないんでございますよ。あの方だけはあの方の好きなやうにしてございますからね。それに失禮でございますが、異國の方では？。」

客は會つて話しさへすればよい、私はそれだけの望みで來たのだと言つても、假母はつむりを振つてきかなかつた。

「さう申しあげても、ほんたうはあの方だけはどうにもわたくしどもでも、お取なしのしようとてもないんでございますから――。」

客はしかたなしに、假母の顏を唯見つめてゐた。

「では書肆筆屋で會つたものだと言つて、それだけを取次いでくれませんか、それでも伺つてくれないやうだつたら、わたしは歸へりますから――それだけを傳へてください。」

「ぢや、さう言ふだけは言つて見ませう。」

客はむづかる假母を二階へ追ひやるやうにした。――かれは階段下のまるい柱につかまりながら、數多い小鳥の籠を

かけた廊下に、送り迎えの客の騒音に耳ふさがれてゐた。向ひ側の揚屋で起る鼓や笛や蛇皮線の音色が、朱塗の建物の色合ひとよく釣合つて、いくらかの疲れ氣味の氣もちに夢のやうな調和をあたへた。

そのとき彼はふと或る匂ひの漂ふてくることを感じた。ふりかへると階段の上に、すらりとした湘蘭の姿があつた。――同時にひるまかいだ匂ひがもの哀しげに、客の上からして來た。

湘蘭のそばに先刻の假母が立つて、客を指さしながら言つた。

「あの方でございますの。」

客は湘蘭の眼を見上げた。夜ゆゑか、それとも化粧をしてゐるためか、ひるま見たよりも一さう黒漆な瞳の中にこまかな色があつて美しかつた。――湘蘭の眼は須臾にして何かを思ひ出しながら微笑つたのを客は素早くおのれの眼底にうつした。それと同時に湘蘭はしづかに腰をまげた。

「どうぞおあがりくださいまし。ちよいと思ひあたらなかつたものでございましたから。」

客も揖を交した。假母は階段を下りて來て、燃えるやうな緋の履きものをそろへ、上つて來れるやうに言つた。――客は湘蘭の眼をもう一度ながめた。そして長い廊下を尾いて行つた。どこかで胡弓の悲しげな音いろが、中庭の蓮池を隔てて聞えてゐた。

三

客は湘蘭の部屋へはいらうとすると、ほの温かい春蘭の匂ひをかいだ。みると雲煙裡に徑を綴つた枯木の山姿に氷白く寂しい洲に浮く小鳥をえがいた一軸が、床上にかけられてあつた。この冬景の畫布と、春蘭の匂ひとは客の心をそぐ

ふことなく和やかにした。

客はさつきお逢ひしたので何となくおあひしたくなつて伺つたといふことを言つた。湘蘭は典雅な言葉付でよく來てくだすつたと、その美しい眼のうちで此の異國の男を靜かに眺めた。

が二人ともべつに話もなかつたので默つてゐたが、ふと湘蘭は茶を侑めながら客にたづねた。

「いつごろから此方においでになつて入らつしやいますの。おうかがひすると大さうお言葉がなれていらつしやいますから、或ひはお永く滯留してゐらつしやりはしないかと思ひますの。」

「いゝえ、まだ二年にもならないんです。春來たばかりです。」

「まあ、それにしてはよく言葉が慣れてゐらつしやいますのね。」

客は訝かしさうに問ねる湘蘭にはこたへないで、筆屋で畫をおかきになることを聞いたと言つた。しかし湘蘭は又たそれには答へなかつた。

「どういふ御用向きでこちらへ入らしつたのでございますの。」

客はぞんざいに答へた。

「わたしは陶工です。――。」

湘蘭は陶工と聞くと、客の顏を永い間見詰めながら何か考へ込んだ。そして何か言はうとしながら躊躇らつて默つてしまつた。客は自分が陶工だと言つたときから、湘蘭の眼がわけても自分の上に注意深く注がれてゐることを感じた。

「大門前でおあひしたときから何だかお話する機會(をり)があるやうな氣がいたしましたの。先刻も狆が窓のところでくんくんしてゐますと、ちやうど貴方が通りを歩いてお出になりました。」

客は思はず赧くなつて、そして茶を手にとつた。

「れいの白い狆ですか?」

「さうですの。」

「よく覺えてゐたものですね。たつた一度きりしか見ないのに——。」

「あれで匂ひを忘れないものらしうございますの。いま湯をつかはせにやつてありますが——。」

客は別の壁に、蘭叢がかかつてゐるのを何心なく眼に入れた。蘭花は上乾きした虫の羽根のやうなところがあり、それでゐて手にふれるとほの溫かい一脈の冷氣が感じられるやうでもあつた。なよらしい筆端が紙幅を離れるとき、靜かに心を落した有さまは、枯淡で幽遠でもあり、そして紅巷裡の人と思へぬ淸趣自ら湧く畫境のやうに思はれた。——妙に支那婦人の肌を思はせる柔らかさは、客の膝の上にある手に、湘蘭の心をそつと握らせるやうな氣もちを感じさせた。

「あの蘭畫は?。」

客はさう尋ねたが、湘蘭はわらつて答へた。

「おたづねくださらない方がようございます——。」

「どうしてでせうか?」

客はわざと湘蘭をこまらせた。又言葉を次いで

「先刻から敬服して拜見してゐるんです。」

客は極めて打つつけに、「こちらへ來てから全くこれくらゐの蘭畫を見たことが始めてなんです。」

しかし湘蘭の額には、自分のことを言はれたために初めて謙遜な憂愁の色がかすめた。それが湘蘭のくせであつた

か？　ともあれ客は再び口を利かなかつた。

「このごろは國外へ繪の具を搬ぶことを禁めるやうになつてゐるんですから、ご用心なさいまし。」

湘蘭はも一言加へた。「わけても赤繪の色具がやかましうございますから――。」

客はうなづいて、默つてしまつた。しばらくしてから湘蘭は一冊の墨帖を棚から取り下ろした。そしてそこに客に署名を求めた。――しかし客は辭退したが、湘蘭は肯かなかつた。

「どうぞ書いてをいて下さいまし。おわるいやうだといけませんが――。」

湘蘭はさういふと、不意に思ひ出したやうに、墨帖をひろげて見せ、その纖い指を突いて見せた。

「おなじいお國のお方でこの方をごぞんぢありませんか？。」

客は湘蘭の指さきに稚拙な文字を見出して、吃驚りした。日本加賀後藤才次郎と書かれてあつた。――客の顏は瞬時の間に蒼白く變つた。そして少し震えをまじへた聲音で尋ねた。

「この人は何時ごろ此處へやつて來たのです。」

湘蘭は客の顏を見戍ると、すぐ顏色の變つてゐるのを見た。――かれらの間にぴたつと合つた鍔のやうな心音があつたらしいのを、お互ひが感じた。

「もう二年も前のことでございますの。或る春の晩方わたしはぼんやりお會ひしたのでございます。――ご存じでいらつしやいますの。」

「ええ。」

客は默つて考へ込んでゐたが、湘蘭の顏を見い見い、

「名前はずつとさきから聞いてゐたんですが、まさかこちらへ渡つてゐたことだとは今の今まで思はなかつたのです。――不思議といへば不思議すぎるくらゐだ。」

客の眼をいま過ぎるものは、風のやうな淋しい風景だつた。荒い北國の暗色ある陶土の一片が、冴然として今からして座つてゐるかれの眼前を、音も色もない風のやうに過ぎ去つて行つた。

「その人はこちらに一たいどのくらひ滯留してゐたのでせうか？。」

「さうでございますね……。」

湘蘭は考へ考へ、れいの纎い上等の貂甲のやうな指さきを折つて行つた。

「わたしは一年ばかりお目にかかつてゐましたが、その折はもう三年になるとお仰つていらつしやいました。何んでもまだ居らつしやるやうに言つてゐられました。」

さういふ湘蘭は何故かにはかに寂い顔をした。それをまぎらせやうとしながら、紅豆を客にすすめ自分でも何氣ないふうを裝ほて、その皓い齒をあてた。――客はわざとそのとき湘蘭の顔を見ぬやうにした。が、湘蘭の美しい耳はあかくなる一方だつた。――しかし客は何か床しいものを目にしたときのやうに、うつすりと湘蘭をながめた。かの女の眼にかるい愚痴がかげをやどしかけてゐた。

「その男はどんな話をしてゐましたか？　あなたに會つたりなどしてゐるときに――變つたところでもある男のやうでしたか知ら。」

客は自分を制しながらもかう聞かずにゐられなかつたらしかつた。

「いつも默つて來て默つておかへりになりましたの。――そして御歸國の時にもそれとは明さないで、いつの間にか

おかへりになつたやうでございます。」

伶俐な湘蘭の眼は、ほとんど悲しさに近い色が動いてゐた。

「ですからいつまでも、まだ支那にゐらつしやるやうな氣になるんでございますの。」

客は聲を落して湘蘭をまともに見ながら言つた。

「ゐないことは確かです。」

「わたしも左う思ふんでございますけれど、なんだかゐらつしやるやうにも思はれますの。」

二人は默つて對ひ合つた。遠くの部屋でさつきの胡弓の音が微かにきこえてくる……その時狆が小女によつて洗はれて、雪のやうになつて來た。――狆は客の匂ひをかいで、安心をして湘蘭の長い柔らかさうな膝の上にあがつた。

「この狆もあの男はきつと見て行つたのでせうね。」

客は微笑んで狆をこんどは自分の膝の上にのせた。

「えゝ、よく慣れてゐたんでございますよ。いつも表へまで飛び出して迎えたりなぞしました。」

しかし湘蘭はもう報らうならうとしなかつた。どこかきりつとした、瞳の中に、さつきの話を逆もどりさせるやうな弱いところが見えなかつた。

夜は更けた、そして男は去らうとしたが、湘蘭はにこにこしながら、れいの墨帖を押しひらいて、わざわざ硯まで添えながら客の前に置いた。

「どうぞおいやでなければ……」

が、客は思ひ切つて筆を把つた。そして「金陵にて、日本肥前深見新太郎」と書いた。が、その瞬間に湘蘭の眼はそ

の墨筆の痕に目をそそいで、しばらく離さうとしなかつた。——それほど文字はあざやかだつた。が、客は背き終へると寂しさうに微笑つた。

「くだらない男です。」

湘蘭は客を階段のところへ送り出して、そして客の眼をのぞいて見て、につと微笑つて見せた。何故か？　客の眼の色は左う湘蘭の美しい瞳に問ひをかけた。しかし湘蘭の微笑はなほつづいた。

が、つぎの瞬間にほつそりした湘蘭の姿が客のかたへに近づいたな、と、さう客が思つたとき、客の耳に暖かい口に蒸された花のやうな女の呼吸がふつと、影を落した。そして始めて湘蘭の聲がした。

「あなたはもとは高麗人ですね。」

深見新太郎はすぐ蒼白な顔色に變つた。そして驚いて湘蘭の目を見た。——湘蘭は犀利な眼光を射る小鳥のやうな瞳をして、しかも嫣然として深見新太郎を見つめた。——深見は口のうちで、そして悲しげな聲で誰にてたへるとなく言つた。

「さうです。」

深見は階段を下りて街路へ出た。湘蘭はあとを見送ると、すぐ姿を消した。

それから二十分の後、深見はまた挑灯の下を歩いて、寂しい自分の死場所である有田の在所のことを考へると、高麗の眞をうつす浅ましさをつくづく感じた。——歸化人であるかれは、再び鈔庫街へ出ると、さもしい一軒の酒店に這入つた。

「ああいふ恐ろしい男が何も彼も見て行つたのだ。」

かれはかう心でつぶやくと、湘蘭のやさしい犀利な瞳付を思ひ出した。それは花のやうに匂ふてゐるやうな氣もした。



雨の八號室

新井紀一

一

これまで一週間目ぐらゐに必ず、知らせる程の用件のある無しに拘らず東京の家へ便りをしてゐたのであつたが、今度といふ今度はこれでもう二十日ばかりといふもの、私ははがき一本出さない。

私は今パラチプスに罹つて此所T――の衞戍病院に入院してゐるのである。それが入院してから今日でてうど三週間許りになる。私は退院の日を待つて今日まで、パラチプスで入院してゐた、が、もう全快して退院した――と云ふ通知を出して、父や母、弟や妹たちをあつと愕かす、と同時に吻つと安堵の胸を撫でおろさせやうと思つてゐるのである。が、また一方そんな茶目氣ばかりでなく、入院してるなんて通知を出せば樣子を知らない家の人達は必ず心配する。それは分り切つてゐる。ところが私の病氣は今はもう危險の狀態を脫して殆ど全快してゐるのだ。熱も出ないし飯も普通に喰べられる。腹が減つて弱つてるくらゐだから。――それで私は退

院してから出さうと思つてゐるのであつた。
ところが家の方からは父か、弟か、妹か、それらが交替に手紙をくれる。この頃少しも便りがないがどうかしたのか——と云つて來る。それに入營以來一年半にもなるのに、金を送つてくれなんて一度も云つてやらなかつた私が、入院する前、熱があるので聯隊の休養室にゐた頃二三度、それも僅か三圓とか五圓であるが、送つてくれと云つてやつたのが、父と母との間にへんな想像をたくましくさせたらしい。それとは云はないが妙にそんな風な想像をしてるらしい心配の語氣を洩らして來るのである。
私はこれまで隊内の私達の生活を、直接自分の關係のない、見たり聞いたりした事でもおもしろおかしく書き綴つては、家へ知らしてやつてゐたのであつた。ところで私は、それらの手紙の中でいつ頃だつたか、こんな事を云つてやつたのを覺へてゐる。
「この間大隊の炊事當番たちが糧秣倉庫の中で三十錢五十錢づゝ張つては一六勝負をやつてたのを週番士官に捕まつて軍法會議に廻はされました。それから此の間の日曜日の夕方私は營庭を散歩しました。そして何氣なく營内射場の監的壕の近くへ行きました。すると何かしらその壕の中で人のさわ〳〵する聲がするのです。で私がひよいと上の方から覗きますと、下では車座になつて例のやつをわやわやと罵り合ひながらやつてゐるのです。が、私の顏を見るとハツと總立ちになつて逃げ出しかけたものもありましたが、私が只の一兵卒で彼等の同年兵であることが分つたので、いやに愕ろかしやがる——とかなんとか云つて、私をも無理にその仲間に入れようとするのです」
それから私はこんな事も云つてやつたのを覺へてゐる。
「われ〳〵兵隊に取つて日曜祭日ぐらゐ樂しみな事は恐らくありますまい。外出が出來るからです。ところが此の外出

日にはまたきまつて不幸者を出します。遂ひうつかり遊び過して歸營時間に遅れて營倉にぶち込まれたり、曖昧家へ上り込んで飲食してるところを巡察將校に捉まつて營倉にぶち込まれたり、もう何んでもかんでも營倉てす。それから此の間の日曜にはこんな事がありました。それは僕の同年兵ですが、Sといふのと Yと云ふのとが二人で、例の曖昧屋へ上り込んで呑み始めたんださうです。ところが勘定となると豫定よりか非常に高くぼられて、二人の財布を合してもどうしても足りないのださうです。散々すつたもんだと云ひ合つたが結局おんなでは埒が明かなくなつて亭主が出て來たさうです。が、亭主が云ふのに。一人だけ人質に殘しといて一人が是非金を拵らへて來い。と云ふのださうです。こんな事は東京でも少しも稀らしい事ではないさうですが、こつちは何しろ普通のお客と違つて兵卒――併かもその時はもう歸營時間が迫つてゐたと云ふのです。で、終ひには泣かん許りにして、もう時間がないからつてんで、自分の中隊から名前まで打ち明けその上軍隊手帳まで見せて、今度の外出まで待つてくれ、と云つたがどうしても承知しないんださうです。で、Yの持つてる腕時計を質にしてまあまあ無事に歸營時間に間に合つたさうですが、話を聞くとこんな事はもう少しも稀らしい事ではないようです。日曜のたんびにどこかしらの中隊で必ず一人や二人はさういふのがあるさうです」

私が、何んで要るかといふ事を云はずに二三度――それも前云つたやうに三圓か五圓であつたにも拘らず、送金を賴んでやつたのに對して家では私がさうした仲間に入つた結果であると想像してゐるらしかつた。しかしそれまで家へは一文の送金も賴まなかつた私が、何んで金を送つてくれなんか云つたかと云ふに、それにはそれで又理屈があるのである。私は固より家が貧乏で金なぞ送れない事は承知してゐる。だから私は入營の用意にと、前から家へは內緒で貯金してゐた金をすつかり持つて來たのであつた。そして入營の前日に土地の郵便局に預けて了つたのである。で、これまでは

外出の度びに要るだけづつちび〳〵と出してゐた。が、今は入院してるので出しに行く事が出來ない。しかも入院してゐても金の要る事は同じである。表面は出來ない事になつてゝも欲しいものは何んでも買へるやうになつてゐる。喰べ物でも日用品でも、おまけに入院してゐてはこれと云ふ仕事がない。毎日限られた室內で遊んでゐる。遊び道具もないところで、毎日同じ顏が集まつて同じ話をくり返してゐる。二三冊ある「戰友」と云ふ雜誌もう讀みつくして廣告まで暗記して了つてゐる。恢復期にある私達は人一倍腹が減る。で、からだまで腐らすやうな退屈は、私達の意慾を食物の方へばかり引つ張る。その結果は竊び食物の密輸入を企てる。その資金だけでも大變だ。で、私は家へ入院してる事は知らさずに何んで金が要るかも知らさずに、送金を賴んでやつたのだ。が、私は退院するのを待つて、自分が今までパラチブスで入院してゐた事、これこれかういふわけで金が不自由であつた事を云つてやり、そして送つて貰つただけは送り返さうと思つてゐたのだつた。ところが五度び目の時、父からは云つてやつただけのお金に附けてこんな事を云つて來たのである。

「もうお前も一年半と云ふ長い間を辛棒して今はあと半年と云ふ大事なところに來てゐる。つまらない事をして罰を喰つたり、へんなとこへ行つて營倉とかへ入れられないやうにしてくれ。お前にはまだ話さなかつたが、お前も名前だけは知つてるだらうが實はお前の從妹の敏子をお前の嫁に貰ふことに相談が出來てゐる。で、今年の冬、お前が除隊するのを待つて式を擧げるつもりでゐる。その敏子の寫眞も此の間先方から送つて來たのがあるのだが、軍隊へは送らない方が好いだらう。お前も氣に入るだらうと思ふ。まあ何んにしても大事のからだだから、輕擧妄動は此の際成るべく愼んでくれ」

私はそれを讀んだ時、おぢやの奴勘違ひをしてるな、と思つた。おやぢは、私が今まで隊から貰ふ一日五錢二厘の俸

給でどうにかやりくつてる感心な奴だ、と思つてゐたに違ひない。ところが、最近の四五回の金送れで――私がすつかり道樂者の仲間に入つたものと思ひ込んで了つた。そして結婚話なんか持ち込んで來た。――さう思つた私の顏にはひとりでに、甘い微笑が湧いて來たのである。その手紙を卷きながらも、私の顏からは微笑の皺が消へなかつた。――なに、隊と違つて病院だもの、寫眞を送つてくれればいゝに、氣が利かないつたらありやしない。――

私は今、父が敏子の寫眞を送つてくれないのが物足りない。だが、私の毎日の退屈の時を過す爲めに、その便りは絕好の消暇法となつたのである。私は暇さへあれば、敏子の影像をいろ／＼に想像して頭の中に描き出す。或る時はしとやかな日本流の島田、桃割れと云つたやうな髮に結つた彼女を、又或る時は近頃流行の束髮に結つた彼女を。私は今ブラッシュを持つた畫家である。まだ見ぬ彼女の上に私の求めてゐる美を表現しようとしてゐる。だから、そこへ表現された彼女の影像は時に依つてまるきり違ふ。キメのこまやかな白い皮膚の上をうつすらと桃色に刷く。チヤーミングな、そして叡智に輝く澄んだ瞳がそこに冷たくなく、溫かく据へられる。そして彼女の脣は私の愛を、熱いキッスを求めてゐる。私の頰にまたにや／＼と薄ら笑ひが浮ぶ。しかもその微笑は忽ちに私を冷酷に現實に押し戾す。今まで描かれてゐた彼女の影像はきれいに抹殺されて、頰の赤い、色の黑い、でつぷりと肉のついた田舍娘が姿を現はす。そして云ふ。敏子つてのはこの女ですよ――と。

やがて私は私の頭から空想を追つ拂つて、雜談に花を咲かせてる仲間の方へ行く。

二

寢臺の上にごろ／＼してゐた私は、またいつかとろ／＼と眠つて了つたものと思へる。ふつと聞き慣れない聲に眼が

覺めた。女の聲である。しかも二人である。聲のしたのは私の背後の卓子の方であつた。私は突嗟に、吉村と國井の細君が來てるんだなと思つた。彼女たちは此の前にも一度、ふたり揃つて見舞にやつて來たのだ。近いせいもあるだらう。吉村と國井はこのT町から二里程しか離れてないF在の同じ村なのである。吉村の方は話の樣子では結婚早々入營したと云ふ事だつたし、國井の方は新兵のくせにもう二人もの子供があると云ふ事だつた。しかも此の前來た時にはその小さい方の赤ん坊を負つて來たのであつた。

私は耳だけは鋭敏に働かせてゐるが身搖ぎもしないで寢臺の上に、彼等に背を向けたまゝじつと寢てゐた。彼等の興を殺ぐまいと云ふ心遣ひからではない。見せつけられる私自身が餘りに淋しかつたからだ。

彼等の話の途切れ目途切れ目に庭の櫻の葉を叩く雨の音がしきりに耳を打つた。青々とした若葉が雨に濡れてザワザワと囁き合つてゐた。

私は私でまた敏子の影像を描き始めた。それが切めてもの心遣りでもあり、暇つぶしであつたのだ。が、胸の中にブラッシュを持つて私の美を表現しかけた時、ドアーがギイッと明いてパタンと閉まる音がした。誰れか隣室の患者でも遊びに來たか、看護卒でも來たか。——と思つてる内に、看護卒が體溫計を各自に配り始めた。私は一本受け取ると起き上つて藥布團の上へ座り、一振り振つて透かして見た。冷たい鋭い感じのする水銀はすつかり球の中へ納まつて、チカッと僅かに少し許り背を出しかけてゐる。私はヒヤッとするそれを脇の下へ挿し込んだ。寢臺の上に座り込んだ私の眼はふと、卓子を挾んで話してる二人の女の眼とかち合つた。二人は慌てたやうに會釋した。と、私の方に脊を向けてゐた吉村と國井が同時に後ろを振り向いた。突嗟に私はかう云つて浴びせかけてやつた。

「うまくやつてやがるなア!」

圓井はもじ〳〵しながら頬を染めて前を向いて了つた。が、吉村の方は矢張り前を向きながら平氣な顔をして云つた。
「おい淺見！　そんな厭やな眼で見ないでこつちへ話しに來いよ」
私はもう度胸を据へて彼等の方へ行つた。そして吉村の隣りに腰をおろした。二人の細君は改めてお辭儀をして云つた。
「宿がいろ〳〵お世話になりますさうで……」
看護卒はじろつと女達の持物の方に眼をくれたが、やがて、時計に眼をやつて、皆から體溫計を拔き出させて讀み始めた。
六度八分……六度三分……ほう、七度三分……
他の一人は傍からそれを記入してゐた。が、やがてこの室を終つて隣りの室へ出て行つた。
その七度三分と云ふのは私のであつた。夕方になるときつと出て來るのである。朝夕の二回計るのであるが、朝はいつもそれ程にない。尤も、昨日なぞは夕方でも六度四分しかなつたのだが。
もう僅かの熱ではあるがその高低がなかなか脫れなかつた。で、退屈に苦しんでる私達は時時病室へやつて來るAと云ふ小生意氣な上等看護卒を捉へては、パラチプスの講義をさせた。その講義と云ふのはこゝの病院長をやつてるS三等軍醫正が、このパラチプスのぽつぽつ流行し始めた時、中隊へやつて來て行つた衛生講話を眞似させるのである。ところがA上等看護卒は私達がからかふのだとも知らないで、眞面目くさつてS三等軍醫正の云つた通りの事を受け賣りするのであつた。
「上等看護卒どの！　毎日熱が上つたり下つたりするんですが、まだ血液の中にチプス菌がゐるんでせうか？」

から云つて私達は眞面目腐つた顏をして訊く。

「さうです」A上等看護卒はさう訊かれると用ありげに歩いてゐたその足をぴたりと停めて、仔細げなその首をその方にねぢ向けて云ふ。「無論、チブス菌がゐるのです。チブス菌と云ふ奴は元來が非常に弱い菌でしてな、そいつがどんどん人體内で蕃殖して勢力を得て來ると、その患者はその爲めにぐつと熱が出て來る。すると今度は菌の方がその熱の爲めにすつかり弱らされて了ふので、患者の方の元氣が恢復して熱が下つて來る。熱が下つて來ると今度は又菌の方が勢力を挽回して患者の體内で暴れ廻る――と、かう云つた具合で患者は一度チブス菌に犯されるとそれを絶滅しない限り、始終熱が上つたり下つたりして一定しないのです」

「はゝあ成る程――」と、感心したやうに云つて私は更に顏を眞面目に引きしめて云ふ。「なる程、してみると私のからだにはまだチブス菌がゐるんですね」

熱の昇降はあるが、併し最初中隊から休養室へ送られる時の、三十九度なんてやつはもう來さうもなかつた。チブス菌ももう衰滅期が來てゐるのだ。隨つて生命に關するやうな事のないことも知つてゐる。だから今、私の頭を惱ますものと云つては何一つない。考へる必要もない。若し要るものがあるとすれば、何か變つた出來事があつてそれをおもしろおかしく見物し、滑稽におしらい、やがて自分たちの背後に蹴飛ばして、その生活を賑やかにするやうに出來ればいゝのである。

A上等看護卒はやがて、院長氣取りでその大柄のからだを室外に運び出す。うしろではくす〳〵と忍び笑ひが交はされる。

面會に來た吉村と岡井の細君はいつか歸つて、灰色の暮靄が雨と一緒に病舍を包んでゐた。光りの鈍い、赤色の電燈

おぼつと高い天井に灯つた。

「今日は夕飯が遅いなア」私は吉村にかう云ひながら寢臺の上に寢轉つた。それから腹這ひになつて龜のやうに首を擡げて雨の庭に眺め入つた。雨に叩かれる櫻の葉がしきりにお辭儀をしてゐる。重さうに黄色くなつた病葉がポトリと落ちる。

「今夜は屹度ご馳走があるんだよ、それで炊事の奴手間を取つてるんだ」矢張り寢臺の上に寢轉つたまゝ吉村が呟くやうに云つた。「併しかうやつて寢轉つてる方が中隊で演習してる時よりも餘計腹が減るから妙だな。喰ひ物の事ばかり考へてるせいかな」

全くそれに違ひない――と思ひながら私はそれには答へないで云つた。

「おい吉村、來て見ろよ。櫻の葉つぱが黄色くなつて落ちるぜ。この青いやつが皆んな黄色になつてかさ〳〵に枯れちまふと、俺たちはもう除隊なんだな」

退屈に惱んでる吉村はのそつと自分の寢臺を降りて私の傍へやつて來た。國井までそこへ並んで硝子窓にその顔を押し並べた。

「まつたく古兵さん達はいゝですね。こいつが今度黄色くなりさへすりや家へ歸れるんだから」國井が羨やましさうに云つた。

「だつて仕方がねえさ。俺たちだつて去年は古兵がそんな事を云ふのを聞くと羨やましくて仕樣がなかつたもんだ。何しろこれでもう一年半我慢したんだからなア」じつと硝子窓に額と鼻の頭を押し當てたまゝ、吉村が云つた。

その時彼の顔には除隊の刹那を想像してるらしい喜ばしげな微笑が浮んでゐた。三人は無言で窓硝子に額を押しつけ

たまゝ、沈默に耽つた。私の頭には去年てうど今時分、病氣は違ふが顏面濕診でそれが眼にまで入つてつぶれかゝり、やはり此處へ入院してゐた當時の事が想ひ出されて來た。その時は僅か二十日で退院出來たが、矢張り梅雨期で、雨が毎日毎日降りつゞいてゐたのを覺へてゐる。私はその時も矢張りこの硝子窓に顏を押しつけては、黄色くなつて落ちて行く病葉を見つめてゐたのであつた。その時はこの同じ病葉に對しても今の心持とは違つてゐた。私は去年のその時の心持で今の國井の心持を察することが出來た。國井は暗い顏をしてゐる。光力の少ない、鈍い電燈の光りのせい許りでもないらしい。黄昏時、誰れの心をも襲ふメランコリーが、今彼の心を蝕ばんでゐるのだ。その中には若い細君を思ふ心もあらう。二人の子供を思ふ心もあらう。それだのに、自分はよし病が癒へて退院しても更にあと一年半と云ふもの嚴しい軍紀の下に兵營生活を送らなければならないのだ――と、思つてるらしかつた。

私は去年入院した時――最初は中隊から毎日治療を受ける爲め通つたのであるが少しもよくならない、終ひには左の眼まで繃帶して了ふやうになつたので入院させられたのであるが――此のまゝ一つ位眼が永久につぶれて了つても好い、「お前のやうな片眼は役に立たないから出て行け。徴兵を免除する」と云はれたかつた。さう云つてくれゝばいゝと思つて入院以來毎日〳〵よくなつて行く顏面濕診を呪つてゐたものである。片眼を失つて了つてから先きの事なぞは思ひもしなかつた。只、現在が救はれたかつたのである。併し、濕診はだん〳〵乾いて行つて痂も脫れ、繃帶も要らなくなつて行つた。眼の方も自然よくなつて了つた。

その時も病院の毎日は今と變らない退屈であつた。その時私はいつもこれから先きまだ一年半と云ふ永い間を過さなければならない軍隊生活の重みを、頭にも肩にも感じてゐた。途中で捨てて來た職業の事、友達の事、家の事、を想ふとたまらなかつた。どこから湧いて來るともしれないメラコリーに包まれて、よく、暮れてゆく窓外に眼をやつた。矢張

り雨の日が多かつたやうである。私は今やつてゐるやうに窓に鼻を押し當てて、雨の爲めに重くなつてる病葉がヒラ〳〵ツと舞ひ落ちるのを眺めてゐた。現在に救はれることを思ひあきらめなくてはならなくなつた私は、せめて半年後に私達を押さへつけてゐる古兵たちの除隊を待つ心になつてゐた。全部の自由は得られないが半分、よし三分の自由でも好い。早く自分達を無法に虐げ、侮辱し、壓迫する古兵達の手から脱れたい。それには、あの櫻の葉が黄色くなつてカサ〳〵に散つて了へばいゝのだ。晩秋、初冬――それこそ私達の世界になる日だ。私はさう思つて雨に落ち散る病葉を見てゐたのであつた。――

無言の三人はやつと硝子窓から顔をはなした。外が暗くなつて何も見へなくなつたからである。

三

夕飯がいつか卓子の上に並べられてあつた。三人は矢張り無言で卓子を圍んだ。

「岡井！　お前家へ歸りたいだらうなア」

食事の終つた時、私はかう云つて岡井の顔をみつめた。彼はやはりさつきのまゝの何か思ひ惱んでるらしい暗い顔をしてゐる。懶さうに顔を上げた岡井は沈んだ聲で「ええ」と曖昧な返事をしながら、淋しい笑ひをその顔の上に浮べた。

「歸りてえや實際！　かうしてこんなとこにぐづ〳〵してると餘計日のたつのが遲いやうな氣がしてなア」

吉村がふいつと横から頓狂な聲で口を入れた。彼は實際、日が經つのがもどかしいやうにからだをじり〳〵悶へさせてゐる。が、その焦燥の一皮奥にはいつも悦びと惱ましさとがこんがらかつて、渦を卷いてゐるやうな色が潜んでゐた。

「吉村なんざあ氣になるだらうよ。貰つたばかりで直ぐ別れて來たんだから」

「全くだよ」吉村は待つてました、とはぬばかりの調子で勢込んで云つた。「何しろ籤に脱れた事とばかり思つてそのお祝ひと、前から約束のあつた婚禮とを一緒にしたわけなんでな。ところが十日ばかり經つてえと補缺で入營つて事になつたんだからな。お祭しを願ひますよ」

「そりや本當にお察しするよ、吉村閣下も定めしご心配だらうて」今までの甘い憂愁は吉村の頓狂な聲で破られて再び、如何にも兵卒共の寄り合ひらしい空氣になつて了つた。私は云つた。「何しろ吉村のそのご面相と來たらたいがい花嫁御もいやになるだらうよ。で、精々長く隊にゐてくれるやうに……一年の處を十二年ぐらゐ居てくれるやうに、つて鎭守さまへ朝晩お參りしてることだらうよ。で、その間にこつそりとな…　アツハハハ」

「ふざけやがつて、啖らはせるぞ！」吉村は如何にも冗談らしく拳固を振り上げて私の顏を睨まへた。が、その顏は悅しさにはち切れるやうだつた。

國井は只、そんな冗談を聞いても淋しげな微笑を洩らして傍にゐるばかりだつた。

「さア、啖らはしてくれ！　嬶が今日面會に來て何かうまいもんでも持つて來たんだらう。いつまでも藏つて置くと近頃の雨だ、黴が生へちまふぞ」

「いや、ところが」と、吉村は振り上げた拳固をいつか引つ込めて、目の前にあぶなく振り廻しながら云つた。「嬶の奴の氣が利かねえつたらないんだ。持つて來たのはいゝが、風呂敷包みにして大つぴらに營門を入らうとしたんだ。ところが、衞兵の奴に「それは何んです」と訊かれると、病人に持つてつてやる饅頭がはいつてる――つて、さう云つたんださうだ。それで密輸入は忽ち露見、押收さ。で、今日よく云つといたよ。今度來る時にや風呂敷包みにして帶の處へぎりぎり卷きつけて來い、つてね」

「へえ、よく、腰巻の中へ包んで股ぐらへ吊るし下げて來いつて云はなかつたなア」私がかう云ふと、吉村はまた拳固を振り上げて云つた。

「あんまりふざけやがるとほんとに喰らはせるぜ。だが、股ぐらで思ひ出したが俺も新兵の時、そんな事があつたよ。何んでも日曜の日で練兵休で外出の出來ずにゐる古兵の奴に賓萊豆を五十錢買つて來てくれ、つて頼まれたんだ。食物を持ち込む事は厳禁なんてことは、疾うに承知の助さ。だがそれ、古兵殿の仰言ることを否やだと云ふわけにやいかねえ。で、到頭引き受けて買つて來たんだ。が、さア營門を持ち込むのに弱つたね、ポケットにやはいらねえし、と云つて幾つにも分けて入れりやふくらがる、どうにも方法がつかねえんだ。散々考へた揚句がなによ、ズボン下をまくし上げて二つの袋に分けた豆を兩方のふくらぱぎの處へ一つづつ入れ、紐でくゝつて平氣な顔をして營門を到頭無事通過さ。だが心配だつたぜ、營門を通る時若しズボンの下からポロポロこぼれ落ちやしないかと思つてなア。まつたくぶん毆られた上營倉に叩き込まれるくらゐの覺悟でなきや出來ない藝當だよ」

この時扉がすうつと押し開かれて肩から雨を浴びた一人の兵がぬつと姿を現はした。私達は一齊にその方へ眼をやつた。それは班の太田と云ふ初年兵であつた。彼はそこの隅つこで規則正しい敬禮をして、それから卓子の近くへ進んで來た。

「やア太田か、何か用か？」

私は彼の濡れそぼつた姿を見ながら云つた。

「ええ、手紙を持つて來ました」太田はかう云つてポケットから葉書を一枚取り出した。何んでもない友人からの時候見舞であつた。

「どうだ、忙しいか？」

「えゝ。明日から後備の人達がうちの中隊だけへ五十人も入つて來るつてんで大騒ぎです。そして第三大隊は近いうちにその後備達ちと一緒に相馬ケ原の演習廠舎へ行くんださうで、もう滅茶〱に忙しいんでよ」太田はまるで棒杭のやうに突つ立つたまゝ、眼をぱちぱちやりながら云つた。

「さうか、ぢやア忙しいなア。……だが、そんなに不動の姿整なんか取らないで腰でもかけろよ」私は顎で空いてる腰掛を示した。「だが今日はもう用はないんだらう。點呼までにまだ一時間ばかりある。話してけよ」

だが太田は腰をおろさうともしないで歸りたさうにもじ〱してゐる。が、また思ひ切つて歸らうともしない。

「それに明日は中隊の特別射擊があるんで四時に起きなきやならないんです」太田は黑い日に燒けた顏をまぶしさうに瞬きながら、また思ひ出したやうにさう云つたのである。

「中隊ぢやばかに忙しいんだなア、ところがこゝと來ると用がなくて退屈で退屈で弱つてるんだ。だが餘り忙しかつたらどうだ、骨休めに二三週間も入院しちや。どうかして少し熱でも出せりや今は直ぐ入院させるぞ」

太田はそれには答へないで只、にや〱と笑つたばかりだつた。と、扉がまた外から押し開かれた。佐山看護長が入つて來たのである。私達は立つて皆んな敬禮した。佐山看護長は形式だけ答禮して「やア、何か面白い話はないか」と云つた。

また今日は宿直なんだな――と私は思つた。佐山看護長はいつも自分の宿直の時には病室へやつて來て、いつまでもいつまでも話し込むのである。この前の宿直の時には、聯隊の方で消燈喇叭を吹き始めた時やつと歸つてつた程であつた。彼はまるで百姓爺のやうに頰髭を一杯生やしてゐる、もう滿期にならうと云ふ年輩の、人の好い一等看護長なので

ある。その上官ぶらない碎けた態度が、患者たちからばかに好かれてゐるのであつた。
どうだ、東京にや何かうまい金儲けはないかなア——佐山看護長は私の顔さへ見ればいつもかう云ふのである。如何にも呑氣らしく構へてゐる老兵ではあつたが、もう直き滿期にならうといふ自分自身を顧みてゞあらう。除隊後に於ける自分の社會生活を思ふと如何にも心細くて耐らぬと云つたやうな風であつた。
佐山看護長は腰を据へて了ふと煙草に火をつけながら云つた。
「やア、集まつてるな。大分話がはづむぢやないか。うまい儲け口があつたら俺にも一口載せてくんろや」
佐山看護長はかう云つてチラッと、人の好い笑ひを見せながらそこに棒杭のやうに突つ立つてる太田を見た。そして太田に對つて今度は云つた。
「お前、無暗に病院へ入つて來ちやいけないね、面會時間はもう切れてるぢやないか。おまけに消毒衣も着けないで入つて來てさア。こゝにゐる奴は皆んな怖るべきパラチブス患者なんだよ」
太田は困つたやうにもじ〳〵しながら「ハツ、ハツ」と云つてゐたがやがて「淺見殿、太田はもう歸ります」と云つて固くなつて敬禮した。
「なに、好いんだ太田！　看護長殿がこれから面白い話を始めるから聞いて行けよ、點呼までにやまだ大分時間があるぞ」
私はかう云つて、佐山看護長の顏をひよいとおどけたやうな顏で見上げた。
「うん、この太田と云ふ兵は淺見の中隊のものか。ぢや好い、さア立つてないで腰をかけろ。俺も除隊になつたら淺見のゐる東京へ出て行つて一旗揚げるつもりだからな」

佐山看護長はかう云つて無理に太田の手を執つて腰掛に引き据へて了つた。
「看護長殿！　一旗揚げるなんたつて醫者の代診か、薬局の藥盛りぢや揚げ榮えがありませんね」
「また、この野郎！　代診代診云ふなよ。啖らはせるぞ！」
佐山看護長は先つき吉村がやつたやうに拳固を振り上げて、私に打つてかゝるやうな虚勢を示した。
「ほう、衛戍病院なんかにも「啖らはせる」なんて言葉が通用するんですか」
「どうも淺見は口が悪くていかんな」佐山看護長はかう云つて忘れられたやうに腰を掛けてる太田に向つて云つた。「どうだ、太田。お前なんかこの淺見にうんと啖らはされたらうなア」
太田は只、遠慮深さうに目で笑つただけであつた。
佐山看護長の眼は何か退屈をまぎらすものはないかと云つたやうに敏捷に動いてゐる。彼は駄々つ子らしい口調で云つた。
「吉村は相變らず幸福さうなつらをしてゐるし、岡井と來たら又ばかに悲觀してるし、淺見の奴と來たらひとを代診代診云ふし、どうもこの八號室と來たらなつちや居らんよ」
さう云つて佐山看護長は慌てゝ消えかゝつた朝日を口に持つて行つた。
「看護長どの！　今度の檢便はいつでせう？　どうも病院にゐると樂の代りに時間が長くてつまらない事ばかり思ひ出せて仕様がないんです。どうか早く退院させて貰ひたいもんです」
吉村は實際早く退院さして貰ひたいと云つたやうにまじ〳〵と佐山看護長の顏を見ながら云つた。
「早く退院したいなんて贅澤だ。此の前の檢便の時にはお前のに一番澤山チブス菌がゐたんだぞ。此の中ぢやまア一番

遲く退院するのがお前だなア」佐山看護長は眞面目とも冗談ともつかず、煙をぷーつと吐きながら云つた。「お前達は皆んな三大隊だつたな。三大隊と來たらいつの年もチブス患者の初發で有名なんだ。そして此の室なぞ三大隊で占領してるぢやないか」

「三大隊と云へば今度、朝鮮守備に行つてる第十中隊が歸つて來るさうですね。この間班長殿がそんな事を云つてましたよ」

今まで默つてゐた太田がふと思ひ出したやうに云つた。

「なにツ。十中隊が歸るつて、朝鮮から……」佐山看護長がびつくりするやうな頓狂な聲で云つた。「今はどうかしらんが、あの中隊の兵隊と來たらそりや亂暴者がゐやがつてなア」

皆んなの眼が佐山看護長の顏に吸ひつけられるやうに注がれた。その時私は明らかに、彼の顏に何かを認めたやうな氣がした。何か奇拔な事を云つて愕ろかしてやらう、と云ふいつものお茶らけ半分の彼の顏でない、眞面目なものであつた。が、十中隊と云ふと私の頭にも一つ、忘れる事の出來ない話が植へつけられてゐた。その話は、私達が一昨年の冬初めて新兵で入營して來た日の晩、古兵達が話して聞かせた凄慘極まるもので、私達はその話一つで軍隊と云ふ世界が如何にも氣味の惡い、無政府狀態にあるものだ、と云ふことを知らされてすつかり怖毛を震つたものであつた。が、その話が餘りに慘酷なだけに却つて眞實らしくなく、心の一面では大方そんな作り話をして何も知らないおれ達ち新兵を愕ろかすんだらうと思つた程であつた。で、私は思はず看護長の方へ膝を乘り出すやうにして訊いたのであつた。

「看護長どの！　十中隊の兵隊が何か亂暴な事でもしたんですか？」

吉村の眼も、岡井の眼も、太田の眼も、それからさう云つて訊いた私の眼も、その瞬間ぐつと呼吸をつめて何んと云

ひ出すか、佐山看護長に好奇心に燃へる眼を投げかけたのであつた。

「話はかうなんだ」と、佐山看護長は煙草の吸殼を空火鉢に投げ捨てゝ頭を押さへながら云つた。「俺は今でこそ衞戍病院の看護長をしてるが、新兵で入營する時にはこれでも本科兵で、その第十中隊へ入營したんだ。まだ朝鮮へ行かない前でな。何しろ十年も前の事で詳しい事は忘れて了つたが、何んでも寒い朝だつたのを覺へてゐる。朝の點呼の時に、いつ脱營したものか昨夜まで一緒だつた俺達仲間の新兵が一人見へないんだ。いくら探しても分らない。郷里へ紹介したが、家の方からは來た形勢はない、影も形も見へない、と云つて來る。そのほかこれつて云ふ手がかりがないんで、そのまゝ脱營と云ふことでいつ忘れられるともなくその兵の事は忘れられて行つたんだな。今でもさうだが脱營兵と云ふ奴はいつの年にもあるし、自首して出るものの外は大概分らずじまひになるもんだからな。憲兵隊の方でも果して探索してるものやら又毎々の事なので放つたらかして置くものやら、そこは分らないが、兎に角、その新兵はそれつきり其の晩の内に姿を兵營から消して了つたのさ。ところが冬が去つて春が來て、俺は衞生隊へ廻されて衞戍病院附きとなる、中隊は中隊で朝鮮守備に行く事となつて、あそこはあの通りの空家になつちまつたんだ。それから二三年經つてからさ。各中隊から二三名づつ十中隊に殘してある被服類の手入れに不時使役で行つたんだ。その時誰れかゞひよいと何の氣なしに天井を見ると、水だか油だか分らないが天井板にじつとりと黑くしみが出てゐるんだな。それが不思議な事によく見るとどうも人の形になつて見へると云ふんだ。で、それを見つけ出した奴がそれを云ひ出すと、他の奴も見て、どうしても人間の形だ。が、それにしてもあのしみは一體なんだらう? 雨漏りにしちやへんだが——てんで、忽ちの内に大騒ぎになつたらしいんだね。で、その時の不時使役の指揮官であつた中島と云ふ本部附きの曹長が、誰れかからだの輕い者が天井へ上つて調べて來いつてんで、無理矢理に一人を上げたんださうだ」

佐山看護長はこゝまで話して來て一寸言葉を切つた。そしてじつと聞き入つてる皆んなの顏を見廻はしてから如何にも興味をそゝるやうに一句挾んだ。「どうもその頃の兵隊と來たら人間とは思へない事をするんだからな」

私はこゝまで聞いた時、自分が入營早々の晩に古兵達から聞かされた話とそつくりなのに、やつぱりあれは事實だつたのかな——と思はずにはゐられなかつた。只、違つてる處と云へば、古兵達は如何にも自分が直接それを見たかのやうに話したことであつた。古兵達はかう云つたのである。

——何しろその新兵つて奴が横着な强情つ張りだつたんだ。なんでも入浴に行つて自分のボロ靴と、古兵の上等のやつとすり換へて來てかくしといたんだ。ところがそれが見付かつちやつたんだが、何んと事つても白狀しない、頑固に默つてるんだ。で、盜まれた古兵がいきなり横つ面をポカンと喰らはしたんださうだ。そりや無理はねえさ。新兵が惡いんだからなア。ところがどうだい、そん畜生餘つ程めんくらつたと見へ毆つた古兵にいきなり喰つてかゝつたさうだ。で、結局周り中の古兵から袋叩きさ。袋叩きはいゝが、その時誰れかの打ちどころが惡かつたらしい、うーむと云ふと引つくら返つちやつたのさ。いくら水をぶつかけても、淸心丹を口へ入れてやつても息を吹き返さない。が、さうかつて軍醫の處へ飛んでいくわけにも行かない。到頭皆んなして天井へ吊るし上げちまつて知らん顏をしてたのさ。何しろ古兵の方も要領がいゝやな。わざ〳〵そいつを中隊の器具室へ呼び込んで、古兵全部でやつた仕事だからどこからも知れようがない。しかし軍隊つて有難いとこさ。その叩き殺された奴は脫營と云ふ名儀でそのまゝ天井で腐つて、その形なりに腐つた水だか油だかゞ天井板に滲み拔けて來たのさ。——

一年半ばかり前の入營した晩に聞かされた古兵の話は今、私の頭にまざ〳〵と蘇つて來た。私は軍隊つて恐ろしい處だと思つた。それは實際あり得ない事ではない、自分もいつそんな日に逢ふか分らない、と云つたやうな危惧であつた。

佐山看護長はじろつと四人の顔を見廻はしてから更につゞけた。

「天井へ一人が這ひ上ると中島曹長を始め皆んなその下へ集まつて、ぽかんと口を開いて、何が出て來るかしらん、と云つたやうに待つてたのさ。なんでも天井へ上つた奴は、天井を這ひながら臭い臭い、云つてたさうだ。ところがやつとしみのある邊へ行つたなと思ふ時分、うわーつと云ふやうなへんな叫び聲を發してどんどんと、まるで天井板が抜け落ちるやうな響きをさせて自分の這ひ上つた穴からどすーんと落つこちて來たのだ。皆んな下にぽかんと口を開けてた奴らは愕いちやつたあね。どうしたんだ、どうしたんだ、つていくら訊いても口が利けないのだ。たゞ目を白黒させて恐ろしさうに唇を震はしてゐるんだ。水を呑ましたり仁丹を口へ入れてやつたりしてやつと少し落ち着いてから訊くつてえと、何んだか人間らしいものが腐りかゝつて軍服の中には骸骨だけがからごそ〳〵と突つ張つてると云ふのだ。さア、それからが大騒ぎさ。聯隊中の評判になつたあね。病院からは軍醫がゆく、俺はその時三等看護長になつた許りだつたが、その軍醫に附いて見學に行つたのさ。肉はすつかり腐つて蛆がボソボソ目玉を出はいりしてる始末なんだ。で、軍服を引つぺがして裏を見ると、そこの片布に、えゝ、何んとか云つたなア……ええと、さうさう、木村由松つて書いてあつたんだ。で、あとで調べたところに依ると、何んでも三年許り前に脱營して行衛不明になつてる兵だと云ふことだつたがね」

佐山看護長はこゝで話を途切らした。皆んなホツと息をついて顔を見合はせた。が、誰れ一人口を開かうとはしない、病室内はまるで屍室のやうな無氣味な靜けさが占領してゐる。皆んなの心臓の動悸がはつきりと聞こへるやうだつた。耳をすますと、戸外にはまだ雨が降つてるやうだつた。櫻の葉にあたる雨の音までがざわ〳〵聞かれた。

「おい、何んとか云つたつけな。お前……うん太田か、もう點呼になるぞ。早く歸らんとおくれるぞ!」

佐山看護長は腕時計を見ながら太田に注意した。話の始まる前までもじ〱してゐた太田は、まるで魂が抜けたやうにぽかんとしてゐたのである。が、看護長にさう注意されると、ハッとしたやうに器械的に立ち上つたが、一寸窓の外をすかして見て、やがて室を出ていつた。

太田が出て行つて了つても、室内の空氣はまるで凍つたやうに沈靜を保つてゐた。——やつぱりあの話は事實だつたのだ。私がこれまで噓だ噓だと否定してゐたその事が、かうしてその屍體に立ち合つたと云ふ佐山看護長に堅く裏書されて見ると、ちよつと何んと云つていゝか分らない、複雜な感情が胸に充ちあふれて來るのだつた。妙に重苦しい壓迫だつた。何が悲しいのでもないが、泣きたいやうな氣持であつた。國井はゐるのかゐないのか分らないやうに固くちよこまつて、先つきよりか一層憂欝にその顏を曇らしてゐた。

「で、その屍體が發見されて結局どうなつたんでせう？」

吉村が臆病さうな眼を瞬ぎながらかう云つて訊いた。

「どうもかうもあるもんか。そんな事を今更發表して騷ぎ出しや問題が大きくなつて聯隊のいゝ恥つ晒らしだな。だから結局、木村由松はそのまゝ闇から闇へ、天井から陸軍墓地へと移されたのさ」

まつたく恐ろしいこつた——ぞくぞくつと惡寒が脊中を走つた。

「今度退院でもして日曜に外出したら陸軍墓地へ行つて見ろ。「木村由松」つて小さな墓標があの西の隅の方に立つてるから」佐看山護長はにや〱と、駄々つ子らしい笑ひをまた髭の奥に潛ませながら云つた。「だが、今年も話を聞くと第三大隊から大分脫營兵が出てゐるやうだが、淺見や吉村はまさかそんなことはすまいね」

「冗談云つちやいけませんよ、看護長殿！」

吉村は恐ろしさうに唇をふるわして云つた。が、私は吉村とは違つた意味での恐怖が頭のてつぺんから足の先きの方へ突き抜けたのを感じた。云ふことをきかない横着な新兵の誰れ彼れを、他の古兵仲間と一緒に何んの考へもなく毆つたのを思ひ浮べたのである。或る時は頰の一撃で口の中からたら〳〵血を垂らした者もあつた。又或る時はパシーッと云ふ音と一緒によろ〳〵とよろけて、いきなり寢臺の隅に胸をぶつつけた者もあつた。若しその時、打ち所でも惡かつたら——私は今になつて及ばないその時の後悔にぞつと顫へ上つたのである。

併し、そんな事は私一個でなく、私の見聞する範圍に於て毎日一件二件はあつた。殊に私が入院する一ケ月許り前には、私の方の班長は些細の事から上等兵を咬らはして耳の皷膜を破つて了つたのである。そして二十日ばかり營倉に打ち込まれたのであつた。

やがて營庭の方から日夕點呼の喇叭が雨の爲めに冴へない音を立てて、この病院にまで流れ込んで來た。佐山看護長はふつと彈かれたやうに立ち上つて云つた。

「ぢやあおやすみ！　明日はまた新入患者がうんと來るんでね」

間もなく消燈喇叭が鳴りはじめた。が、流石にこゝは病院だけにその消燈喇叭を無視して、電燈はいつまでも私達の眼の上で輝いてゐた。寢臺の上に仰向けに寢てゐる私の眼はなかなか閉じない。頭がいやに昂奮してゐてどうしても眠れないのである。案外の雨の音がいつまでもいつまでもしと〳〵と櫻の葉に降りかゝるのが聞こへる。とろ〳〵としたかと思ふと、天井にじつとりと黑く、人の影が浮み上る。

ハツと、私の神經は慄へ上る。よく心を沈めて見直すと、電燈の笠の影が薄く黑く、ぼんやりと映つてゐるのであつた。呼吸が苦しい。頭がづきん〳〵痛む。熱が出たのかなと思ふ。またいつかとろ〳〵とする。私は思ひ切つて寢返り

を打つて天井の幻影を避ける。右に左に轉々する。と、あちでもこちでも寢臺をぎしぎしきしませる音がしてゐる。私は三度び四度び苦しい眠りに落ちる。

四

寢苦しかつた夜が明けると、外は矢張り雨であつた。青葉はぐつたりと疲れたやうにうな垂れてゐる。看護卒たちが雨の中を竹箒で掃いてゐる。黄色くなつた病葉が一枚二枚、泥の庭に吸ひつけられて離れないのをもどかしがつてばりばりやつてゐる。洗面を終へた私達はまた硝子窓にぴつたりと鼻の頭をくつ着けて、それを眺めた。また懶い、退屈の一日が始まるのである。

ぼそぼそと生え延びた顋髭が氣持ち惡く手に觸る。今日こそ頭を刈つて貰つて髭を剃らうと思ふ。吉村の髪も可なり伸びてゐる。國井のも。

「佐山看護長の奴、あんな話をするもんだから昨夜は眠れなくて弱つちつた」吉村が懶さうな聲で云つた。

「俺達はね、始めて入營した晩に古兵達からあの話は聞かされたんだよ。それを又聞かされたんで、愈々印象がはつきりして來て、まるで自分が直接見たやうになつちまつたんだ。で、昨夜は寢てからも天井にありありとから人の影が、黒いしみになつて現はれてるんで怖ろしかつたよ」

しかしかうは云つても、昨夜のあの恐怖は今は頭のどこにもなかつた。あらためて天井を熟視しても、そのどこにも不思議はありさうになかつた。

この雨の降るのに營內射場の方からポンポン銃聲が響いて來た。ふと、昨夜太田の云つた事が思ひ出された。中隊の

特別射撃だな——と。それから後備兵があの今でも一杯の中隊へ五十人も召集されて來る。朝鮮からは間もなくあの十中隊が歸つて來る。第三大隊は又、相馬ヶ原の演習廠舍へ三週間も出張する。そして馬のやうに、寢臺のない、藁の上へ寢る——考へただけでも氣が重くなるやうなことばかりだつた。それに今考へて見ると、私がパラチフスになつたのも、あの相馬ヶ原に行つた時に取りつかれたらしかつた。强行軍で夜おそく歸つて來ると、その晩から熱が出たのであつた。それはたつた二泊の行軍ではあつたが、梅雨の霽れ間のカラッと晴れた蒸し暑い日であつた。私達はそこで二日つゞいて可なり猛烈な戰鬪教練をさせられたのであつた。暑いので水は可なり飲んだ。ところが演習が終つて講評の結果大隊中で私達の第十二中隊が一番成績が惡かつたのである。講評の席から歸つて來た中隊長は恐ろしく機嫌が惡かつた。他の中隊は順次、歸營行軍を始めたのに、第十二中隊はそれから又猛烈な中隊教練を始めたのである。兵隊が思ふやうに動かないと云つては、自棄になつた中隊長はその指揮刀で、滅茶〳〵に足にからまる雜草や、灌木を叩き切る。終ひには指揮刀がへらへらと弓のやうに曲つて了ふ。が、中隊長はそれでもまだ屈しない、いつまでもいつまでも灌木を叩き切り、叩き切り演習をつゞける。

私達はその時幾度あの相馬山麓の傾斜地を驅け登り驅け降りたことだらう。幾度、重い背嚢を背負つて、灌木の根つ子につまづいて倒れたことだらう。疲れた足はちよいとした障害にも躓き倒れるものである。やけになつた下士官達ちはその度びに靴でもつて蹴りつけるのである。さうして私達のからだがへとへとに疲れ切つた時、そして腹が減り切つた時太陽は漸く、重疊とした山脈の間に沈みかけたのである。

山麓の初夏を彩つてゐた山百合、桔梗、撫子、と云つたやうな可憐な花は此の一演習で滅茶〳〵に踏みにじられて、中隊長の指揮刀が鞘に納まつた時には又と見られないやうな、荒涼とした光景を呈してゐたのであつた。

「我が歩兵××聯隊はT町に向ひ退却中の敵を攻撃する目的を以つて只今、この地點に到着をした。我が第十二中隊は軍の尖兵となつて更に追撃行軍をする！」

愈々歸營行軍と云ふ時になつて更に、中隊長は沈みかゝる夕陽に半面を赤く染めながら、かういふ演習上の想定を與へたのである。そして中隊は直ぐ驅け足でもつて聯隊に向ひ歸營行軍を始めたのである。

私達はもうぶつ〳〵と不平を呟き合ふ氣力さへその時なかつた。からだはぐつたりとして了つて足を持ちあげる元氣もない、辛くも引き摺つてゆく。腹は減つて呼吸をするのさへが懶い、休憩の度びに私達は背嚢を背負つたまゝ無言でごろつと仰向けに倒れる。田圃の間を流れてる細流を水筒に掬ひ込んでは幾度か呑んだ。「集まれーッ」の號令で雛の子のやうにごそ〳〵と、重い背嚢をぶつつけ合ひながら立ち上る。又、驅足は始まる。——

かうして私達が聯隊へ歸つて來たのは夜の九時過ぎであつた。夕飯は、この行軍に參加しない殘留者に依つて用意されてあつたが、餘り疲れて空腹になつたせいだらう、どうしても喉を通らなかつたのである。

私はその晩非常に喉が乾いて幾度か水を飲みに起きた。起きる度びに非常な寒さを感じた。それは普通の寒さではない、身内から湧き上る寒さであつた。惡寒であつた。足の裏はづき〳〵痛んで歩くのに骨が折れた。ばかりでなく、曉方にはからだ中の關節が打ちのめされるやうに痛んで、毛穴がぞうつと鳥膚のやうに立つてるのである。頭はふら〳〵して喰べ物はどうしても喉を通らない。非常な熱であることは自分にも感じられた。

私は診斷を受けた。

體温計を見ながら「四十度三分ある」と軍醫は云つた。よくこゝまで歩いて來たなア、とも云つた。私はそのまゝ中隊へ歸ることを許されないで、休養室へ收容されたのであつた。パラチブス疑似患者としてである。

最初は私は只、うと〳〵と眠つてばかりゐた。中隊からは毎日々々初年兵達が交替で飯を運んで來た。私はちよいとそれを突つついて見るだけで、殆ど喰べた事はなかつた。お湯ばかりがぶ〳〵呑んだ。いつ營倉から出て來たのか、私達が相馬ケ原へ演習に行く頃まだ營倉に入つてた班長が見舞に來た。上等兵も來た。その休養室にゐる間に幾度か血液檢査が行はれた。糞便檢査も行はれた。二週間目の日、私は到頭パラチプスと決定して、垣一重隣りの衛戍病院傳染病室へ移されたのであつた。が、私が愈々チプスと決定した時には、私のからだの中にはチプス菌がまだゐたかもしらないが、元氣はもう非常に恢復してゐたのである。三十七度、八度と云ふ熱は時々出たが、もう苦しい意識を失ふと云ふ程の熱ではなかつた。飯も固い麥飯を一人前づつは平げた。尤も、休養室にゐて中隊から運んで貰つてゐた頃から見ると量に於ては半分ぐらゐしかなかつたが。

五

私が一號室と云ふその傳染病室へ移された時、そこには私のほかに十人許りの矢張り同じパラチプス患者が寢てゐた。如何にも病人らしく青い血の氣のない顏をしてゐた。食事の時見ると、その大部分は重湯をすゝつてゐた。その中で麥の普通食を喰べてるのは私一人だけであつた。

私達が始めて新兵で入營して來た時、新兵掛りのO中尉が營内を隈なく案内して、こゝは酒保、こゝは浴場、こゝは兵器倉庫――と云つた具合に說明してくれたのであつた。が、最後に衛戍病院に入つた時、O中尉は孤立した白いペンキ塗りの建物を指して、あれは傳染病室である。皆んなは、あんなとこへ入らないやうに衛生に注意しなければいけない、あれへ入つた者は殆ど助からない。――と云つて說明してくれた事を、私は今でもはつきりと覺へてゐる。で休養

室から、あの白い傳染病室へ移されると聞いた時、私は如何にも情けない悲しみに打たれたのであつた。あそこへ入つた者が全然助からない、と信じて思つたわけではなかつたが、自分と云ふものが妙に一段低い處へ貶黜され、隔されたやうに感じたのであつた。

寢臺には夫々の官等氏名が記されたブリキ板が下つてゐた。が、私は今、彼等の夫々の名を記憶してはゐない。私の頭には今、彼等が皆、餓狼のやうにさもしい人間だと云ふ印象しかない。

營庭の方で喫食喇叭が鳴り響くと、こゝでは間もなくカランカランとベルが鳴るのである。すると、今までぺちやくちや喋つてゐた十人許りのこゝの患者は一齊に口を噤んで、入口の方に注意の瞳を向ける。寢臺の上に半身を起して首と一緒に前後左右に振り、何者かの來るのを待つ。と、間もなくそこへ、彼等の眼の前に、二人の看護卒が木で作つた擔架のやうなものの上へ、飯を容れた食器を載せて現はれる。

「どつこいしよ」と云つて看護卒は重さうに擔架をおろす。すると、今まで首を延ばして待つてゐた患者達は各々に、皺枯れたやうな聲を立てて叫ぶ。

「おい、こゝへ一つ!」

「おれのは重湯ぢやねえ。お粥の方だぞ!」

が、また中には食器の蓋を脫つて見てがつかりしたやうに呟く。

「おれはもう熱だつてそんなにねえんだし、お粥になつたつて好いんだがなア。まだ重湯でけつかる。箸に引つかゝりやしねえぢやねえか」と、さう云つて重湯の中をお箸をもつて無暗に掻き廻すのである。

「おれは今度、軍醫どのが來たらさう云つてやる。いつまで重湯で置いてからだが疲れるばかりだつて」と、中には不

平さうにこんな事を泣くやうに呟く。

「馬鹿云へ！　そんな事を云はうもんならまた軍醫どのからお說敎だぞ。パラチプス患者は絕食療法をやらなくちやよくなりやせん――てな。おかげさまでチブス菌ゝ方も參つたらうが、肝腎のご本尊も弱つちまつたよ」それはお粥に昇進した一人である。

が、そんなことを云ひながらも、彼等十人の眼は皆んな私の食器に注がれてゐる。妬ましさうに、憤ふろしさうに。私のは重湯でもなければお粥でもないのだ。お箸の上にちやんと載つかる普通食なのだ。

と、それを見た彼等の一人はいきなり叫ぶ。

「そんなものを俺たちのゐる前で喰ふない。見たばかりで癪に觸らア」

彼等はいつも何かしら喋つてゐる。それが喰べ物の話ばかりである。

「おれは今度退院して外出したらしる粉を腹いつぱい喰べてやる」

「なに、おれは餅菓子と羊羹とすしと……うう、なんでも搆はねえ、手當り次第だ」

普通食とは云へ、量に於ては半分だ。私も實際腹が減る。誰れかそつと、中隊の新兵でも來て酒保から餡パンでも堅パンでもうんと買つて來てくれゝば好いが、と思ふ。こんな傳染病室へは入れられたが、私の病氣は休養室にゐる時から見ればもうずつと衰へてゐるのだ。それは自分でも分る。あの相馬ケ原から强行軍で歸つて來た時の苦痛、その晚の發熱、惡寒、關節の疼痛――をしみじみとした氣持で顧みる。よくこれまでになつたなア、と有難いやうな氣になる。

同室患者たちは今は、食事の時ばかりでなく、ふだんでも私を除外して憎惡の眼を向けてゐる。話の相手にもならうとしない。それはどこから來てゐるのか、と云へば只、私が彼等と違つた重湯でない普通食を喰べてゐるからなのであ

る。

しかし室の隅にはまだ二人、可なり熱の高い患者がゐた。二人は喰べ物の騒ぎどころではなかつた。頬も額も熱に上氣させて時々囈語を口走つてゐた。額の上に吊るし下つてる氷嚢からはもや〳〵と水蒸氣が立ち昇つてゐた。二人は食事になつても箸をつけようともしない、いつもそのまゝ下げさせてゐた。他の患者達はいつも傍に附いてゐる看護卒の顔と手のつけられない二人の重湯とを、饑慾に充ちた眼で見比べてゐた。それらの眼は野良犬のやうに光つてゐた。傍に看護卒さへゐなかつたら、飛んで行つて奪つて了ひさうな青筋を額に漲らしてゐた。私は食事の時が來るのが、彼等と同じに待ち遠しくはあつたが、同時に怖ろしかつた。そこにいつ恐ろしい野良犬の咬み合ひのやうな爭鬪が演じられるかしれない、と云ふ或る事の豫感であつた。

が、到頭或る日——それは私が此の傳染病室から輕快患者の居る八號室に移される日であつた——彼等が辛ふじて保つてゐたその假面は到頭保ち切れないで、その獸性を曝露して了つたのである。

カンカン……カンと朝の喫食の鈴が鳴つて、看護卒が「どつこいしよ」と云つて食事の載つてる擔架を持ち込んだ時、大勢の者は看護卒が分配してくれるのが待ち切れないで、寢臺から飛び降りるより早くひよろ〳〵する足で各自の食器を浚ひ揚げたのである。で、或る者は手にするより早く一息に啜つて了ひ、又、或る者は物足りなさうな顏をして、いつまでも重湯の中に箸を突つ込んで掻き廻してゐる。

「君！　その寢てゐる人はやつぱり喰べないんだらう。僕に少し配けてくれないかね？」

到頭云つたな——と思ひながら私はひよいと聲のした後ろを振り返つた。第八中隊歩兵上等兵——と云ふ名札の下つてる寢臺の持主が云つたのである。いつも食事の時と云ふと、私の食器を覗くやうにしては「癪に觸るなア」と云ふそ

の人なのである。

「はゝあ、そんな事をしようもんなら私達が軍醫どのに叱られて了ひます」

食事當番の看護卒は初年兵だつたのである。彼等は歩兵上等兵に對して「馬鹿云へ！」と頭から極めつけるわけにもゆかず、さう云つて穩やかに拒絶したのであつた。

「だつて軍醫殿に分らなけりやいゝだらう。君！　軍隊は要領一つだよ」

上等兵は飽くまでしつこく云ふのである。が、看護卒は二人ともにや／＼薄笑ひしながら默つてゐる。と、上等兵はまるで命令口調で今度は極めつけるやうに頭ごなしに云つた。

「おい、どうせ捨てゝ了ふんだらう。それともお前達が取つといて喰ひでもするのか。でなかつたらこつちへ寄越せ！」

「そんなことは出來ません！」看護卒もむつとしたらしく、きつぱりと云つた。私はもう見るに耐へなかつた。默つてうつむいて、自分の箸を動かしてゐた。

「なにッ」と云ふ上等兵の尖がつた聲がした。つゞいてごそ／＼と寢臺を降りるけはいがした。降りてつて毆るつもりなんだらうか。と思つたが私は顔を上げなかつた。と、その時である。いきなり私の左の肱をごつんと小突くものがあつた。刹那、私の持つてゐた瀬戸の食器はチヤランと云つて下に落ちる、同時に眞二つに碎けて了つた。飯は床の上に散亂した。ハツと思ふ間もなかつた。

「やつ、これは失敬！　遂ひ勢ひが餘つたもんで……」

やはり上等兵が故意に私の肱を小突いて食器を取り落させたのである。彼は如何にも當惑したやうに、ハツとそこに立ち止まつた。そして飜れ落ちた飯の塊りを小氣味よげに見おろしてゐる。

私は喰べ物の事で何も云ひたくなかつた。癪に觸つたが默つてゐた。看護卒に喰つてかゝる形勢を示した上等兵はいつか、自分の寢臺の上に乘つかかつてゐた。看護卒に對してはもう何んにも云はなかつた。周り中の眼が如何にも溜飮を下げたと云つたやうに私に注がれてゐた。私は彼等の顏を見るのが厭やだつた。私は寢臺の上に横になつて眼を瞑つた。若し自分が彼等の一人と地を代へたら、俺もあの上等兵のやうになるだらうか――と思つてみた。

私はいつかそのまゝ眠つたと見へる。私を起す看護長の聲で眼を覺ました。

「淺見！　お前はこれから直ぐ八號室へ移るぞ。自分の持物をまとめて俺のあとをついて來い！」

看護長はかう云つて入口の處まで出かゝつて、私の仕度するのを見守つてゐた。仕度と云つても何もなかつた。齒磨粉、楊子、手拭、塵紙、と云つたやうなものを取りまとめればいゝのであつた。

「今まで五人ゐたんだが、先つき三人退院して今は二人しかゐないんだ」

看護長は私が寢臺に就くのを見て云つた。八號室は廣かつた。寢臺は十ばかり並べてあつたが、私達三人の他は皆んなからであつた。私はほつと救はれたやうな氣がした。しみじみと此の看護長にお禮が云ひたかつた。二人の患者は吉村に國井であつた。吉村は私と同じ第十二中隊であり、國井は第九中隊であつた。そして吉村と國井は同じ村の出身と云ふことであつた。

六

國井は相變らず冴へない、暗い顏をして、幾度目を通したが知れない「戰友」をまるでうつろの眼でパッパッと頁を操つてゐた。吉村は卷紙を取り出して頸を振り〳〵手紙を書いてゐた。彼の顏は何んの屈托もなささうに輝いてゐた。

私は私で齒磨粉の罐についてゐるまるい鏡にぼそ〳〵と生へてる顎髯を寫しながら、小さな鋏で一本一本鋏んでゐた。い〻退屈ざましであつた。バリカンと剃刀を借りるつもりだつたが、今研ぎに出してあると云つて無かつたのである。

「待つてろよ、俺が今手紙を書いちまつてから髭を刈つてやるから」吉村が云つた。

「また嬶のとこへやるんだらう。止せやい、昨日面會に來たばかりぢやねえか」

「嬶のとこには違ひねえが、そんな甘いことを云つてやるんぢやねえんだ。少しおどかしてやるんだ」吉村はしきりに筆を動かしながら云つた。「昨夜の佐山看護長の話なあ、あいつを書いて送つてやるんだ。――軍隊つていつそんなことが行はれるかしれない。いや、あれよりもつと怖ろしい事がいくらもある。若し俺れから今後便りがなくなつたら大方そんな目に遭つたんだらうと思つてれば間違ひはない――つてね。さう書いてやるんだ」

「ところがおつ嬶の方ぢや愕かないつてことよ。一層のことさうなつてくれ〻ば公然とあの人と一緒になれるからてんでさうなるやうにお祈りしてるよ。全く助からねえや」

「また、あんなことを云やがる。喰らはせるぜ！」吉村は一寸眼を怒らせて見せたが、また直ぐその眼を手紙の中に吸ひ込まれるやうにうつ向けて了つた。

初年兵の國井は初年兵の凡てがさうであるやうに、何かにつけて遠慮をして口もはきはき利かないので、退屈をまぎらす余り好い相手ではなかつた。私は毎日簡單な日記をつけて了ふともう何もすることがないのである。私は今朝の體温、三十七度二分と云ふやつを記入するとそのま〻、日記帳を手箱の中に押し込んで、じめじめした外の雨に見入つた。鋏ではさみ切つた跡の顎髭が、まるで棕櫚だわしのやうにごそ〳〵として氣持が惡い。

看護卒が二三人、大騷ぎしながら藥布團や毛布をこの八號室へ運び込んで來た。また入院患者があるな、と思つて

ると、後から後からと五つばかり運んで來て、床を作りはじめた。

吉村はいつか手紙を書き終へたと見へて封筒の上書きをしてゐた。

「こんなに大勢來るのかい？」私は看護卒の一人にかう訊いた。

「ええ、五人一號室から今日こつちへ移されます。もう直ぐ來ます。新患者が毎日〱入院するのでもう滿員なんです」彼等は口々にかう答へた。

私はあの一號室に居た時の、いやな記憶が新らたに呼び起された。あの連中がやつて來るに違ひない、と思つた。

「あの第八中隊の何んとか云ふ上等兵も來るんぢやないか？」私は又かう云つて訊いた。

「さアどうですか。何しろ隣りの九號室へも四人ばかり來る事になつてますから」と云ひながら、彼等は床を作つて了うと直ぐ出て行つた。

室全體がどことなく明るくなりかゝつて、此の長雨もどうやら霽れさうに思はれた。手紙を書いて了つた吉村はいつか寢床の中にもぐり込んでゐた。私も寢臺の上に腹這ひになつて相變らず一枚二枚と落ち散つてゆく病葉を眺めてゐた。黄色くなつて散つてゆく病葉を見るのは矢張、何となく悅しかつた。そしてその一枚二枚の黄色い病葉から、今青々と茂つてる此の樹全體が眞黄色な葉に飾られる秋を聯想するのであつた。その時こそは——と思ふと胸が跳つた。敏子と云ふ從妹の事がまたしきりに思はれた。彼女についてもつと詳しい事が知りたいと云ふ念がしきりに動いた。寫眞でもいゝから見たいと云ふやうな、慾望さへあつた。何んとかして家から送らせる方法はないものかな——と思つた。敏子と云ふ人の寫眞を送つてくれ——と、只その一言がなか〱氣まりが惡くて無雜作に云へないのである。

私はまた理由を云はずに「金を送つて下さい」と云つてやらうかしら、と思つた。そして成るべく、惡友達にそゝの

かされてこの私が悪い場所へ足をふみ入れてるやうに思はせる——が、しかしそこがなか〳〵むつかしいのだ。と、私は又自分に呟く。若しそんな風に書かうもんなら父は頭から送金を拒絶して、意見がましい事を云つて來るに違ひない。——

私はまたいつか眠つてしまつたと見へる。晝飯のカンカンで眼が覺めた。見ると、いつ來たのか新顔が五人、既に卓子を圍んでゐる。吉村と國井は寢臺の中でもぞ〳〵やつてゐる。雨は霽れて薄く青空が覗いてゐた。薄日が射して、雨に濡れた櫻の青葉を一層艶々しく、肩を怒らした若者のやうな元氣にして見せてゐた。

私は五人の顔を寢床の中からちよい〳〵と眼を走らせて覗つた。が、あの八中隊の上等兵はゐなかつた。屹度、隣りの室の方へ行つたのだらう。が、五人とも、たつた三日ではあつたが私が一號室で一緒にゐた連中であつた。私はなんだか好い氣がしなかつた。私は顔を反けようとした。と、早くも一人が私を見つけて「やア」と云つた。私も「やア」と返事をした。

「君達は隨分長くあそこにゐたんだねえ」私はからかひ口調で云つた。「まだ重湯かい？」

「ばか云つちやいけねえ。いつまで重湯でゐられるもんか。もう麥飯の堅い箸に載つかるやつだよ」彼等は卓子をトン〳〵と叩きながら愉しさうに云つた。「早く飯が來ればいゝなア」

私はこだわりのないその一言ですつかり彼等が好きになつた。今までの不快の印象を一掃されたやうな氣がした。私は彼等に話しかけた。

「だがこゝは一號室と違つて何でも好きなものの密輸入が出來るからいゝんだぜ。誰れんとこへ來た面會人だつて關はねえ、捉まへちやあれ買つて來てくれ、これ買つて來てくれ、つて頼むんだ。それから中隊からも兵隊が來るしなア、

そいつに頼んでもいゝんだ」

「そりや素敵だ！」

彼等の一人は飛び上るやうに叫んだ。そこへ看護卒が飯を運んで來た。五人の内の二人はまだお粥であつた。が、今はもう喰べ物の事で厭味を云つたり憎惡の眼を向けたりする者はなかつた。吉村も岡井も寢臺から降りて來た。今までじと／＼した、濕つた空氣が入るので閉めて置いた硝子窓を皆んな開け拂つた。雨が霽つて急に暑くなつて來たのである。

新顔が五人も殖へたが別に變つた話の種もなかつた。午後、檢便があると云つて看護卒が小さな壺を持つて各々に渡した。中にはそれを持つて直ぐ便所へ飛んで行つたものもあつた。

それから五六日たつた日の午後、佐山看護長がまたぶらりと私達の八號室へやつて來た。彼は卓子の上にあつた誰れかの朝日を一本拔き取つて火を點けながら云つた。「一本貰ふぞ！」

「看護長どの！　淺見はまだ退院になりませんか」私はいつ剃つていつ生へたとも分らない、いつも同じ位にぼそ／＼と生へてる看護長の黑い顎髭を見ながら云つた。

「淺見はどうもいかんなア。まだ菌がうんとゐるさうだぞ。だが吉村のには此の間の檢便では一匹もゐなかつたさうだ。屹度近い内に出られるだらう」看護長はかう云つてずらつと室内を見廻はした。その時吉村は寢臺の上に安座を組んで私がやつたやうに、齒磨粉の罐に附いてる鏡に向ひ小さな鋏でもつて髭をポツンポツンと鋏んでゐた。

「吉村ツうまくやつてやがるなア」私はかう吉村に云つた。

「當り前よ。心がけがいゝんだからなア」吉村は顎を撫でて見ながらぐつと鏡の方へ突き出し、へんな顏をしながら云

つた。「淺見なんかついでの事に除隊まで置いて貰へよ。世話がなくてい丶ぢやねえか」

「看護長どの！　何かまた面白い話はありませんか」私は話頭を變へて云つた。

「そんなに話の種があつてたまるもんか。何しろ忙しんでなア。聯隊からどん〳〵チブス患者を送り込んで來るんで眼が廻るやうだ。また今日か明日の內に二三十人こつちへ入る事になつてるんだからね」

看護長はさう云つて何の用があつて來たのか知らないがそこ〳〵に立つて行つて了つた。それから間もなく、私達ち初めからの三人は赤い十字の印の附いた白木綿の鳥打帽を渡された。それは病院構內の散步を許された印であつた。私達は羽があつたら恐ろしい羽ばたきをしたであらうと思はれるやうな勢ひで外に飛び出した。長い長い間、一つの建て物から一步も出る事を許されないで押へつけられてゐた退屈が、私達を驅つてまるで狂人のやうに無意味に庭の內を步き廻はらした。

私達は聯隊の庭つゞきの崖の上に立つた。崖下にはK川が流れ、川向ふの廣い川原、畑、田圃を越した向ふには、私達がいつも演習する原野だの村落があつた。そこらあたりからはじまる山脈は重疊として遠くの方まで連らなり、遙かの先きには微かに煙りを吐いてるA山が寛やかな斜面を見せて紺靑に聳へてゐた。時々、一年に一度か二度、耳許で大砲をぶつ放すやうな爆發をする山である。

三人は暫くそれらの無言の山々を眺めて崖の上にしやがんでゐた。私は今もさうであるが、小さい時から、それらの遠い霞んだやうな山々を見ると妙に誘惑されるやうな憧憬を感じるのである。あの中に何かしら尊い、そして肉親の愛も及ばない寛い溫かい神秘なものがあるやうに感じるのである。じつと眺めてる內にいつか私の兩眼は涙で充たされてゐた。大きい寛い愛の翼でじつくりと抱擁されるやうに感じる。そして自分の魂はこの現實を飛び離れて夢幻の世界

に沒入する。

私は演習する時でも、平原よりかも骨の折れる山の方を好んだ。理由もなしに胸の中がぞく〳〵と悅びに跳つた。この悅び、この憧憬——私はそれをどういふ言葉でもつて表現したら滿足に出來るかを知らない。恐らくどんな完全な言葉をもつて來ても出來ないやうな氣もする。

私は傍にゐる吉村の事も、圀井の事も、凡てを忘れてゐた。暫く見なかつた山々——それは戀人よりかもなつかしく母親よりかも溫かい愛をもつて私の胸に迫つて來た。「おーい！」と、靜かに靜かに、そして大きく呼びかけたいやうな氣がした。この胸の中の憧憬を訴へたいやうな氣がしたのであつた。

「おい行かう！」

吉村の太い聲に私の夢は醒まされた。圀井も立ち上つた。私も、或る憤りを感じながら彼のあとに從つた。

「どこへ行くんだい？」

「いや、どこつてことあない、ぶら〳〵歩かう」

萩の一株がこんもりと茂つてゐた。吉村は懷中からナイフを取り出して、一本、ぷすつと切り取つた。

「これで箸をしらへよう」

「箸？」

「萩の箸は何かのお呪ひになるんださうだ」

圀井も一本折り取つた。私も折つた。そして吉村のナイフで皆んな適當な長さに切つてくるくるつと皮をむいた。氣持の好い滑らかな膚だつた。

「何んのお呪ひになるんだい？」私はかう云つて訊いた。

「知らない、忘れちやつた」

吉村と、國井と、私は間もなく病室へ歸つて寢臺の上に寢そべつた。からだ全體が快く疲れてゐた。

七

四五人、看護卒たちが廊下でしきりになにかしてゐた。暫くして行つて見ると、蓮の花だの桔梗だの、それから女郎花なんかで盆棚がこしらへてあつた。瓜だの茄子だのが供へてあつた。

いつかもうお盆が來たのである。夜になると、あちこちの室で患者達が低い聲で盆踊りの唄をうたふのが聞こえた。八號室でも、吉村だの何か古兵だけがうたつた。初年兵たちは何かにつけ遠慮してゐた。彼等は只、うたひさうなにこやかな顏をして聞いてゐるばかりだつた。

「おい皆んな遠慮なんかしないでうたへよ」私は云つた。が、私は小さい時分から東京に出てゐたので盆踊りと云ふものを知らなかつた。無論唄も知らなかつた。彼等のうたふのを聞く、今が初めてであつた。

夜に入つてからも暑いので皆んな廊下に出て涼んでゐた。點呼がすんでも出てゐたので、宿直軍醫に注意されてやつと皆んな寢臺についたのであつた。

吉村は到頭退院する日が來た。中隊からは軍服や靴を持つて迎へに來た。その白い患者服を脱ぎ捨てて軍服姿になつた彼を見ると、何んだか淋しい氣がした。彼も淋しさうな顏をしてゐた。

「吉村！　おれの班へ行つたら皆んなによろしく云つてくれ！」分れる時私は云つた。

吉村が出てゆくと直ぐあとへ、又三人の新患者が私達の室へ入つて來た。室はそれでもう一杯になつて了つた。出る者より入る者の方が多かつた。

國井の眼には涙が光つてゐた。泣く程の事もあるまいが――と思つたが私は默つてゐた。

毎日〳〵暑くなつてゆく。そして時々驟雨があつて日はカン〳〵照りつけた。朝と夕方を私は多く庭のはづれの崖の上で過した。そこで遠くの山を眺めるのである。しかしいくら眺めても少しも飽きなかつた。あの紫色になつたり、紺青になつたり、灰色になつたりいろ〳〵に變化する山の姿を見てゐると、なぜかしら、遠い遠い自分の過去の世界が空想せられるのである。自分のまだ小つちやな小供時分の事、また生れなかつた前きのこと――私はその哀愁に似た甘い空想に耽るのが好きだつた。

吉村が去つてから私は多く一人だつた。室内にゐても散歩に出ても。時々國井が淋しさうに跡をついて來ることもあつた。犬のやうに。

庭を歩いてても私の眼は無意識の裡に、青々と茂つた木の葉の間に黄色くなつた病葉を求めてゐた。それらが眼に留まると私の胸は悦びに顫え上つた。秋の來る前觸れのやうな氣がした。秋、秋……やがて來る除隊――永遠に思はれる程待ち遠しかつたその除隊の期も、もう間近かに見へて來たのである。しかし、夏はまだ深かつた。これからほんとの夏が來るのである。

日は一日二日と經つてゆく。樹々の葉は黑いばかりに緑が濃くなつて行つた。

或る夜、點呼がすんで皆んな寢靜まつてから、幾室か隔つた先きの病室で非常な騷ぎがあつた。何か喚くやうな聲がした。ピーンパリパリと硝子窓を破るやうな音もした。腰掛だか卓子だか引つくり返したやうなガタンコトンと云ふ音

がした。大勢の立ち騒ぎ罵るやうな聲がした。やがて、廊下を看護卒であらうスリッパをばた〳〵させながら驅けてゆく音がした。暫くして森ーンと靜まつて了つた。私はまるで夢のやうにそれらのざわ〳〵した騷音を聞いてゐた。夜が明けた。いつもの通り點呼がすんだ。何事もないやうだつた。やつぱり夢だつたのかな――と思つた。

カンカンとベルが鳴つて食事が運ばれて來た。私は看護卒に訊いた。

「昨夜この先きの方の室で大へんに騷しかつたが何かあつたのかね？」

一人の看護卒は私の問ひを待つてました、と云はぬ許りに喋り出した。

「昨夜は大變な騷ぎがあつたんです。後備の人ですがね、非常な熱で晝間から囈語なんか云つて苦しんでゐたつけが頭がへんになつたんですね、乾度逆上したんでせう。いきなり寢臺から跳ね起きて、傍に寢てゐた、やはり熱に苦しんでゐる現役上等兵の頭を毆りつけたんです。それから腰掛を引つ摑り返すやら窓硝子を破るやら、へんな事を口走りながら眼を据へて室の中を走り廻つてるんです。てうどその時私が不寢番で當直室にゐたもんですからね、その音を聞きつけて飛んで來ると、その患者はもう床の上にばつたり倒れてゐるんです。僕も驚いちまいましたね、直ぐに宿直軍醫の處へ走つてつて連れてくるやら、仲間の者を起すやらしてやつと寢臺の上に寢かしつけたんです。で、到頭今朝までその患者には不寢番が附ききりだつたんです」

「へえ、氣が狂つたんだね」

皆んな惱ましげな顏をして聞いてゐたが、やがてほつと吐息をして云つた。皆んな自分の熱の高かつた時の事を、その時自分の頭がどんな狀態だつたかを思ひ起すやうに沈默に耽つてゐた。

「おれは一番熱の高かつた時にはもう苦しいんだなんて感覺はなかつたね。」やがて一人が追懷するやうに眼を細くして

云つた。「まるで意識なんてなくなつちやつて酒にでもひどく醉つぱらつてぐつたりとぶつ倒れてる時の氣持だつたね」
「ですがね、あの一番先きに皆んなが入る一號室には今でも死にかゝつてるのが二人もゐるんですよ。今日明日が危ぶないつてんで、昨夜その人達の家へ電報を打ちに行つたんです」看護卒の一人がまた云つた。「一人はやつぱり後備の人で、もう一人の方は新兵なんです」
「へえ！」と云つた皆んなの顏はすつかり暗く憂欝に曇つて了つた。
食事をすますと私は直ぐ、いつも行く崖の上へ出て行つた。しきりに死とか生とか云ふことが考へられた。死、それから生――それらはしかし餘りにむづかしい神秘な問題であつた。併し神秘であればあるだけ、かうした無聊退屈に苦しんでる今の自分に取つて、それらの黑いもや／＼した影のやうなものを頭の中に思ひ浮べ、凝視てゐるのは相應しい氣がした。その黑い影のやうなものの中に、自分と云ふものが卷き込まれてゆくやうな氣がした。私は薄藍色の連山を凝視した。頭の中に渦を卷いてる黑いもや／＼した影が、その山々と融け合つて一層神秘そのものに見へて來た。誰れかゞ此の自分と云ふものを、あのもこ／＼と盛り上つた薄青い神秘の中にポコンと投げ込んでくれたら――と思つた。
Ｋ川の流れはサラ／＼と脚下に瀨の音を立ててゐる。私達が新兵の時、寒い十二月の晩に、あの瀨を渡つて脫營した者があつた。茂木竹次郞と云ふ私達と同じ班に入つた新兵であつた。その茂木の面影までがあり／＼と私の頭に蘇つて來た。〃茂木、茂木、茂木！　お前は今どこに居る、何をして居る？――私はかうつゞけさまに心の中で叫んだ。
私の頭はこの時ぼんやりと、あの薄青い神秘の山の中に茂木の影像を描き出した。そこに確かに居る――と云ふやうな氣がした。私はその山に見入りながら忘我の境に落ち入つてゆく自分を微かに意識した。

八

夕方、入浴に來たついでに寄つたと云つて太田が來た。ふだんでも黑い彼の顏は此時眞黑に日に焦けた色をしてゐた。

「昨夜相馬ケ原から歸つて來たんです」と太田は云つた。

「どうだ、この暑いのに骨が折れたらう」私は彼の顏を見ながら云つた。「何か變つたことはないかい？」

「何んだか恐ろしい程パラチプスが出來ますね。此の頃は三度三度食器を炊事場へ持つてつて蒸汽消毒をするんです。それに明日は被服類を全部、消毒に出すんで中隊ぢや大騷ぎです」

「大分猛烈のやうだね。こゝでも死にかゝつてるのが二三人ゐるさうだよ」

かういふ眞つ黑な、健康な男の前にゐるとふだんの自分とは變つてさう病氣に對して神經質でなくなつてる自分を私は發見した。私は自分が如何にもそんな死とか病氣とかからかけ離れた、別の世界にゐるやうな強い氣がした。で、私は冷淡に云ふ事が出來た。

「後備に初年兵だつていふがね、今日か明日が危ぶないんださうだ」

「後備つて云へば明日はもう除隊になるんですがね、可愛相に……家で働いてたら何んともなかつたんでせうに、つまりませんね」太田は如何にもつまらなさうに云つた。

「おれなんか折角癒りかゝつたのに、かうした病菌の集まる巢にゐるんだからね、何時また取つ着かれるか知れたもんぢやない」

さう云つた私の言葉に太田は如何にも同感だと云ふ風に云つた。

「ほんとですよ、早く出して貰へないんですか？」

この時營庭の方では喫食喇叭が鳴り、こゝではカンカン……カンとベルが鳴つた。

「ぢや今日はこれで歸ります。明日は日曜で外出しますが何か用事はありませんか」太田は革たまつた四角ばつた敬禮をしながら云つた。

「あゝ今の處別に用もない、ぢやまた來てくれ！」

「はい！」と云つて太田は二三歩歸りかけてから、又戻つて來て云つた。「第八×師團は愈々西比利亞へ行くことに決定したさうですね。何んでも今年の冬あたりらしいです。古兵さんなんか此の秋除隊になつちまふんだから好いけれど、太田なんかつまりませんね。到頭西比利亞行きですよ」

「へえ、到頭決まつたのか！」私は愕いて鸚鵡返しに云つた。

太田は中隊へ歸つた。

太田が見へなくなつて了ふと、此處の退屈な人達は又、それを問題にして話し始めた。が、國井やその他の初年兵の顏には明らかに當惑したらしい憂欝の影が浮んでゐた。

「おい、國井！　官費で西比利亞見物が出來て好いなア」私は彼等の氣を引き立たせるやうにからかひ口調で云つた。

「ほんとにさう決定したんでせうか？」彼等初年兵は異口同音に云つた。

「ほんとうとも。羨やましいこつた」他の二年兵が云つた。

食器を下げに來た時、先つきの看護卒が云つた。

「到頭ふたりとも死にましたよ。もう少し先つき。後備さんのはおかみさんとおふくろさんが來たんですがね。おい

〱泣いてるんです。新兵の方のはおやぢさんとおふくろさんと二人で來てるんです。たつた今屍室へ移したんですがね、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛つて擔架のあとについて來ましたよ」

「可愛相に！」と、云つたきり誰れも何んとも云はなかつた。

「で、この間の晩暴れたのがあつたでせう。あれが今度は危ぶないんです。今夜あたりが一番注意しなきやならないつてんで、軍醫殿なんか附きつきりです」

「どうも益々不穩になつて來たねえ」遂ひこの間一號室から移されて來たのが云つた。

「だが君達ぢやいくら人が死なうと生きようと平氣だらうなア、もう慣れつこになつて」

私がかう云つてからかふと、看護卒は妙な苦しい笑を浮べて行つて了つた。「餘り好い氣持もしませんよ」と云ひながら。翌朝起きた時、國非が見へなかつた。點呼の鐘が鳴つてもどこからも出て來なかつた。

「便所へ行つてるんぢやないか」と、日直の軍醫は云つた。

看護卒達がどや〱と探しに行つたが、どこにもゐない、と云つて失望して歸つて來た。散歩に出てるんぢやないか――とも云つた。すると又、庭の方へ二三人が飛び出して行つた。

彼等は間もなくぼんやりと歸つて來た。

「どうしたんだらう？　あんな白い着物のままどこへも行ける筈はないが」と云つて、軍醫は此の日の當番の佐山看護長に云つた。「手箱を探して見ろ！　何かありやしないか」

皆んなして手箱の中を引つ掻き廻して見た。寢具の毛布を引つぱがして一枚一枚振つても見た。遺書らしいものは何もなかつた。それに手箱の中にはそつくりそのまゝ日用品が入つてゐた。底の方から細い二本の棒が出て來た。いつだ

つたか、吉村と私の二人で萩で拵へた箸であつた。

脱走したんぢやないか——と云ふことになつた。それから間もなく、彼の所屬中隊へ報告されたらしかつた。

到頭國井もゐなくなつたか——私は自分の身邊が一層淋しくなつたのを感じた。だが逃亡するとは餘り無茶なことをやつたもんだ、と思はずにはゐられなかつた。あんな眞つ白な赤十字の印のくつ着いた着物なんか着てつて直ぐ捉まつちまうぢやないか——と、逃げる事の善惡は兎に角、その方法の餘りにへまなのに對して、彼を責めたいやうな氣さへした。

だが逃げたもんならどうか捉まらないで逃げ延びてくれ、幸福に暮してくれ——私はかう心に希ひながら、またいつもの床の上へ來た。私は一人取り殘されたやうな氣がして、急に中隊が戀しくなつて來た。早く退院して皆んなに逢ひたいと思つた。ぶつ倒れる程の苦しい演習に引つ張り出されても、自分は決して悔ひないだらう、その方がまだ幸福な生活だ——と思つた。

朝晩朝晩の檢溫の時氣をつけて見ると、私はこゝ一週間ばかりの間と云ふものずつと六度二分乃至五分と云ふ低溫であつた。

今度こそ出られるだらう——私は自分で自分の退院を信じ決めてゐた。國井は自分の信ずる幸福の世界へ脱走した。が、俺にはそんなことは到底出來さうもない、若し脱走するんなら、俺は中隊へ脱走する——私はかうまで思つてゐたのである。

太田が外出の服裝でやつて來た。「これから外出しますが何か用はありませんか」と云つて。彼はにこ〳〵してゐた。

「おい、第九中隊から來てゐた國井なア、ほら昨日までゐたらう、あの青い元氣のない顔をしてゐた初年兵——あいつ

が昨夜の内にどこかへ行つちやつて見へないんだ。大方うちへでも行つてるんぢやないかと思ふんだが」

私は太田の顔を見るより早くさう云つたのである。と、太田は私の期待を裏切らない程の愕きを示して云つた。

「ほうツ、逃げ出したんですつて。病院なんかにゐたら樂でよささうなもんですがね」

健康の太田には國井の逃亡するまでの心の苦悶は到底分りさうもなかつた。私にも無論分りはしない。が、一緒にこゝの生活をし、彼の生活についても多少知つてる私は、幾らかその脫走するまでの心の過程を知つてるやうな氣がした。國井は陰鬱な男ではあつた。が心は比較的單純であつた。殊に教育とてろくにないらしかつた。この病院へ來てからの數十日の間に見聞し、經驗した生活だけでも、比較的無智なそして神經質な者に取つては優に逃亡の決心を起すだけの材料が重積されてゐた。

「けれどね、逃亡するまでにや國井だつて可なり考へたんだよ。考へた揚句にやつたことなんだよ」私はかう云ふより他なかつた。

「だが今日は外出して一體どこへ行くね」彼の外出姿を見たので私もなんとなく久しぶりで町へ出て歩き廻つて見たくなつた。私は云つた。「どうだね、いつだつたか、看護長の話した十中隊の天井に現はれた骸骨事件の墓を見に行つては」

「行つたつてつまりませんね。だが本當にあるんでせうか」

「そりやあるだらうよ、滿更うそでもなささうだからね」

私は若し退院したら、そして外出したらその時にはいつか一度、陸軍墓地にかの木村山松の墓を訪はうと思つてゐるのである。

私は雜誌を二冊ばかり買つて來て貰ふやうに頼んで太田と別れた。

淋しい、心の底から淋しさが湧いて來る。相變らず、時々思ひ出したやうにぽとりと落ちて來る樹の精液を見るのが今は心の髓を蝕ばまれるやうな淋しさに導く。

九

くつきりと晴れた日に瞳を凝らすと、H山は峯から谷々の皺に生へてる木まで一本一本に見へる位に近く迫つて見へる。更に瞳を凝らしたら登つてゆく人の姿まで見へはしないかと思はれた。が、流石に眼を轉じてA山からその附近の波濤のやうな山嶽の連瓦に眼をやると、そこはいつも神秘の靄に包まれた薄藍色に煙つてゐた。

或る日――それは炒りつけるやうな日のカンカン照り輝いてる日であつた。病院の庭に整列した四五名を一隊とした看護卒は、佐山看護長の指揮でどこかへ出て行つた。

この暑いのにご苦勞千萬な。擔架演習とは恐れ入るな――かう思つて私達は彼等が擔架を肩にして出て行くのを見送つてゐたのである。が、私達はやがて室内に引つ返して、寢臺の上に仰向きに引つくり返つた。

いつかぐつすり寢入つて夕方の涼風で眼を覺ました。診斷が始まつた。

六度九分……六度三分……六度五分……

軍醫の後から上等看護卒が記入してゆく。出てゆく時、軍醫が云つた。「愈々淺見にも菌がゐなくなつたらしいな、近い内に出られるぞ！」

夕飯がすんで薄暗くなつた時分、ザツクザツクと一隊の靴の音が庭の方でした。晝間出て行つた擔架の連中が歸つて來たな――と思つて私達は廊下に出て見てゐた。矢張りそれであつた。擔架の上には日覆がしてあつて、誰れか本當の

人が執つかつてゐるやうであつた。彼等はそこへは停まらないで、ぐんぐん一號室の方へ歩いて行つた。

夜、また佐山看護長が遊びに來た。そして來るなり云つた。まるで私達に報告する義務を持つてるかのやうに。

「岡井を連れて來たよ。こゝを逃げ出して家へ歸つてたんだな。岡井の家からおやぢさんが飛んで知らせに來たんだ。ところがまだ時々熱の出るやつが夜道をしたり水へ入つたりしたので又悪くなつちやつてね、まるで死んだやうになつて今一號室で寢てゐる」

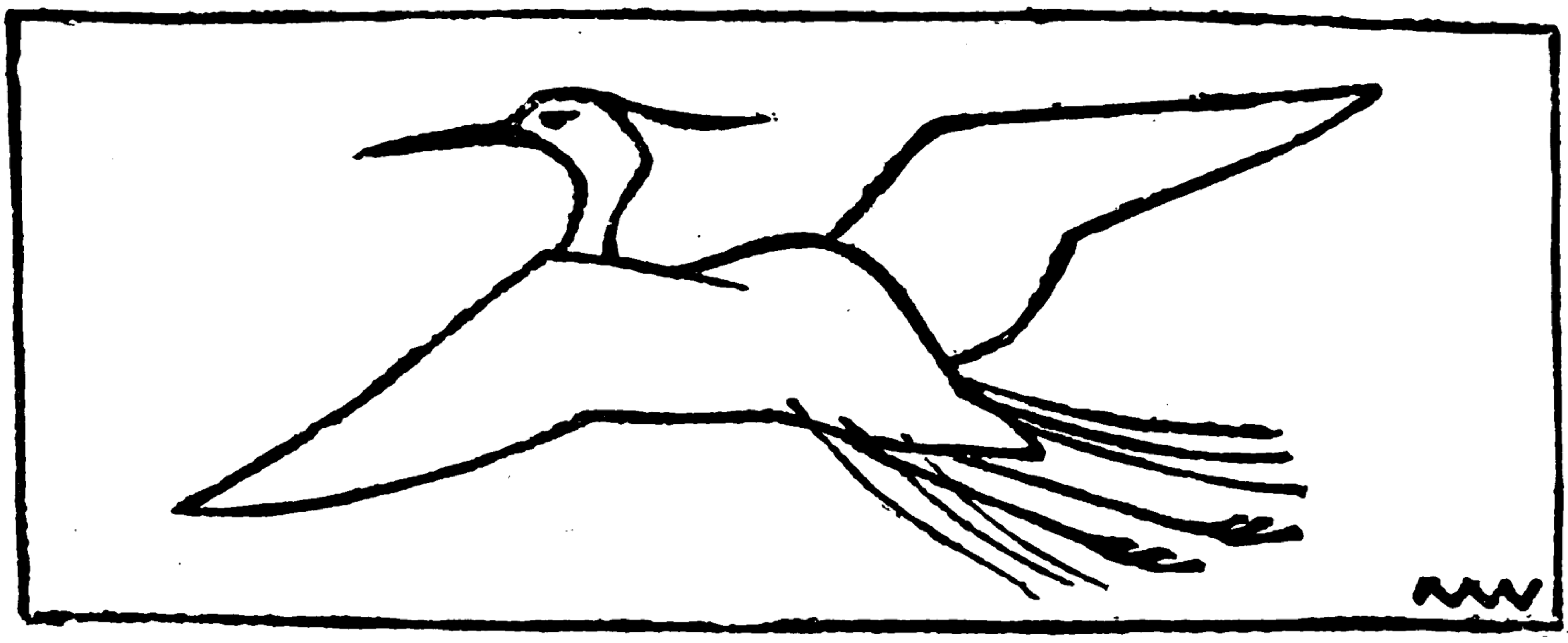
私は何んだか慘ましい氣がした。愈々淋しい氣がして來た。話もいつも程はづまなかつた。

私はその晩到頭東京の父の許へ手紙を書いた。――僕は此の六月の中ばから今まで約二ケ月と云ふもの、パラチブスで入院してゐました。が、もう二三日の內に出られる事になりました。つまらない心配をかけるでもないと思つて今まで默つて知らせずにゐたのでした。金ももう送らなくともようございます。僕は今何かしら無暗に働きたくて腕がむづむづしてゐるのです。なんでもかんでも骨の折れる事がしたくて耐らないのです。――

これを書く時も、ポストに入れさせて了つた後も、私の頭にはもう敏子と云ふ從妹の事なぞ十日も前に見た夢よりも淡いものになつてゐた。

第何回目かの檢便があつて、それから一週間たつた。中隊から上等兵が私の着るものに靴を持つて迎へに來た。私は門井に會つて行きたいやうな氣がしたけれど、默つて門を出た。黃葉にはまだ間のある八月のなかばであつた。

(をはり)



雛

箱を出る顔忘めや雛二對　　蕪村

芥川龍之介

これは或老女の話である。

……橫濱の或亞米利加人へ雛を賣る約束の出來たのは十一月頃のことでございます。紀の國屋と申したわたしの家は親代代諸大名のお金御用を勤めて居りましたし、殊に紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなつて居りましたから、雛もわたしのではございますが、中々見事に出來て居りました。まあ、申さば、內裏雛は女雛の冠の瓔珞にも珊瑚がはひつてありますとか、男雛の鹽瀨の石帶にも定紋と替へ紋とが互違ひに繡ひになつて居りますとか、――さう云ふ雛だつたのでございます。

それさへ賣らうと申すのでございますから、わたしの父、――十二代目の紀の國屋伊兵衛はどの位手もとが苦しかつたか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ德川家の御瓦解以來、御用金を下げて下すつたのは加州樣ばかりでご

ざいます。それも三千兩の御用金の中、百兩しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百兩ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ、下すつただけでございました。その上火事には三度も遇ひますし、蝙蝠傘屋などをやりましたのも皆手違ひになりますし、當時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに賣り拂つてゐたのでございます。

其處へ雛でも賣つたらと父へ勸めてくれましたのは丸佐と云ふ骨董屋の、………もう故人になりましたが、禿げ頭の主人でございます。この丸佐の禿げ頭位、可笑しかつたものはございません。と申すのは頭のまん中に丁度按摩膏を貼つた位、入れ墨がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿げを隱す爲に彫らせたのださうでございますが、生憎その後頭の方は遠慮なしに禿げてしまひましたから、この腦天の入れ墨だけ取り殘されることになつたのだとか、當人自身申して居りました。………さう云ふことは兎も角も、父はまだ十五のわたしを可哀さうに思つたのでございませう、度度丸佐に勸められても、雛を手放すことだけはためらつてゐたやうでございます。

それをとうとう賣らせたのは英吉と申すわたしの兄、………やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だつた、癇の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語の讀本を離したことのない政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは舊弊だとかあんな實用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その爲に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません。しかし雛を手放しさへすれば、この大年の凌ぎだけはつけられるのに違ひございませんから、母も苦しい父の手前、さうは強いことばかりも申されなかつたのでございませう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横濱の亞米利加人へ賣り渡すことになつてしまひました。何、わたしでございますか？　それは駄駄もこねましたが、お轉婆だつたせゐでございませう、

その割にはあまり悲しいとも思はなかつたものでございます。父は雛を賣りさへすれば、紫繻子の帯を一本買つてやると申して居りましたから。…………

その約束の出來た翌晩、丸佐は横濱へ行つた歸りに、わたしの家へ參りました。

わたしの家と申しましても、三度目の火事に遇つた後は普請もほんたうには參りません。燒け殘つた土藏を一家の住居に、それへさしかけに假普請を見世にしてゐたのでございます。尤も當時は俄仕込みの藥屋をやつて居りましたから、正徳丸とか安經湯とか或は又胎毒散とか、――さう云ふ藥の金看板だけは藥簞笥の上に並んで居りました。其處に又無盡燈がともつてゐる、…………と申したばかりでは多分おわかりになりますまい。無盡燈と申しますのは石油の代りに種油を使ふ舊式のランプでございます。可笑しい話でございますが、わたしは未に藥種の匂、――陳皮や大黄の匂がすると、必この無盡燈を思ひ出さずには居られません。現にその晩も無盡燈は藥種の匂の漂つた中に、薄暗い光を放つて居りました。

頭の禿げた丸佐の主人はやつと散切りになつた父と、無盡燈を中に座りました。

「では確かに半金だけ、…………どうかちよいとお改め下さい。」

時候の挨拶をすませた後、丸佐の主人がとり出したのは紙包みのお金でございます。その日に手つけを貰ふことも約束だつたのでございませう。父は火鉢へ手をやつたなり、何も云はずに時宜をしました。丁度この時でございます。わたしは母の云ひつけ通り、お茶のお給仕に參りました。ところがお茶を出さうとすると、丸佐の主人は大聲で、「そりやあいけません。それだけはいけません」と、突然かう申すではございませんか？ わたしはお茶がいけないのかと、ちよいと呆氣にもとられましたが、丸佐の主人の前を見ると、もう一つ紙に包んだお金がちやんと出てゐるのでございま

す。

「これやあほんの輕少だが、志はまあ、志だから、………」

「いゝえ、もうお志は確かに頂きました。が、こりやあどうかお手もとへ、………」

「まあさ、………そんなに又恥をかかせるもんぢやあない。」

「冗談仰有つちやあいけません。旦那こそ恥をおかかせなさる。何も赤の他人ぢやあなし、大旦那以來お世話になつた丸佐のしたことぢやあごわせんか？ まあ、そんな水つ臭いことを仰有らずに、これだけはそちらへおしまひなすつて下さい。………おや、お孃さん。今晩は。おうおう、今日は蝶蝶髷が大へん綺麗にお出來なすつた！」

わたしは別段何の氣なしに、かう云ふ押し問答を聞きながら、土藏の中へ歸つて來ました。

土藏は十二疊も敷かりませうか？ 可成廣うございましたが、箪笥もあれば長火鉢もある、長持ちもあれば置戸棚もある、——と云ふ體裁でございましたから、ずつと手狹な氣がしました。さう云ふ家財道具の中にも、一番人目につき易いのは都合三十幾つかの總桐の箱でございます。もとより雛の箱と申すことは申し上げるまでもございますまい。これが何時でも引き渡せるやうに、窓したの壁に積んでございました。かう云ふ土藏のまん中に、無盡燈は見世へとられましたから、ぼんやり行燈がともつてゐる、——その昔じみた行燈の光に、母は振り出しの袋を縫ひ、兄は小さい古机に例の英語の讀本か何か調べてゐるのでございます。それには變つたこともございません。が、ふと母の顏を見ると、母は針を動かしながら、伏し眼になつた睫毛の裏に涙を一ぱいためて居ります。

お茶のお給仕をすませたわたしは母に褒めて貰ふことを樂しみに………と云ふのは大袈裟にしろ、待ち設ける氣もちはございました。其處へこの涙でございませう？ わたしは悲しいと思ふよりも、取りつき端に困つてしまひました

から、出來るだけ母を見ないやうに、兄のゐる側へ坐りました。すると急に眼を擧げたのは兄の英吉でございます。兄はちよいとけげんさうに母とあたしとを見比べましたが、忽ち妙な笑ひ方をすると、又横文字を讀み始めました。わたしはまだこの時位、開化を鼻にかける兄を憎んだことはございません。お母さんを莫迦にしてゐる、——一圖にさう思つたのでございます。わたしはいきなり力一ぱい、兄の背中をぶつてやりました。

「何をする？」

兄はわたしを睨みつけました。

「ぶつてやる！　ぶつてやる！」

わたしは泣き聲を出しながら、もう一度兄をぶたうとしました。その時はもう何時の間にか、兄の癇癪の强いことも忘れてしまつたのでございます。が、まだ擧げた手を下さない内に、兄はわたしの横顏へぴしやりと平手を飛ばせました。

「わからず屋！」

わたしは勿論泣き出しました。と同時に兄の上にも物差しが降つたのでございませう。兄は直に威丈高に母へ食つてかかりました。母もかうなれば承知しません。低い聲を震はせながら、さんざん兄と云ひ合ひました。

さう云ふ口論の間中、わたしは唯悔やし泣きに泣き續けてゐたのでございます。丸佐の主人を送り出した父が無盡燈を持つた儘、見世からこちらへはひつて來る迄は。…………いえ、わたしばかりではございません。兄も父の顏を見ると、急に默つてしまひました。口數を利かない父位、わたしはもとより當時の兄にも、恐しかつたものはございませんから。…… ……

その晩雛は今月の末、殘りの半金を受け取ると同時に、あの横濱の亞米利加人へ渡してしまふことにきまりました。何、賣り價でございますか？　今になつて考へますと、莫迦莫迦しいやうでございますが、確か三十圓とか申して居りました。それでも當時の諸式にすると、ずゐぶん高價には違ひございません。

その内に雛を手放す日はだんだん近づいて參りました。わたしは前にも申しました通り、格別それを悲しいとは思はなかつたものでございます。ところが一日一日と約束の日が迫つて來ると、何時か雛と別れるのはつらいやうに思ひ出しました。しかし如何に子供とは申せ、一旦手放すときまつた雛を手放さずにすまうとは思ひません。唯人手に渡す前に、もう一度よく見て置きたい、内裏雛、五人囃し、左近の櫻、右近の橘、雪洞、屏風、蒔繪の道具、——もう一度この土藏の中にさう云ふ物を飾つて見たい、——と申すのが心願でございました。が、性來一徹な父は何度わたしにせがまれても、これだけのことを許しません。「一度手附けをとつたとなりやあ、何處にあらうが人樣のものだ。人樣のものはいぢるもんぢやあない。」——かう申すのでございます。

するともう月末に近い、大風の吹いた日でございます。母は風邪に罹つたせゐか、それとも又下唇に出來た粟粒程の腫物のせゐか、氣持が惡いと申したぎり、朝の御飯も頂きません。わたしと臺所を片づけた後は片手に額を抑へながら、唯ぢつと長火鉢の前に俯向いてゐるのでございます。ところが彼是お午時分、ふと顏を擡げたのを見ると、腫れ物のあつた下唇だけ、丁度赤いお薩のやうに脹れ上つてゐるではございませんか？　しかも熱の高いことは妙に輝いた眼の色だけでも、直とわかるのでございます。これを見たわたしの驚きは申す迄もございません。わたしは殆ど無我夢中に、父のゐる見世へ飛んで行きました。

「お父さん！　お父さん！　お母さんが大變ですよ。」

―― 四 ――

父は、…………これから其處にゐた兄も父と一しよに奧へ來ました。が、恐しい母の顏には呆氣にとられたのでございませう。ふだんは物に騷がぬ父さへ、この時だけは茫然としたなり、口も少時は利かずに居りました。しかし母はさう云ふ中にも、一生懸命に微笑しながら、こんなことを申すのでございます。

「何、大したことはありますまい。…………唯ちよいとこのお出來に爪をかけただけなのですから、…………今御飯の仕度をします。」

「無理をしちやあいけない。御飯の仕度なんぞはお鍋にも出來る。」

父は半ば叱るやうに、母の言葉を遮りました。

「英吉！　本間さんを呼んで來い！」

兄はもうさう云はれた時には、一散に大風の見世の外へ飛び出して居つたのでございます。

本間さんと申す漢法醫、――兄は始終藪醫者などと莫迦にした人でございますが、その醫者も母を見た時には、當惑さうに、腕組みをしました。聞けば母の腫れ物は面疔だと申すのでございますから。…………もとより面疔も手術さへ出來れば、恐しい病氣ではございますまい。が、當時の悲しさには手術どころの騷ぎではございません。唯煎藥を飲ませたり、蛭に血を吸はせたり、――そんなことをするだけでございます。父は毎日枕もとに、本間さんの藥を煎じました。兄も毎日十五錢づつ、蛭を買ひに出かけました。わたしも、…………わたしは兄に知れないやうに、つい近所のお稻荷樣へお百度を踏みに通ひました。――さう云ふ始末でございますから、雛のことも申しては居られません。いえ、一時わたしを始め、誰もあの壁側に積んだ三十ばかりの總桐の箱には眼もやらなかつたのでございます。

ところが十一月の二十九日、――愈雛と別れると申す一日前のことでございます。わたしは雛と一しよにゐるのも、

今日が最後だと考へると、殆ど矢も楯もたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。が、どんなにせがんだにしろ、父は不承知に違ひありません。すると母に話して貰ふ、――わたしは直にさう思ひましたが、何しろその後母の病氣は前よりも一層重つて居ります。食べ物もおも湯を啜る外は、一切喉を通りません。殊にこの頃は口中へも、絶えず血の色を交へた膿がたまるやうになつたのでございます。かう云ふ母の姿を見ると、如何に十五の小娘にもせよ、わざわざ雛を飾りたいなどとは口へ出す勇氣も起りません。わたしは朝から枕もとに、母の機嫌を伺ひ伺ひ、とうとうお八つになる頃迄は何も云ひ出さずにしまひました。

しかしわたしの眼の前には金網を張つた窓の下に、例の總桐の雛の箱が積み上げてあるのでございます。さうしてその雛の箱は今夜一晩過ごしたが最後、遠い横濱の異人屋敷へ、…………ことによれば亞米利加へも行つてしまふのでございます。そんなことを考へると、我慢は出來ますまい。わたしは母の眠つたのを幸ひ、そつと見世へ出かけました。見世は日當りこそ惡いものの、土藏の中に比べれば、往來の人通りが見えるだけでも、まだしも陽氣でございます。其處に父は帳合ひを檢べ、兄はせつせつと片隅の藥研に甘草か何かを下して居りました。

「ねえ、お父さん。後生一生のお願ひだから、…………」

わたしは父の顔を覗きこみながら、何時もの頼みを持ちかけました。が、父は承知するどころか、相手になる氣色もございません、

「そんなことはこの間も云つたぢやないか？…………おい、英吉！　お前、今日は明るい内に、ちよいと丸佐へ行つて來てくれ。」

「丸佐へ？…………來てくれと云ふんですか？」

「何、ランプを一つ持つて來て貰ふんだが、…………お前、歸りに貰つて來ても好い。」

「だつて丸佐にランプはないでせう？」

父はわたしをそつちのけに、珍しい笑ひ顔を見せました。

「烟草か何かぢやあるまいし、…………ランプは買つてくれつて頼んであるんだ。わたしが買ふよりやあ確だから。」

「ぢやあもう無盡燈はお廢止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは氣も晴れるでせうから。」

父はそれぎり元のやうに、又算盤を彈き出しました。が、わたしの念願は相手にされなければされないだけ、強くなるばかりでございます。わたしはもう一度後ろから、父の肩を搖すぶりました。

「よう。お父さんつてば。よう。」

「うるさい！」

父は後ろを振り向きもせずに、いきなりわたしを叱りつけました。のみならず兄も意地惡さうに、わたしの顏を睨めて居ります。わたしはすつかり悄氣返つた儘、そつと又奥へ歸つて來ました。すると母は何時の間にか、熱のある眼を擧げながら、額の上にかざした手の平を眺めてゐるのでございます。それがわたしの姿を見ると、思ひの外はつきりかう申しました。

「お前、何をお父さんに叱られたのだえ？」

わたしは返事に困りましたから、枕もとの羽根楊子をいぢつて居りました。

「又何か無理を云つたのだらう？………」

母はぢつとわたしを見たなり、今度は苦しさうに言葉を次ぎました。

「わたしはこの通りの體だしね、何も彼もお父さんがなさるのだから、おとなしくしなけりやあいけませんよ。そりやあお隣の娘さんは芝居へも始終お出でなさるさ。………」

「芝居なんぞ見たくはないんだけれど………」

「いゝえ、芝居に限らずさ。簪だとか半襟だとか、お前にやあ欲しいものだらけでもあれ、………」

わたしはそれを聞いてゐる内に、悔やしいのだか悲しいのだか、とうとう涙をこぼしてしまひました。

「あのねえ、お母さん。………わたしはねえ、………何も欲しいものはないんだけれどねえ、唯あのお雛様を賣る前にねえ、………」

「お雛様かえ？　お雛様を賣る前に？」

母は一層大きい眼にわたしの顔を見つめました。

「お雛様を賣る前にねえ、………」

わたしはちよいと云ひ澁りました。その途端にふと氣がついて見ると、何時の間にか後ろに立つてゐるのは兄の英吉でございます。兄はわたしを見下しながら、不相變慳貪にかう申しました。

「わからず屋！　又お雛様のことだらう？　お父さんに叱られたのを忘れたのか？」

「まあ、好いぢやあないか？　そんなにがみがみ云はないでも。」

母はうるささうに眼を閉ぢました。が、兄はそれも聞えぬやうに叱り續けるのでございます。

「十五にもなつてゐる癖に、ちつとは理窟もわかりさうなもんだ？ 高があんなお雛様位！ 惜しがりなんぞするやつがあるもんか？」

「お世話焼き！ 兄さんのお雛様ぢやあないぢやあないか？」

わたしも負けずに云ひ返しました。その先は何時も同じでございます。一言二言云ひ合ふ内に、兄はわたしの襟上を掴むと、いきなり其庭へ引き倒しました。

「お轉婆！」

兄は母さへ止めなければ、この時もきつと二つ三つは打擲して居つたでございませう。が、母は枕の上に半ば頭を擡げながら、喘ぎ喘ぎ兄を叱りました。

「お鶴が何をしやあしまいし、そんな目に遇はせるにやあ當らないぢやあないか？」

「だつてこいつはいくら云つても、あんまり聞き分けがないんですもの。」

「いいえ、お鶴ばかり憎いのぢやあないだらう？ お前は…………お前は…………」

母は涙をためた儘、悔やしさうに何度も口ごもりました。

「お前はわたしが憎いのだらう？ さもなけりやあわたしが病氣だと云ふのに、お雛様を…………お雛様を賣りたがつたり、罪もないお鶴をいぢめたり、…………そんなことをする筈はないぢやあないか？ さうだらう？ それならなぜ憎いのだか、…………」

「お母さん！」

兄は突然かう叫ぶと、母の枕もとに突立つたなり、肘に顔を隠しました。その後父母の死んだ時にも、涙一つ落さな

かつた兄、――永年政治に奔走してから、癲狂院へ送られる迄、一度も弱みを見せなかつた兄、――さう云ふ兄がこの時だけは啜り泣きを始めたのでございます。これは興奮し切つた母にも、意外だつたのでございませう。母は長い溜め息をしたぎり、申しかけた言葉も申さずに、もう一度枕をしてしまひました。………

かう云ふ騷ぎがあつてから、一時間程後でございませう。久しぶりに見世へ顏を出したのは肴屋の德藏でございます。いえ、肴屋ではございません。以前は肴屋でございましたが、今は人力車の車夫になつた、出入りの若いものでございます。この德藏には可笑しい話が幾つあつたかわかりません。その中でも未に思ひ出すのは苗字の話でございます。德藏もやはり御維新以後、苗字をつけることになりましたが、どうせつけるならばと大束をきめたのでございませう、德川と申すのをつけることにしました。ところがお役所へ届けに出ると、叱られたの叱られないのではございません。何でも德藏の申しますには、今にも斬罪にされ兼ねない權幕だつたさうでございます。………その德藏が氣樂さうに、牡丹に唐獅子の畫を描いた當時の人力車を引張りながら、ぶらりと見世先へやつて來ました。それが又何しに來たのかと思ふと、今日は客のないのを幸ひ、お孃さんを人力車にお乘せ申して、會津つ原から煉瓦通りへでもお伴をさせて頂きたい、――かう申すのでございます。

「どうする？　お鶴。」

父はわざと眞面目さうに、人力車を見に見世へ出てゐたわたしの顏を眺めました。今日では人力車に乘ることなどはさ程子供も喜びますまい。しかし當時のわたしたちには丁度自働車に乘せて貰ふ位、嬉しいことだつたのでございます。が、母の病氣と申し、殊にああ云ふ大騷ぎのあつた直あとのことでございますから、一概に行きたいとも申されません。わたしはまだ悄氣切つたなり、「行きたい」と小聲に答へました。

「ちやあお母さんに聞いて來い。折角德藏もさう云ふものだし。」

母はわたしの考へ通り、眼も明かずにほほ笑みながら「上等だね」と申しました。意地の惡い兄は好い鹽梅に、丸佐へ出かけた留守でございます。わたしは泣いたのも忘れたやうに、早速人力車に飛び乘りました。赤毛布を膝掛けにした、輪のがらがらと鳴る人力車に

その時見て歩いた景色などは申し上げる必要もございますまい。唯今でも話に出るのは德藏の不平でございます。德藏はわたしを乘せた儘、煉瓦の大通りにさしかかるが早いか、西洋の婦人を乘せた馬車とまともに衝突しかかりました。それはやつと助かりましたが、忌忌しさうに舌打ちをすると、こんなことを申すのでございます。

「どうもいけねえ。お孃さんはあんまり輕過ぎるから、肝腎の足が踏ん止らねえ。……………お孃さん。乘せる車屋が可哀さうだから、二十前にやあ車へお乘んなさんなよ。」

人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町を曲りました。すると忽ち出遇つたのは兄の英吉でございます。兄は煤竹の柄のついた置きランプを一臺さげた儘、急ぎ足に其處を歩いて居りました。それがわたしの姿を見ると、「待て」と申す相圖でございませう、ランプをさし擧げるのでございます。が、もうその前に德藏はぐるりと梶棒をまはしながら、兄の方へ車を寄せて居りました。

「御苦勞だね。德さん。何處へ行つたんだい？」

「へえ、何、今日はお孃さんの江戸見物です。」

兄は苦笑を洩らしながら、人力車の側へ歩み寄りました。

「お鶴。お前、先へこのランプを持つて行つてくれ。わたしは油屋へ寄つて行くから。」

わたしはさつきの喧嘩の手前、わざと何とも返事をせずに、唯ランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、急に又こちらへ向き變へると、人力車の泥除けに手をかけながら、「お鶴」と申すのでございます。

「お鶴、お前、又お父さんにお雛樣のことなんぞ云ふんぢやあないぞ。」

わたしはそれでも默つて居りました。あんなにわたしをいぢめた癖に、又かと思つたのでございます。しかし兄は頓着せずに、小聲の言葉を續けました。

「お父さんが見ちやあいけないと云ふのは手附けをとつたからばかりぢやあないぞ。見りやあみんなに未練が出る、―其處も考へてゐるんだぞ。好いか？　わかつたか？　わかつたら、もうさつきのやうに見たいの何のと云ふんぢやあないぞ。」

わたしは兄の聲の中に、何時にない情愛を感じました。が、兄の英吉位、妙な人間はございません。優しい聲を出したかと思ふと、今度は又ふだんの通り、突然わたしを嚇すやうにかう申すのでございます。

「そりやあ云ひたけりやあ云つても好い。その代り痛い目に遇はされると思へ。」

兄は憎體に云ひ放つたなり、徳藏には挨拶も何もせずに、さつさと何處かへ行つてしまひました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土藏の中に、夕飯の膳を圍みました。尤も母は枕の上に顏を擡げただけでございますから、圍んだものの數にははひりません。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな氣がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時時ランプを眺めました。石油を透かした硝子の壺、動かない焰を守つた火屋、―さう云ふものの美しさに滿ちた、珍らしいランプを眺めました。

「明るいな。晝のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、滿足さうに申しました。

「眩し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顏には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。

「そりやあ無盡燈に慣れてゐたから……………だが一度ランプをつけちやあ、もう無盡燈はつけられない。」

「何でも始は眩し過ぎるんですよ。ランプでも 西洋の學問でも、……………」

兄は誰よりもはしやいで居りました。

「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が來るんです。」

「大きにそんなものかも知れない。……………お鶴。お前、お母さんのおも湯はどうしたんだ?」

「お母さんは今夜は澤山なんですつて。」

わたしは母の云つた通り、何の氣もなしに返事をしました。

「困つたな。ちつとも食氣がないのかい?」

母は父に尋ねられると、仕方がなさヽうに溜め息をしました。

「ええ、何だかこの石油の匂が、……………舊弊人の證據ですね。」

それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし續けました。しかし母は思ひ出したやうに、時時ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫れ上つた唇の上にも微笑らしいものさへ浮べながら。

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寐つくことが出來ません。

兄はわたしに雛のことは二度と云ふなと申しました。わたしも雛を出して見るのは出來ない相談とあきらめて居ります、が、出して見たいことはさつきと少しも變りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行つてしまふ、――さう思へばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて來ます。一そみんなの寐てゐる内に、そつと一人出して見ようか？――さうもわたしは考へて見ました。それともあの中の一つだけ、何處か外へ隱して置かうか？――さうも亦わたしは考へて見ました。しかしどちらも見つかつたら、――と思ふとさすがにひるんでしまひます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐しいことばかり考へた覺えはございません。今夜もう一度火事があれば好い。さうすれば人手に渡らぬ前に、すつかり雛も燒けてしまふ。さもなければ亞米利加人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまへば好い。さうすれば雛は何處へもやらずに、この儘大事にすることが出來る。――そんな空想も浮んで參ります、が、まだ何と申しても、其處は子供でございますから、一時間たつかたたない内に、何時かうとうと眠つてしまひました。

それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行燈をともした土藏に、誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥棒かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？――わたしはどちらかと迷ひながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寢間着の儘の父が一人、こちらへ横顏を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、――お節句以來見なかつた雛が並べ立ててあるのでございます。

夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不可思議を見守りました。覺束ない行燈の光の中に、象牙の笏をかまへた男雛を、冠の瓔珞を垂れた女雛を、右近の橘を、左近の櫻を、柄の長い日傘を擔いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔繪の鏡臺や簞笥を、貝殼盡しの雛屛風を、膳椀を、畫雪洞

を、色糸の手鞠を、さうして又父の横顔を、…………

夢かと思ふと申すのは、…………ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあの晩の雛は夢だつたのでございませうか？　一圖に雛を見たがつた餘り、知らず識らず造り出した幻ではなかつたのでございませうか？　わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、獨り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。さうすゝばたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼のあたりに、わたしと少しも變らない父を見たのでございますから。女女しい、…………その癖おごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは瀧田氏の勧めによるのみではない。同時に又四五日前、横濱の或英吉利人の客間に、古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女に遇つたからである。今はこの話に出て來る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。


日は落ちて
なほ
日の光
マツダ瓦斯入電球
同じ料金にて光力倍
明るい御家庭は
いつも幸福です

創立十周年紀念
大家肉筆 額面 掛物 屏風 頒布會

今回創立十周年紀念事業として左記十四大家の傑作を破格低廉の會費にてお頒けす。之は十年に一度の特別計畫なれば是非共御賛成下されたし。
今回は創立十周年の紀念事業でありますから聊か平素の御厚意に酬ゆる爲め、大家力作幅物、額面、小品等五百餘點の景品を呈す。どうぞ左の規定御覽の上至急御申込み願ひたし。

規定

一、本會の筆者は左の通り（各部いろは順）

- 大谷句佛上人（絹本四字額）
- 池上秀畝先生（紙本尺二畫）
- 中村不折先生（絹本尺五畫）
- 石井林響先生（絹本尺五横物畫）
- 荒井寛方先生（絹本尺五横物畫）
- 河東碧梧桐先生（絹本小品俳句）
- 武島羽衣先生（絹本小品和歌）
- 山村耕花先生（絹本畫大額）
- 小室翠雲先生（紙本尺二畫）
- 黑木欽堂先生（絹本尺五畫）
- 近藤浩一路先生（絹本尺五横物畫）
- 飛田周山先生（絹本尺五横物畫）
- 高濱虛子先生（絹本小品俳句）
- 島木赤彦先生（絹本小品和歌）

二、會費　一回分　金八十五圓（送費内地七十五錢 植民地九十錢）

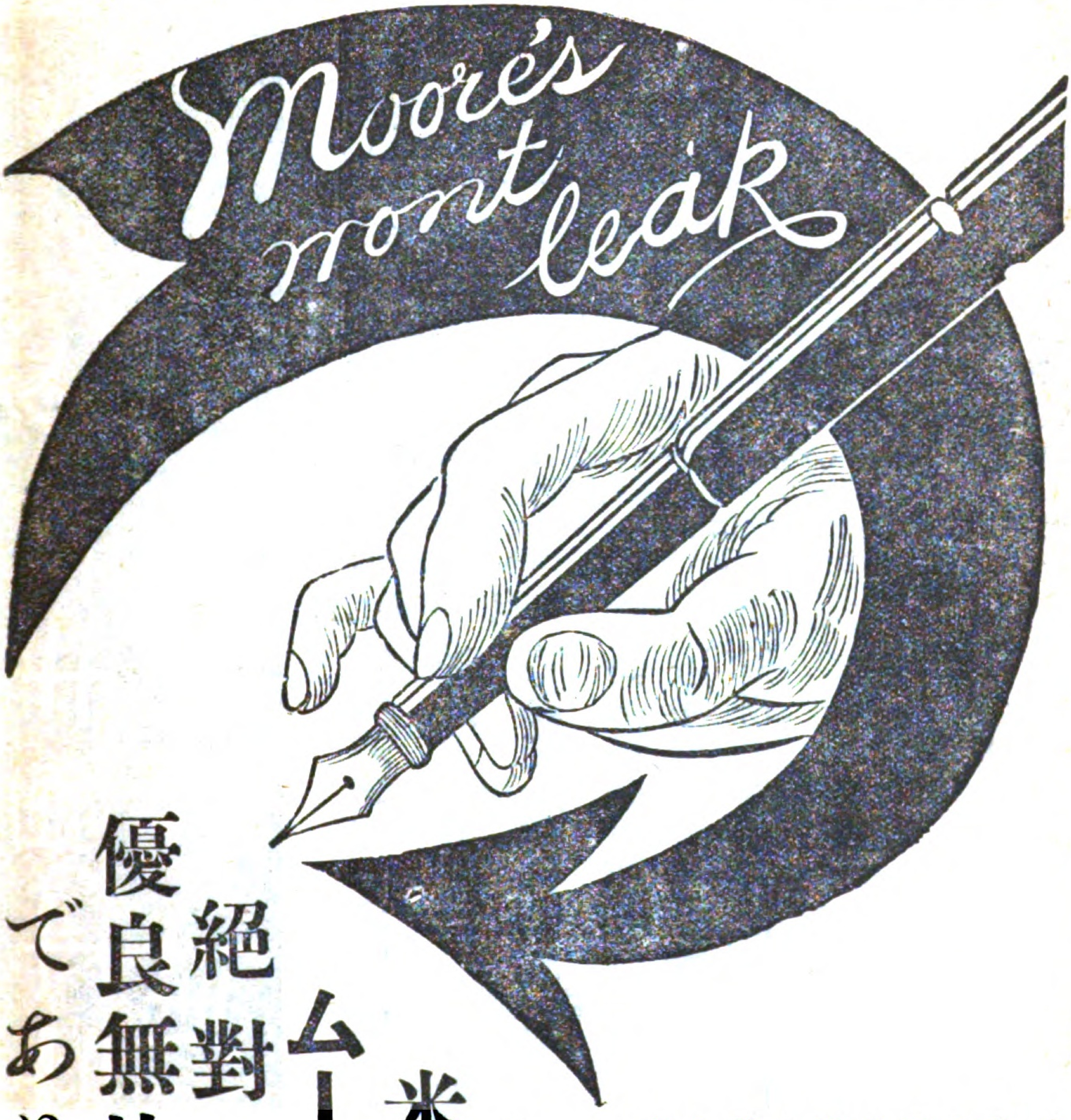
但シ會費は金貳百五拾圓を三ケ月に分割代金引換小包郵便にて現品と引換へに頂戴す。東京市内は郵便によらず、直接御届け致し其節現品と引換に會費を頂戴す。

三、申込み期日三月二十五日限り、申込みは端書又は手紙に『創立十週年紀念大家肉筆、額面掛物、屏風頒布會に入會致し候、揮毫出來の分より代金引換郵便にて送附相成度申込み候』と記入住所姓名を詳細に御記入締切期日切迫に付き大々至急當中央美術協會宛て御投函下されたし。

猶不明の點あらば郵券四錢封入御申越されたし明細に印刷せし規定書、並に作品鑑等送呈す

東京市麴町區元園町一ノ一九
電話九段〔長〕八四一番
振替東京二九七番

中央美術協會



●特約販賣店●

京橋 伊東文房具店
同 文祥堂文房具店
同 文永堂文房具店
日本橋 三越呉服店
同 白木屋呉服店
上野 松坂屋いとう呉服店
神田 文房堂
大阪 三越呉服店
名古屋 松坂屋いとう呉服店

其他市内及全國著名の百貨店文房具店にあります

日本總代理店 東京 神戸 米國貿易會社

米國製

ムーアー萬年筆は
絶對に漏らぬ
優良無比のペン
であります

中央公論大賣捌所

所在地	店名
東京市神田區表神保町	東京堂
同 神田區裏神保町	上田屋
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘(海外郵税貳拾八錢)

但支那を除く

册數＼國別	內國	外國
六册	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二册	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
豐國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大與社　一星社

一 誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 振替貯金口座は東京三十四番なり

一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一 代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一 集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄	金六錢
一金五圓迄	金七錢
一金拾圓迄	金八錢

(集金委託料及送料共)

一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年二月二十五日印刷納本
大正十二年三月一日發行
(禁轉載)

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木西三

發行所 東京市本郷區本郷三丁目六番地 中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工塲

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



春が來ました

若草萠へそめて

花見衣裳に相應しい今春流行の粋を蒐めて、花見衣裳陳列を三月十五日から開きます、その他春向友禪モスリン陳列（一日より）、筑前博多帯陳列（八日より）、春向染刺繍丸帯陳列（廿二日より）、等

◆第六回三彩會染織展覽會（三月一日より七日まで）
◆秀畝畫伯新作展覽會（同二日より六日まで）
◆第二回水產陳列會（同五日より十五日まで）
◆第四回郷土會作畫展覽會（同十八日より廿二日まで）
◆刺繍編物新作品陳列（同十八日より廿二日まで）
◆傘ショール陳列（同十八日より廿二日まで）
◆新カシミヤ織物展覽會（同二十三日より卅日まで）
◆芋錢龍子兩畫伯新作展覽會（同二十五日より卅日まで）
◆寄裂反物賣出し（同二十七日より……）

東京市 **三越呉服店** 駿河町

◆三越の三月の定休日は十日と廿六日であります◆